

行 方 市

中 城 遺 跡 中 城 古 墳 群

東関東自動車道水戸線(潮来～鉾田)
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和6年3月

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所
公益財団法人茨城県教育財団

第
470
集

行

方

市

中
中
城
城
古
古
墳
墳
群
跡

公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第470集

なめがた 市
行方市

なかしろ 遺跡
なかしろ 中城古墳群

東関東自動車道水戸線(潮来～鉾田)
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和6年3月

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所
公益財団法人茨城県教育財団

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県など各事業者からの委託を受けて埋蔵文化財の調査と整理作業を実施する組織として、昭和52年に調査課を設置して以来、数多くの遺跡の調査を実施し、その成果として調査報告書を刊行してきました。

この度、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所による東関東自動車道水戸線（潮来～鉾田）建設事業に伴って実施した、行方市中城遺跡・中城古墳群の調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、弥生・古墳・平安時代の竪穴建物と古墳、江戸時代の掘立柱建物などが確認できました。特に弥生時代の集落跡の調査例は当地域では少なく、弥生時代の様相を知る上で欠くことのできない貴重な資料となりました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります国土交通省関東地方整備局常総国道事務所に対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、行方市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和6年3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 川 股 圭 之

7 本書の作成にあたり、遺構名を変更、欠番にしたものは、以下のとおりである。

変更

変更前	変更後	変更前	変更後	変更前	変更後
SI28 P 4	→ PG 1 P 14	SK131	→ SB 4 A P 1	SK226	→ SB 3 B P 5
SI28 P 5	→ PG 1 P 12	SK129	→ SD15	SK228	→ 第6号土坑墓
SI28 P 6	→ PG 1 P 13	SK136	→ SD15	SK232	→ 第7号土坑墓
SI28 P 7	→ PG 1 P 15	SK137	→ SB 1 P 16	SK239	→ SB 3 B P 6
SI28 P 8	→ PG 1 P 5	SK141	→ SB 2 P 8	SK246	→ SB 1 P 23
SI28 P 9	→ PG 1 P 11	SK142	→ SB 1 P 17	SK247	→ SB 3 B P 6
SI28 P 10	→ PG 1 P 4	SK148	→ SB 2 P 9	SK249	→ SB 3 A P 7
SI28 P 12	→ PG 1 P 3	SK151	→ SB 2 P 10	SK250	→ SB 3 A P 8
SI35 P 3	→ PG 1 P 2	SK153	→ 第2号粘土土坑	SK251	→ SB 1 P 20
SI35 P 4	→ PG 1 P 1	SK155	→ 第3号粘土土坑	SK252	→ SB 1 P 8
SI31	→ 第4号竪穴遺構	SK158	→ 第4号粘土土坑	SK253	→ SB 1 P 21
SI36	→ 第1号竪穴遺構	SK159	→ SB 4 A P 3 SB 4 B P 3	SK258	→ SB 3 A P 5
SI37	→ 第2号竪穴遺構	SK161	→ SB 4 A P 6 SB 4 B P 6	SK259	→ SB 1 P 22
SI42	→ 第7号竪穴遺構	SK164	→ SB 4 A P 5 SB 4 B P 6	SK262	→ SB 1 P 18
SI52	→ SI 52 A SI 52 B	SK167	→ SA 2 P 3	SK264	→ SA 4 A P 4
SI66	→ 第3号竪穴遺構	SK168	→ SB 4 A P 7	SK268	→ SA 4 A P 2
SB 3 P 15	→ SB 2 P 5	SK168	→ SB 4 B P 7	SK290	→ SA 1 P 4
SB 3 P 15	→ SB 3 A P 6	SK170	→ SA 3 P 1	SD 9	→ SF 1
SK 2	→ 第2号土坑墓	SK172	→ SB 4 B P 2	SD 9	→ SD12
SK 4	→ 第1号粘土土坑	SK173	→ SB 4 A P 2	SD14	→ SB 3
SK 5	→ SB 5 A P 1	SK176	→ SB 4 A P 4 SB 4 B P 4	SD16	→ SB 1
SK 6	→ 第3号土坑墓	SK181	→ SA 2 P 1	SD18	→ SB 1
SK 9	→ 第1号土坑墓	SK184	→ SA 1 P 2	SD19	→ TM 8
SK12	→ SB 5 A P 3 SB 5 B P 3	SK186	→ SA 1 P 3	SA 1 P 2	→ SA 5 P 1
SK14	→ SB 5 A P 4	SK187	→ SA 1 P 4	SA 1 P 3	→ SA 5 P 2
SK15	→ SB 5 B P 5	SK188	→ SA 2 P 2	SA 1 P 4	→ SA 5 P 3
SK16	→ SB 5 A P 5	SK192	→ SA 3 P 2	SA 1 P 5	→ SA 5 P 4
SK17	→ SB 5 B P 4	SK193	→ SA 1 P 1	SX 1	→ SX 3
SK20	→ SB 4 A P 6 SB 5 B P 6	SK194	→ SA 4 B P 6	SX 2	→ SX 1
SK22	→ SB 5 A P 2 SB 5 B P 2	SK195	→ SA 4 A P 1	SX 2 P 1	→ PG 1 P 19
SK27	→ SB 5 B P 1	SK198	→ SA 4 A P 3	SX 2 P 2	→ PG 1 P 10
SK55	→ 第6号竪穴遺構	SK199	→ SA 4 B P 3	SX 2 P 3	→ PG 1 P 18
SK79	→ SI27 貯蔵穴	SK203	→ SB 4 B P 1	SX 2 P 4	→ PG 1 P 17
SK87	→ SK 1	SK204	→ SB 1 P 19	SX 2 P 5	→ PG 1 P 7
SK90	→ TP 1	SK205	→ SB 3 B P 8	SX 2 P 6	→ PG 1 P 9
SK104	→ 第4号土坑墓	SK206	→ SB 2 P 6	SX 2 P 7	→ PG 1 P 6
SK105	→ SB 2 P 12	SK208	→ SA 4 B P 5	SX 2 P 8	→ PG 1 P 16
SK110	→ SB 4 A P 8	SK210	→ SB 4 A P 1	SX 2 P 9	→ PG 1 P 8
SK112	→ SB 2 P 1	SK211	→ SB 4 A P 1	SX 3	→ SX 2
SK113	→ SB 2 P 1	SK213	→ SB 4 B P 8	SX 4	→ 第5号竪穴遺構
SK114	→ SB 2 P 2	SK218	→ SA 4 B P 2		
SK126	→ 第5号土坑墓				

欠番 SK123 SK207 SK208

(5) 井戸跡	227
(6) 道路跡	229
(7) 溝 跡	231
(8) 柱穴列	237
(9) 土坑墓	242
(10) 粘土貼土坑	243
(11) 不明遺構	245
7 時期不明の遺構と遺物	249
(1) 塚	249
(2) 溝 跡	252
(3) 土 坑	253
(4) 土坑墓	279
(5) ビット群	280
(6) 遺構外出土遺物	281
第4節 総 括	285
付章 自然科学分析	300
写真図版	PL-1 ~ PL50
抄録	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成25年5月24日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに東関東自動車道水戸線（潮来～鉢田）建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成26年4月28日及び5月21日に現地踏査を実施し、令和元年8月1日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。令和元年9月11日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、事業地内に中城遺跡及び中城古墳群が存在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

令和元年11月18日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。令和元年12月4日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、現状保存が困難であることから記録保存のための調査が必要であると決定し、工事着手前に調査を実施するように通知した。

令和3年1月8日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに東関東自動車道水戸線（潮来～鉢田）建設事業に係る埋蔵文化財調査の実施について協議書を提出した。令和3年1月13日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに中城遺跡及び中城古墳群について、調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長から埋蔵文化財調査事業について委託を受け、令和3年4月1日から令和4年3月31日まで調査を実施した。

第2節 調査経過

中城遺跡・中城古墳群の調査は、令和3年4月1日から令和4年3月31日までの12か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
調査準備 遺構撤去 土橋確認		■	■	■									
遺構調査			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
遺物洗浄 写真整理		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
補足調査 撤収													■

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

中城遺跡・中城古墳群は、茨城県行方市北高岡 198 - 2 番地ほかに所在している。

行方市は、茨城県南東部で、東は北浦、西は霞ヶ浦に挟まれた、田玉造町方面から潮来市方面に南北に細長く延びる標高 35 ~ 39 m の行方台地の北部に位置している。台地は緩やかな丘陵を形成しており、台地上面では畑や山林として利用されている。湖岸に面する台地際は急激な崖となっており、内陸部は比較的広い平坦面を形成している。また、霞ヶ浦・北浦に流入する中小河川とその支流によって台地は樹枝状に開析され、谷津や低地が入り組んだ複雑な地形を形成している¹⁾。

行方台地の地層は、砂鉄質の中粒砂よりなる石崎層（見和層堆積以前の沖積層を総称）、灰褐色のシルトからなる見和下層（見和層は関東平野に広く分布する狭義の成田層に対比される）、黄褐色の中砂粒からなる見和上層、灰褐色中粒～粗粒の砂からなる龍ヶ崎砂礫層、灰白色粘土層の常総粘土層（県央では茨城粘土層、千葉県松戸粘土層、東京の板橋粘土層に対比される）、関東ローム層（南関東の武蔵野ローム層、立川ローム層に対比される。また、宇都宮付近のローム層序と比較すると田原ローム層、宝木ローム層に対比される）の順で堆積している²⁾。

遺跡は行方市の北東部、北浦に注ぐ山田川左岸標高 28 ~ 35 m の舌状に張り出した馬の背状台地の先端部に位置している。当遺跡の東側・西側には谷津が入り込み、南側は山田川によって開析された沖積低地に臨み、遺跡直下には霞ヶ浦と北浦を結ぶ県道山田玉造線が走る。周辺の低地は水田及び蓮根田が、台地上には畑地が広がっている。調査前の現況は山林・畑地である。

第2節 歴史的環境

霞ヶ浦と北浦に面した行方台地は、水系に恵まれており、原始・古代から人々の生活の絶好の舞台となっており、旧石器時代から近世にかけて数多くの遺跡が存在している。このような恵まれた環境の中で、北浦を臨む台地上や、北浦に注ぎ込む中小河川の縁辺部及び台地に入り込んだ小支谷を臨む台地縁辺部に多くの遺跡が分布している³⁾。

旧石器時代は、熊ノ平古墳群⁴⁾ (11) で石器集中地点が 1 か所確認され、搔器や剥片類が出土している。三和貝塚⁵⁾ では武蔵野編年Ⅸ層段階の台形様石器が、木工台遺跡⁶⁾ (18)、内宿井戸作城跡⁷⁾ (19) では、武蔵野編年Ⅳ層段階で、下総台地印旛沼周辺に濃密な分布が確認される右槌尖頭器やナイフ型石器が出土している。また、古館遺跡⁸⁾からは珪質頁岩製の搔器が出土している。いずれも単独または少数の出土であり、環状ブロックを形成するような大規模なキャンプサイトは発見されていない。

縄文時代になると北浦を臨む台地上や、山田川、武田川の両岸台地縁辺部に地点貝塚や集落跡が数多く確認されている。山田川右岸台地上には鬼越貝塚⁹⁾ (52)、山津平貝塚、大崎貝塚 (53)、山王貝塚 (54)、業師堂遺跡 (50)、南高岡平遺跡 (58) が所在している。特に鬼越貝塚は古くから知られ、明治の小説家江見水陰によって全国に紹介され、昭和 29 年・41 年には慶応義塾大学の清水潤三により調査が行なわれている¹⁰⁾。貝塚は後期を中心に営まれ、南北 150 m・東西 210 m の範囲に 9 か所の貝塚が集合して形成しており、北浦沿岸で

は最大規模の貝塚である。山田川右岸台地上には寄井遺跡、御門山古墳群〈59〉、猿入古墳群〈44〉、古館遺跡で早期から前期の遺物が出土している。北浦を臨む台地上では、今山貝塚¹¹⁾〈36〉、平遺跡¹²⁾〈48〉、古屋敷遺跡¹³⁾〈38〉、六台遺跡¹⁴⁾〈39〉、戸呂井戸遺跡¹⁵⁾〈41〉が存在している。今山貝塚からは中期の貝塚が、平遺跡からは中期の竪穴建物跡、フラスコ型土坑、六台遺跡からも中期の竪穴建物跡と土坑群が確認されている。戸呂井戸遺跡から旧北浦町域では少ない晩期の遺物が出土している。武田川左岸の台地上には成田早川貝塚¹⁶⁾〈27〉、手配合遺跡〈21〉、木工台遺跡、内宿井戸作城跡、神明城跡¹⁷⁾〈16〉が存在している。成田早川貝塚は、茨城県立歴史館の学術調査により中期から後期に営まれた貝塚であることが確認された。三和貝塚からは、早期の竪穴9基、前期の竪穴建物跡が6棟、地点貝塚5か所が確認されている。武田川右岸台地上には鶴ヶ居貝塚¹⁸⁾〈33〉、両宿貝塚〈13〉、並松遺跡〈34〉、熊ノ平遺跡が存在している。鶴ヶ居貝塚は、昭和47年の調査により中期から後期に営まれた貝塚であることが判明し、熊ノ平遺跡では、前期の竪穴建物跡4棟、竪穴13基、陥し穴2基、遺物包含層が確認されている。

弥生時代の遺跡は、山田川流域の左岸台地縁辺部に前館遺跡〈45〉、うなぎ塚古墳〈49〉、右岸台地縁辺部に古屋平遺跡、業師堂遺跡、鬼越貝塚、山津平遺跡が存在している。北浦を臨む台地上には、六台貝塚、今山貝塚、金上遺跡〈26〉、武田川流域左岸の台地上に成田早川遺跡、木工台遺跡、右岸台地上には両宿神明遺跡〈15〉、木崎城跡〈28〉、下山遺跡〈29〉が存在している。木工台遺跡では、中期後半から後期の竪穴建物跡5棟を確認し、中期後半の竪穴建物跡からは、福島県南部から茨城県北部に分布の中心をもつ足洗式土器や、南関東に分布する宮ノ台式土器が出土している。遺跡の分布状況から、集落は河川や西浦を臨む台地縁辺部に営まれ、台地に入り込んだ支谷までは開発が及んでいなかったことが分かる。

古墳時代になると各所で古墳が築造される¹⁹⁾。山田川流域では、左岸にうなぎ塚古墳、京田古墳群〈43〉、猿入古墳群、御門山古墳群、地蔵後古墳群〈2〉、大峠古墳群、中山古墳群〈42〉、千両山古墳群〈37〉、堂目木古墳群²⁰⁾〈4〉、ドンビン塚古墳〈7〉、殿山古墳群〈8〉、大塚古墳群〈9〉が存在している。うなぎ塚古墳は8基で構成された古墳群で、明治30年代に道路工事・宅地造成により湮滅してしまっただが、立地と出土遺物が注目される。本地域の古墳の立地が、川沿いの低地から比高差のある台地上に築造されるのに対して、沖積地に築造されている。また、茨城県南部から千葉県北部にかけて分布する常総型石枕が出土しており、同石枕の北限を示す一例であり、中期に築造された古墳と考えられる。中城古墳群で確認された中期の群集墳との関連が注目される。地蔵後古墳群からは、上半身と下半身を分離して製作する常総型の武人埴輪が出土しており、現在東京国立博物館に所蔵されている²¹⁾。その他、大峠古墳群でも形象埴輪が出土している。7世紀前半に築造された堂目木1号墳は小規模な前方後円墳で、くびれ部から箱式石棺を確認しており、水晶製切子玉とガラス玉が出土している。山田川右岸台地には権現山古墳群〈51〉、台山古墳群〈55〉、日光平古墳群〈57〉、小幡岩ノ内古墳群が存在している。武田川左岸の台地上には木工台古墳群〈20〉、北浦西岸では諏訪後古墳群、成田古墳群²²⁾〈22〉、塚原古墳群〈23〉、札場古墳群²³⁾〈24〉が存在している。成田古墳群からは、6世紀後半から7世紀後半の古墳7基を確認しており、3号墳からは宿禰、杏葉、櫛等多数の馬具が出土している。また、札場古墳群からは6世紀後半から7世紀末に築造された4基の古墳が確認されている。第2号墳からは横穴式石室が、第3号墳からは箱式石棺を確認している。また、札場古墳群では、中城古墳群第3号墳・第5号墳同様、平安時代に古墳の盗掘が行なわれていることが注目される。武田川右岸台地上には熊ノ平古墳群、並松古墳群、巖谷古墳群〈12〉、新堀古墳群〈10〉が存在している。当地域では前期まで遡る古墳は現在までのところ発見されていない。また、武田川流域では埴輪を持つ古墳は確認されていない。集落跡は、北浦を臨む台地上に今山遺跡、六台遺跡、古屋敷遺跡、平遺跡、古館遺跡、風早遺跡、前館遺跡が存在する。山田川右岸台地上には

鬼越貝塚、山津平貝塚、業師堂遺跡、古屋平遺跡、新林貝塚（56）が所在する。特に、山田川の河口部に近い、北浦を望む台地上に位置する今山遺跡、六台遺跡からは、後期の竪穴建物跡が50棟以上確認されている。また、兩遺跡からは、多数の網の錘である球状土錘が出土しており、当地域の生業の一つとして漁労が重要な役割を果たしていたことが分かる。武田川左岸台地上には成田早川貝塚、木工台遺跡、内宿井戸作遺跡、右岸台地上には下山遺跡（29）、木崎城跡、兩宿神明遺跡、熊ノ平遺跡、並松遺跡が所在している。内宿井戸作遺跡では後期の竪穴建物跡11棟、木工台遺跡からは後期の竪穴建物跡約100棟、熊ノ平古墳群からも後期の竪穴建物跡が16棟確認されている。

奈良・平安時代には本遺跡周辺は、『常陸国風土記』行方郡の条に記載されている「藝都里」に含まれるものとみられる。藝都里の範囲は、現在の山田川と武田川流域の行方市の大字北高岡、両宿、内宿、小貫、成田、三和、山田、中根、繁昌、吉川の一帯と想定されている²⁰。藝都里「ぎつ」の「つ」は港に推定され、本地域が水上交通の拠点として重要な役割を果たしたものと考えられる。また、本遺跡の北西6kmには、姥ヶ谷長者館遺跡、南西4kmには井上長者館遺跡が所在し、それぞれ行方郡衙の候補地に挙げられている。集落跡は山田川流域の河口部に近い台地上に位置する平遺跡では奈良時代の竪穴建物跡19棟、平安時代の竪穴建物跡10棟、今山遺跡では奈良時代の竪穴建物跡19棟、平安時代の竪穴建物跡12棟が確認されている。特に今山遺跡からは、僧侶が托鉢に用いる須恵器の仏鉢が出土している。武田川流域の木工台遺跡では奈良・平安時代の竪穴建物跡180棟、掘立柱建物9棟、鍛冶工房跡3軒が確認されている。また、円面硯、皇朝十二銭「隆平永寶」や古銅製の丸駒が出土している²⁰。同様な帯金具は上記の今山遺跡でも出土している。奈良・平安時代の集落のうち、拠点集落は河川の河口に近い台地縁辺や、北浦沿岸部の台地上に大規模な集落が形成され、台地奥の河川際や谷奥の台地際には小規模な集落が営まれるようになる。

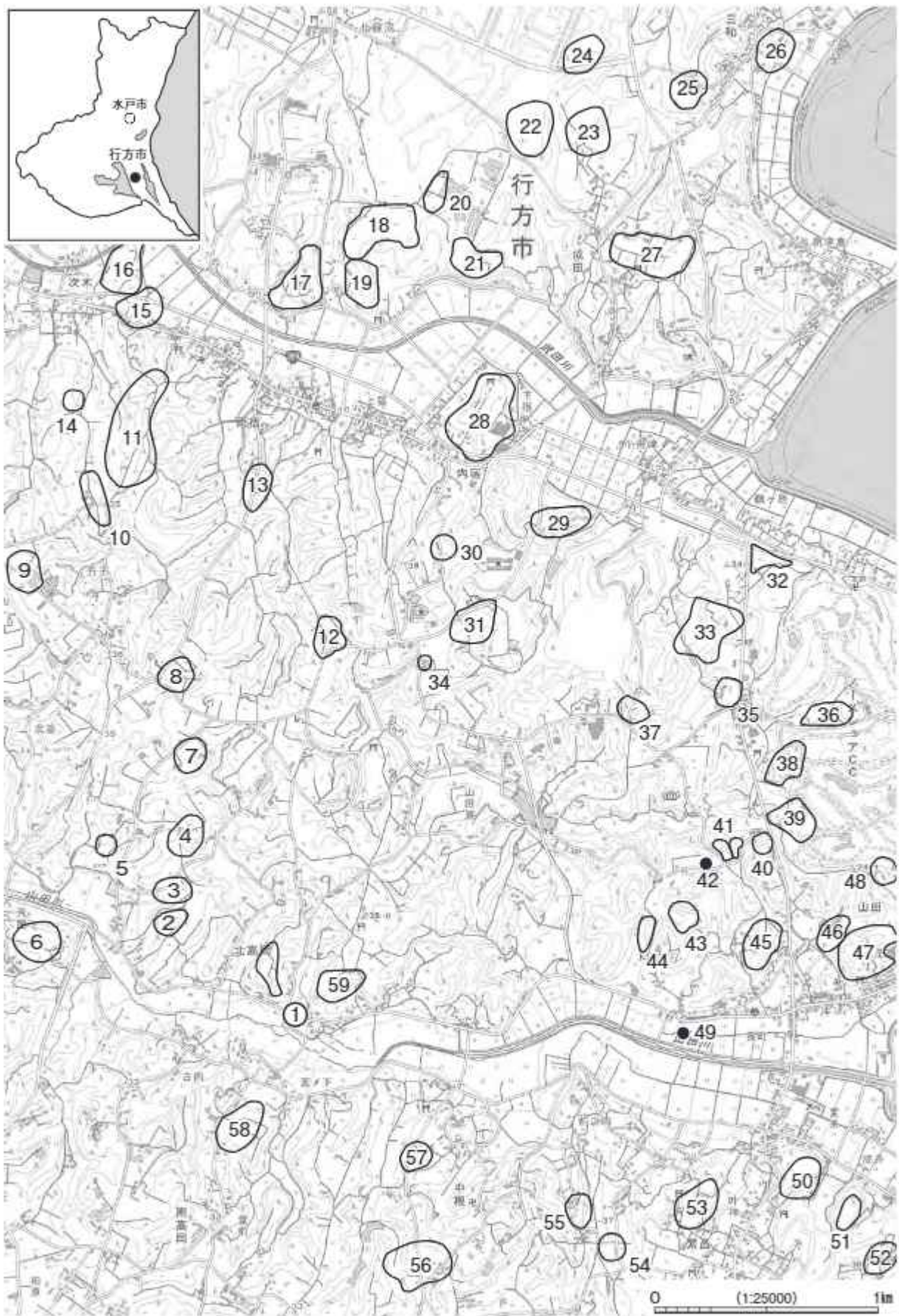
平安時代末期の1139年、行方郡は鹿島社に寄進され神領となるが、在地の開発は常陸平氏の一族の吉田大掾系の行方氏が積極的に進めた。鎌倉・室町期になると大掾一族が各所に居館や城館を構えるようになる。山田川流域の左岸台地上には、山田氏の築いた山田城跡（47）、前館跡（45）、吉川館、成井館、繁昌館、古館遺跡、古屋敷遺跡が所在している。古屋敷遺跡は昭和63年～平成元年に調査され、製鉄炉、掘立柱建物、土塁、溝、虎口が確認されている。出土遺物から16世紀後半の城郭の一部が明らかとなった。古館遺跡では、掘立柱建物、土塁及び虎口が、平遺跡では掘立柱建物、欄列跡、堀、虎口、井戸が確認されている。右岸台地上には小幡氏が築いた小幡城跡、木幡観音寺、前原館跡、古屋台館跡が所在している。木幡観音寺は忍性中興の伝承があり、境内には旧北浦村で唯一の常総型の板碑が存在している。この板碑は、古墳の石棺材として用いられる筑波山南麓に産出する黒絹母片岩を用いており、本板碑も古墳の石棺材が再利用された可能性が指摘されている²⁰。武田川流域には、武田氏の築いた神明城跡、木崎城跡、小貫館跡、西館跡、内宿館跡（17）内宿井戸作遺跡、円通寺が所在している。神明城跡は昭和62年に調査され、二の郭、三の郭、堀の一部が確認されている。平成9年には内宿井戸作遺跡が調査され、神明城跡のように文献等で確認できる城館ではなかったが、調査により土塁、堀等が確認された。木崎城は舌状に張り出した台地上に築かれた連郭式の平城で、堀、土塁、馬出が確認されている。円通寺は武田氏累代の墓所であり、境内には15～16世紀代の五輪塔、宝篋印塔が残されている。本地域は石材が得にくい環境であり、これらの五輪塔群は千葉県銚子犬吠埼周辺の銚子石を用いて作られている²⁰。

16世紀後半には佐竹義宣による「南方三十三館」謀殺事件後、当地域は佐竹氏の支配下に一時的に組み込まれたが、佐竹氏の秋田移封以降、多くの小藩大名領、旗本領、天領となり複雑な支配に組み込まれる。特に遺跡が所在する北高岡地区は、寛永八年（1631年）に北部が守山藩領、東部が天領、西部を旗本新庄氏、南

部を府中藩に開かれた麻生藩の飛び地として幕藩体制が崩壊するまで統治されることになる。本遺跡で確認した掘立柱建物跡群との関連が注目される。

註

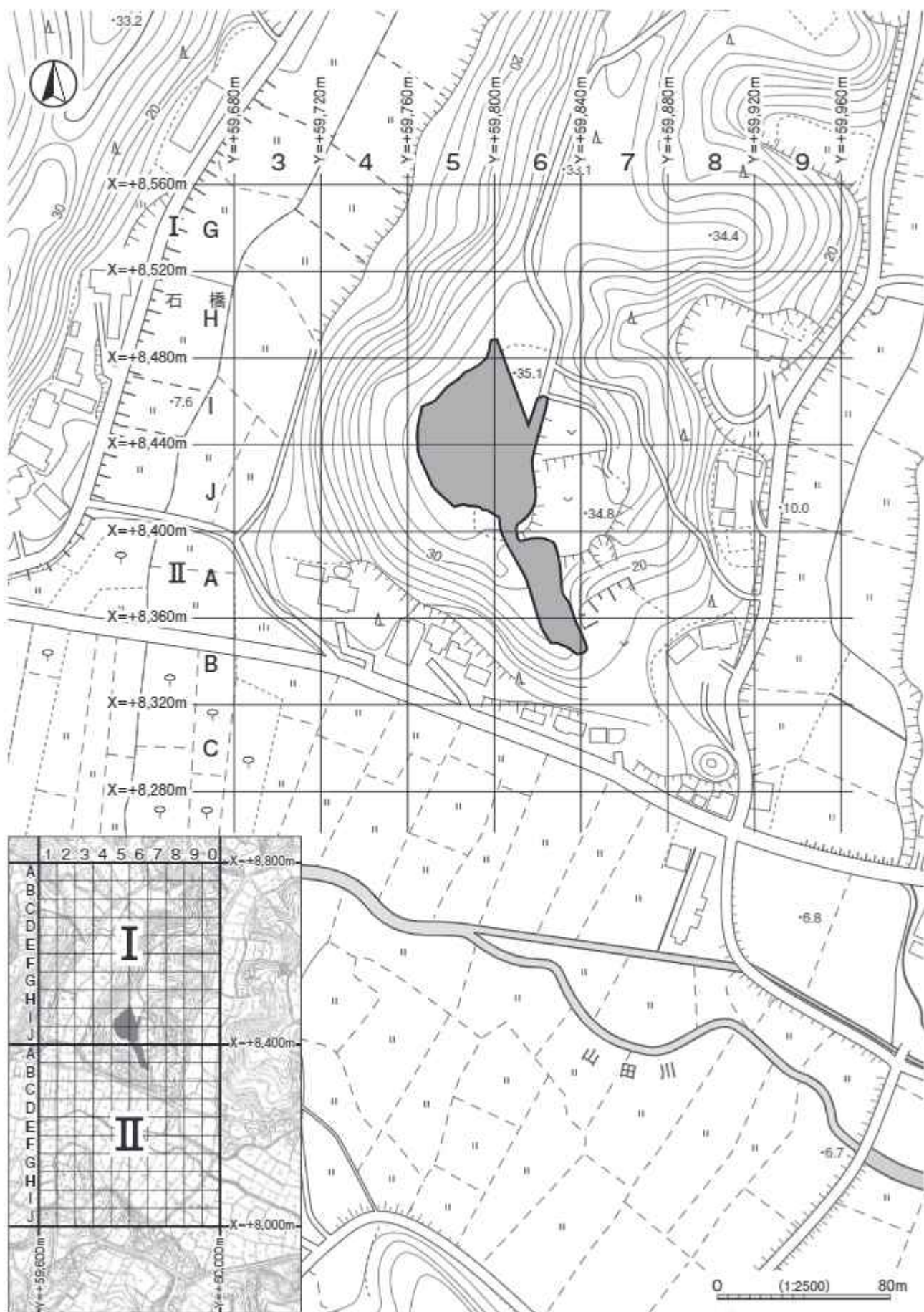
- 1) 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 磯浜・銚田』1991年
- 2) 大森昌衛・峰須紀夫『茨城の地質めぐって』1987年3月
- 3) a 北浦町教育委員会『北浦村文化財地図』1986年8月
b 茨城県『茨城県史料 考古史料編 先土器・縄文時代』1979年3月
c 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 4) 根本佑『東関東自動車道水戸線(潮来～銚田)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 熊ノ平古墳群 一本榎遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第448集 2021年3月
- 5) 茨城県歴史館『県内貝塚における動物依存体の研究(3)』1981年3月
- 6) 茂木悦男『北浦複合同地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 木工台遺跡1』茨城県教育財団文化財調査報告第140集 1998年9月
- 7) 高野節夫『北浦複合同地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 内宿井戸作城跡 木工台遺跡3』茨城県教育財団文化財調査報告第153集 1997年7月
- 8) 山田地区遺跡発掘調査会『古館遺跡調査報告書』1990年3月
- 9) 北浦町史編さん委員会『北浦町史』2004年12月
- 10) a 清水潤三『茨城県行方郡鬼越貝塚』日本考古学年報7 1955年
b 清水潤三『茨城県行方郡繁昌貝塚』日本考古学年報19 1971年
- 11) 山田地区遺跡発掘調査会『今山遺跡調査報告書』1990年3月
- 12) 山田地区遺跡発掘調査会『平遺跡調査報告書』1990年3月
- 13) 山田地区遺跡発掘調査会『古屋敷遺跡調査報告書』1990年3月
- 14) 山田地区遺跡発掘調査会『六台遺跡調査報告書』1990年3月
- 15) 註9に同じ
- 16) 註5に同じ
- 17) 後藤義明『主要地方道土浦・大洋線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 神明城跡』茨城県教育財団文化財調査報告第48集 1996年3月
- 18) 北浦村教育委員会『北浦村鶴ヶ居貝塚』1972年7月
- 19) 小澤重雄『行方市の古墳群』『続 常陸の古墳群』六一書房 2020年3月
- 20) 茂木雅博『茨日本1号墳調査報告』『茨城考古学』第1号 茨城考古学会 1968年3月
- 21) 註9に同じ
- 22) 黒澤秀雄『北浦複合同地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 炭焼遺跡 札場古墳群 三和貝塚 成田古墳群』茨城県教育財団文化財調査報告第130集 1998年3月
- 23) 註20に同じ
- 24) 註9に同じ
- 25) 荒井保雄 高野節夫『北浦複合同地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 木工台遺跡2』茨城県教育財団文化財調査報告第152集 1999年7月
- 26) 飛田英世『行方郡域における石塔用石材の搬入とその背景』『領域の研究』2003年3月
- 27) a 註9に同じ
b 註24に同じ



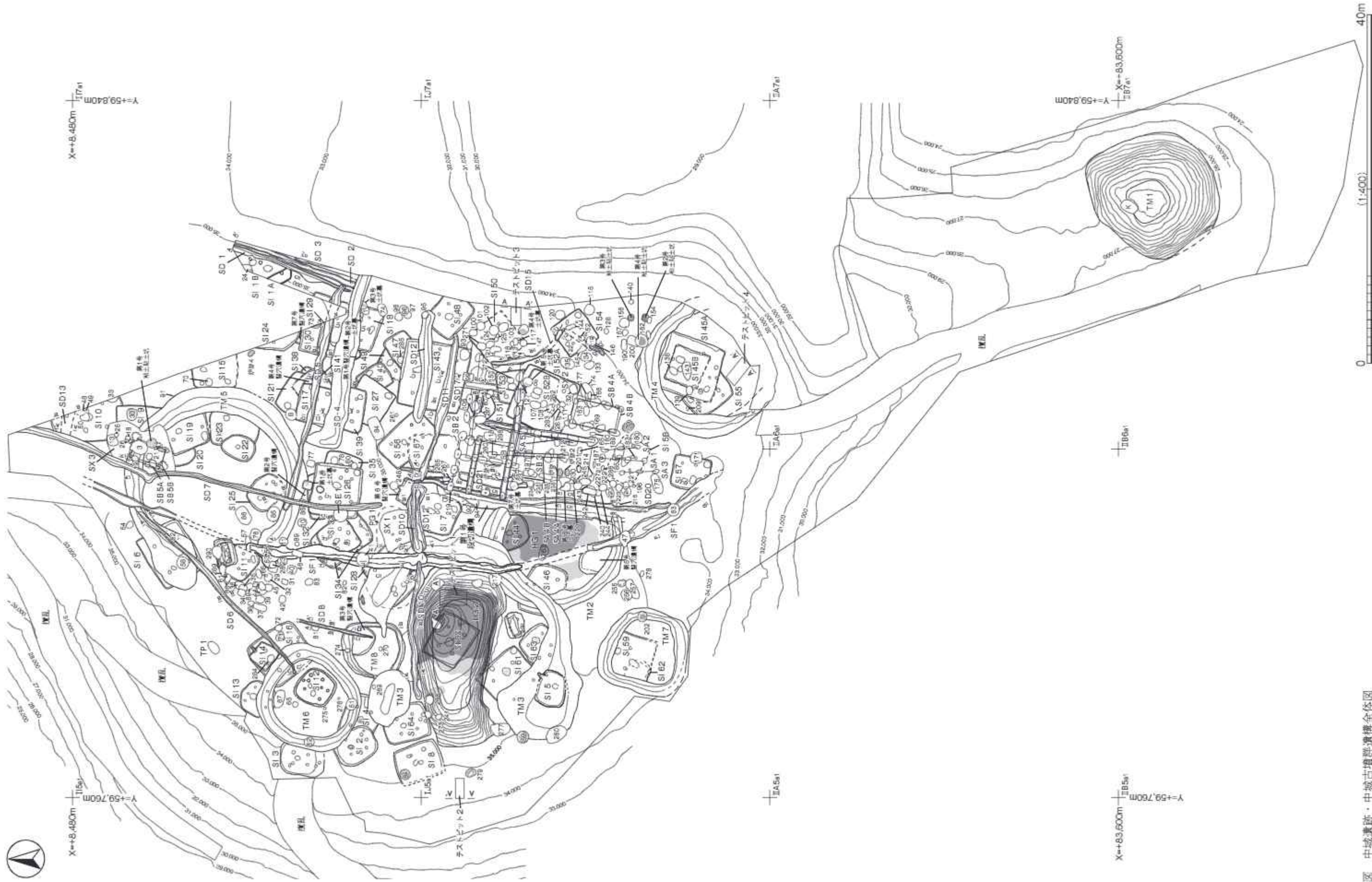
第1図 中城遺跡・中城古墳群周辺遺跡分布図(国土地理院 25,000分の1「鉾田」「武井」「西蓮寺」「常陸玉造」)

第1表 中城遺跡・中城古墳群周辺遺跡一覽

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・桃山	江戸			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・桃山	江戸
①	中城遺跡群	○	○	○	○	○	○	○	31	坪呂毛遺跡		○					
2	地蔵後古墳群				○				32	貝塚遺跡		○		○			
3	城見塚跡							○	33	鶴ヶ居貝塚		○					
4	堂日本古墳群				○				34	並松遺跡		○		○			
5	人定塚跡								35	大塚古墳				○			
6	古屋平遺跡		○	○	○				36	今山貝塚		○	○	○			
7	ドンビン塚古墳				○				37	千両山古墳群				○			
8	殿山古墳群				○				38	古屋敷遺跡		○	○	○		○	
9	大塚遺跡群		○		○				39	六台貝塚		○	○	○			
10	新堀古墳群		○	○	○				40	城見塚遺跡						○	
11	熊ノ平古墳群	○	○	○	○	○	○		41	戸呂井戸遺跡		○		○			
12	鰻谷古墳群				○				42	中山古墳群				○			
13	両宿貝塚		○						43	京田古墳群				○			
14	次木口料屋敷跡								44	螢入古墳群		○		○			○
15	両宿神明遺跡		○	○	○				45	前館遺跡				○			○
16	神明城跡			○				○	46	妙義台貝塚		○					
17	内宿館跡								47	山田城跡							○
18	木工台遺跡	○	○	○	○	○	○		48	平遺跡		○		○	○	○	
19	内宿井戸作城跡		○		○	○	○		49	うなぎ塚古墳		○	○	○			
20	木工台古墳群				○				50	業師堂遺跡		○	○	○			
21	手配台遺跡		○						51	権現山古墳群				○			
22	成田古墳群				○		○		52	鬼越貝塚		○	○	○			
23	塚原古墳群				○				53	大崎貝塚		○					
24	札幌古墳群				○		○		54	山王貝塚		○					
25	道祖神遺跡		○						55	台山古墳群				○			
26	金上遺跡			○					56	新林貝塚				○			
27	成田早川貝塚		○	○	○				57	日光平古墳群				○			
28	木崎城跡		○	○	○			○	58	南高岡平遺跡		○					
29	下山遺跡		○						59	御門山遺跡群		○		○			
30	並松古墳群				○												



第2図 中城遺跡・中城古墳群調査区設定図（行方市都市計画図2,500分の1）



第3図 中城遺跡・中城古墳群遺構全体図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

中城遺跡・中城古墳群は、行方市の東部に位置し、山田川左岸の標高約28～35mの台地上に立地している。調査面積は5,844㎡で、調査前の現況は山林、畑地である。

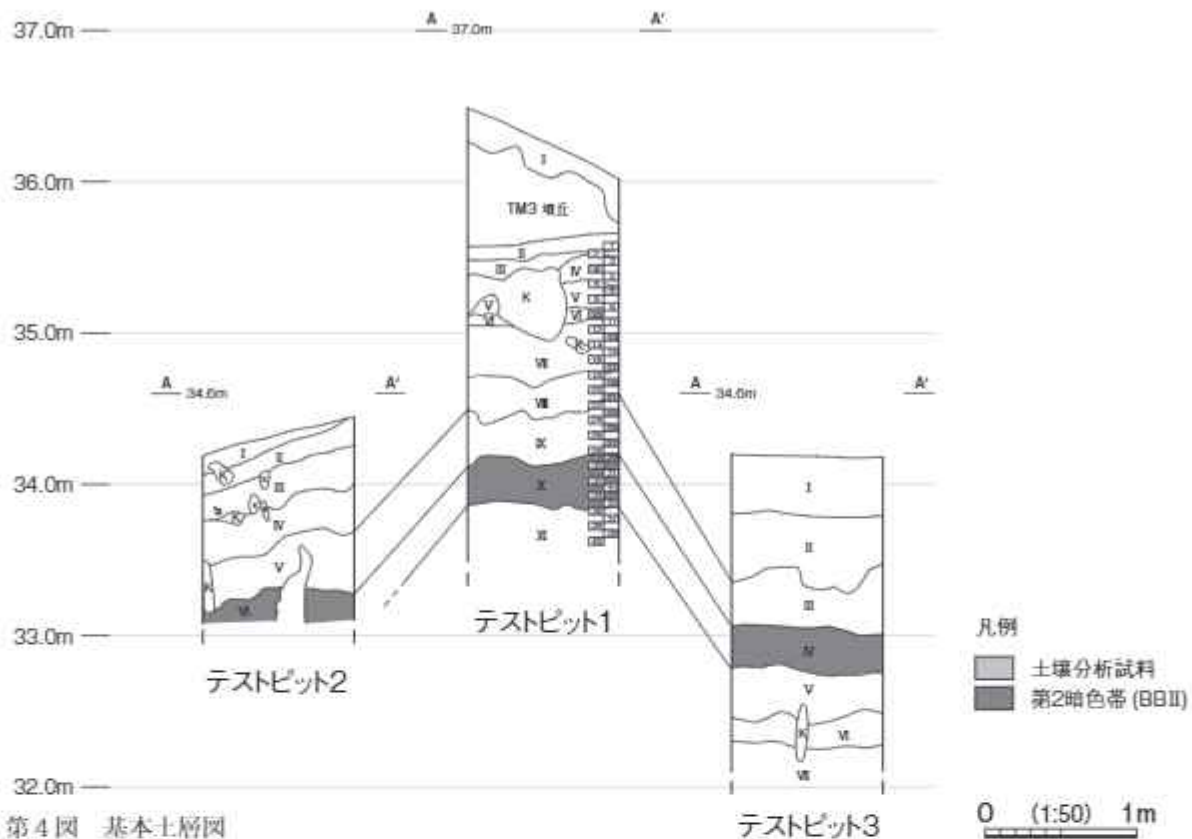
調査の結果、竪穴建物跡64棟（弥生時代37・古墳時代25・平安時代2）、掘立柱建物跡8棟（江戸時代）、竪穴遺構7基（弥生時代5、古墳時代1、江戸時代1）、段切状遺構1か所（江戸時代）、溝跡16条（江戸時代7・時期不明9）、道路跡1条（江戸時代）、土坑201基（弥生時代2・古墳時代3・江戸時代7・時期不明189）、井戸跡1基（江戸時代）、か跡4基（弥生時代）、柱穴列6条（江戸時代）、陥し穴1基（縄文時代）、土坑墓7基（江戸時代2・時期不明5）、遺物包含層2か所（弥生～古墳時代）、炭化物・焼土集中地点1か所（旧石器時代）、粘土貼土坑4基（江戸時代）、古墳7基（古墳時代）、塚1基（時期不明）、不明遺構3基（江戸時代）、ピット群1か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に176箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（広口壺・高坏・蓋）、土師器（坏・椀・高台付椀・埴・器台・高坏・鉢・壺・台付甕・甕・ミニチュア土器・手捏土器）、須恵器（高坏・長頸瓶・短頸壺・甕）、土師質土器（皿・焙烙）、瓦質土器（深鉢）、陶器（碗・皿・壺・甕・香炉）、磁器（碗・徳利）、土製品（土玉・紡錘車・支脚）、石器（石鎌・磨製石斧・太型蛤刃石斧・磨石・敲石・右肩扇状石器・砥石・剥片・石核）、石製品（勾玉・切子玉・管玉・小玉・剣形模造品・右孔門板）、金属製品（小刀・鉄鎌・釘・耳環・牽引金・馬具引手・煙管）、銭貨（寛永通寶）、ガラス製品（小玉）、鍛冶関連遺物（鉄滓）などである。

第2節 基本層序

調査区中央部の台地上の平坦面（I J 5 a6区）にテストピット1を、調査区西部の台地縁辺部の緩傾斜面（I J 5 a2区）にテストピット2を、調査区東部の台地縁辺平坦面（I J 6 c4区）にテストピット3を設定し、基本土層（第4図）の観察を行った。テストピット1は、ローム層の自然科学分析を行っており、その結果は付章に掲載した。以下、分析結果を踏まえ、各層の観察結果について述べる。

テストピット第I層は暗褐色を呈する表土層で、ロームブロック・粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性・縮まりとも弱い。層厚は6～45cmである。第II層は、黒褐色を呈する古墳時代の遺物包含層で、ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は強く、縮まりは弱い。層厚は10～18cmである。第III層は、黒褐色を呈する古墳時代の表土層で、ローム粒子、白色砂粒を少量、赤色粒子を微量含み、粘性・縮まりともに普通である。層厚は4～17cmである。第IV層は、褐色を呈する弥生時代の包含層で、ローム粒子を多量、白色砂粒、黒色ブロックを少量含み、粘性・縮まりともに普通である。層厚は5～20cmである（分析試料番号4）。第V層は、褐色を呈する弥生時代の層で、白色粒子、黒色粒子を微量に含み、粘性・縮まりともに普通である。層厚は3～15cmである（分析試料番号7）。第VI層は、褐色を呈する下層への漸移層で、白色粒子、黒色粒子を微量含み、粘性は強く、縮まりは普通である。層厚は6～17cmである（分析試料番号10）。第VII層は、褐色を呈するソフトローム層で、ロームブロック、白色粒子を微量含み、粘性は強く、縮まりは普通である。層厚は30～43cmである（分析試料番号13・17）。第VIII層は黄褐色を呈する下層への漸移層で、ロームブロック大・中が中量、小を多量含み、粘性・縮まりともに強い。層厚は22～38cmである（分析試料番号19・21）。第IX層は、褐色を呈するハードローム層で、白色粒子を微量含み、粘性・縮まりともに強い。層厚は28～33cmである（分析



第4図 基本土層図

試料番号 23・25・27)。第X層は、褐色を呈する暗色帯で、白色粒子、黒色粒子を微量含み、粘性・締まりとも強い。層厚は25～38cmである（分析試料番号29）。第XI層は、褐色を呈するハードローム層で、黒色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強い。第IX層上面から第XI層上面にかけて炭化物が集中して確認できた。

テストピット2の第I層は、黄褐色を呈する斜面に再堆積したローム層で、ローム粒子・白色粒子少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりは普通である。層厚は4～13cmである。第II層は、褐色を呈したソフトローム層で、白色粒子を少量含み、粘性・締まりとも普通である。層厚は8～18cmである。第III層は、褐色を呈する漸移層で、ロームブロック中を少量、小を中量含み、締まりは強く、粘性は普通である。層厚は8～27cmである。第IV層は、褐色を呈するハードロームの漸移層で、ロームブロック中・小を中量含み、粘性・締まりともに強い。第V層は、褐色を呈するハードローム層で、白色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は17～42cmである。第VI層は、褐色を呈するハードローム層で、マンガン、白色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は21cmまで確認した。色調から第2暗色帯に相当すると考えられる。

テストピット3の第I層は、黒褐色を呈する表土層で、ローム粒子を微量含み、粘性・締まりともに弱い。層厚は27～35cmである。第II層は褐色を呈するハードロームの漸移層で、ロームブロック大・中を中量、小を多量、黒色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は23～48cmである。第III層は褐色を呈するハードローム層で、白色粒子、黒色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は17～43cmである。第IV層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりともに強い。層厚は18～35cmである。色調から第2暗色帯に相当すると考えられる。第V層は、黄褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりともに強い。層厚は25～51cmである。第VI層は、にぶい黄褐色を呈するハードローム層で、黒色土ブロック、白色砂粒を微量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は10～26cmである。第VII層は、褐色を呈するハードローム層で、黒色ブロックを中量、白色砂粒を少量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は23cmまで確認した。

遺構は、東部がテストピット1の第III層上面で、西部がテストピット3の第II層上面で確認した。

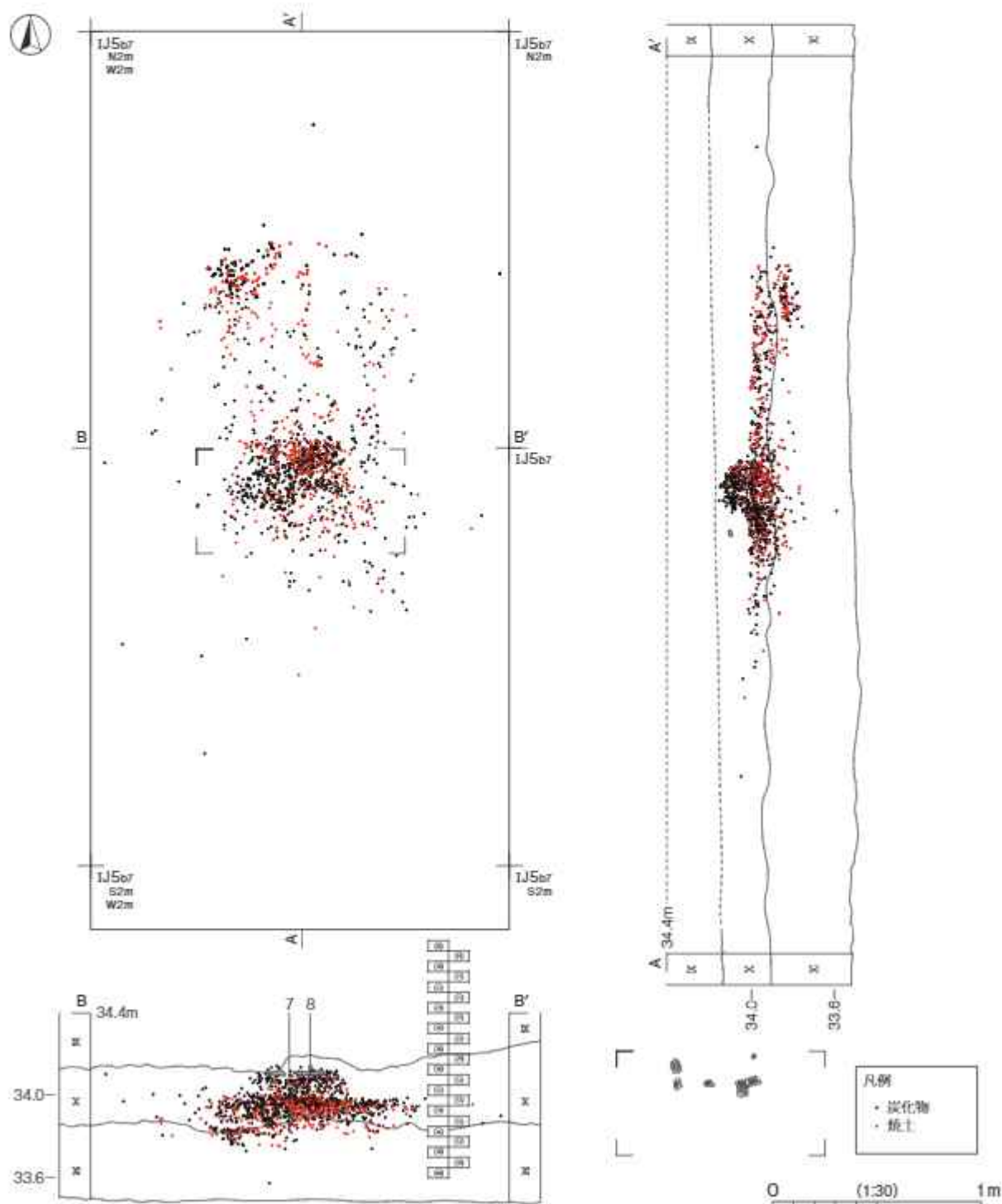
第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代の遺構と遺物

ローム層の堆積状況を確認するため、第3号墳の墳丘下を145cmほど掘削したところ、ローム層中から炭化材が出土した。そのため、東西4.0m、南北8.0mの旧石器時代の調査区を設定した。その結果、1か所の焼土粒子を含む炭化物の集中地点を確認した。以下、それについて記述する。

第1号炭化物・焼土集中地点（第5図 PL 3）

出土位置 調査区中央部のI J 5 a6～I J 5 b7区、標高約34.2mの台地平坦面に位置している。



第5図 第1号炭化物・焼土集中地点実測図

出土層位 暗色帯にあたる第X層から第XI層上部にかけてのハードローム層から出土している。

出土状況 焼土を含む炭化物は、東西1.88 m、南北3.06 mの範囲に混在して分布している。平面分布は、I J 5 b7 から西に1 mの地点で、東西0.6 m、南北0.4 mの範囲が最大密集域である。また、I J 5 b7 地点から西に1.4 m、北に0.8 mの地点でも東西0.2 m、南北0.3 mの範囲で小規模な密集域を確認した。標高約34 mから調査を開始し、その上層にあたるローム層中の炭化物と焼土は、最大密集域の中央部でのみ記録したため、本来の垂直分布上限は標高34.2 m付近と推定できる。炭化物の垂直分布は、標高33.58～34.15 m、垂直分布幅は約57.0 cmで、平均標高は33.97 mである。焼土粒の垂直分布は、標高33.76～34.11 m、垂直分布幅は約35.0 cmで、平均標高は33.94 mである。炭化物と焼土粒の垂直分布幅に約21.5 cmの相違が見られ、焼土粒よりも炭化物の平面・垂直分布域がやや広い。炭化物のほか、4 cm以上の炭化材が7点出土している。炭化材は、I J 5 b7 区の南西部に散在しており、分析資料No.7は長さ4 cm、標高33.85 m、分析試料No.8は長さ9 cm、標高34.09 mから出土している。樹種同定の結果、スギ科スギ属であることが判明した。なお、共伴する石器類は確認できなかった。

所見 時期は、焼土を含む炭化物集中地点を確認した第X・XI層がATを含む層下の暗色帯であることから、約3万年前と推定できる。また、放射性炭素年代測定の結果、分析試料No.7が34,650～34,204年、分析試料のNo.8の暦年校正は35,204～34,489年であることが判明した（付章 自然科学分析・AMS年代測定・炭化材樹種同定参照）。分布状況から、2か所の密集域に時期差はないと推定できることから、炭化材集中地点は約35万年前と考えられる。性格は不明である。石器が確認できなかったことから、人為的影響下で形成されたものと断定できない。旧石器時代の跡と想定した場合、出土層位から、武蔵野台地の立川ローム層における第X～VIII層段階併行の遺構と考えられる。

2 縄文時代の遺構と遺物

陥し穴1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

陥し穴

第1号陥し穴（第6図）

位置 調査区北部のI I 5 e5区、標高35 mほどの緩傾斜面に位置している。

規模と形状 長径1.60 m、短径0.98 mの楕円形で、主軸方向はN-46°-Eである。深さ88 cmで、中位に幅10～30 cmの段を有する。壁は、段の上部でやや外傾し、下部ではほぼ直立している。

覆土 4層に分層できる。第1～3層はローム粒子を比較的多く含んだ締まりの強い土で、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第4層はロームブロックを多く含むが、自然な壁面崩落と判断した。

所見 時期は、特徴的な形状から縄文時代と考えられる。



第6図 第1号陥し穴実測図

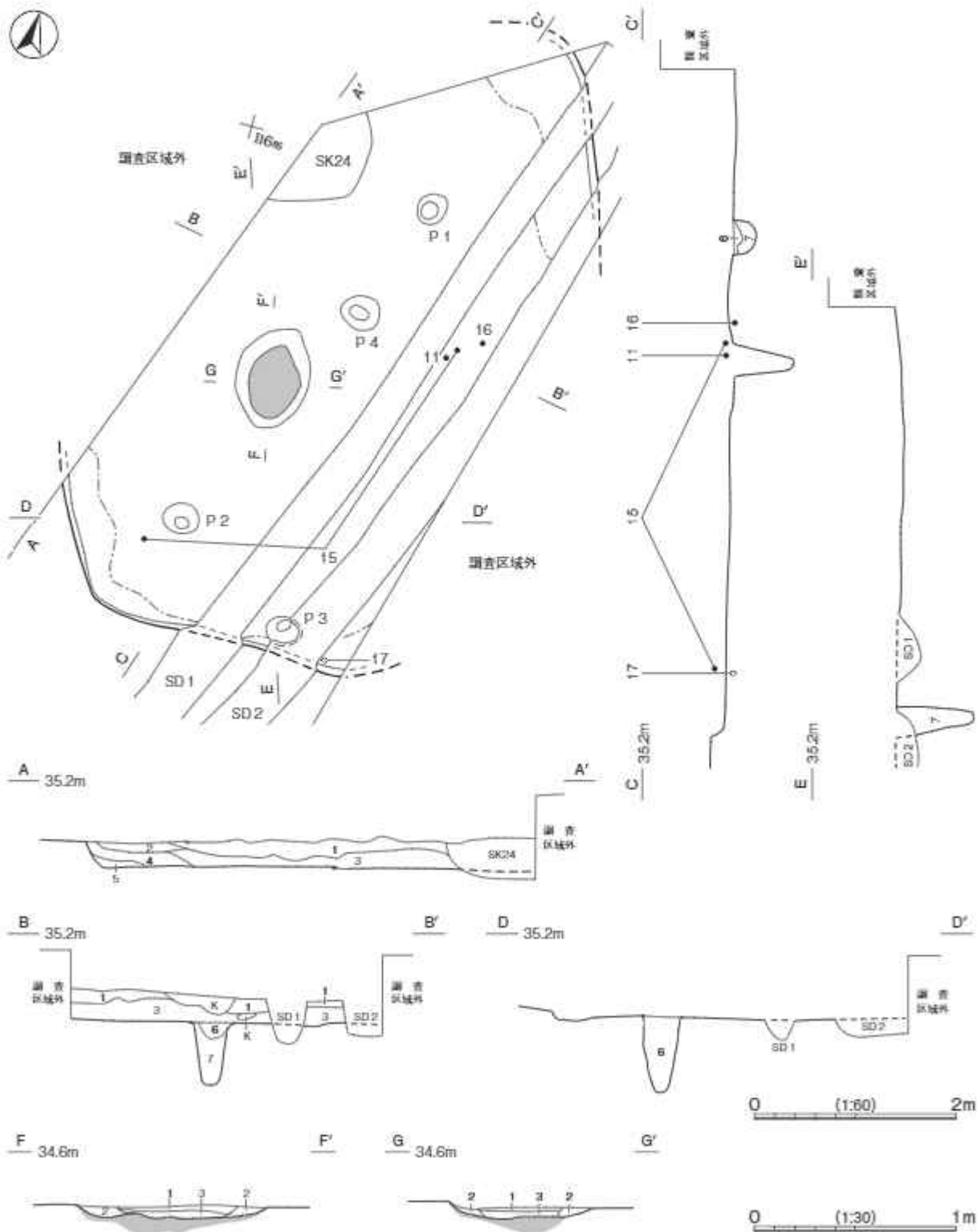
3 弥生時代の遺構と遺物

竪穴建物跡 37 棟、竪穴遺構 5 基、土坑 2 基、加跡 4 基、遺物包含層 2 か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第 1 A 号竪穴建物跡 (第 7～9 図 第 2 表 PL 4・24)

位置 調査区東部の I I 6 f 6 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。



第 7 図 第 1 A 号竪穴建物跡実測図

土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐色 砂・ム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雑土
- 2 10YR2/2 暗褐色 砂・ム小C・粒B、焼土粒C、炭化粒D/粘B、雑土
- 3 10YR2/1 黒褐色 砂・ム小B・粒A、焼土粒D、炭化粒D/粘C、雑土
- 4 10YR2/2 黒褐色 砂・ム小B・粒A、焼土粒D/粘C、雑土
- 5 10YR4/4 暗褐色 砂・ム小C・粒B/粘B、雑土
- 6 10YR2/3 暗褐色 砂・ム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘C、雑土
- 7 10YR2/4 暗褐色 砂・ム小C・粒B、焼土粒C、炭化粒D/粘B、雑土

炉土層解説

- 1 5YR2/3 暗褐色 砂・ム小C、焼土中D・小C・粒C、炭化粒/粘B、雑土
- 2 5YR2/3 暗褐色 砂・ム小C、焼土小D・粒D/粘B、雑土
- 3 7.5YR2/4 暗褐色 砂・ム小C/粘B、雑土

重複関係 第1B号竪穴建物跡を掘り込み、第24号土坑、第1・2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東部と西部が調査区域外のため、確認できた規模は、南北軸5.62m、東西軸3.50mである。本来は南北軸約6.50m、東西軸約5.40mの隅丸長方形で、主軸方向はN-23°-Wと推測できる。壁は高さ20~27cmで、外傾している。本跡は第1B号竪穴建物跡を建替え拡張している。

床 ほは平坦である。壁際を除いて硬化している。

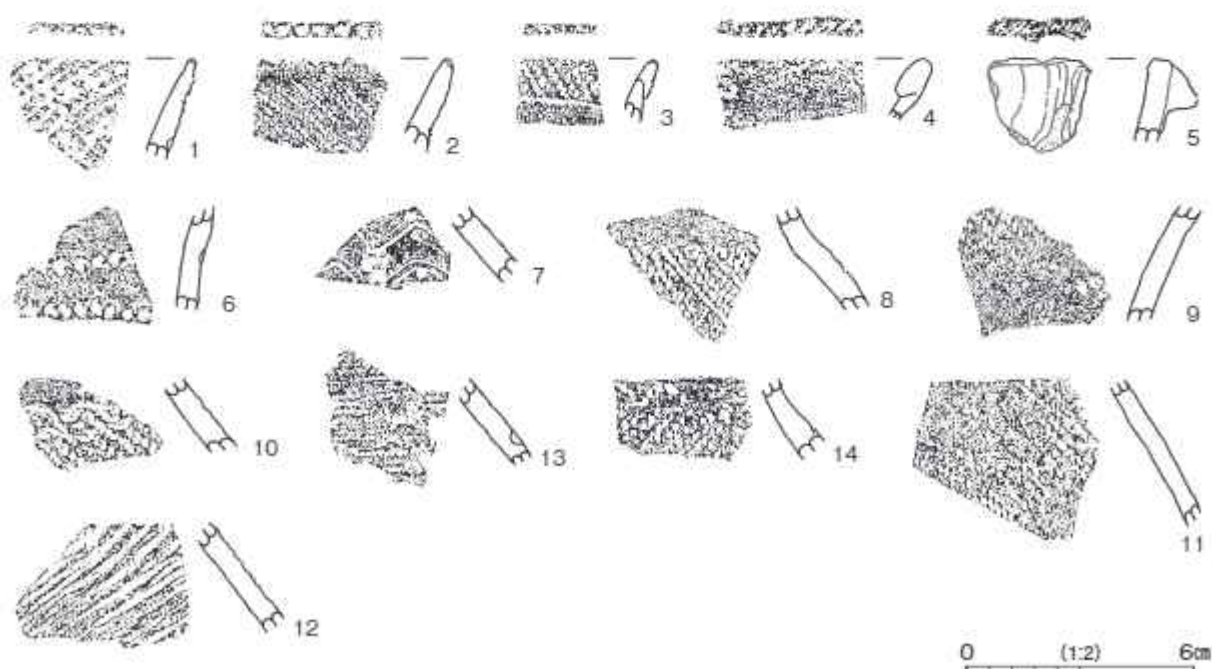
炉 中央部南西寄りに位置している。長径98cm、短径74cmの楕円形で、深さ6cmほどの地床かである。断面は皿状を呈している。炉床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 4か所。P1は深さ24cm、P2は深さ80cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。P3は深さ68cmで、出入口施設に伴うピットと考えられる。P4は深さ60cmで、性格は不明である。

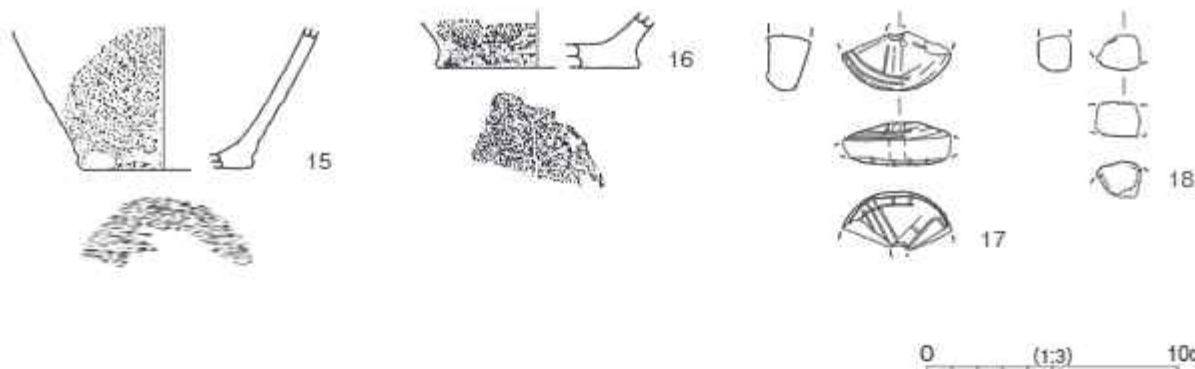
覆土 5層に分層できる。第1層はローム粒子主体の褐色土、第5層はローム由来の壁などの崩落土で、ともに自然堆積である。第2~4層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片385点（灰口壺）、土製品2点（紡錘車）、石器4点（石英製剥片）が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片1点、陶器片1点が出土している。1~10・12~14は覆土中から、11・16は中央部やや東寄りの床面からそれぞれ出土している。15は中央部東寄りの床面と、南西隅寄りの覆土下層から出土した土器片が接合したものである。17は南壁際中央の床面から、18は炉の覆土中から、それぞれ出土している。また、覆土中から石英製剥片4点が出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



第8図 第1A号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第9図 第1A号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

第2表 第1A号竖穴建物跡出土遺物一覧(第8・9図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	養生土器	広口碗	-	(27)	-	長石・石英・黒色粒子	橙	普通	口唇部に縄文原形押付。口縁部外面に附加条一種附加2条縄文施文。口縁部上端に刺突文	覆土	5%
2	養生土器	広口碗	-	(24)	-	長石・石英	灰褐	普通	口唇部に縄文原形押付。口縁部外面に附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5% PL.24
3	養生土器	広口碗	-	(17)	-	長石・石英	灰褐	普通	口唇にキザミ。口縁部外面に附加条一種附加2条を施文	覆土	5% PL.24
4	養生土器	広口碗	-	(17)	-	長石・石英	褐	普通	口縁部2列の円形刺突文	覆土	5%
5	養生土器	広口碗	-	(22)	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口唇部に縄文施文後突刺張り付け	覆土	5%
6	養生土器	広口碗	-	(28)	-	長石・石英	暗赤褐	普通	胴部外面に附加条一種附加2条縄文施文後列点文	覆土	5% PL.24
7	養生土器	広口碗	-	(20)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐	普通	半截竹管状工具で2段の波状文施文	覆土	5%
8	養生土器	広口碗	-	(27)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	胴部無文。胴部附加条一種附加1条縄文施文	覆土	5%
9	養生土器	広口碗	-	(30)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部無文。胴部附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
10	養生土器	広口碗	-	(20)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部無文。結節縄文を横位施文後胴部に単節凹施文	覆土	5%
11	養生土器	広口碗	-	(5.7)	-	長石・石英	明褐	普通	胴部輪轡不明の附加条縄文施文	床面	5%
12	養生土器	広口碗	-	(29)	-	石英・雲母・砂礫	にぶい黄橙	普通	胴部外面附加条一種附加2条施文	覆土	5%
13	養生土器	広口碗	-	(24)	-	石英・砂礫・赤色粒子	灰黄褐	普通	胴部外面附加条一種附加1条施文後刺突文	覆土	5%
14	養生土器	広口碗	-	(22)	-	石英・雲母・黒色粒子	黒褐	普通	胴部無文。胴部に単節1段縄文施文	覆土	5%
15	養生土器	広口碗	-	(5.7)	[66]	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	褐	普通	胴部外面附加条一種附加1条縄文施文。底面外面木炭痕	床面 覆土上層	5%
16	養生土器	広口碗	-	(22)	[80]	長石・石英・黒色粒子	褐	普通	胴部外面附加条一種附加1条縄文施文。底面外面木炭痕	床面	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
17	紡錘車	(4.3)	1.7	(0.6)	(1443)	長石・石英・白色粒子	灰黄褐	円盤状。断面長方形で中央部が肥厚。半截竹管状工具で両面に放射状・同心円状の波線	床面	
18	紡錘車	(1.7)	(1.3)	-	(354)	長石・石英	橙	摩耗。被熱の痕跡なし。	炉覆土	

第1B号竖穴建物跡(第10図 第3表 PL.4・24)

位置 調査区東部のII 6f6区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1A号竖穴建物、第24号土坑、第1・2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東部と西部が調査区域外のため、確認できた規模は、南北軸4.22m、東西軸4.45mである。本来は南北軸約5.83m、東西軸4.65mの隅丸長方形である。主軸方向はN-26°-Wと推測できる。壁の高さは8~12cmで、外傾している。

床 ほは平坦である。中央部から東壁際にかけて硬化している。

ピット 2か所。P1は深さ65cm、P2は深さ55cmで配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

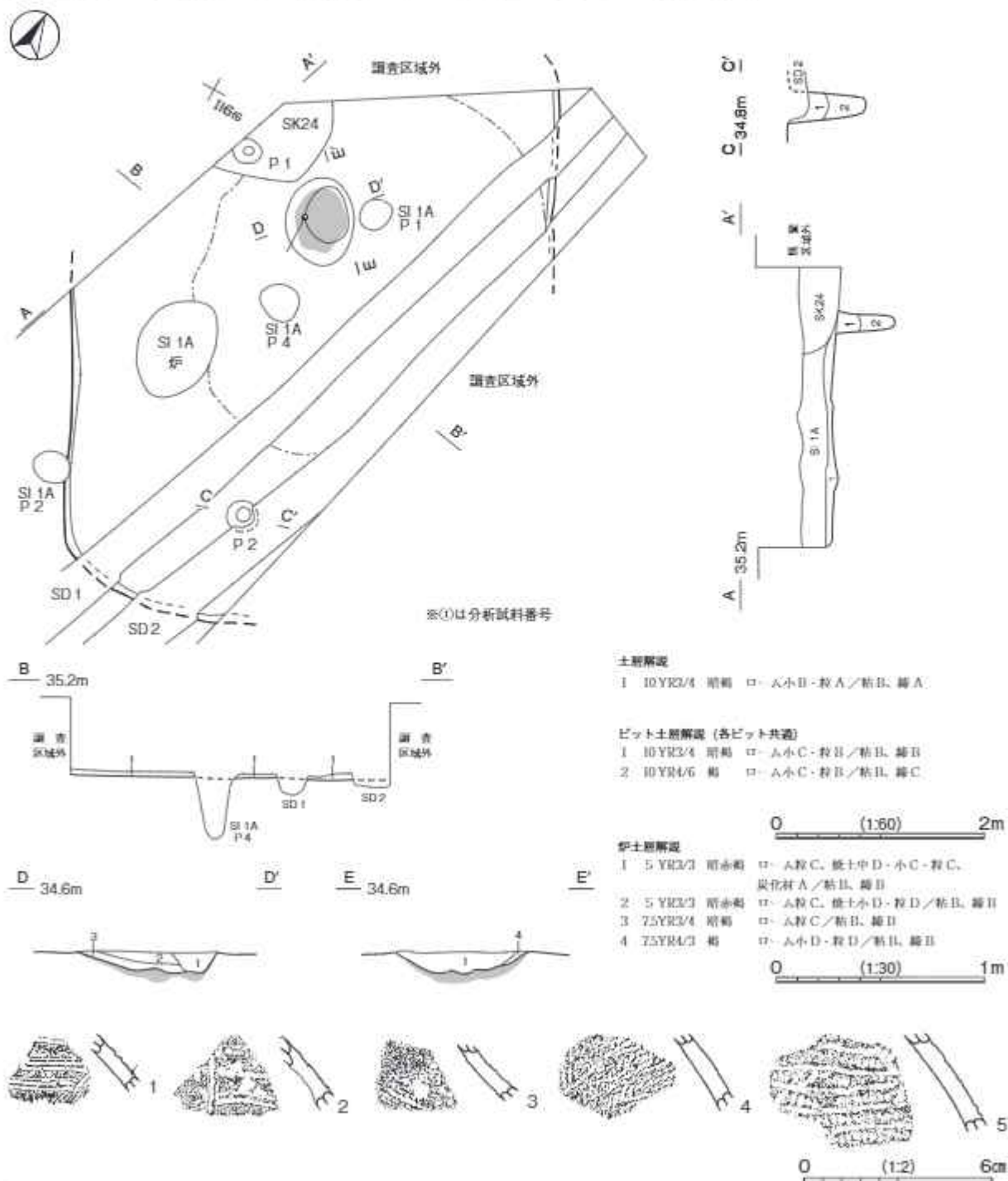
炉 中央部やや北西寄りに位置している。長径84cm、短径64cmの楕円形で、深さ10cmの地床炉である。断面

は皿状を呈している。か床面は僅かに赤変硬化している。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片 89 点 (広口壺)、石器 1 点 (石英製剥片) が覆土中から出土している。ほかに混入した土師器片 2 点が出土している。出土土器の大半は広口壺の胴部～底部細片で、口縁部から頸部にかけての破片は非常に少なく、床面からの出土はない。また、混入した足洗 2～3 式の胴部片が 8 点出土している。か床面からは、微量の炭化物が出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。かから出土した炭化物は、放射性炭素年代測定の結果、校正歴年代は 2 世紀後半から 4 世紀前半であった。樹種は不明である (付章参照)。



第10図 第1B号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第3表 第1B号竖穴建物跡出土遺物一覧(第10図)

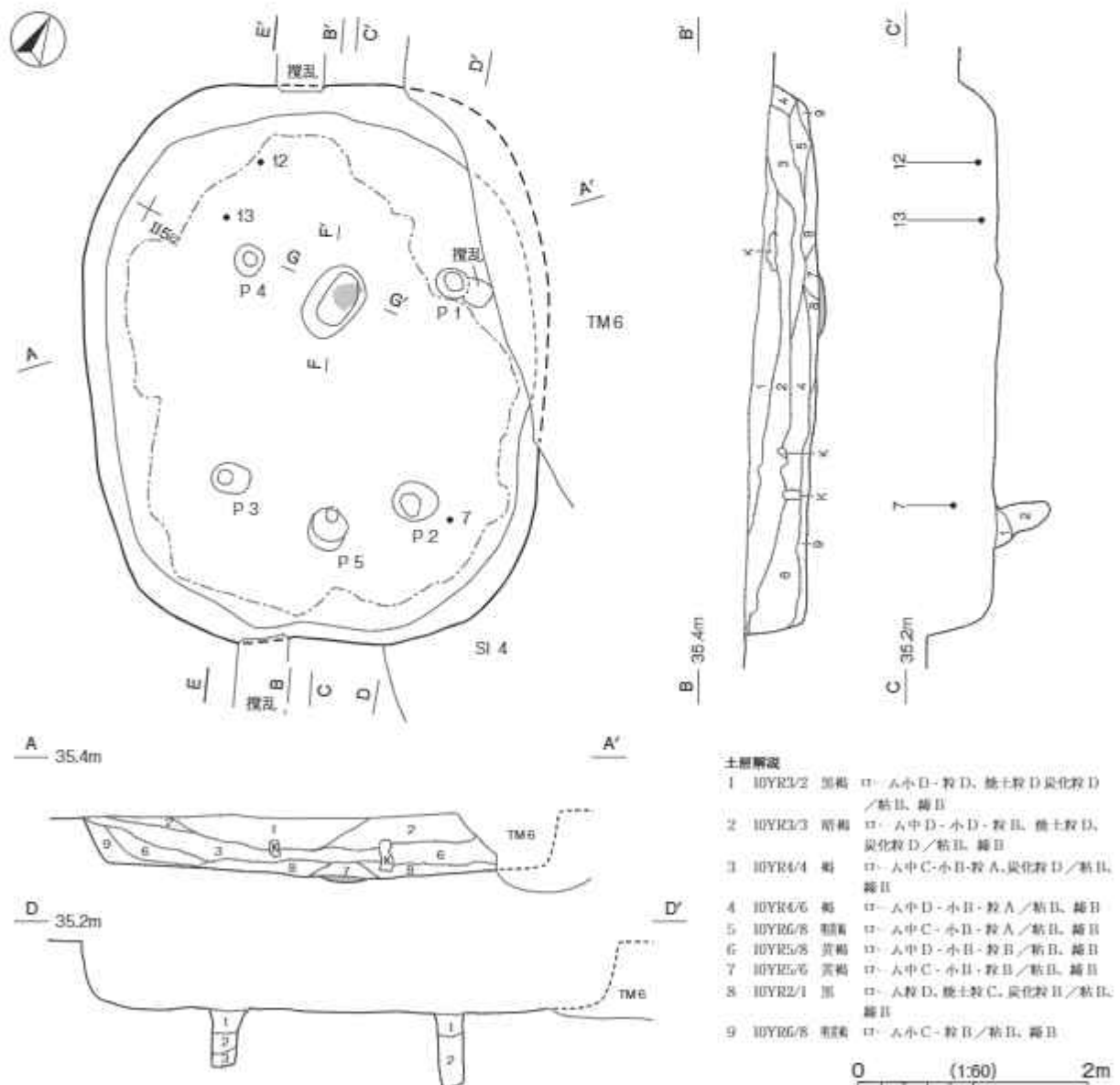
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	甕生土器	広口甕	-	(18)	-	長石・石英	明赤褐	普通	頸部に5本の縄溝状工具による山形文を施した後3本の縄溝状工具による3段の横止文	覆土	5% PL24
2	甕生土器	広口甕	-	(25)	-	長石・石英	灰黄褐	普通	横位の平行溝を3段以上施した後3本の縄溝状工具による縦区画	覆土	5% PL24
3	甕生土器	広口甕	-	(18)	-	長石・石英	明赤褐	普通	頸部無文 胴部付加条一種付加1条縄文施文	覆土	5%
4	甕生土器	広口甕	-	(25)	-	長石・石英	黒褐	普通	胴部外面に付加条一種付加1条縄文施文	覆土	5%
5	甕生土器	広口甕	-	(31)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	胴部外面に付加条一種付加2条縄文施文	覆土	5%

第2号竖穴建物跡(第11・12図 第4表 PL4・24)

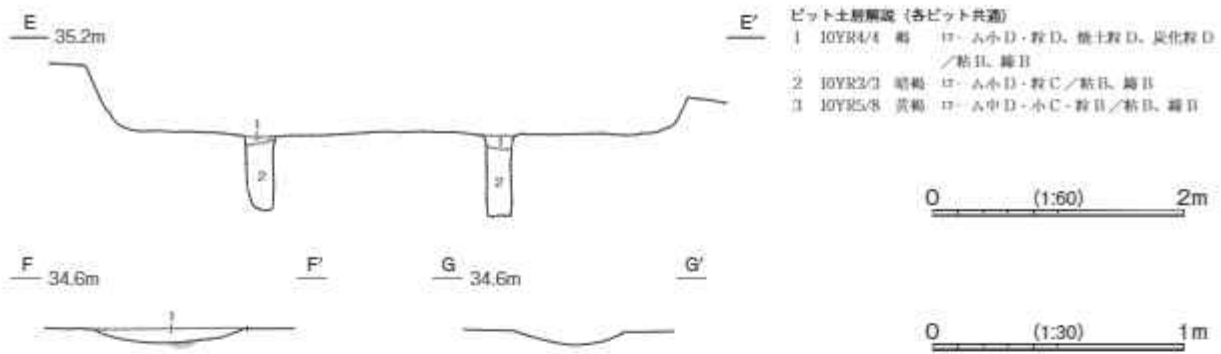
位置 調査区西部のI15i2区、標高34mほどの台地緩傾斜面に位置している。

重複関係 第4号竖穴建物跡を掘り込み、第6号墳に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.82m、短軸3.94mの隅丸長方形で、主軸方向はN-29°-Wである。壁は高さ29~50cmで、外傾している。

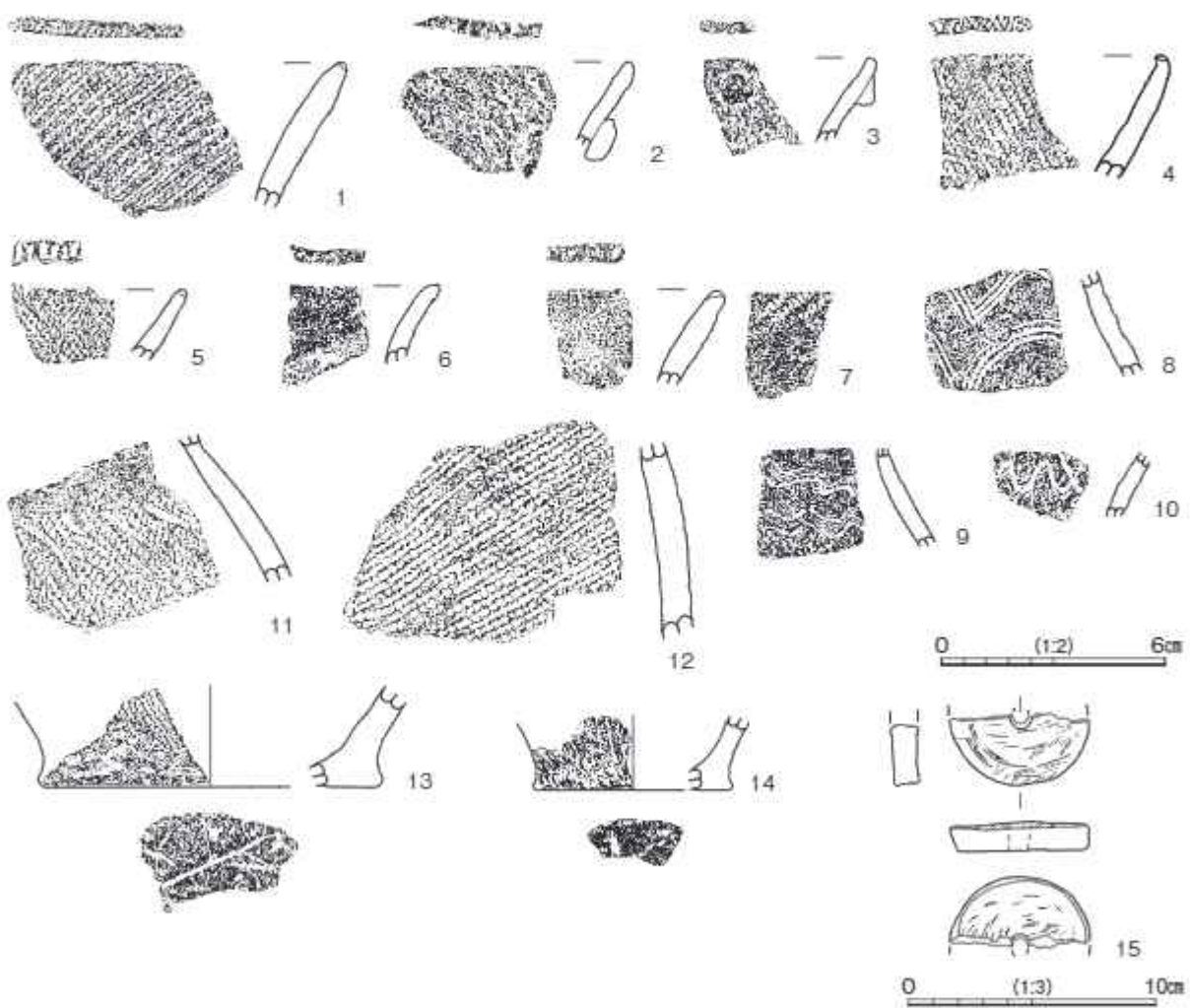


第11図 第2号竖穴建物跡実測図



ピット土層解説 (各ピット共通)
 1 10YR4/4 粘 コ・A小D・粒D、粘土粒D、炭化粒D / 粘B、粘B
 2 10YR2/3 暗粘 コ・A小D・粒C / 粘B、粘B
 3 10YR5/8 黄粘 コ・A中D・小C・粒B / 粘B、粘B

炉土層解説
 1 5YR4/4 に近い赤粘 コ・A粒C、粘土中D・小B・粒B、炭化粒D / 粘B、粘B



第12図 第2号堅穴建物跡・出土遺物実測図

床 若干の凹凸があり、壁に向かって緩やかに高くなっている。壁際を除いて硬化している。
 炉 中央部からやや北壁寄りに位置している。長径66cm、短径40cmの楕円形で、深さ4cmの地床かである。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。
 ピット 5か所。P1～P4は深さ48～65cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。P5は深さ46cmで、中央方向に向かって斜めに掘り込まれていることと配置から、出入口施設に伴うピットと考えられる。柱はい

ずれも抜き取られている。

覆土 9層に分層できる。第1・2層は周開から流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第3～9層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片326点（広口壺）、土製品2点（紡錘車）、石器3点（瑪瑙製剥片）が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、土師器片432点、土製品1点、焼成粘土塊2点、石器3点が出土している。7は南東部覆土中層から、12・13は北西部覆土下層から、それぞれ出土している。また、瑪瑙製剥片3点は、覆土下層から出土している。

所見 第3～9層からは少量の弥生土器片が、第1・2層からは古墳時代前期前半の土師器片が多く出土している。このことから、古墳時代前期前半になっても堅穴建物跡は完全に埋没していなかったと推測できる。時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。

第4表 第2号堅穴建物跡出土遺物一覧（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	—	(19)	—	長石・石英・ 雲母・赤色砂子	黒褐	普通	口唇部・口縁部に附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5% PL24
2	弥生土器	広口壺	—	(27)	—	長石・石英・ 白色砂子	明赤褐	普通	口唇部・口縁部の施文消滅で不明 下縁に耳状突起部付	覆土	5% PL24
3	弥生土器	広口壺	—	(23)	—	長石・石英・ 白色砂子	明赤褐	普通	口唇部に縄文原形圧痕 口縁部 1L 縄文施文後 凹形突起部付	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺	—	(33)	—	長石・石英・ 白色砂子	橙	普通	口唇部に附加条一種附加2条縄文施文 口縁部 上半部ノット半輪不明附加条縄文施文	覆土	5%
5	弥生土器	広口壺	—	(19)	—	長石・石英・ 白色砂子	明褐	普通	口唇部にキザミ 口縁部に附加条一種附加2条 縄文施文	覆土	5%
6	弥生土器	広口壺	—	(22)	—	長石・石英・ 雲母・白色砂子	黄灰	普通	口唇部に縄文施文	覆土	5%
7	弥生土器	広口壺	—	(25)	—	長石・石英・ 白色砂子	灰黄褐	普通	口唇部に縄文原形押捺 口縁部内面1端にLR 縄文施文	覆土中層	5%
8	弥生土器	広口壺	—	(28)	—	長石・石英・ 雲母・白色砂子	にぶい橙	普通	胴部に橈状工具（3本橈面）による波状文を 施文	覆土	5% PL24
9	弥生土器	広口壺	—	(26)	—	長石・石英・ 白色砂子	にぶい黄褐	普通	胴部に橈状工具（1本橈面）による波状文を施 文 胴部附加条一種縄文施文	覆土	5%
10	弥生土器	広口壺	—	(17)	—	長石・石英・ 雲母・白色砂子	明赤褐	普通	胴部に橈状工具（3本橈面）による波状文	覆土	5%
11	弥生土器	広口壺	—	(4.0)	—	長石・石英・ 雲母・白色砂子	にぶい赤褐	普通	胴部附加条一種附加1条縄文施文	覆土	5%
12	弥生土器	広口壺	—	(5.3)	—	長石・石英・ 雲母・白色砂子	褐	普通	附加条一種附加2条縄文施文	覆土下層	5%
13	弥生土器	広口壺	—	(4.1)	[138]	長石・石英・ 雲母・白色砂子	黒褐	普通	胴部半筋 1L 縄文施文 底部木炭痕 種子圧痕	覆土下層	5%
14	弥生土器	広口壺	—	(3.0)	[80]	長石・石英・ 雲母・黒色砂子	橙	普通	胴部附加条一種附加付加1条縄文施文 底部布目痕	覆土	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
15	紡錘車	(5.6)	1.6	(0.7)	(19.4)	長石・石英	にぶい褐	断面長方形円筒状 上面は浅く凹む	覆土	

第3号堅穴建物跡（第13・14図 第5表 PL4・24）

位置 調査区西部のI I 5g2区、標高34mほどの台地縁辺部の緩傾斜面に位置している。

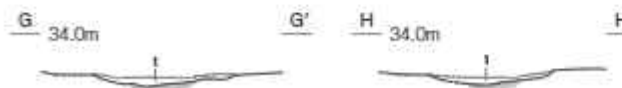
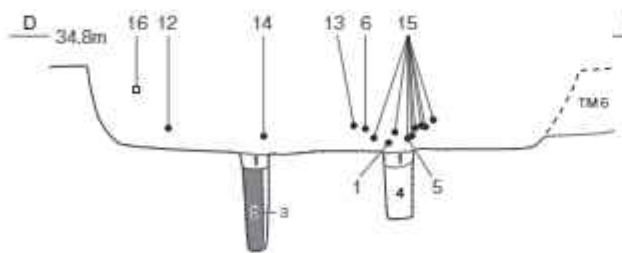
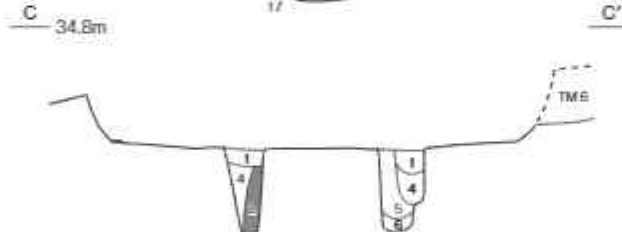
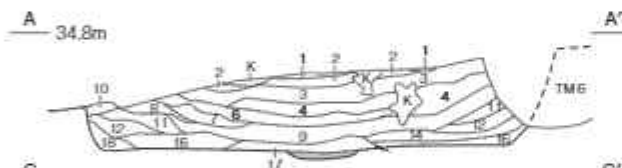
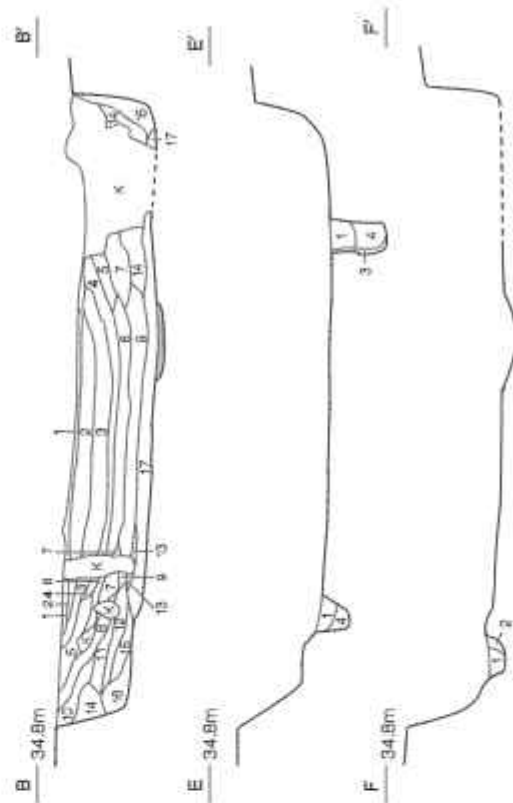
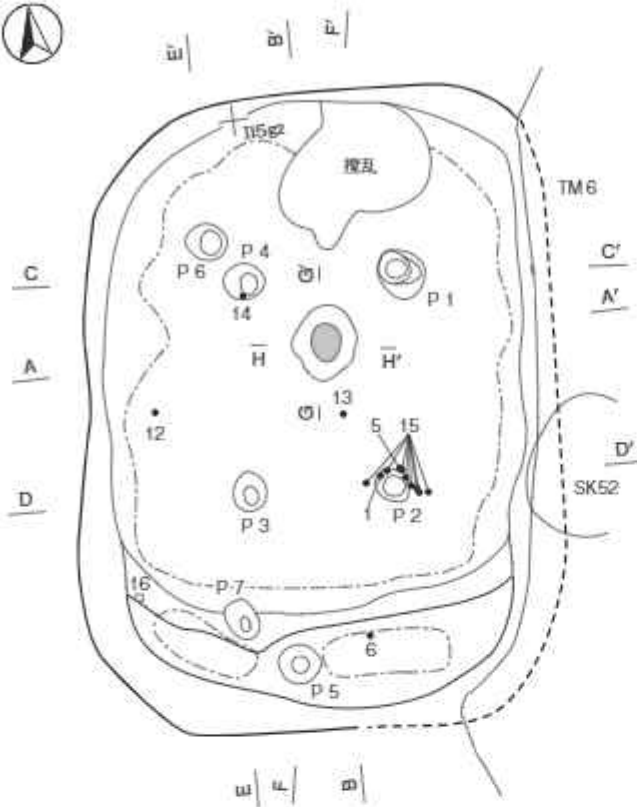
重複関係 第52号土坑、第6号墳に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、規模は長軸5.05m、確認できた短軸は3.60mで、本来は短軸3.70mの隅丸長方形と推定できる。主軸方向はN-9°-Wである。壁は高さ37～60cmで、外傾している。

床 ほは平坦で、壁に向かって緩やかに高くなっている。壁際を除いて硬化している。南壁際は、東西約3.2m、南北約0.75mの範囲が、高さ約8cmのテラス状に一段高くなっている。

炉 中央部北寄りに位置している。長径60cm、短径52cmの不整形円形で、深さ7cmの地床炉である。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。

ピット 7か所。P1～P4は深さ44～77cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。P1の堆積状況から、建て替えが認められる。P5は深さ10cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ44cm、



土層解説

1	75YR2/4	暗褐色	ロ- A小D-粒C, 機土粒D, 炭化粒D/粘B, 雜A
2	10YR2/2	黒褐色	ロ- A小D-粒B, 機土粒D, 炭化粒D/粘B, 雜B
3	10YR2/2	黒褐色	ロ- A小C-粒C, 機土粒D, 炭化粒D/粘B, 雜C
4	10YR2/3	暗褐色	ロ- A小C-粒C, 機土粒D, 炭化粒D/粘B, 雜C
5	10YR4/4	褐色	ロ- A小D-粒C, 炭化粒D/粘B, 雜C
6	10YR4/1	暗褐色	ロ- A小D-粒B, 機土粒D, 炭化粒D/粘B, 雜B
7	10YR4/2	暗褐色	ロ- A中D-小D-粒B, 炭化粒D/粘B, 雜B
8	10YR4/6	褐色	ロ- A小D-粒B, 炭化粒D/粘B, 雜B
9	10YR4/3	暗褐色	ロ- A中D-小D-粒B, 炭化粒D/粘B, 雜B
10	10YR4/6	褐色	ロ- A中C-小D-粒B, 炭化粒D/粘B, 雜B
11	10YR2/4	暗褐色	ロ- A中D-小C-粒B, 炭化粒D/粘B, 雜B
12	10YR2/3	暗褐色	ロ- A中D-小D-粒C, 炭化粒D/粘B, 雜B
13	10YR4/3	暗褐色	ロ- A小D-粒C, 機土粒D, 炭化粒D/粘B, 雜B
14	10YR4/4	褐色	ロ- A中C-小B-粒A/粘B, 雜B
15	10YR2/4	暗褐色	ロ- A中D-小C-粒C/粘B, 雜B
16	10YR4/3	暗褐色	ロ- A小D-粒C, 機土小D-粒C, 炭化物D-粒C/粘B, 雜B
17	10YR4/4	褐色	ロ- A中D-小C-粒B, 炭化粒D/粘B, 雜B
18	10YR4/3	暗褐色	ロ- A小D-粒C, 機土粒D, 炭化粒D/粘B, 雜B

0 (1:60) 2m

0 (1:30) 1m

ピット土層解説 (各ピット共通)

1	10YR4/4	褐色	ロ- A中D-小D-粒C, 機土粒D, 炭化粒D/粘B, 雜B
2	10YR2/4	暗褐色	ロ- A小C-粒B/粘B, 雜C
3	10YR5/6	黄褐色	ロ- A中D-小B-粒A/粘B, 雜C
4	10YR4/4	褐色	ロ- A小D-粒D, 炭化粒D/粘B, 雜B
5	10YR2/3	暗褐色	ロ- A小D-粒B/粘B, 雜B
6	10YR2/4	暗褐色	ロ- A中D-小C-粒A/粘B, 雜B

炉土層解説

1	5YR4/4	黄土褐色	ロ- A小D-粒D, 機土中D-小B-粒B, 炭化粒D/粘C, 雜A
---	--------	------	------------------------------------

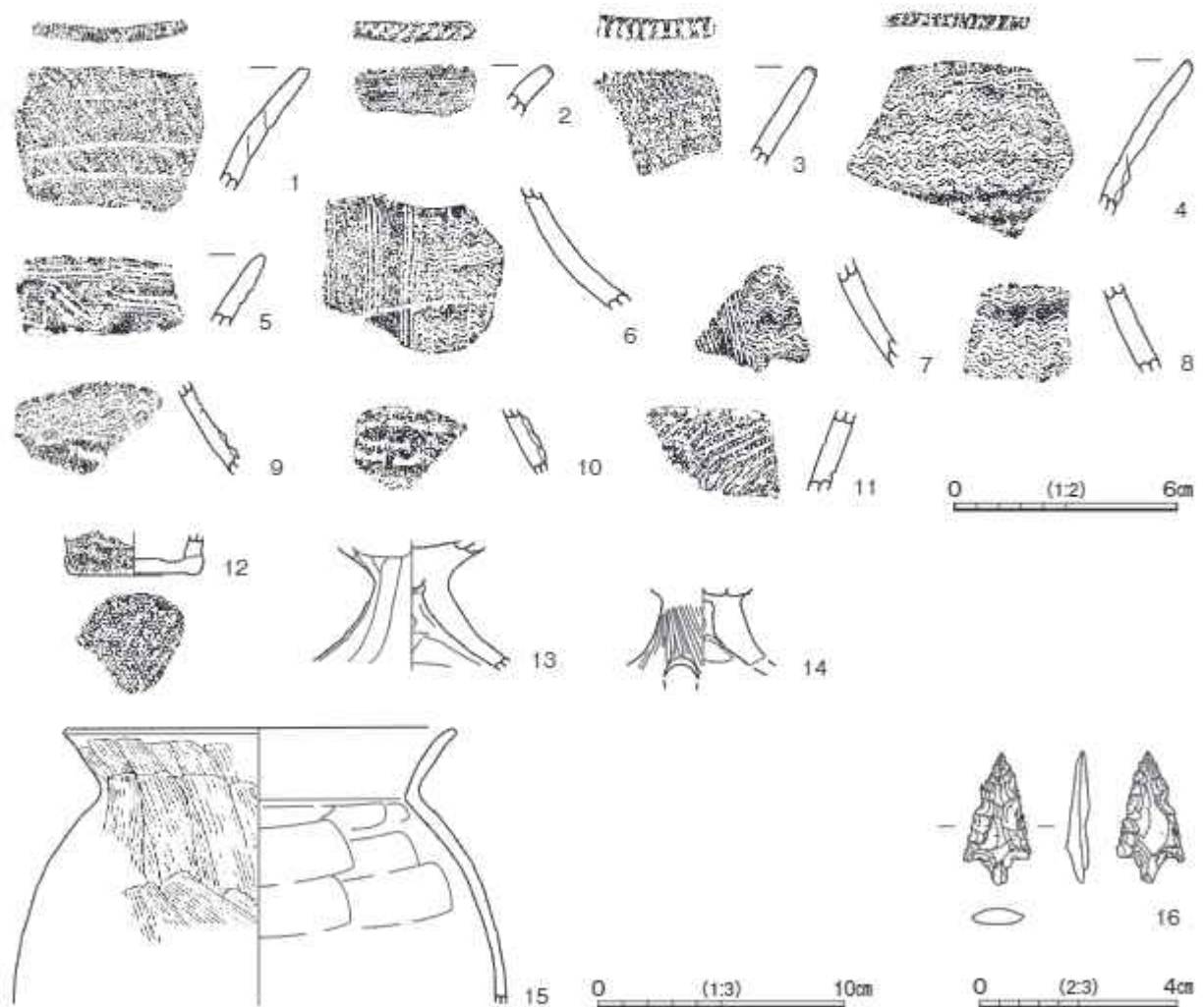
第13図 第3号竪穴建物跡実測図

P 7は深さ20cmで、いずれも性格は不明である。第1・4・5・6層は柱抜き取り後の流入土、第2層は柱痕跡、第3層は柱掘方埋土である。

覆土 18層に分層できる。第1～13層は周囲からの流入を示す堆積状況から、また、第14～18層はロームブロックを主体とするが、壁などの崩落土と考えられることから、自然堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片198点（広口壺）、石器4点（頁岩製石鎌1、石英製剥片3）が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、土師器片149点、焼成粘土塊4点、金属製品・銭貨2点が出土している。弥生土器は、床面から覆土下層にかけて散在して出土している。1・5は南東部、6は南壁際中央寄り、12は西壁際中央付近の覆土下層から、それぞれ出土している。13は中央部覆土中層から、14は北西寄りの覆土下層から、15は南東部の覆土下層と覆土中層から出土した破片が接合している。16は南西コーナー部の覆土中層から出土している。焼成粘土塊は覆土上層からの出土である。また、古墳時代前期の遺物が、中央部から南部にかけての覆土下層から多く出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



第14図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図

第5表 第3号竪穴建物跡出土遺物一覧(第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺		(33)		長石・石英・雲母・黒色粒子・白色粒子	黒	普通	新り返し口縁、口唇部剥文(彫体押)、口縁端部まで附加条一種附射加2条剥文施文	覆土下層	5% PL24
2	弥生土器	広口壺		(15)		長石・石英・砂礫・白色粒子	黒濁	普通	口唇部LR剥文施文	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺		(27)		長石・石英・白色粒子	橙	普通	口唇部へつ状工具による刻部、口縁部外面に附加条一種附加2条剥文施文、器部竹管状工具による剥文	覆土	5% PL24
4	弥生土器	広口壺		(41)		長石・石英・黒色粒子	にぶい黒	普通	口唇部へつ状工具による刻部、口縁部陶面状工具(4本掘面)による波状文、器部粘土紐り付けによる器部2条	覆土	5% PL24 上層台式
5	弥生土器	広口壺		(19)		長石・石英・赤色粒子	にぶい黒	普通	口縁部陶面状工具(3本掘面)による上位横位の直線文、中位以上波状文	覆土下層	5% PL24
6	弥生土器	広口壺		(30)		長石・石英・白色粒子	黒	普通	器部陶面状工具(4本掘面)による縦区画(スリット)施文後横位の波状文	覆土下層	5% PL24
7	弥生土器	広口壺		(28)		長石・石英・白色粒子	にぶい黄黒	普通	器部陶面状工具(5本掘面)による縦区画(スリット)施文後横位の波状文	覆土	5% 外面彫付者
8	弥生土器	広口壺		(23)		長石・石英・白色粒子	にぶい黒	普通	器部陶面状工具(5本掘面)による横位の波状文	覆土	5%
9	弥生土器	広口壺		(25)		長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黒	普通	器部粘土紐により2条の隆帯張り付け後陶面状工具(4本掘面)による横位の波状文	覆土	5%
10	弥生土器	広口壺		(18)		長石・石英・白色粒子	暗黒	普通	器部粘土紐により3条の隆帯張り付け後陶面状工具による横位の波状文	覆土	5%
11	弥生土器	広口壺		(21)		長石・石英・白色粒子	黒濁	普通	附加条一種附加2条剥文施文後竹管状工具による2段の刺突列	覆土	5%
12	弥生土器	広口壺		(16)	154	長石・石英・白色粒子	にぶい黄黒	普通	底部布目痕	覆土下層	5%
13	土師器	高杯		(52)		長石・石英・黒色粒子	明赤黒	普通	器部外面へつナデ 内面へつナデ	覆土中層	30%
14	土師器	高杯		(35)		長石・石英・黒色粒子	にぶい黄黒	普通	器部外面密なへつミガキ 内面へつナデ	覆土下層	20%
15	土師器	甕	115.6	(11.1)		長石・石英・黒色粒子	橙	普通	外面ハケ目 内面へつナデ	覆土中層 覆土下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
16	石鏃	27	1.4	0.4	0.9g	頁岩	右茎跡 器部縁 末端部逆刺し、両面押口割痕	覆土中層	PL24

第4号竪穴建物跡(第15・16図 第6表 PL24)

位置 調査区西部のI1513区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号竪穴建物、第51号土坑、第3・6号墳に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、長軸4.18m、短軸4.28mである。本来は長軸約5.50mの隅丸長方形で、主軸方向はN-71°-Wと推定できる。壁は高さ28~50cmで、ほぼ直立している。

床 はほぼ平坦で、壁寄りが低くなっている。壁際を除いて硬化している。東部中央壁寄りから長径125cm、短径50cmの楕円形で、深さ15cmの掘り込みが確認された。底面は平坦で、壁は外傾している。配置から出入口施設に伴うものと考えられる。

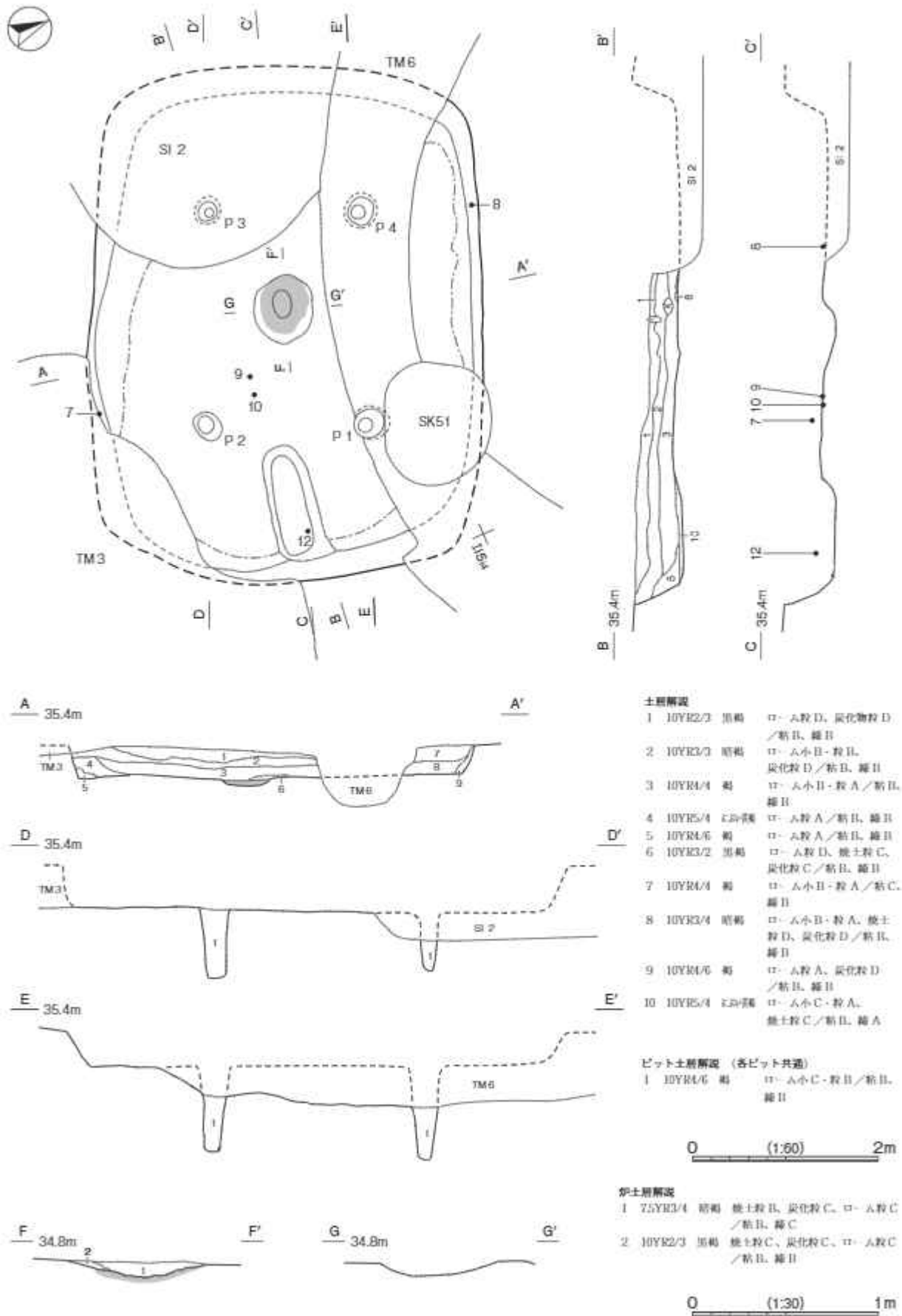
炉 中央部やや西寄りに位置している。長径73cm、短径62cmの楕円形で、深さは8cmの地床炉である。断面は、皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。

ピット 4か所。P1~P4は深さ28~73cmで、配置と規模から主柱穴と考えられる。覆土の堆積状況から、柱はいずれも抜き取られている。

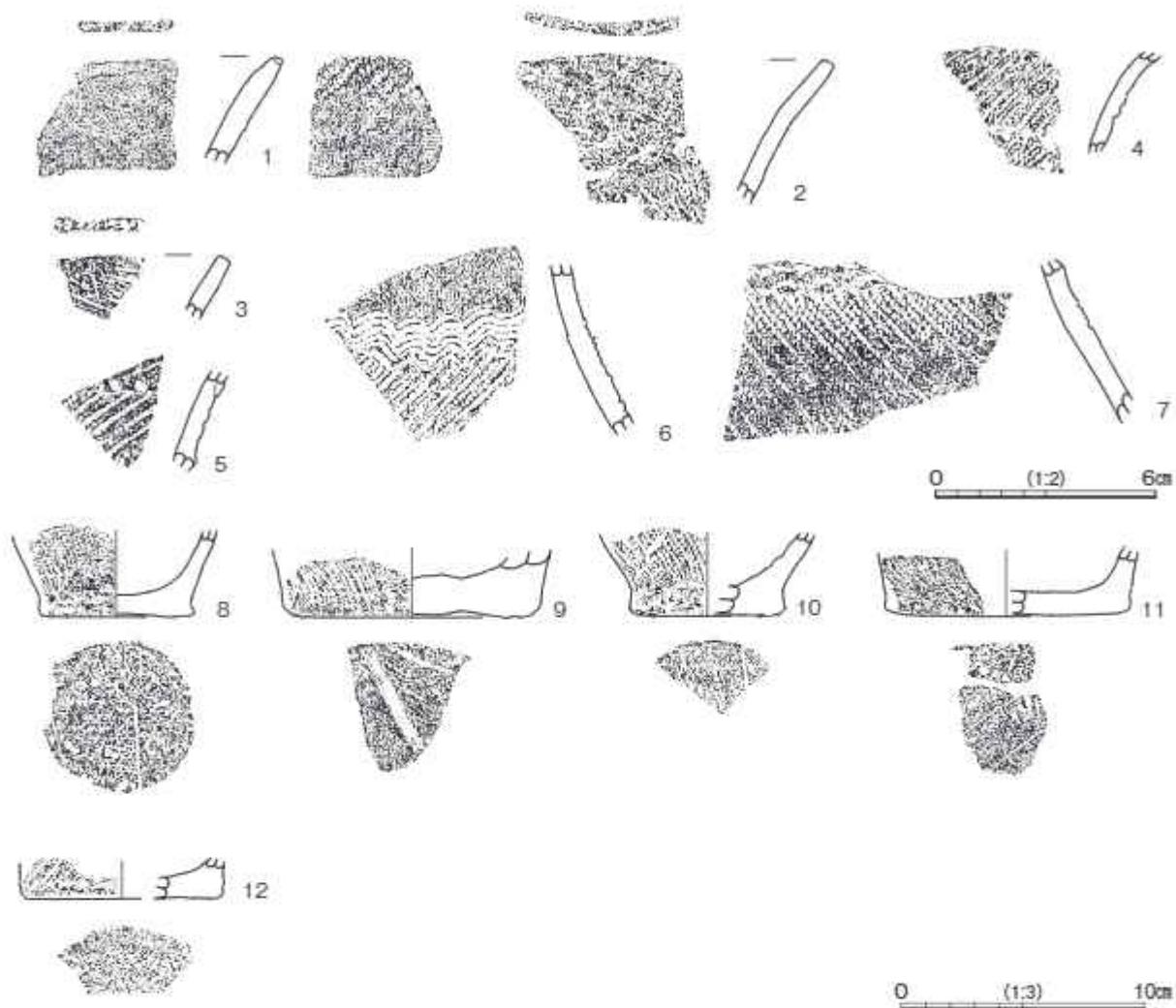
覆土 10層に分層できる。第1層はロームブロックを含まず、土質が均質であることから、自然堆積である。第2~10層は、ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片114点(広口壺)、石器1点(石英製剥片)が出土している。ほかに混入した土師器片3点、須恵器片1点、焼成粘土塊1点が出土している。7は南壁際中央部の覆土下層から、8は北壁際の床面から、9・10は中央部の床面から、12は東壁際中央部の床面からそれぞれ出土している。また、石英製剥片1点は、覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



第15図 第4号竪穴建物跡実測図



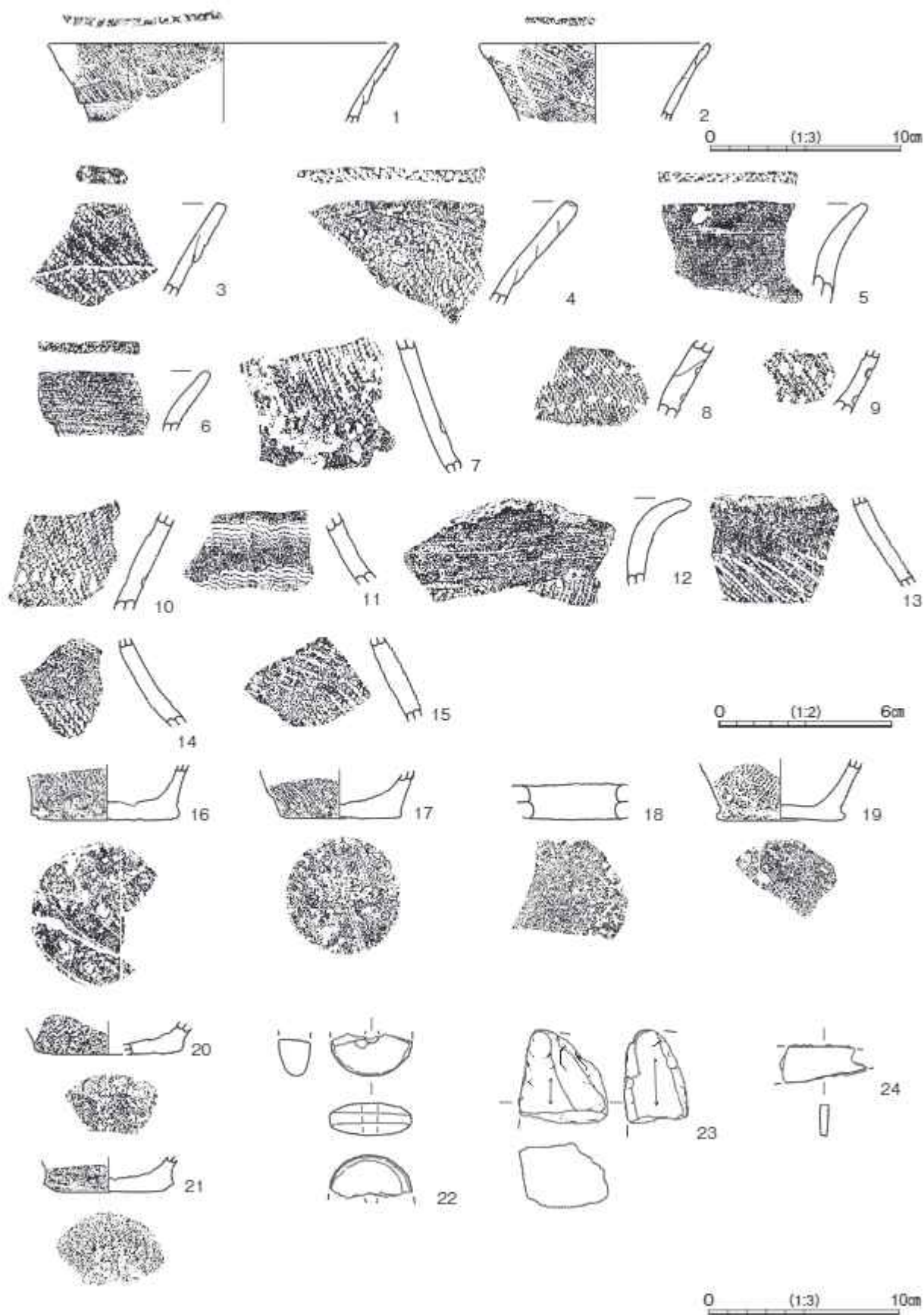
第16図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図

第6表 第4号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第16図)

番号	種類	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	葉生土器	式I18a		(29)		長石・石英・雲母・黒色粒子	暗褐色	普通	口縁部・I18a部内面上半にかけて輪郭不明の附加条織文施文	覆土	5% PL24
2	葉生土器	式I18a		(39)		長石・石英・雲母・黒色粒子	褐色	普通	胴部下半附加条一種附加2条織文施文	覆土	5%
3	葉生土器	式I18a		(18)		長石・石英・雲母・白色粒子	赤褐色	普通	口唇部帯糸文押捺 口縁部帯糸文施文	覆土	5%
4	葉生土器	式I18a		(29)		長石・石英・雲母・黒色粒子	黒褐色	普通	口縁部・頸部にかけて附加条一種附加2条織文施文後頸部上端に刺突刻	覆土	5%
5	葉生土器	式I18a		(28)		長石・石英・雲母・白色粒子	灰褐色	普通	複合I18a 頸部に附加条一種附加2条織文施文後口縁部端部に織文原体の押印	覆土	5% 外面保存者
6	葉生土器	式I18a		(47)		長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐色	普通	胴部に附加条一種附加2条織文施文後頸部に縄状土具(6本輪溝)による波状文	覆土	5% PL24
7	葉生土器	式I18a		(45)		長石・石英・針状物質	暗褐色	普通	附加条一種附加2条織文施文後頸部に横位の結部回転文施文	覆土下層	5% 外面保存者
8	葉生土器	式I18a		(36)	6.4	長石・石英・細砂・黒色粒子	にぶい赤褐色	普通	胴部下半に附加条一種附加2条織文施文 底部木炭痕 種子圧痕	床面	5%
9	葉生土器	式I18a		(28)	110.6	長石・石英・細砂・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	胴部下半に附加条一種附加2条織文施文 底部木炭痕 種子圧痕	床面	5%
10	葉生土器	式I18a		(34)	16.3	長石・石英・黒色粒子	にぶい赤褐色	普通	胴部下半附加条一種附加2条織文施文 底部木炭痕 種子圧痕	床面	5%
11	葉生土器	式I18a		(23)	110.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	胴部附加条織文施文 底部木炭痕 種子圧痕	覆土	5%
12	葉生土器	式I18a		(17)	18.2	長石・石英・黒色粒子	にぶい褐色	普通	胴部附加条一種附加2条織文施文 底部種子圧痕	床面	5%

第10号竪穴建物跡 (第17・18図 第7表 PL 4・24)

位置 調査区北部のI I 6a1区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。



第18图 第10号竖穴建物跡出土遺物実測図

重複関係 第9号竪穴建物、第13・25・33・48～50号土坑、第7・13号溝、第3号不明遺構に掘り込まれている。

規模と形状 東部は調査区域外で、北西コーナー部付近がほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は南北軸8.36m、東西軸4.18mである。本来は東西軸約6.00mの隅丸長方形と推定できる。主軸方向はN-8°-Wである。壁は高さ17～30cmで、外傾している。

床 ほほ平坦で、北部と壁際を除いて硬化している。P4と南壁際の間には、幅245m、高さ5cmほどの地山を掘り残した段を設けている。床面は、北側と壁際寄りを除き硬化している。

炉 中央部に位置している。長径87cm、短径85cmの円形で、深さ12cmの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 6か所。P1～P3は深さ75～87cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。形状から柱に五平材が用いられていた可能性がある。P4は深さ53cmで、中央方向に向かって斜めに掘り込まれていることと、P5は深さ12cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ33cmで、性格は不明である。覆土の堆積状況から、柱はいずれも抜き取られている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片387点（広口壺）、土製品1点（紡錘車）、石器3点（石英製石核、石英製剥片、砂岩製砥石）、金属製品1点（不明）が出土している。ほかに混入した縄文土器片10点、土師器片14点、陶器片1点、焼成粘土塊1点が出土している。1・4・8・11・15は南壁際中央寄りの床面から、7は覆土中層から、17は南部覆土下層から、それぞれ出土している。16は中央部西寄りの床面と覆土下層出土の破片が接合している。19は西壁際中央、20は南東部、21は中央部の覆土中層から、それぞれ出土している。また、石英製の石核1点、剥片1点は、覆土下層から出土している。P4・5付近の7を除いた土器は、床面から出土していることから、建物廃絶時に廃棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。

第7表 第10号竪穴建物跡出土遺物一覧（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	[184]	(4.1)		長石・石英・白色粒子	暗褐色	普通	複合口縁・口唇部に縄文原形押控二段の接合面 附加条一種附加2条縄文施文・口縁部端部に縄 歯状工具（縄歯5条）による波状文	床面	5% PL24
2	弥生土器	広口壺	[120]	(4.1)		長石・石英・ 雲母・白色粒子	暗褐色	普通	口唇・口縁部にかけて附加条一種附加2条縄文 施文	覆土	5% PL24
3	弥生土器	広口壺		(3.2)		長石・石英・ 白色粒子	にぶい赤褐色	普通	複合口縁・口唇部から口縁部に附加条一種附加 2条縄文施文	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺		(3.6)		長石・石英・ 白色粒子	黒褐色	普通	口唇部・口縁部に附加条第1種附加2条縄文施 文後口縁部上半部	床面	5% PL24
5	弥生土器	広口壺		(3.5)		長石・石英・ 雲母・白色粒子	にぶい黄褐色	普通	口唇部に附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5% PL24
6	弥生土器	広口壺		(2.1)		長石・石英・ 雲母・白色粒子	黒褐色	普通	口唇部に附加条縄文施文	覆土	5%
7	弥生土器	広口壺		(4.6)		長石・石英・ 雲母・白色粒子	橙	普通	胴部下端に刺突列 胴部附加条一種附加2条縄 文施文	覆土中層	5%
8	弥生土器	広口壺		(2.7)		長石・石英・ 白色粒子	橙	普通	2段の刺突列 附加条一種附加2条縄文施文	床面	5% PL24
9	弥生土器	広口壺		(2.2)		長石・石英・ 細礫・黒色粒子	明赤褐色	普通	2段の刺突列 附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
10	弥生土器	広口壺		(3.5)		長石・石英・ 細礫・黒色粒子	暗褐色	普通	胴部に附加条一種附加2条縄文施文後 細い棒 状工具による刺突列	覆土	5%
11	弥生土器	広口壺		(2.5)		長石・石英・ 雲母・赤色粒子	暗褐色	普通	胴部に縄歯状工具（5本縄歯）による2段の押 し引き波状文	床面	5%
12	弥生土器	広口壺		(3.0)		長石・石英・ 赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口唇部に縄文施文。 胴部に附加条一種附加2 条縄文施文	覆土	5%
13	弥生土器	広口壺		(3.1)		長石・石英・ 白色粒子	暗褐色	普通	RL 縄文施文	覆土	5%
14	弥生土器	広口壺		(3.1)		長石・石英・ 白色粒子	黒褐色	普通	附加条一種附加1条施文	覆土	5%
15	弥生土器	広口壺		(3.0)		長石・石英・ 赤色粒子	暗褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文	床面	5%
16	弥生土器	広口壺		(2.9)	7.8	長石・石英・ 白色粒子	にぶい褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文 胴部下平指 ナブ 底部木炭痕・種子付痕	床面 覆土下層	5%
17	弥生土器	広口壺		(2.5)	6.3	長石・石英・ 白色粒子	灰青褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文 底部木炭痕	覆土下層	5%
18	弥生土器	広口壺		(1.9)		長石・石英・ 白色粒子	にぶい褐色	普通	底部木炭痕	覆土	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
19	甕生土器	広口甕		(32)	166	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	胴部附加条一種附加2条脚支施文 胴部下端折ナツ 底部外面木炭痕 種子圧痕	覆土中層	5%
20	甕生土器	広口甕		(17)	178	長石・石英・白色粒子	橙	普通	胴部下手附加条一種附加2条脚支施文 底部木炭痕 種子圧痕	覆土中層	5%
21	甕生土器	広口甕		(18)	166	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	底部外面ナツ 種子圧痕	覆土中層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
22	紡錘車	4.4	(1.7)	(0.7)	(145)	長石・石英・雲母	明赤褐色	平面円盤状 断面中央部肥厚 全面ナツ	覆土	

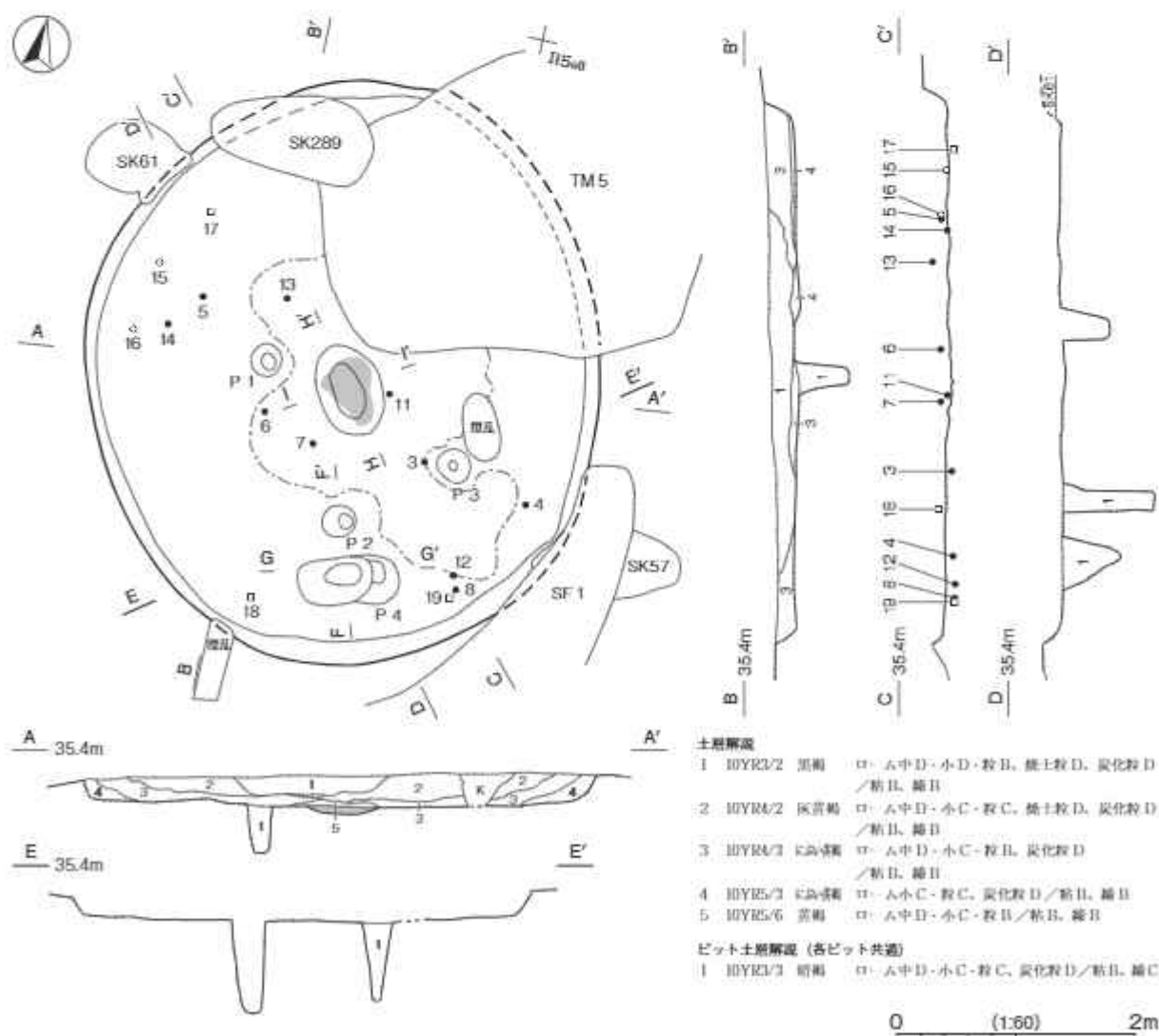
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
23	砥石	(49)	(4.6)	(3.4)	(721)	砂岩	砥面2面	覆土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
24	不明鉄製品	(4.4)	(1.9)	(0.4)	(871)	鉄	断面長方形 刀子。	覆土	

第11号竪穴建物跡 (第19・20図 第8表 PLA・24)

位置 調査区北西部のI15e7区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

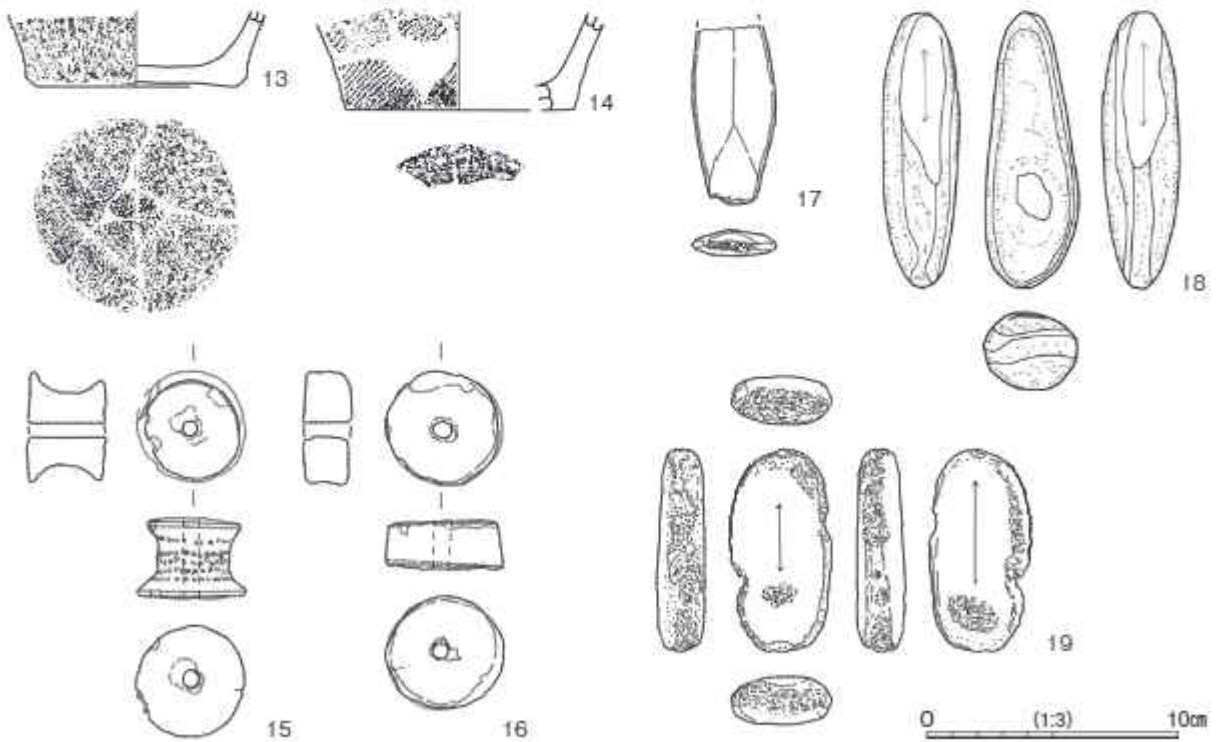
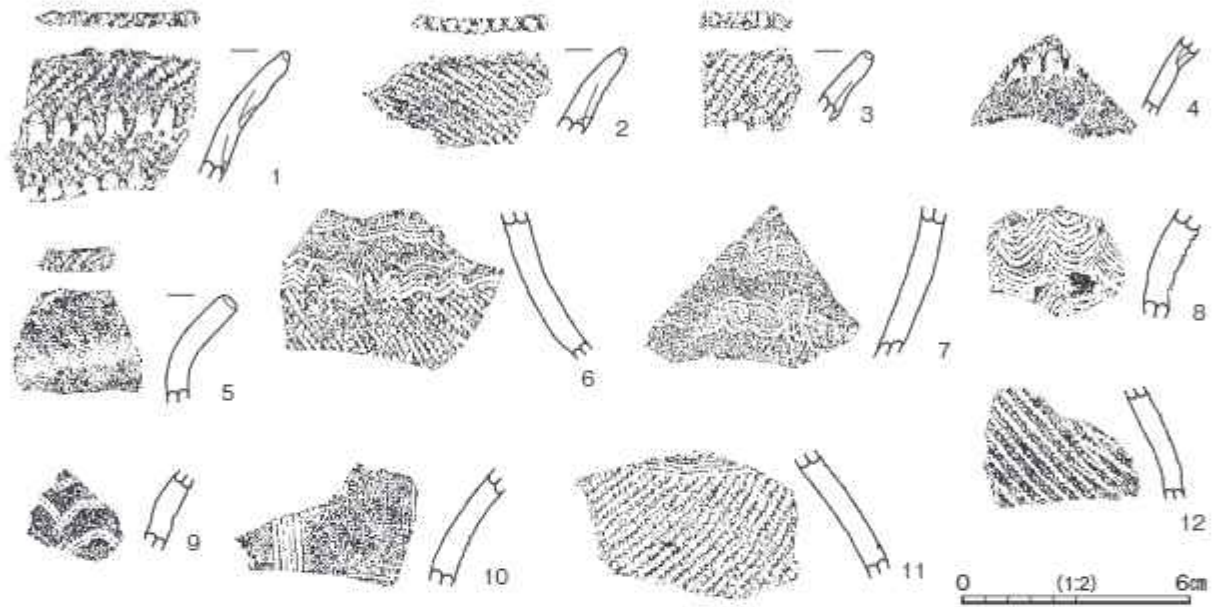
重複関係 第57・61・289号土坑、第1号道路、第5号墳に掘り込まれている。



第19図 第11号竪穴建物跡実測図



伊土原簡説
 1 75YR2/3 編明細 中-入小D-粉C、能十中D-小C-
 粉比、炭化粉D/粘土、粉C



第20图 第11号竖穴建物跡・出土遺物実測图

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、南北軸 4.28 m、東西軸 3.60 m である。平面形は隅丸方形で、主軸方向は N-47°-W である。壁は高さ 16~28cm で、外傾している。

床 凹凸があり、若干西壁際寄りが緩やかに高くなっている。中央部から南壁際中央付近まで硬化している。

炉 中央部に位置している。長径 79cm、短径 52cm の楕円形で、深さ 4cm の地床炉である。断面は皿状を呈しており、か床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 4か所。P1~P3は深さ 38~76cm で、配置と規模から支柱穴と考えられる。P4は深さ 48cm で、その配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。覆土の堆積状況から、柱はいずれも抜き取られている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片 235 点（広口壺）、土製品 2 点（紡錘車）、石器 10 点（石英製剥片 7、緑色片岩製磨製石斧 1、砂岩砥石 1、硬砂岩製砥石兼敲石 1）が出土している。ほかに混入した縄文土器片 8 点、土師器片 17 点が出土している。3・4 は南東部、8・12・19 は南壁際中央、11 は中央部、14・15 は北西部、18 は南壁際の床面から、それぞれ出土している。5・16 は西壁際寄り、6・7 は中央部、13 は北部の覆土下層から、それぞれ出土している。17 は床面に突き刺さった状態で出土している。土器片は床面や覆土下層を中心に散在して出土している。多くの土器片は建物廃絶後に廃棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。

第 8 表 第 11 号竪穴建物跡出土遺物一覧（第 20 図）

番号	種別	器種	口径	器高	直径	胎土	色調	検査	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺		(35)		長石・石英・雲母・白色粒子	褐	普通	複合口縁 口唇部縄文原形押捺 口縁下層管状工具による串刺方向からの刺突列 口唇-口縁部 1 段目は LR 縄文施文 2 段目は RL 縄文施文	覆土	5% PL24
2	弥生土器	広口壺		(23)		長石・石英・白色粒子	橙	普通	口唇部に縄文原形押捺 口縁部に LR 縄文施文 口縁下層に縄文原形押捺（基部部押捺）	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺		(19)		長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐	普通	口唇部に縄文原形押捺 口縁部に LR 縄文施文 口縁下層を串刺方向から管状工具による刺突列列	床面	5%
4	弥生土器	広口壺		(21)		長石・石英・白色粒子	暗褐	普通	複合口縁 口縁上半欠損 口縁下層に管状工具による刺突列 頸部無文	床面	5%
5	弥生土器	広口壺		(29)		長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐	普通	口唇部に附加条一種附加 2 条縄文施文	覆土下層	5%
6	弥生土器	広口壺		(40)		長石・石英・雲母・白色粒子	暗褐	普通	胴部附加条一種附加 2 条縄文施文後頸部下層に縄状工具（5 本縄面）による波状文施文	覆土下層	5% PL24
7	弥生土器	広口壺		(40)		長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐	普通	頸部に縄状工具（6 本縄面）による波状文	覆土下層	5%
8	弥生土器	広口壺		(28)		長石・石英・雲母・白色粒子	暗褐	普通	頸部に縄状工具（5 本縄面）による波状文施文	床面	5%
9	弥生土器	広口壺		(22)		長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	管状工具による円弧状文を施文	覆土	5%
10	弥生土器	広口壺		(31)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい黄褐	普通	頸部に縄状工具（5 本縄面）による縦区画文 頸部下層管状工具による横走文	覆土	5%
11	弥生土器	広口壺		(33)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい褐	普通	胴部に LR 縄文施文後頸部に縄面条工具（4 本縄面）による横走区画文	床面	5%
12	弥生土器	広口壺		(31)		長石・石英・白色粒子	褐	普通	附加条一種附加 2 条縄文施文	床面	5% 外面煤付着
13	弥生土器	広口壺		(30)	88	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	胴部附加条一種附加 2 条縄文施文 底部木炭痕	覆土下層	5%
14	弥生土器	広口壺		(39)	[90]	長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	胴部 LR 縄文施文 底部布目痕	床面	5%

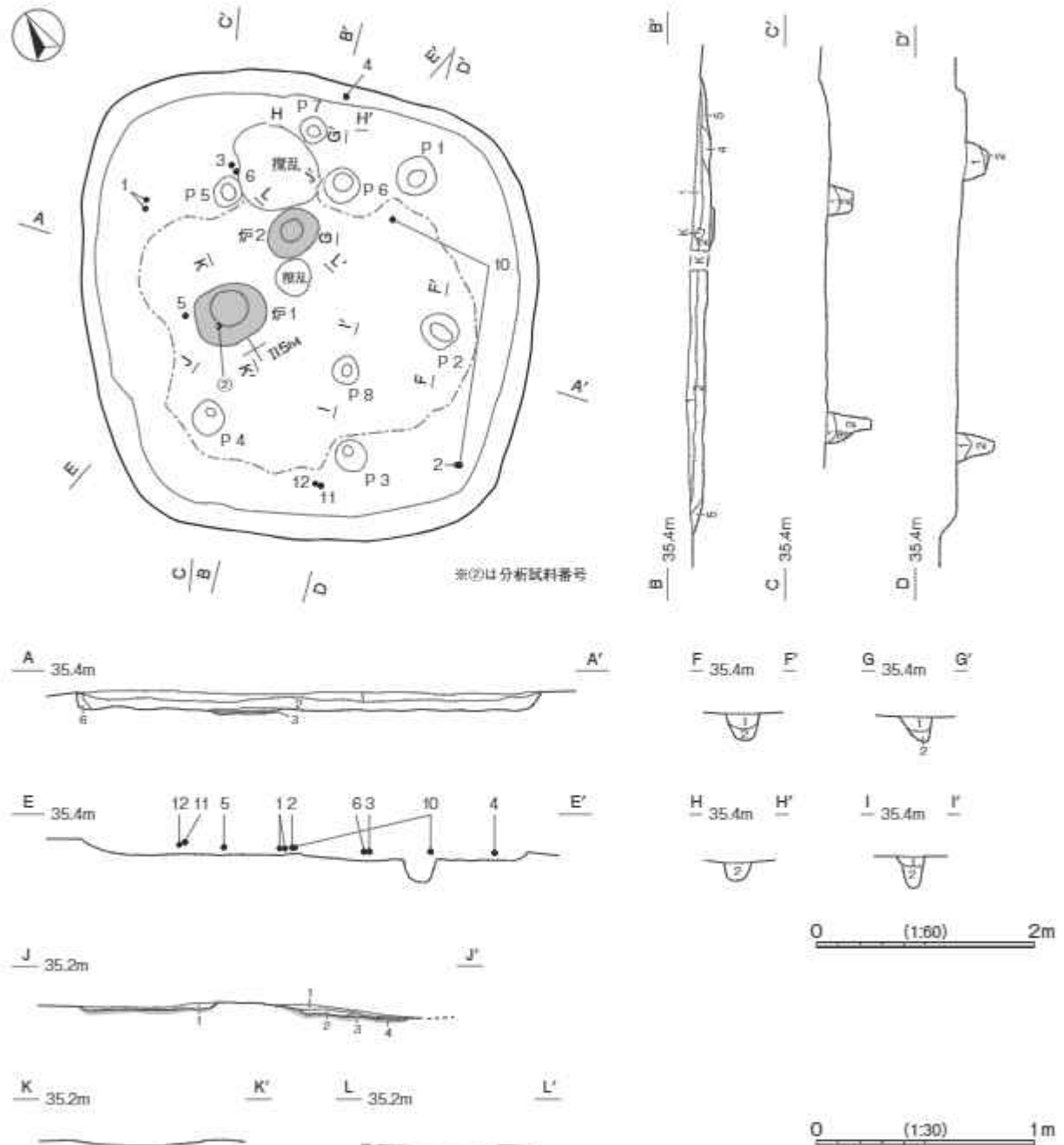
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
15	紡錘車	4.4	3.2	0.6	46.23	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	平面円盤状 断面縦形は平行に 5 段の刺突列	床面	PL24
16	紡錘車	4.65	1.95	0.7	46.16	長石・石英・雲母	灰黄褐	平面円盤状 断面台形 全面ナブ	覆土下層	PL24

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
17	磨製石斧	(7.1)	3.3	1.1	(37.5)	緑色片岩	先端部欠損 断面レンズ状 片面編様の研磨	床面	PL24
18	砥石	10.9	3.7	3.05	169.1	ホルンフェルス	砥面 2 面	床面	PL24
19	砥石兼敲石	8.0	4.0	1.9	86.8	砂岩	表裏面を砥面 無縁部敲打痕	床面	PL24

第12号竖穴建物跡 (第21・22図 第9表 PL 4・25)

位置 調査区西部のII 5g4区、標高35 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.22 m、短軸4.10 mの隅丸方形で、主軸方向はN-36°-Eである。壁は高さ10~16cmで、



- 土層解説**
- 1 10YR4/4 粘 〇-△小D-粒C、焼土小C-粒C、炭化粒D/粘B、粘B
 - 2 10YR4/6 粘 〇-△中D-小C-粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、粘B
 - 3 7.5YR2/3 極暗粘 〇-△小D-粒D、焼土中D-小B-粒B、炭化粒C/粘B、粘B
 - 4 7.5YR3/3 黒粘 〇-△小D-粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、粘A
 - 5 10YR4/3 粘 〇-△小D-粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、粘B
 - 6 10YR5/6 黄粘 〇-△小D-粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、粘B

- ピット土層解説**
- 1 10YR4/6 粘 〇-△小C-粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、粘B
 - 2 10YR3/3 粘 〇-△小C-粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、粘B
 - 3 10YR6/3 上黄粘 〇-△小B-粒A/粘B、粘B

- 炉1土層解説**
- 1 5YR3/3 暗赤粘 〇-△粒C、焼土中D-小D-粒B、炭化粒B/粘B、粘C

- 炉2土層解説**
- 1 10YR4/6 粘 〇-△小D-粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、粘B
 - 2 10YR4/4 粘 〇-△小D-粒C、粒C、焼土粒B-炭化粒D/粘B、粘C
 - 3 7.5YR2/3 極暗粘 〇-△小D-粒C、焼土中D-小D-粒B、炭化粒D/粘B、粘A
 - 4 10YR4/6 粘 〇-△小D-粒C、焼土小C-粒B、炭化粒D/粘B、粘B

第21図 第12号竖穴建物跡実測図

外傾している。

床 平坦で、壁際を除いて硬化している。

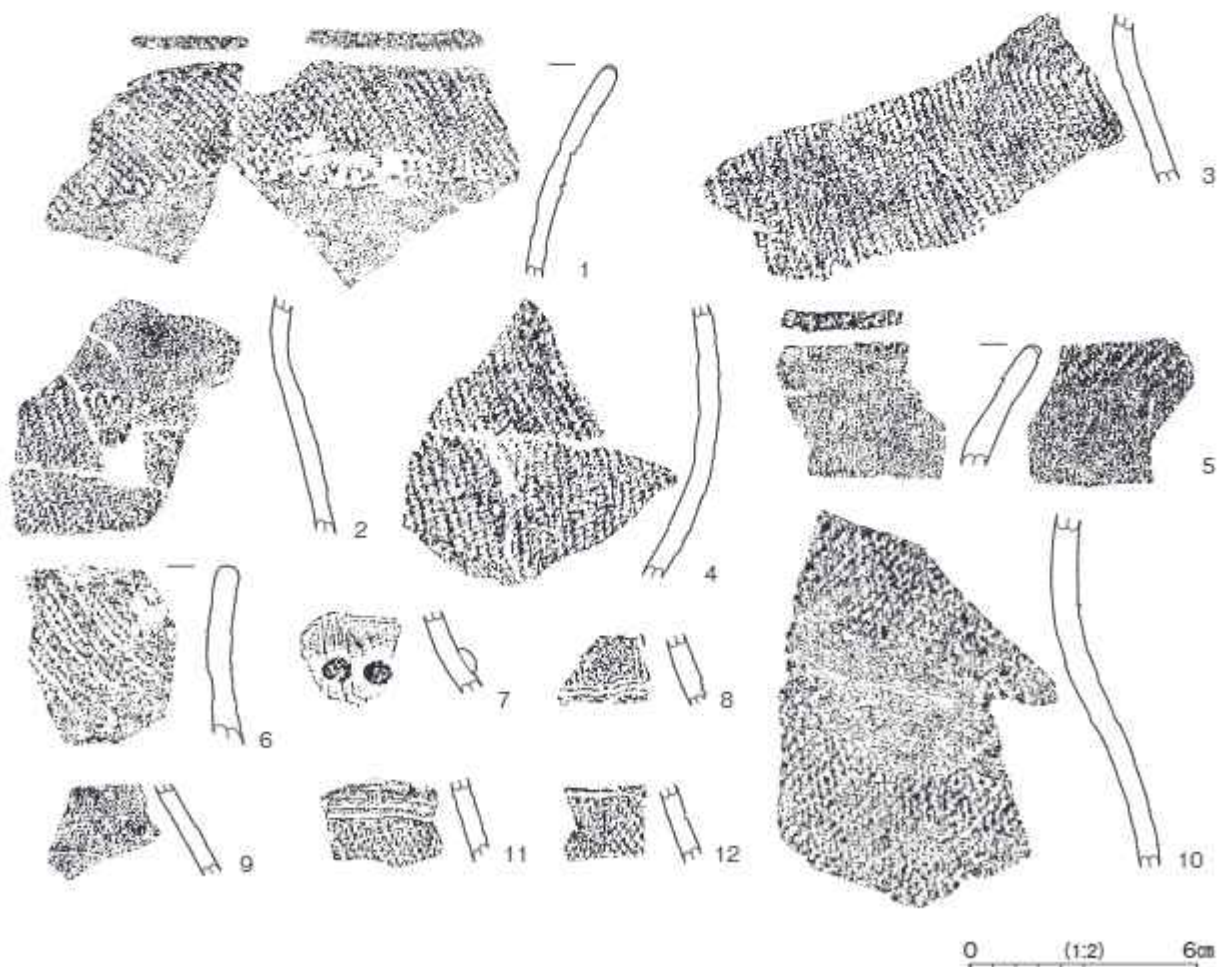
炉 2か所。か1は中央部西寄りに位置している。長径62cm、短径53cmの楕円形で、深さ3cmほどの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は僅かに赤変硬化している。か2は、中央部やや北寄りに位置している。長径49cm、短径38cmの楕円形で、深さ3cmの地床かである。か床は皿状に掘り込まれ、か床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 8か所。P1～P5は深さ22～47cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。P6～P8は深さ17～25cmで補助支柱穴と考えられる。覆土の堆積状況から、柱はいずれも抜き取られている。

覆土 6層に分層できる。第1・2層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。第3層はか周辺にのみ確認できた。第4～6層はローム層由来の壁などの崩落土と考えられ、自然堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片133点（広口壺）、土製品3点（土玉）、石器3点（石英製剥片）が出土している。ほかに混入した土師器片10点（甕）が出土している。1は北西部の覆土下層から散在して出土した破片が接合していることから、埋め戻しの際に廃棄されたものである。2・11は南部、3・6は北部、5は西部、10は南部と中央部の覆土下層から、4は北東壁際、12は南部の覆土中層から、それぞれ出土している。か1の火床面からは、微量の炭化物が出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。か1から出土した炭化材は、樹種同定の結果、クリであった。また、放射性炭素年代測定の結果、校正歴年代は2世紀後半から4世紀前半であった（付章参照）。



第22図 第12号竪穴建物跡出土遺物実測図

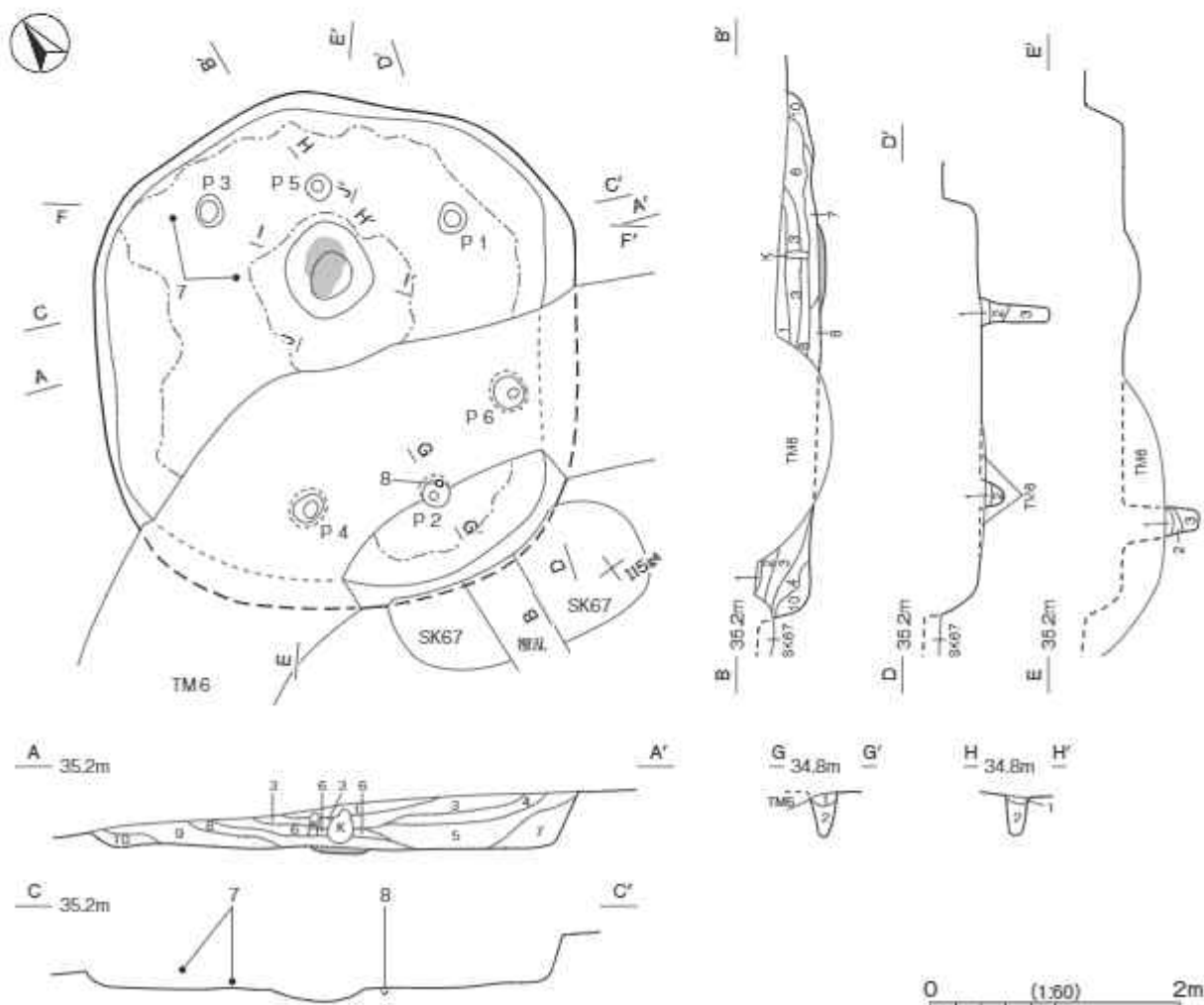
第9表 第12号竪穴建物跡出土遺物一覧(第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	養生土器	広口甕		(5.5)		長石・石英・白色粒子	黒褐	普通	口唇部から口縁部にかけて単節段・縄文施文	覆土下層	5% PL25
2	養生土器	広口甕		(6.3)		長石・石英・白色粒子	黒褐	普通	頸部無文 胴部単節段・縄文施文	覆土下層	5% PL25
3	養生土器	広口甕		(4.4)		長石・石英・白色粒子	黒褐	普通	頸部無文 胴部単節段・縄文施文	覆土下層	5%
4	養生土器	広口甕		(7.1)		長石・石英・白色粒子	にぶい赤褐	普通	単節の段・縄文施文	覆土中層	5%
5	養生土器	広口甕		(3.2)		長石・石英・白色粒子	黒褐	普通	口唇部から口縁部内面にかけて輪郭不明の附加条縄文施文 口縁部外面は無文	覆土下層	5%
6	養生土器	広口甕		(4.7)		長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部一帯まで附加状一種附加2条縄文施文。頸部は無文	覆土下層	5%
7	養生土器	広口甕		(4.7)		長石・石英・雲母	橙	普通	頸部無文帯に3本単位の波線を縦位に区画 その間を横位に2段以上区画し、内形浮文を2個以上並付け	覆土	5% PL25
8	養生土器	広口甕		(1.95)		長石・石英・雲母	黒褐	普通	頸部無文帯に3本単位の縦位区画 3本単位の横位波状で区画	覆土	5%
9	養生土器	広口甕		(2.4)		長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	頸部無文帯に細い内環文を施文	覆土	5%
10	養生土器	広口甕		(9.2)		長石・石英	にぶい橙	普通	附加条一種附加1条縄文施文後 頸部と胴部の境をナツ割し	覆土下層	5%
11	養生土器	広口甕		(2.2)		長石・石英	明赤褐	普通	頸部無文帯下端に3本単位の横位波線状で区画し、その後3本単位の縦位区画	覆土下層	5%
12	養生土器	広口甕		(2.1)		長石・石英・雲母	明褐	普通	頸部一帯部片 頸部無文 頸部と胴部の境に2本単位以上施文具による横位区画	覆土中層	5%

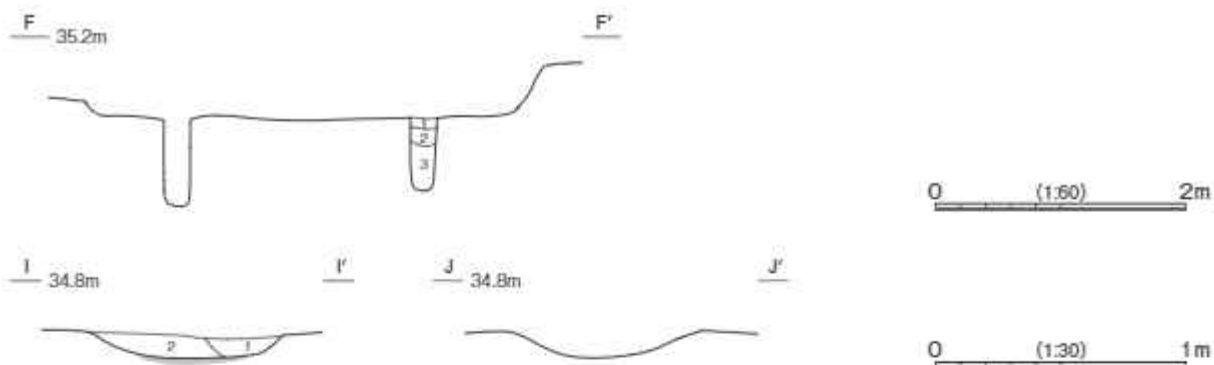
第13号竪穴建物跡(第23・24図 第10表 PL25)

位置 調査区西部のI I 5 B区、標高35mほどの台地縁辺部の緩傾斜面に位置している。

重複関係 第67号土坑、第6号墳に掘り込まれている。



第23図 第13号竪穴建物跡実測図



土層解説

- | | | |
|---|--------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色 | ロ-ム中D、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜B |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 | ロ-ム中D・小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜B |
| 3 | 10YR4/3 灰黄褐色 | ロ-ム中D・小C・粒B、炭化粒D/粘B、雜B |
| 4 | 10YR5/3 灰黄褐色 | ロ-ム小C・粒C、炭化粒D/粘B、雜B |
| 5 | 10YR5/6 黄褐色 | ロ-ム中D・小C・粒B/粘B、雜B |

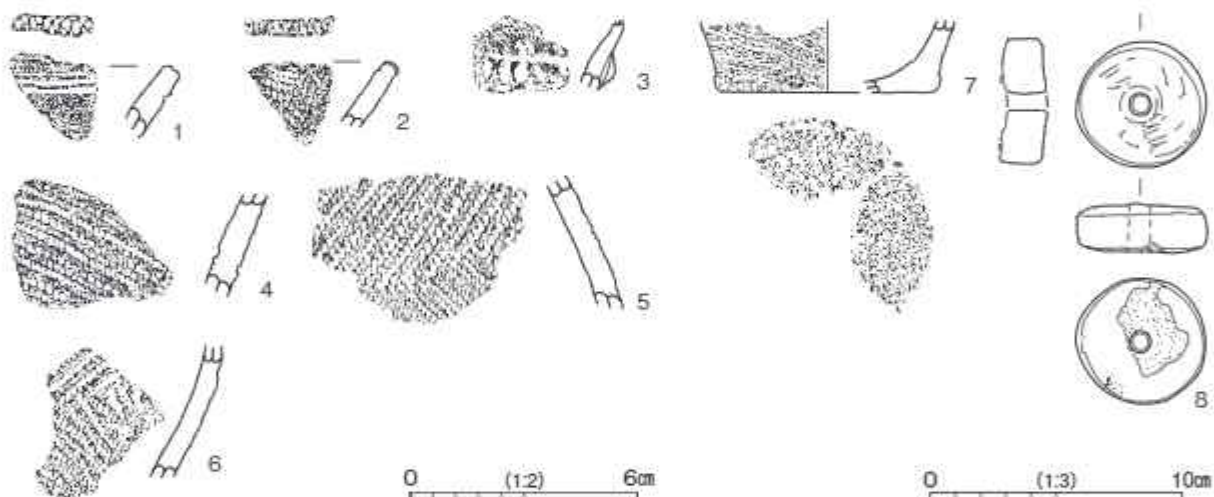
- | | | |
|----|--------------|-----------------------------|
| 6 | 10YR4/4 褐色 | ロ-ム中D・小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜B |
| 7 | 10YR4/6 褐色 | ロ-ム小C・粒B/粘B、雜B |
| 8 | 10YR3/3 暗褐色 | ロ-ム中D・小C・粒B、炭化粒D/粘B、雜B |
| 9 | 10YR5/4 灰黄褐色 | ロ-ム中C・小B・粒A、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜B |
| 10 | 10YR5/6 黄褐色 | ロ-ム中C・小B・粒B/粘B、雜B |

ピット土層解説 (各ピット共通)

- | | | |
|---|--------------|--------------------------|
| 1 | 10YR4/4 褐色 | ロ-ム小D・粒D、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜B |
| 2 | 10YR4/6 褐色 | ロ-ム小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜C |
| 3 | 10YR4/3 灰黄褐色 | ロ-ム中D・小C・粒A/粘B、雜C |

炉土層解説

- | | | |
|---|--------------|--------------------------------|
| 1 | Z5YR2/3 極暗褐色 | ロ-ム小D・粒C、焼土中D・小C・粒B、炭化粒D/粘B、雜C |
| 2 | Z5YR3/4 暗褐色 | ロ-ム小D・粒D、焼土中C・小C・粒B、炭化粒D/粘B、雜B |



第24図 第13号竪穴建物跡・出土遺物実測図

規模と形状 長軸4.12m、短軸3.88mの円形で、主軸方向はN-36°-Eである。壁は高さ11~40cmで、外傾している。

床 ほは平坦で、壁に向かって緩やかに高くなっている。炉周辺と壁際を除いて硬化している。

炉 中央部やや北寄りに位置している。長径68cm、短径56cmの楕円形で、深さ7cmの地床炉である。断面は皿状を呈しており、炉床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 6か所。P1~P3は深さ38~68cmで配置と規模から主柱穴と考えられる。P4は深さ60cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P5は深さ30cm、P6は深さ18cmで、いずれも性格は不明である。

覆土の堆積状況から、柱はいずれも抜き取られている。西部の床面も精査したが、柱穴は確認出来なかった。

覆土 10層に分層できる。第1層はロームブロックを含んでいないことから、自然堆積である。第3~9層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。第10層は壁の崩落土である。

遺物出土状況 弥生土器片78点(広口壺)、土製品1点(紡錘車)が出土している。ほかに混入した土師器片10点、焼成粘土塊1点が出土している。土器片の大半は覆土下層を中心に出土している。7は北西部の覆土中層と覆土下層から出土した破片が接合したものである。8はP2東側の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。

第10表 第13号竪穴建物跡出土遺物一覧(第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(20)	-	長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	口唇部1反縄文施文 口縁部縄高状工具(3本縄高)逆風文施文	覆土	5%
2	弥生土器	広口壺	-	(18)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部に附加条縄文施文。口縁部1反施文	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺	-	(19)	-	長石・石英	褐	普通	口縁部附加条一種附加2条縄文施文。下端に陶帯を貼り付け後丸棒状工具により刺突列	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺	-	(34)	-	長石・石英	灰黄褐	普通	附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
5	弥生土器	広口壺	-	(36)	-	長石・石英	橙	普通	附加条一種附加2条縄文を羽状に施文	覆土	5%
6	弥生土器	広口壺	-	(35)	-	長石・石英	暗褐	普通	附加条一種附加2条縄文を羽状に施文	覆土	5%
7	弥生土器	広口壺	-	(28)	84	長石・石英・雲母	橙	普通	石英を大量に含む胎土。附加条一種縄文施文 底部ナブ。種子瓦痕	覆土下層 覆土中層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
8	紡錘車	5.1	1.9	0.9	(57.7)	長石・石英	明赤褐	全面ナブ調整 一部割落	床面	PL25

第16号竪穴建物跡(第25・26図 第11表 PL5・25)

位置 調査区西部のII 5区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第14号竪穴建物、第71・72・284号土坑、第6号溝、第6号墳に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.36m、短軸5.88mの隅丸方形で、主軸方向はN-38°-Wである。壁は高さ18~22cmで、外傾している。

床 ほは平坦である。壁際に向かって緩やかに高くなっている。中央部と北西壁際中央が硬化している。

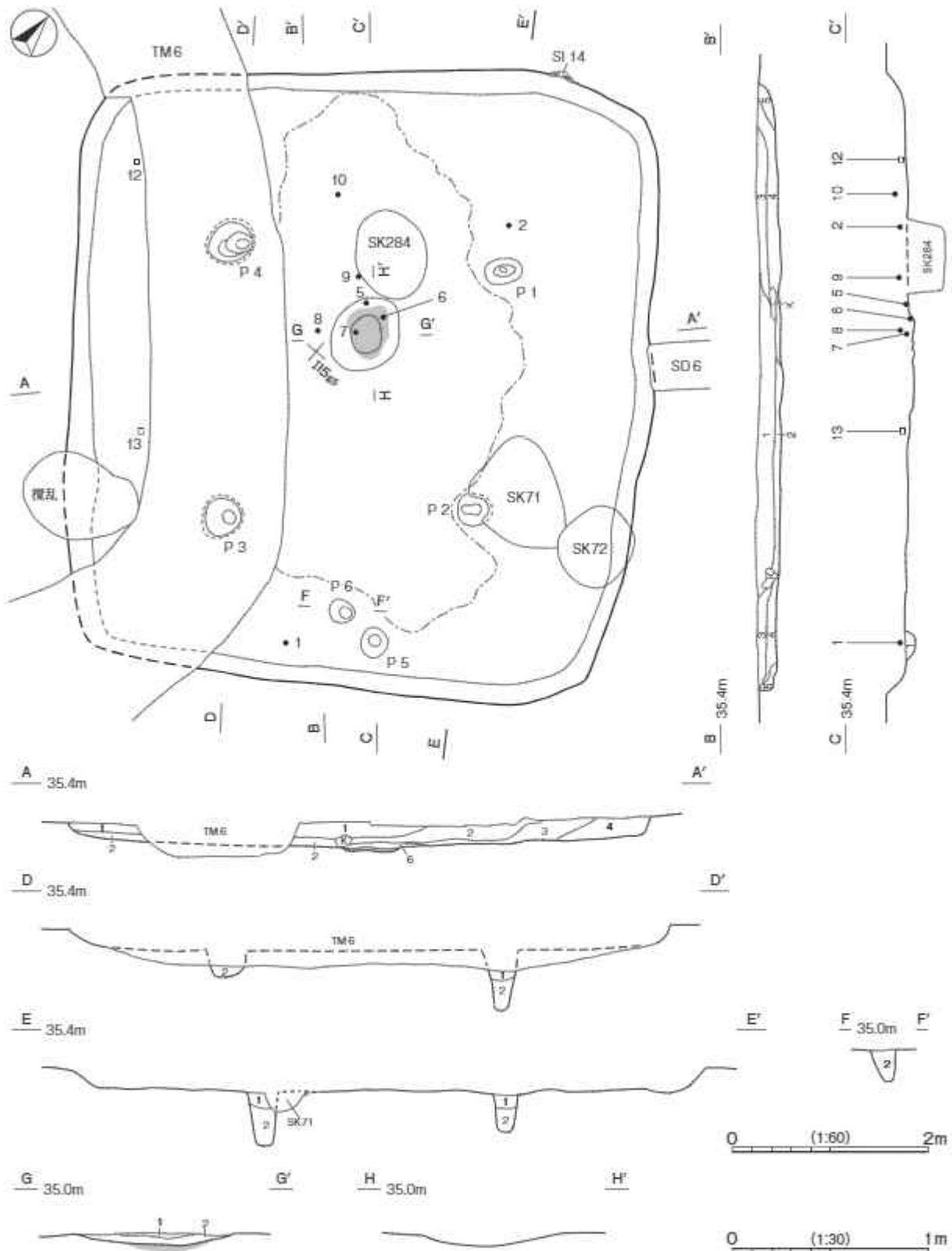
炉 中央部北寄りに位置している。長径75cm、短径70cmの楕円形で、深さ6cmほどの地床炉である。断面は皿状を呈しており、か床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 6か所。P1~P4は深さ38~55cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。P1・P2は形状から、柱に五平材が用いられた可能性がある。柱はいずれも抜き取られている。P5は深さ15cm、P6は深さ28cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層に分層できる。第1~5層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。第6層はか周辺にのみ確認できた。

遺物出土状況 弥生土器片379点(広口壺)、石器4点(馬瑠製剥片1、石英製剥片1、流紋岩製敲石1、砂岩製砥石1)が出土している。ほかに混入した土師器片27点が出土している。1は南壁際中央部の覆土下層から逆位の状態で出土している。2は北東部の覆土下層から、5・6はか底面から、7はか覆土上層から、8・9はか周辺の覆土下層から、12・13は西壁寄りの床面から、それぞれ出土している。また、馬瑠製剥片と石英製剥片は、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。

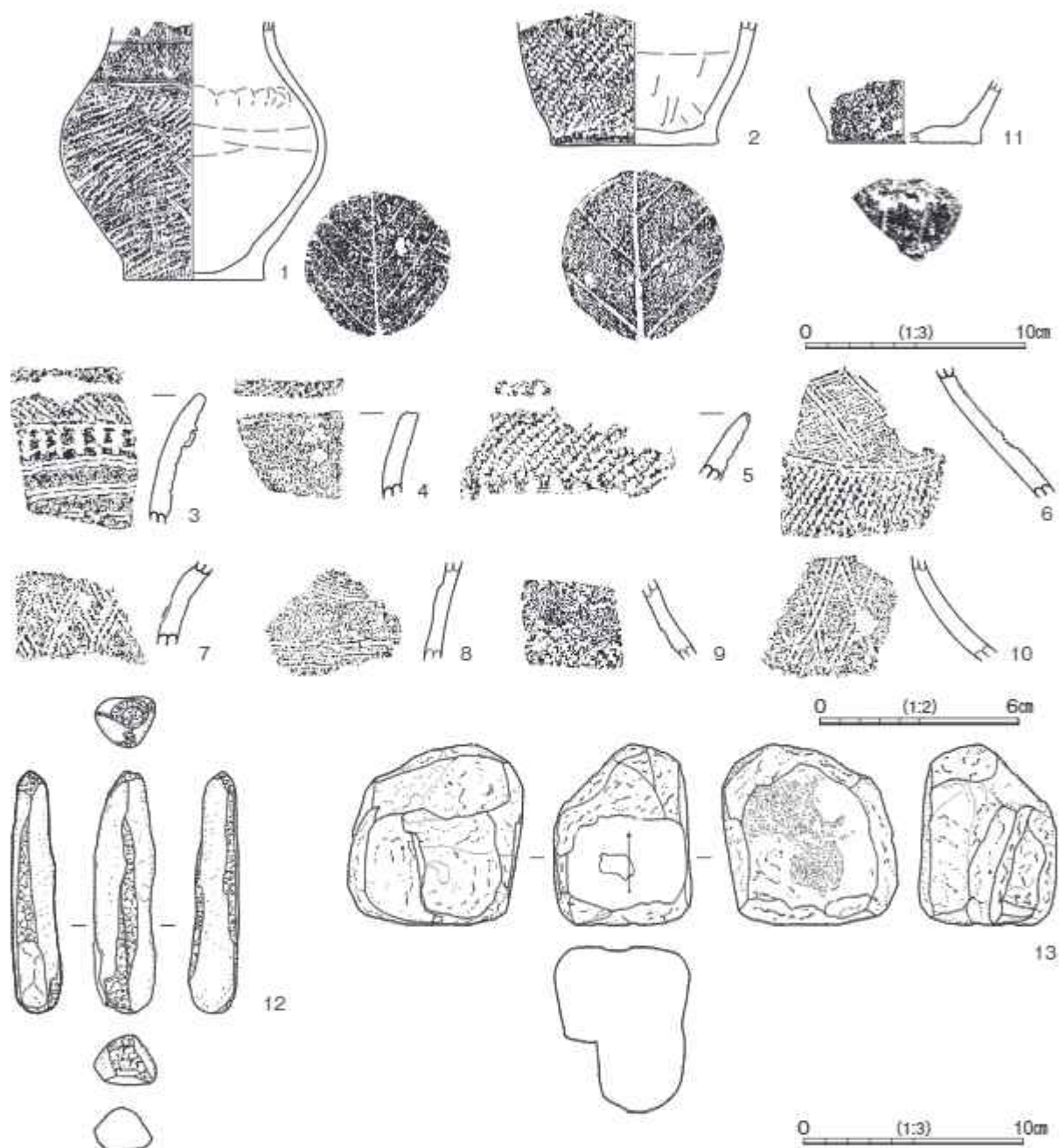


- 土層解説**
- 1 10YR5/3 灰赤土 〇-△中D・小C・粒C、焼土小D・粒D、炭化粒D/粘B、雑C
 - 2 10YR4/4 粘 〇-△中D・小D・粒C、焼土小D・粒C、炭化粒C/粘B、雑B
 - 3 10YR4/6 粘 〇-△中D・小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雑B
 - 4 10YR5/6 黄粘 〇-△中C・小B・粒B、炭化粒D/粘B、雑B
 - 5 10YR6/6 明黄粘 〇-△中C・小B・粒B/粘B、雑C
 - 6 ZSYR2/3 極弱粘 〇-△中D・小D・粒D、焼土小B・粒B、炭化粒C/粘B、雑C

- ビット土層解説 (各ビット共通)**
- 1 10YR5/4 粘 〇-△小D・粒C、炭化粒D/粘B、雑B
 - 2 10YR4/6 粘 〇-△中C・小B・粒B、炭化粒C/粘C、雑C

- 炉土層解説**
- 1 ZSYR2/1 黒粘 〇-△小D・粒C、焼土小D・粒C、炭化粒D/粘B、雑B
 - 2 ZSYR2/3 弱粘 〇-△小D・粒D、焼土小C・粒B、炭化粒D/粘B、雑C

第25図 第16号竪穴建物跡実測図



第26図 第16号竪穴建物跡出土遺物実測図

第11表 第16号竪穴建物跡出土遺物一覧(第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口罎		(11.7)	6.4	長石・石英・細礫	にぶい褐	普通	頸部沈線区画内も金属器の刃物状の工具で斜格子目文。胴部外面 附加条一種附加1状縄文施文 底部木炭痕	覆土下層	60% P.25
2	弥生土器	広口罎		(5.5)	7.5	長石・石英・雲母	赤褐	普通	胴下から底部完存 胴部外面単節1段縄文施文 底部木炭痕	覆土下層	20% P.25
3	弥生土器	広口罎		(4.0)		長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	良好	口唇部から口縁部上半に単節の1段縄文施文 上半と中位を沈線で区画し階帯を貼り付け縄文押捺で等間隔に区切る。頸部は櫛歯状工具による3段以上の波状文施文	覆土	5% P.25
4	弥生土器	広口罎		(2.6)		長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部に付附加条一種付加2条縄文施文 口縁部は無文	覆土	5%
5	弥生土器	広口罎		(2.1)		長石・石英・細礫	にぶい褐	普通	合口縁 口唇部から口縁部に単節の1段縄文施文の中位に櫛状工具により斜突を透らす	砂底面	5%
6	弥生土器	広口罎		(4.0)		長石・石英・雲母・細礫・白色粒子	褐	普通	口唇部から口縁部上半に単節1段縄文施文 頸部との境に4本単位の櫛歯状工具の横走区画文 頸部は縦位の斜格子目文	砂底面	5% P.25
7	弥生土器	広口罎		(2.5)		長石・石英・細礫・白色粒子	明赤褐	普通	頸部櫛歯状工具(3本櫛歯)による縦位の斜格子目文を施文	砂土上層	5%
8	弥生土器	広口罎		(3.1)		長石・石英・細礫	褐	普通	頸部 櫛歯状工具(6本櫛歯)による横走文と波状文施文	覆土下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
9	弥生土器	広口甕		(24)		長石・石英・細礫	明赤褐	普通	頸部無文 胴部上半部飾L調文施文	覆土下層	5%
10	弥生土器	広口甕		(30)		長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	頸部飾面状工具(3本脚面)による縦位に斜格子目文を施文	覆土下層	5%
11	弥生土器	広口甕		(28)	[7.0]	長石・石英・細礫	明赤褐	普通	底部本装痕	覆土	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	礫石	10.9	2.8	2.3	86.2	流紋岩	両端部・側縁部に敲打痕	床面	
13	礫石	8.2	6.2	7.5	494.5	砂岩	縦面2面 右側面部に研磨面 敲打痕	床面	

第20号竪穴建物跡 (第27・28図 第12表 PL5・25)

位置 調査区北部I15d0区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

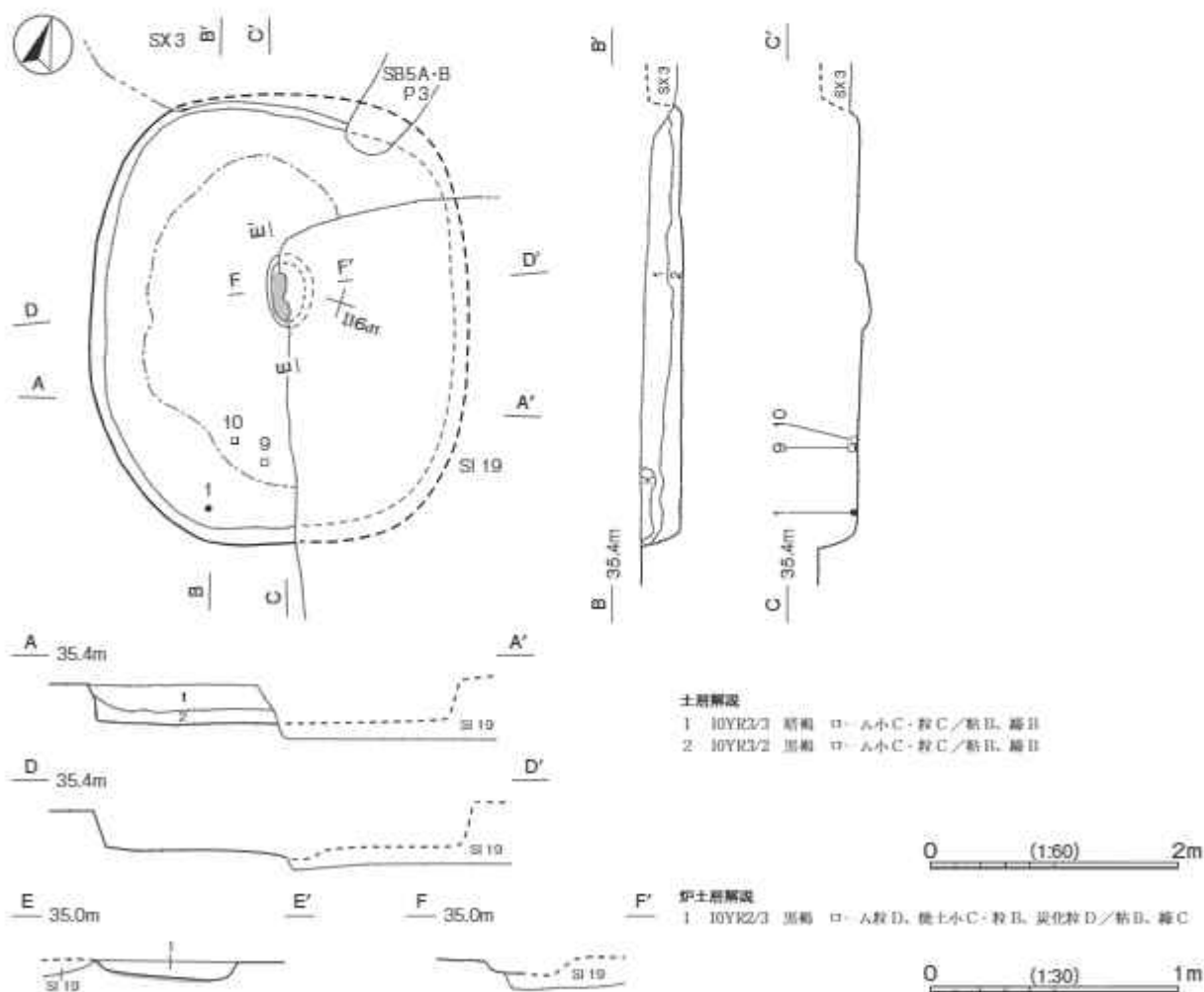
重複関係 第19号竪穴建物、第5A・5B号掘立柱建物、第3号不明遺構に掘り込まれている。

規模と形状ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は南北軸3.52m、東西軸1.60mである。本来は東西軸約2.74mの隅丸方形で、主軸方向はN-15°-Wと推定できる。壁は高さ24~32cmで、外傾している。

床 ほほ平坦で、壁に向かって緩やかに高くなっている。壁際を除いて硬化している。

炉 中央部やや北寄りに位置している。確認できた規模は長径58cm、短径15cmで、本来は長径約60cm、短径約38cmの楕円形と推定できる。深さ4cmの地床かたで、断面は皿状を呈しており、か床面は僅かに赤変硬化している。

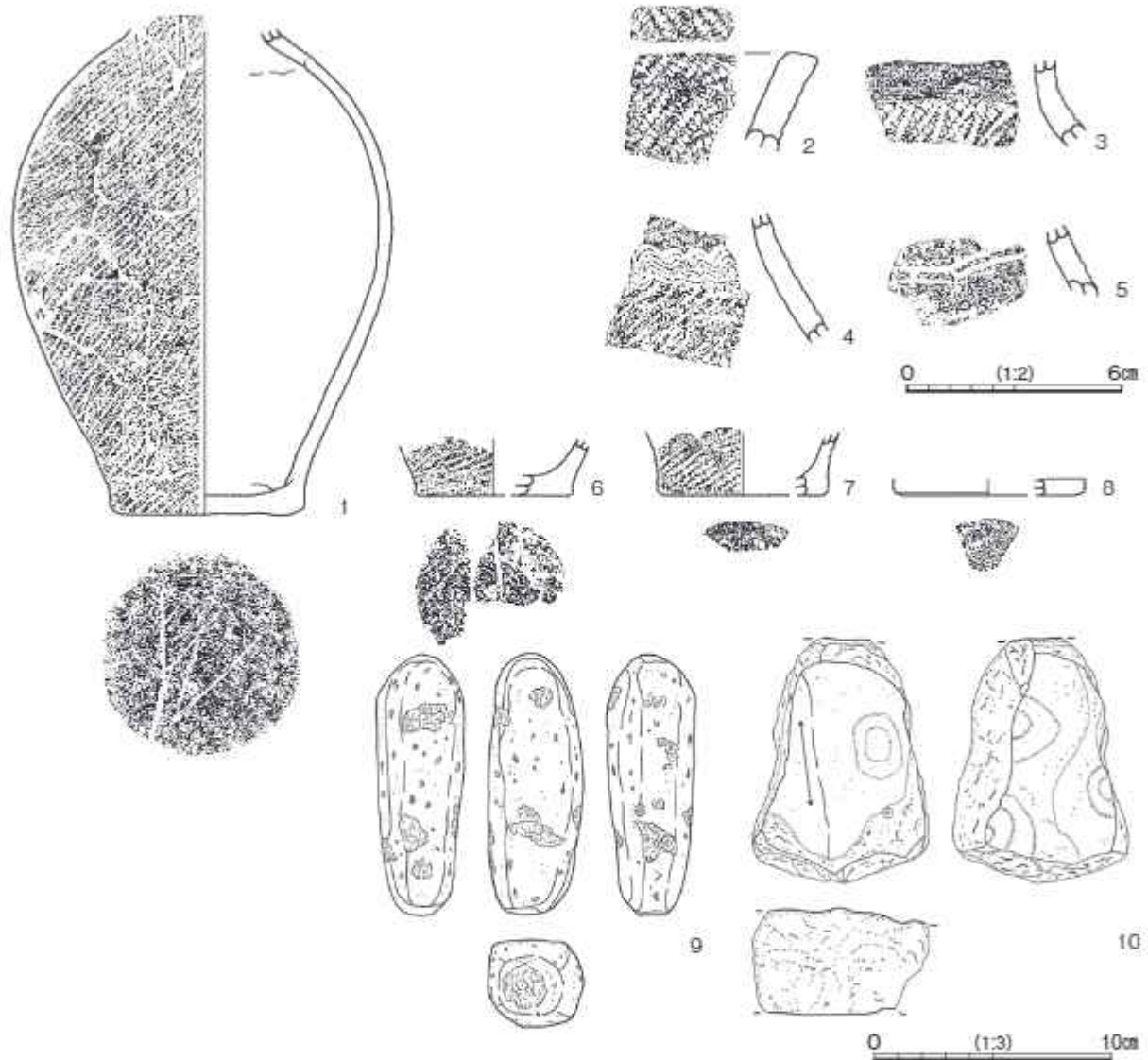
覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。



第27図 第20号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片 176 点（広口壺）、石器 2 点（石英閃緑岩製敲石、砂岩製砥石）が出土している。ほかに混入した縄文土器片 7 点、土師器片 19 点、焼成粘土塊 1 点が出土している。1 は南壁際西寄りの床面から、9・10 は中央部南寄りの覆土下層から、それぞれ出土している。建物廃絶直後の廃棄と考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第 28 図 第 20 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 12 表 第 20 号竪穴建物跡出土遺物一覧（第 28 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(20.2)	8.0	長石・石英・白色粒子	にぶい砂	普通	胴部附加条一種附加 2 条縄文施文 底部木葉痕種子圧痕	床面	40% P.25
2	弥生土器	広口壺	-	(2.8)	-	長石・石英・白色粒子	明赤褐色	普通	厚壁した口縁部、口唇部に縄文施文 口縁部に単辺 LR 縄文施文	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	-	長石・石英・白色粒子	灰青褐色	普通	胴部附加条一種附加 2 条縄文施文	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺	-	(3.6)	-	長石・石英・白色粒子	黒	普通	附加条一種附加 2 条縄文施文後胴部と胴部の境に襷歯状工具（6 本襷歯）による流状文	覆土	5%
5	弥生土器	広口壺	-	(2.0)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい赤褐色	普通	胴部に竹筴状工具により山形文を施文	覆土	5%
6	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	[6.4]	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	胴部附加条一種附加 2 条縄文施文 底部木葉痕種子圧痕	覆土	5%
7	弥生土器	広口壺	-	(2.7)	[7.0]	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい赤褐色	普通	胴部に単辺の LR 縄文を施文 底部木葉痕種子圧痕	覆土	5%
8	弥生土器	広口壺	-	(0.7)	[7.6]	長石・石英・白色粒子	にぶい青褐色	普通	底部布目痕	覆土	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	磁石	10.9	4.0	3.7	241.2	石英閃緑岩	4面に敲打痕	覆土下層	PL25
10	砥石	(10.3)	(7.4)	(4.5)	(407.8)	砂岩	表面左寄りを研磨面に使用 表面2・表面3が両に凹み	覆土下層	PL25

第21号竪穴建物跡 (第29・30図 第13表 PL5・26)

位置 調査区北東部のI16g2区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第38号竪穴建物跡を掘り込み、第17・41号竪穴建物、第4号竪穴遺構、第8号土坑に掘り込まれている。

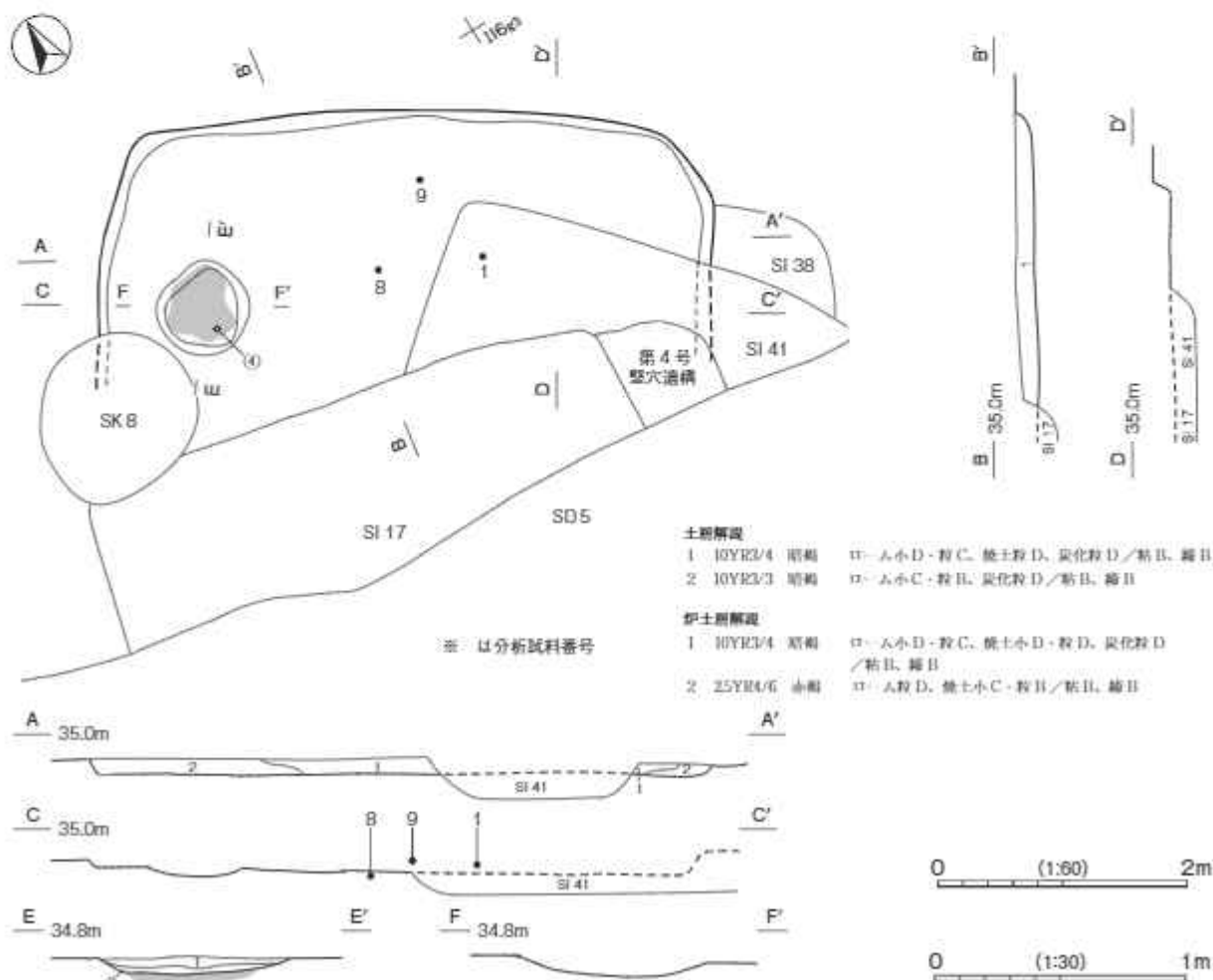
規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、北西・南東軸4.86m、北東・南西軸2.52mで、隅丸方形や隅丸長方形と考えられる。主軸方向はN-59°-Wと推定できる。壁は高さ18~28cmで、外傾している。

床 ほほ平坦で、北西壁際に向かって緩やかに高くなっている。硬化はしていない。

炉 北西壁寄りに位置している。長径76cm、短径74cmの不整形で、深さ7cmの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。

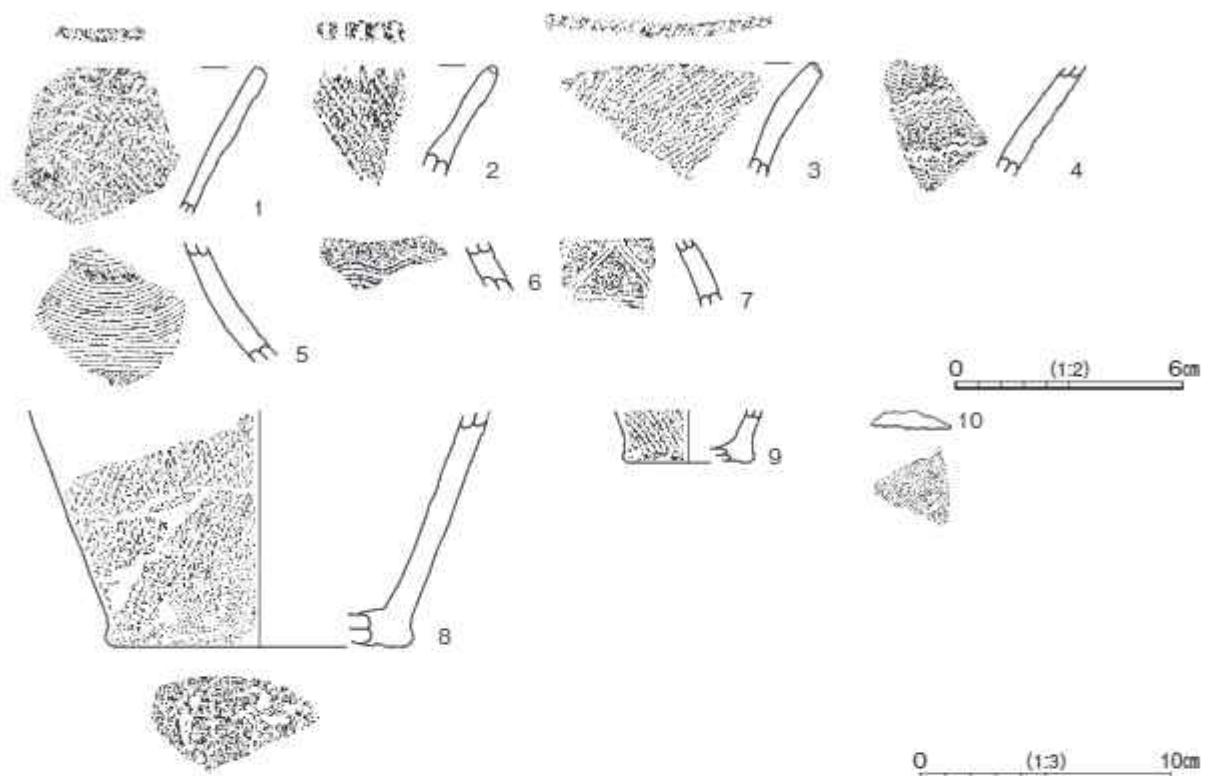
覆土 2層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片182点(広口壺)、石器6点(石英製剥片5、砂岩製砥石1)が出土している。ほかに混入した土師器片130点が北東部の壁際から散在して出土している。1・9は北東壁中央寄りの覆土下層、8は北東壁中央寄りの床面から、それぞれ出土している。かからは、微量の炭化物が出土している。



第29図 第21号竪穴建物跡実測図

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。かから出土した炭化物は、樹種同定の結果、クリであった（付章参照）。



第30図 第21号竪穴建物跡出土遺物実測図

第13表 第21号竪穴建物跡出土遺物一覧（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	養生土器	広口碗		(4.0)		長石・石英・白色粒子	にぶい青褐色	普通	口唇・口縁部にかけて附加条一種附加2条縄文施文	覆土下層	5%
2	養生土器	広口碗		(3.0)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐色	普通	口唇部に縄文原形押捺 口縁部附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
3	養生土器	広口碗		(3.0)		長石・石英・白色粒子	灰黄褐色	普通	口唇部・口縁部にかけて附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
4	養生土器	広口碗		(3.0)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐色	普通	轆轤状工具（6本轆轤）による波状文を3段押引き状に施文	覆土	5% PL.26
5	養生土器	広口碗		(3.3)		長石・石英・黒色粒子	にぶい青褐色	普通	横走文施文後轆轤状工具（6本轆轤）沖弧文	覆土	5%
6	養生土器	広口碗		(1.3)		長石・石英・黒色粒子	にぶい褐色	普通	轆轤状工具（6本轆轤）による波状文施文	覆土	5% PL.26
7	養生土器	広口碗		(1.8)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐色	普通	管状工具による横走文・山形文	覆土	5% PL.26
8	養生土器	広口碗		(9.4)	[12.2]	長石・石英・白色粒子	明赤褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文 底面種子凹痕	床面	5%
9	養生土器	広口碗		(2.1)	[5.2]	長石・石英・炭化物質	褐色	普通	胴部RL縄文施文	覆土下層	5%
10	養生土器	広口碗		(0.7)		長石・石英・炭化物質	褐色	普通	底部布目痕 種子凹痕	覆土	5%

第22号竪穴建物跡（第31図 第14表 PL.5・26）

位置 調査区北部のI I 6e1区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第23号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.02m、短軸2.85mの楕円形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁は高さ18~28cmで、外傾している。

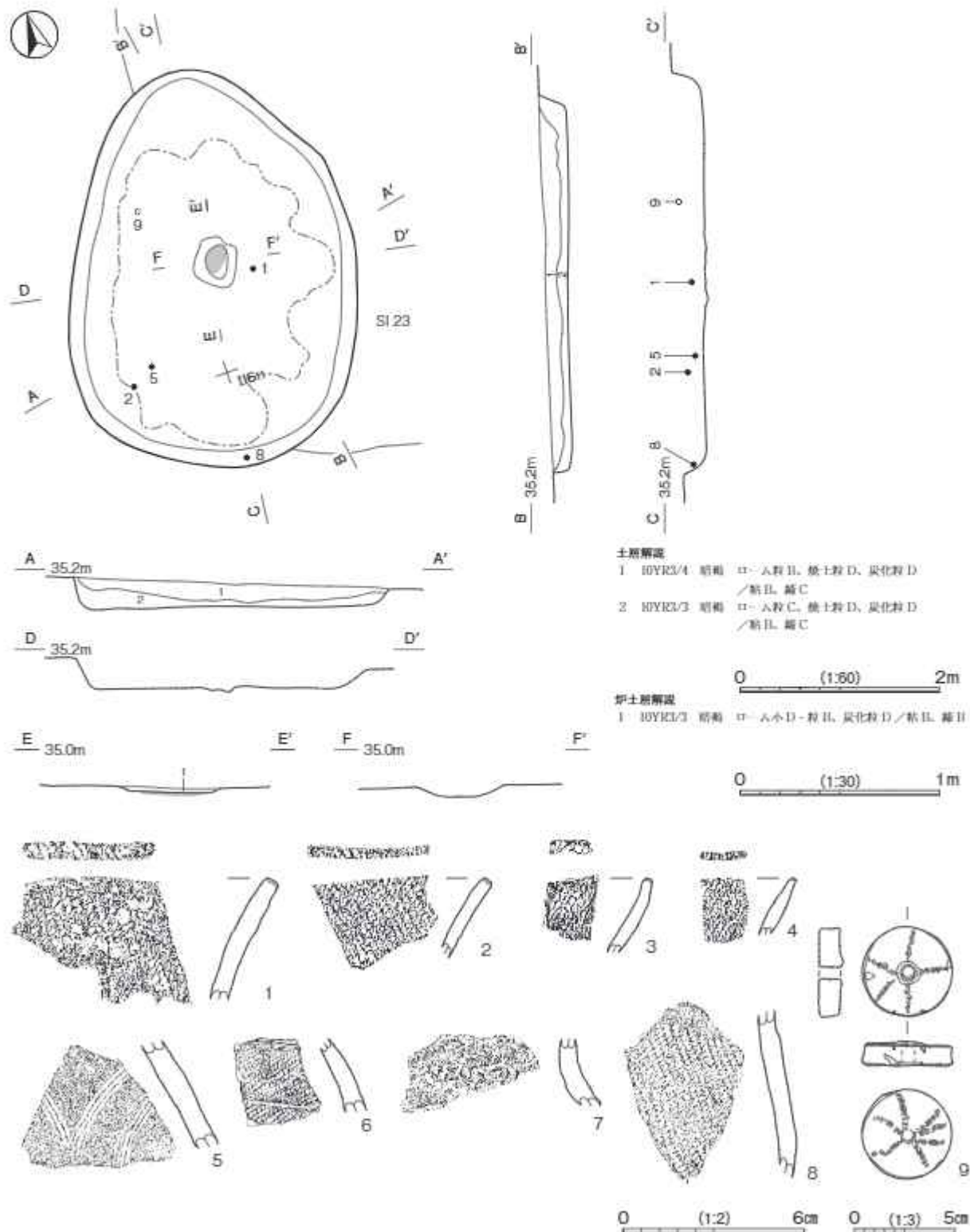
床 ほほ平坦であるが、南西部が緩やかに低くなっている。壁際を除いて硬化している。

炉 中央部に位置している。長径86cm、短径64cmの楕円形で、深さ2cmの地床かである。断面は浅い皿状を呈しており、か床面は僅かに赤変硬化している。

覆土 2層に分層できる。含有物が均質で、周開からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片110点（広口壺）、土製品1点（紡錘車）、石器1点（石英製剥片）が出土している。ほかに混入した縄文土器3点、土師器片47点、焼成粘土塊2点、土製品1点（土玉）が出土している。遺物は、散在した状態で覆土中から出土している。1は中央部、5は南部、8は南壁際の覆土下層から、2は南西部の覆土中層から、9は北西部の覆土上層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第31図 第22号竪穴建物跡・出土遺物実測図

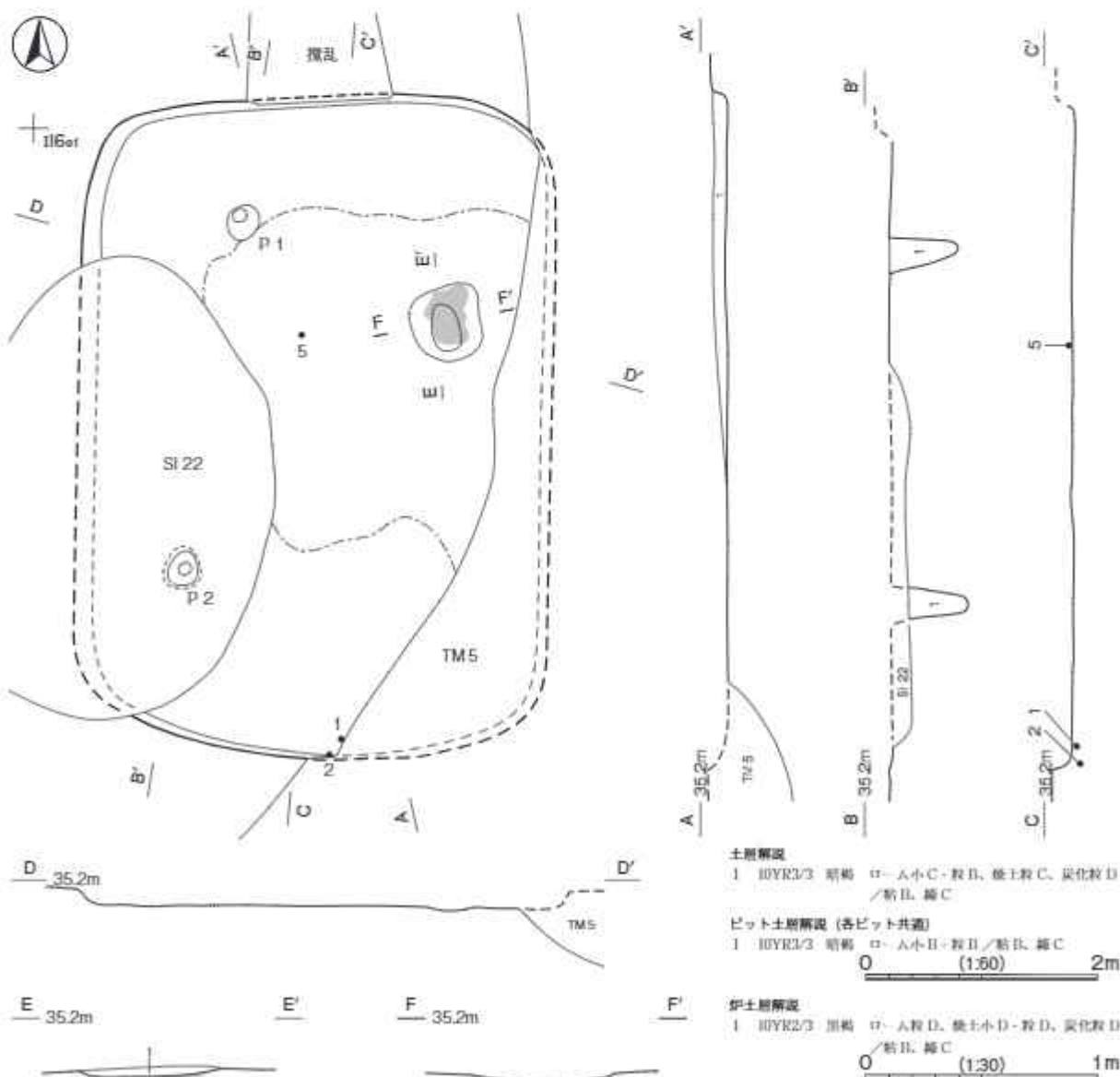
第14表 第22号竖穴建物跡出土遺物一覧(第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	養生土器	広口甕	-	(4.0)	-	長石	明黄褐色	普通	口縁部から口縁部半箇 RL 縄文施文 外面割落	覆土下層	5% PL.26
2	養生土器	広口甕	-	(2.6)	-	石英・白色粒子 砂多量	褐色	普通	口縁部から口縁部半箇 RL 縄文施文 器壁荒れ	覆土中層	5%
3	養生土器	広口甕	-	(2.5)	-	長石・石英 黒色粒子	赤褐色	普通	口縁部から口縁部附加条一種附加1条縄文施文	覆土	5%
4	養生土器	広口甕	-	(1.9)	-	長石・石英	黄褐色	普通	口縁部から口縁部附加条一種附加1条縄文施文 内面1完全ナブ	覆土	5%
5	養生土器	広口甕	-	(3.5)	-	石英・白色粒子・ 砂多量・黒色粒子	明赤褐色	普通	三本の櫛歯工具による山形文 内面ナブ	覆土下層	5%
6	養生土器	広口甕	-	(2.4)	-	石英・白色粒子 赤色粒子	靑灰	普通	縄文施文後平行沈線 胎土精製	覆土	5%
7	養生土器	広口甕	-	(2.2)	-	石英・白色粒子	褐色	普通	頸部結節回紋文施文	覆土	5%
8	養生土器	広口甕	-	(5.6)	-	長石・石英・ 雲母・砂多量	褐色	普通	半箇の RL 縄文施文	覆土下層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
9	紡錘車	4.45	1.25	0.6	28.41	長石・石英	にぶい褐色	両面・顔面に丁寧なリブ調整後 両面に2mmの管状工具により放射状に削突文施文	覆土上層	PL.26

第23号竖穴建物跡(第32・33図 第15表 PL.5)

位置 調査区北部の I I 6e1 区、標高35m ほどの台地平坦面に位置している。



第32図 第23号竖穴建物跡実測図

重複関係 第22号竪穴建物、第5号墳に掘り込まれている。

規模と形状 東部と西部がほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、南北軸5.46 m、東西軸3.80 mである。本来は南北軸約5.70 m、東西軸約4.06 mの隅丸長方形で、主軸方向はN-0°と推測できる。壁は高さ10～12cmで、外傾している。

床 ほほ平坦である。中央部と東部が硬化している。

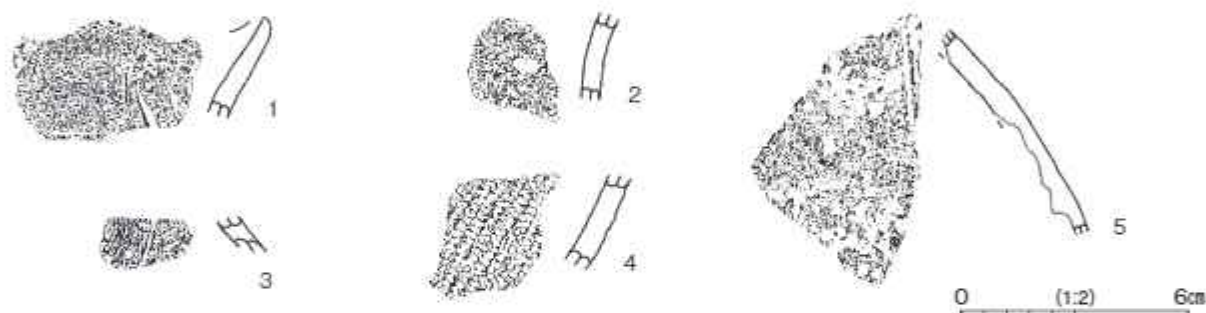
炉 東壁寄り北部に位置している。長径82cm、短径58cmの楕円形で、深さ5cmほどの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 2か所。P1は深さ58cm、P2は深さ54cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片10点（広口壺）が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片1点が出土している。1・2は南壁際の床面から、5は中央部の床面から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第33図 第23号竪穴建物跡出土遺物実測図

第15表 第23号竪穴建物跡出土遺物一覧（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺		(28)		長石・石英	にがい黄褐色	普通	波状口縁部 内外面ナツ	床面	5%
2	弥生土器	広口壺		(24)		長石・石英	黒	普通	口縁部に単面R.L.縄文施文	床面	5%
3	弥生土器	広口壺		(10)		長石・石英	黒灰黄	普通	胴部に沈線区画内磨消	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺		(26)		長石・石英	にがい赤褐色	普通	胴部外面に単面R.L.縄文施文	覆土	5%
5	弥生土器	広口壺		(54)		長石・石英	黒褐色	普通	内外面摩耗・剥落顕著 胴部外面に2本の沈線	床面	5%

第24号竪穴建物跡（第34・35図 第16表 PL5・26）

位置 調査区北東部のI16g4区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第7号竪穴遺構を掘り込んでいる。

規模と形状 大半が調査区域外のため、確認できた規模は南北軸4.90 m、東西軸1.54 mである。平面形は不明で、主軸方向は西壁から判断してN-0°と推定できる。壁は高さ24～44cmで、ほほ直立している。

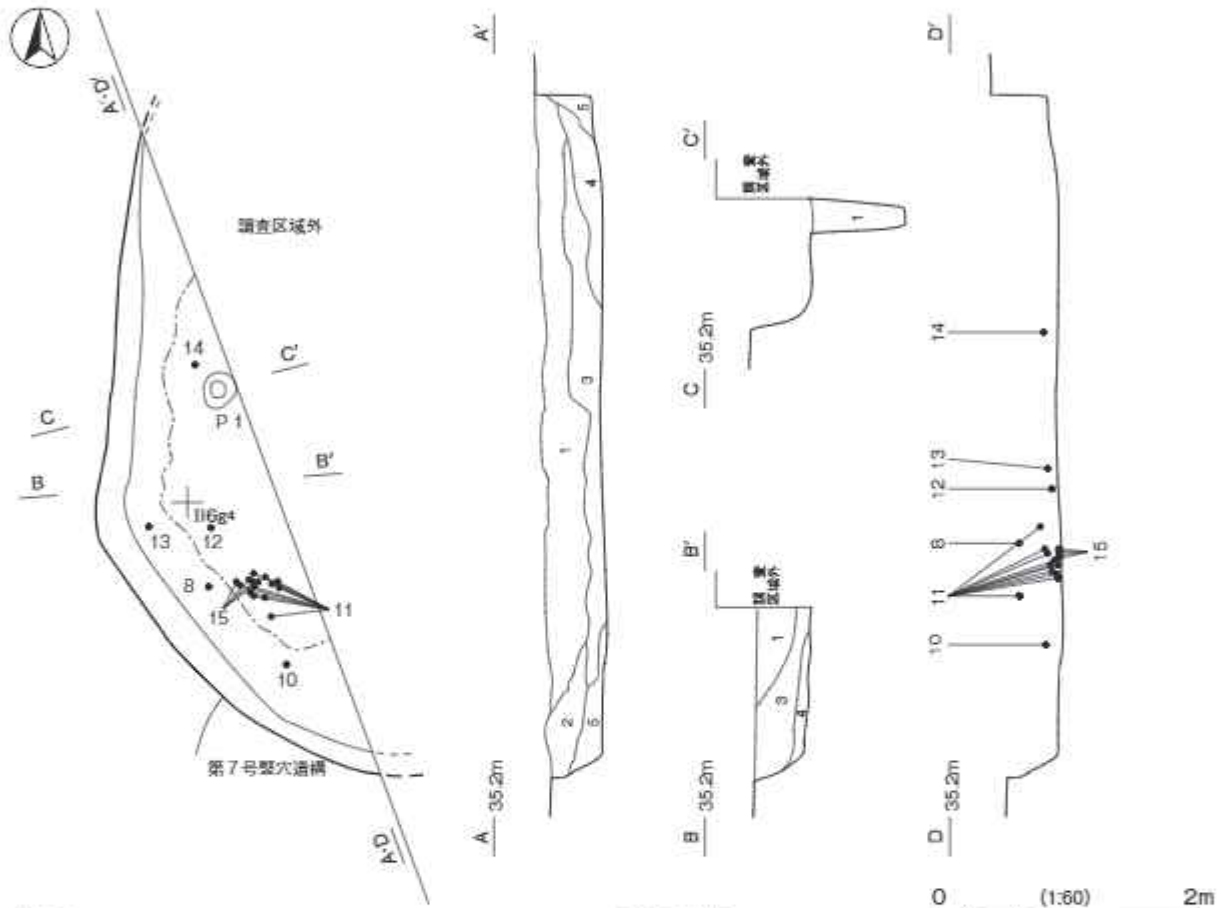
床 ほほ平坦で、壁に向かって緩やかに高くなっている。壁際を除いて硬化している。

ピット P1は深さ73cmで、配置から支柱穴と考えられる。覆土の堆積状況から、柱は抜き取られている。

覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックを多く含むことや、床面の土器片と覆土上層の土器片が接合することから、人為堆積である。

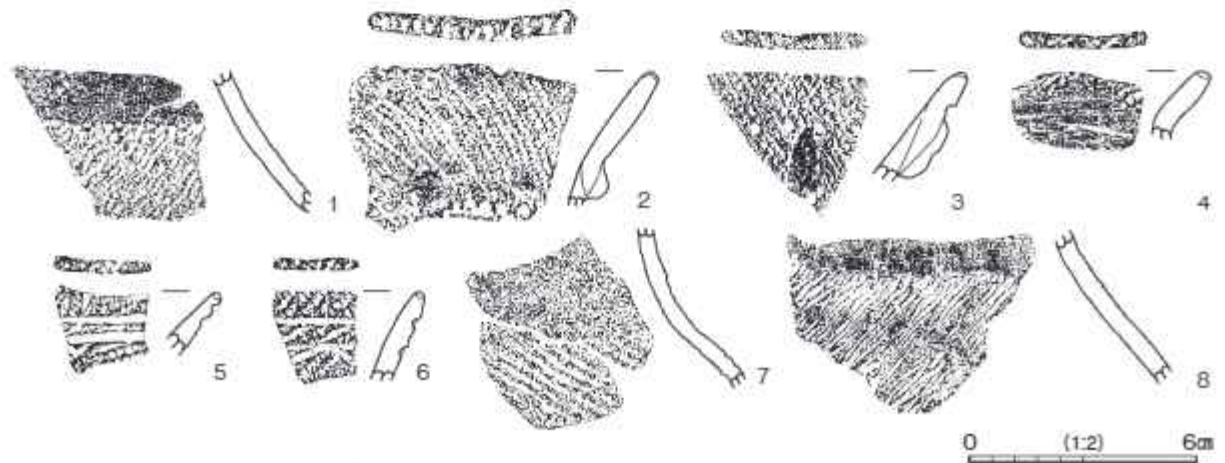
遺物出土状況 弥生土器片 312 点（広口壺）、石器 1 点（石英剥片）が出土している。ほかに混入した縄文土器片 2 点、土師器片 47 点が出土している。遺物は南西部の覆土下層から上層にかけて、多く出土している。11 は南壁際寄りの床面と覆土中層から出土した破片が接合している。12・13 は南西隅寄り、14 は西壁寄りの覆土下層から、8・10 は南壁寄りの覆土中層から、それぞれ出土している。遺物は埋め戻しの際に、廃棄されたものと推測できる。

所見 時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。

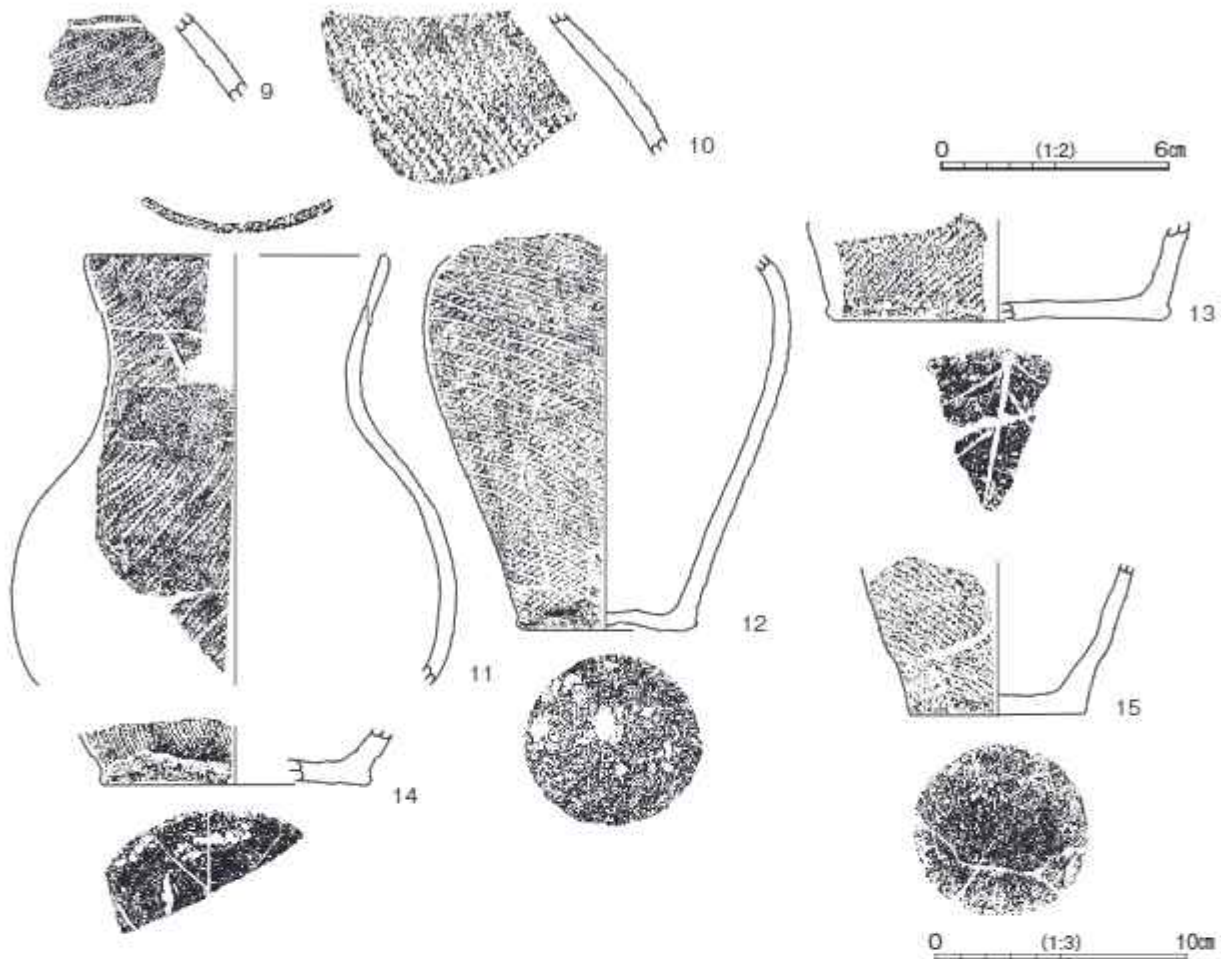


- 土器解説**
- | | |
|---------------|--------------------------|
| 1 10YR4/3 灰白陶 | ロ-ム小B-段A、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿B |
| 2 10YR2/3 暗褐 | ロ-ム小B-段A、炭化粒D/粘B、綿B |
| 3 10YR2/3 暗褐 | ロ-ム小C-段A、炭化粒D/粘B、綿B |
| 4 10YR2/4 暗褐 | ロ-ム小B-段A、炭化粒C/粘B、綿B |
| 5 10YR4/6 粗 | ロ-ム小A-段A、焼土粒D/粘B、綿B |

- ビッド土器解説**
- | | |
|---------------|----------------|
| 1 10YR4/3 灰白陶 | ロ-ム小B-段A/粘B、綿C |
|---------------|----------------|



第34図 第24号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第35図 第24号竪穴建物跡出土遺物実測図

第16表 第24号竪穴建物跡出土遺物一覽(第34・35図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	甕生土器	広口甕	(38)	-	-	長石・石英・白色粒子	黒褐色	普通	胴部無文 胴部附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
2	甕生土器	広口甕	(36)	-	-	長石・石英	明赤褐色	普通	口唇部縄文原形押付 口縁部附加条一種附加1条施文 口縁端部に低い隆帯・突起部付 後端部に管状工具による刺突列	覆土	5%
3	甕生土器	広口甕	(29)	-	-	長石・石英	灰褐色	普通	口唇部縄文原形押付 口縁部附加条一種附加2条縄文施文 口縁部上半に管状工具による刺突列棒状の突起部付	覆土	5%
4	甕生土器	広口甕	(19)	-	-	長石・石英・雲母	黒	普通	口唇部から口縁部上端LR縄文施文後口唇部軽いなす	覆土	5%
5	甕生土器	広口甕	(17)	-	-	長石・石英	橙	普通	口唇部に縄文原形押付 口縁部軸線不明の附加条縄文施文後横位2条の沈線	覆土	5%
6	甕生土器	広口甕	(24)	-	-	石英・雲母・白色粒子	褐色	普通	口唇部縄文原形押付 短い縄文原形(附加条縄文)押付別に沈線・山形文施文	覆土	5%
7	甕生土器	広口甕	(49)	-	-	長石・石英・雲母・白色粒子	黒褐色	普通	胴部磨り消しによる無文帯 胴部附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
8	甕生土器	広口甕	(40)	-	-	長石・石英・黒色粒子	黒褐色	普通	胴部ナブによる無文帯 胴部無文施文	覆土中層	5%
9	甕生土器	広口甕	(25)	-	-	長石・石英・黒色粒子・白色粒子	黒褐色	普通	軸線不明附加条縄文施文後横位の沈線文	覆土	5%
10	甕生土器	広口甕	(40)	-	-	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい赤褐色	普通	附加条一種附加2条縄文施文	覆土中層	5%
11	甕生土器	広口甕	[120]	(179)	-	長石・石英・白色粒子	橙	普通	折り返し口縁 口唇一部部上附加条一種附加2条縄文施文後胴部下半部消しによる無文帯	床面 覆土中層	30% PL26
12	甕生土器	広口甕	(156)	62	62	長石・石英・砂礫・黒色粒子	にぶい赤褐色	普通	附加条二種附加2条状縄文施文 底部布目痕	覆土下層	35% PL26
13	甕生土器	広口甕	(41)	[136]	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	胴部LR縄文施文 底部木葉痕	覆土下層	5%
14	甕生土器	広口甕	(24)	[104]	-	石英・雲母・白色粒子	赤褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文 底部木葉痕砂子付痕	覆土下層	5%
15	甕生土器	広口甕	(62)	70	70	石英・雲母・白色粒子	赤褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文 底部木葉痕	床面	5%

第25号竪穴建物跡(第36・37図 第17表 PL5・26)

位置 調査区中央部の1159区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

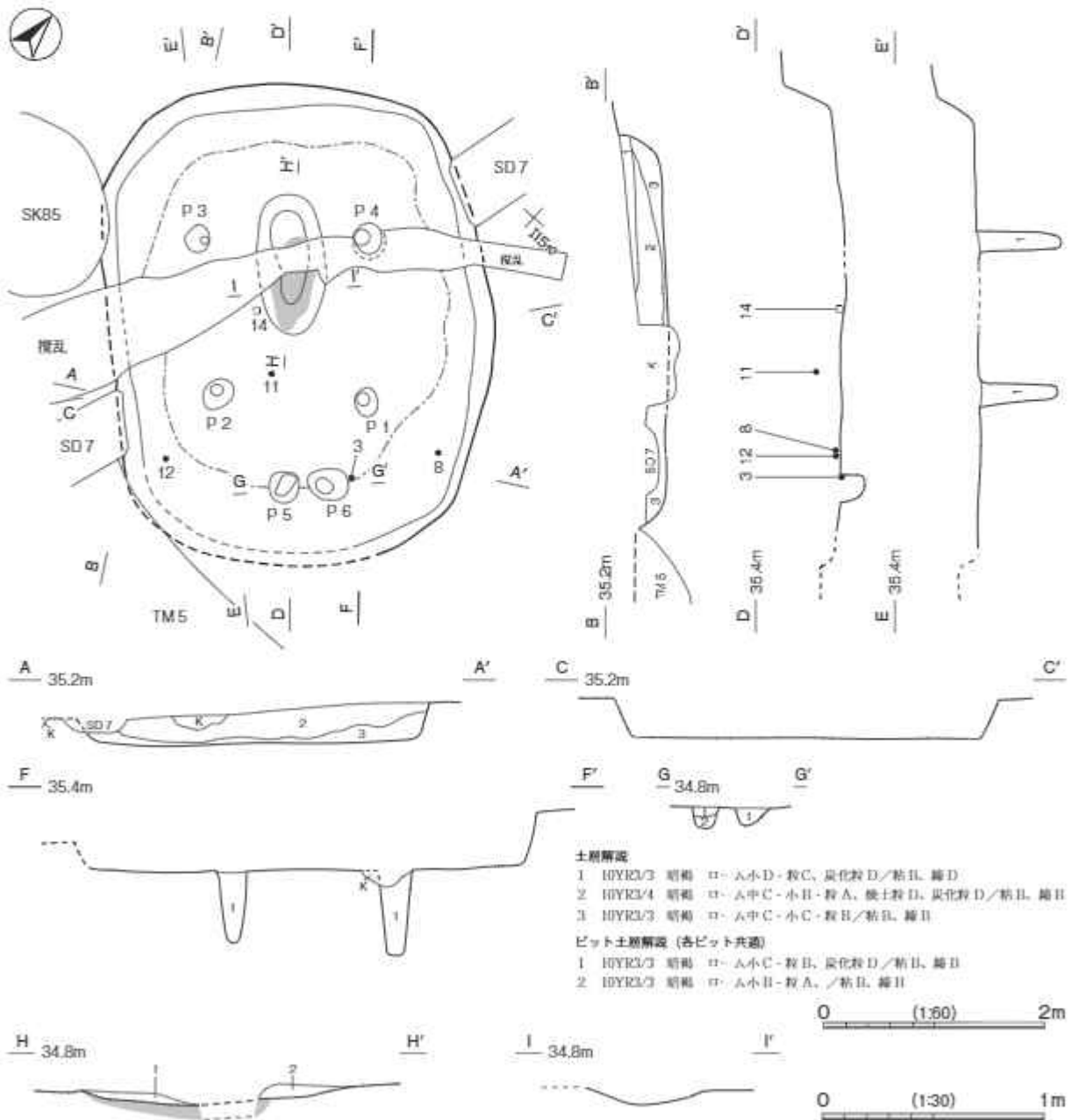
重複関係 第85号土坑、第7号溝、第5号墳に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複していることや攪乱を受けているため、確認できた規模は長軸4.30m、短軸3.42mである。本来は長軸約4.50m、短軸約3.5mの隅丸長方形で、主軸方向はN-39°-Wと推定できる。壁は高さ24~44cmで、外傾している。

床 ほは平坦で、壁際を除いて硬化している。

炉 中央部北寄りに位置している。長径126cm、短径は66cmの楕円形で、深さ6cmの地床かである。断面は皿状を呈しており、炉床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 6か所。P1~P4は深さ65~78cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。P5は深さ20cm、P6は深さ15cmで、どちらも配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。柱はいずれも抜き取られている。



土層解説

- 1 I0YR3/3 暗褐色 コ-ム小D-粒C、炭化粒D/粘B、雑D
- 2 I0YR3/4 暗褐色 コ-ム中C-小B-粒A、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雑B
- 3 I0YR3/3 暗褐色 コ-ム中C-小C-粒B/粘B、雑B

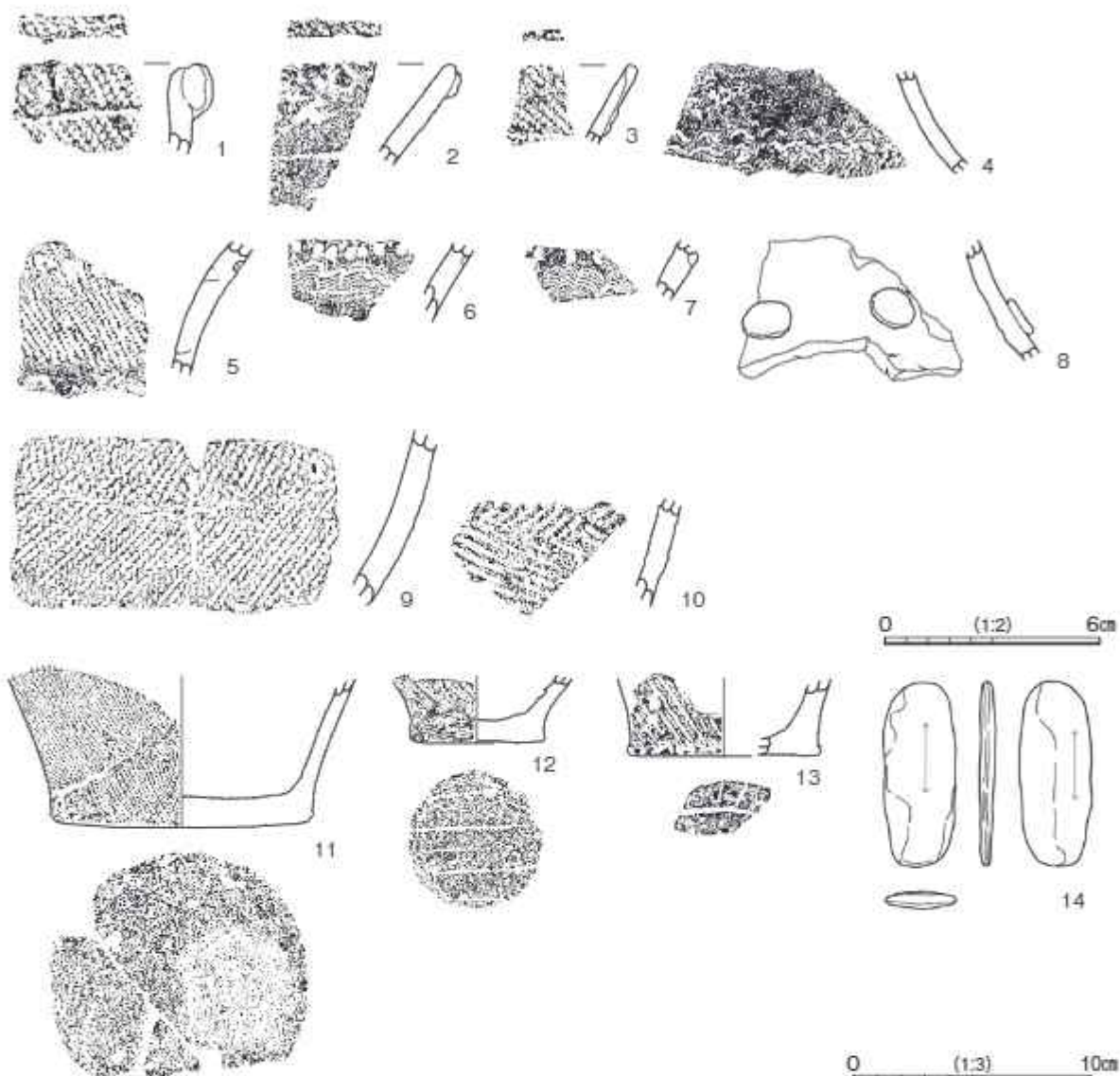
ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 I0YR3/3 暗褐色 コ-ム小C-粒B、炭化粒D/粘B、雑B
- 2 I0YR3/3 暗褐色 コ-ム小B-粒A、粘B、雑B

炉土層解説

- 1 I0YR3/4 暗褐色 コ-ム小D-粒C、焼土小C-粒B/粘C、雑B
- 2 I0YR2/3 黒褐色 コ-ム小D-粒D、焼土小D-粒D/粘C、雑B

第36図 第25号竪穴建物跡実測図



第37図 第25号竪穴建物跡出土遺物実測図

覆土 3層に分層できる。第1層はロームブロックの含有が僅少であることから、自然堆積である。第2・3層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片438点(広口壺)、石器2点(砂岩製砥石、石英製剥片)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、礫1点が出土している。3は南東部、14は中央部の床面から、8は東壁際南寄り、12は南西隅寄りの覆土下層から、11は中央部の覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。

第17表 第25号竪穴建物跡出土遺物一覧(第37図)

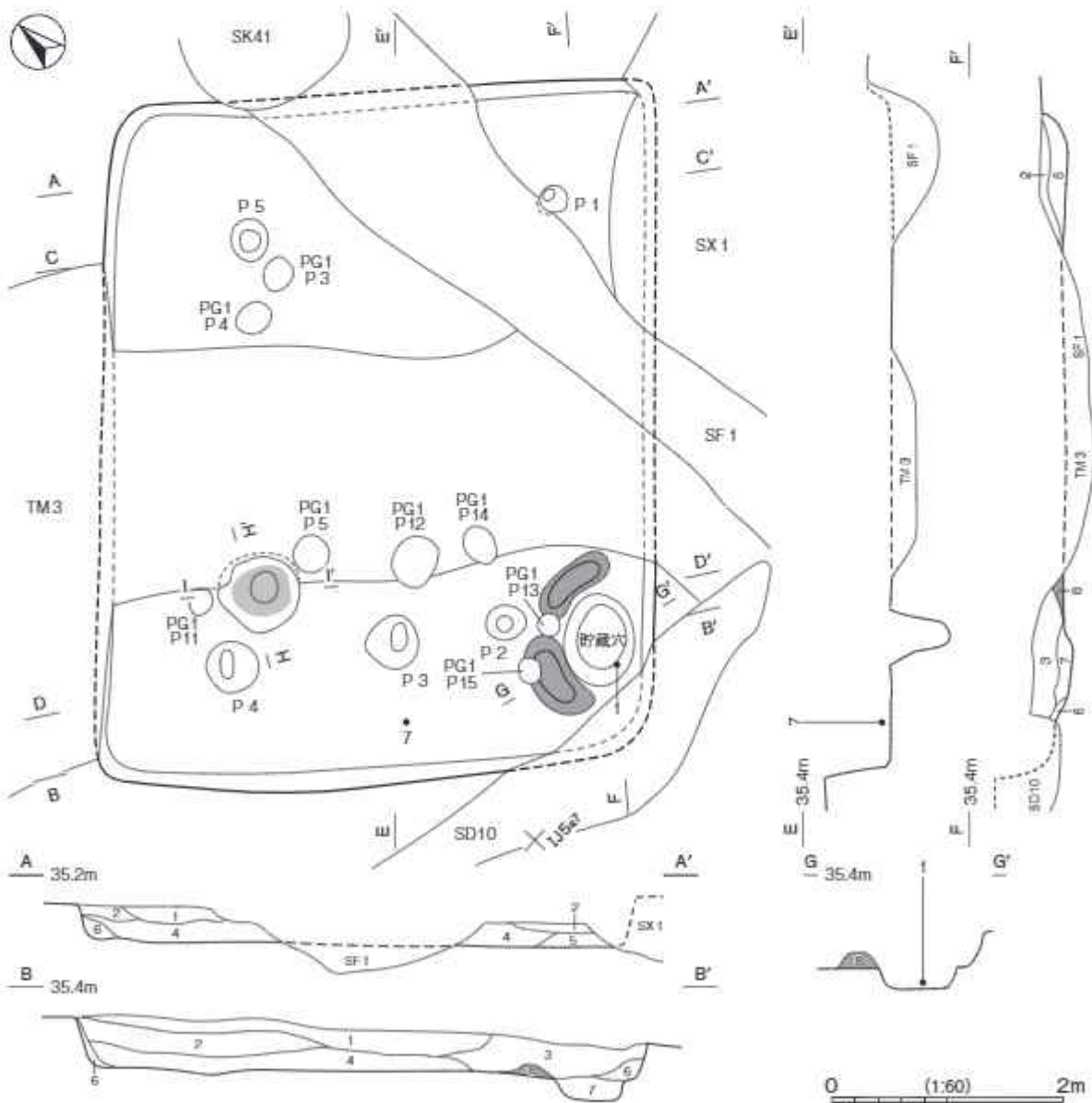
番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	検成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺		(25)		長石・石英・黒色粒子	橙	普通	複合口縁 口唇部に口縁部に単部 RL 縄文施文 口縁部に棒状浮文貼り付け	覆土	5% PL26
2	弥生土器	広口壺		(28)		長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐色	普通	口唇部縄文施文 口縁部上端に突起貼り付け 内外磨減	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺		(22)		長石・石英・白色粒子	黒褐色	普通	複合口縁 口唇部に縄文原形押捺 口縁部に RL 縄文施文	床面	5%
4	弥生土器	広口壺		(30)		長石・石英・雲母・白色粒子	黒褐色	普通	胴部2段の筋節回転文 附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5% PL26 保付者
5	弥生土器	広口壺		(37)		長石・石英・白色粒子	灰褐色	普通	口縁部下端に刺突文 頸部に RL 縄文施文	覆土	5% PL26

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
6	養生土器	広口甕	—	(23)	—	長石・石英・ 雲母・白色粒子	褐	普通	頸部下端に刺突文 頸部に縄高伏工具（6本縄 面）による波状文	覆土	5%
7	養生土器	広口甕	—	(17)	—	長石・石英・ 白色粒子	灰褐	普通	頸部下端に刺突文 頸部に縄高伏工具（7本縄 面）による波状文	覆土	5%
8	養生土器	広口甕	—	(34)	—	長石・石英・ 白色粒子	褐	普通	頸部に円形貼付文	覆土下層	5% PL.26
9	養生土器	広口甕	—	(19)	—	長石・石英・ 雲母・白色粒子	にぶい褐	普通	結節附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
10	養生土器	広口甕	—	(30)	—	長石・石英・ 白色粒子	橙	普通	附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
11	養生土器	広口甕	—	(6.3)	10.4	長石・石英・ 白色粒子	明赤褐	普通	胴部RL縄文施文 底部種子圧痕	覆土中層	5%
12	養生土器	広口甕	—	(28)	5.3	長石・石英・ 白色粒子	にぶい褐	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文 底部木炭痕	覆土下層	5%
13	養生土器	広口甕	—	(3.3)	17.8	長石・石英・ 黒色粒子	にぶい橙	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文 底部木炭痕 種子圧痕	覆土	5%

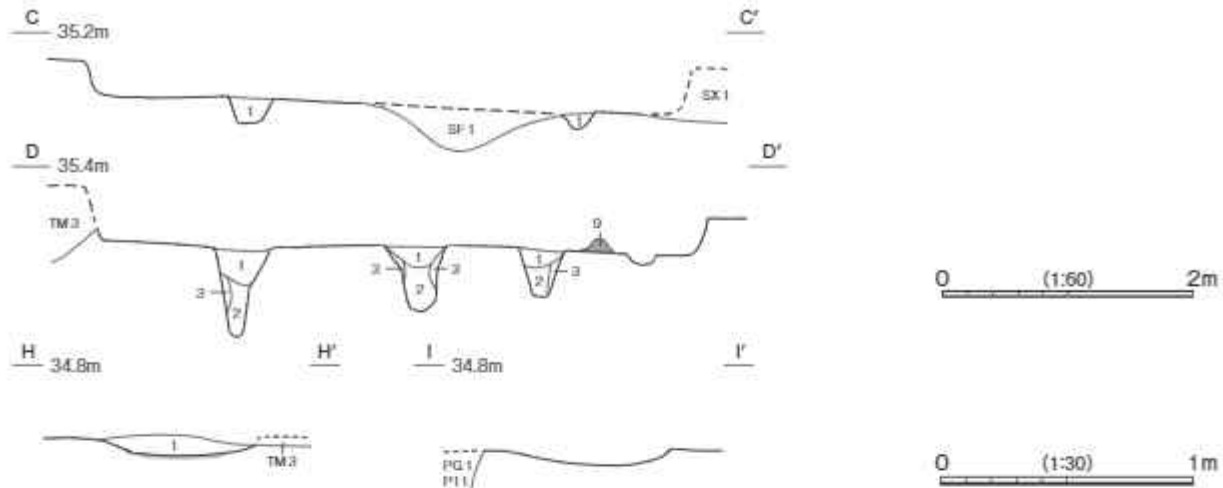
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
14	砥石	8.0	3.0	0.7	28.0	砂岩	扁平礫素材 砥面2面	床面	PL.26

第28号竪穴建物跡 (第38～40図 第18表 PL.6・26)

位置 調査区中央部のI15j7区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。



第38図 第28号竪穴建物跡実測図(1)



土層解説

- | | | | |
|---|---------|-----|---------------------------|
| 1 | 10YR3/4 | 暗褐色 | ロ・ム粉D、焼土粒B、炭化粒B/粘B、雑B |
| 2 | 10YR3/4 | 暗褐色 | ロ・ム小D・粒C、焼土粒C、炭化粒D/粘A、雑B |
| 3 | 10YR2/2 | 黒褐色 | ロ・ム小D・粒D、焼土粒D/粘B、雑C |
| 4 | 10YR5/4 | 灰褐色 | ロ・ム中D・小D・粒C/粘B、雑A |
| 5 | 10YR3/4 | 暗褐色 | ロ・ム粉D、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雑B |
| 6 | 10YR4/6 | 褐色 | ロ・ム小B・粒B/粘B、雑B |
| 7 | 10YR4/6 | 褐色 | ロ・ム中C・小B・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B雑 |
| 8 | 10YR3/2 | 黒褐色 | ロ・ム小B・粒C、焼土粒D/粘B、雑B |
| 9 | 10YR2/3 | 黒褐色 | ロ・ム中D・小C・粒C、炭化粒D/粘B、雑B |

炉土層解説

- | | | | |
|---|---------|-----|-----------------------------|
| 1 | 10YR3/4 | 暗褐色 | ロ・ム小D・粒B、焼土小C・粒B、炭化粒B/粘B、雑B |
|---|---------|-----|-----------------------------|

ピット土層解説 (各ピット共通)

- | | | | |
|---|---------|-----|---------------------|
| 1 | 10YR3/4 | 暗褐色 | ロ・ム小D・粒C、炭化粒D/粘A、雑B |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐色 | ロ・ム小D・粒C、焼土粒D/粘B、雑C |
| 3 | 10YR5/4 | 灰褐色 | ロ・ム小B・粒C/粘B、雑A |

第39図 第28号竪穴建物跡実測図(2)

重複関係 第41号土坑、第1号道路、第10号溝、第3号墳、第1号ピット群、第1号不明遺構に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は長軸5.90m、短軸4.76mである。隅丸長方形と推定でき、主軸方向はN-47°-Eである。壁は高さ20~50cmで、外傾している。

床 ほは平坦で、壁際が緩やかに低くなっている。硬化はしていない。

炉 中央部南西寄りに位置している。長径72cm、短径64cmの楕円形で、深さ8cmの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は僅かに赤変硬化している。

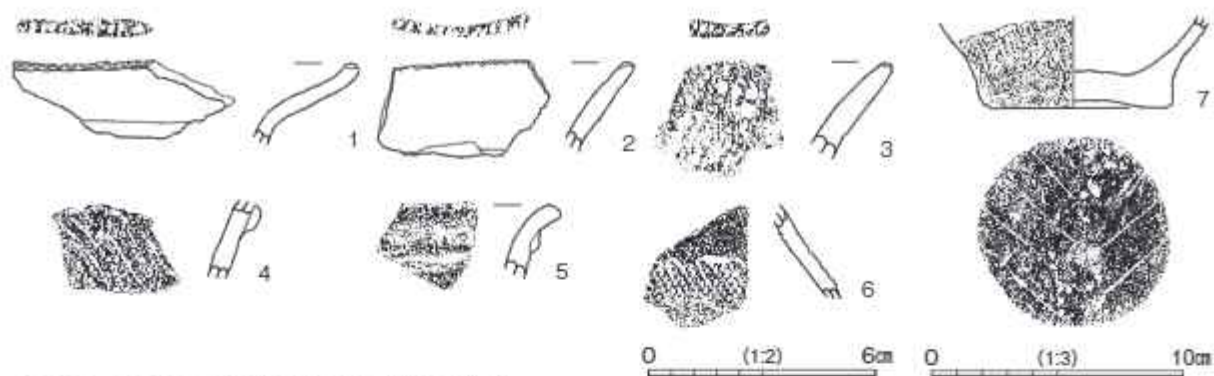
ピット 5か所。P1~P5は深さ39~70cmである。配置と規模から支柱穴と考えられる。P3とP4の底面は一方に長い平面形から、五平材を用いていた可能性がある。柱はいずれも抜き取られている。

貯蔵穴 南東ノーナに位置している。長径78cm、短径58cmの楕円形で、深さ22cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土にロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。貯蔵穴は、西側から北側にかけての外縁部に、第8・9層で幅18~26cm、高さ20cmの高まりを有している。

覆土 9層に分層できる。第1層はロームブロックを含んでいないことから、自然堆積である。第2~6層はロームブロックを多く含み、不規則な堆積状況から、人為堆積である。第7層は貯蔵穴覆土である。

遺物出土状況 弥生土器片114点(広口壺)、石器1点(石英製剥片)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片173点、須恵器片1点が出土している。1は貯蔵穴覆土中層から、7は南壁際中央部の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



第40図 第28号竪穴建物跡出土遺物実測図

第18表 第28号竪穴建物跡出土遺物一覧(第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺		(22)		石英・雲母・赤色粒子	黒褐色	普通	口唇部縄文原形押捺	貯蔵穴 葺土中層	5% PL.26
2	土師器	壺		(24)		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口唇部縄文原形押捺	葺土	5% PL.26
3	弥生土器	広口壺		(25)		石英・雲母・細砂・黒色粒子	にぶい褐色	普通	縄文原形押捺。口縁部に器糸文	葺土	5%
4	弥生土器	広口壺		(21)		長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部に附加条一種附加2条施文後端部に突起全周り付付	葺土	5%
5	弥生土器	広口壺		(20)		長石・石英・黒色粒子	褐色	普通	頸部に陸帯貼り付付	葺土	5%
6	弥生土器	広口壺		(25)		長石・石英・白色粒子	黒褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文	葺土	5%
7	弥生土器	広口壺		(37)	75	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文 底部本支面 種子付面	葺土下層	5%

第32号竪穴建物跡(第41・42図 第19表 PL.6・26・27)

位置 調査区中央部のI I 5g9区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

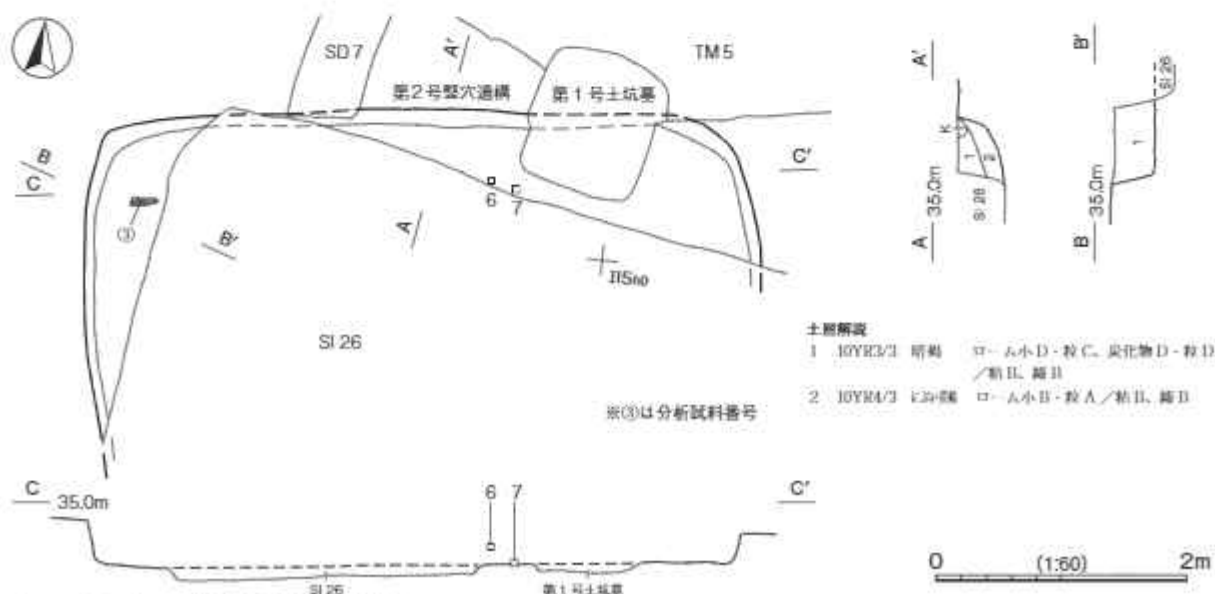
重複関係 第2号竪穴遺構を掘り込み、第26号竪穴建物、第1号土坑墓、第7号溝、第5号墳に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、東西軸5.32m、南北軸2.12mで、平面形は長方形と推定できる。主軸方向はN-6°-Eである。壁は高さ20~32cmで、ほぼ直立している。

床 確認できた範囲はほぼ平坦である。重複のため硬化面は不明である。

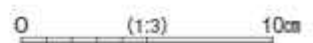
覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片6点(広口壺)、石器2点(閃緑岩製太型蛤刃石斧、砂岩製砥石)が出土している。



第41図 第32号竪穴建物跡実測図

0 (1:3) 10cm



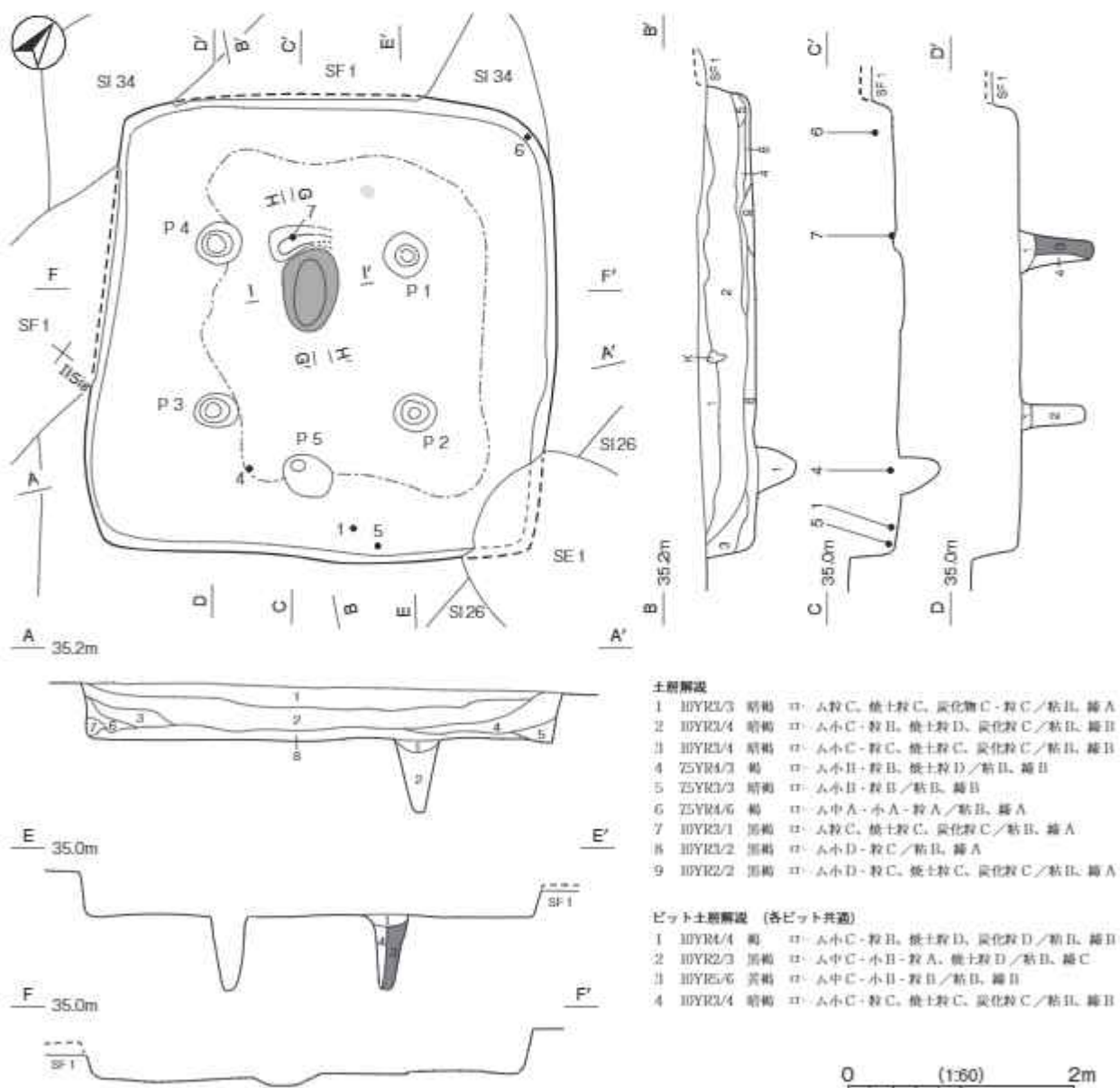
第19表 第32号竖穴建物跡出土遺物一覧(第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	赤生土器	広口罎	-	(25)	-	長石・石英・白色粒子	暗褐色	普通	口縁部礫面状工具(5本以上礫面)による波状文・5本礫面による横直文 附加条一種附加2条施文	覆土	5% PL26
2	赤生土器	広口罎	-	(19)	-	長石・石英・白色粒子	褐色	普通	附加条一種附加2条施文	覆土	5%
3	赤生土器	広口罎	-	(27)	-	長石・石英・白色粒子	褐色	普通	半截竹管状工具による浅い平行波線文	覆土	5%
4	赤生土器	広口罎	-	(75)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい褐色	普通	附加条一種附加2条施文	覆土	5%
5	赤生土器	広口罎	-	(11)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部木炭痕 種子圧痕	覆土	5%

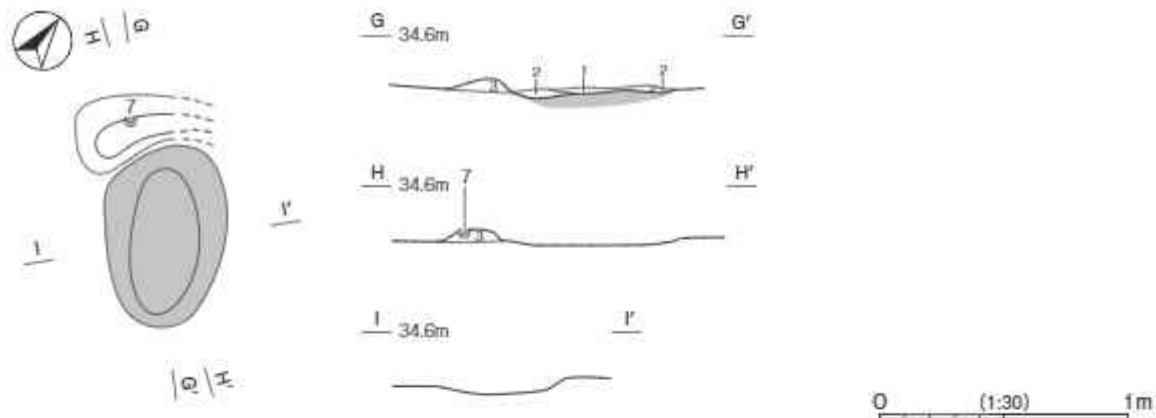
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	大型蛤 刃石芥	159	6.0	4.4	7069	閃緑岩	端打整形後研磨 刃部不全研磨 刃部両面に刃こぼれ状の剥離痕	覆土中層	PL26
7	砥石	228	137	6.0	19538	砂岩	研磨面4面 下面に2か所の凹み 上下面・右側面に筋状の研磨痕	覆土下層	PL27

第33号竖穴建物跡(第43～45図 第20表 PL.6・27)

位置 調査区中央部のI I 5h8区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。



第43図 第33号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



炉土層解説

- 1 10YR4/2 灰緑土 Ⅰ・Ⅱ小D・粒D、焼土小D・粒B、炭化粒D／粒B、粒D
 2 10YR2/3 黒褐土 Ⅰ・Ⅱ小D・粒C、焼土小D・粒C、炭化粒D／粒B、粒C
 3 10YR2/4 黒土 Ⅰ・Ⅱ中D・小D・粒B、焼土C・粒C、炭化粒D
 ／粒B、粒A

第44図 第33号竪穴建物跡実測図(2)

重複関係 第34号竪穴建物跡を掘り込み、第26号竪穴建物、第1号道路、第1号井戸に掘り込まれている。
規模と形状 長軸4.05m、短軸3.95mの隅丸方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁は高さ22～40cmで、ほぼ直立している。

床 若干の凹凸があり、壁に向かって緩やかに高くなっている。中央部が硬化している。

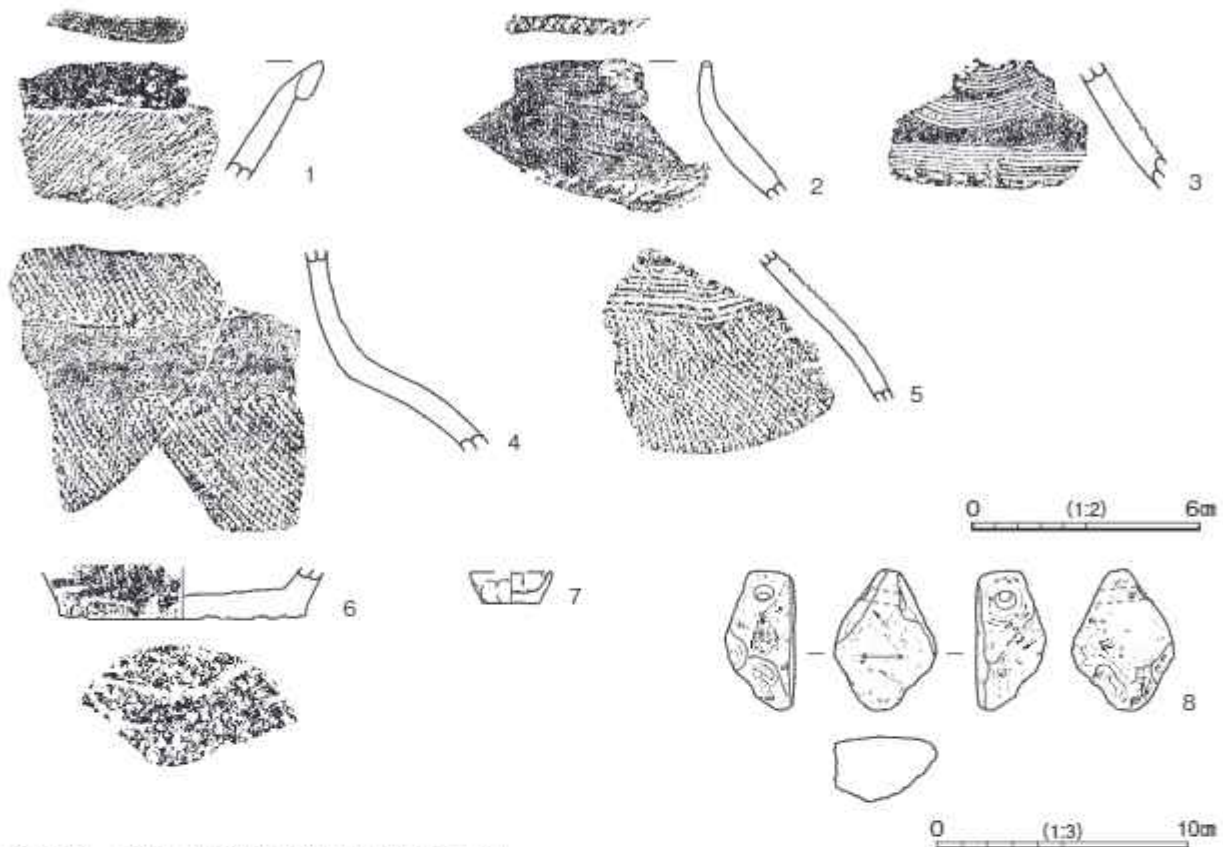
炉 中央部やや北寄りに位置している。長径74cm、短径47cmの楕円形で、深さ2cmの地床炉である。断面は浅い皿状を呈している。炉床面は赤変硬化している。炉の北側に、幅15～20cm、高さ5cmのロームブロックと焼土ブロックを含む褐色土で構築した高まりが巡っている。

ピット 5か所。P1～P4は、深さ56～63cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。P5は深さ34cmで、斜めに掘り込まれており、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P1・P4の第3層は柱痕跡、第4層は柱掘方埋土である。覆土の堆積状況から、柱を床面の高さで切断した可能性がある。P2～P5の第1・2層は柱抜き取り後の流入土である。

覆土 9層に分層できる。第1～3層は周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第4～6層は、ロームブロックを多く含むことと、第7～9層は不自然に床面を覆っていることから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片595点(広口壺594、手捏土器1)、石器14点(石英製剥片10、安山岩製磨石1、軽石製砥石1、砂岩製砥石1、軽石1)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片79点が出土している。遺物は南部の覆土下層から上層にかけて、散在した状態で出土している。広口壺の細片が床面から少量出土している。1・5は南東壁際中央寄り、4は南東部の覆土下層から、6は北コーナー部の覆土中層から、7は炉の北側の高まりの上から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第45図 第33号竖穴建物跡出土遺物実測図

第20表 第33号竖穴建物跡出土遺物一覧 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口罎	—	(31)	—	長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部から頸部に附加条一種附加2条縄文飾文	覆土下層	5% PL27
2	弥生土器	広口罎	—	(37)	—	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部は短く屈曲 口縁部から頸部に附加条一種附加2条縄文飾文	覆土	5% PL27
3	弥生土器	広口罎	—	(34)	—	長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	橢圓状工具(6本撫面)により頸部沖弧文 頸部下段部時計回りの横止文 胴部附加条一種附加2条縄文	覆土	5% PL27
4	弥生土器	広口罎	—	(54)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部附加条一種附加2条縄文飾文後頸部下平強い指ノブ	覆土下層	5% 外面焼付着
5	弥生土器	広口罎	—	(40)	—	長石・石英・白色粒子	橙	普通	胴部にRL縄文飾文後頸部下段橢圓状工具(7本撫面)により横止文飾文	覆土下層	5% PL27
6	弥生土器	広口罎	—	(20)	[97]	長石・石英・白色粒子	橙	普通	胴部RL縄文飾文 底部種子付痕	覆土中層	5%
7	弥生土器	手摺土器	(32)	12	22	長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	内・外面ノブ 底部磨滅	布土層 高まり上部	70% PL27
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
8	砥石	(5.5)	(4.1)	2.8	(1188)	軽石	研磨面1 孔1か所	長径短		覆土	PL27

第34号竖穴建物跡 (第46・47図 第21表 PL27)

位置 調査区中央部のI I 5h8区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第26・33号竖穴建物、第1号道路、第1号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸458m、短軸298mの隅丸長方形で、主軸方向はN-34°-Wである。壁は高さ18~34cmで、外傾している。

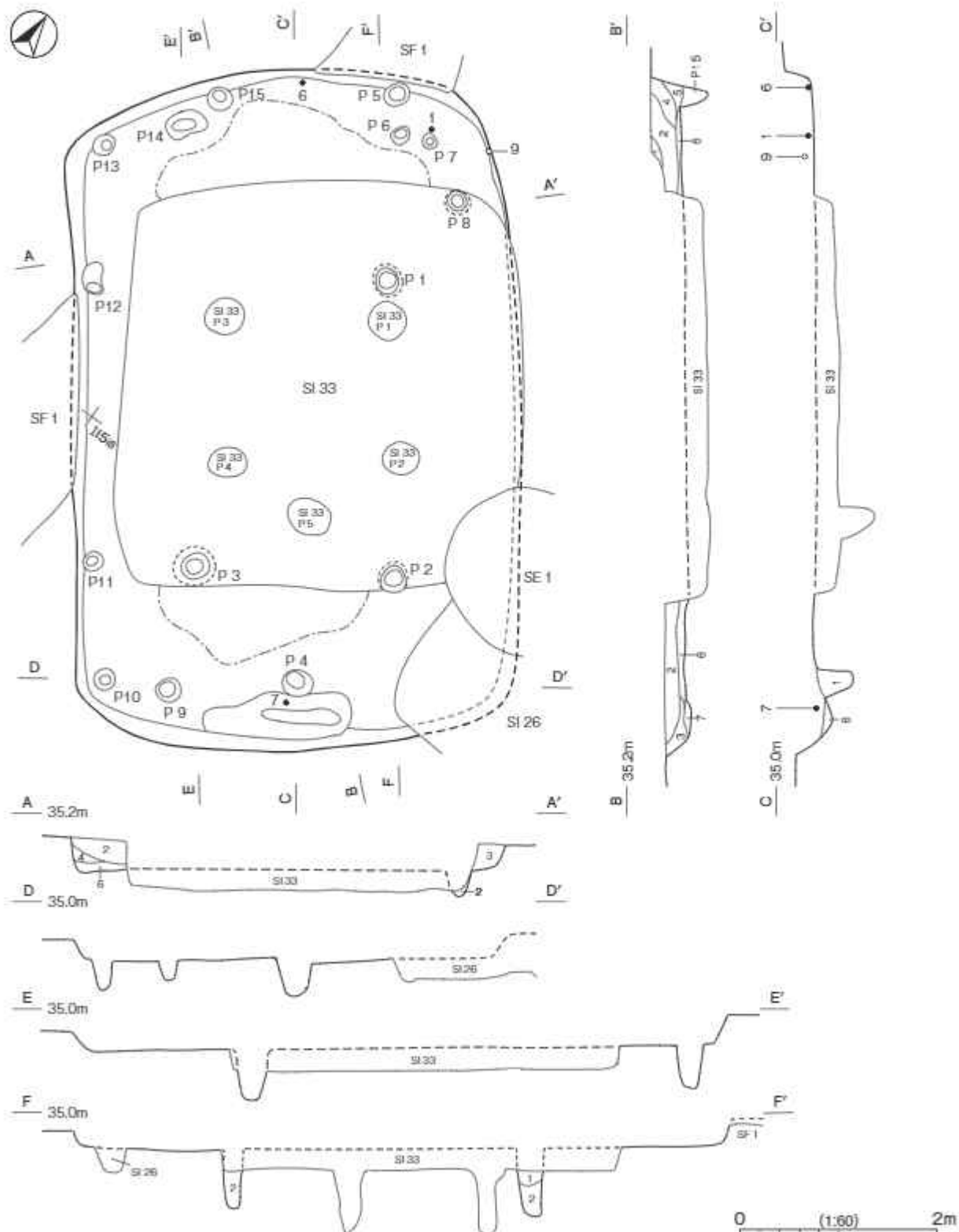
床 ほほ平坦で、壁際を除いて硬化している。南東壁直下中央部には長軸157cm、短軸40cm、深さ15cmほどの溝状の凹みを確認したが、性格は不明である。

ピット 15か所。P1~P3は深さ55~62cmで、配置と規模から主柱穴と考えられる。P4は深さ33cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P5~P15は深さ10~34cmで、補助柱穴と考えられる。P1・

P 2・P 4の第1・2層は柱抜き取り後の流入土である。

覆土 8層に分層できる。第1・2層はロームなどの含有物を均質に含むことから、自然堆積である。壁際に見られる第3～5層は、ロームブロックをやや多く含むことと、第6・7層は不自然に床面を覆っていることから、人為堆積である。第7・8層は南壁直下中央部の溝状凹みの覆土である。

遺物出土状況 弥生土器片 359点（広口壺 358、高坏 1）、土製品 1点（紡錘車）、石器 4点（石英製剥片）、



第46図 第34号竪穴建物跡実測図

土器解説

- 1 10YR23/1 黒釉 コ・ム小D・粒D、焼土粒D/粘土、雑土
 2 10YR23/2 黒釉 コ・ム小C・粒D/粘土、雑土
 3 10YR4/4 釉 コ・ム中C・小C・粒B/粘土、雑土
 4 10YR4/6 釉 コ・ム中C・小B・粒A/粘土、雑土
 5 10YR23/4 黒釉 コ・ム小C・粒B/粘土、雑土

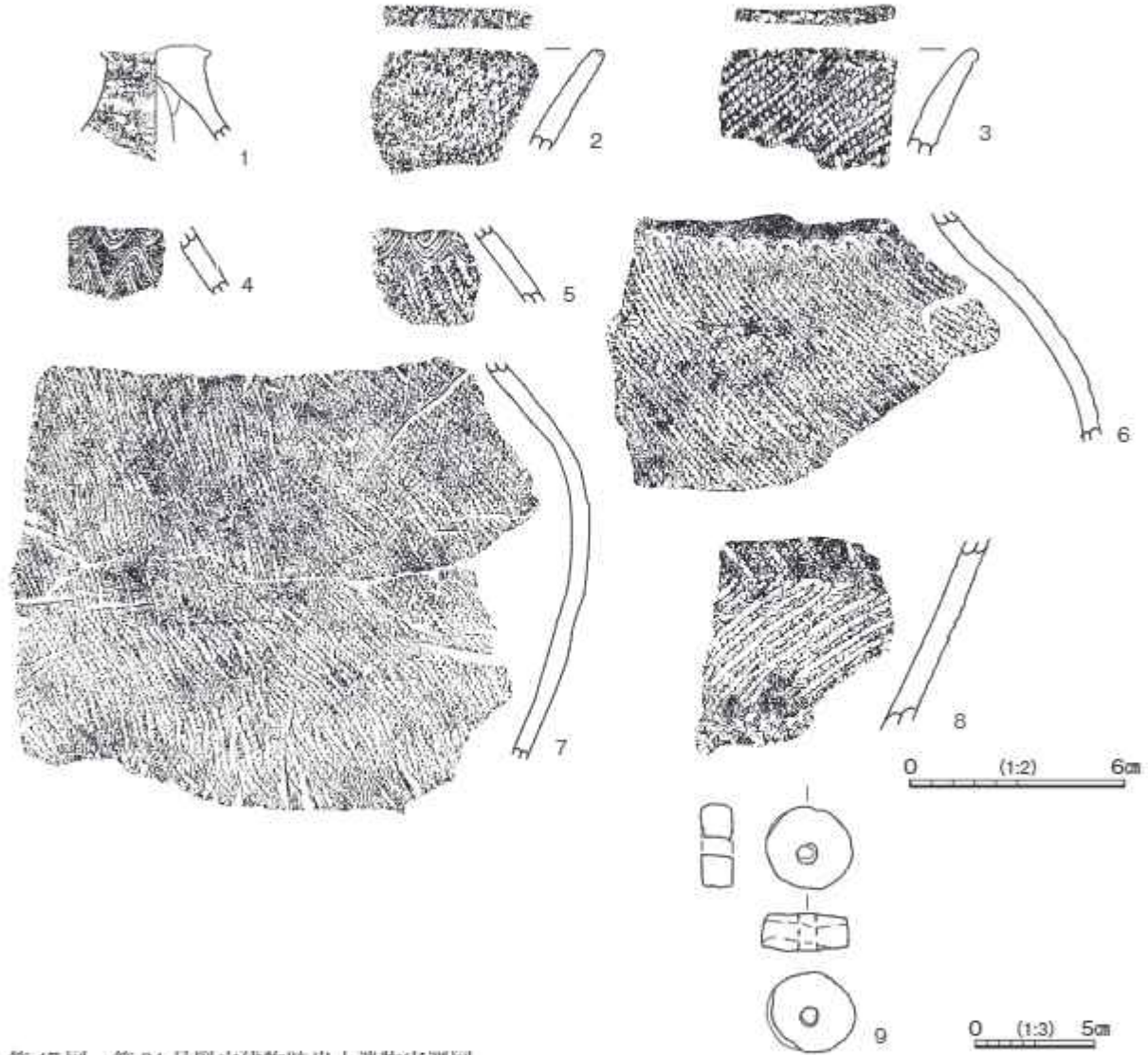
- 6 10YR4/1 黒釉 コ・ム中D・小C・粒C、炭化粒D/粘土、雑土
 7 10YR3/4 釉 コ・ム小C・粒C/粘土、雑土
 8 10YR3/2 黒釉 コ・ム中D・小C・粒C/粘土、雑土

ビッド土器解説 (各ビッド共通)

- 1 10YR23/1 黒釉 コ・ム小C・粒B/粘土、雑土
 2 10YR3/4 釉 コ・ム小D・粒B/粘土、雑土

裸1点(瑪瑙)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片6点が出土している。遺物は主に南部の覆土下層から中層にかけて、散在した状態で出土している。6は北西壁中央床面から、7は南壁際中央の覆土下層から、1・9は北コーナー部の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第47図 第34号竪穴建物跡出土遺物実測図

第21表 第34号竪穴建物跡出土遺物一覧(第47図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	養生土器	高杯		(12)		長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	胴部外面に縄文文	覆土下層	20%
2	養生土器	広口碗		(28)		長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	口唇部から口縁部に附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
3	養生土器	広口碗		(10)		長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口唇部縄文原形押印 口縁部附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5% PL.27
4	養生土器	広口碗		(19)		長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	胴部先端が細い櫛歯状工具(7本櫛歯)による波状文施文	覆土	5%
5	養生土器	広口碗		(22)		長石・石英・白色粒子	橙	普通	附加条一種附加2条縄文施文後胴部下段附加条一種附加2条縄文施文 櫛歯状工具(6本櫛歯)による波状文施文	覆土	5%
6	養生土器	広口碗		(6.4)		長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文	床面	10% 外面僅付着
7	養生土器	広口碗		(11.2)		長石・石英・白色粒子	橙	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文	覆土下層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
8	弥生土器	大口甕		(5.6)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐	普通	附加条一種附加2条縄文羽状施文	覆土	5%
番号	器種	径	厚さ	口径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
9	鉄鉢	36	1.6	0.8	2231	長石・石英・赤母・赤色粒子	赤褐	円盤状 断面長方形 ナツ成形	覆土下層	P127	

第35号竪穴建物跡 (第48・49図 第22表)

位置 調査区中央部 I 15h0区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第26号竪穴建物、第78・80号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部がほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は南北軸4.20m、東西軸2.40mである。隅丸方形もしくは隅丸長方形と推定でき、主軸方向はN-19°-Eである。壁は高さ8~20cmで、外傾している。

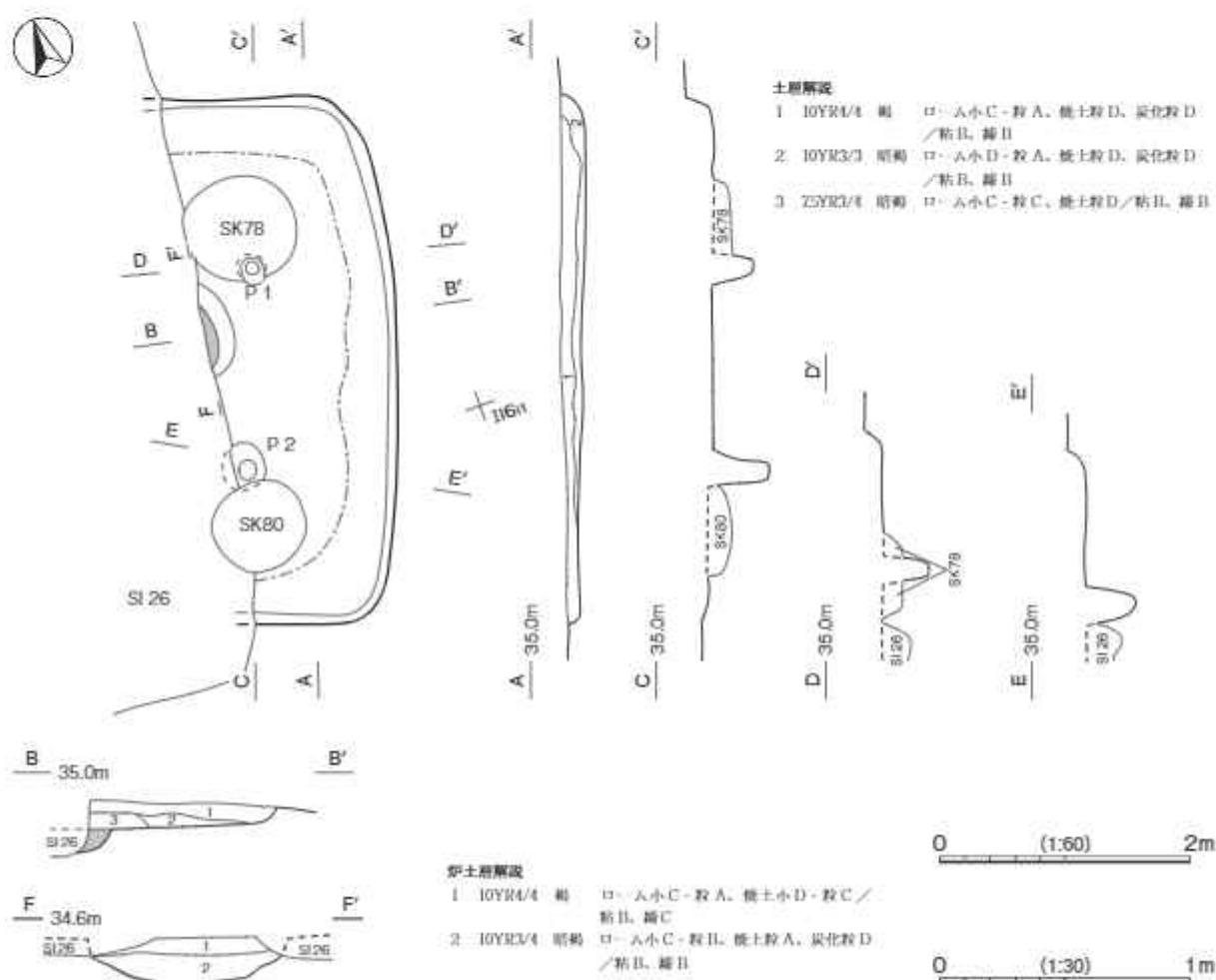
床 確認できた範囲はほぼ平坦である。壁際を除いて硬化している。

炉 ほぼ中央に位置している。確認できた規模は南北軸82cm、東西軸20cmで、楕円形と推測される。深さ10cmほどの地床か、断面は皿状を呈している。確認できたか床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 2か所。P1は深さ31cm、P2は深さ75cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

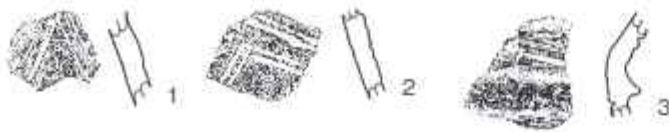
覆土 3層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片67点(大口甕)、石器1点(石英製剥片)が覆土中から出土している。ほかに混入した土師器片18点、焼成粘土塊1点が出土している。



第48図 第35号竪穴建物跡実測図

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



0 (1:2) 6cm

第49図 第35号竪穴建物出土遺物実測図

第22表 第35号竪穴建物跡出土遺物一覧(第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	釜生土器	碗	-	(25)	-	石英・白色粒子・黒色粒子	明褐色	普通	頸部に竹筒状施文具による山形文を施文 内面「安全ナブ」	覆土	5%
2	釜生土器	碗	-	(22)	-	石英・白色粒子・黒色粒子	明赤褐色	普通	頸部に竹筒状施文具による山形文施文	覆土	5%
3	釜生土器	碗	-	(27)	-	石英	にぶい橙	普通	頸部隆帯施竹筒状施文具による横文を施文	覆土	5%

第38号竪穴建物跡(第50・51図 第23表 PL27)

位置 調査区北東部のI16g2区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

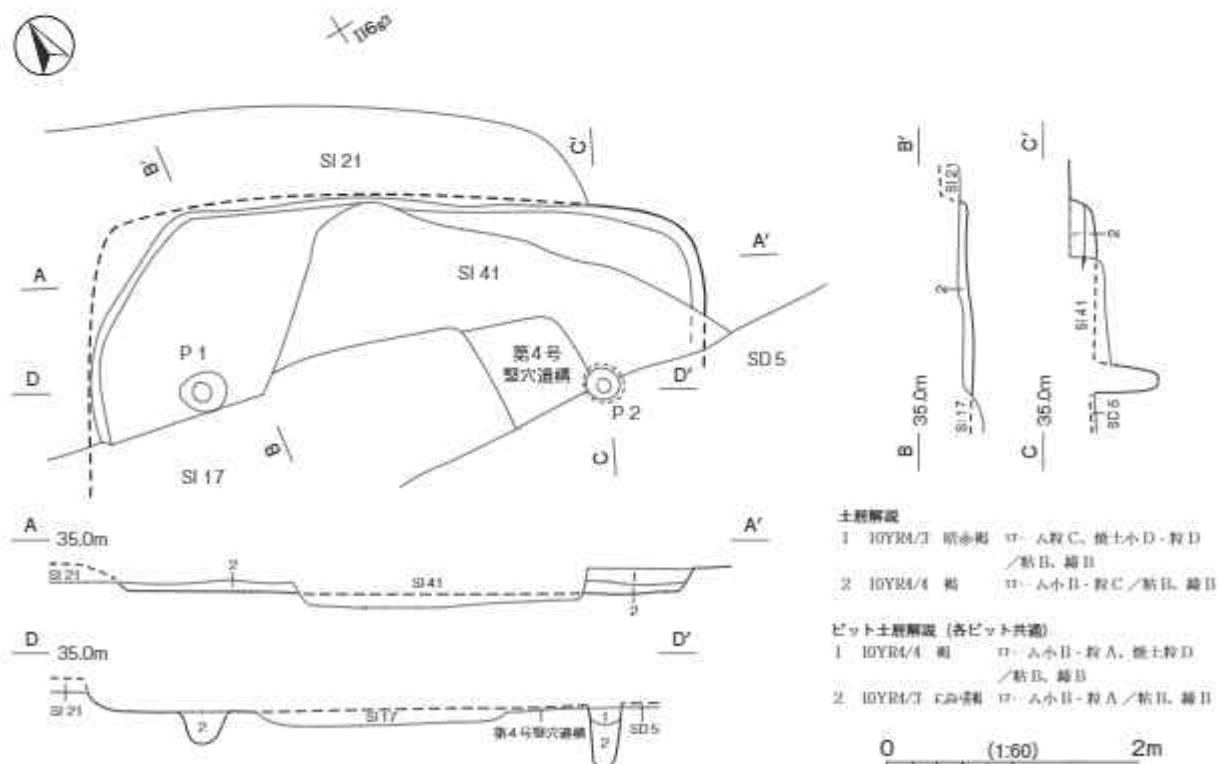
重複関係 第17・21・41号竪穴建物、第4号竪穴遺構、第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部を除いた大半がほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、北西・南東軸で4.93m、北東・南西軸で2.67mである。平面形は隅丸長方形と推測できる。壁は高さ7~22cmで、外傾している。

床 平坦であるが、北壁際に向かって高くなっている。硬化していない。

ピット 2か所。P1は深さ25cm、P2は深さ47cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

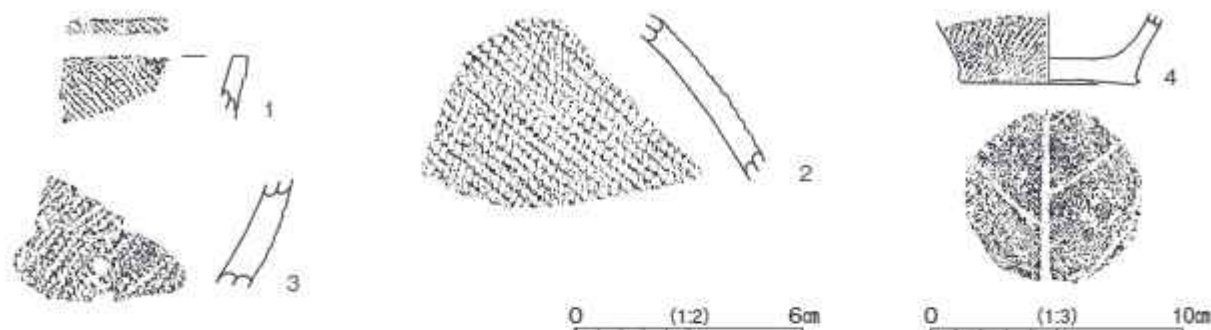
覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。



第50図 第38号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片12点(広口壺)、石器1点(石英製剥片)が出土している。ほかに混入した土師器片9点が出土している。1～4は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。



第51図 第38号竪穴建物跡出土遺物実測図

第23表 第38号竪穴建物跡出土遺物一覧(第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(1.7)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部片 単節瓦施文	覆土	5% PL27
2	弥生土器	広口壺	-	(4.4)	-	長石・石英	黒褐	普通	胴部外面に単節瓦施文 内面ナデ 剥離多量	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺	-	(2.9)	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	附加葉一種附加葉織文を施文	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺	-	(2.8)	7.0	長石・石英	粉	普通	底部外面若干上げ状摩耗焼痕 木炭痕	覆土	5% PL27

第39号竪穴建物跡(第52・53図 第24表 PL27)

位置 調査区東部のI I 6h2区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第27・41号竪穴建物跡、第4号竪穴遺構を掘り込み、第17号竪穴建物、第4・5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部と中央部がほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、長軸5.40m、短軸4.98mである。平面形は長方形で、主軸方向はN-13°-Eと推測できる。壁は高さ18～28cmで、外傾している。

床 はほぼ平坦であるが、西部が高くなっている。中央部南側が硬化している。

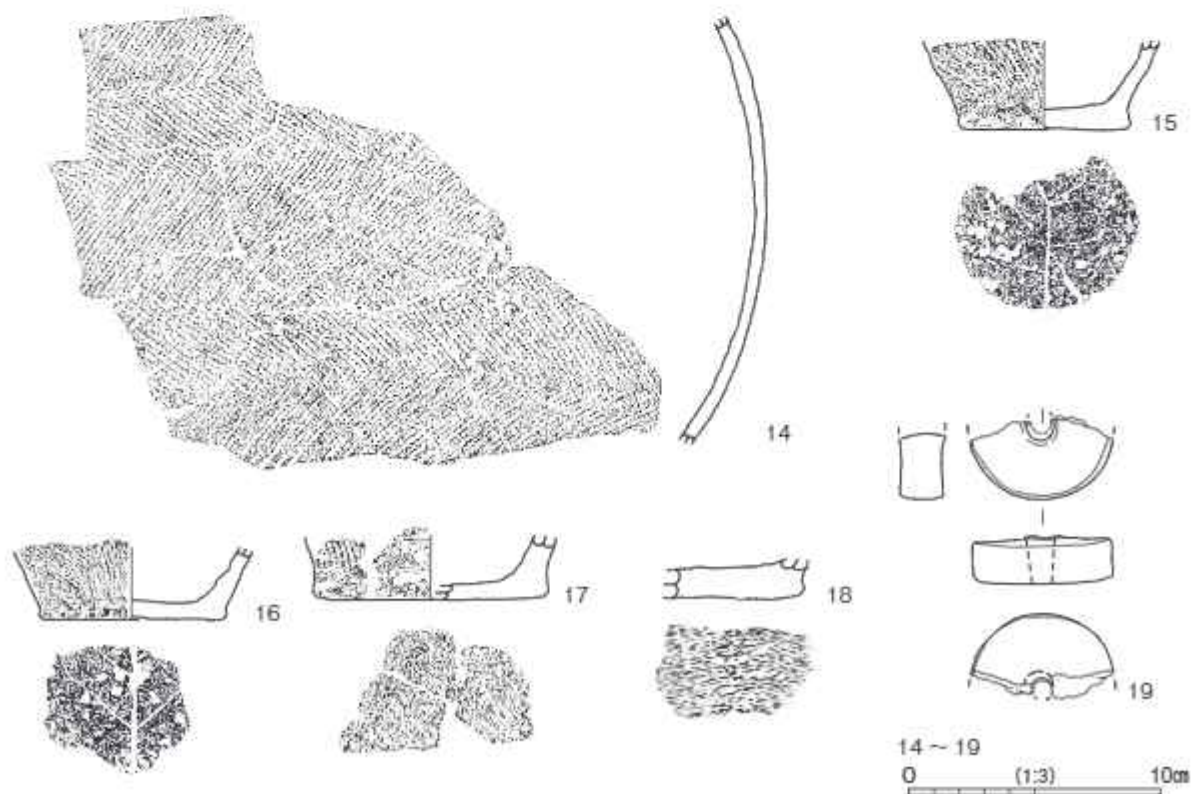
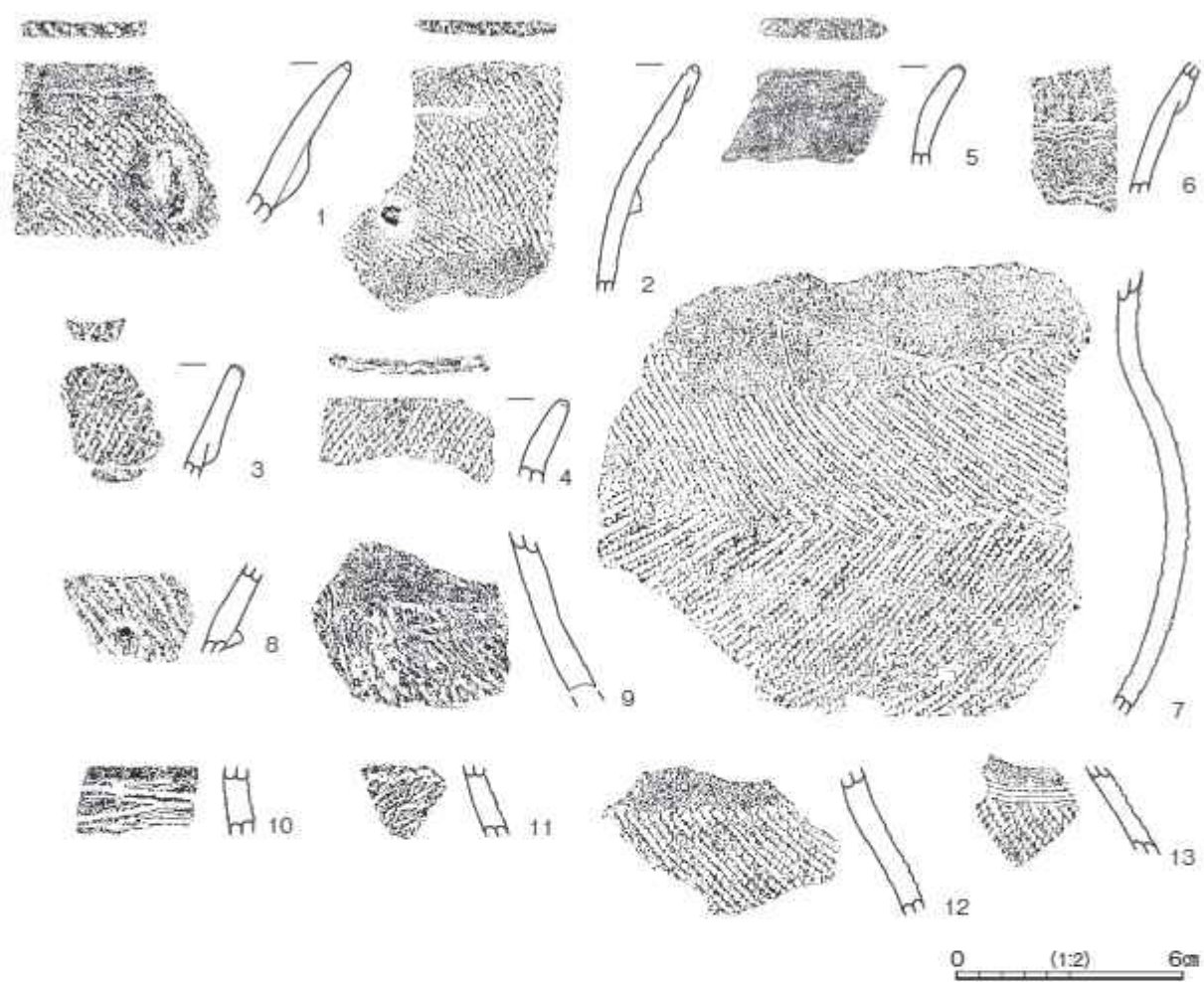
炉 中央部北寄りに位置している。南部が第4号溝に掘り込まれているため、確認できた規模は、長径55cm、短径46cmの楕円形で、深さ6cmほどの地床炉である。断面は皿状を呈しており、炉床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 5か所。P1～P4は深さ75～85cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。P5は深さ22cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層に分層できる。第1層はローム粒子を主体とした均質な含有物を有する黒褐色土で、自然堆積である。第2層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片146点(広口壺)、土製品1点(紡錘車)、石器3点(石英製剥片2、砂岩製砥石1)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片5点、焼成粘土塊1点が出土している。1・15・19は南壁際中央、3・12・16～18は南東コーナー付近の床面から、2は南東部、14は南西隅寄りの覆土下層から、それぞれ出土している。6はP1の覆土中から、7はP3の覆土中から、それぞれ出土している。石英製剥片2点は、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



第53图 第39号竖穴建物跡出土遺物実測図

第24表 第39号竪穴建物跡出土遺物一覧(第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(4.3)	-	石英・雲母・白色粒子	褐	普通	単口縁・口縁部に附加条一種附加2条縄文・口縁部1位にナブによる無文帯 突起貼り付け	床面	5% PL.27
2	弥生土器	広口壺	-	(6.1)	-	石英・雲母・白色粒子	褐	普通	口縁部単口縁・縄文後 附加条一種附加2条縄文・頸部下端に円形の輪状突起貼り付け 胴上半無文帯	覆土下層	5% PL.27
3	弥生土器	広口壺	-	(2.9)	-	長石・石英・砂礫・赤色粒子	褐	普通	口縁部附加条一種附加2条縄文・頸部無文	床面	5%
4	弥生土器	広口壺	-	(2.3)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部に縄文取付押江 口縁部に附加条一種附加2条縄文	覆土	5%
5	弥生土器	広口壺	-	(2.6)	-	石英・白色粒子	暗灰黄	普通	口縁部に附加条一種附加2条縄文・口縁部無文	覆土	5%
6	弥生土器	広口壺	-	(1.5)	-	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	口縁部に縦に凹溝を削いて無文・頸部縄文状土具(4本掘溝)による2段波状文	P1覆土	5%
7	弥生土器	広口壺	-	(11.9)	-	長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	頸部輪状の無文帯 胴部附加条一種附加2条縄文・羽状横溝	P3覆土	30% PL.27
8	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	-	長石・石英・白色粒子	明褐	普通	口縁部に附加条一種附加1条後突起貼り付け	覆土	5%
9	弥生土器	広口壺	-	(4.2)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	頸部無文 胴部無文 胴部下端突起	覆土	5%
10	弥生土器	広口壺	-	(1.8)	-	長石・石英・赤色粒子	黄橙	普通	2条1単位の平行沈線で横線文を施文	覆土	5%
11	弥生土器	広口壺	-	(2.0)	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	無文・施文後削突河	覆土	5%
12	弥生土器	広口壺	-	(4.0)	-	長石・石英・雲母・白色粒子	黒褐	普通	頸部無文 胴部附加条一種附加1条縄文	床面	5%
13	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	-	長石・石英・雲母	灰褐	普通	頸部無文 頸部下端に縄文状土具(4本掘溝)による横止区両文 胴部附加条一種附加1条縄文	覆土	5%
14	弥生土器	広口壺	-	(16.8)	-	長石・石英・砂礫・白色粒子	橙	普通	胴部上平附加条一種附加1条縄文・胴部下平附加1条縄文	覆土下層	10%
15	弥生土器	広口壺	-	(3.5)	6.8	長石・石英・細礫・白色粒子	明褐	普通	胴部附加条一種附加2条縄文・底部木葉痕	床面	5%
16	弥生土器	広口壺	-	(2.5)	[7.2]	長石・石英・白色粒子	にぶい赤褐	普通	胴部単口縁・縄文・底部木葉痕	床面	5%
17	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	[8.8]	長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	胴部単口縁・縄文・底部木葉痕	床面	5%
18	弥生土器	広口壺	-	(1.6)	-	長石・石英・細礫	橙	普通	底部木葉痕	床面	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
19	鉄鑄車	(5.6)	1.8	(1.1)	(34.9)	長石・雲母・黒色粒子	橙	円盤状 断面長方形で中央部が若干肥厚 全面ナブ調整	床面	

第40号竪穴建物跡(第54・55図 第25表 PL.6・28)

位置 調査区東部のI I 613区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第49号竪穴建物跡を掘り込み、第27号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.56m、短軸2.95mの隅丸長方形で、主軸方向はN-34°-Wである。壁は高さ30~43cmで、外傾している。

床 ほほ平坦で、壁際を除いて硬化している。

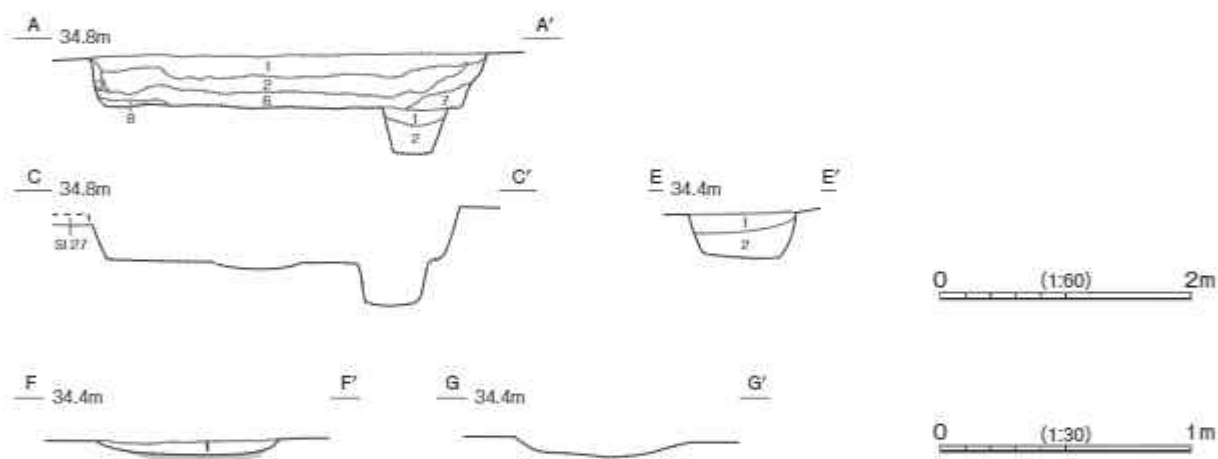
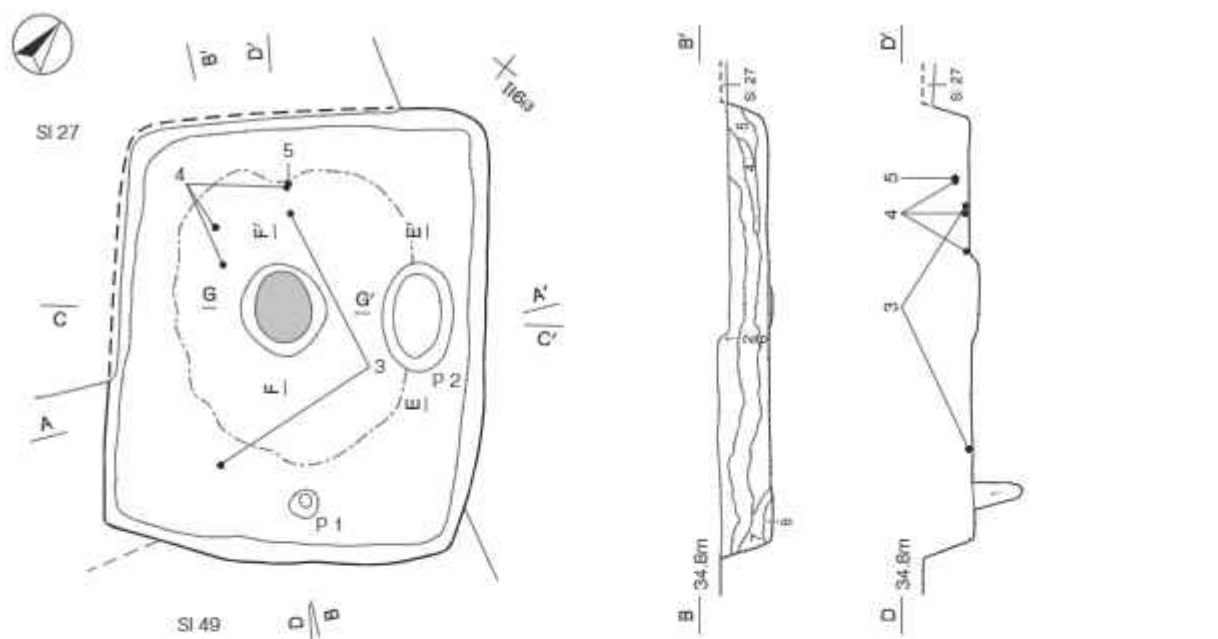
炉 中央部に位置している。長径72cm、短径67cmの円形で、深さ10cmの地床炉である。断面は皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。

ピット 2か所。P1は深さ36cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P2は深さ30cmの楕円形で、性格は不明である。

覆土 8層に分層できる。各層にロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片558点(高坏2、広口壺556)、石器2点(石英製剥片)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片15点が出土している。遺物は主にこの北西側の覆土下層から上層にかけて、散在して出土している。広口壺の破片が床面からは少量出土している。3は北西部と南部の床面から出土した破片が、4は西部床面と覆土下層から出土した破片が、それぞれ接合している。5は西部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



土層解説

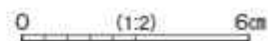
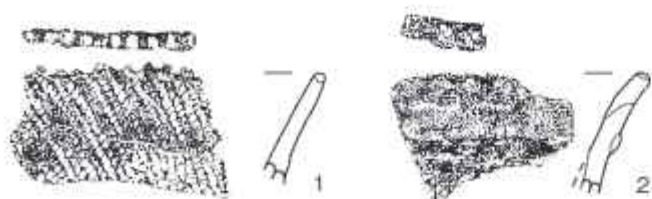
- | | | | |
|---|-------------|---|--------------------|
| 1 | 10YR3/4 暗褐色 | □ | △中D・小C・粒C／粘B、雜II |
| 2 | 10YR3/3 暗褐色 | □ | △小B・粒C／粘B、雜II |
| 3 | 10YR4/4 褐色 | □ | △小B・粒B、焼土粒D／粘B、雜II |
| 4 | 10YR4/6 褐色 | □ | △中C・小D・粒C／粘B、雜II |
| 5 | 10YR4/3 灰褐色 | □ | △中B・小B・粒A／粘B、雜II |
| 6 | 10YR4/4 褐色 | □ | △小B・粒B、焼土粒D／粘B、雜II |
| 7 | 10YR4/3 灰褐色 | □ | △中C・小B・粒A／粘B、雜II |
| 8 | 10YR4/6 褐色 | □ | △中B・小B・粒A／粘B、雜II |

ピット土層解説 (各ピット共通)

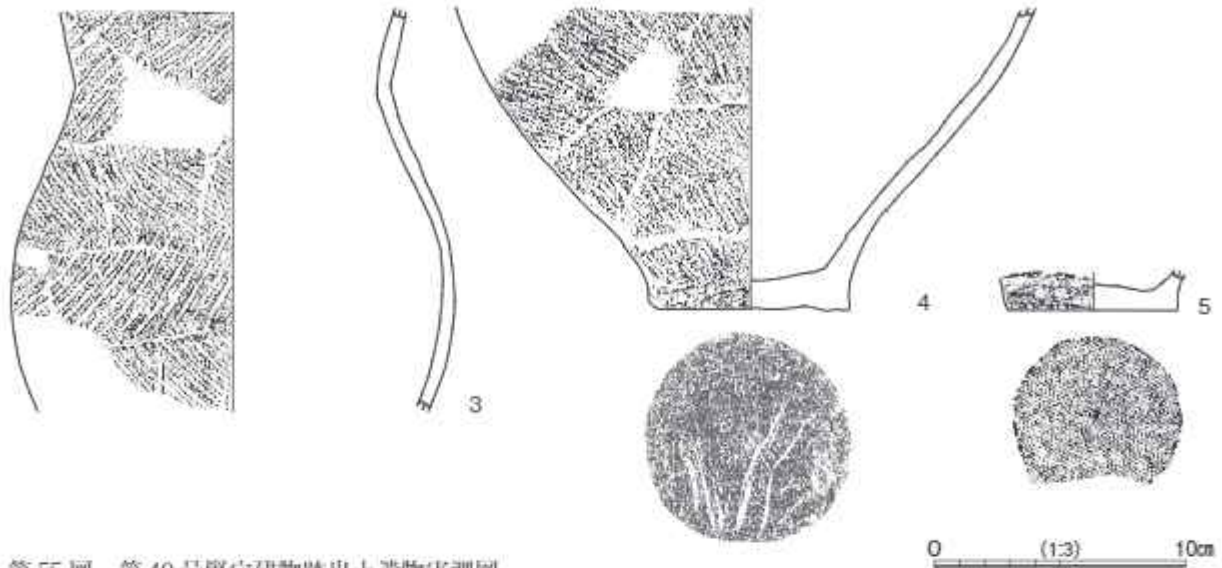
- | | | | |
|---|-------------|---|--------------------|
| 1 | 10YR3/3 暗褐色 | □ | △小D・粒D、焼土粒D／粘B、雜II |
| 2 | 10YR3/4 暗褐色 | □ | △小C・粒B／粘B、雜C |

炉土層解説

- | | | | |
|---|--------------|---|-------------------------|
| 1 | 7.5YR3/3 暗褐色 | □ | △小D・粒C、焼土粒C、炭化粒D／粘C、雜II |
|---|--------------|---|-------------------------|



第54図 第40号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第55図 第40号竪穴建物跡出土遺物実測図

第25表 第40号竪穴建物跡出土遺物一覧(第54・55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	—	(310)	—	長石・石英・白色粒子	褐色	普通	口縁部縄文原体押印 口縁部附加条一種附加2条縄文飾文	覆土	5% PL28
2	弥生土器	広口壺	—	(311)	—	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部縄文原体結節部押印 口縁部接合痕 頸部隆帯張り付け 赤彩痕	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺	—	(162)	—	長石・石英・白色粒子	にぶい赤褐色	普通	胴部以下胴部附加条一種附加2条縄文羽状飾文	床面	30% PL28
4	弥生土器	広口壺	—	(119)	7.8	長石・石英・黒色粒子	にぶい褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文飾文 底部分雲籠方向のヘリナツブ 底部分木葉痕	床面 覆土上層	5% PL28
5	弥生土器	広口壺	—	(15)	6.6	長石・石英・白色粒子	褐色	普通	胴部ヘリナツブ 底部分木葉痕	覆土下層	5% PL28

第44号竪穴建物跡(第56・57図 第26表 PL7・28)

位置 調査区中央部の1J5c8区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第2・3号墳に掘り込まれている。

規模と形状 北・東部がほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は長軸4.20m、短軸3.95mで、本来は長軸4.30mほどの隅丸長方形と推定できる。主軸方向はN-21°-Wである。壁は高さ40~64cmで、外傾している。

床 ほほ平坦であるが、南壁際寄りから南西コーナー寄りの床面が低くなっている。中央部が硬化している。

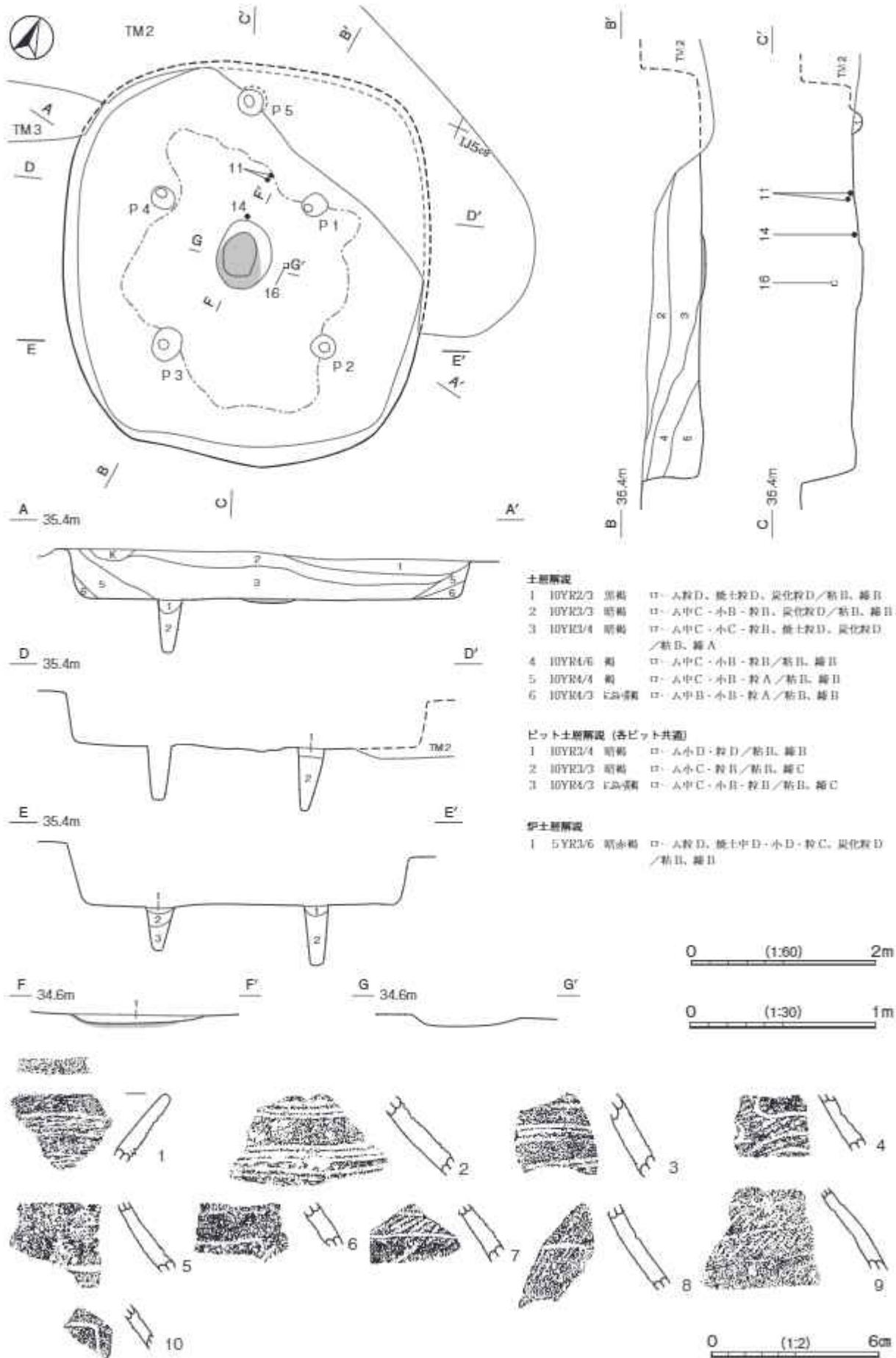
炉 中央部に位置している。長径79cm、短径55cmの楕円形で、深さ6cmの地床がである。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。

ピット 5か所。P1~P4は深さ45~65cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜られている。P5は深さ10cmほどで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層に分層できる。第1層は含有物が均質であること、第2~3層はロームブロックを多く含むものの、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第4~6層は上層よりもロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片957点(広口壺956、蓋1)、石器9点(石英製剥片)、石製品1点(緑色凝灰岩製管玉)が出土している。ほかに混入した縄文土器片8点、土師器片112点、焼成粘土塊1点、石器7点、不明鉄製品2点が出土している。弥生土器片は、床面から覆土下層にかけて多く出土している。11・14は北側の覆土下層から、16は中央部の覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第56図 第44号竪穴建物跡・出土遺物実測図(1)



第57図 第44号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第26表 第44号竪穴建物跡出土遺物一覧(第56・57図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐色	普通	口内縁附加条一種附加2条施文・外面然余文施文後竹管状工具による区画外磨消	覆土	5%
2	弥生土器	広口壺	-	(2.9)	-	長石・石英・白色粒子	灰黄褐色	普通	半截竹管状工具による横走文	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺	-	(3.0)	-	長石・石英・白色粒子	橙	普通	沈堀による横走文	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺	-	(2.0)	-	長石・石英・白色粒子	橙	普通	LJ 施文後沈堀区画による磨消縄文	覆土	5% PL28
5	弥生土器	広口壺	-	(2.6)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	縄文施文後沈堀区画による磨消縄文	覆土	5% PL28
6	弥生土器	広口壺	-	(1.7)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	縄文施文後沈堀区画による磨消縄文	覆土	5% PL28
7	弥生土器	広口壺	-	(2.1)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	縄文施文後沈堀区画による磨消縄文	覆土	5%
8	弥生土器	広口壺	-	(3.1)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	縄文施文後沈堀区画による磨消縄文	覆土	5%
9	弥生土器	広口壺	-	(3.1)	-	長石・石英・赤褐色・白色粒子	橙	普通	IL 縄文施文後沈堀区画による磨消縄文	覆土	5%
10	弥生土器	広口壺	-	(1.7)	-	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	縄文施文後沈堀による方形区画	覆土	5%
11	弥生土器	広口壺	[11.0]	(8.0)	-	長石・石英・赤褐色・白色粒子	褐	普通	沈堀方形区画による磨消縄文	床面一層上層	20% PL28
12	弥生土器	広口壺	-	(3.0)	[8.0]	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	普通	附加条一種附加2条施文・底部木炭痕	覆土	5%
13	弥生土器	広口壺	-	(3.9)	[6.2]	長石・石英・赤褐色・赤褐色・白色粒子	にぶい橙	普通	附加条一種附加2条施文・内面ナツ・折頸痕	覆土	5%
14	弥生土器	広口壺	-	(3.5)	[6.2]	長石・石英・赤褐色・白色粒子	にぶい橙	普通	疑似縄文施文・オオバコ刷転文	覆土下層	5%
15	弥生土器	甕	2.3	(1.1)	-	長石・石英・白色粒子	橙	普通	外面ナツ・内面剥落・胎土に炭化物	覆土	5%
番号	器種	長さ	幅/厚さ	孔径	重量	石材	色調	特徴	出土位置	備考	
16	管玉	2.5	0.5	0.2	0.98	緑色凝灰岩	灰オリーブ	両方向からの穿孔	覆土中層	PL28	

第47号竪穴建物跡(第58図 第27表 PL7・28)

位置 調査区東部のI I 6j4区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第49号竪穴建物跡を掘り込み、第43号竪穴建物、第285号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西部がほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、長軸3.60m、短軸3.15mで、平面形は隅丸長方形と推定できる。主軸方向はN-53°-Eである。壁は高さ5~8cmで、外傾している。

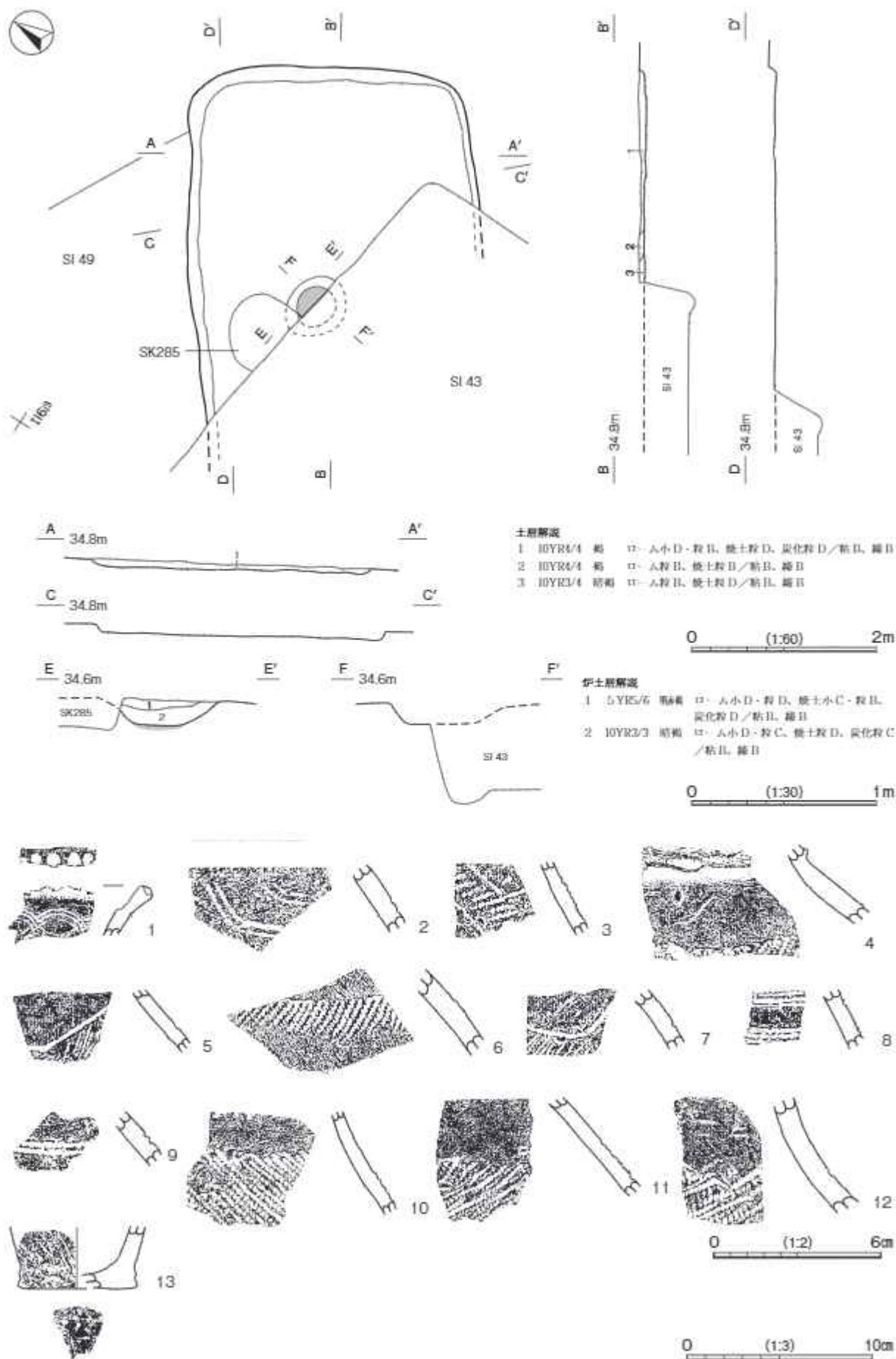
床 確認できた範囲はほぼ平坦で、硬化はしていない。

炉 中央部付近に位置していると推定できる。かの両側が削平されているため、確認できた規模は、長径70cm、短径59cmである。平面形は楕円形と推定でき、深さ13cmの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。

覆土 3層に分層できる。ローム粒子を均質に含むことから、自然堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片85点(広口壺)が出土している。ほかに混入した土師器片36点(甕)が出土している。弥生土器片は、主に外周部や北西部の覆土中から出土している。

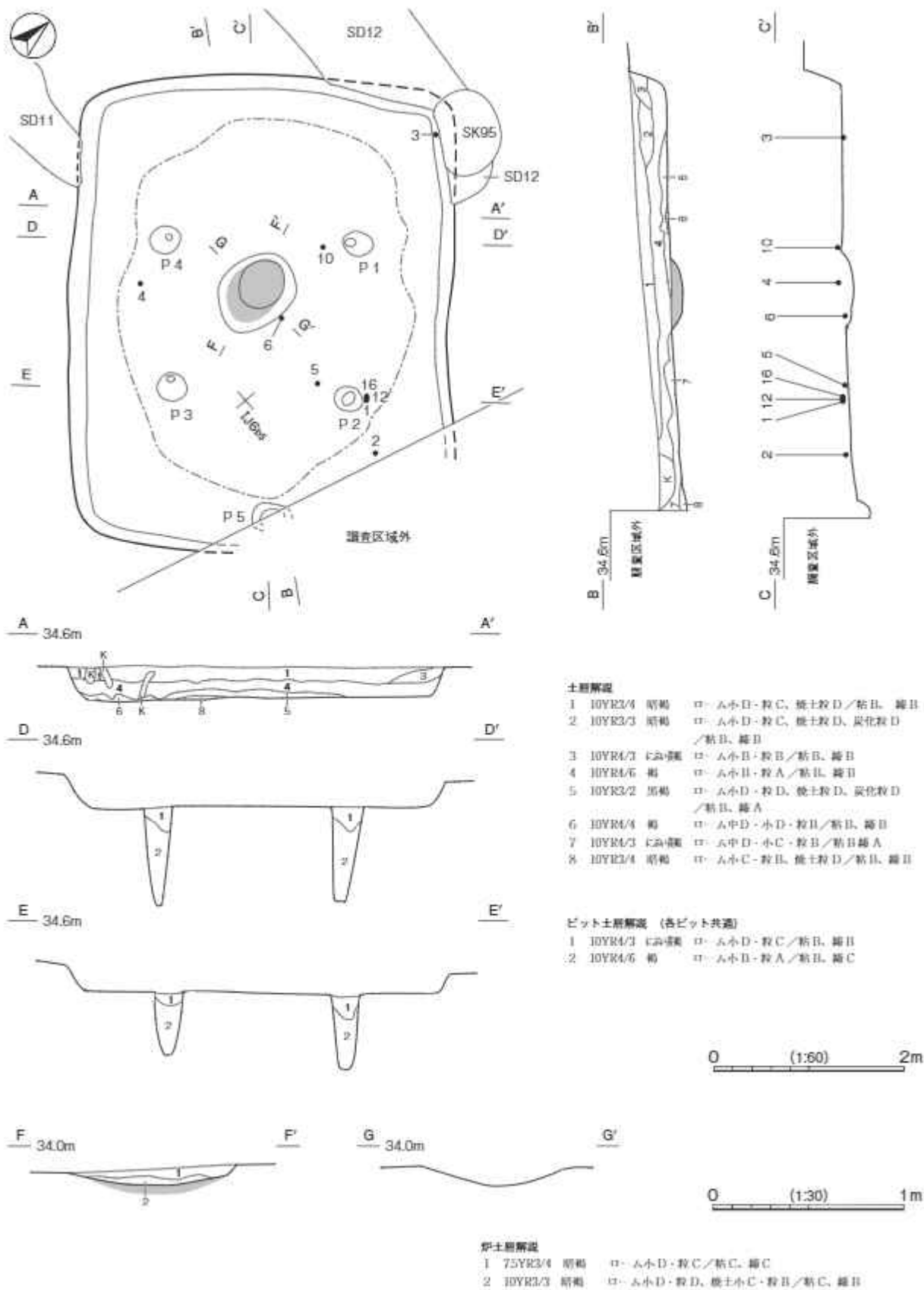
所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



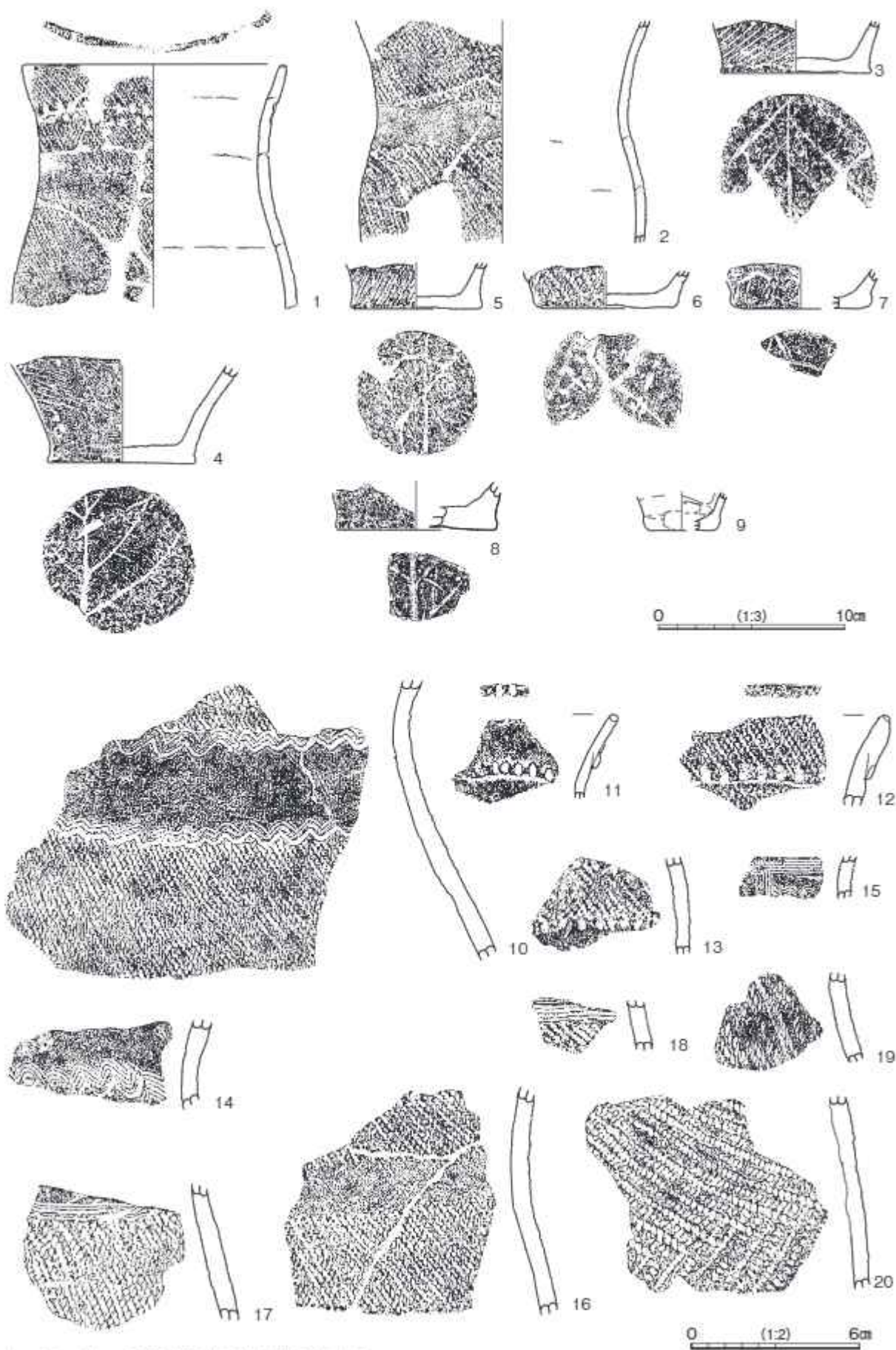
第58图 第47号竖穴建物跡・出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	養生土器	広口罎	—	(18)	—	長石・石英・黒色粒子	赤褐色	普通	口唇部に縄文原体片痕、口縁部外面に礫面状土具(3本縄面)による逆弧文	覆土	5% 図28
2	養生土器	広口罎	—	(25)	—	長石・石英	橙	普通	半截竹管状土具による逆弧文	覆土	5%
3	養生土器	広口罎	—	(26)	—	長石・石英・雲母	にぶい青緑	普通	単節RL縄文施文後沈線区画した外側磨り消し	覆土	5%
4	養生土器	広口罎	—	(36)	—	長石・石英	にぶい青緑	普通	胴部上半幅広の無文帯 胴部附加条縄文施文	覆土	5%
5	養生土器	広口罎	—	(24)	—	長石・石英・雲母	にぶい青緑	普通	単節RL縄文施文後沈線区画した外側磨り消し	覆土	5% 図28
6	養生土器	広口罎	—	(32)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	帯状に単節RL縄文施文	覆土	5%
7	養生土器	広口罎	—	(21)	—	長石・石英	灰青褐色	普通	附加条一種附加2条施文後沈線区画した内側磨り消し	覆土	5%
8	養生土器	広口罎	—	(21)	—	長石・石英	にぶい青緑	普通	3本沈線の横線文2段施文	覆土	5%
9	養生土器	広口罎	—	(20)	—	長石・石英	にぶい青緑	普通	2本沈線による円弧文	覆土	5%
10	養生土器	広口罎	—	(38)	—	長石・石英	にぶい青緑	普通	胴部無文帯 単節LR縄文施文	覆土	5%
11	養生土器	広口罎	—	(35)	—	長石・石英	黒褐色	普通	胴部幅広の無文帯 胴部附加条一種附加2条施文	覆土	5%
12	養生土器	広口罎	—	(41)	—	長石・石英	にぶい青緑	普通	胴部無文帯 胴部附加条一種附加2条施文	覆土	5%
13	養生土器	広口罎	—	(33)	[60]	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部外面附加条一種附加2条施文 底部磨滅	覆土	5%

第48号竪穴建物跡(第59・60図 第28表 PL7・28・



第59図 第48号竪穴建物跡実測図



第60图 第48号竖穴建物跡出土遺物実測図

重複関係 第40・43・47号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、北東・南西軸3.06m、北西・南東軸1.30mである。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形と推測できる。壁は高さ4～12cmで、外傾している。

床 ほほ平坦である。硬化はしていない。

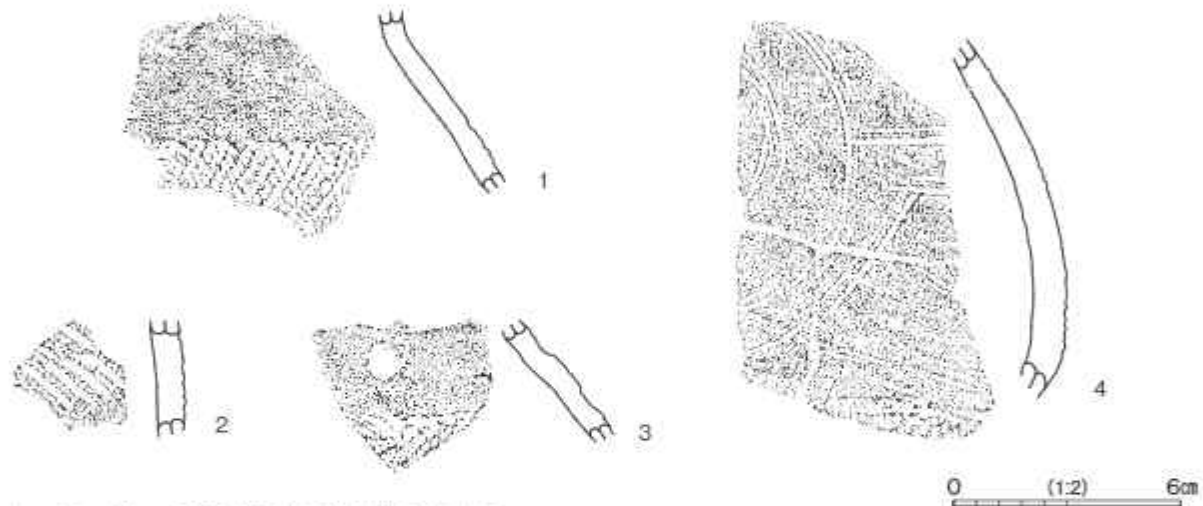
炉 中央部北東寄りに位置している。長径80cm、短径65cmの楕円形で、深さ7cmほどの地床かである。断面は皿状を呈している。か床面は赤変硬化している。

ピット 2か所。P1は深さ57cmで、配置から支柱穴の可能性がある。P2は深さ25cmで、性格は不明である。覆土の堆積状況から、いずれも抜き取られている。

覆土 単一層である。ほほ床面が露出しており、層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 弥生土器片22点（広口壺）が出土している。ほかに混入した土師器片2点が出土している。1～3は覆土中から、4はP1の覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第62図 第49号竪穴建物跡出土遺物実測図

第29表 第49号竪穴建物跡出土遺物一覧（第62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺		(5.6)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐色	普通	頸部無文 胴部附加条1種附加1条縄文施文	覆土	5% PL.29
2	弥生土器	広口壺		(3.1)		長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐色	普通	附加条1種附加2条縄文施文	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺		(1.9)		長石・石英・雲母・白色粒子	黒	普通	頸部無文 胴部附加条縄文施文	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺		(9.6)		長石・石英	灰黄褐色	普通	手轆竹管による平口頸文施文後 横位施文 胴下半は早稲縄文施文	P1 覆土中層	5% PL.29

第51号竪穴建物跡（第63図 第30表 PL.7）

位置 調査区中央部のI J 6 b2区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1・2号掘立柱建物、第60・130・287・288号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は長軸3.28m、短軸2.76mの楕円形で、主軸方向はN-61°-Eである。壁は高さ2～4cmで、外傾している。

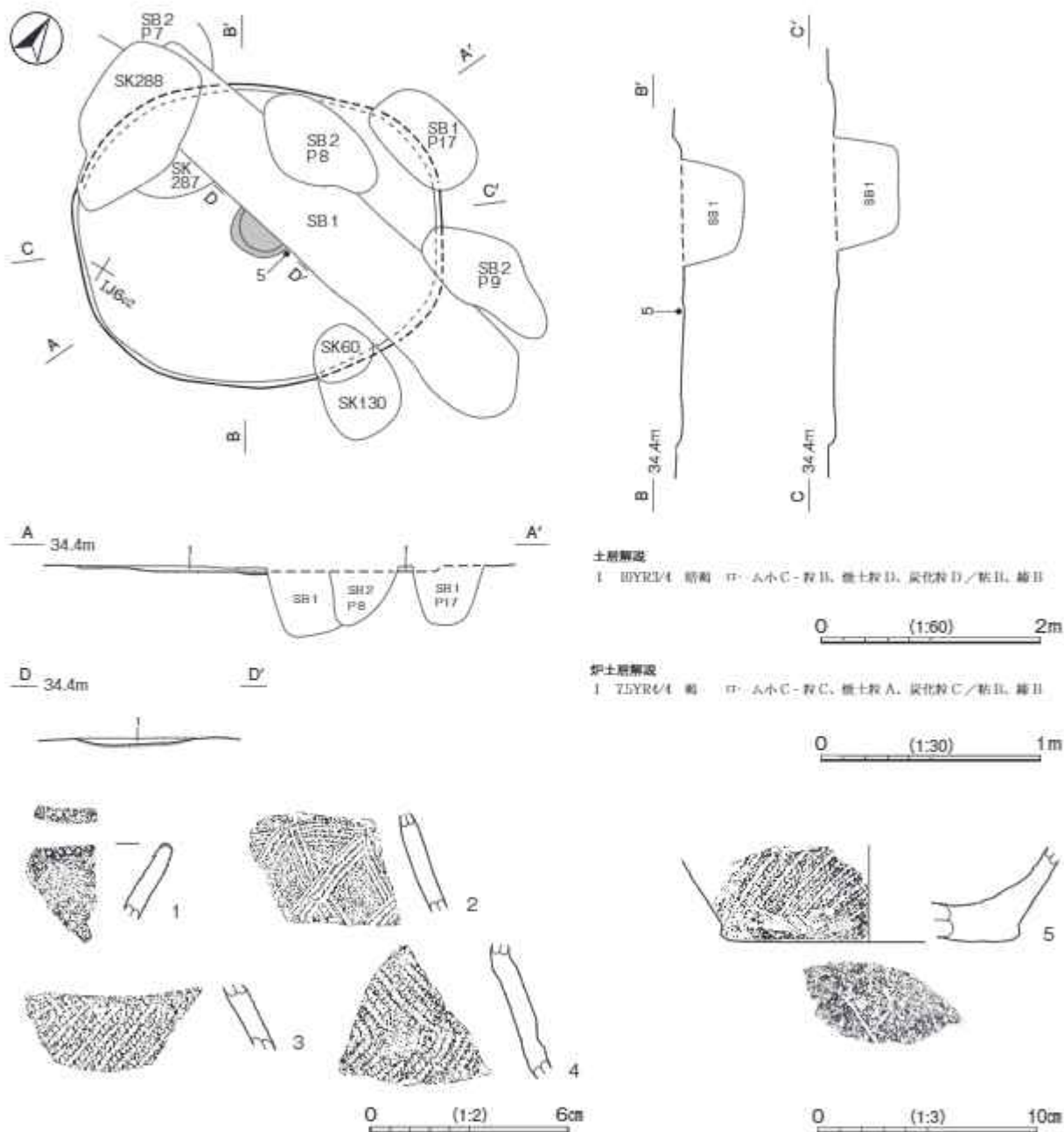
床 ほほ平坦であるが、南部が緩やかに高くなっている。硬化はしていない。

炉 中央部に位置している。確認できた規模は東西径56cm、南北径28cmの楕円形と推定できる。深さ4cmほどの地床かで、断面は皿状を呈している。か床面は僅かに赤変硬化している。

覆土 単一層である。層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 弥生土器片 28 点 (広口壺) が出土している。このほか混入した土師器片 5 点が出土している。5 は中央部覆土下層から、出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。



第 63 図 第 51 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 30 表 第 51 号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第 63 図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺		(23)		長石	明黄褐	普通	口唇部平造 LR 縄文施文 口縁部無文	覆土	5%
2	弥生土器	広口壺		(31)		石英・黒色粒子	褐色	普通	腹部飾面状工具 (5 本縄面) で横位区画 4 本単位の飾面状工具で右ト・左トがりの順で斜格子施文	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺		(20)		長石・石英・黒色粒子	赤褐	普通	付加条一種付加 1 条縄文施文	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺		(40)		長石・石英	黄褐	普通	羽状構成に RL 縄文施文	覆土	5%
5	弥生土器	広口壺		(44)	[134]	石英	明赤褐	普通	胴部下端付加条一種付加 1 条縄文施文後ナツ底面外面木炭製	覆土下層	5%

第53号竪穴建物跡 (第64・65図 第31表 PL7)

位置 調査区東部のI J 6c2区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第52A・52B号竪穴建物、第1号・2号掘立柱建物、第107・127・272号土坑、第5号土坑墓に掘り込まれている。

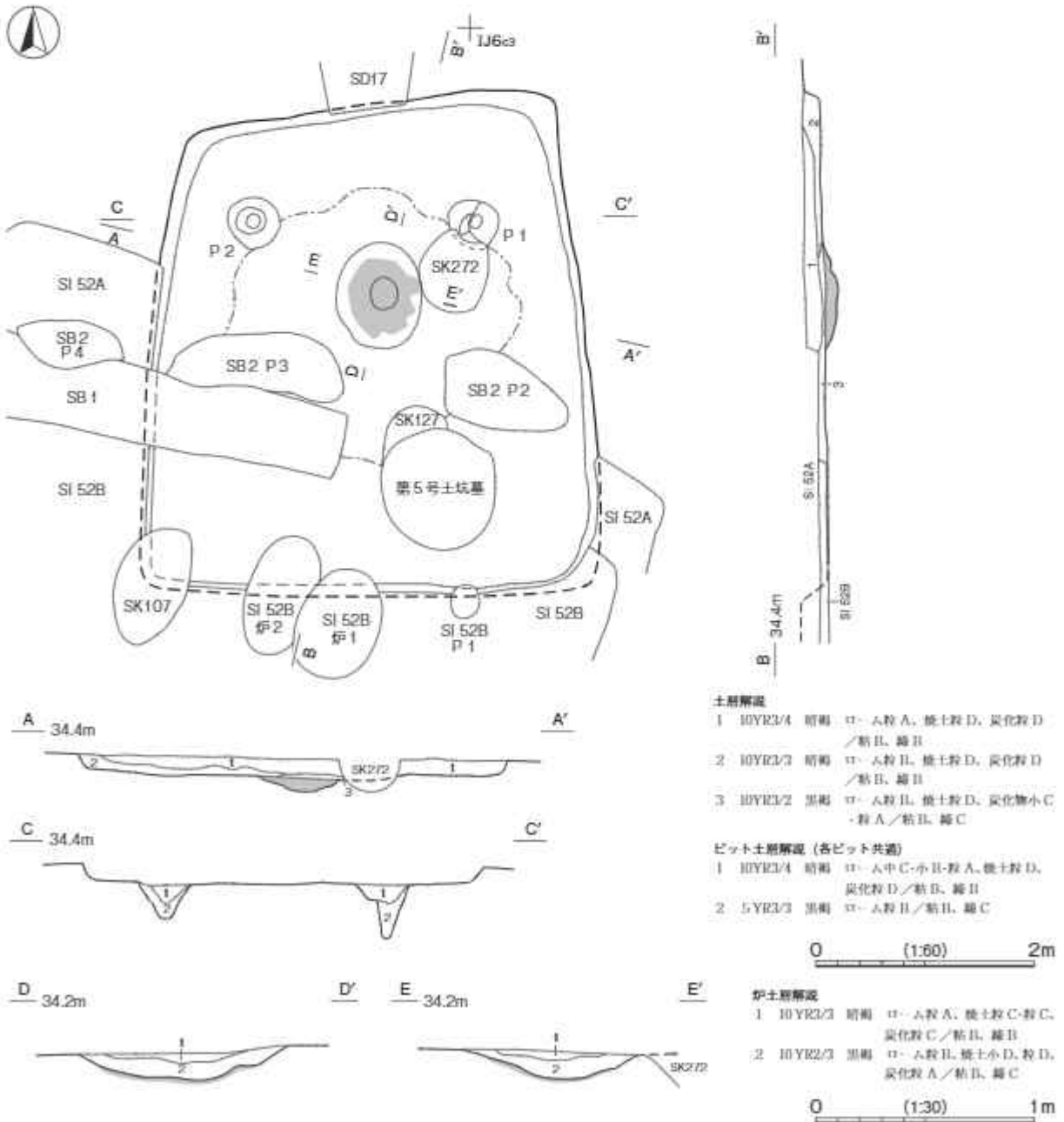
規模と形状 長軸4.56m、短軸4.10mの台形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁は高さ14~16cmで、外傾している。

床 ほぼ平坦である。西部に向かって緩やかに高くなっている。中央部が硬化している。

炉 中央部北寄りに位置している。長径96cm、短径76cmの楕円形で、深さ10cmほどの地床かである。断面は皿状を呈しており、炉床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 2か所。P1は深さ52cm、P2は深さ31cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

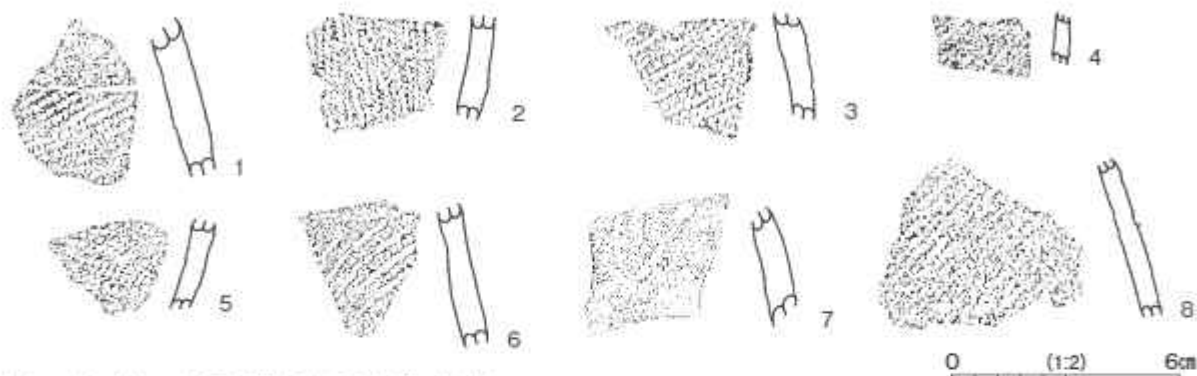
覆土 3層に分層できる。周辺からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。



第64図 第53号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 弥生土器片 72 点 (広口壺)、石器 4 点 (石英製剥片) が出土している。ほかに混入した縄文土器片 2 点、土師器片 6 点、陶器片 1 点、焼成粘土塊 1 点が出土している。1～4・7・8 は覆土中から、5 は P2 の覆土中から、6 は P2 の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第 65 図 第 53 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 31 表 第 53 号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第 65 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺		(4.3)		長石・石英・赤色粒子	にぶい青黒	普通	副部北縁で円弧状の区画 副部単箇 LR 縄文施文	覆土	5%
2	弥生土器	広口壺		(2.8)		長石・石英・細礫	にぶい青	普通	単箇 RL 縄文施文	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺		(2.3)		長石・石英・赤色粒子	粉	普通	附加条一種附加 1 条縄文施文	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺		(1.4)		長石・石英・黒色粒子	明赤褐	普通	1 段 R の標糸文を施文	覆土	5%
5	弥生土器	広口壺		(2.3)		長石・石英・黒色粒子	にぶい青黒	普通	単箇 LR 縄文施文	P2 覆土	5%
6	弥生土器	広口壺		(3.8)		長石・石英・黒色粒子	明褐	普通	附加条一種附加 2 条縄文施文	P2 覆土	5%
7	弥生土器	広口壺		(3.2)		長石・石英・黒色粒子	粉	普通	2 本沈線による逆弧文施文	覆土	5%
8	弥生土器	広口壺		(4.2)		長石・石英・細礫・黒色粒子	にぶい青	普通	附加条一種附加 2 条縄文施文	覆土	5%

第 55 号竪穴建物跡 (第 66・67 図 第 32 表 PL 7・29・30)

位置 調査区南東部の I J 6i2 区、標高 33 m ほどの台地緩傾斜面に位置している。

重複関係 第 45A・45B 号竪穴建物、第 139・209 号土坑、第 4 号墳に掘り込まれている。

規模と形状 規模は長軸 5.49 m、短軸約 4.55 m の隅丸長方形で、主軸方向は N-44°-W である。壁は高さ 18～52cm で、外傾している。

床 北西壁から北東壁に向かって緩やかに高くなっている。北西部と中央部から東コーナー部にかけて一部が硬化している。貼床は、南東部から南西部にかけてロームブロック主体の第 8・9 層を埋土して構築している。

炉 中央部に位置している。長径 73cm、短径 54cm の楕円形で、深さ 6cm の地床がである。断面は皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。

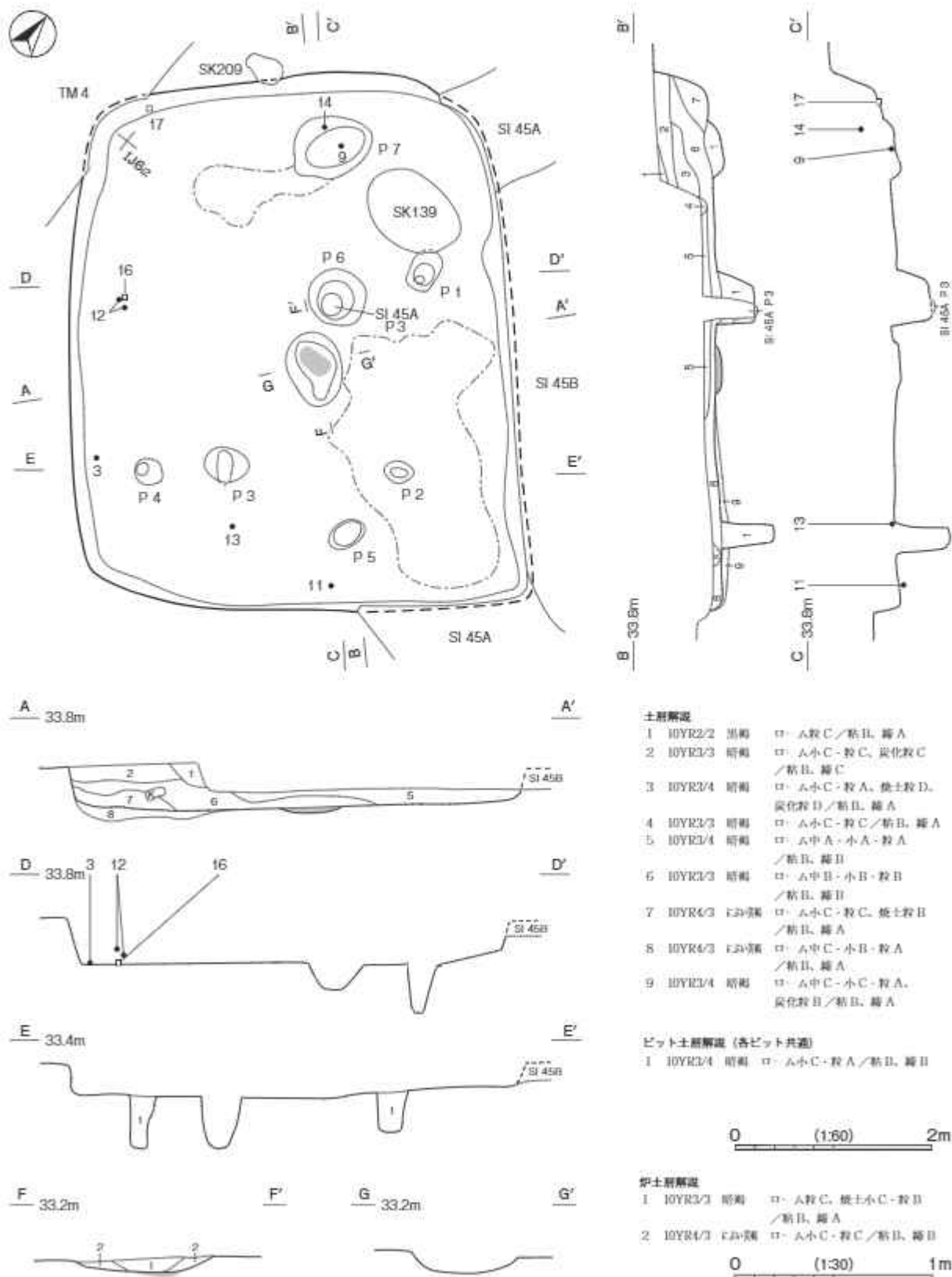
ピット 7 か所。P1～P3 は深さ 38～61cm で、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。P1～P3 は、平面形から、五平材を用いていた可能性がある。P5 は深さ 53cm で、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P4・P6・P7 は深さ 15～52cm で性格不明である。

覆土 7 層に分層できる。第 1 層はローム粒子を均質に含むことから、自然堆積である。第 2～7 層は、ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

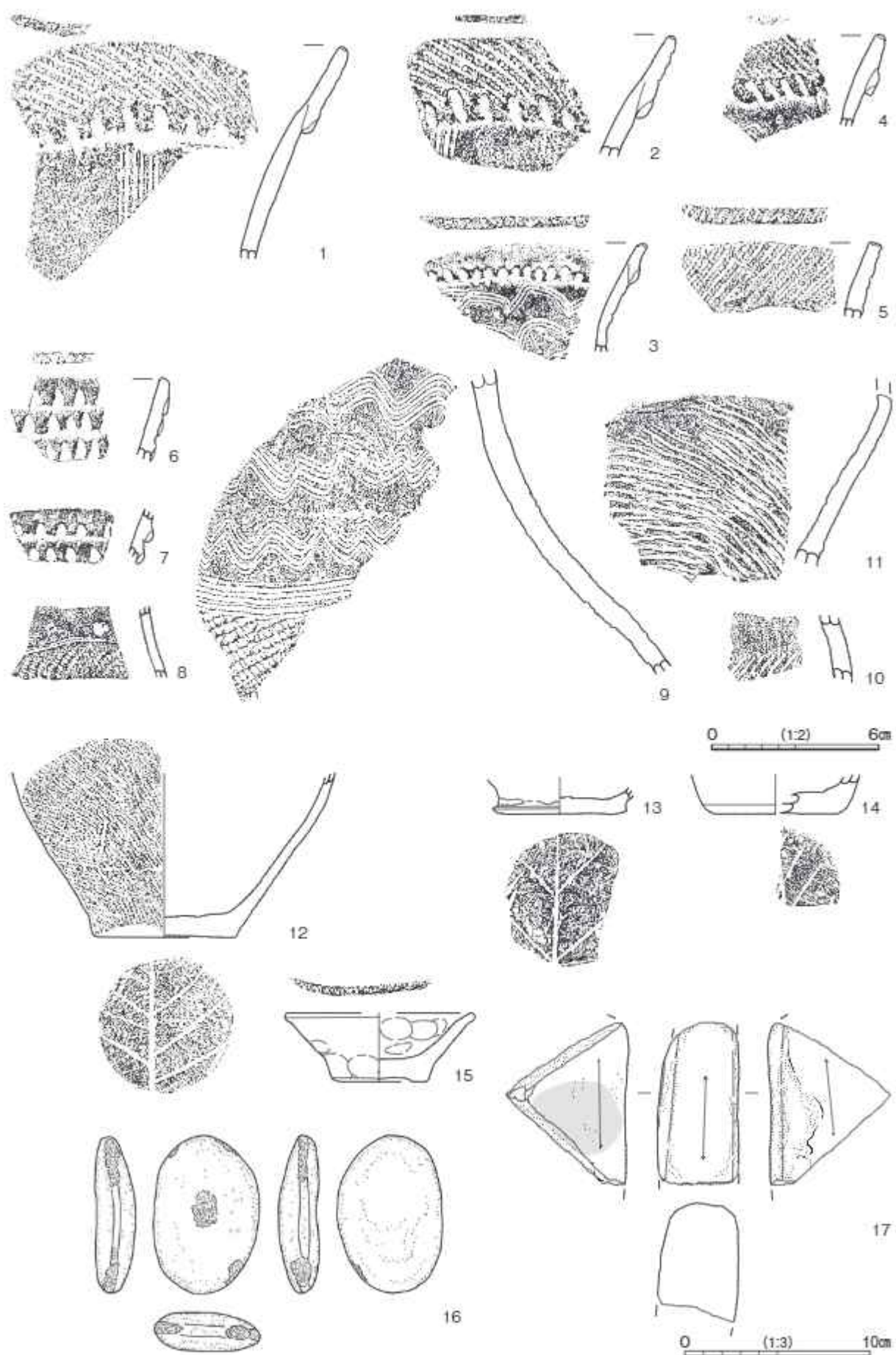
遺物出土状況 弥生土器片 128 点 (壺 127、鉢 1)、石器 2 点 (砂岩製敲石、砂岩製砥石) が出土している。ほかに混入した縄文土器片 2 点、土師器片 24 点が出土している。遺物は主に北部から東部を除いた壁際の床

面から覆土中層にかけて、散在した状態で出土している。3・13は南部、11は南壁際中央、16は南西壁際中央、17は西コーナー部の床面から、9はP7の覆土上層から、14は北西壁際中央の覆土中層から、それぞれ出土している。12は西壁中央寄りの覆土下層から中層にかけて出土した破片が接合している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考える。



第66図 第55号竪穴建物跡実測図



第67图 第55号竖穴建物跡出土遺物実測図

第32表 第55号竪穴建物跡出土遺物一覧(第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(7.7)	-	長石・石英・赤色粒子	明褐色	普通	折り返し口縁 口縁部附加条一種附加2条縄文を施文 口縁部下端斜突 頸部は縄面状工具(6本縄面)による縦スリット施文	覆土	5% PL29
2	弥生土器	広口壺	-	(4.4)	-	長石・石英	明褐色	普通	折り返し口縁 口縁部附加条一種附加2条縄文を施文 口縁部下端斜突列 頸部は縄面状工具(4本縄面)以上による縦スリットを施文	覆土	5% PL29
3	弥生土器	広口壺	-	(1.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	折り返し口縁 口唇部附加条一種縄文施文 口縁部下端縄文取体端部押口によるキザミ列 頸部は縄面状工具(3本縄面)による沖風文	床面	5% PL29
4	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	-	長石・石英	褐色	普通	折り返し口縁 口唇部欠損 口縁部 縄文施文 口縁部下端へつ状工具によるキザミ列 頸部は縄面状工具(3本縄面以上)による沖風文	覆土	5% PL30
5	弥生土器	広口壺	-	(2.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口唇から口縁部附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
6	弥生土器	広口壺	-	(3.0)	-	長石・石英	灰褐色	普通	折り返し口縁 口唇部附加条一種附加2条縄文施文 3段の複合口縁端部棒状工具によるキザミ列	覆土	5% PL30
7	弥生土器	広口壺	-	(2.0)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰褐色	普通	折り返し口縁 口唇部欠損 2段の複合口縁端部棒状工具によるキザミ列	覆土	5% PL30
8	弥生土器	広口壺	-	(2.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	頸部下段平行沈溝 胴部 LR 縄文施文	覆土	5%
9	弥生土器	広口壺	-	(8.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	頸部縄面状工具(7本縄面)による波状文 頸部下段横止文 胴部 LR 縄文施文	P7 覆土上層	5% PL30
10	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	-	長石・石英・黒色粒子	褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
11	弥生土器	広口壺	-	(6.2)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐色	普通	髹漆文	床面	5%
12	弥生土器	広口壺	-	(8.9)	7.5	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい褐色	普通	胴部下半附加条一種附加2条縄文施文 底部付着一部 縄文施文 底部木炭痕 種子圧痕	覆土上層一中層	5%
13	弥生土器	広口壺	-	(1.9)	5.8	長石・石英・雲母・黒色粒子・炭化物	にぶい褐色	普通	底部木炭痕種子圧痕	床面	5%
14	弥生土器	広口壺	-	(2.1)	16.6	長石・石英・細礫・炭化物	にぶい褐色	普通	胴部外面摩耗 底部木炭痕	覆土中層	5%
15	弥生土器	鉢	[9.8]	3.7	4.5	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい褐色	普通	体部・底部内外面ナブ	覆土	70% PL29

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
16	砂岩	8.5	5.7	2.2	158.3	砂岩	上下の両端部付近の傾斜及び表面中央部に顕著な線打痕	床面	PL30
17	砥石	(8.7)	(6.6)	(4.4)	(233.3)	砂岩	研磨面3面 縦担後被熱	床面	PL30

第56号竪穴建物跡(第68・69図 第33表 PL7・8・30)

位置 調査区中央部のI I 6jl区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第67号竪穴建物、第11・12号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.52m、短軸4.16mの隅丸長方形で、主軸方向はN-42°-Wである。壁は高さ14~28cmで、外傾している。

床 ほほ平坦であるが、南西壁と南東壁に向かって緩やかに低くなっている。壁際を除いて硬化している。本跡は焼失住居であり、床面各所が被熱により赤変硬化している。焼土、炭化材、炭化物が床面から確認できた。

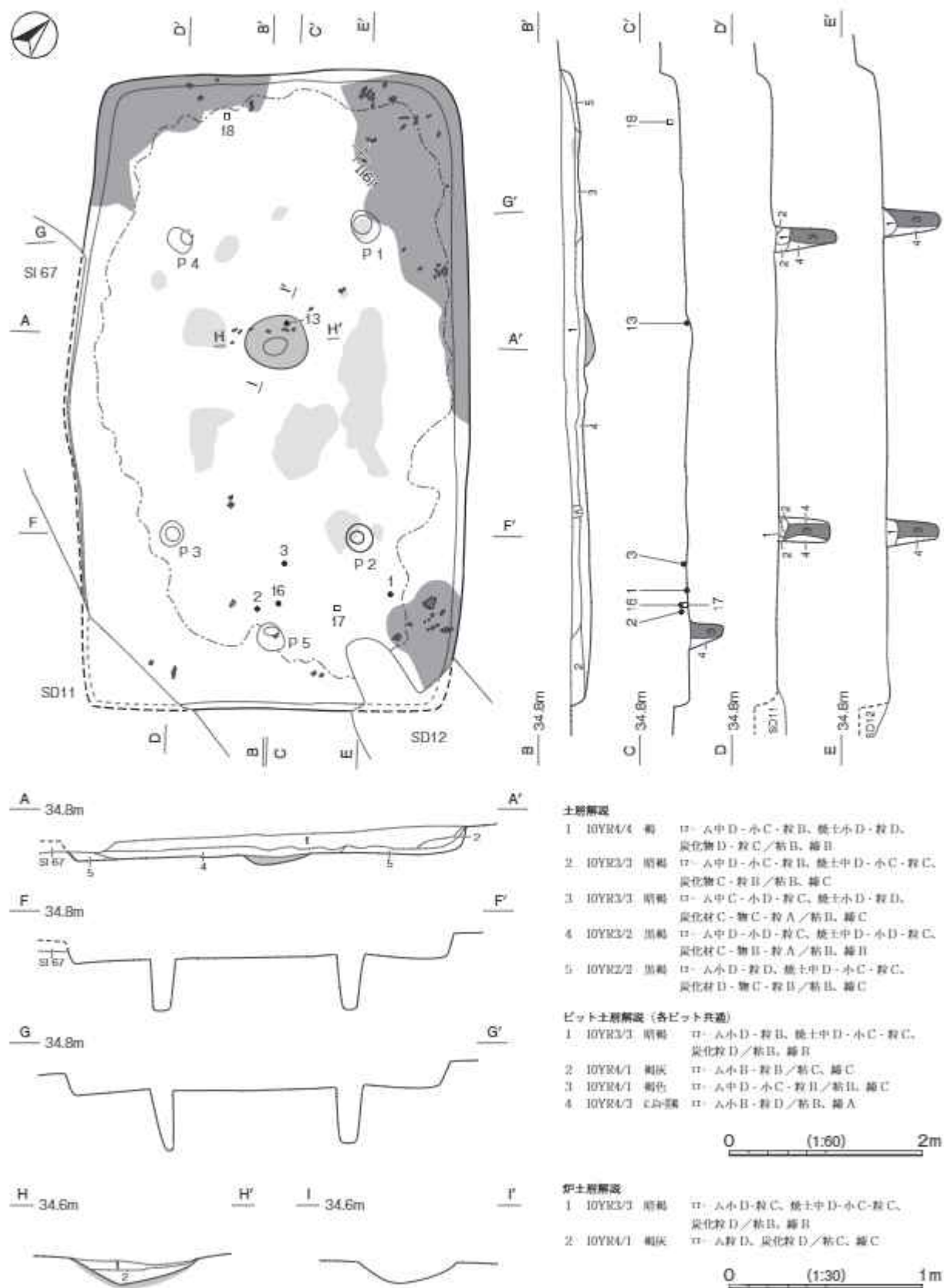
炉 中央部北寄りに位置している。長径64cm、短径47cmの楕円形で、深さ12cmの地床がである。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。

ピット 5か所。P1~P4の深さは55~62cmで、配置や規模から支柱穴と考えられる。第1・2層は柱抜き取り後の流入土、第3層は柱痕跡、第4層は柱掘方埋土である。P5は深さ34cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

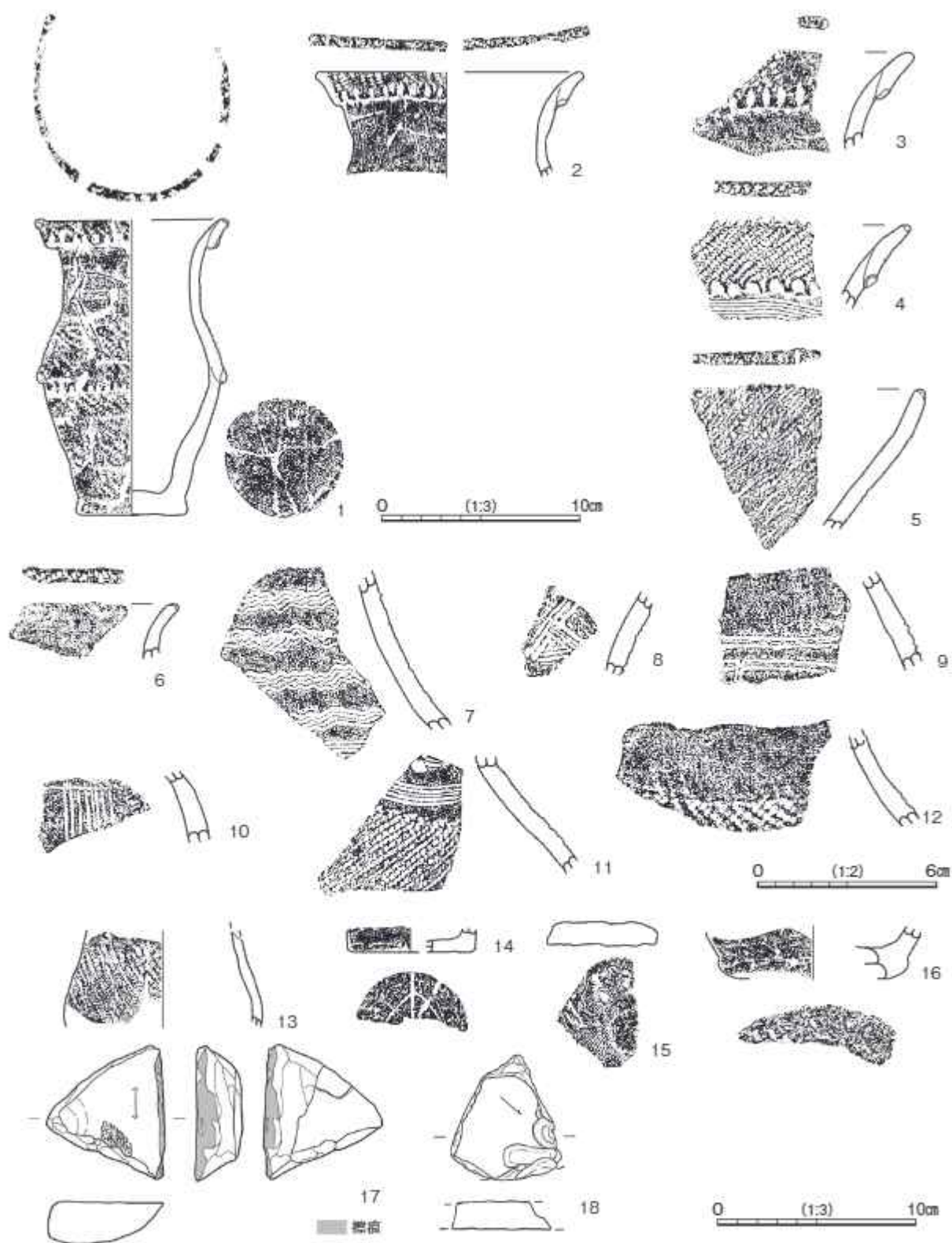
覆土 5層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。第3~5層は焼土ブロックと炭化材を多く含む層で、上層などを焼却した際に生成されたと考えられる。

遺物出土状況 弥生土器片428点(広口壺)、石器11点(チャート製石核1、石英製石核2、石英製剥片6、砂岩製砥石2)が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、土師器片10点、焼成粘土塊2点、石器1点が出土している。遺物は覆土中層から上層にかけて、散在した状態で出土している。1は東コーナー部、3・17は南東部の床面から出土している。2・16は南部、18は北西壁際の覆土下層から、13は炉覆土中から、それぞれ出土している。中央部の壁際寄り床面から径5cmほどの炭化材が出土している。また、北・西コーナー部と北東

壁際の床面には炭化物が2~8cmの厚さでの堆積しており、屋根に葺かれていた葦などの可能性がある。
 所見 時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。



第68図 第56号竪穴建物跡実測図



第 69 図 第 56 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 33 表 第 56 号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第 69 図)

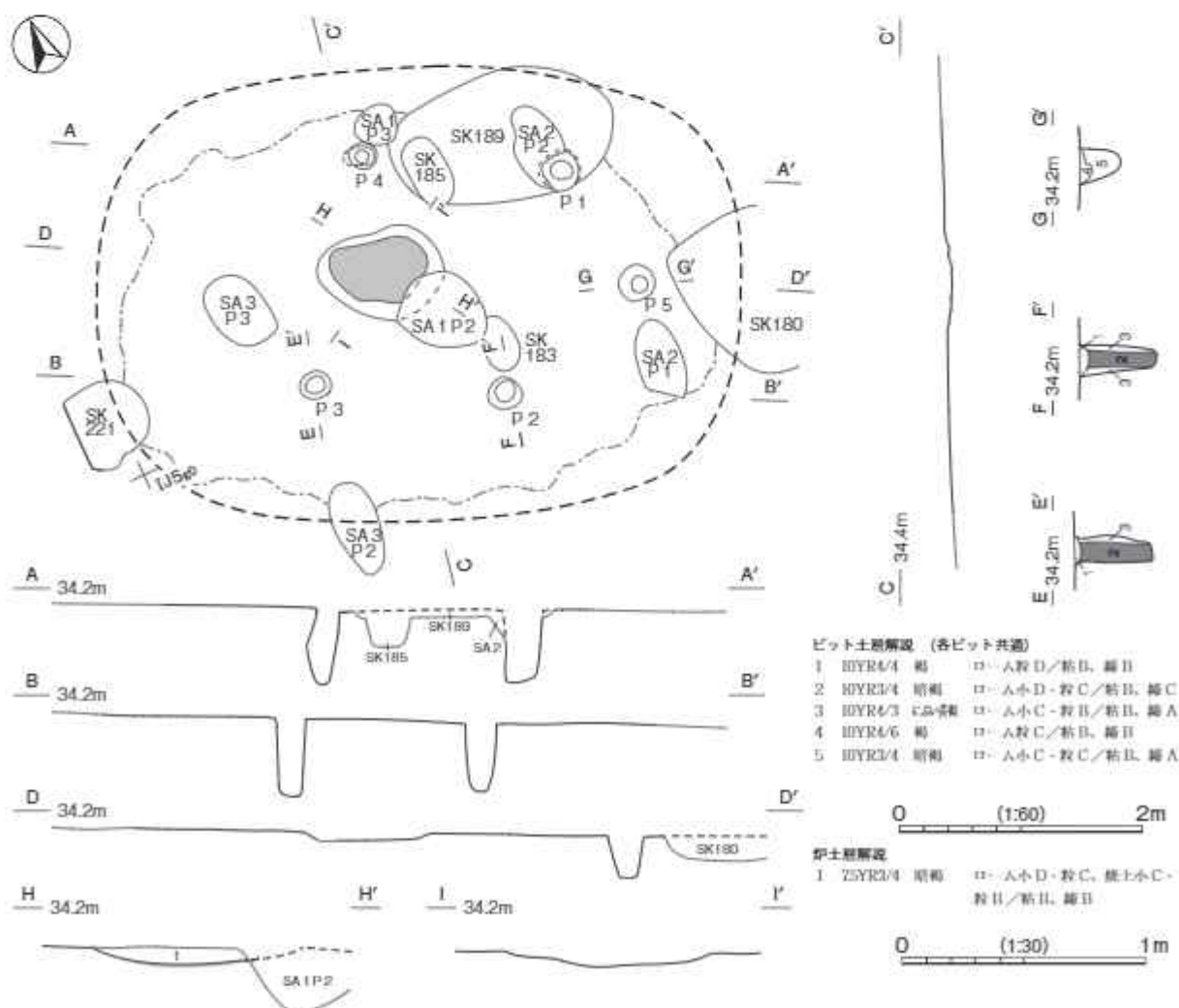
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	特徴	出土位置	備考
1	甕生土器	広口甕	19.4	15.0	5.6	長石・石英・白色粒子	橙	普通	口唇部刺文原体押付。口縁部刺文。肩部棒状工具刺交列。胴部上段刺文。胴部下段刺文。	床面	70% PL.30
2	甕生土器	広口甕	11.34	(5.3)		長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	折り返し口縁。口唇部から口縁部にかけて刺文。胴部刺文。胴部下段へつ状工具による刺交列刺文。胴部無文。	甕土下層	5% PL.30
3	甕生土器	広口甕		(3.2)		長石・石英・白色粒子	橙	普通	折り返し口縁。口唇部口縁部単面。口縁部刺文。胴部刺文。胴部下段へつ状工具による刺交列。	床面	5% PL.30

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
4	葉生土器	広口罎		(28)		長石・石英・白色粒子	黒褐	普通	口唇部縦文原体押捺 口縁部下部原体押捺 頸部横溝状工具(5本横溝)による横走文施文	覆土	5% PL30
5	葉生土器	広口罎		(47)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐	普通	口唇部縦文原体押捺 口縁部附加条一種附加2条縦文施文	覆土	5% PL30
6	葉生土器	広口罎		(18)		長石・石英・白色粒子	黄灰	普通	口唇部半箇L形縦文施文	覆土	5%
7	葉生土器	広口罎		(53)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐	普通	頸部横溝状工具(4本横溝)による波状文 頸部下部横走文	覆土	5% PL30
8	葉生土器	広口罎		(28)		長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	横溝状工具(3本横溝)による横走文施文後斜格子目文施文	覆土	5%
9	葉生土器	広口罎		(33)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐	普通	半截竹管工具による横走文2段施文後縦区画	覆土	5%
10	葉生土器	広口罎		(24)		長石・石英・白色粒子	灰黄褐	普通	横溝状工具(8本横溝)縦区画文施文後横溝状工具による横走文施文	覆土	5%
11	葉生土器	広口罎		(39)		長石・石英・白色粒子	灰黄褐	普通	頸部横溝状工具(5本横溝)波状文2段施文 頸部附加条一種附加2条縦文施文	覆土	5%
12	葉生土器	広口罎		(33)		長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	半箇L形縦文施文後頸部ナツ	覆土	5%
13	葉生土器	広口罎		(49)		長石・石英・白色粒子	褐	普通	頸部附加条一種附加2条縦文施文	伊覆土	5%
14	葉生土器	広口罎		(13)	164	長石・石英・白色粒子	黄灰	普通	胴部下半ナツ 底部木炭痕 植物種子圧痕	覆土	5%
15	葉生土器	広口罎		(13)		長石・石英・白色粒子	明褐	普通	底部布目痕 植物種子圧痕	覆土	5%
16	葉生土器	広口罎		(27)	196	長石・石英・白色粒子	明黄褐	普通	胴部下半ナツ 底部布目痕 植物種子圧痕	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
17	砥石	(68)	(59)	22	(85.9)	砂岩	研磨面1面 敲打痕1か所 下面摩耗痕 側縁浸れ・擦痕	床面	
18	砥石	(64)	(51)	15	(57.22)	砂岩	研磨面1面 凹1か所	覆土下層	

第58号竪穴建物跡 (第70・71図 第34表 PL30)

位置 調査区南部の1J50区、標高34mほどの台地端部の緩傾斜面に位置している。



第70図 第58号竪穴建物跡実測図(1)

重複関係 第180・183・185・189・221号土坑、第1～3号柱穴列に掘り込まれている。

規模と形状 床面まで削平を受けている。確認できた床の範囲は長径4.90m、短径3.20mであることから、長径5.50m、短径3.90mほどの規模と考えられる。平面径は楕円形で、主軸方向はN-65°-Wと推定できる。

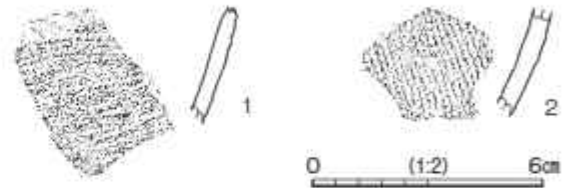
床 ほほ平坦で、確認できた範囲は硬化している。

炉 確認できた床の中央部に位置している。長径102cm、短径77cmほどの楕円形で、深さ6cmの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。

ピット 5か所。P1～P4は深さ55～62cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。P2・P3で柱痕跡を確認した。土層観察の結果、柱を切断している可能性が高い。P5は深さ34cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられ、柱は抜き取られている。

遺物出土状況 弥生土器片5点（広口壺）が出土している。1・2はか床の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期と考えられる。



第71図 第58号竪穴建物跡出土遺物実測図

第34表 第58号竪穴建物跡出土遺物一覧（第71図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(27)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	輪溝不明の附加垂線文を施文	か覆土	5% PL30
2	弥生土器	広口壺	-	(29)	-	長石・石英	明赤褐	普通	胴部に単節状の縄文を施文	か覆土	5% PL30

第60号竪穴建物跡（第72～74図 第35表 PL 8・30・31）

位置 調査区西部のI J 5a5区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 本跡の上に第3号墳が構築されている。

規模と形状 長軸5.48m、短軸4.56mの長方形で、主軸方向はN-57°-Wである。壁は高さ59～81cmで、ほほ直立している。

床 ほほ平坦で、壁際を除いて硬化している。

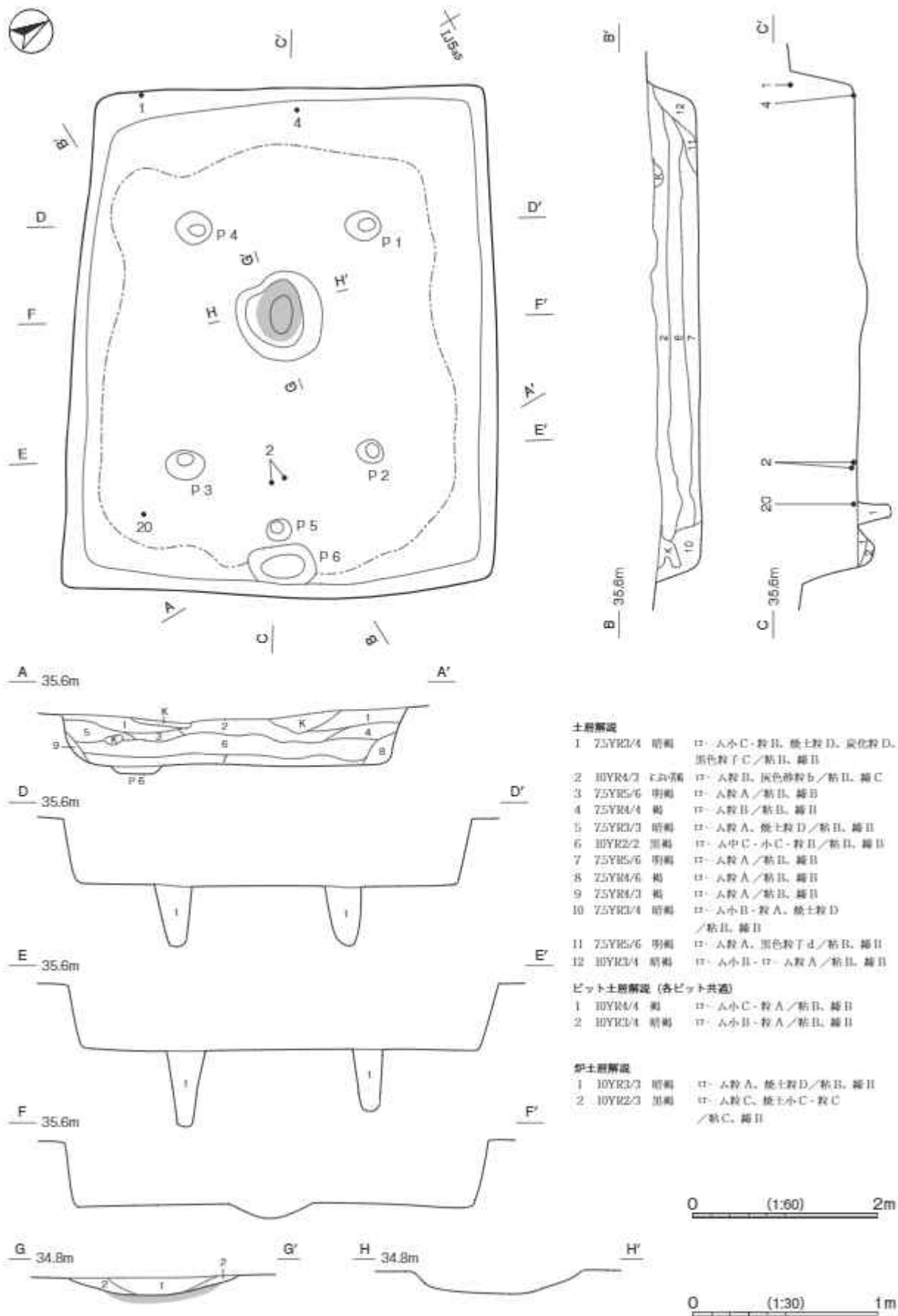
炉 中央部に位置している。長径94cm、短径92cmの不整形で、深さ10cmの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 6か所。P1～P4は深さ96～118cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。P5は深さ54cmで、中央方向に向かって斜めに掘り込まれていることと、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ27cmで、性格は不明である。

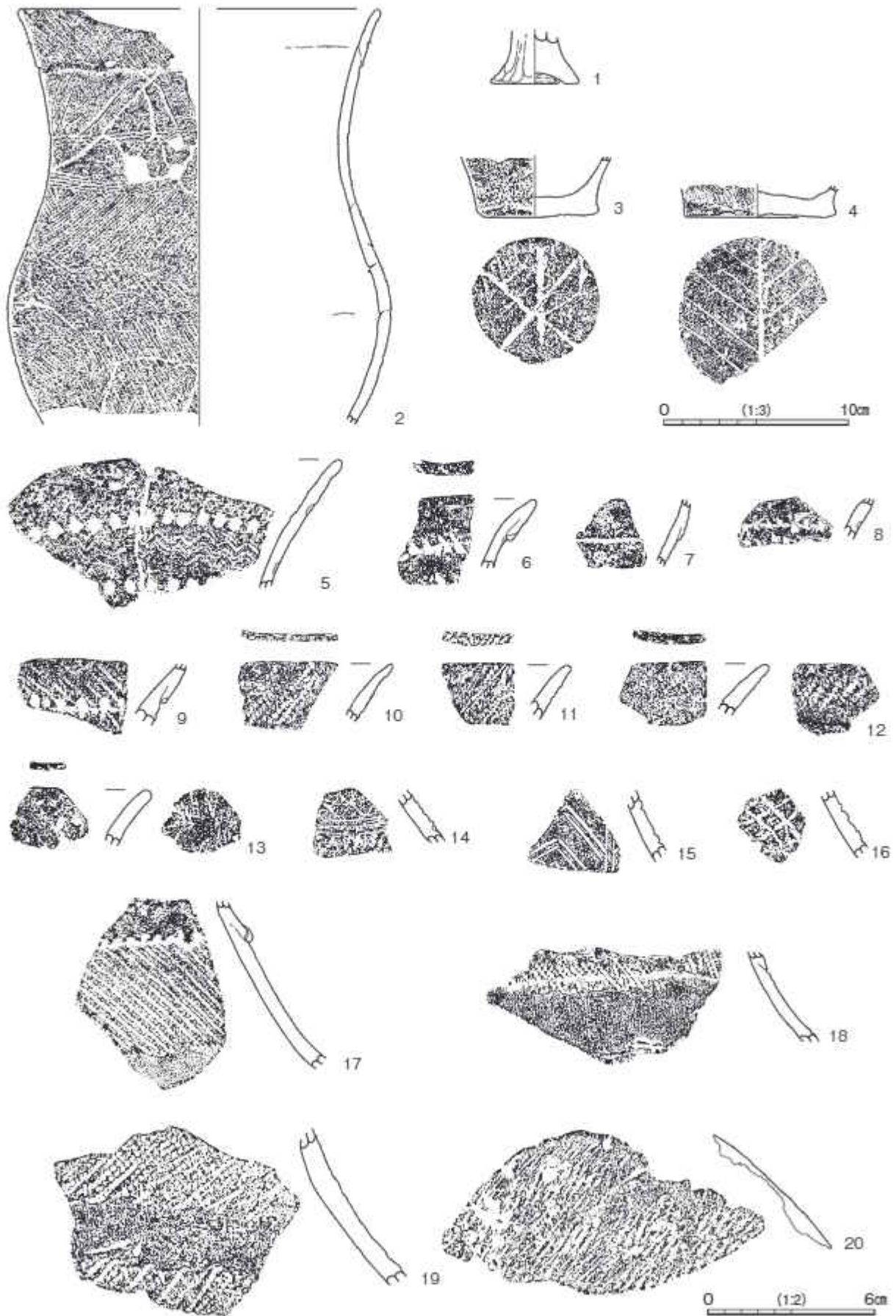
覆土 12層に分層できる。第1～5層はローム粒子などの含有物を均質に含むことから、自然堆積である。第6・7層は不自然な堆積状況を示し、ロームブロックを多く含むことから人為堆積で、第8～12層はロームブロックやローム粒子を主体とした壁際の三角堆積土であり、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 弥生土器片784点（高坏1、広口壺783）、土製品3点（紡錘車2、土器片転用砥石1）、石器4点（粘板岩製剥片1、石英製剥片3）が出土している。ほかに混入した縄文土器片5点、土師器片199点が出土している。遺物は主に南部の覆土下層から上層にかけて出土している。1は西コーナ部の覆土上層から、2は中央部南東寄り、20は南コーナ部の覆土下層から、4は北西壁中央の床面から、それぞれ出土している。

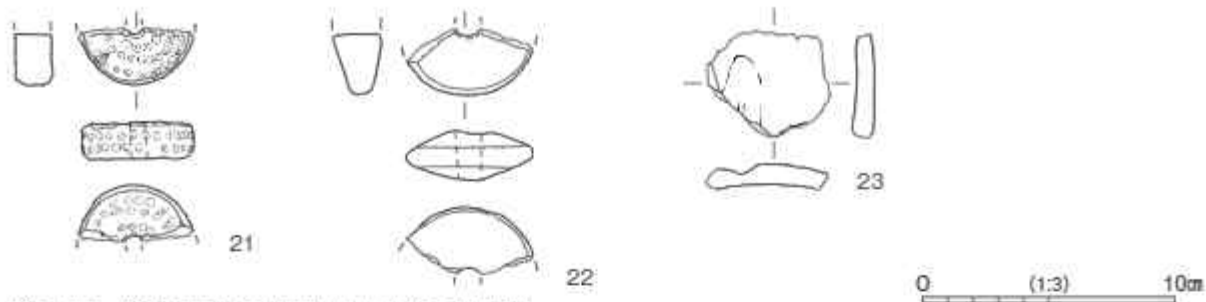
所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第72図 第60号竪穴建物跡実測図



第73图 第60号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第74図 第60号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第35表 第60号竪穴建物跡出土遺物一覧(第73・74図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	高坏		(30)	4.4	長石・石英・白色粒子	緑	普通	内外面ナツ 外面磨離 底面中央凹み	覆土上層	5% PL30
2	弥生土器	広口碗	[19.3]	(22.5)		長石・石英・細礫・白色粒子	明赤褐	普通	頸部上半無文 下半磨面状工具(4本磨面)による2段の湾状文 口縁部RL織文 胴部に附加条一種附加2条織文施文	覆土下層	30% PL31
3	弥生土器	広口碗		(3.3)	6.6	長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	胴部磨面施文 底部木炭痕	覆土	5%
4	弥生土器	広口碗		(1.8)	8.2	長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	胴部附加条一種附加2条織文施文 底部木炭痕	床面	5%
5	弥生土器	広口碗		(4.6)		長石・石英・白色粒子	緑	普通	口縁部2段の刺突列 口縁部と第1段目の刺突列間に附加条織文施文	覆土	5% PL30
6	弥生土器	広口碗		(2.6)		長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐	普通	口縁部磨離 織文原形押付 口縁部上端に竹管状工具によるキザミ	覆土	5%
7	弥生土器	広口碗		(2.5)		長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部欠	覆土	5%
8	弥生土器	広口碗		(1.5)		長石・石英・白色粒子	赤褐	普通	折り返し口縁 2段の口縁端部ヘラ状工具による刺突列	覆土	5%
9	弥生土器	広口碗		(2.2)		長石・石英・白色粒子	にぶい赤	普通	折り返し口縁 口縁部附加条一種附加2条織文施文 口縁端部織文原形押付	覆土	5% PL30
10	弥生土器	広口碗		(2.1)		長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部一口縁部附加条一種附加2条織文施文	覆土	5%
11	弥生土器	広口碗		(2.0)		長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部一口縁部附加条一種附加2条織文施文	覆土	5%
12	弥生土器	広口碗		(1.9)		長石・石英・白色粒子	にぶい赤	普通	口縁部一口縁部内面LR織文施文	覆土	5%
13	弥生土器	広口碗		(2.0)		長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部一口縁部内面磨面施文	覆土	5%
14	弥生土器	広口碗		(1.9)		長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	頸部の下段に磨面状工具(5本磨面)により横走文施文後斜格子目文 胴部附加条一種附加2条織文施文	覆土	5%
15	弥生土器	広口碗		(2.1)		長石・石英・白色粒子	灰褐	普通	平截竹管状工具による縦の区画文施文後山形文施文	覆土	5%
16	弥生土器	広口碗		(2.4)		長石・石英・白色粒子	にぶい赤	普通	頸部斜格子文施文	覆土	5%
17	弥生土器	広口碗		(6.1)		長石・石英・白色粒子	赤褐	普通	折り返し口縁 口縁端部織文原形押付による刺突列 刺突列中途に凹形突起 頸部附加条一種附加2条織文施文	覆土	5% PL30
18	弥生土器	広口碗		(3.2)		長石・石英・白色粒子	黒褐	普通	折り返し口縁 附加条一種附加2条織文施文 胴部上端磨面状工具による施文	覆土	5%
19	弥生土器	広口碗		(5.7)		長石・石英・白色粒子	灰褐	普通	附加条一種附加1条織文施文	覆土	5%
20	弥生土器	広口碗		(4.1)		長石・石英・細礫・白色粒子	緑	普通	磨面施文	覆土下層	5%
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
21	鉄鉢串	(4.6)	1.5	(0.8)	(15.60)	長石・石英	灰黄褐	平面円筒状 断面長方形 上下・側面竹管状工具の刺突文施文	覆土	PL30	
22	鉄鉢串	(5.4)	1.9	(1.1)	(19.88)	長石・石英・雲母	緑	平面円筒状 断面中央部が肥厚 上下・側面ナツ成形	覆土		
23	転用砥石	(4.2)	(4.8)	0.9	(16.32)	長石・石英・砂礫	緑	上器片転用 砥磨面1面 凹1か所	覆土下層		

第62号竪穴建物跡(第75図 第36表 PL31)

位置 調査区南部のJ5g4区、標高34mほどの台地緩傾斜面に位置している。

重複関係 第59号竪穴建物、第7号墳に掘り込まれている。

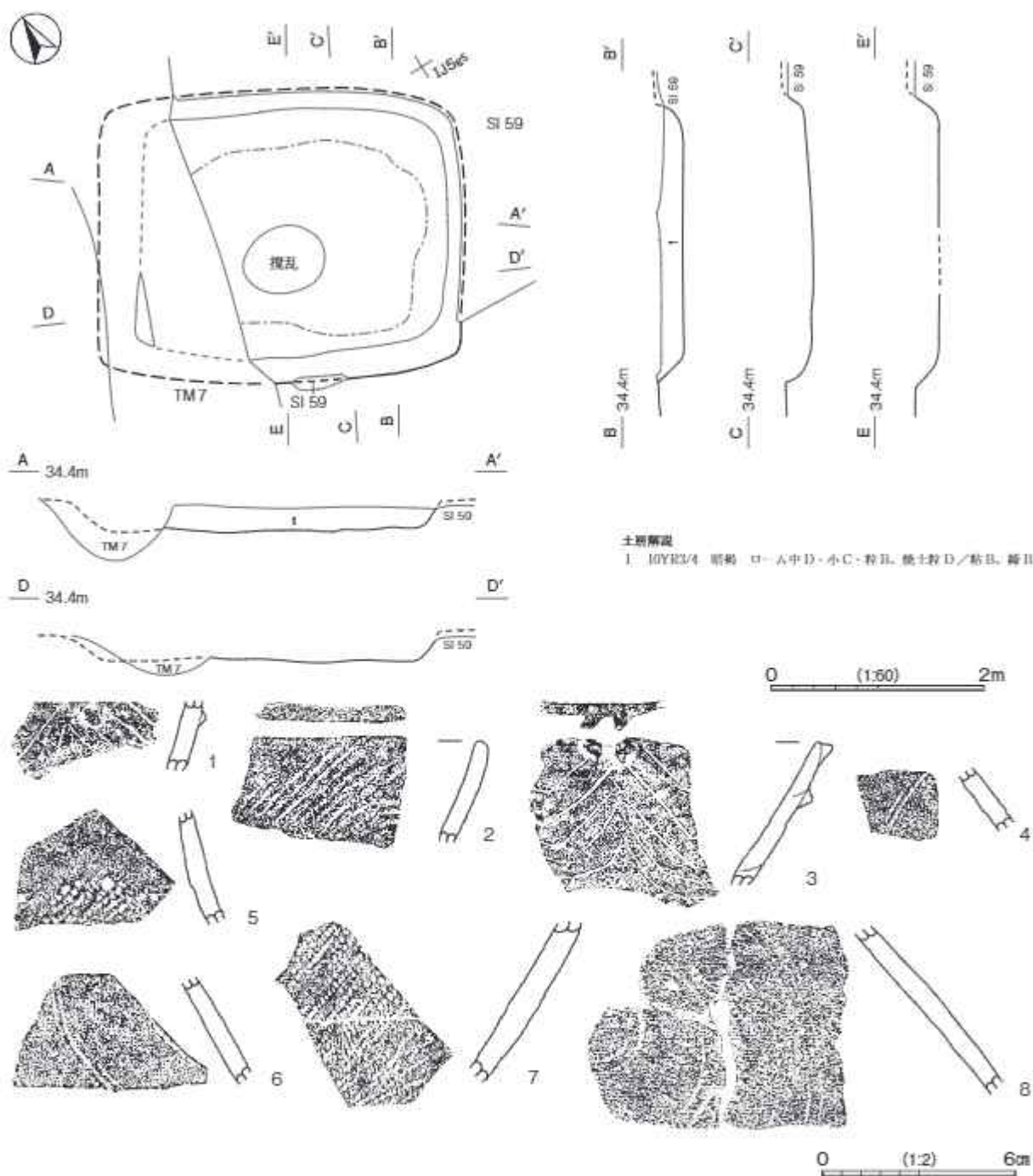
規模と形状 重複のため、確認できた規模は、北東・南西軸2.74m、北西・南東軸3.27mで、平面形は隅丸長方形と推定できる。主軸方向はN-60°-Wである。壁は高さ20~24cmで、外傾している。

床 はほぼ平坦である。東壁寄りの床面が若干高くなっている。壁際を除いて硬化している。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片92点(広口碗)、石器2点(石英製剥片)が出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第75図 第62号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第36表 第62号竪穴建物跡出土遺物一覧(第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	養生土器	広口罎	—	(22)	—	石英・白粉子 黒色粉子	橙	普通	半截竹管状工具による重層山形文施文 頂点付近山形突起貼り付け	覆土	5%
2	養生土器	広口罎	—	(32)	—	長石・石英・ 黒色粉子	にぶい・橙	普通	口唇部から口縁部附加条一種附加2条縦文施文	覆土	5%
3	養生土器	広口罎	—	(45)	—	長石・石英・ 黒色粉子	にぶい・黄褐色	普通	半截竹管状工具より6重以上の山形文施文 口縁部2個の突起貼り付け	覆土	5% 内31 外面焼付着
4	養生土器	広口罎	—	(20)	—	長石・石英・ 白色粉子	橙	普通	半截竹管状工具による施文	覆土	5%
5	養生土器	広口罎	—	(36)	—	長石・石英・ 黒色粉子	橙	普通	胴部附加条一種附加2条縦文施文	覆土	5%
6	養生土器	広口罎	—	(34)	—	長石・石英・ 黒色粉子	橙	普通	半截竹管状工具より円弧状に施文	覆土	5%
7	養生土器	広口罎	—	(35)	—	長石・石英・ 赤土・白色粉子	にぶい・黄褐色	普通	胴部附加条一種附加2条縦文施文	覆土	5%
8	養生土器	広口罎	—	(60)	—	長石・石英・ 白色粉子	明褐色	普通	半截竹管状工具による渦巻文施文	覆土	5%

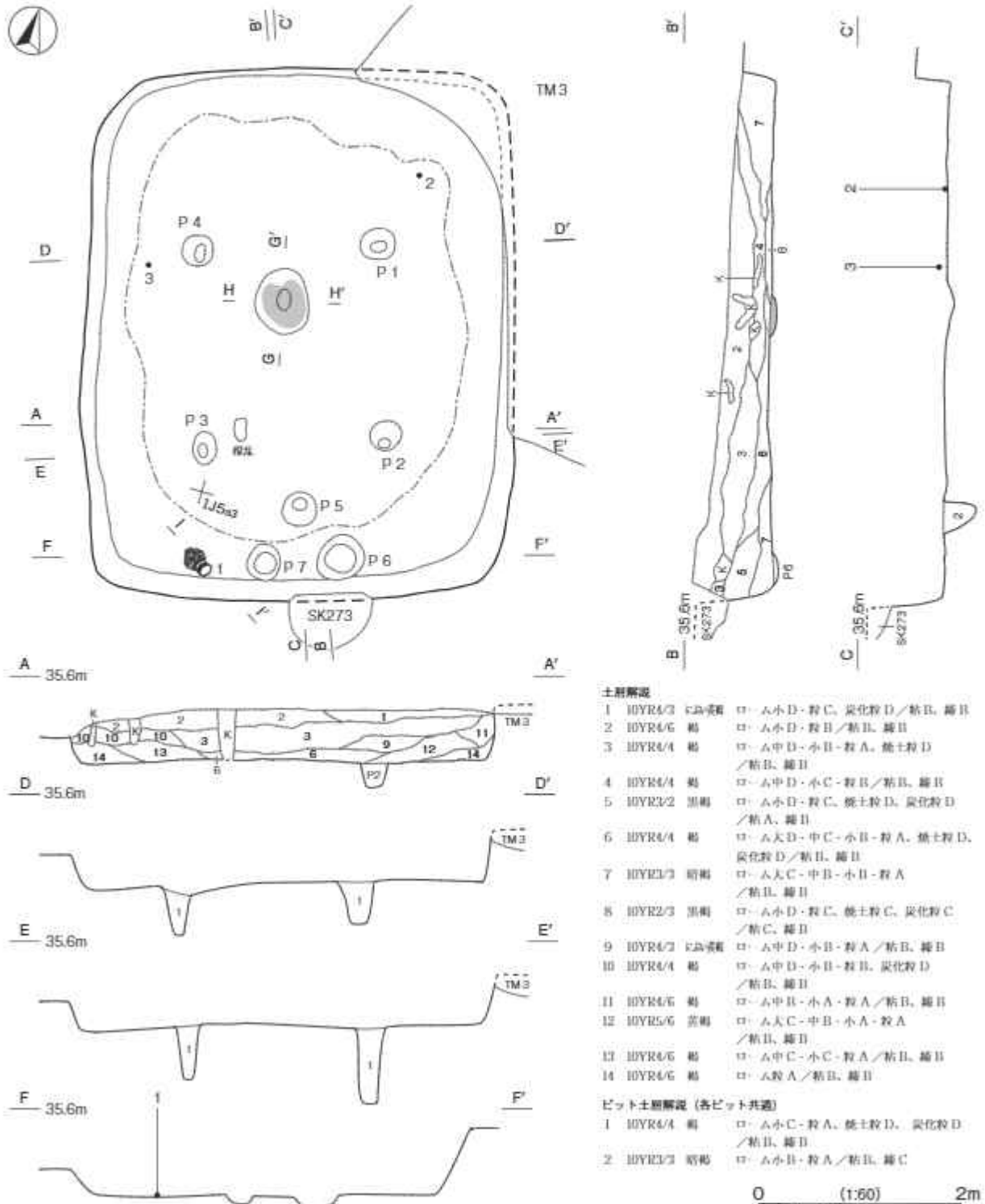
第 64 号竪穴建物跡 (第 76・77 図 第 37 表 PL 8・31)

位置 調査区西部の I I 53 区、標高 35 m ほどの台地緩斜面に位置している。

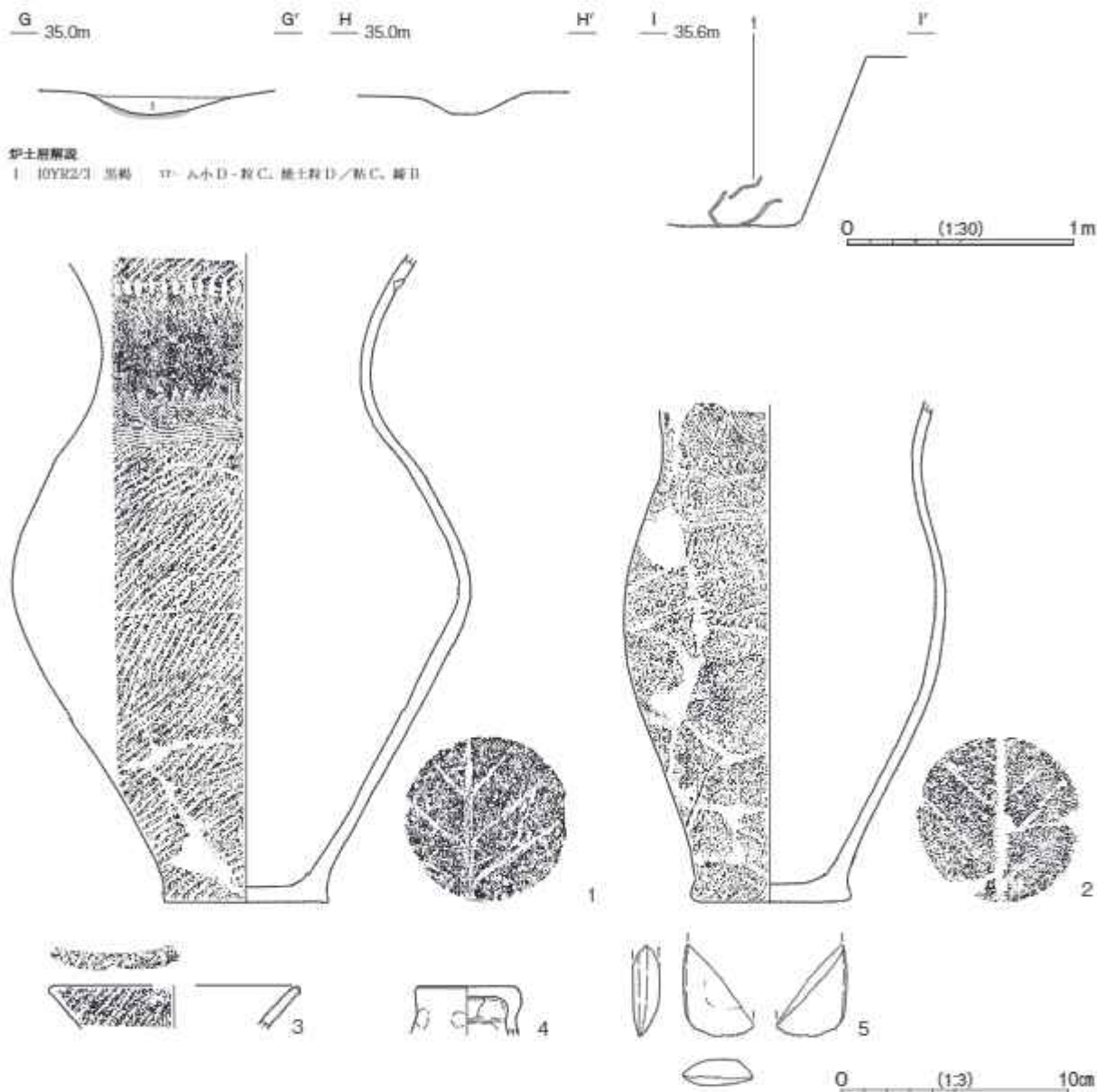
重複関係 第 273 号土坑、第 3 号墳に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.25 m、短軸 4.20 m の隅丸長方形で、主軸方向は N-14°-W である。壁は高さ 35~52 cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて硬化している。



第 76 図 第 64 号竪穴建物跡実測図



第77図 第64号竪穴建物跡・出土遺物実測図

炉 中央部に位置している。長径64cm、短径52cmの楕円形で、深さ8cmの地床がである。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。

ピット 7か所。P1～P4は深さ44～75cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。形状から、柱に五平材が用いられていた可能性がある。P5は深さ22cm、P6・P7は深さ8cm・10cmで、浅い皿状を呈している。P5～P7は、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

覆土 14層に分層できる。各層にロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片160点（灰口壺158、蓋2）、石器1点（緑色片岩製磨製石斧）が出土している。ほかに混入した縄文土器片8点、土師器片30点、焼成粘土塊2点、石器2点が出土している。弥生土器片は、主に壁際寄りの床面や覆土下層から出土している。1は南壁際西寄りの床面から斜位で、2は北東部の床面から横位の状態で出土している。3は西壁寄りの覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。

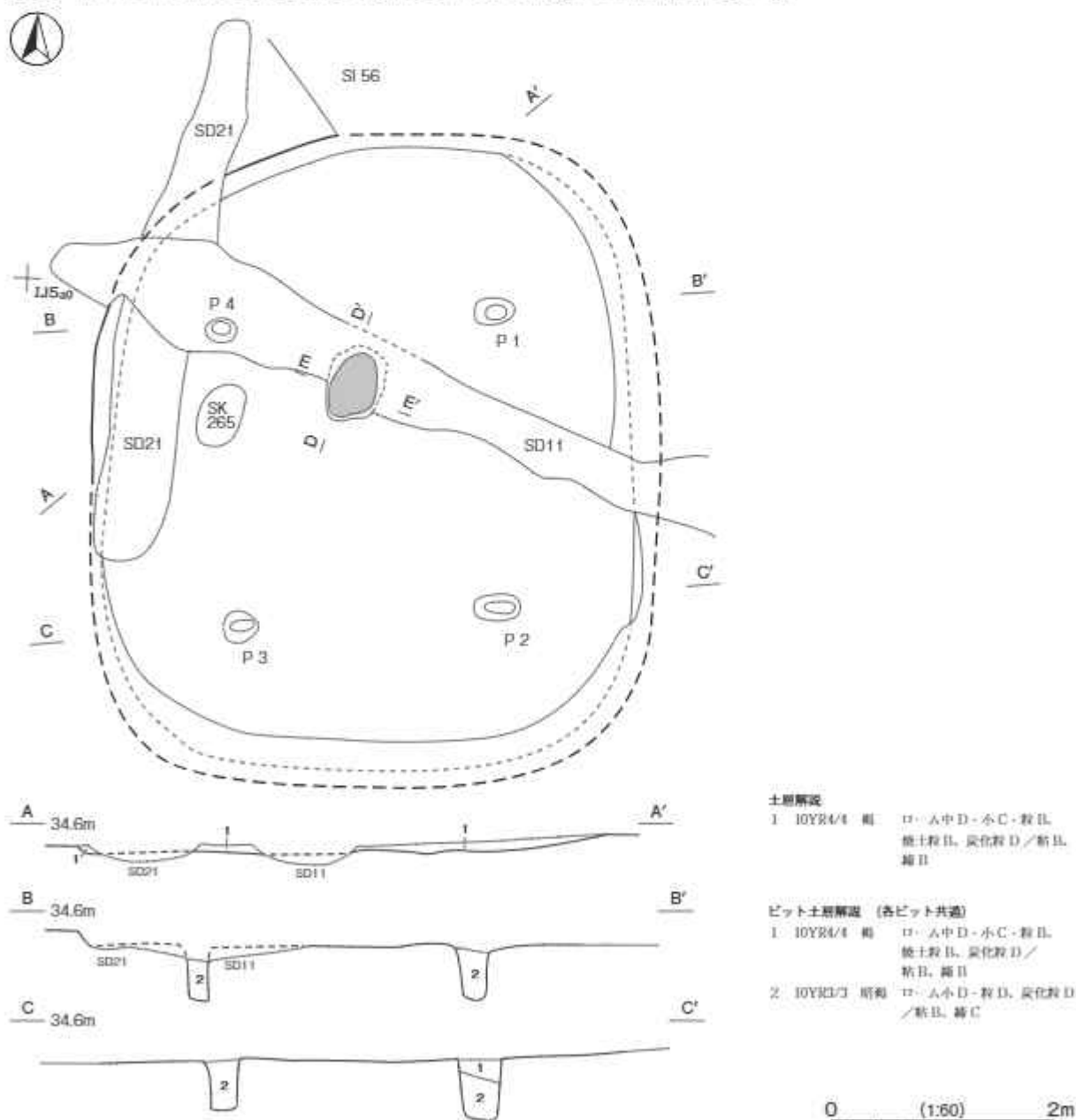
第37表 第64号竪穴建物跡出土遺物一覧(第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	葉生土器	灰口磁		(28.4)	7.2	長石・石英・雲母・白色粒子	明褐色	普通	口縁部附加条一種附加2条施文。ト端平截管状工具による刺突列。頸部に襷兩状工具(7本襷面)による波状文。頸部ト端に横線文。胴部附加条一種附加2条織文施文。底部木葉痕。	床面	90% PL31
2	葉生土器	灰口磁		(22.1)	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	頸部襷兩状工具(5本襷面)2条の波織文。横走文。胴部粘土体懸糸文施文。	床面	70% PL31
3	葉生土器	灰口磁	[10.6]	(1.9)		長石・石英・白色粒子	橙	普通	口唇部。輪脚不明附加条施文。口縁部外面附加条一種附加2条織文施文。	覆土下層	5%
4	葉生土器	磁		(2.2)		長石・石英・白色粒子	橙	普通	体部外リア後指痕痕。内面指ナツ。	覆土	5%

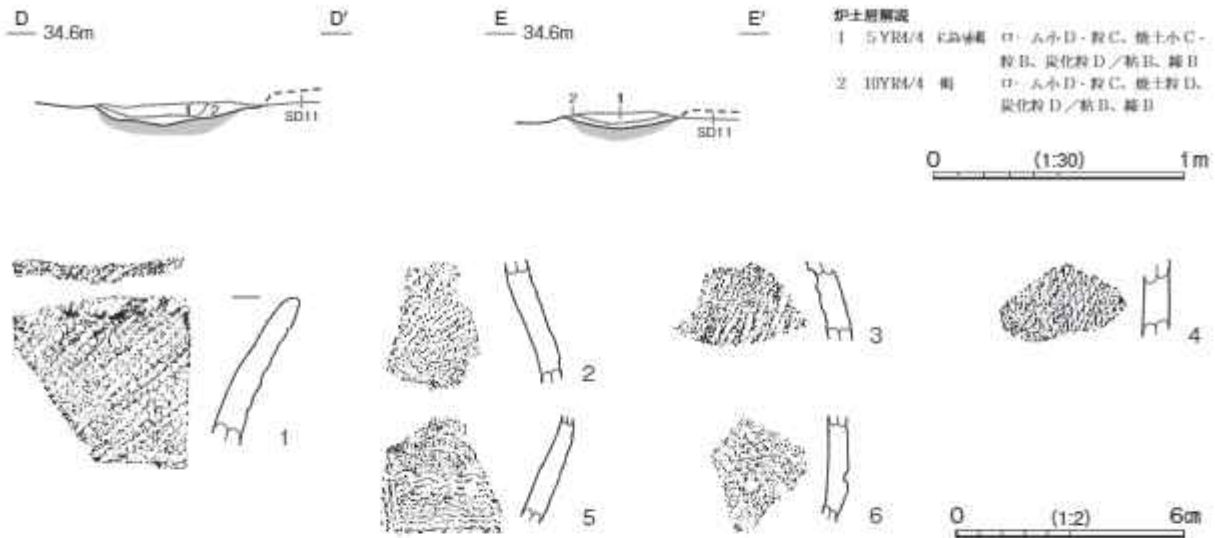
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5	磨製石芥	(4.0)	(3.1)	(1.2)	(12.92)	緑色片岩	刃部に微細な刃こぼれ状の溝。平丸刀状。	覆土	

第67号竪穴建物跡(第78・79図 第38表)

位置 調査区中央部のI J 5 a0区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。



第78図 第67号竪穴建物跡実測図



第79図 第67号竪穴建物跡・出土遺物実測図

重複関係 第56号竪穴建物跡を掘り込み、第265号土坑、第11・21号溝に掘り込まれている。

規模と形状 削平などにより、遺構の遺存状態は悪い。確認できた規模は南北軸5.45m、東西軸4.68mの方形で、本来は長軸5.85m、短軸5.10mほどの隅丸長方形と推測できる。主軸方向はN-5°-Wである。壁は高さ2~8cmで、外傾している。

床 ほほ平坦である。硬化はしていない。

炉 中央部北寄りに位置している。かの北側を第11号溝に掘り込まれているため、確認できた規模は長径70cm、短径46cmの楕円形で、深さ13cmほどの地床かである。断面は皿状を呈している。か床面は赤変硬化している。

ピット 4か所。P1~P4は深さ37~55cmで、配置と規模などから支柱穴と考えられる。形状から五平材が用いられていたと考えられる。第1・2層は柱抜き取り後の流入土である。P1~P4は、柱はいずれも抜き取られている。

覆土 単一層である。層厚が薄いため、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 遺物は少なく細片のみで、弥生土器片16点（灰口壺）、石器1点（石英斑岩製敲石）が出土している。1はかの覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。

第38表 第67号竪穴建物跡出土遺物一覧（第79図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	灰口壺		(40)		長石・石英・白色粒子	によい黄褐色	普通	口唇部~口縁部に付加条一種付加1条を施文	か覆土	5%
2	弥生土器	灰口壺		(33)		長石・石英	黒褐色	普通	胴部に4条の櫛状工具による波状文 胴部上半に単筋1段縄文施文	覆土	5%
3	弥生土器	灰口壺		(22)		長石・石英・細砂	褐色	普通	単筋の上層縄文を器壁のあまり乾かない段階で施文する	覆土	5%
4	弥生土器	灰口壺		(21)		長石・石英	明黄褐色	普通	縄文施文	覆土	5%
5	弥生土器	灰口壺		(29)		長石・石英・白色粒子	黒褐色	普通	5条の櫛状工具による波状文施文後、4条以上の櫛状工具によるゆるやかな波条文と3本単位以上の縦区画沈線紋を施す	覆土	5%
6	弥生土器	灰口壺		(27)		石英	褐色	普通	縄文施文後、口縁部と胴部の境に刺突を巡らす	覆土	5%

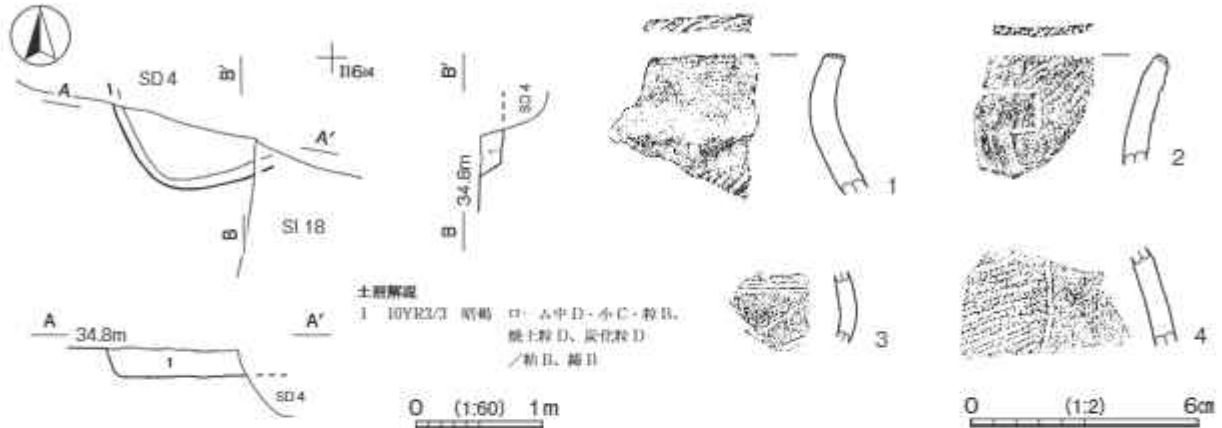
規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は南北軸 0.90 m、短軸 0.50 m である。平面形と主軸方向は不明である。壁は高さ 14～20cm で、外傾している。

床 確認できた範囲は平坦である。硬化はしていない。

覆土 一層を確認した。ローンプロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片 10 点（広口壺）が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第 80 図 第 1 号竖穴遺構・出土遺物実測図

第 40 表 第 1 号竖穴遺構出土遺物一覧 (第 80 図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	(17)			石英・雲母・白色粒子	灰黄褐色	普通	頸部屈曲無文 口唇部・胴部単節 LR 縄文施文	覆土	5%
2	弥生土器	広口壺	(29)			石英・黒色粒子	黄褐色	普通	口唇部から口縁部単節 LR 縄文後 十字状に沈線で区画内磨消	覆土	5% PL32
3	弥生土器	広口壺	(19)			石英・白色粒子	赤褐色	普通	半截竹管状工具により横位沈線 山形文施文	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺	(25)			石英・白色粒子	明褐色	普通	単節 LR 縄文施文後、沈線区画内を磨消	覆土	5%

第 2 号竖穴遺構 (第 81 図 第 41 表 PL32)

位置 調査区中央部の I I 5 g9 区、標高 35 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 32 号竖穴建物、第 88 号土坑、第 7 号溝、第 1 号土坑墓、第 5 号墳に掘り込まれている。

規模と形状 大半が第 32 号竖穴建物などに掘り込まれているため、確認できた規模は北東・南西軸 1.39 m、北西・南東軸 1.30 m で、平面形と主軸方向は不明である。壁は高さ 16～18cm で、壁は外傾している。

床 ほほ平坦である。硬化はしていない。



第 81 図 第 2 号竖穴遺構・出土遺物実測図

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片 11 点 (広口壺) が覆土中から出土している。

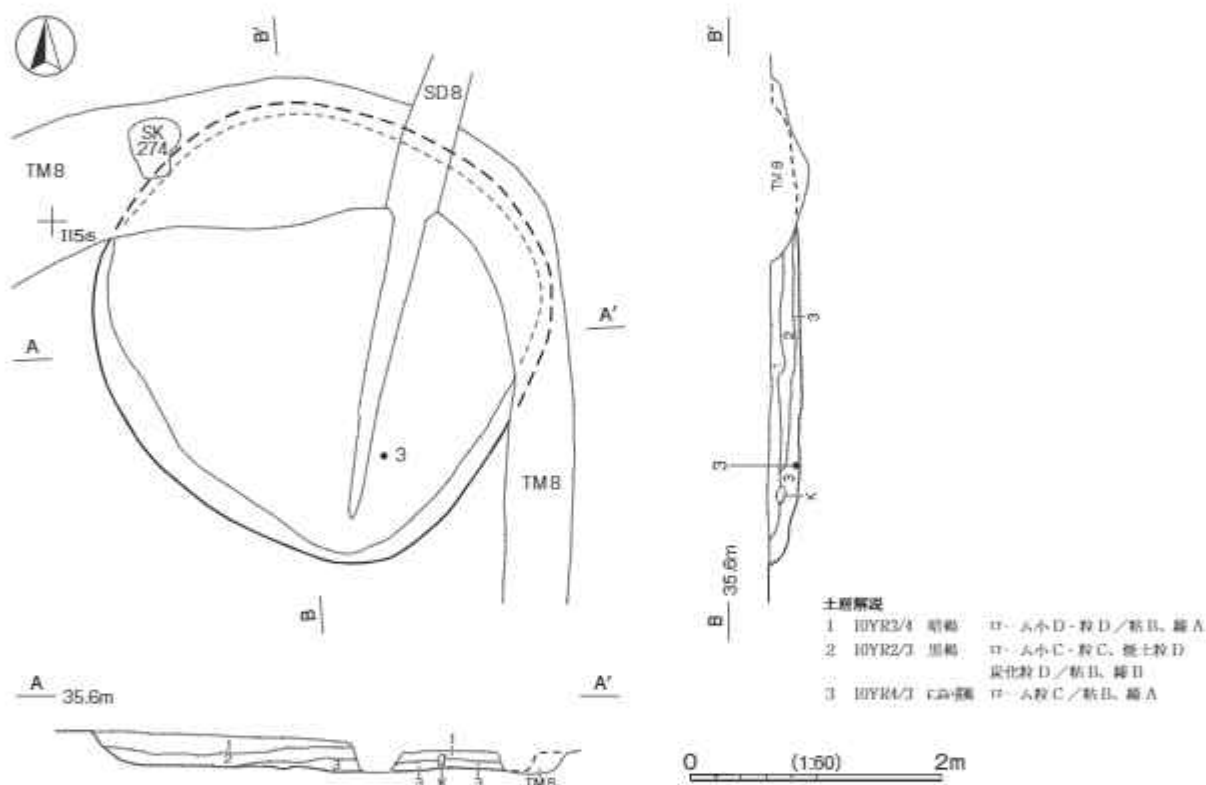
所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第 41 表 第 2 号竪穴遺構出土遺物一覧 (第 81 図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(22)	-	長石・石英	灰褐色	普通	単節 LR 施文後 横位平行沈線 2 条施文	覆土	5% PL32
2	弥生土器	広口壺	-	(28)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	単節 LR 施文後 胴部平行沈線施文 胴部磨消	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺	-	(25)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	縦位・横位平行沈線施文 沈線内磨き	覆土	5%
4	弥生土器	広口壺	-	(35)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	付加条 1 種付加 1 条織文施文	覆土	5%

第 3 号竪穴遺構 (第 82・83 図 第 42 表)

位置 調査区中央部の I I 5 i 5 区、標高 35 m ほどの台地平坦面に位置している。



第 82 図 第 3 号竪穴遺構実測図

重複関係 第 274 号土坑、第 8 号溝、第 8 号古墳に掘り込まれている。

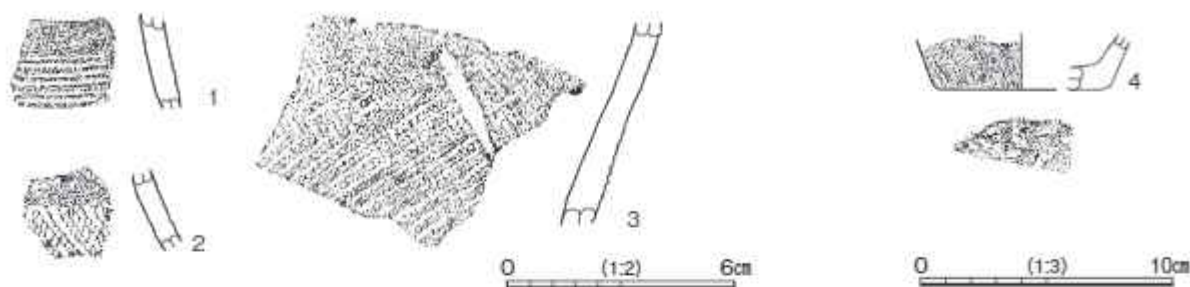
規模と形状 北部から東部にかけて第 8 号墳の周溝に掘り込まれているため、確認できた規模は北東・南西径 2.95 m、北西・南東径 3.45 m である。本来は北東・南西径で約 3.45 m の楕円形と推定でき、主軸方向は N-57°-W である。壁は高さ 14~26cm で、外傾している。

床 はほぼ平坦である。硬化はしていない。

覆土 3 層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片 82 点 (広口壺)、石器 1 点 (石英製剥片) が出土している。ほかに混入した土師器片 22 点、焼成粘土塊 1 点が出土している。3 は床面から、それぞれ出土している。

所見 内部施設がないことから性格は不明である。時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。



第83図 第3号竪穴遺構出土遺物実測図

第42表 第3号竪穴遺構出土遺物一覧(第83図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺		(25)		石英・白色粒子	赤褐色	普通	干椀竹管状工具による横走文施文	覆土	5%
2	弥生土器	広口壺		(21)		石英・白色粒子	明赤褐色	普通	胴部付加条一種縦文施文	覆土	5%
3	弥生土器	広口壺		(5.4)		石英・白色粒子・ 黒色粒子	明黄褐色	普通	胴部羽状構成の付加条二種付加2条縦文施文	床面	5%
4	弥生土器	広口壺		(2.2)	166	辰石・石英	橙	普通	体部下平付加条一種付加2条縦文施文 底部外面種子圧痕。	覆土	5%

第4号竪穴遺構 (第84・85図 第43表 PL32)

位置 調査区東部のI I 6g2区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第41号竪穴建物跡を掘り込み、第17・39号竪穴建物、第5号溝に掘り込まれている。

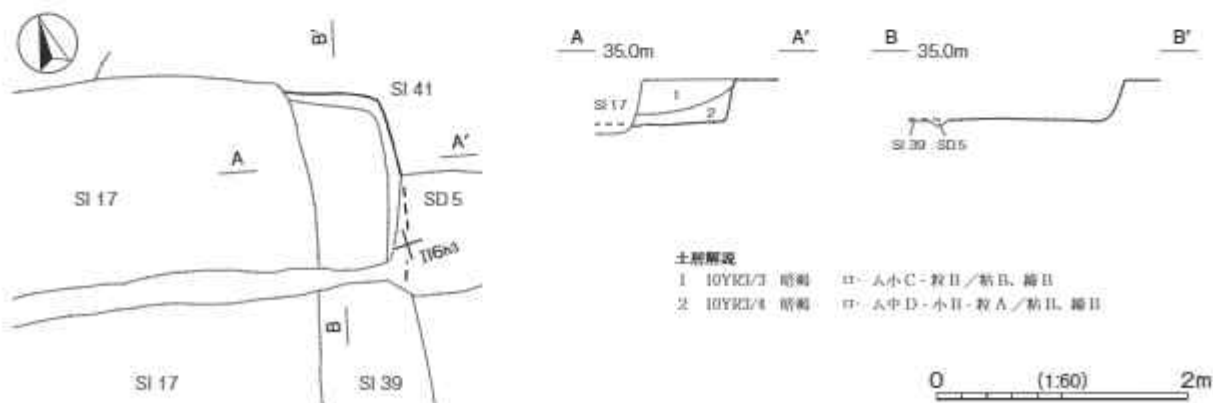
規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は南北軸1.40 m、東西軸0.72 mである。主軸方向はN-17°-Eで、平面形は方形もしくは長方形と推測できる。壁は高さ35cmで、外傾している。

底面 ほは平坦である。硬化はしていない。

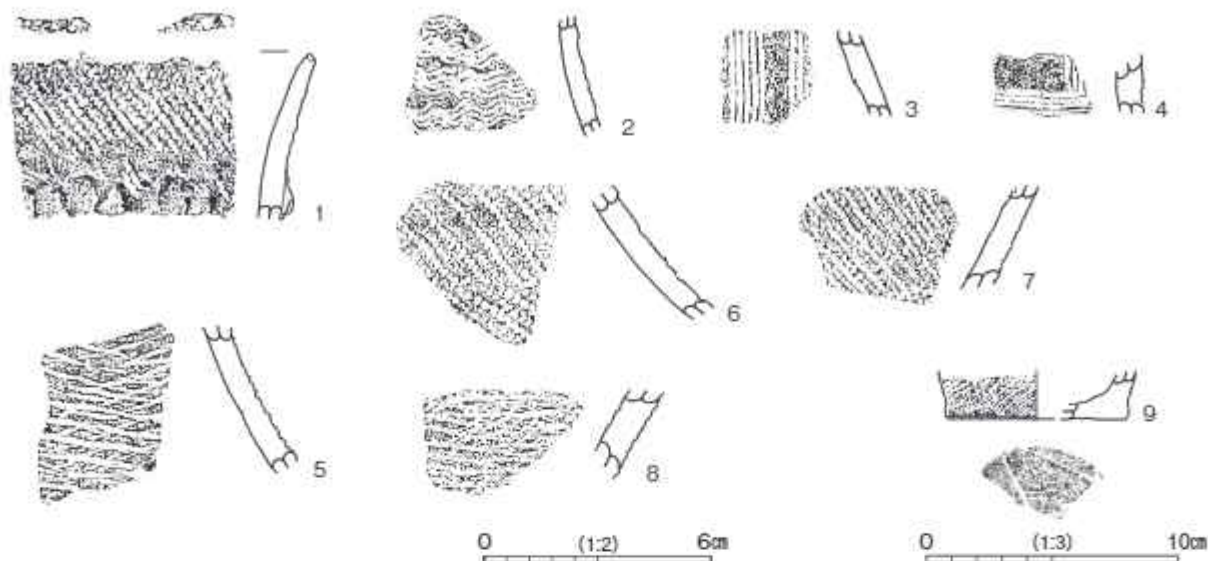
覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片13点(広口壺)が覆土中から出土している。土器片は、主に覆土下層から出土している。

所見 本跡の壁や底面の状況から、竪穴建物の可能性がある。時期は、出土土器から後期である。



第84図 第4号竪穴遺構実測図



第85図 第4号竪穴遺構出土遺物実測図

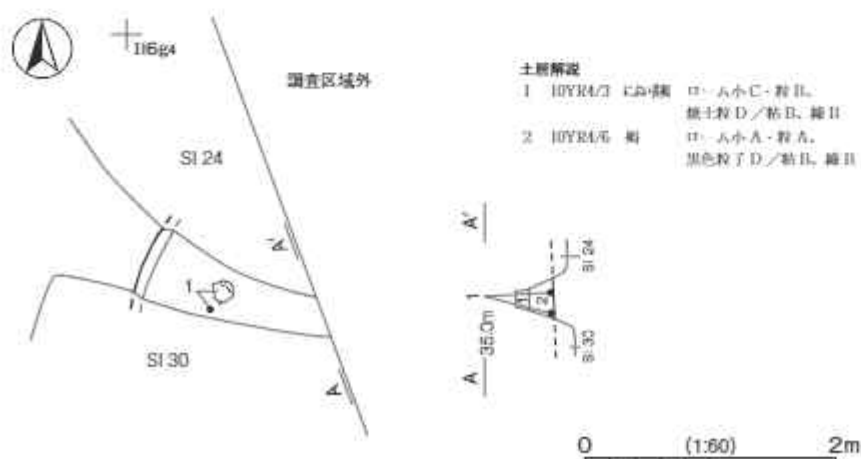
第43表 第4号竪穴遺構出土遺物一覧(第85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	葉生土器	広口壺	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口唇部縦文押捺、口縁部単節目、胴文施文後下部に脚雷を貼り付け指環押捺	覆土	5% PL32
2	葉生土器	広口壺	-	(3.2)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	胴部縦面状工具(4本撫面)による3段の波状文施文	覆土	5%
3	葉生土器	広口壺	-	(2.3)	-	長石・石英・白色粒子	灰黄褐色	普通	胴部縦面状工具(5本撫面)による縦区両文を2単位施文	覆土	5%
4	葉生土器	広口壺	-	(1.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部縦面状工具(4本撫面以上)以上による縦区両文施文後横止文	覆土	5%
5	葉生土器	広口壺	-	(3.8)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	附加条二種縦文施文	覆土	5%
6	葉生土器	広口壺	-	(3.6)	-	長石・石英	黒褐色	普通	附加条一種附加2条縦文施文	覆土	5%
7	葉生土器	広口壺	-	(2.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	胴部下端 附加条一種附加2条縦文施文	覆土	5%
8	葉生土器	広口壺	-	(2.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	軸線不明 附加条縦文施文	覆土	5%
9	葉生土器	広口壺	-	(1.9)	[7.0]	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	胴部附加条一種附加2条縦文施文 此部未塗装	覆土	5%

第7号竪穴遺構(第86・87図 第44表 PL9・32)

位置 調査区北東部のI16g4区、標高34mの台地平坦面に位置している。

重複関係 第24・30号竪穴建物に掘り込まれている。



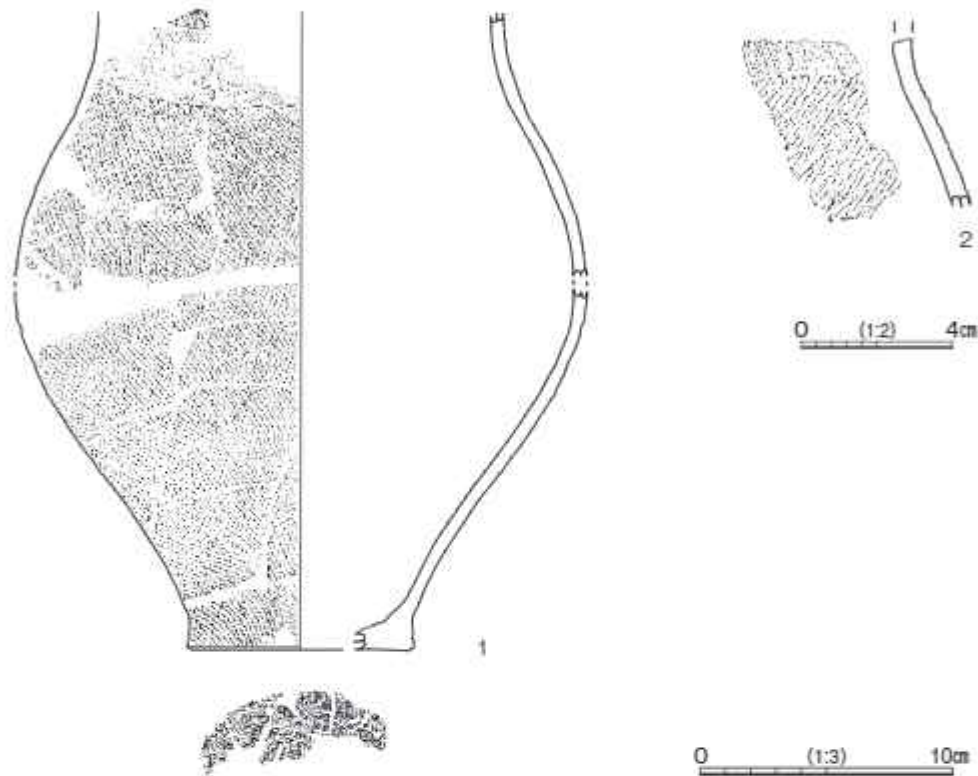
第86図 第7号竪穴遺構実測図

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できたのは西壁の一部である。規模は北東・南西軸0.58m、北西・南東軸1.60mで、平面形と主軸方向は不明である。壁は高さ28cmで、外傾している。床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片7点(広口壺)が出土している。1は床面から、2は覆土中からそれぞれ出土している。1は廃絶時に廃棄されたものである。

所見 時期は、出土土器から後期前葉と考える。



第87図 第7号竪穴遺構出土遺物実測図

第44表 第7号竪穴遺構出土遺物一覧(第87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(25.4)	(19.0)	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部上半の破損面を再加工して再利用 口縁部・胴部半箇にL線文施文・胴部無文 底部木炭灰で磨滅	床面	20% PL32
2	弥生土器	広口壺	-	(4.5)	-	長石・石英・雲母	暗褐	普通	胴部破損面を再加工して再利用 胴部無文 胴部全体を施文	覆土	5%

第45表 弥生時代竪穴遺構一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	取積	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	高さ(cm)			土坑	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
1	11613	-	-	(0.90) × (0.50)	14~20	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	弥生土器	中期中葉	本誌→SI 18、SD4
2	115g9	-	-	(1.30) × (1.30)	16~18	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	弥生土器	中期中葉	本誌→SI 32、SK38、SD7、第1号土坑墓、TM5
3	11515	N 57° W	楕円形	3.45 × 2.95	14~26	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	弥生土器 調片	後期前葉	本誌→SK274、SD8、TM8
4	116g2	N 17° E	楕円形	(1.40) × (0.72)	35	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	弥生土器	後期	SI 41→本誌→SI 17-39、SD5
7	116g4	-	-	(1.60) × (0.58)	28	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	弥生土器	後期前葉	本誌→SI 24・30

(3) 土坑

第91号土坑 (第88・89図 第46表 PL.8・31)

位置 調査区北部のI I 6c2区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。

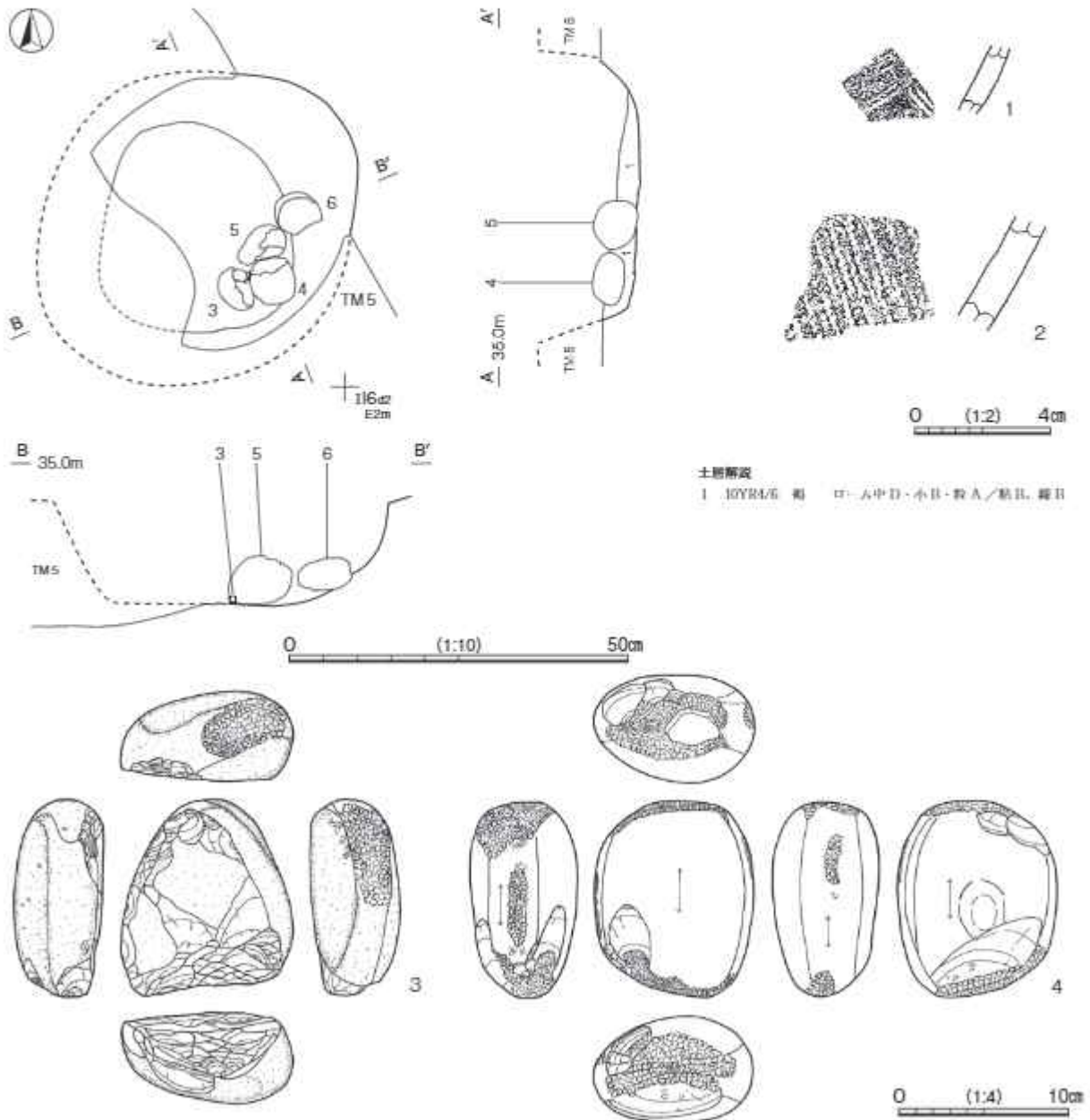
重複関係 第5号墳に掘り込まれている。

規模と形状 西部がほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、長径0.38 m、短径0.31 mで、平面形は楕円形と推定できる。深さ15cmで、底面は皿状である。壁は外傾している。

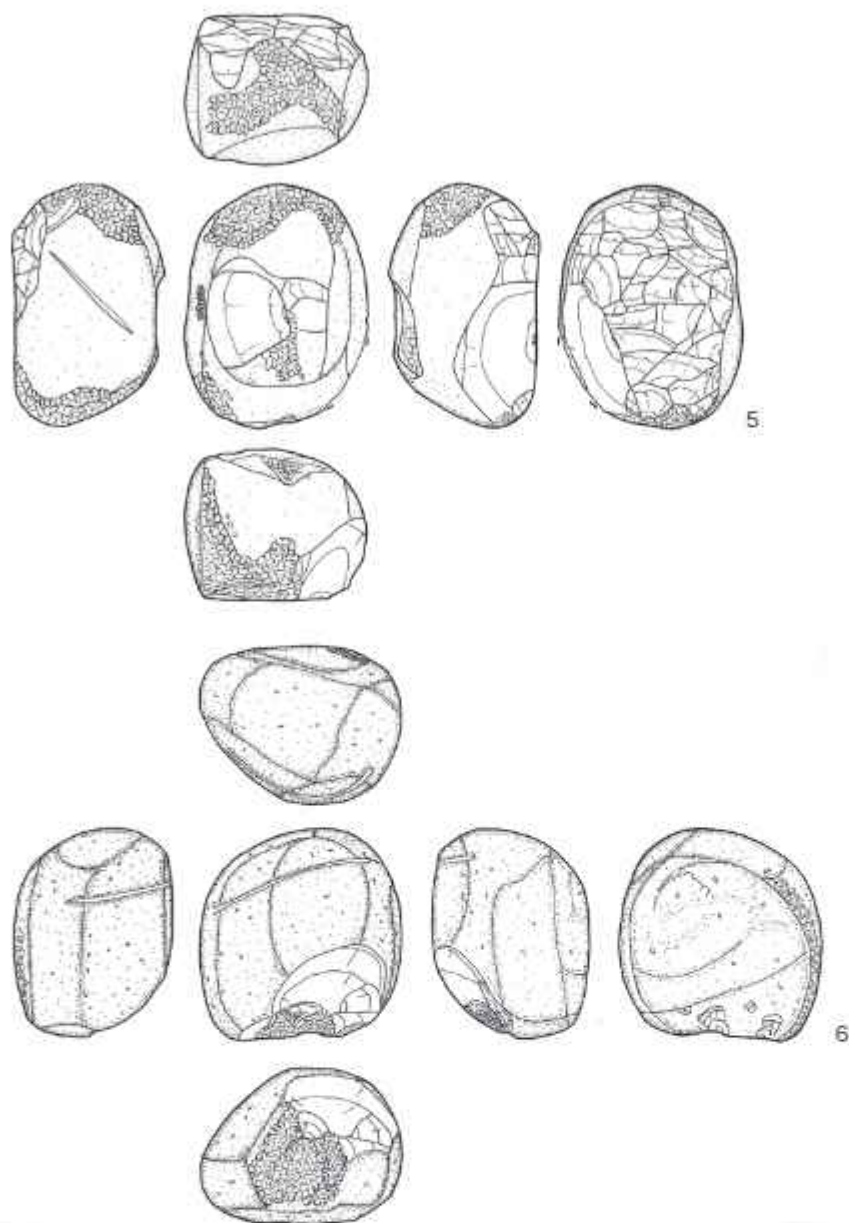
覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片5点(広口壺)、石器4点(敲石[砂岩製2、斑レイ岩製1、石英斑岩製1])が出土している。3~6は南東部底面からまとまって出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉と考えられる。



第88図 第91号土坑・出土遺物実測図(1)



第89図 第91号土坑出土遺物実測図(2)

第46表 第91号土坑出土遺物一覽(第88・89図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	原始土器	広口碗	—	(1.8)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	半截竹管状工具による連続山形文施文	覆土	5%
2	原始土器	広口碗	—	(3.0)	—	長石・石英	赤褐	普通	附加糸一種附加2条環文施文	覆土	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
3	燧石	11.5	10.1	5.3	793.45	砂岩	素材は扁平礫・分割面に連続した周縁調整・左側縁に敲打痕			底面	PL31
4	燧石	11.4	9.4	6.25	952.02	砂岩	素材は扁平礫・両側縁に研磨痕・両端部・両側縁に敲打痕 地石兼用			覆土下層	PL31
5	燧石	12.7	8.0	9.1	1,354.7	黒レイ岩	素材は扁平礫・両端部と一部側縁に敲打痕 片割分割面			底面	PL31
6	燧石	11.1	10.4	8.2	1,383.6	石英斑岩	素材は扁平礫・下端部を中心に敲打痕			底面	PL31

第263号土坑(第90図 第47表)

位置 調査区南部の1J5d8区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

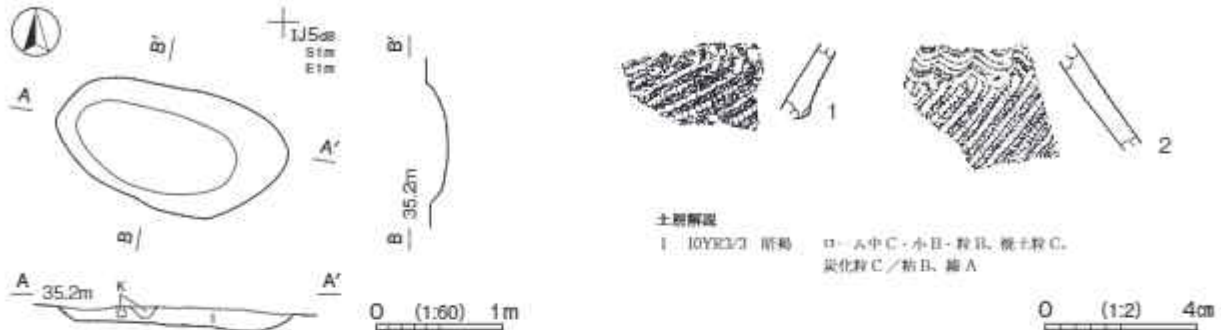
規模と形状 長径1.85m、短径0.98mの楕円形で、長径方向はN-81°-Wである。深さは16cmで、底面は

平坦で、東に向かって緩やかに傾斜している。壁は外傾している。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 弥生土器片2点(広口壺)が出土している。1・2は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第90図 第263号土坑・出土遺物実測図

第47表 第263号土坑出土遺物一覧(第90図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	(21)			長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	附加糸一種附加2条縄文施文	覆土	5%
2	弥生土器	広口壺	(30)			長石・石英	橙	普通	波状工具(3本以上)による波状文 刷込刷加状一種附加2条縄文	覆土	5%

第48表 弥生時代土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	型 板		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	高さ(cm)					
91	116c2		[楕円形]	(0.38) × (0.31)	15	外傾	皿状	人為	弥生土器 石器	本跡→TM5
263	1J5d8	N 81° W	楕円形	1.85 × 0.98	16	外傾	平坦	人為	弥生土器	

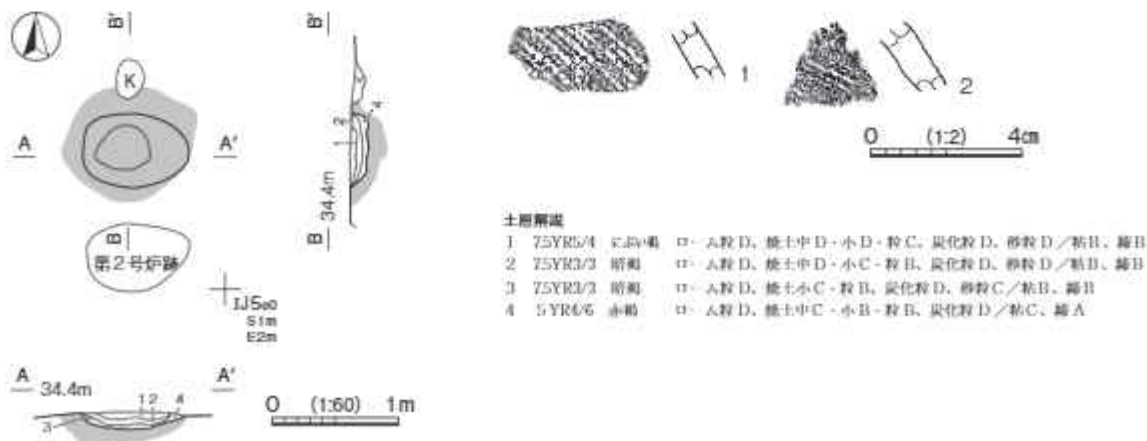
(4) 炉跡

第1号炉跡(第91図 第49表)

位置 調査区南部の1J5d0区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第2号炉跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.83m、短径0.58mの楕円形で、長径方向はN-83°-Eである。深さ13cmほどの地床が、断面は皿状を呈している。炉床面は赤変硬化し、外周も赤変している。第2号炉跡との新旧関係は地山の被熱具合により、本跡が新しいと判断した。



第91図 第1号炉跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器片3点（広口壺）が出土しているが、2次被熱痕は見られない。

所見 時期は、出土土器から後期と考えられる。被熱の状態や覆土などが第2号か跡と類似している。なお、周囲を精査したが、柱穴などは確認できなかった。

第49表 第1号か跡出土遺物一覧（第91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺		(15)		長石・石英・雲母	橙	普通	附加条一種附加2条縄文施文	伊覆土	5%
2	弥生土器	広口壺		(19)		長石・石英	橙	普通	附加条一種附加2条縄文施文	伊覆土	5%

第2号炉跡（第92図 第50表）

位置 調査区南部のI J 5e0区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1号かに掘り込まれている。

規模と形状 長径0.84 m、短径0.54 mの楕円形で、長径方向はN-83°-Eである。深さ7 cmほどの地床かで、断面は皿状を呈している。か床面は赤変硬化し、北部の外周も赤変している。

遺物出土状況 弥生土器片2点（広口壺）が出土している。1・2は覆土中から出土している。

所見 時期は、後期と考えられる。被熱の状態や覆土などが、第1号か跡と類似している。なお、周囲を精査したが、柱穴などは確認できなかった。



第92図 第2号か跡・出土遺物実測図

第50表 第2号か跡出土遺物一覧（第92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺		(25)		長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%
2	弥生土器	広口壺		(25)		長石・石英	橙	普通	附加条一種附加2条縄文施文	覆土	5%

第3号炉跡（第93図 第51表）

位置 調査区南部のI J 5c9区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。



第93図 第3号か跡・出土遺物実測図

重複関係 第3号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため確認できた規模は、長径0.76 m、短径0.15 mである。楕円形と推定でき、長径方向はN-11°-Eである。深さ7 cmほどの地床かで、断面は皿状を呈している。か床面は赤変硬化している。

遺物出土状況 弥生土器片4点(広口壺)が出土している。1・2は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。

第51表 第3号か跡出土遺物一覧(第93図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(32)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	赤褐	普通	胴部外面附加糸一種附加2条縄文	覆土	5%
2	弥生土器	広口壺	-	(33)	-	長石・石英・雲母 白色粒子	橙	普通	胴部外面附加糸一種附加2条縄文	覆土	5%

第4号炉跡(第94図 第52表)

位置 調査区北東部の116B区、標高35 mほどの台地平坦面に位置している。

規模と形状 長径0.85 m、短径0.52 mの楕円形で、長径方向はN-39°-Wである。深さ5 cmほどの地床かで、断面は皿状を呈している。か床面は赤変硬化している。

遺物出土状況 弥生土器片4点(広口壺)が出土している。1はか床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。



第94図 第4号か跡・出土遺物実測図

第52表 第4号か跡出土遺物一覧(第94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(47)	-	長石・石英・雲母 白色粒子	にぶい褐	普通	附加糸一種附加2条縄文	底面	5%

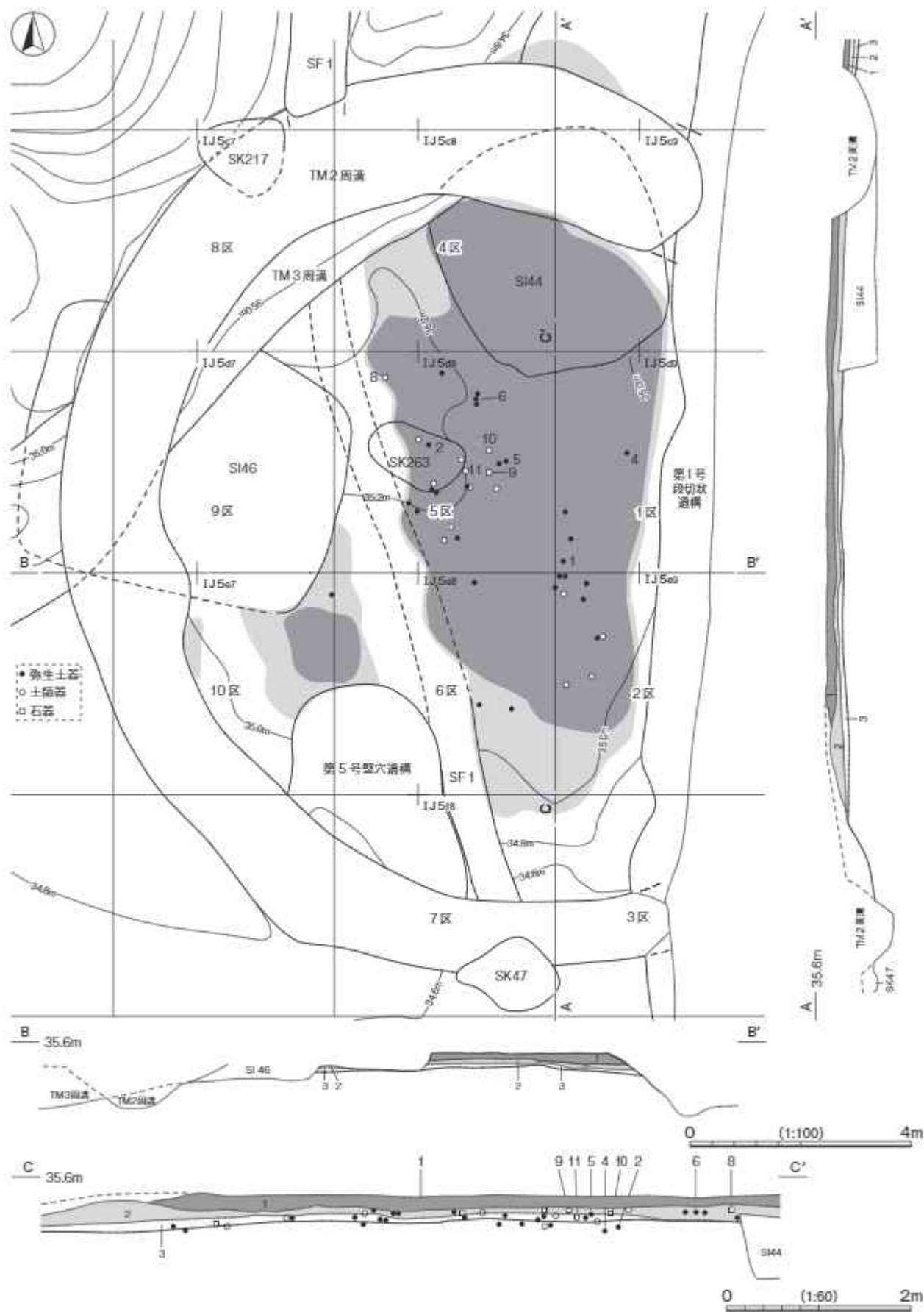
第53表 弥生時代か跡一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模		断面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	1j5d0	N-83° E	楕円形	0.83 × 0.58	13	-	皿状	-	弥生土器	F2 → 本跡
2	1j5e0	N-83° E	楕円形	0.84 × 0.54	7	-	皿状	-	弥生土器	本跡 → F1
3	1j5e9	N-11° E	[楕円形]	0.76 × (0.15)	7	-	皿状	-	弥生土器	本跡 → SB 3
4	116B	N-39° W	[楕円形]	0.85 × 0.52	5	-	皿状	-	弥生土器	

(5) 遺物包含層

2か所を確認した。第1号遺物包含層の遺物は第2号墳調査時の土層ラインを任意グリッド(北東部から順に1区…10区)、第2号遺物包含層は第3号墳調査時の任意グリッド(北西部から時計回りに1区…6区)ごとに記録した。以下、遺物などについて記述する。

第1号遺物包含層 (第95~98图 第54~56表 PL32)



第1号包含層土層解説

1 10YR2/1 黒粘 中- A小D-粘B, 硬土D, 炭化粒D/粘B, 雜B
 2 10YR4/4 暗粘 中- A小C-粘B, 炭化粒D/粘B, 雜B

3 10YR7/4 灰黄 黄砂粘 中- A小C-粘A, 炭化粒D/粘B, 雜B

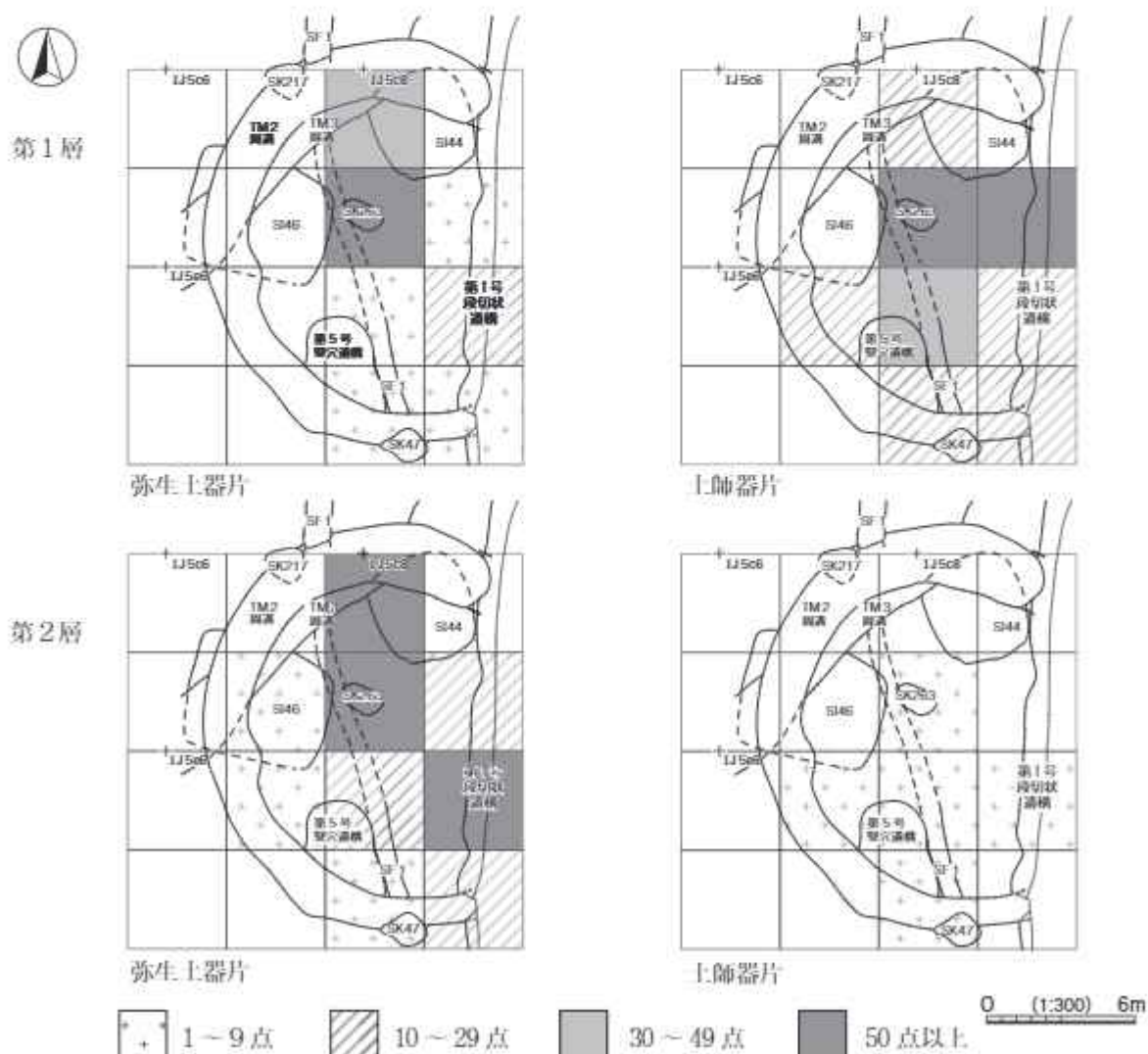
第95图 第1号遺物包含層実測图

位置 調査区南部のI J 5c7区～I J 5c8区、標高35mほどの台地平坦面から緩傾斜面に位置している。

重複関係 弥生時代中期中葉の第44号竪穴建物跡の廃絶後に形成され、第46号竪穴建物、第5号竪穴遺構、第1号段切状遺構、第263号土坑、第1号道路、第2・3号墳に掘り込まれている。

規模 重複や撓乱を受けているが、第2号墳の周溝内側を中心に、南北11.0m、東西7.1mの楕円形の範囲である。その範囲には、テストピット1の基本層序第Ⅱ・Ⅳ層が堆積している。包含層の第1層は、テストピット1の基本層序第Ⅱ層に相当し、層厚15～20cm、包含層の第2層は、テストピット1の基本層序第Ⅲ～Ⅳ層に相当し、層厚は8～17cmで、地形に沿ってほぼ水平に堆積している。

遺物出土状況 縄文土器片10点(深鉢)、弥生土器片724点(広口壺)、土師器405点(碗20、埴2、高坏4、壺7、甕372)、土製品1点(紡錘車)、焼成粘土塊1点、石器21点(ガラス質安山岩製有肩扇状石器1、剥片15〔石英製8、チャート製6、ホルンフェルス製1〕、石英製石核1、チャート製磨石1、砥石2〔硬砂岩製、砂岩製〕、硬砂岩製敲石兼砥石1)、鏢4点〔雲母片岩3、軽石1〕が出土している。遺物の垂直分布から、第2層を中心に古墳時代前期の土師器片、第3層を中心に弥生土器片が出土している。土器片はほとんどが細片で、土師器片にはハケ目調整が認められる。4は東部、7は中央部の第3層から、8は北西部、9・10・11は中央部の第2層から、それぞれ出土している。



第96図 第1号遺物包含層出土遺物分布図

所見 遺物包含層は大きく2時期にわたって形成されている。出土遺物から、第2・3層が弥生時代中期から後期にかけて、第1層が古墳時代前期から中期にかけて堆積したものと推測できる。本層は、第2号墳の周溝内側の範囲で確認したことから、第2号墳の墳丘によって被覆された結果、後世の削平などをまぬがれ、現在まで遺存したと考えられる。

第54表 第1号遺物包含層第1層出土遺物集計表

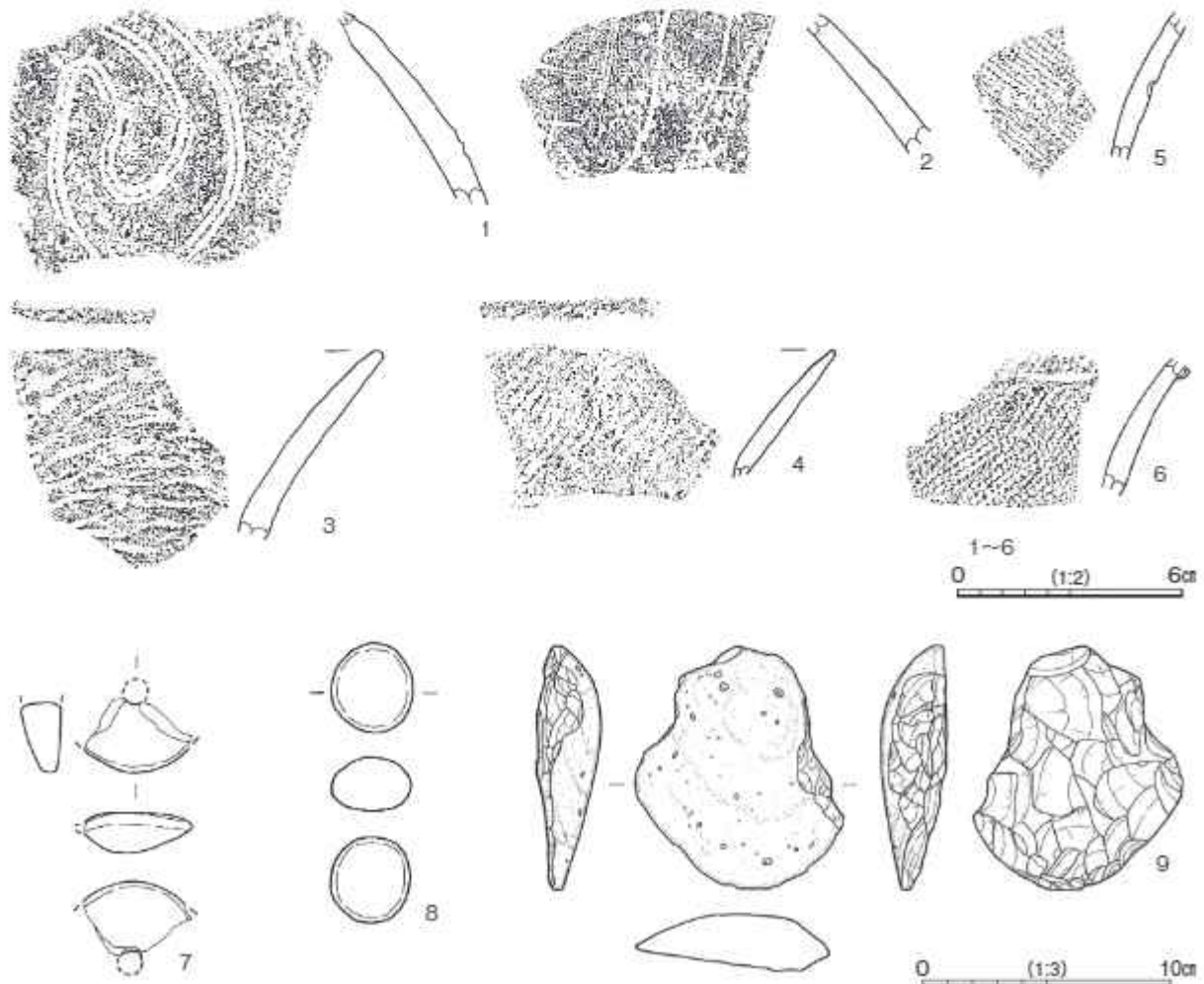
時期	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	合計
弥生時代	中期			1	1						2
	後期		12	4	18						34
	不明	3	4	2	29	87	4	2			131
古墳時代	前期	54	4	4	7	22		4		10	105
	中期	1	1			37					39
	不明	20	16	9	16	130	40	18	0	3	252
合計	78	37	15	17	295	44	24			13	563

器種	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	合計
土製品	模造粘土瓦			1							1
	滑石								1		1
石器	礫石			3							3
	磨石			2	1						3
合計	0	0	0	6	1	0	0	0	1	0	8

第55表 第1号遺物包含層第2・3層出土遺物集計表

時期	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	合計
弥生時代	中期		4	15	29	3					51
	後期	3	8	22	19	41	4		2		99
	不明	16	68	6	25	218	16	6		2	407
古墳時代	前期					1				2	3
	中期										0
	不明	1			4		1				6
合計	19	81	38	109	292	24	7	0	2	4	566

器種	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	合計
土製品	粘輪半				1						1
	有肩扇状石器					1					1
石器	石英				1						1
	礫片	1	1		3	2	1				8
	その他	2			1	3	1				7
	磨石					1					1
合計	1	3	0	5	7	2	0	0	0	0	19



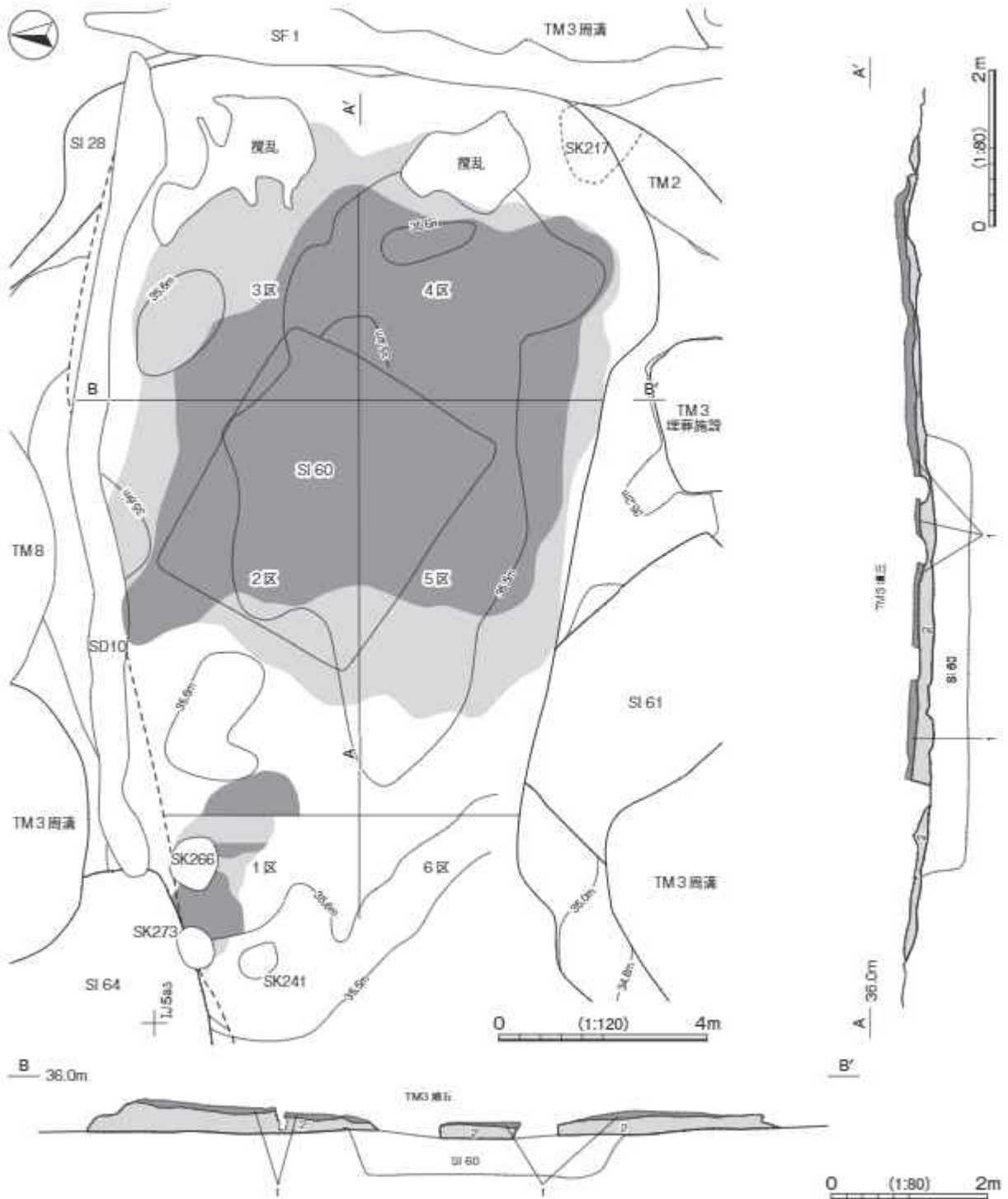
第97図 第1号遺物包含層出土遺物実測図(1)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口甕	-	(54)	-	長石・石英・雲母	にぶい靑	普通	半截竹管文による渦巻文	1 J 5 d8	5% PL32
2	弥生土器	広口甕	-	(38)	-	長石・石英・雲母	にぶい靑	普通	半截竹管文による渦巻文 渦巻の先端は開口	1 J 5 d7	5% PL32
3	弥生土器	広口甕	-	(5)							

第2号遺物包含層 (第99～101図 第57～59表 PL32)

位置 調査区南部のI J 5a3区～I J 5c7区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第60号竪穴建物の構築前後に形成され、第241・266・273号土坑、第10号溝、第3号埴に掘り込まれている。



第2号包含層土層解説

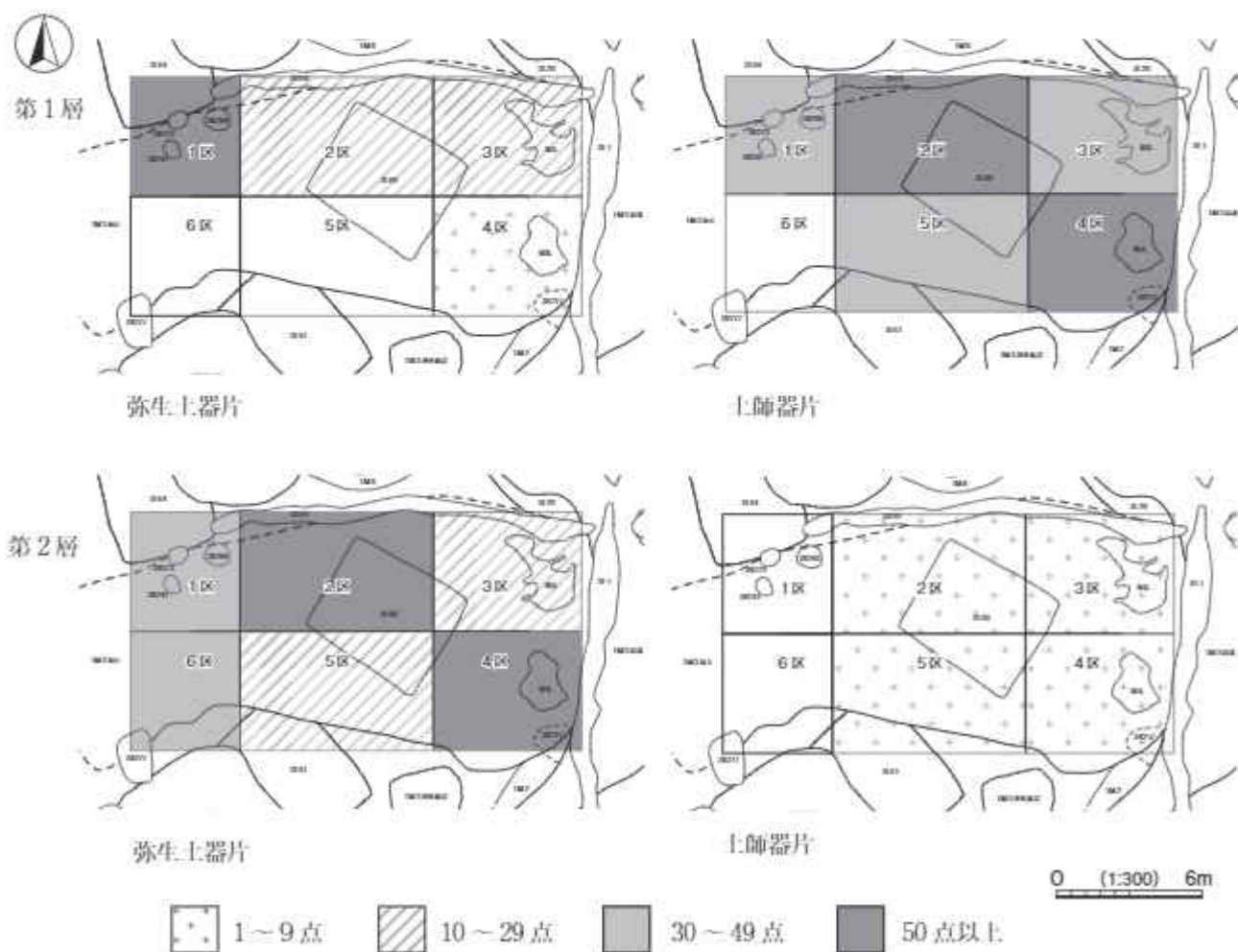
- 1 10YR2/1 黒褐 中～小D・粒B、粘土D、炭化粒D/粘B、籾耳
2 10YR4/4 暗褐 中～小C・粒B、黒色土粒B/粘B、籾耳

第99図 第2号遺物包含層実測図

覆土 重複しているが、第3号墳の周溝内側を中心に東西11.6m、南北9.4mの楕円形の範囲である。その範囲には、テストピット1の基本層序第Ⅱ～Ⅳ層が堆積しており、包含層の第1層は、テストピット1の基本層序第Ⅱ層に相当し、層厚5～8cm、包含層の第2層は、テストピット1の基本層序第Ⅲ～Ⅳ層に相当し、層厚10～22cmで、地形に沿ってほぼ水平に堆積している。

遺物出土状況 縄文土器片2点（深鉢）、弥生土器片450点（広口壺）、土師器片525点（椀1、埴3、高坏35、壺56、甕430）、土製品2点（紡錘車1、不明1）、焼成粘土塊1点、石器9点（右肩扇状石器2〔ガラス質安山岩製〕、石英製石核2、剥片3〔石英製2、チャート製1〕、磨石2〔砂岩製1、安山岩製1〕）、礫1点（雲母片岩）が出土している。遺物の層位別分布状況から、包含層第1層からは古墳時代前期の土師器片が、包含層第2層からは弥生土器細片がそれぞれ出土している。

所見 時期は、第1号遺物含包層と同じく、2時期にわたって形成されている。出土遺物から、第2層が弥生時代中期から後期にかけて、第1層が古墳時代前期から中期にかけての土器が包含されて堆積したものと推測できる。本層は、第3号墳の周溝内側の範囲で確認したことから、第3号墳の墳丘によって被覆された結果、後世の削平などをまぬがれ、現在まで遺存したと考えられる。



第100図 第2号遺物包含層出土遺物分布図

第57表 第2号遺物包含層第1層出土遺物集計表

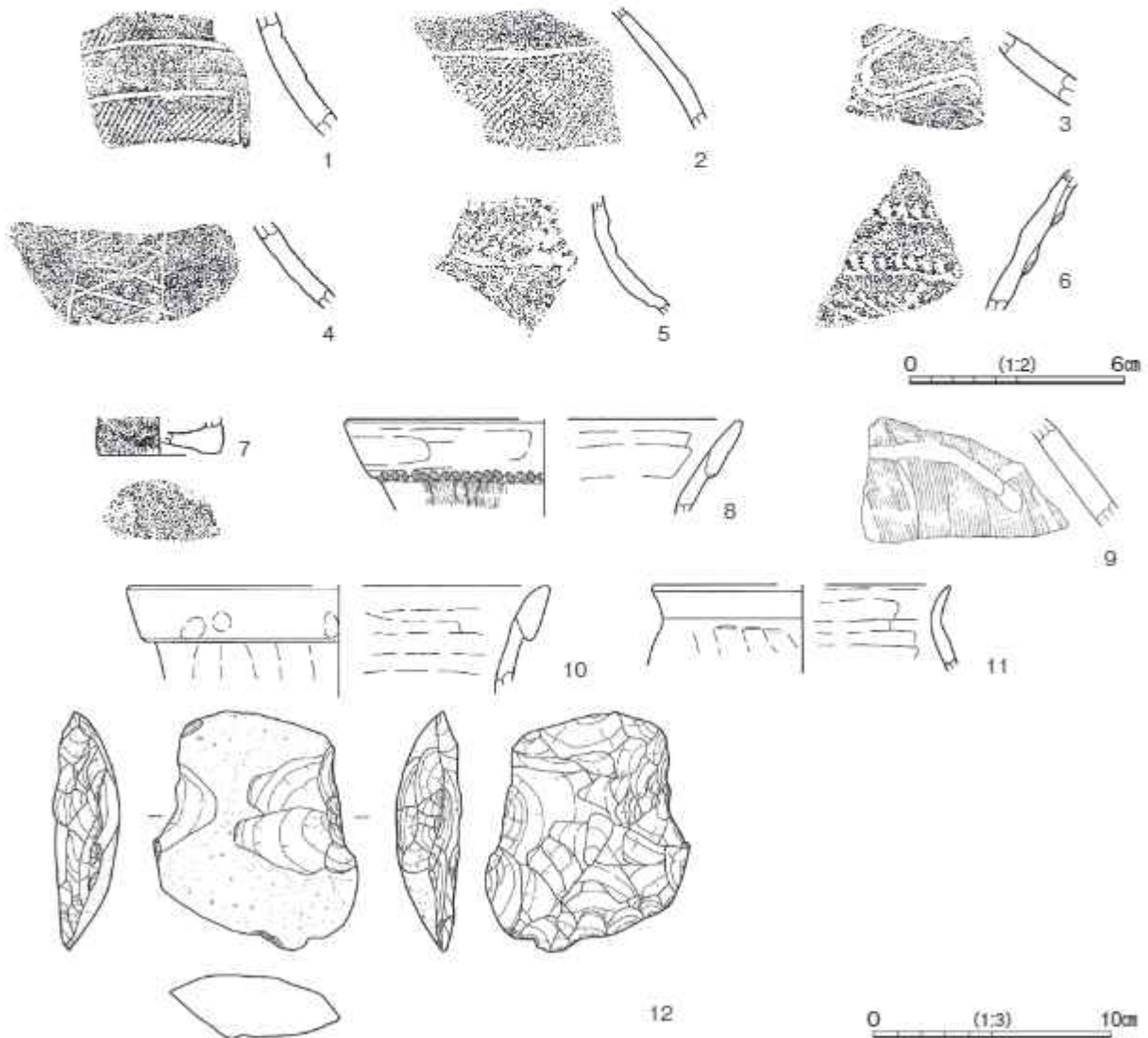
時期	1区	2区	3区	4区	5区	6区	合計
弥生時代	前期	1	5		1		7
	後期	9	3	3	1		16
	不明	72	12	26	2		112
古墳時代	前期	5	79	31	79	29	223
	不明	1		1			2
合計	118	193	67	177	40	0	595

器種	1区	2区	3区	4区	5区	6区	合計
土製品	模成粘土塊	1					1
	磨石	1					1
石器	石茎	1					1
	鏃片			1			1
合計	3	0	0	1	0	0	4

第58表 第2号遺物包含層第2層出土遺物集計表

時期	1区	2区	3区	4区	5区	6区	合計	
弥生時代	前期	2	2	2		1	7	
	後期	4	5	3	5	7	1	25
	不明	29	102	20	80	17	35	283
古墳時代	前期	5	1			1	8	15
	不明	1					1	1
合計	55	111	39	94	25	59	380	

器種	1区	2区	3区	4区	5区	6区	合計
土製品	黏土片	1					1
	不明		1				1
石器	有刃扇状石器	2					2
	磨石	1					1
	石茎	1	1				2
	子+上 鏃片		1				1
	鏃片						1
合計	5	3	0	0	0	1	9



第101图 第2号遺物包含層出土遺物実測図

第51表 第2号遺物包含層出土遺物一覧(第101図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	広口罎		(35)		長石・石英・雲母	褐色	普通	出. 縄文施文後沈線で区画した中を磨削す 縄文施文部分赤彩	6区	5% PL32
2	弥生土器	広口罎		(35)		長石・石英・雲母	灰褐色	普通	附加条一種附加条施文後沈線で区画した中を磨削す	4区第2層	5% PL32
3	弥生土器	広口罎		(21)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	千載竹管状工具による渦巻文	1区第2層	5% PL32
4	弥生土器	広口罎		(23)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	細口長頸壺 頸部沈線区画した中に斜格子目文	4区第2層	5%
5	弥生土器	広口罎		(33)		長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐	普通	出. 縄文施文後頸部端沈線施文	3区第2層	5%
6	弥生土器	広口罎		(39)		長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	2条の附加条に刺突列 頸部附加条一種	2区第1層	5% PL32
7	弥生土器	広口罎		(16)	[52]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面千載竹管による波状文。底部布目痕	3区第1層	5%
8	土師器	壺	[168]	(41)		長石・石英・雲母	橙	普通	新蓋1口縁 口縁部内外面ナデ 頸部外面ハケ目調整 口縁部と頸部の境にハケ目による刺突	3区第1層	10%
9	土師器	壺		(46)		長石・石英	明赤褐	普通	大塚壺の胴部 外面ハケ目後ナデ 内面磨滅	3区第1層	5%
10	土師器	壺	[175]	(46)		長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ナデ後指頭痕 内面ナデ 頸部外面縦方向のナデ 内面ナデ	3区第1層	10%
11	土師器	壺	[126]	(37)		長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ 体部外面縦方向のナデ 内面横方向のナデ	3区第1層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	石片 石蓋	10.1	8.6	2.8	230.73	ガラス質安山岩	楕型 刃部弧状 両側縁持ち込み 刃部背面側からの連続した口縁調整	3区第2層	

4 古墳時代の遺構と遺物

竪穴建物跡 25 棟、竪穴遺構 1 基、土坑 3 基、古墳 7 基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第6号竪穴建物跡(第102・103図 第60表 PL 8・33)

位置 調査区北西部の I I 5c7 区、標高 34 m ほどの台地緩傾斜面に位置している。

重複関係 第58・62号土坑、第6号溝、第5号墳に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 6.74 m、短軸 5.66 m の長方形で、主軸方向は N - 60° - E である。壁は高さ 22 ~ 50 cm で、外傾している。

床 確認できた範囲はほぼ平坦で、硬化していない。南部に向かって緩やかに高くなっている。北東壁の一部から、南東壁にかけてと南西壁の一部には、幅 18 ~ 22 cm、深さ約 10 cm、断面形が U 字状の壁溝が巡っている。

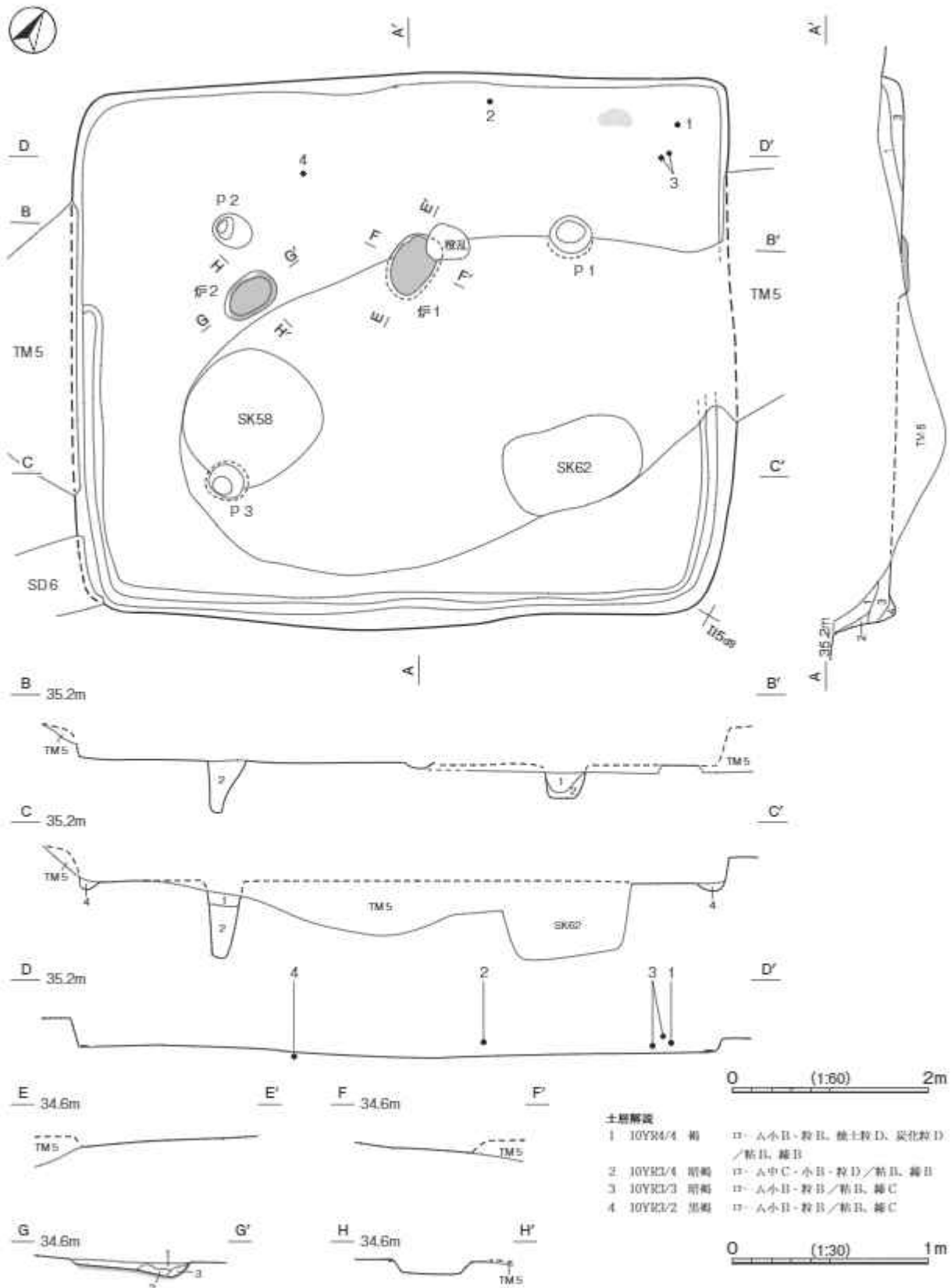
炉 2 か所。か1 は中央部やや北寄りに位置している。第5号墳に掘り込まれているため、赤変硬化したか床面のみを確認した。その面は、長径 64 cm、短径 45 cm の楕円状を呈している。か2 は中央部やや西寄りに位置している。長径 60 cm、短径 38 cm の不整楕円形で、深さ 8 cm の地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。

ピット 3 か所。P 1 ~ P 3 は深さ 36 ~ 80 cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

覆土 4 層に分層できる。各層にロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 127 点(埴1、器台2、高坏10、壺3、甕111)、焼成粘土塊1点が出土している。ほかに混入した弥生土器片 99 点、土師質土器片 1 点、石英製剥片 1 点が出土している。遺物は主に北部の覆土下層から中層にかけて散在した状態で出土している。また、北コーナー付近の床面から、長軸約 35 cm、短軸約 15 cm、厚さ 5 cm の焼土塊を確認したが、床面が焼けていないことから竪穴建物廃絶直後に投棄されたものである。1 は北コーナー寄りの覆土中層から、2 は北西壁際中央付近の覆土中層から、4 は北西部の床面から、それぞれ出土している。3 は覆土下層と中層から出土した土器片が接合している。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀後葉と考えられる。



ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 10YR4/4 粘 ロ-小A・投A、焼土投D、/粘B、雑C
 2 10YR2/4 暗粘 ロ-大A・中C・小A・投A、粘B、雑C

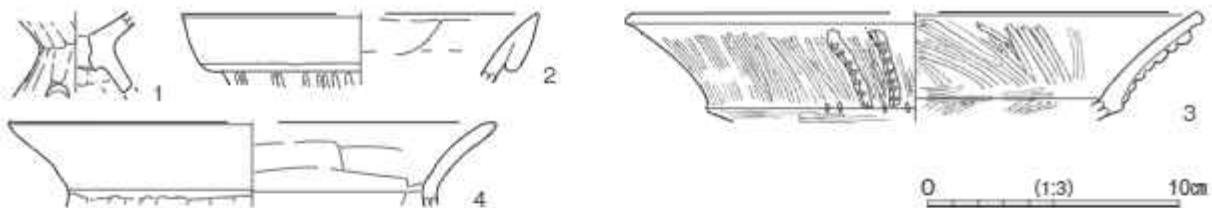
炉1土層解説

火山灰熱

炉2土層解説

- 1 10YR2/4 暗粘 ロ-大中C・小B・投B、焼土投D、炭化投D/粘B、雑B
 2 5YR4/3 灰黄粘 ロ-大投B、焼土投B、炭化投D/粘B、雑C
 3 10YR2/4 暗粘 ロ-大投B、焼土投D、炭化投D/粘B、雑C

第102図 第6号竪穴建物跡実測図



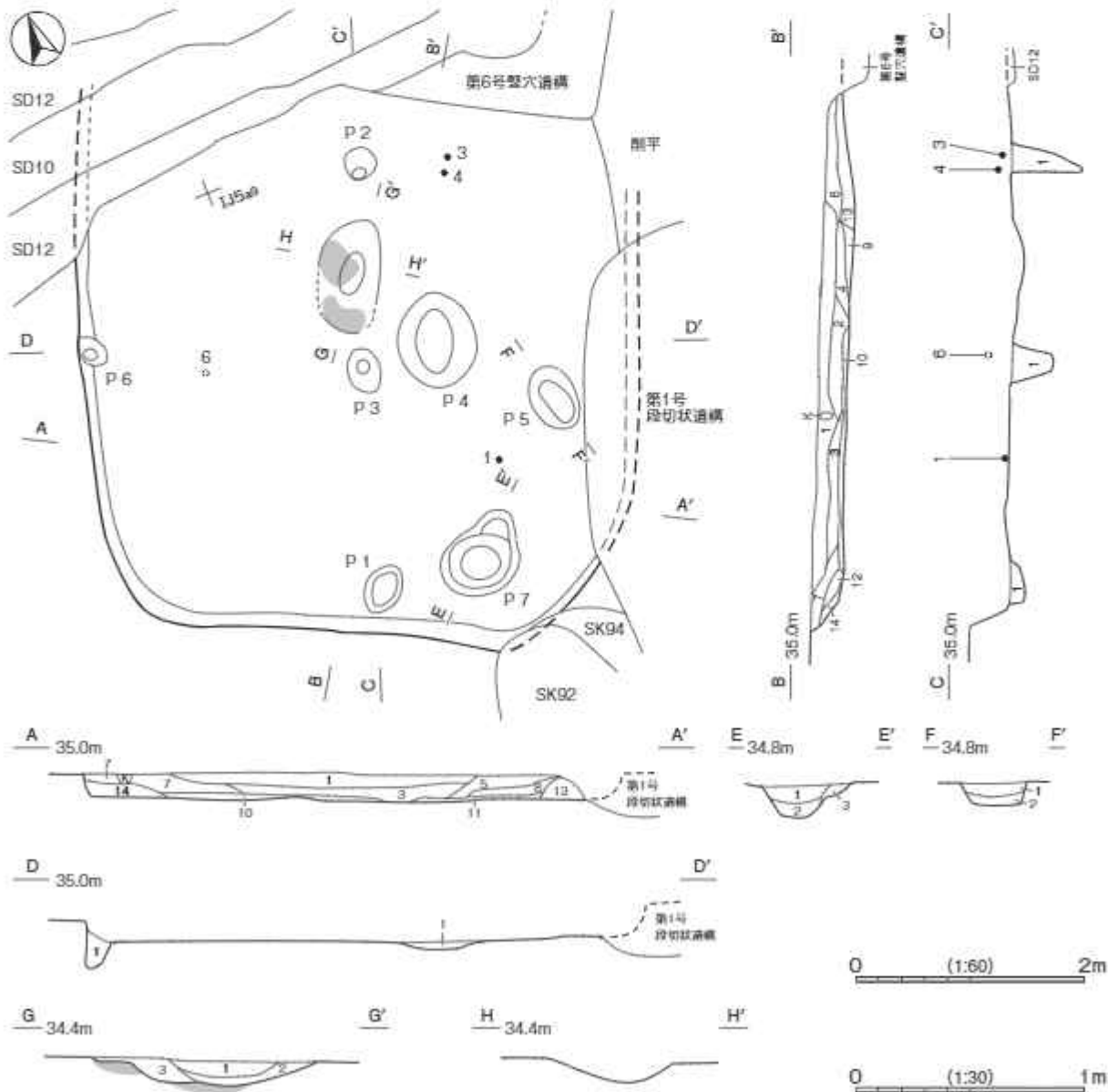
第103図 第6号竪穴建物跡出土遺物実測図

第60表 第6号竪穴建物跡出土遺物一覧(第103図)

番号	種類	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	器台		(34)		長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	脚部外面ヘラナツ 内面ヘラナツ 脚部3孔	覆土中層	20%
2	土師器	碗	(14.2)	(2.8)		長石・石英・雲母	橙	普通	折り返し口縁 口縁部内外面ナツ 頸部外面ナツの後ヘラナツ	覆土中層	5%
3	土師器	碗	(22.4)	(4.3)		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁部内外面ヘラミ野々 杯状浮文2条一対 杯状浮文上に刷み 頸部に2対の刷み	覆土中層 覆土中層	5% PL33
4	土師器	壺	(19.4)	(3.4)		長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部内外面ヘラナツ 体部上半ヘラナツ 内面ヘラナツ	床面	5%

第7号竪穴建物跡(第104・105図 第61表 PL.9)

位置 調査区中央部のI J 5a9区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。



第104図 第7号竪穴建物跡実測図

土層解説

- 1 10YR2/1 黒 ローム小D・粒C／粘B、綿A
 2 10YR2/1 黒綿 ローム小D・粒C／粘B、綿A
 3 10YR2/4 暗黒 ローム小D・粒B、焼土粒D／粘B、綿B
 4 10YR2/2 黒綿 ローム小D・粒C、炭化粒D／粘B、綿B
 5 10YR2/3 黒綿 ローム小D・粒C／粘B、綿B
 6 10YR2/3 暗黒 ローム小D・粒B／粘B、綿B
 7 10YR2/3 暗黒 ローム小B・粒A、炭化粒C／粘B、綿A

- 8 10YR4/4 黒 ローム中C・小B・粒B、炭化粒D／粘B、綿B
 9 10YR4/6 黒 ローム中C・小B・粒B／粘B、綿A
 10 10YR4/4 黒 ローム中A・小A・粒A／粘B、綿A
 11 10YR2/2 黒綿 ローム小C・粒C、焼土粒D／粘B、綿A
 12 10YR3/4 暗黒 ローム小B・粒B／粘B、綿A
 13 10YR2/3 暗黒 ローム中D・小B・粒B／粘B、綿A
 14 10YR4/3 暗黒綿 ローム中C・小C・粒B／粘B、綿B

炉土層解説

- 1 10YR5/3 灰赤土 ローム粒C／粘B、綿A
 2 10YR2/4 暗黒 ローム小D・粒D、焼土小B・粒C、炭化粒B／粘B、綿A
 3 5YR4/4 灰赤土 ローム小D・粒C、焼土小D・粒C／粘B、綿A

ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 10YR4/4 黒 ローム小B・粒B、焼土粒D、炭化粒D／粘B、綿B
 2 10YR4/6 黒 ローム中C・小B・粒D／粘B、綿B
 3 10YR2/3 暗黒綿 ローム中D・小C・粒B／粘B、綿B

重複関係 第6号竪穴遺構、第92・94号土坑、第10・12号溝、第1号段切状遺構に掘り込まれている。

規模と形状 北部と東部が重複のため、確認できた規模は、長軸4.76m、短軸4.40mで、平面形は隅丸長方形と推定できる。主軸方向はN-22°-Eである。壁は高さ20～28cmで、外傾している。

床 ほほ平坦であるが、硬化はしていない。北東部に向かって緩やかに高くなっている。

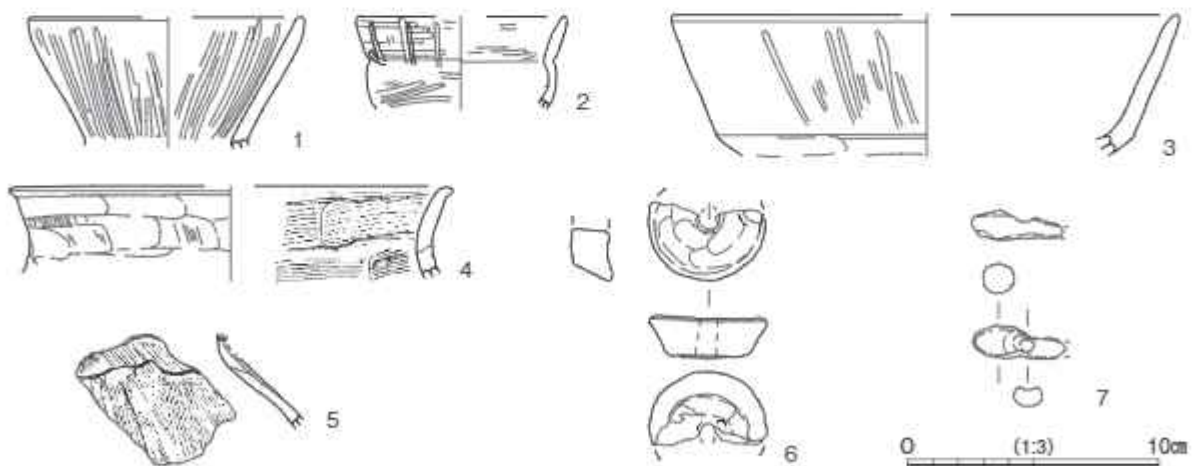
炉 中央部北寄りに位置している。長径103cm、短径75cmの楕円形で、深さ10cmの地床かである。断面は皿状を呈している。か床面は西壁と南壁が部分的に赤変硬化している。

ピット 7か所。P1は深さ8cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P2～P7は深さ10～65cmで、いずれも性格は不明である。P7は長径80cm、短径68cm、深さ27cmの楕円形である。

覆土 14層に分層できる。第1～6層はロームブロックやローム粒子などの含有物を均質に含むことから、自然堆積である。第7～11層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。第12～14層はロームブロックやローム粒子を主体とした壁際の三角堆積土であり、自然堆積の可能性が高い。以上のことから、本跡は廃絶してしばらく放置された後、埋め戻されたと考えられる。

遺物出土状況 土師器片831点(埴2、高坏3、鉢1、壺17、甕808)、土製品2点(土錘、紡錘車)、焼成粘土塊3点が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片167点、石器3点が出土している。遺物は、東部から南部の床面から覆土下層にかけて、散在した状態で出土している。1は南東部の床面から、3・4は北東部の覆土下層から、7は西部の覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。



第105図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図

第61表 第7号竪穴建物跡出土遺物一覧(第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	110.9	(5.9)		長石・石英	橙	普通	口縁部内外面ミガキ	床面	5%
2	土師器	埴	18.2	(3.7)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面ミガキ 体部外面ミガキ・内面ナブ	覆土	5%

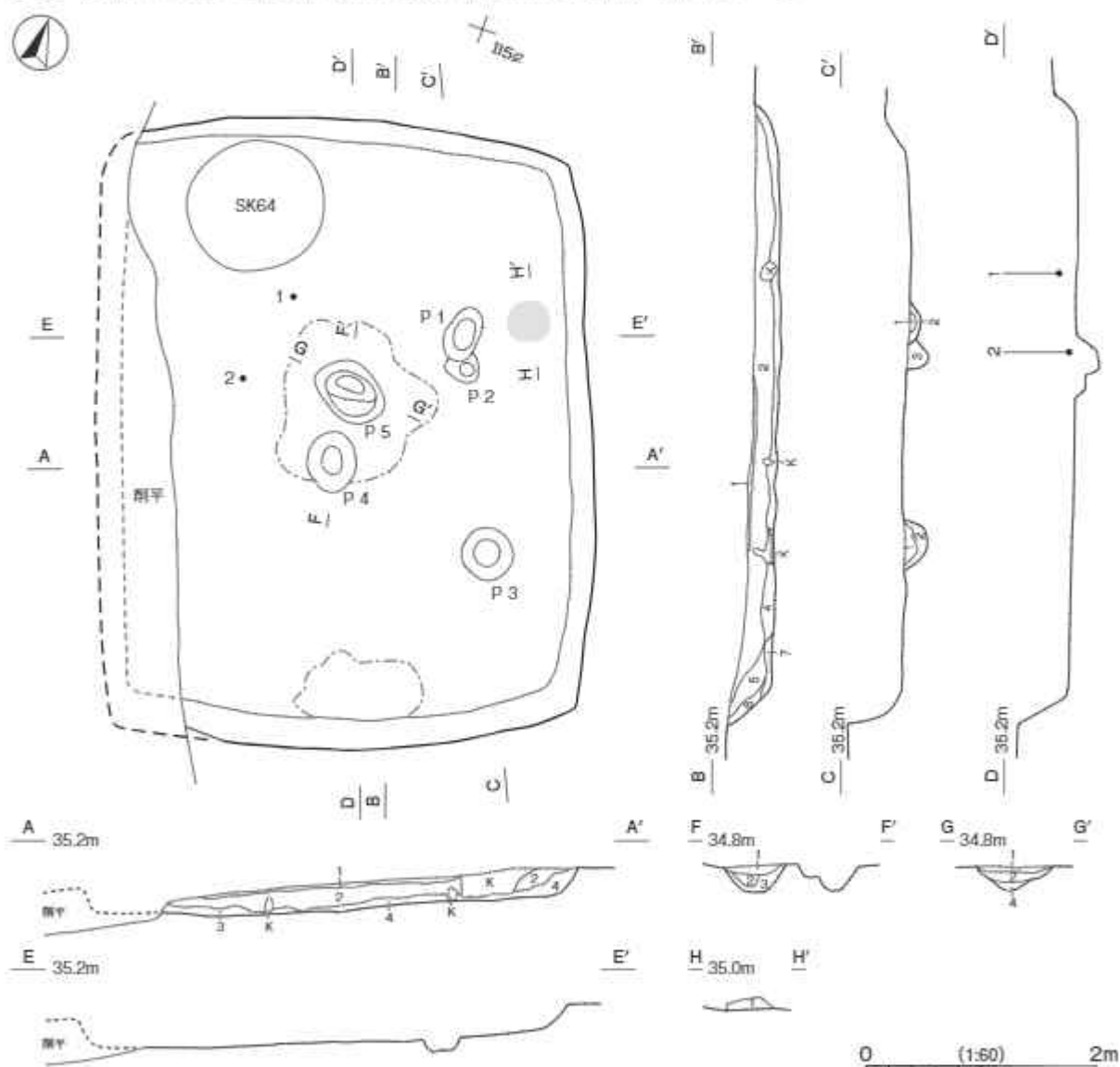
3	土師器	壺	[30.0]	(5.6)	-	長石・石英・砂礫・白色粒子	黒褐色	普通	口縁部外面ミガキ 内面摩耗	覆土下層	5%
4	土師器	壺	[17.0]	(3.7)	-	長石・石英・白色粒子	に濃い黒褐色	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目	覆土下層	5%
5	土師器	壺	-	(3.8)	-	長石・石英	橙	普通	頸部に粘土貼り付け後ハケ目調整	覆土	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
6	紡錘車	4.7	1.7	0.9	(19.6)	石英・白色粒子 赤色粒子	明褐色	截頭円錐形 断面逆台形で上面が内が内縁全面ナデ	覆土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
7	不明土製品	(3.2)	1.3	1.2	(4.6)	石英・黒色粒子	橙	棒状 端部欠損 全面ナデ 中央部棒状工具による押印	覆土中層	

第8号竪穴建物跡 (第106・107図 第62表 PL 9)

位置 調査区西部 I 1 5 j2 区、標高 35 m の台地端部の緩斜面に位置している。



土層解説

- 10YR5/4 灰褐色 コーラム中D・小D・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、粘B
- 10YR4/4 灰褐色 コーラム小D・粒C、炭化粒D/粘B、粘A
- 5YR6/6 橙 コーラム粒D、焼土粒A/粘B、粘B
- 10YR5/6 黄褐色 コーラム中D・小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、粘B
- 10YR4/2 灰褐色 コーラム中D・小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、粘A
- 10YR4/2 灰褐色 コーラム中D・小C・粒C/粘B、粘A
- 10YR4/2 灰褐色 コーラム中D・小B・粒B/粘B、粘A

ピット土層解説 (各ピット共通)

- 10YR3/4 暗褐色 コーラム小D・粒C/粘B、粘B
- 10YR4/4 粘 コーラム中D・小C・粒B/粘B、粘B
- 10YR4/6 粘 コーラム中D・小C・粒C/粘B、粘B
- 10YR4/2 灰褐色 コーラム中D・小C・粒C、焼土粒C、炭化粒D/粘B、粘A

焼土土層解説

- 5YR5/6 明赤褐色 焼土小D・粒D/粘B、粘B

第106図 第8号竪穴建物跡実測図

重複関係 第64号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部は削平のため、確認できた規模は南北軸5.45m、東西軸3.87mで、本来は東西軸4.26mほどの長方形と推定できる。主軸方向はN-20°-Wである。壁は高さ18～43cmで、外傾している。

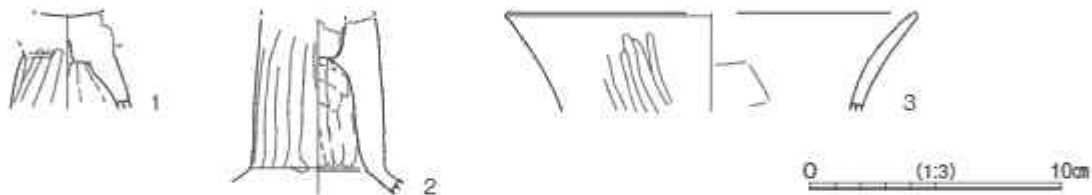
床 ほほ平坦である。全体的に東から西に傾斜している。中央部と南壁際中央部が硬化している。

ピット 5か所。P1～P5は深さ10～35cmで、配置が不規則である。P5はその位置からかであった可能性もあるが、焼土や被熱痕は確認できなかった。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片351点（埴5、高坏10、鉢4、壺50、小型壺2、甕類279、ミニチュア土器1）、焼成粘土塊1点が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、弥生土器片161点、石器1点（石英製剥片）が出土している。1・2は中央部の覆土中層、3は覆土中からそれぞれ出土している。また、細片のため図示できなかったが、P4とP5周辺の床面から、土師器破片がまとまって出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。



第107図 第8号竪穴建物跡出土遺物実測図

第62表 第8号竪穴建物跡出土遺物一覧（第107図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏		(3.8)		長石・石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面へつ磨き 内面へつナツ	覆土中層	20%
2	土師器	高坏		(5.9)		長石・石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面へつ削り後へつ磨き 内面へつナツ後 上平指ナツ ホツによる結合	覆土中層	30%
3	土師器	甕	[16.2]	(3.9)		長石・石英	橙	普通	口縁部内横ナツ・外面横ナツ後縦のへつ磨き	覆土	5%

第9号竪穴建物跡（第108図 第63表 PL.9）

位置 調査区北部のI I 6b2区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第10号竪穴建物跡を掘り込み、第30号土坑、第5号埴、第3号不明遺構に掘り込まれている。

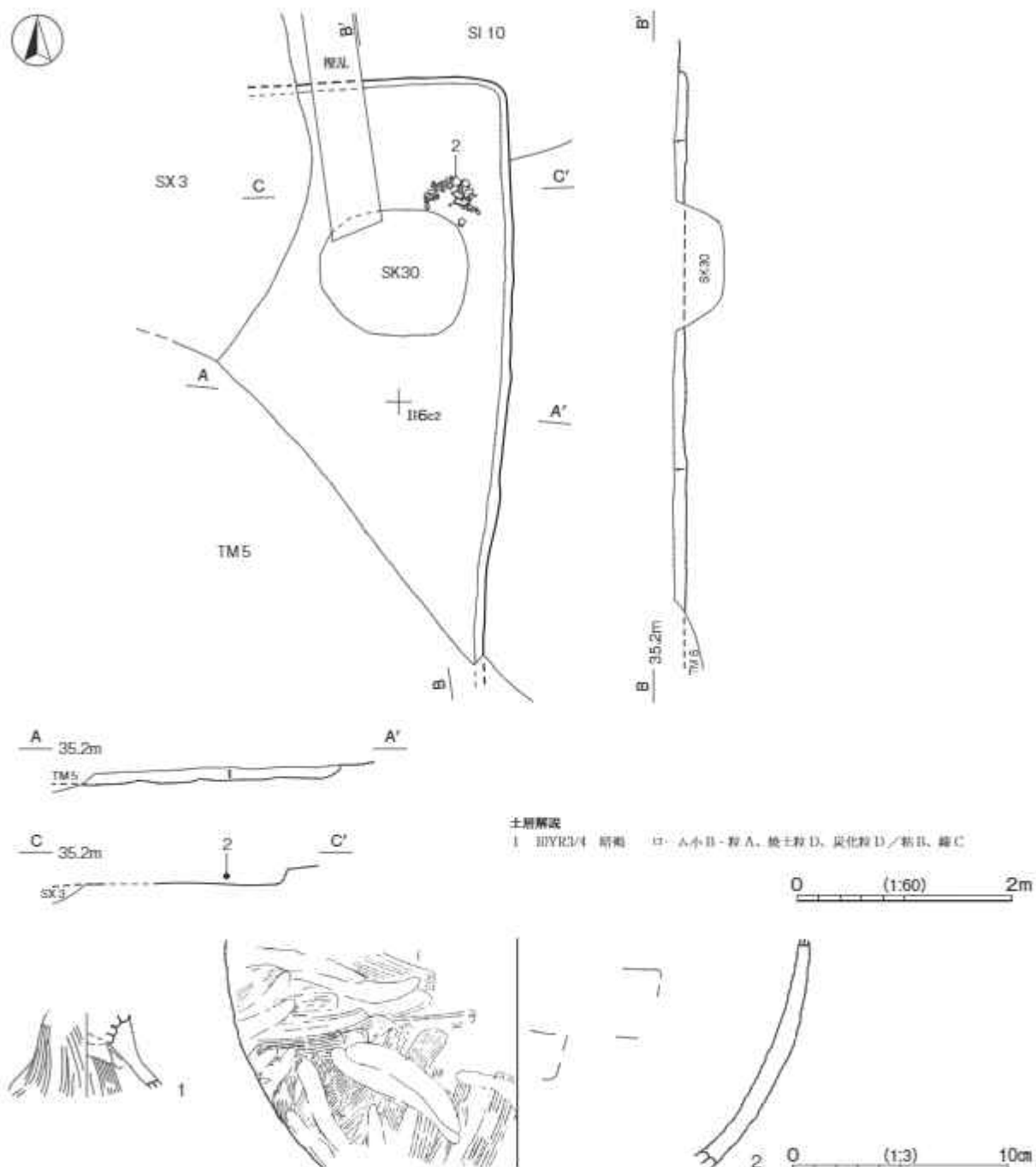
規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は南北軸5.42m、東西軸2.70mである。平面形は方形もしくは長方形と推定でき、主軸方向はN-0°である。壁は高さ8～12cmで、外傾している。

床 ほほ平坦であるが、小さな凹凸がある。硬化はしていない。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片16点（高坏1、甕15）が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、弥生土器片55点が出土している。遺物は主に北東部の覆土下層から、散在した状態で出土している。2は東壁際北寄りの覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀中葉と考えられる。



第108図 第9号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第63表 第9号竪穴建物跡出土遺物一覧(第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏		(35)		長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	脚部外面ヘツ磨き 内面ハケ目後ヘツナツ	覆土	20% 東海系
2	土師器	壺		(107)		長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	外面ハケ目後ヘツナツ 内面ヘツナツ	覆土下層	15%

第15号竪穴建物跡(第109・110図 第64表)

位置 調査区北部のI I 6e3区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第70号土坑、第5号墳に掘り込まれている。

規模と形状 西部は第5号墳に掘り込まれ、東部は調査区域外、南部は削平のため、確認できた規模は、南北

軸 5.00m、東西軸 3.38 mである。本来は南北軸約 5.25 m、東西軸約 4.38 mの隅丸長方形で、主軸方向はN-3°-Wと推測できる。壁は高さ7~13cmで、外傾している。

床 はほぼ平坦である。か周辺と中央部南側の一部が硬化している。

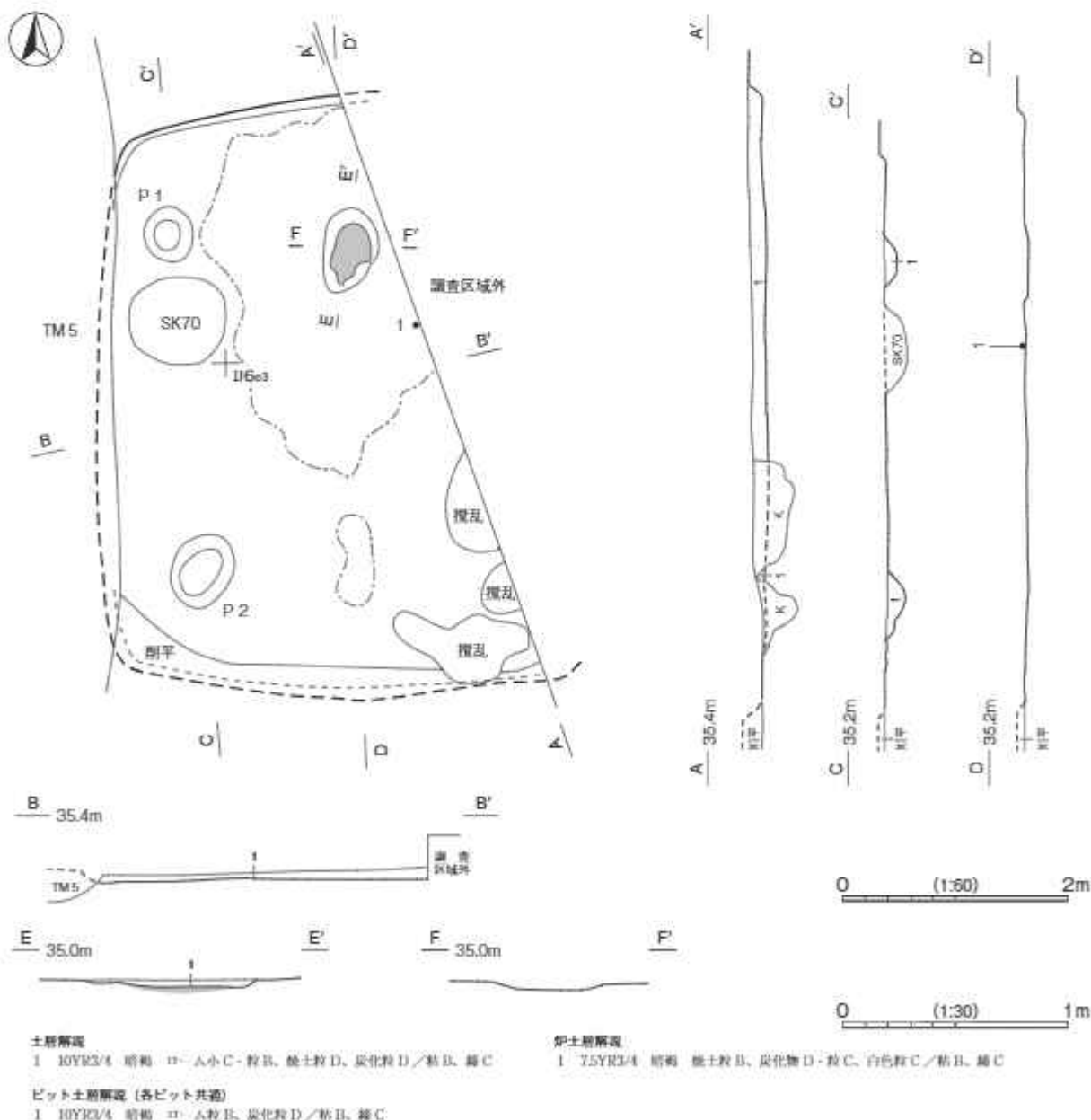
炉 中央部北寄りに位置している。長径76cm、短径48cmの楕円形で、深さ4cmほどの地床かである。断面は浅い皿状を呈しており、か床面は僅かに赤変硬化している。覆土から、炭化物が出土している。

ピット 2か所。P1は深さ9cm、P2は深さ15cmで、配置から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

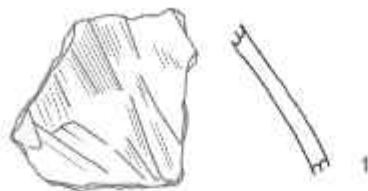
覆土 単一層ではあるが、ロームブロックを含むことや締まりが弱いことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片60点(埴1、高坏1、壺3、甕55)、焼成粘土塊1点が出土している。ほかに混入した弥生土器片22点、陶器片1点、石器1点が出土している。1は中央部の床面から出土している。

所見 ハケ目調整の土師器甕片が多く出土している。時期は、出土土器から前期と考えられる。



第109図 第15号竪穴建物跡実測図



0 (1:2) 6cm

第110図 第15号竪穴建物跡出土遺物実測図

第64表 第15号竪穴建物跡出土遺物一覧(第110図)

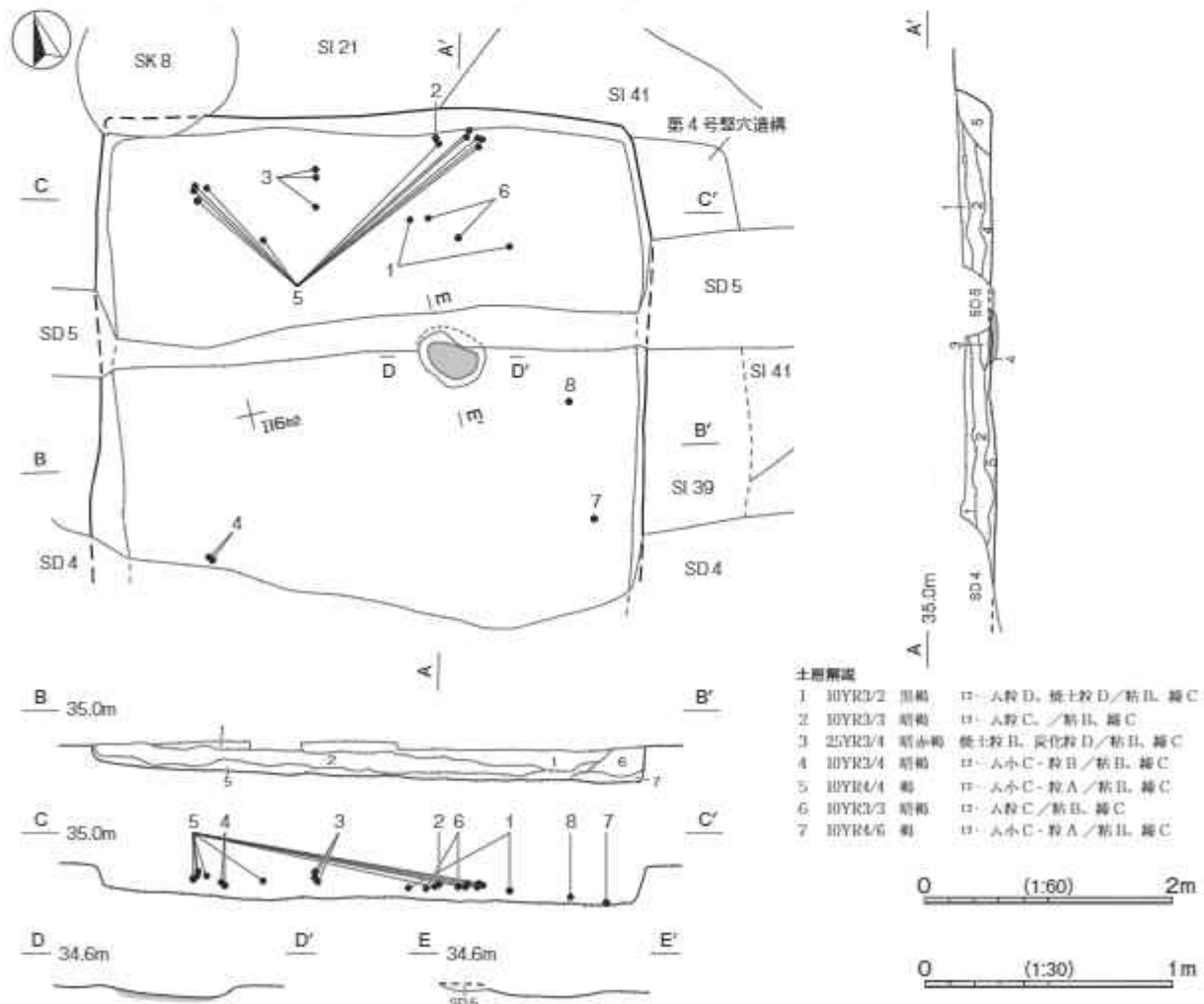
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甗		(40)		長石・雲母・白色粘土	褐灰	普通	体部外面 内面ヘツナア ハケ目調整後ナア	床面	5%

第17号竪穴建物跡(第111・112図 第65表 PL33)

位置 調査区北部のI I 6g2区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第21・39・41号竪穴建物跡、第4号竪穴遺構を掘り込み、第8号土坑、第4・5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南部は重複のため、確認できた規模は南北軸4.15m、東西軸4.38mである。平面形は方形もしくは長方形と推定でき、東壁と西壁から判断して、主軸方向はN-14°-Eと推定できる。壁は高さ15~30



第111図 第17号竪穴建物跡実測図

cmで、外傾している。

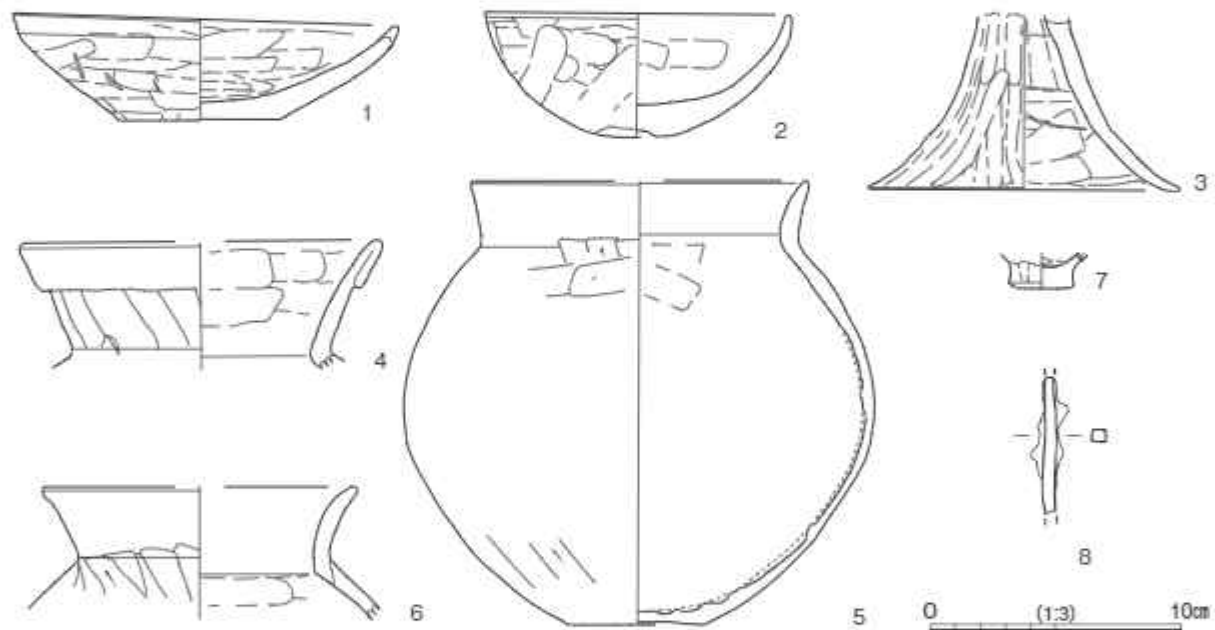
床 凹凸があり、西壁に向かって徐々に高くなっている。硬化はしていない。

炉 中央部東寄りに位置している。長径56cm、短径43cmの楕円形で、深さ5cmの地床炉である。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。

覆土 7層に分層できる。第1・2・6層は含有物が均質であることから、自然堆積である。第3～5・7層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片518点(坏1、椀16、埴6、高坏14、壺12、甕468、ミニチュア土器1)、焼成粘土塊1点が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、弥生土器片403点、石器7点が出土している。土師器片は、北部の覆土下層から中層にかけて多く出土している。1・2・6は北壁際中央付近、4は南西部、8は東部中央の覆土下層から、それぞれ出土している。3は北壁際中央付近の覆土中層から、7は東壁際の床面から、それぞれ出土している。5は北壁際中央付近と北西コーナー部の覆土下層から出土した土器片11点が接合している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。



第112図 第17号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第65表 第17号竪穴建物跡出土遺物一覧(第112図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	15.2	4.1	6.4	長石・石英・白色粒子	橙	普通	口縁部内外面ナア 体部内外面ヘラナア 底部ヘラ削り	覆土下層	5% PL.33
2	土師器	椀	12.2	4.9		長石・石英・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面ナア 体部内外面ヘラナア 底部ヘラ削り	覆土下層	5% PL.33
3	土師器	高坏		(6.9)	(12.4)	長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	脚部外面ヘラナア 内面ヘラナア	覆土中層	5%
4	土師器	甕	(11.4)	(5.1)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	折り返し口縁 口縁部内外ナア 頸部ヘラナア	覆土下層	5%
5	土師器	壺	(13.2)	(17.7)	(5.4)	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部内外面ナア 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ削り 底部ヘラ削り	覆土下層	5%
6	土師器	壺	(11.2)	(5.3)		長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面ナア 体部外面ヘラ削り 内面ヘラ削り	覆土下層	5%
7	土師器	ミニチュア土器		(1.4)	2.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内外面ナア 底部ヘラ削り後指ナア	床面	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
8	鉄鏝	(5.5)	(0.7)	0.6	(6.45)	鉄	長型鏝 型部片			覆土下層	PL.33

第18号竪穴建物跡 (第113・114図 第66表 PL33)

位置 調査区東部のI I 6h4区、標高34mの台地平坦面に位置している。

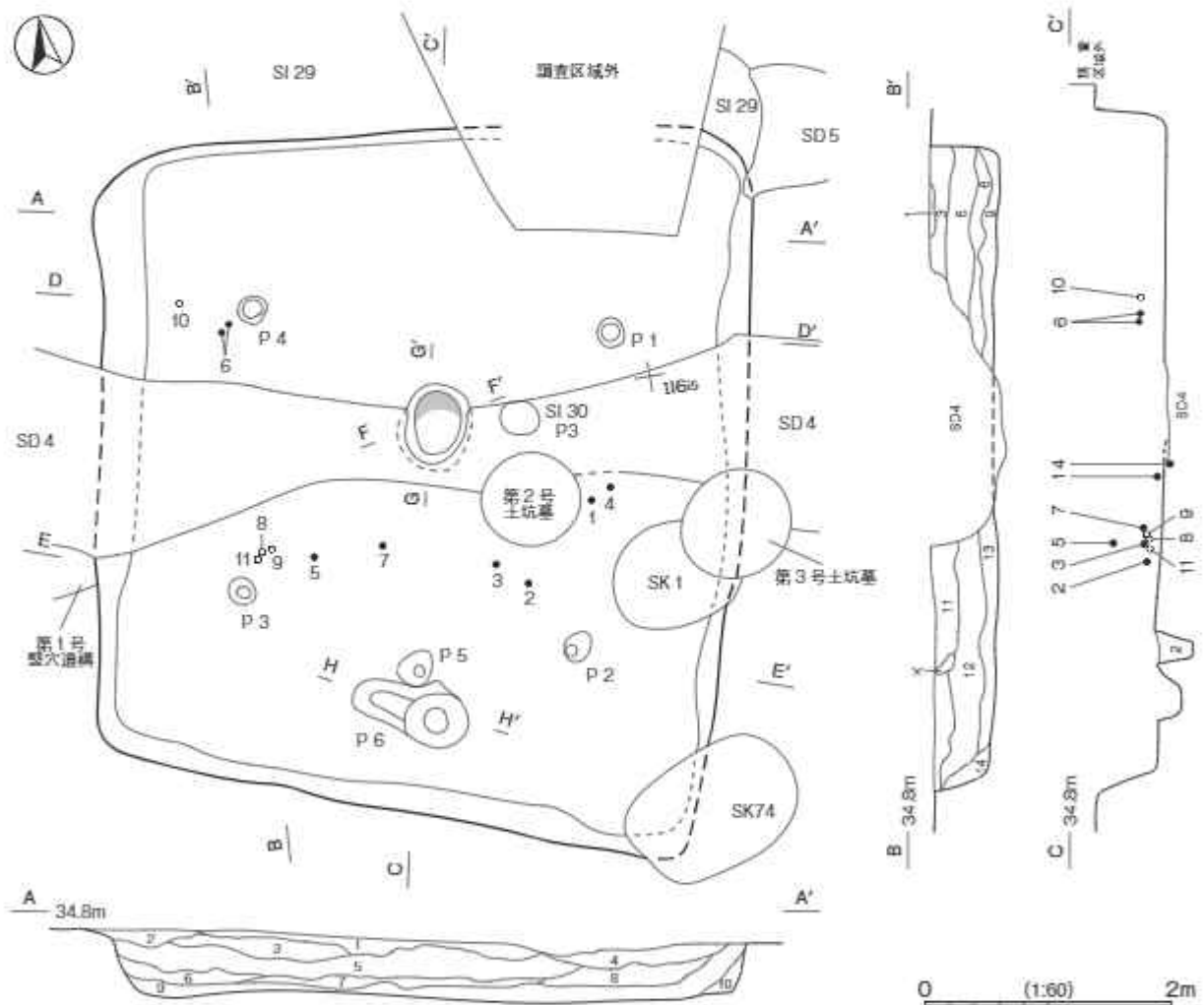
重複関係 第29号竪穴建物跡、第1号竪穴遺構を掘り込み、第1・74号土坑、第4・5号溝、第2・3号土坑墓に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.90m、短軸5.20m、東壁の長さが西壁よりも長い台形で、主軸方向はN-13°-Eである。壁は高さ40~56cmで、外傾している。

床 ほほ平坦である。東壁に向かって緩やかに高くなっている。硬化はしていない。

炉 中央部に位置している。重複のため確認できた規模は長径70cm、短径57cmの楕円形で、深さ4cmの地床かである。断面は皿状を呈している。か床面は被熱により、赤変硬化している。

ピット 6か所。P1~P4は深さ16~60cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。P5は深さ28cm、P



土層解説

- | | | | |
|---------------|--------------------------|----------------|-----------------------------|
| 1 10YR2/3 暗褐色 | ロ-ム小C-粒C/粘C、雑土 | 8 10YR2/4 暗褐色 | ロ-ム小D-粒C、炭化粒D/粘土、雑土 |
| 2 10YR2/4 暗褐色 | ロ-ム小D-粒C/粘C、雑土 | 9 10YR4/3 灰褐色 | ロ-ム中A-小A-粒A、炭化粒D/粘土、雑土 |
| 3 10YR2/4 暗褐色 | ロ-ム中D-小D-粒C/粘C、雑土 | 10 10YR4/4 褐色 | ロ-ム中H-小A-粒A/粘土、雑土 |
| 4 10YR2/4 暗褐色 | ロ-ム小C-粒C、炭化粒D/粘土、雑土 | 11 10YR4/3 灰褐色 | ロ-ム小C-粒A、炭化粒C/粘土、雑土 |
| 5 10YR4/4 褐色 | ロ-ム小C-粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘土、雑土 | 12 10YR2/4 暗褐色 | ロ-ム中D-小A-粒A、焼土粒C、炭化粒C/粘土、雑土 |
| 6 10YR2/3 暗褐色 | ロ-ム中C-小B-粒B/粘土、雑土 | 13 10YR2/4 暗褐色 | ロ-ム小A-粒A/粘土、雑土 |
| 7 10YR2/3 暗褐色 | ロ-ム小C-粒C、焼土粒C、炭化粒D/粘土、雑土 | 14 10YR2/3 暗褐色 | ロ-ム中C-小粒-粒B/粘土、雑土 |

炉土層解説

- 1 10YR2/3 暗褐色 ロ-ム粒B、焼土小C-粒B、炭化粒D/粘土、雑土

ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 10YR2/3 暗褐色 ロ-ム小C-粒C/粘土、雑土
2 10YR2/4 暗褐色 ロ-ム小D-粒C/粘土、雑土

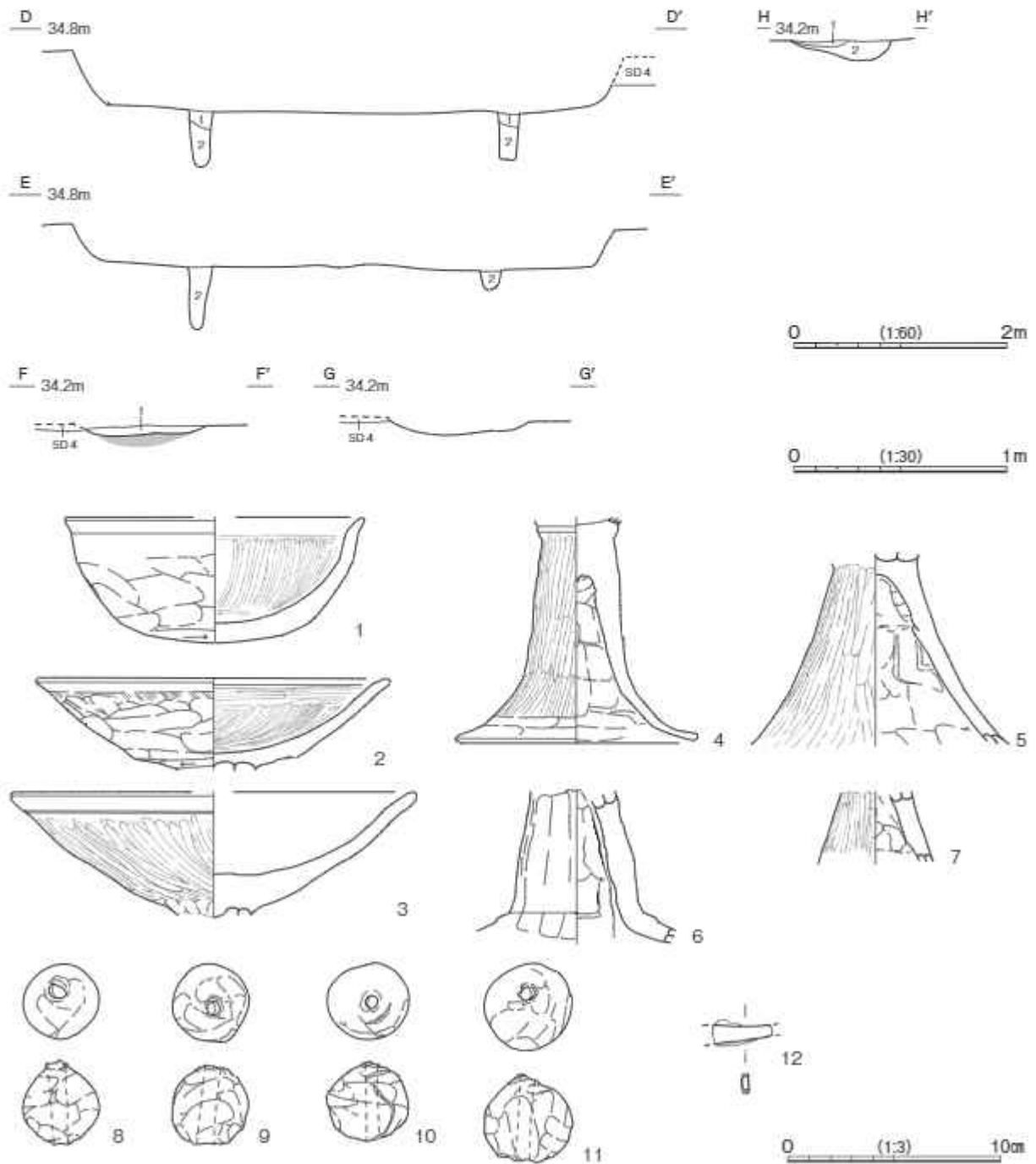
第113図 第18号竪穴建物跡実測図

6は深さ18cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

覆土 14層に分層できる。各層にロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片97点(碗2、埴10、高坏11、壺32、甕42)、土製品4点(土E)、焼成粘土塊1点、鉄製品1点(刀子)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片407点、石器6点が出土している。遺物は主に中央部の床面から覆土下層にかけて、散在した状態で出土している。1は東部の、2・3・7は中央部、6は北西部、8・9・11は西部、10は西壁際北寄りの覆土下層から、それぞれ出土している。4は東部の床面から、5は中央部の覆土中層から、12は南部P5の覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第114図 第18号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第66表 第18号竪穴建物跡出土遺物一覧(第114図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	輪	[138]	5.9		長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナブ 体部外面ヘラナブ・内面縦方向のヘラミガキ	覆土下層	30%
2	土師器	高坏	16.3	(4.3)		長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナブ 体部外面ヘラナブ・内面縦方向のヘラミガキ	覆土下層	50% PL33
3	土師器	高坏	[187]	5.8		長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナブ 体部外面ヘラミガキ・内面縦方向のヘラミガキ	覆土下層	30%
4	土師器	高坏		(10.6)	[109]	長石・石英・雲母・黒色粒子・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナブ 体部外面ヘラミガキ・内面縦方向のヘラミガキ	床面	40%
5	土師器	高坏		(8.9)		長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部内外面横ナブ 体部外面ヘラミガキ・内面縦方向のヘラミガキ	覆土中層	10%
6	土師器	高坏		(7.2)		長石・石英・雲母・黒色粒子	明赤褐色	普通	口縁部内外面横ナブ 体部外面ヘラミガキ・内面縦方向のヘラミガキ	覆土下層	15%
7	土師器	高坏		(3.3)		長石・石英・雲母・赤色粒子	明褐色	普通	口縁部内外面横ナブ 体部外面ヘラミガキ・内面縦方向のヘラミガキ	覆土下層	30%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
8	土瓦	35	4.0	0.8	39.7	長石・雲母	黒	一方からの穿孔 ヘラナブ 断面痕	覆土下層	PL33
9	土瓦	36	3.8	0.9	44.9	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	一方からの穿孔 ヘラナブ	覆土下層	PL33
10	土瓦	38	3.7	0.6	45.3	長石・石英・雲母	灰黄褐色	一方からの穿孔 ヘラナブ 器面摩耗	覆土下層	PL33
11	土瓦	41	4.1	0.7	55.9	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	一方からの穿孔 ヘラナブ 器面摩耗	覆土下層	PL33

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	刀子	(28)	0.5-0.9	0.7	(2.46)	鉄	一部のみ 茅瓦欠 断面長方形	P5 覆土	PL33

第19号竪穴建物跡(第115図 第67表 PL33)

位置 調査区北部のI16d1区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第20号竪穴建物跡を掘り込み、第5号墳・第3号不明遺構に掘り込まれている。

規模と形状 東部が重複のため、確認できた規模は南北軸4.78m、東西軸で3.78mである。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形と推定でき、西壁から判断して、主軸方向はN-19°-Wと推定できる。壁は高さ26~44cmで、外傾している。

床 凹凸が若干あるが、ほぼ平坦である。壁際を除いて硬化している。

炉 中央部北寄りに位置している。長径64cm、短径55cmの楕円形で、深さ8cmほどの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。

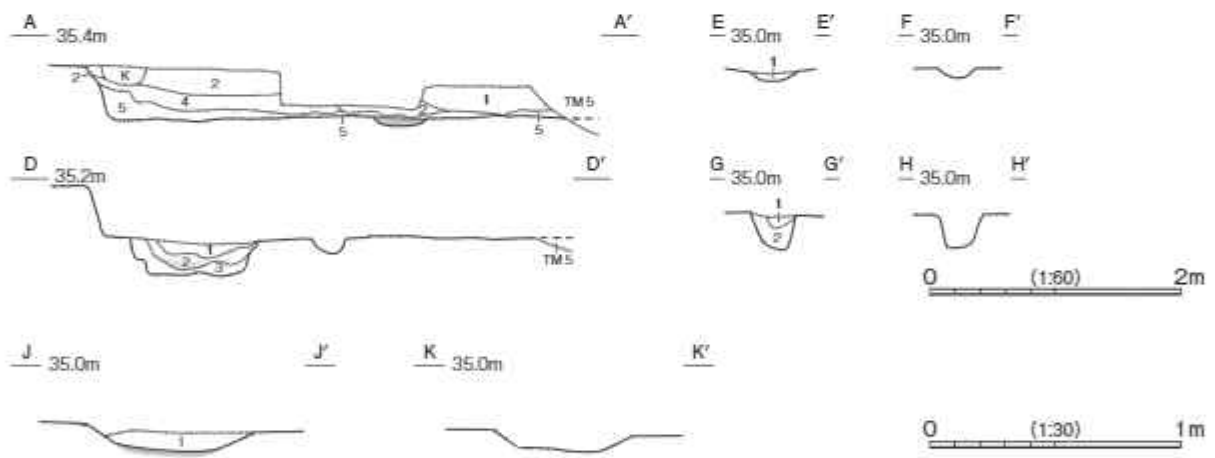
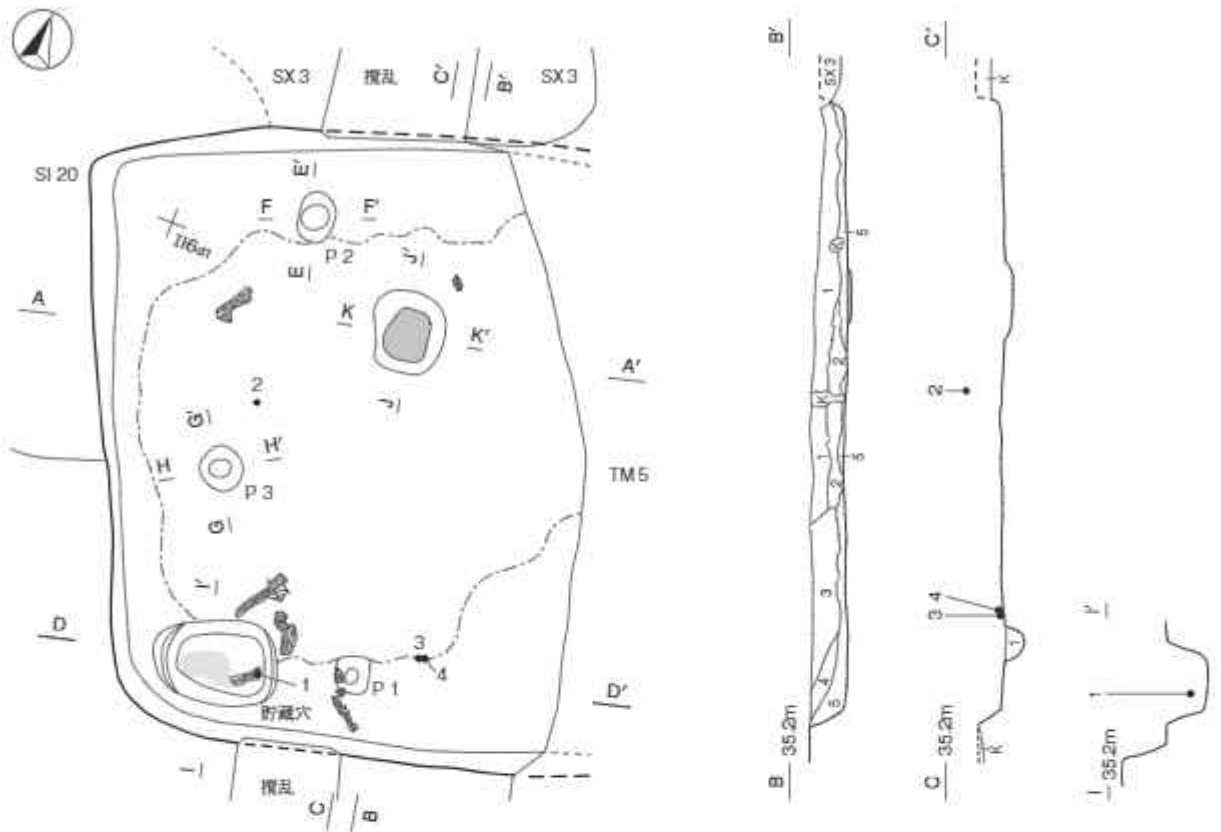
貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。長軸96cm、短軸68cmの隅丸長方形である。深さ24cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾しているが、西壁は段を有している。覆土は3層に分層でき、各層には焼土・炭化材・ロームブロックを含むことから、人為堆積である。

ピット 3か所。P1は深さ14cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P2・P3は深さ8cm・24cmで、性格は不明である。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックを多く含む不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片173点(高坏2、壺12、甕155、ミニチュア土器4)が出土している。ほかに混入した縄文土器片4点、弥生土器片105点が出土している。土師器片は、主に炉や貯蔵穴周辺の床面や覆土下層から出土している。1は貯蔵穴の覆土下層から、2は中央部の覆土上層から、3・4は南部中央の床面から、それぞれ出土している。また、貯蔵穴周辺の床面からは炭化材を、貯蔵穴内の覆土中層からは焼土塊を確認した。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。床面から、炭化材を多く確認していることから、建物廃絶後に、上屋などを焼却した可能性がある。



土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐色 コーラム小D・粒A、炭化粒C／粘B、礫C
- 2 10YR2/4 暗褐色 コーラム中C・小C・粒A、炭化材D・炭化粒C／粘B、礫C
- 3 10YR2/3 黒褐色 コーラム粒C、炭化粒C／粘B、礫B
- 4 10YR2/4 暗褐色 コーラム中C・小B・粒A、炭化材D・炭化粒C／粘B、礫C
- 5 10YR2/3 暗褐色 コーラム小C・粒B、焼土粒C、炭化材C・粒B／粘B、礫C

ピット土層解説 (各ピット共通)

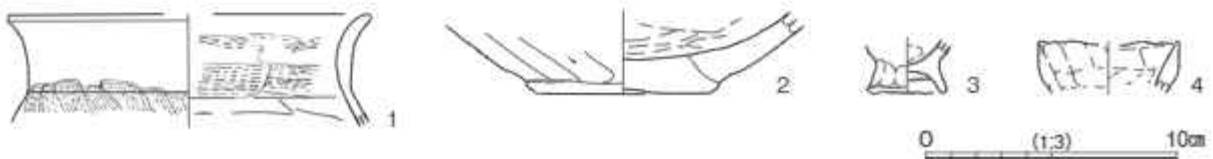
- 1 10YR2/3 暗褐色 コーラム小C・粒C／粘B、礫C
- 2 10YR2/4 暗褐色 コーラム小C・粒C／粘B、礫B

野蔵穴土層解説

- 1 10YR2/3 暗褐色 コーラム小C・粒B、焼土粒C、炭化粒C／粘B、礫C
- 2 10YR5/6 明赤褐色 コーラム小C・粒C、焼土中B・小B・粒A、炭化粒D／粘B、礫C
- 3 10YR2/3 暗褐色 コーラム小C・粒B、炭化粒C／粘B、礫C

伊土層解説

- 1 10YR2/3 黒褐色 コーラム粒D、焼土小C・粒B、炭化粒D／粘B、礫B



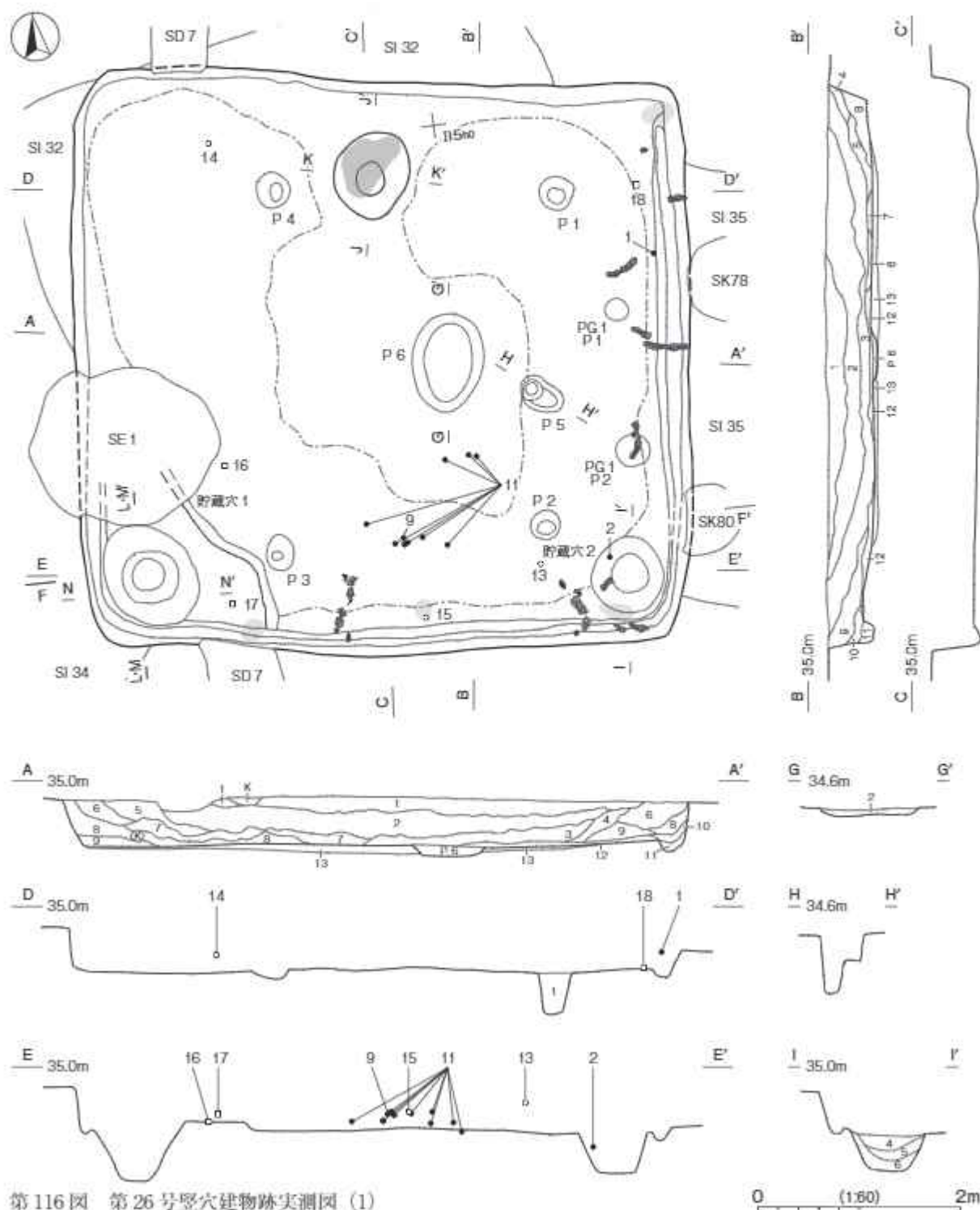
第115図 第19号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第67表 第19号竪穴建物跡出土遺物一覧(第115図)

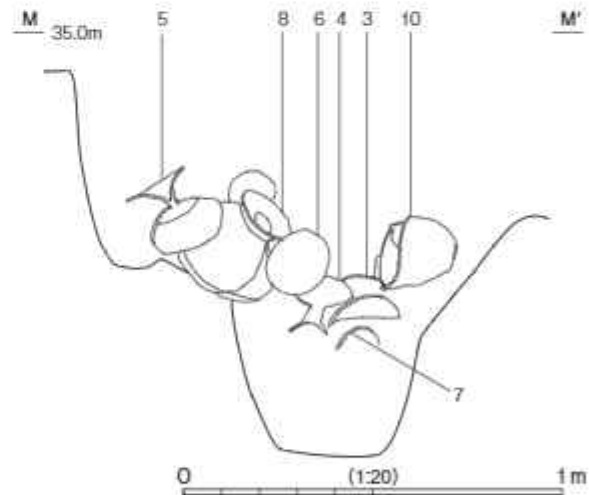
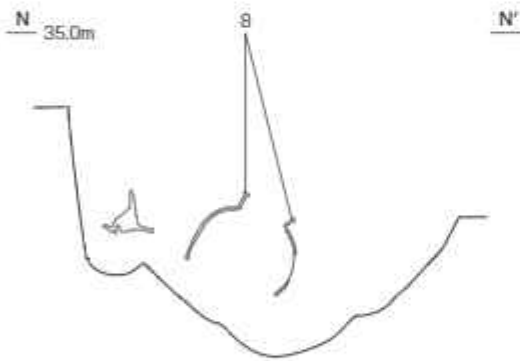
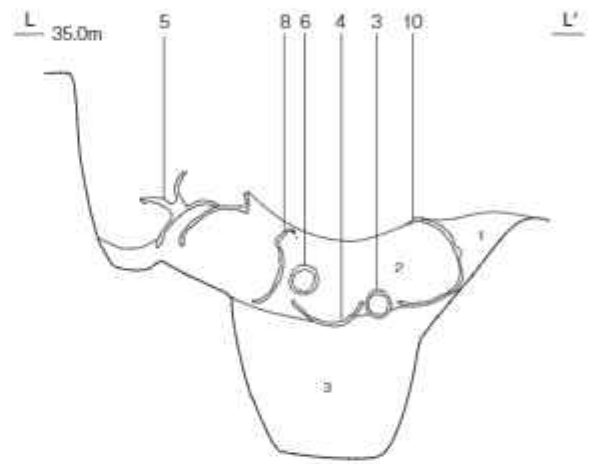
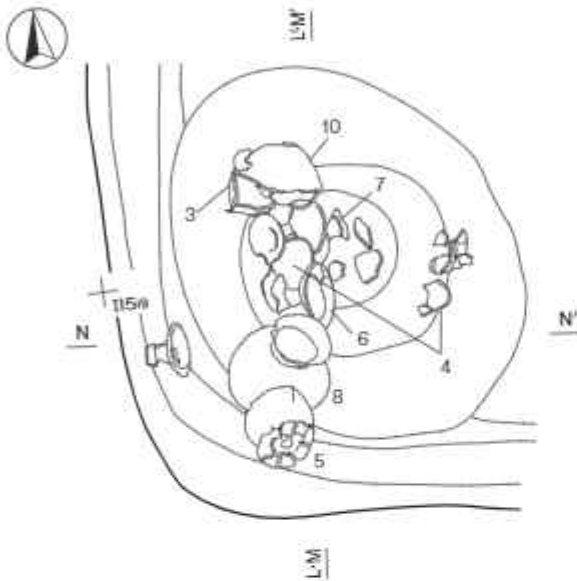
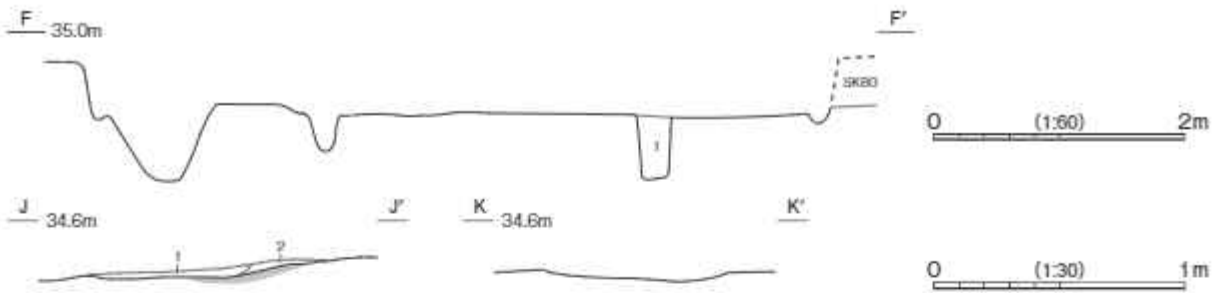
番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	検成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	114.4	(45)		長石・石英・雲母・赤色粒子	黒赤褐色	普通	口縁部外面ナズ 内面ハケ目調整後ナズ 体部外面ハケ目	貯蔵穴 器上下層	5%
2	土師器	甕		(33)	170	長石・石英・白色粒子	にようり	普通	体部外面ハケズリ 内面ハケナズ 底部外面ハケ削り	器土上層	5%
3	土師器	ミナブ7 土器		(22)	126	長石・石英・白色粒子	赤	普通	胴部外面ナズ 内面ナズ	床面	30% PL33
4	土師器	ミナブ7 土器	5.6	(21)		長石・石英・白色粒子	赤	普通	口縁部内外ナズ	床面	5%

第26号竪穴建物跡(第116~120図 第68表 PL.9・33~35)

位置 調査区中央部の115h9区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。



第116図 第26号竪穴建物跡実測図(1)



- 土層解説**
- 1 10YR3/1 黒褐 ㊦-ム小D-粒D、焼土粒D、炭化粒D/粘B、締B
 - 2 10YR2/1 黒 ㊦-ム粒D、焼土粒D、炭化粒D/粘B、締B
 - 3 10YR3/2 黒褐 ㊦-ム粒D、焼土粒D、炭化粒D/粘B、締B
 - 4 10YR3/3 暗褐 ㊦-ム小B-粒C、炭化粒D/粘B、締C
 - 5 10YR3/4 暗褐 ㊦-ム小C-粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、締C
 - 6 10YR3/4 暗褐 ㊦-ム小B-粒C/粘B、締C
 - 7 10YR4/4 褐 ㊦-ム小C-粒B/粘B、締C
 - 8 10YR3/3 暗褐 ㊦-ム小B-粒B、焼土粒C、炭化粒D/粘B、締C
 - 9 10YR3/3 暗褐 ㊦-ム小D-粒B、焼土粒C、炭化粒C/粘B、締B
 - 10 10YR3/3 暗褐 ㊦-ム小D-粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、締C
 - 11 10YR3/4 暗褐 ㊦-ム小D-粒B/粘B、締C
 - 12 10YR3/4 暗褐 ㊦-ム小D-粒A/粘B、締C
 - 13 10YR4/6 褐 ㊦-ム大B-中B-小A-粒A/粘A、締B

- ピット土層解説 (各ピット共通)**
- 1 10YR3/4 暗褐 ㊦-ム小B-粒A、炭化粒D/粘B、締B
 - 2 10YR2/1 黒褐 ㊦-ム小D-粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、締C
- 野竈穴1・2土層解説**
- 1 10YR3/4 暗褐 ㊦-ム中D-小B-粒B、焼土粒C、炭化粒C/粘B、締C
 - 2 10YR3/4 暗褐 ㊦-ム小B-粒A、焼土粒C、炭化粒C/粘B、締C
 - 3 10YR4/6 褐 ㊦-ム小D-粒B、炭化粒D/粘B、締B
 - 4 75YR3/4 暗褐 ㊦-ム小B-粒B、焼土粒C、炭化粒D/粘B、締C
 - 5 10YR3/3 暗褐 ㊦-ム小B-粒B、炭化粒D/粘B、締C
 - 6 10YR4/4 褐 ㊦-ム小C-粒C、炭化粒D/粘B、締B

- 炉土層解説**
- 1 75YR3/4 暗褐 ㊦-ム小D-粒D、焼土小D-粒B、炭化粒D/粘C、締C
 - 2 10YR3/4 暗褐 ㊦-ム粒A、焼土小D-粒子B、炭化粒C/粘B、締C

第117図 第26号竈穴建物跡実測図(2)

重複関係 第32・34・35号竪穴建物跡を掘り込み、第78・80号土坑、第7号溝、第1号井戸に掘り込まれている。
規模と形状 長軸6.02m、短軸5.66mの方形で、主軸方向はN-9°-Eである。壁は高さ28～38cmで、外傾している。

床 はほぼ平坦であるが、中央部がやや低く、壁に向かって僅かに高くなっている。中央部と壁際を除いて硬化している。貼床は、壁際以外を除いて、ロームブロックを含む第13層を3～8cmほど埋土して構築している。

炉 北壁際中央に位置している。長径83cm、短径68cmの楕円形で、深さ3cmの地床炉である。断面は皿状を呈しており、炉床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 6か所。P1～P4は深さ10～48cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。P5は深さ48cmで、補助支柱穴と考えられる。P1・P2の柱はいずれも抜き取られている。P6は長径93cm、短径68cmの楕円形で、深さ28cmである。底面は皿状で、覆土中に極少量の焼土・炭化粒子を含むが、被熱痕は確認できず、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南西コーナー部に位置している。長径108cm、短径85cmの楕円形で、深さ65cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。第1・2層は締まりがなく、ロームブロックを含むことから人為堆積で、第3層はやや締まりがあり、ローム粒子などの含有物が均質に含まれることから、自然堆積である。貯蔵穴1からは、一括廃棄された状態で大量の土器が出土している。貯蔵穴2は南東コーナー部に位置している。長径68cm、短径66cmの円形で、深さ34cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。第4～6層は締まりが弱く、ロームブロックを含むことから、人為堆積である。

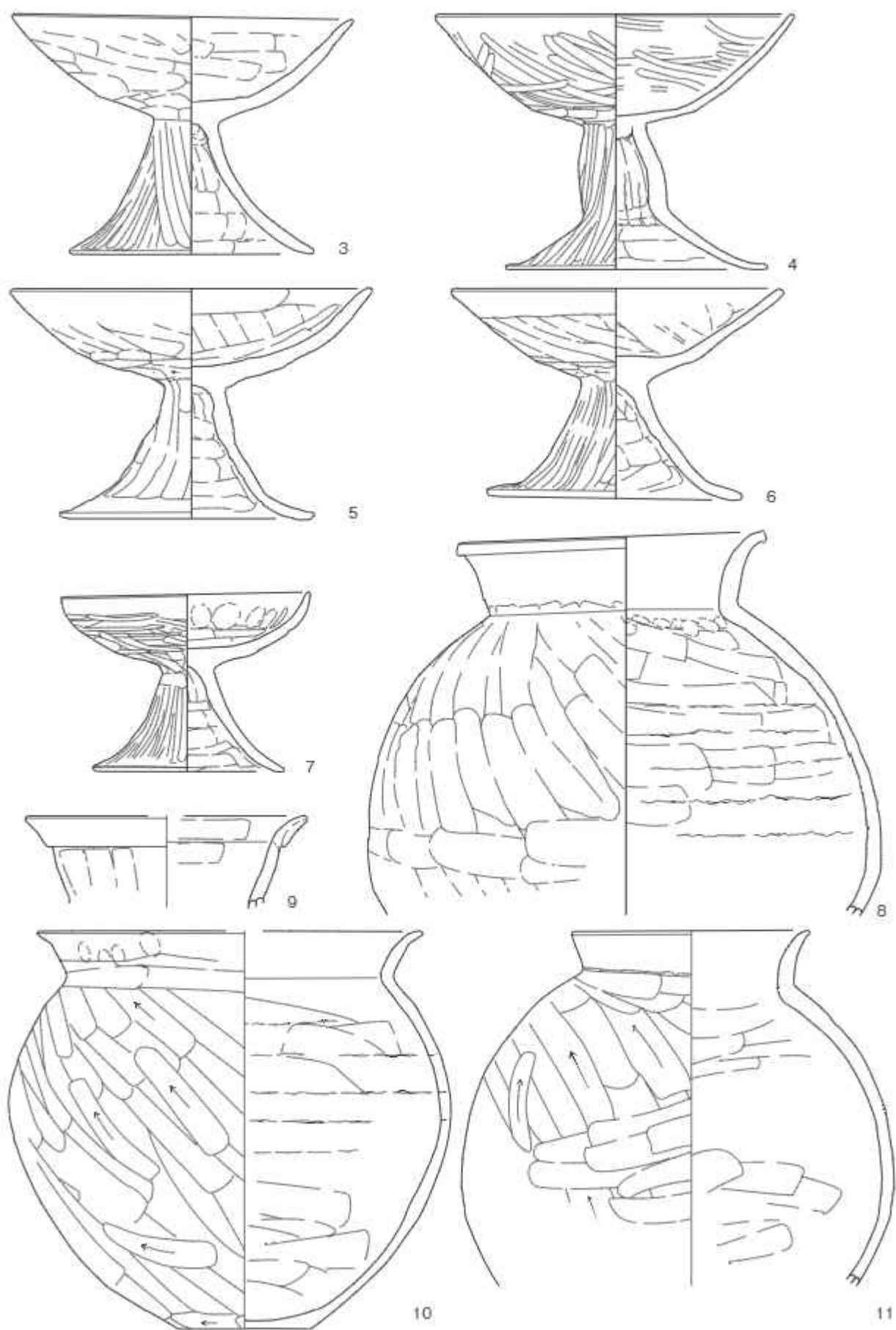
覆土 12層に分層できる。第1～3・9・12層はローム粒子など含有物が均質で、周囲からの流入を示す堆積状況であることから、自然堆積である。第4～8・10層はロームブロックを比較的多く含み、締まりがないことから、人為堆積である。第11層は壁溝の覆土である。

遺物出土状況 土師器片2144点（椀279、埴1、高坏245、鉢3、壺10、甕1606）、土製品3点（土玉）、焼成粘土塊18点、石器3点（砂岩製磨石2、粘板岩製剥片1）、石製品1点（滑石製剣形模造品）、金属製品3点（鉄鏃1、不明鉄製品2）が出土している。ほかに混入した縄文土器片3点、弥生土器片321点、雲母片岩片2点が出土している。土師器片は、主に南壁際周辺の覆土下層から中層にかけて出土している。1は、北東部の東壁際、9は中央部南寄り、14は北西部、15は南壁際中央の覆土中層から、それぞれ出土している。13は南東部の覆土上層から、16は西部、17は南西部の覆土下層から、18の剣形模造品は北東部の床面に基部が刺さった状態で、それぞれ出土している。11は南部の床面から覆土中層にかけて出土した破片が接合している。貯蔵穴2からは2が覆土中層から、12が覆土中から、貯蔵穴1からは3・7・10が覆土中層から、4～6・8が覆土上層から、それぞれ出土している。これらの遺物は、建物の廃絶後しばらく時間をおいて、一括投棄されたものと考えられる。また、南・東壁際の覆土下層から、炭化材・焼土を確認した。

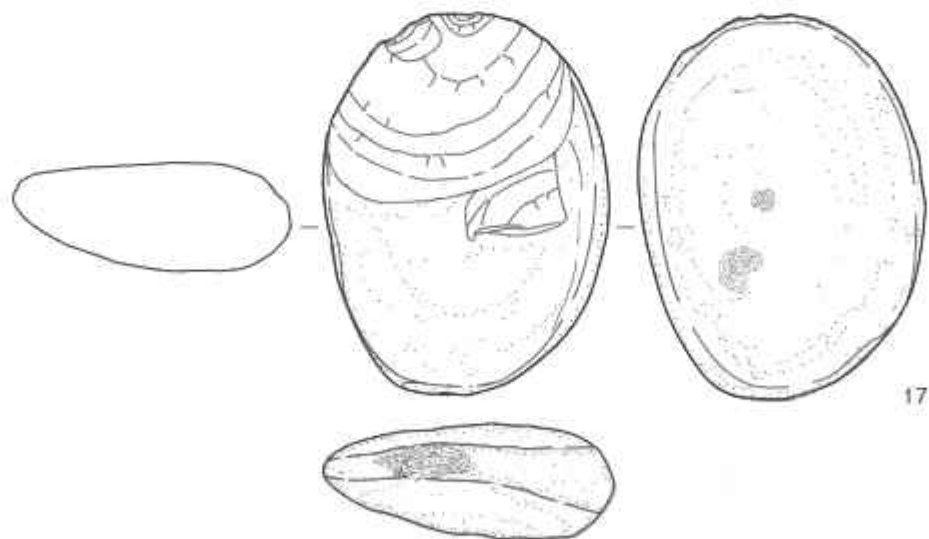
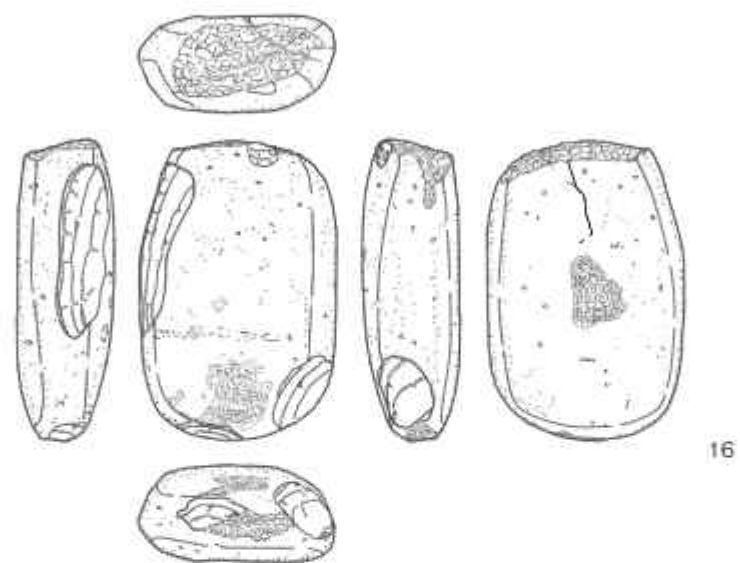
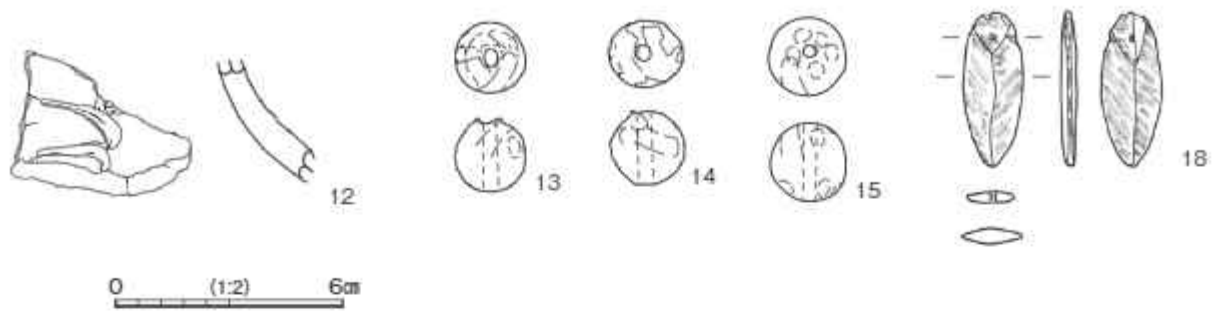
所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。炭化材や焼土が床面ではなく、覆土下層から出土していることから、埋め戻した建物跡の窪地で、廃材などを焼却した可能性がある。



第118図 第26号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第119图 第26号竖穴建物跡出土遺物実測图(2)



第120图 第26号竖穴建物跡出土遺物実測図(3)

第 68 表 第 26 号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第 118 ~ 120 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	輪	123	4.8	4.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ、底部ヘラ削り	覆土中層	100% PL33
2	土師器	輪	116	4.6	5.4	石英・雲母・赤色粒子	明黄褐	普通	口縁部ナデ、体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部ヘラ削り	貯蔵穴2 覆土中層	60%
3	土師器	高杯	183	131	130	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラナデ、脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	貯蔵穴1 覆土中層	90% PL33
4	土師器	高杯	190	139	141	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラ磨き、脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	貯蔵穴1 覆土上層	70% PL34
5	土師器	高杯	192	126	129	長石・石英・雲母・赤色粒子・白色粒子	橙	普通	体部内外面ヘラナデ、体部外面ヘラ削り、脚部内外面ヘラナデ	貯蔵穴1 覆土上層	100% PL34
6	土師器	高杯	174	114	126	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部内外面ヘラナデ後横ナデ、体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	貯蔵穴1 覆土上層	90% PL34
7	土師器	高杯	134	9.75	10.0	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ磨き後横ナデ、体部外面ヘラナデ、後折頭痕、脚部外面ヘラ磨き後一部ヘラナデ、内面ヘラナデ	貯蔵穴1 覆土中層	100% PL34
8	土師器	壺	163	(20.8)		長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面ナデ、体部内外面ヘラナデ、内面折頭痕	貯蔵穴1 覆土上層	60% PL34
9	土師器	壺	1150	(5.0)		石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部内外面ヘラナデ	体面 覆土中層	5%
10	土師器	壺	1205	21.6	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ後外面折頭痕、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ、底部ヘラ削り	覆土中層	70% PL34
11	土師器	壺	128	(19.3)		長石・石英・白色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ、体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面ヘラナデ	貯蔵穴1 覆土中層	50% PL35
12	土師器	壺		(1.3)		長石・石英・白色・黒色粒子	にぶい褐	普通	胴部にヘラ状工具による3段の線刻	覆土	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
13	土瓦	2.8	2.9	0.6	21.3	長石・石英	にぶい褐	一方向からの穿孔、ヘラナデ、折頭痕、外面一部剥落	覆土上層	PL35
14	土瓦	3.0	3.0	0.6	22.16	長石・石英	褐灰	一方向からの穿孔、ヘラナデ、折頭痕、外面一部剥落	覆土中層	PL35
15	土瓦	3.1	3.2	0.5	28.54	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	一方向からの穿孔、ヘラナデ、折頭痕、外面一部剥落	覆土中層	PL35

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
16	磨石	11.9	7.8	3.8	59.21	砂岩	磨面4面、縁打面4か所、敲石兼用	覆土下層	PL35
17	磨石	15.0	11.3	4.3	101.44	砂岩	磨面2面、縁打面2か所、敲石兼用	覆土下層	PL35
18	網形磨産品	6.1	2.4	0.6	11.79	滑石	全面研磨、両面編、孔径0.15cm	体面	PL35

第 27 号竪穴建物跡 (第 121 図 第 69 表 PL35)

位置 調査区中央部 I I 6 i2 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 40 号竪穴建物跡を掘り込み、第 39 号竪穴建物、第 84 号土坑、第 4 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 4.80 m、短軸 4.55 m の方形で、主軸方向は N - 35° - E である。壁は高さ 2 ~ 10 cm で、外傾している。

床 ほは平坦である。硬化はしていない。

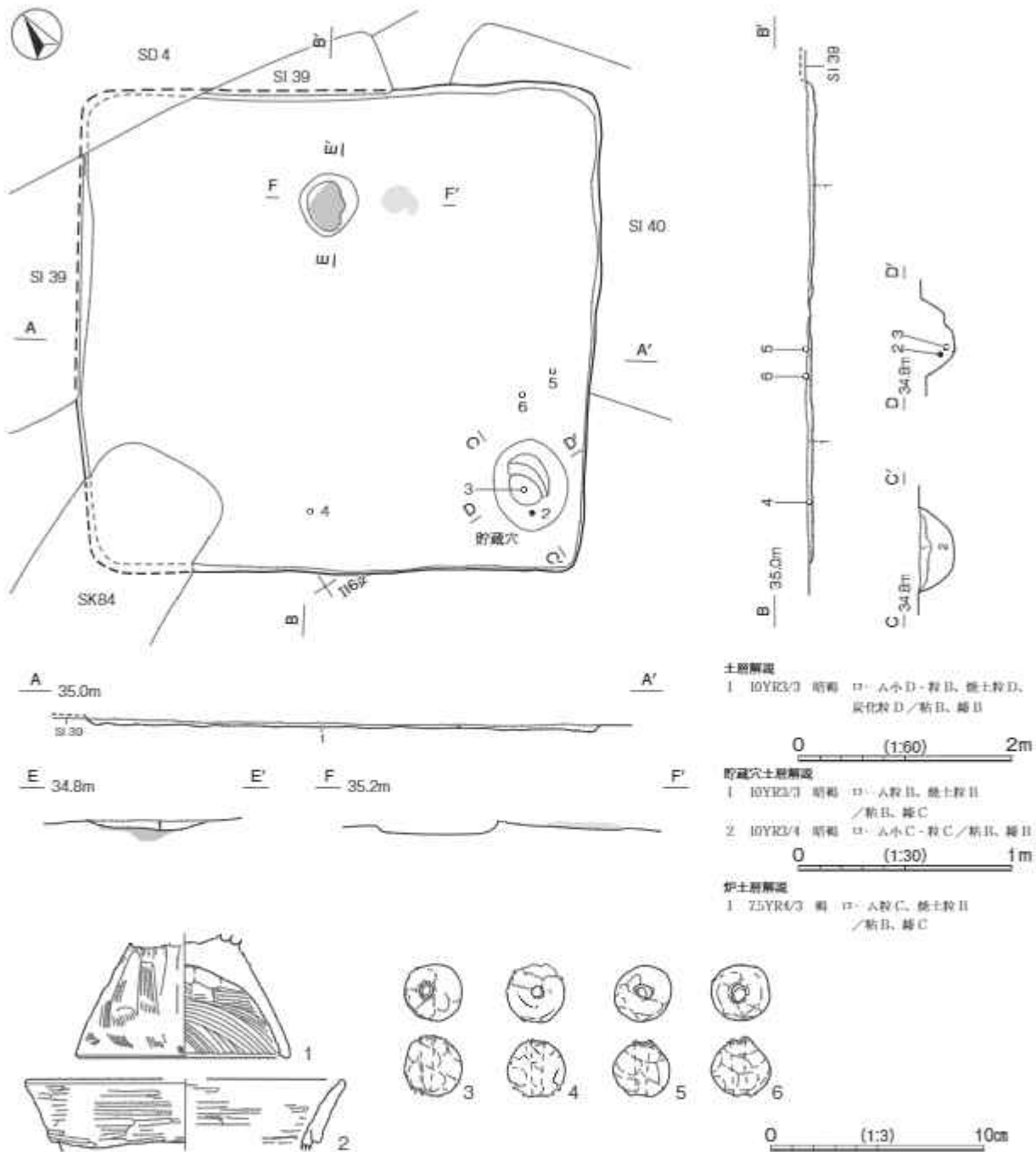
炉 北東壁寄り中央部に位置している。長径 58 cm、短径 53 cm の楕円形で、深さ 4 cm ほどの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。また、かの南東側の床面に焼土が堆積している。焼土下の床面は被熱していない。

貯蔵穴 南コーナー部に位置している。長径 75 cm、短径 68 cm の楕円形で、深さ 24 cm である。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 74 点 (輪 1、埴 5、高杯 2、壺 6、台付甕 1、甕 59)、土製品 4 点 (土瓦)、焼成粘土塊 1 点が出土している。ほかに混入した弥生土器片 176 点、土製品 1 点、石器 2 点が出土している。2・3 は貯蔵穴の覆土下層から、4 は床面から、5・6 は覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀中葉と考えられる。



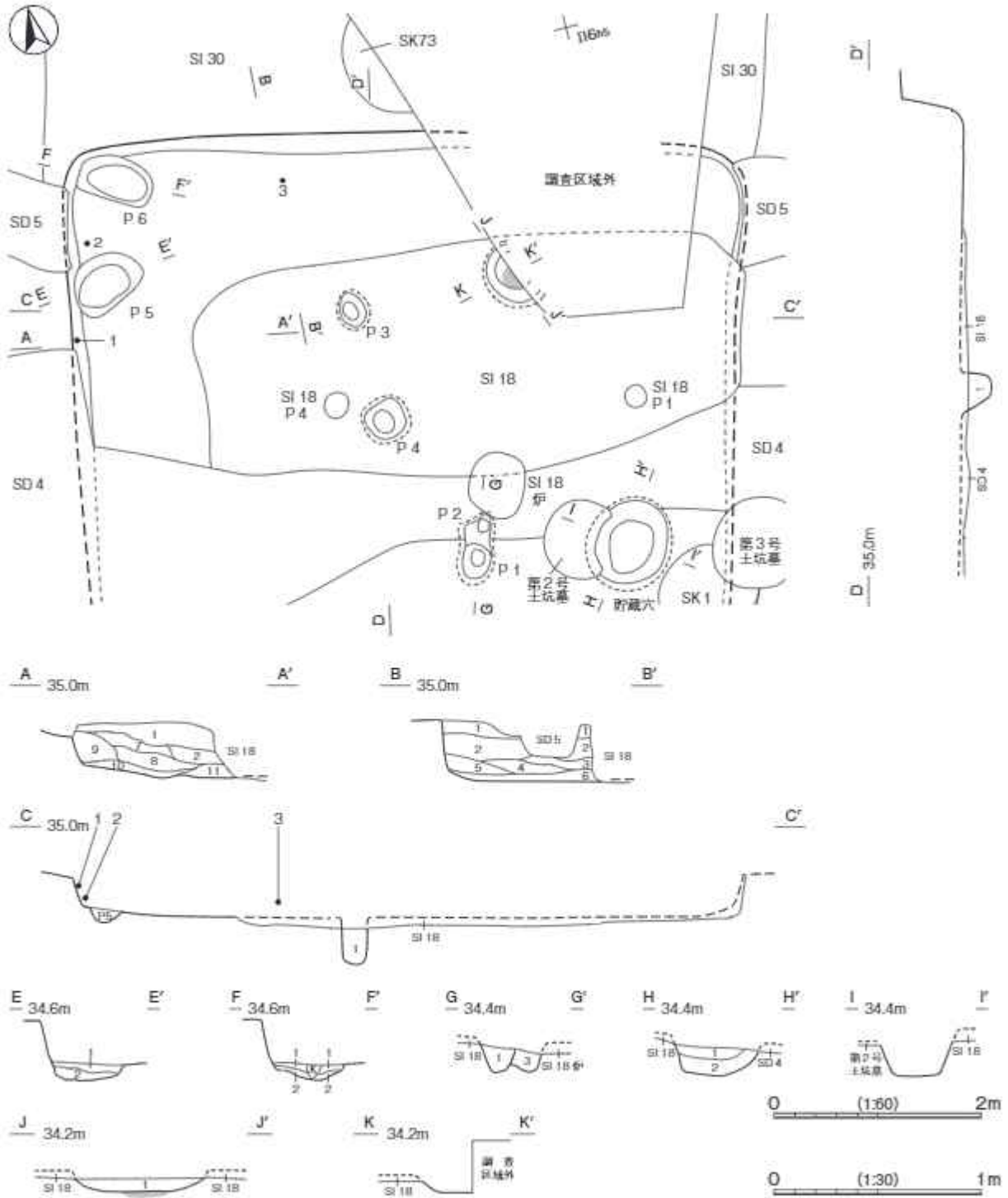
第121図 第27号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第69表 第27号竪穴建物跡出土遺物一覧(第121図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	合付類		(5.8)	19.5	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐	普通	脚部外面ハケ目調整 内面ハケ目調整後脚部土ナツ	覆土	20%
2	土師器	壺	114.6	(3.4)		長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	新り表1,口縁部横ナツ後外面ヘツミガキ, 口縁部内面横ナツ後ヘツミガキ	貯蔵穴下層	10%
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
3	土瓦	26	2.8	0.6	20.02	長石・石英	橙	一方向からの穿孔 ヘツナツ	貯蔵穴下層	100% PL35	
4	土瓦	27	2.7	0.5	(16.29)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	一方向からの穿孔 ヘツナツ	床面	90% PL35	
5	土瓦	26	2.7	0.6	16.28	長石	にぶい橙	一方向からの穿孔 ヘツナツ後軽ク割テ	覆土下層	100% PL35	
6	土瓦	27	2.8	0.7	16.52	長石・石英・雲母	にぶい褐	一方向からの穿孔 ヘツナツ後ナツ	覆土下層	100% PL35	

第29号竖穴建物跡 (第122・123図 第70表)

位置 調査区北東部のI I 6h4区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。



土層解説

- | | | |
|---------------|---|------------------------|
| 1 10YR2/3 暗褐色 | ① | △小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿B |
| 2 10YR2/4 暗褐色 | ② | △小C・粒D、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿B |
| 3 10YR2/4 暗褐色 | ③ | △小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿B |
| 4 10YR5/4 紅褐色 | ④ | △小C・粒A、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿B |
| 5 10YR2/4 暗褐色 | ⑤ | △小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿C |
| 6 10YR4/6 褐色 | ⑥ | △小C・粒A/粘B、綿C |
| 7 10YR4/3 紅褐色 | ⑦ | △小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿C |
| 8 10YR4/4 褐色 | ⑧ | △小D・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿C |

- | | | |
|----------------|---|---------------------------|
| 9 10YR4/4 褐色 | ⑨ | △小B・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿C |
| 10 10YR2/3 暗褐色 | ⑩ | △中B・小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿C |
| 11 10YR1/4 暗褐色 | ⑪ | △中B・小B・粒B、焼土粒C、炭化粒C/粘B、綿C |

伊土層解説

- | | | |
|----------------|---|--------------------|
| 1 5 YR3/3 暗赤褐色 | ① | △A粒C、焼土小D・粒D/粘B、綿B |
|----------------|---|--------------------|

第122図 第29号竖穴建物跡実測図

ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 10YR2/4 暗褐色 ローム小C・粒A/粘土、細C
 2 10YR4/4 褐色 ローム中B・小C・粒A/粘土、細C
 3 10YR4/3 紅褐色 ローム小C・粒B/粘土、細C

貯蔵穴土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐色 ローム小A・粒A、焼土粒C/粘土、細B
 2 10YR2/2 黒褐色 ローム中B・小A・粒A、焼土粒C/粘土、細A

重複関係 第30号竪穴建物跡を掘り込み、第18号竪穴建物、第1号土坑、第4・5号溝、第2・3号土坑墓に掘り込まれている。

規模と形状 南部は重複で、北東部は調査区域外のため、確認できた規模は東西軸6.55m、南北軸4.92mである。平面形は方形もしくは長方形と推定でき、主軸方向はN-13°-Eである。壁は高さ25~62cmで、外傾している。

床 ほほ平坦であるが、壁に向かって緩やかに高くなる。硬化はしていない。

炉 中央部北東寄りに位置している。かの東半分は調査区域外のため、確認できた規模は、南北径58cm、東西径23cmで、本来は長径約60cm、短径約50cmの楕円形と推定できる。深さ8cmほどの地床かきで、断面は皿状を呈している。か床面は赤変硬化している。

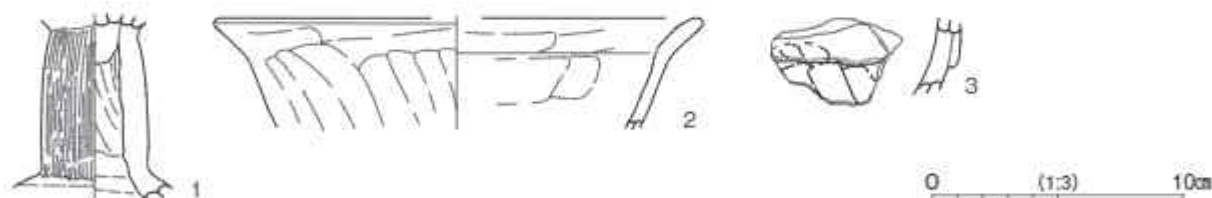
ピット 6か所。P1は深さ18cm、P2は深さ16cmで、どちらも建物の中央方向へ斜めに掘り込まれていることから、出入口施設に伴うピットと考えられ、P2からP1へ作り替えている。P3~P6は深さ20~72cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東部に位置している。長径95cm、短径75cm、深さ40cmの楕円形である。底面はほほ平坦で、壁は外傾している。各層にロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

覆土 11層に分層できる。第1・2層はロームブロックやローム粒子の含有が少ないことから、自然堆積である。3~11層はロームブロックを多く含み、不自然な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片51点(椀2、高坏4、鉢1、甕43、瓶1)が出土している。ほかに混入した弥生土器片27点(土師器片)が出土している。遺物は主に北西部の覆土下層や貯蔵穴の覆土から出土している。1は西壁際の覆土上層から、2は西壁際北寄りの覆土中層から、3は北壁際西寄りの覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第123図 第29号竪穴建物跡出土遺物実測図

第70表 第29号竪穴建物跡出土遺物一覧(第123図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏		(74)		長石・石英	にぶい褐色	普通	脚部外面に穿たれたヘラミガキ、内面ヘラミガキによる長合	覆土上層	5%
2	土師器	鉢	(19.4)	(43)		長石・石英	黒褐色	普通	体部内、外面ミガキ、瓶。	覆土中層	5%
3	土師器	鉢		(30)		長石・石英	にぶい褐色	普通	口唇部-口縁部上半欠損、体部ヘラミガキ	覆土下層	5%

第30号竪穴建物跡 (第124・125図 第71表 PL35)

位置 調査区北東部のI16g4区、標高34mの台地平坦面に位置している。

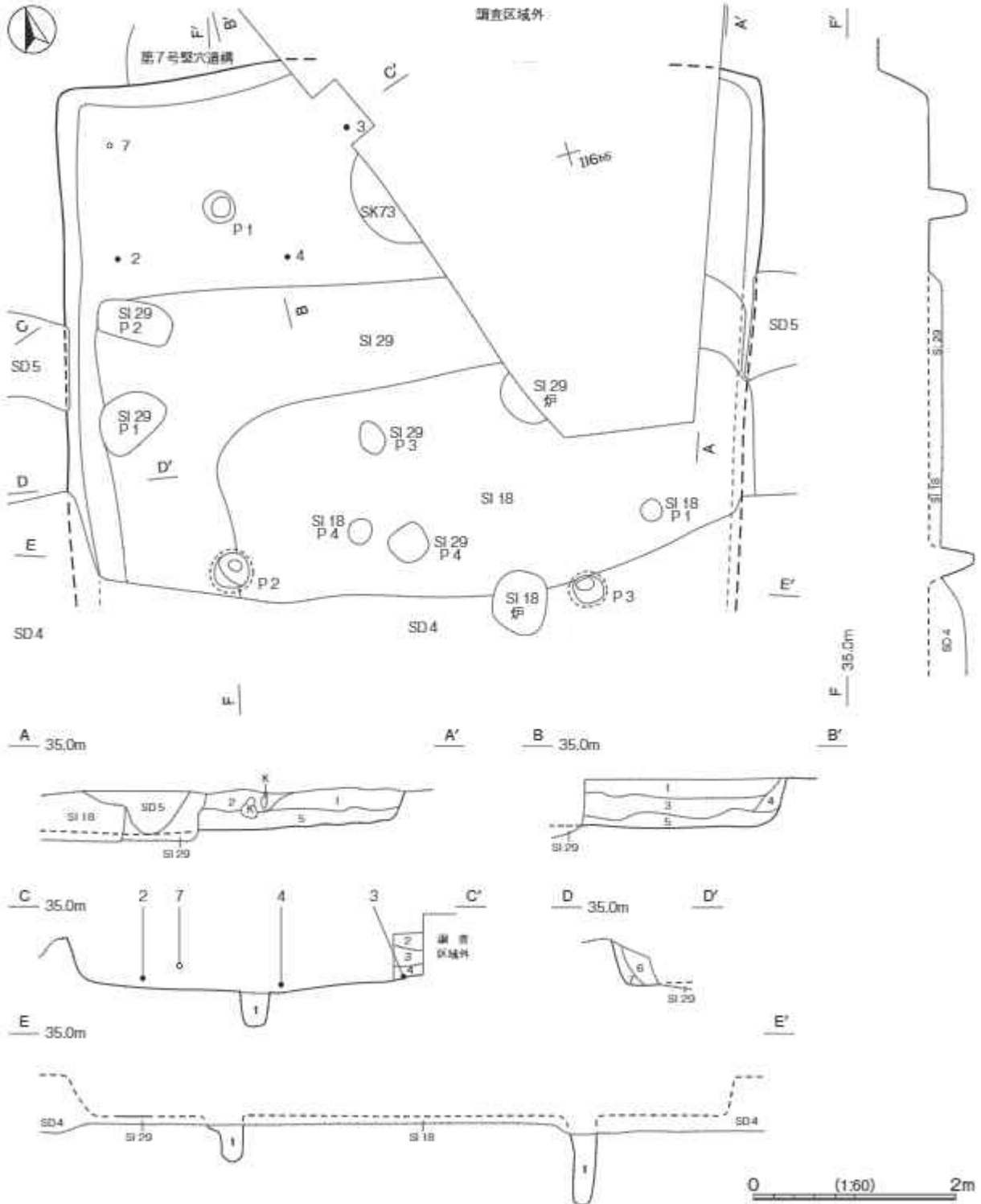
重複関係 第7号竪穴遺構を掘り込み、第18・29号竪穴建物、第73号土坑、第4・5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は東西軸6.92m、南北軸4.85mである。平面形は方形もしくは長方形と推定でき、主軸方向は東・西壁から判断して、N-13°-Eと推定できる。壁は高

さ32～48cmで、外傾している。

床 はほぼ平坦で、壁に向かって緩やかに高くなっている。硬化はしていない。

ピット 3か所。P1～P3は深さ34～90cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。



土層解説

- 1 10YR2/3 黒褐色 コーラム小D・粒C、焼土粒C、炭化粒C/粘B、綿B
- 2 10YR2/3 暗褐色 コーラム小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿B
- 3 10YR2/4 暗褐色 コーラム小C・粒C/粘B、綿B
- 4 10YR4/3 灰褐色 コーラム小B・粒B、炭化粒D/粘B、綿B
- 5 10YR2/4 暗褐色 コーラム小D・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、綿B

- 6 10YR4/3 灰褐色 コーラム中C・小B・粒B/粘B、綿B
- 7 10YR4/4 暗褐色 コーラム中B・小B・粒B、粘B、綿C

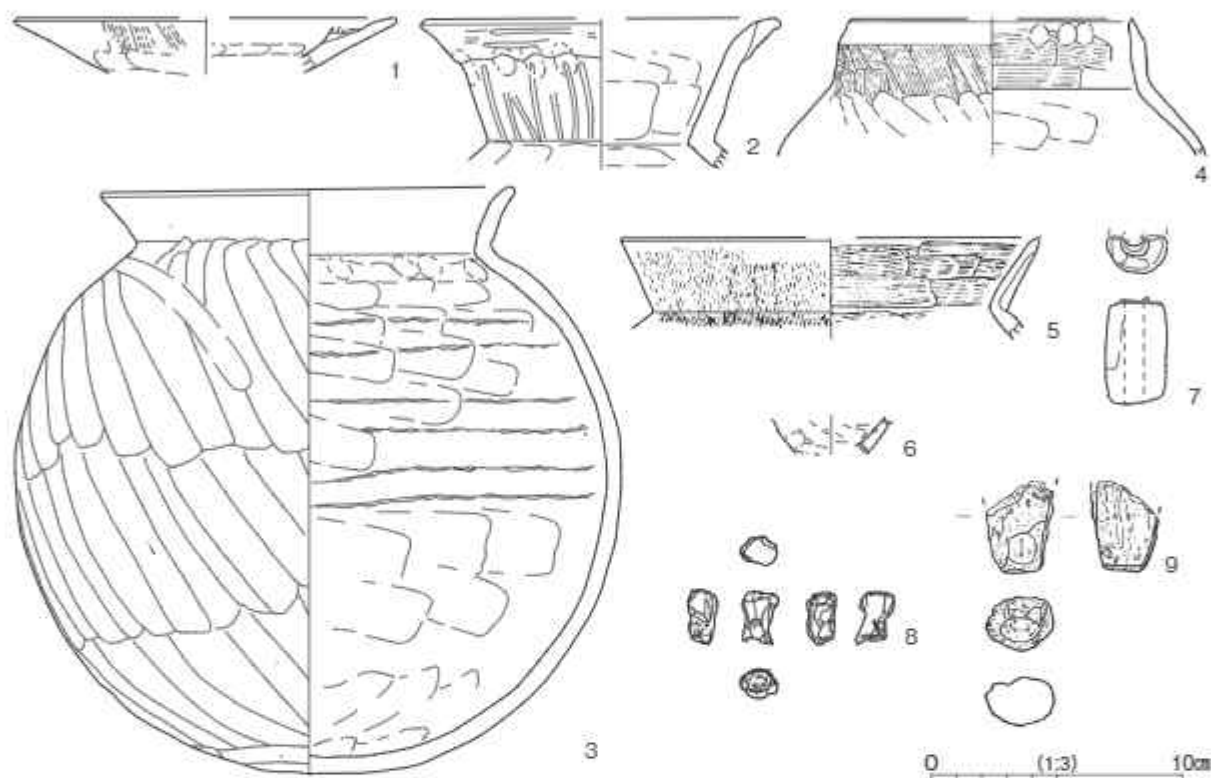
ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 10YR2/3 暗褐色 コーラム小D・粒D/粘B、綿C

第124図 第30号竪穴建物跡実測図

覆土 7層に分層できる。各層にロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 569点 (埴9、器台1、高坏14、蓋1、壺9、甕535)、土製品2点 (管状土鉢、不明土製品)、石器1点 (不明)、石製品2点 (軽石)、焼成粘土塊4点が出土している。ほかに混入した縄文土器片8点、弥生土器片720点、石器3点が出土している。土師器片は、覆土中から散在した状態で出土している。2・4は北西部、3は北壁中央寄りの覆土下層から、7は北西部の覆土上層から、それぞれ出土している。所見 時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第125図 第30号竪穴建物跡出土遺物実測図

第71表 第30号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第125図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	器台	115.2	(22)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	坏部外面ハケ目調整後ナツ 内面ナツ	覆土	5%
2	土師器	碗	113.8	(6.0)		長石・石英・白色粒子	橙	普通	口縁部横方向磨き 指頭痕 頸部外面ナツ後ヘツミガキ 内面ナツ 体部内外面ナツ	覆土下層	5%
3	土師器	甕	16.2	(23.8)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面ナツ 体部外面ヘツ削り後一部ナツ 内面ヘツナツ 指頭痕 底部ヘツ削り	覆土下層	95% PL35
4	土師器	壺	111.2	(6.2)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面ハケ目 内面指頭痕 体部内外面ヘツナツ	覆土下層	5%
5	土師器	甕	116.6	(4.0)		長石・石英・白色粒子	濁	普通	口縁部内外面ハケ目 体部外面ハケ目 内面ハケ目調整後ヘツナツ	覆土	5%
6	土師器	ミナコ7土器		(1.5)		長石・石英	明赤濁	普通	体部内外面ナツ 底部ヘツ削り	覆土	5%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
7	管状土鉢	4.3	(2.4)	0.8	(15.73)	長石・石英・赤色粒子	橙	一方向からの穿孔 全面ナツ調整	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
8	不明土製品	21	1.4	1.2	(2.96)	石英・黒色粒子	明濁	底面丸棒状工具による押圧 ナツ成形	覆土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	不明石製品	(3.6)	2.7	2.1	(3.65)	軽石	全面磨損面 一部欠損 砥石。	覆土	

第41 竪穴建物跡 (第126・127図 第72表 PL35)

位置 調査区北東部の1 I 6 g2区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

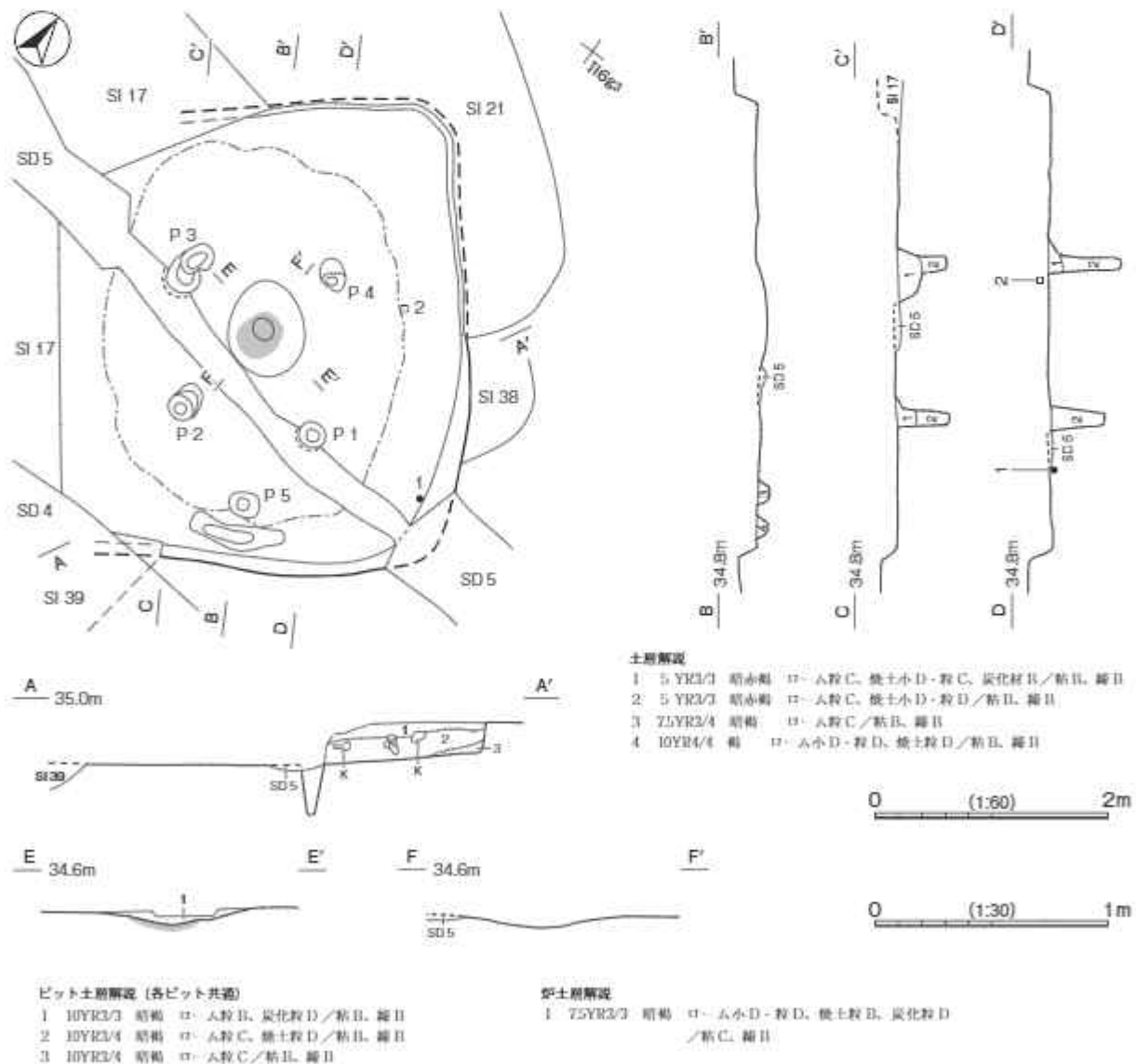
重複関係 第21・38号竪穴建物跡、第4号竪穴遺構を掘り込み、第17・39号竪穴建物、第4・5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は南北軸4.06m、東西軸3.47mである。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形と推測でき、主軸方向は東壁から判断してN-32°-Wと推定できる。壁は高さ5~28cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて硬化している。

炉 中央部に位置している。長径82cm、短径65cmの楕円形で、深さ12cmの地床炉である。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。

ピット 5か所。P1~P4は深さ42~62cmで、配置と規模から柱穴と考えられる。P5は深さ12cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。柱はいずれも抜き取られている。P5と南壁との間には、長さ



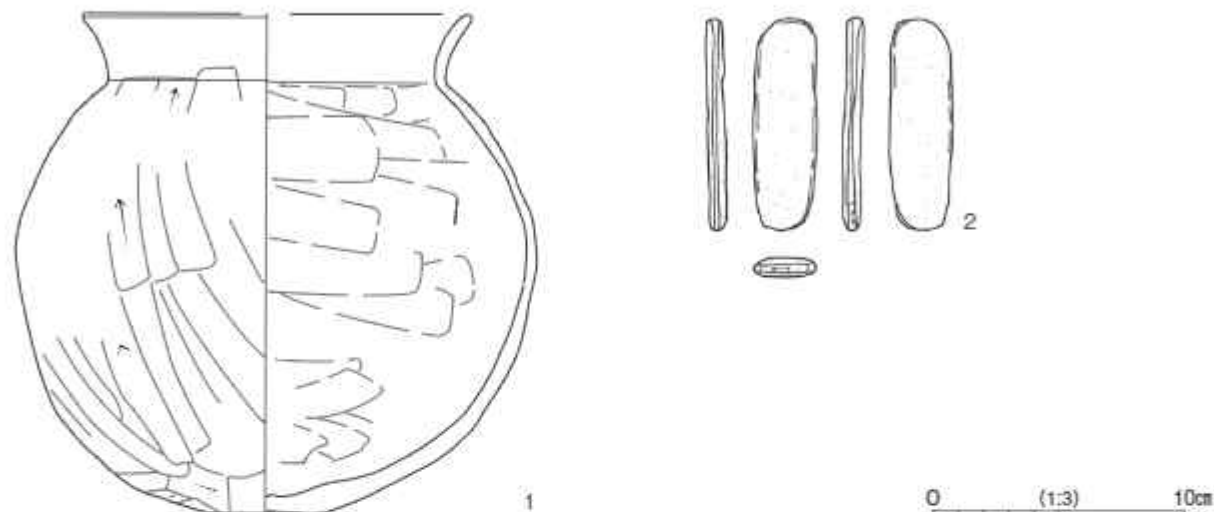
第126図 第41号竪穴建物跡実測図

82cm、幅 20cm、深さ 8cmの溝状の凹みを確認した。

覆土 3層に分層できる。第1・2層は、ローム粒子、焼土を含む均質な土質から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 63 点（甕）、石器 2 点（砂岩製砥石）が出土している。ほかに混入した縄文土器片 1 点、弥生土器片 93 点、石器 4 点が出土している。土師器片は主に周囲や北東部の覆土中から出土している。1 は南東部の床面から、2 は北東壁寄りの覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 5 世紀前後と考えられる。



第 127 図 第 41 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 72 表 第 41 号竪穴建物跡出土遺物一覧（第 127 図）

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	115.2	19.6	4.5	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	棕	普通	口縁部内外面ナデ、体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ、底面ヘラ削り	床面	60%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
2	砥石	8.3	2.5	0.9	(28.37)	砂岩	素材は扁平な楕円形、両端部削打後に研削、平滑			覆土下層	PL35

第 43 号竪穴建物跡（第 128～132 図 第 73 表 PL10・36～38）

位置 調査区東部の I J 6 a3 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 47・49 号竪穴建物跡、第 285 号土坑を掘り込み、第 93・99・106 号土坑、第 11・12・17 号溝に掘り込まれている。

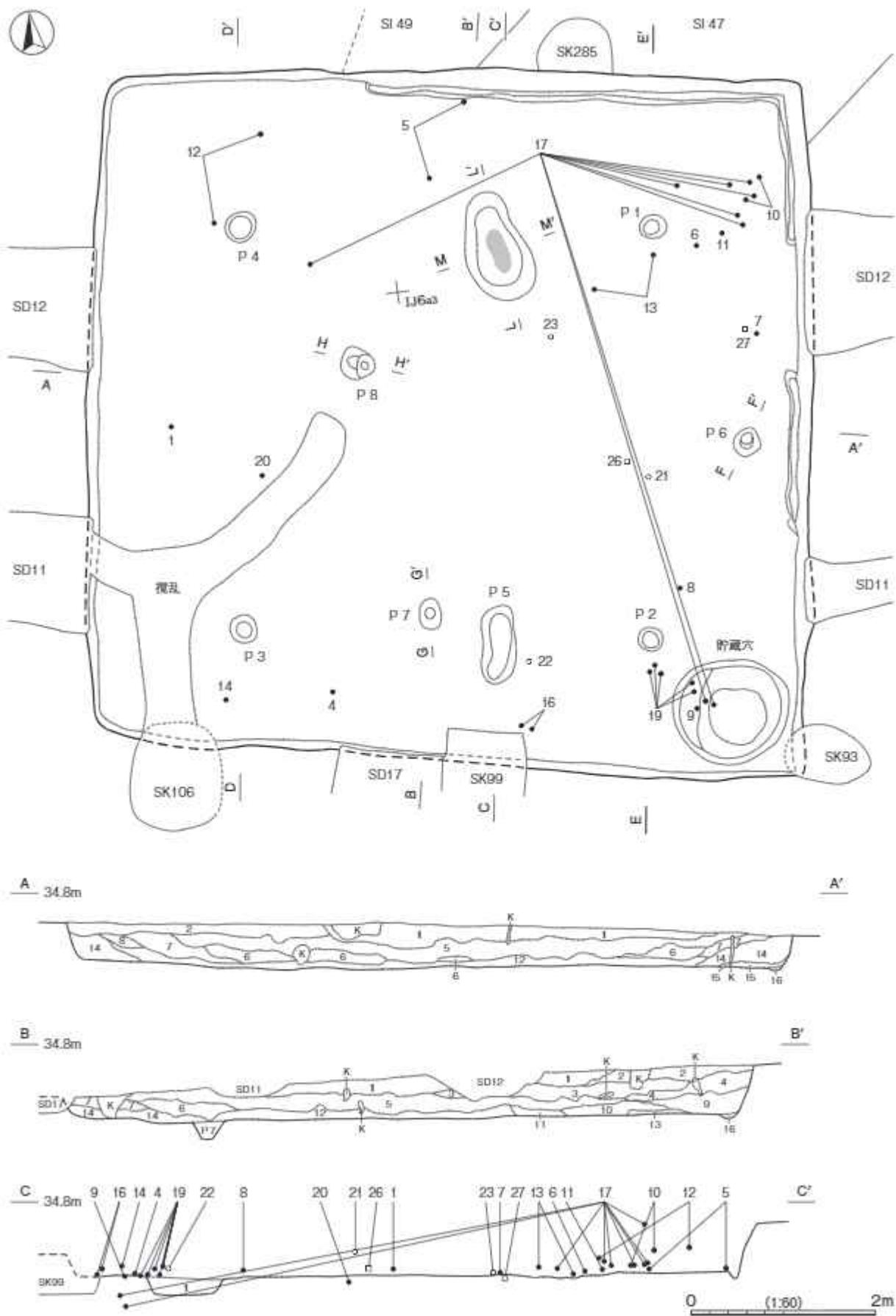
規模と形状 長軸 7.82 m、短軸 7.38 m の方形で、主軸方向は N - 6° - E である。壁は高さ 22～52cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、硬化していない。壁溝は北壁東側と東壁北側の一部で壁直下に巡っている。幅は 10～20cm、深さ 2～4cm で、断面は U 字状を呈している。

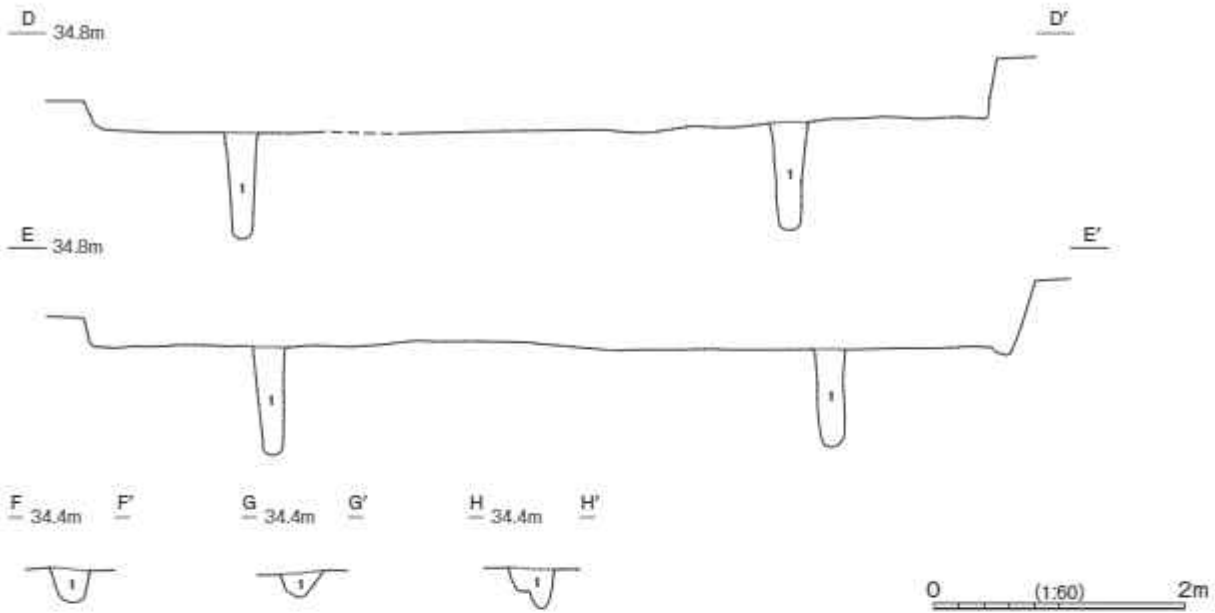
炉 中央部北寄りに位置している。長径 118cm、短径 66cm の楕円形で、深さ 4cm の地床炉である。断面は浅い皿状を呈している。炉床面は僅かに赤変硬化している。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径 122cm、短径 112cm の円形で、深さ 38cm である。底面は皿状で、東壁は外傾しており、西壁は底面からほぼ直立し、中段で幅 20cm の平坦面を有している。覆土はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

ピット 8 か所。P 1～P 4 は深さが 75～84cm で、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。P 5 は深さ 20cm で、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6・P 7 は深さ 27cm・



第128图 第43号罅穴建物跡实测图(1)

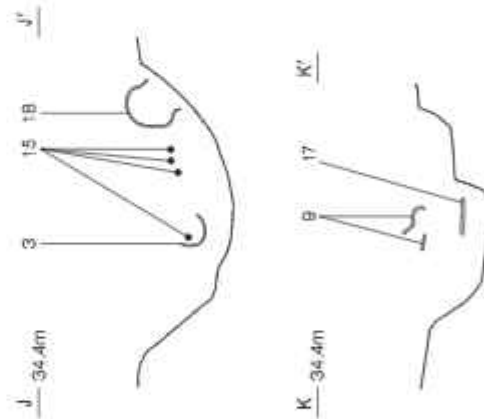
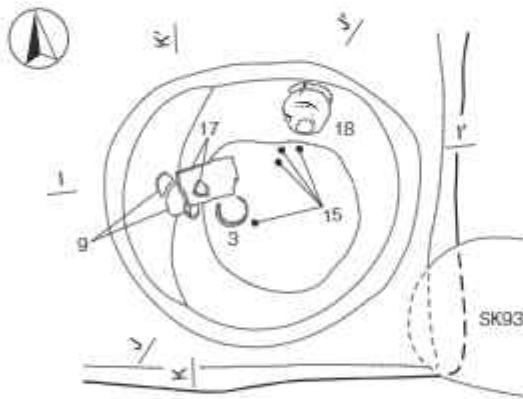


土層解説

- | | | | | | |
|-----------------|---|------------------------|------------------|---|------------------------|
| 1. 10YR23/1 黒褐色 | ロ | △小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘C、雜目 | 9. 10YR24/4 粘 | ロ | △小C・粒B/粘B、雜目 |
| 2. 10YR23/3 暗褐色 | ロ | △小C・粒B/粘B、雜目 | 10. 10YR24/3 粘 | ロ | △小B・粒B、焼土粒C、炭化粒D/粘B、雜目 |
| 3. 10YR23/4 暗褐色 | ロ | △小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜目 | 11. 10YR23/2 黒褐色 | ロ | △小C・粒C、焼土粒B、炭化粒D/粘C、雜目 |
| 4. 10YR24/2 粘 | ロ | △中D・小C・粒B/粘B、雜目 | 12. 10YR23/4 暗褐色 | ロ | △中B・小B・粒A/粘B、雜目 |
| 5. 10YR23/2 暗褐色 | ロ | △小B・粒B、焼土粒D/粘C、雜目 | 13. 10YR24/6 粘 | ロ | △小B・粒A/粘B、雜目 |
| 6. 10YR23/4 暗褐色 | ロ | △小C・粒C/粘B、雜目 | 14. 10YR24/6 粘 | ロ | △小B・粒A、炭化粒D/粘B、雜目 |
| 7. 10YR24/3 粘 | ロ | △中A・小B・粒B/粘B、雜目 | 15. 10YR25/6 黄褐色 | ロ | △小B・粒A/粘B、雜目 |
| 8. 10YR24/4 粘 | ロ | △小B・粒A/粘B、雜目 | 16. 10YR24/5 粘 | ロ | △小B・粒A/粘B、雜目 |

ピット土層解説 (各ピット共通)

1. 10YR24/3 粘 ロ △小C・粒A、炭化粒D/粘B、雜目

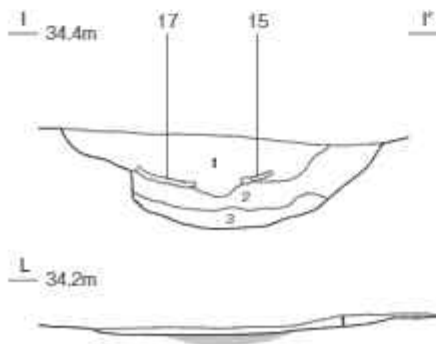


貯蔵穴土層解説

1. 10YR23/3 暗褐色 ロ △小D・粒D、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雜目
 2. 10YR23/4 暗褐色 ロ △小B・粒B、炭化粒D/粘B、雜目
 3. 10YR24/6 粘 ロ △小B・粒B/粘B、雜目

炉土層解説

1. 10YR23/3 暗褐色 ロ △小D・粒C、焼土小C・粒C、炭化粒D/粘C、雜目

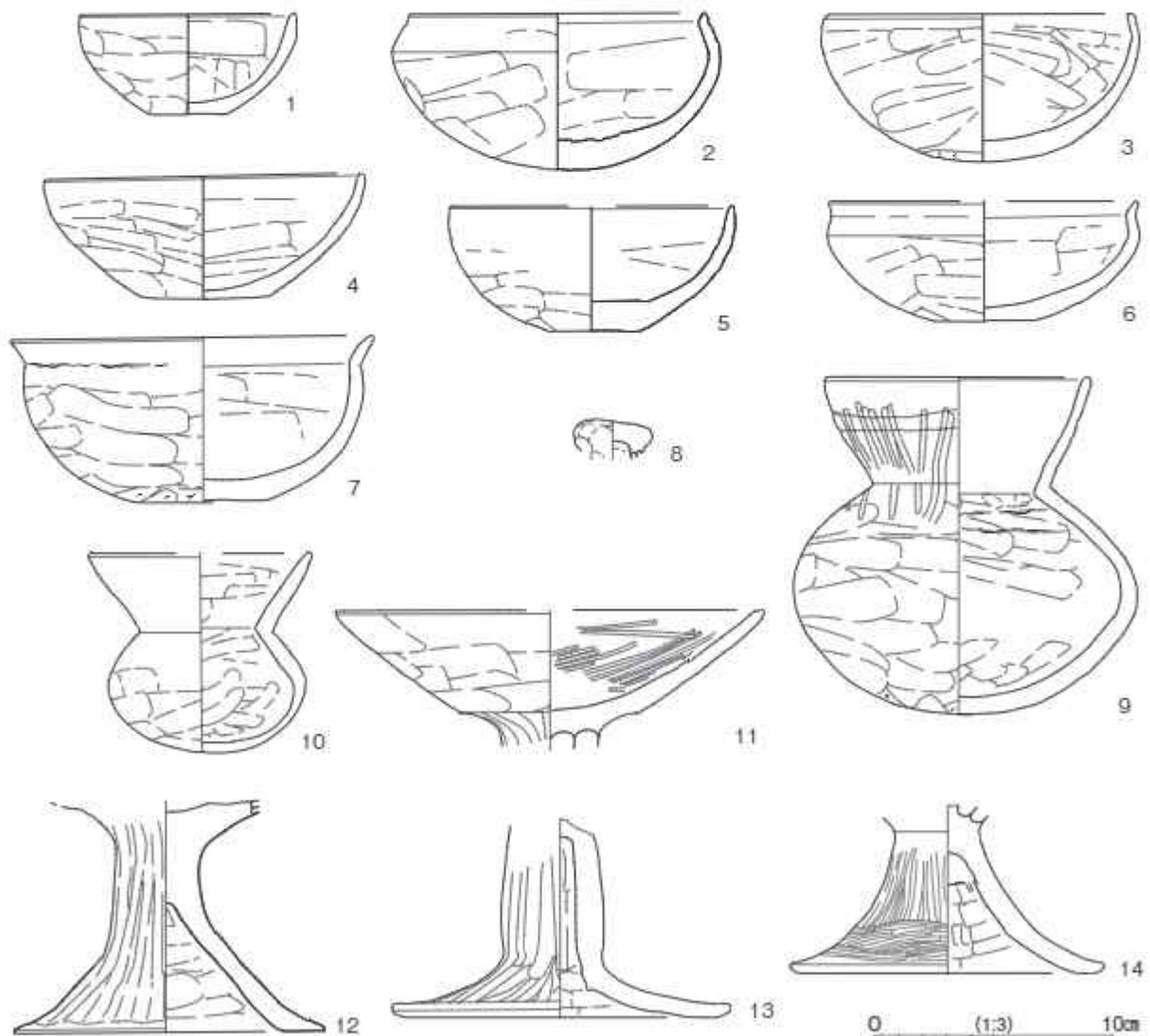


第129図 第43号竪穴建物跡実測図(2)

22cmで、位置から補助柱穴と考えられる。P 8は深さ 33cmで、性格は不明である。

覆土 16層に分層できる。第1層はロームブロックの含有が少なく、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第2～14層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。第15層は壁の崩落土、第16層は壁溝の覆土である。

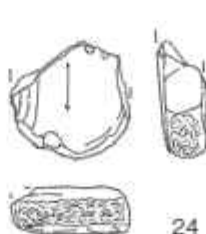
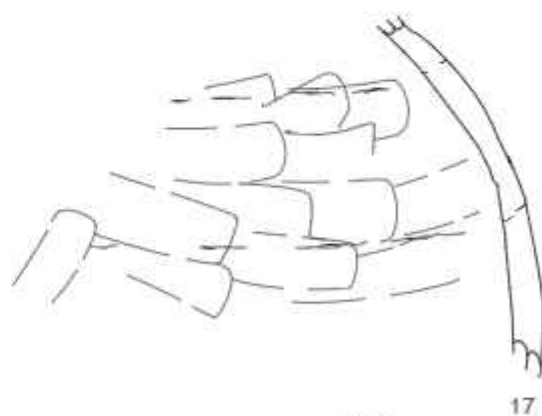
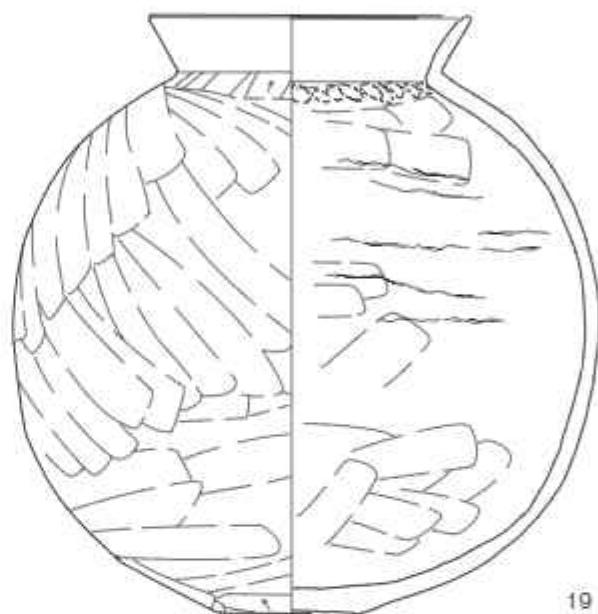
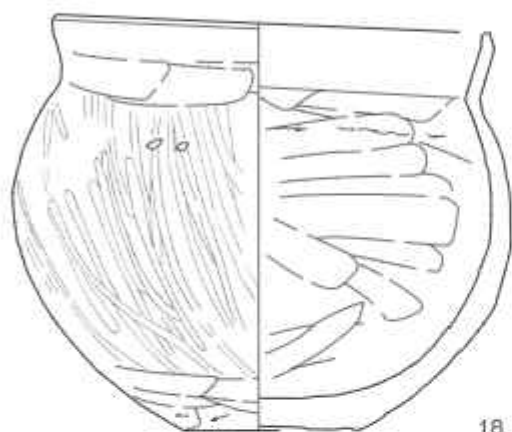
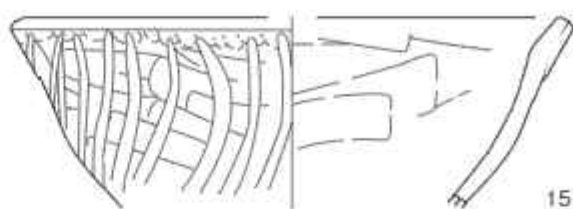
遺物出土状況 土師器片 1285点（椀 70、埴 19、高坏 79、鉢 5、壺 66、甕 1045、ミニチュア土器 1）、土製品 3点（土玉 2、不明土製品 1）、石器 2点（凝灰岩製砥石、砂岩製砥石）、石製品 2点（滑石製勾玉、滑石製有孔円板）、焼成粘土塊 3点が出土している。ほかに混入した縄文土器片 5点、弥生土器片 425点、陶器片 2点、土師質土器片 18点、石器 3点が出土している。器形を復元できる土師器は床面から出土したものと、壁際寄りの覆土下層から中層にかけて出土したものに分けられる。それらの土器には時間差が認められないことから、建物廃絶後の埋め戻しに伴って廃棄されたと考えられる。1は西部、6・11・13は北東部、8・19は南東部、14は南西部、22は南部中央、26は中央部東寄りの覆土下層から、また、4は南部、7は東部、20は西部、23は中央部、27は東部壁寄りの床面から、21は中央部東寄りの覆土中層から、24・25は覆土中から、それぞれ出土している。貯蔵穴からは、2が覆土中から、3・17が覆土下層から、9・18が覆土上層から、それぞれ出土している。接合関係では、5は北部の床面と覆土下層、10は北東部の覆土下層と覆土中層、12は北東部



第130図 第43号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)

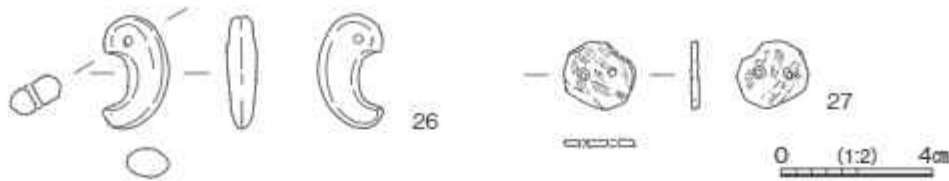
の覆土下層と覆土中層、15は貯蔵穴の覆土下層と覆土中層、16は南部の床面と覆土下層から出土した破片が接合している。17は大型の甕で、貯蔵穴の覆土中層と、建物内の覆土下層から上層にかけて出土した破片が接合しており、建物廃絶後の埋め戻しに伴って広範囲にわたって廃棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



0 (13) 10cm

第131図 第43号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)



第132図 第43号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

第73表 第43号竪穴建物跡出土遺物一覧(第130～132図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	輪	8.9	4.2	3.5	長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐色	普通	口縁部横ナブ 体部内外面ヘラナブ 底部ヘラ削り	覆土下層	90% PL36
2	土師器	輪	12.2	6.5		長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部横ナブ 体部内外面ヘラナブ 体部外面下端から底部ヘラ削り	貯蔵穴覆土	90% PL36
3	土師器	輪	12.5	6.2		長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部横ナブ 体部内外面ヘラナブ 外面体部トキヘラ削り	貯蔵穴 覆土下層	100% PL36
4	土師器	輪	13.2	5.4	5.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナブ 体部内外面ヘラナブ 底部ヘラ削り	床面	90% PL36
5	土師器	輪	[11.8]	5.3	3.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部横ナブ 体部内外面ヘラナブ 底部ヘラ削り	床面・覆土下層	50%
6	土師器	輪	[13.0]	5.0	4.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナブ 体部内外面ヘラナブ 底部ヘラ削り	覆土下層	40%
7	土師器	輪	15.1	7.0	5.4	長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐色	普通	口縁部横ナブ 外面接合痕 体部内外面ヘラナブ 体部トキから底部ヘラ削り	床面	70% PL36
8	土師器	蓋		(1.7)		長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐色	普通	つまみ部内外面ナブ	覆土下層	10%
9	土師器	埴	11.0	14.2		長石・石英・白色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外面横ナブ後ヘラ磨き 内面横ナブ 体部外面ヘラナブ 内面ヘラナブ後一部折損痕 底部ヘラ削り後ナブ	貯蔵穴 覆土上層	95% PL36
10	土師器	埴	[9.2]	8.4		長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナブ 体部内外面ヘラナブ	覆土下層 覆土中層	80% PL36
11	土師器	高坏	[18.0]	(5.7)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ヘラナブ 内面ヘラ磨き 脚部外面ヘラナブ	覆土下層	10%
12	土師器	高坏	(9.7)	13.0		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい褐色	普通	脚部外面ヘラナブ 内面指ナブ ヘラナブ	覆土下層 覆土中層	40% PL36
13	土師器	高坏	(8.4)	14.2		長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	脚部外面ヘラナブ 内面指ナブ ヘラナブ	覆土下層	50% PL37
14	土師器	高坏	(7.05)	[12.3]		長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き 内面指ナブ ヘラナブ	覆土下層	40% PL37
15	土師器	鉢	[21.1]	(7.6)		長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部折損痕 横ナブ 内面ヘラナブ 体部外面ヘラ削り後ヘラナブ 内面ヘラナブ 飯の可能性あり	貯蔵穴 覆土上層・中層	20%
16	土師器	甕	[17.8]	(7.0)		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	右径口縁 口縁部内外面横ナブ 折損痕 体部外面ヘラ削り後ヘラナブ 内面ヘラナブ	床面・覆土下層	10% PL38
17	土師器	甕		(14.3)		長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	大形甕 脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナブ	覆土下層・上層、貯蔵穴 覆土上・中層	10% PL37
18	土師器	甕	17.1	16.6	6.9	長石・石英・白色粒子	明赤褐色	普通	口縁部内外面横ナブ 体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き ヘラナブ 内面ヘラナブ 底部ヘラ削り	貯蔵穴 覆土上層	70% PL37
19	土師器	甕	12.6	23.8	5.5	長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナブ 体部外面ヘラナブ 内面ヘラナブ・折損痕 底部ヘラ削り	覆土下層	85% PL37
20	土師器	ミニチュア土器	[6.8]	3.0	3.0	長石・石英・白色粒子	明赤褐色	普通	口縁部内外面ヘラナブ 体部内外面ヘラナブ 底部ヘラ削り	床面	50%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
21	土瓦	4.3	3.8	0.6	66.89	長石・石英・雲母	黒褐色	一方向から穿孔 ナブ 折損痕	覆土中層	100% PL38
22	土瓦	4.2	4.2	0.7	60.3	長石・石英・雲母	黒褐色	一方向から穿孔 ナブ 折損痕	覆土下層	100% PL38

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
23	不明土製品	3.4	0.7	0.6	1.76	長石・石英	明赤褐色	断面円形の棒状土製品 ナブ変形 右端部ヘラ状 土具による押付 左端部欠損	床面	

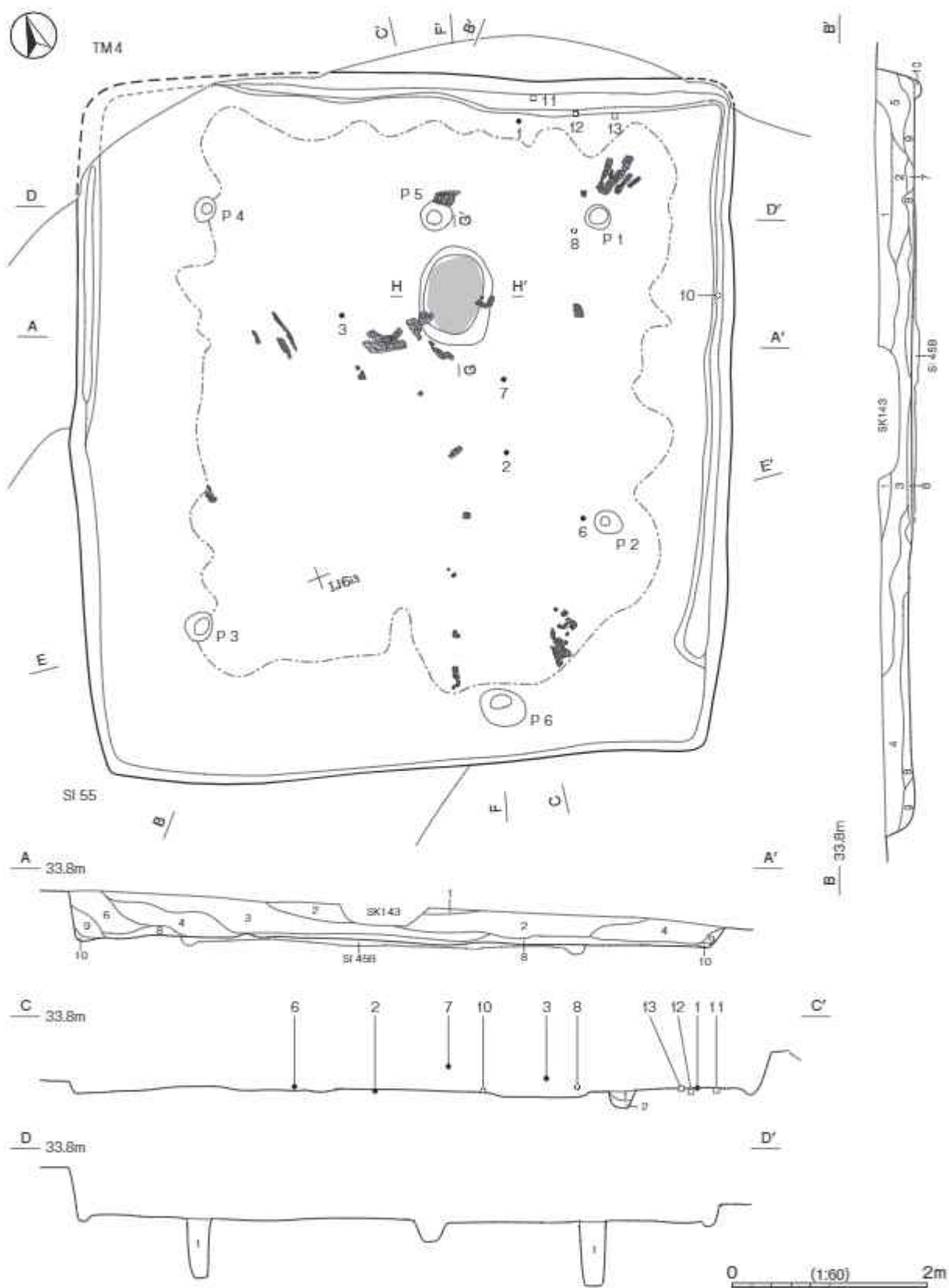
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
24	砥石	(4.6)	4.8	1.9	(49.16)	凝灰岩	両面 研磨面 下端部・右側面敲打痕 上部欠損 磁石兼用	覆土	
25	砥石	(5.1)	(4.7)	4.6	(110.29)	砂岩	研磨面平滑 欠損	覆土	
26	勾玉	3.0	1.65	0.8	5.17	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔 孔径0.2cm	覆土下層	PL38
27	右孔円板	1.9	1.8	0.2	1.46	滑石	全面研磨 孔2か所 孔径0.15～0.2cm	床面	PL38

第45A号竪穴建物跡(第133～135図 第74表 PL10・38)

位置 調査区南東部のI J 6h3区、標高33mの台地緩傾斜面に位置している。

重複関係 第45B・55号竪穴建物跡を掘り込み、第138・139・143号土坑、第4号埴に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.08m、短軸6.68mの方形で、主軸方向はN-22°-Eである。壁は高さ10～42cmで、



土层解说

- | | | | |
|----------------|-----------------------------|----------------|--------------------------|
| 1 10YR4/3 灰土夹砂 | □-A小C-粉A/粘B, 细A | 6 10YR4/3 灰土夹砂 | □-A小C-粉C/粘B, 细B |
| 2 10YR4/6 粉 | □-A粉A, 灰化粉C/粘B, 细A | 7 10YR3/4 暗粉 | □-A小C-粉C/粘B, 细A |
| 3 10YR3/4 暗粉 | □-A粉A, 烧土小D-粉D/粘B, 细B | 8 10YR2/3 黑粉 | □-A粉C, 烧土粉A, 灰化粉A/粘B, 细A |
| 4 10YR3/2 暗粉 | □-A小A-粉A, 烧土粉D, 灰化粉D/粘B, 细B | 9 10YR3/4 暗粉 | □-A大A-中A/粘B, 细B |
| 5 10YR3/4 暗粉 | □-A粉A, 烧土小D-粉D/粘B, 细A | 10 10YR4/6 粉 | □-A大A-中A/粘B, 细B |

第133图 第45A号竖穴建物遗迹平面图

外傾している。

床 ほは平坦であるが、南壁際中央付近が僅かに低くなっている。壁際を除いて硬化している。壁溝が東壁と西壁の壁直下に巡っている。

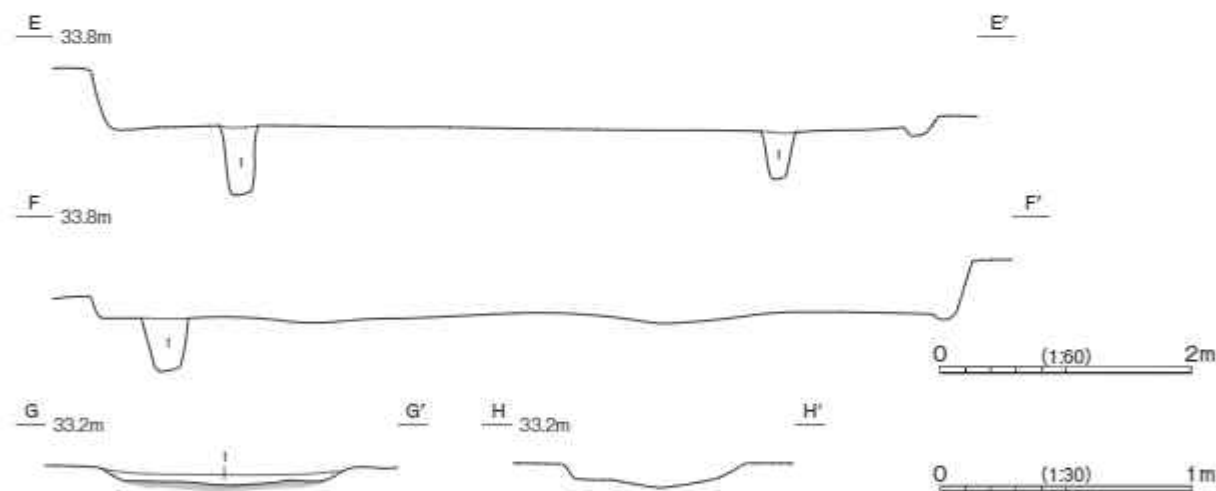
炉 中央部北寄りに位置している。長径98cm、短径74cmの楕円形で、深さ4cmの地床炉である。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。

ピット 6か所。P1～P4は深さ36～64cmで、配置と規模から主柱穴と考えられる。P5は深さ18cmで、補助柱穴と考えられる。P6は深さ43cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層に分層できる。第1・6・7層はロームブロックをやや多く含むことから人為堆積で、第2～5・8層はローム粒子を均質に含み、締まりが強いことから、自然堆積である。第9層は壁の崩落土、第10層は壁溝覆土である。

遺物出土状況 土師器片671点(埴21、器台2、高坏19、壺77、甕551、甌1)、土製品4点(土玉)、石器3点(硬砂岩製磨石、安山岩製磨石、軽石製砥石)、焼成粘土塊5点が出土している。ほかに混入した縄文土器片4点、弥生土器片341点、石器1点が出土している。土師器片は、主に東部の覆土下層から中層にかけて散在した状態で出土している。1・11～13は北壁際東寄り、2は中央部、6は南東部、10は東壁際北寄りの床面から、3は中央部やや北寄りの覆土中層から、7は中央部の覆土上層から、8は北東部の覆土下層から、それぞれ出土している。また、炭化材は床面の硬化範囲内の各所から、焼成粘土塊は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。

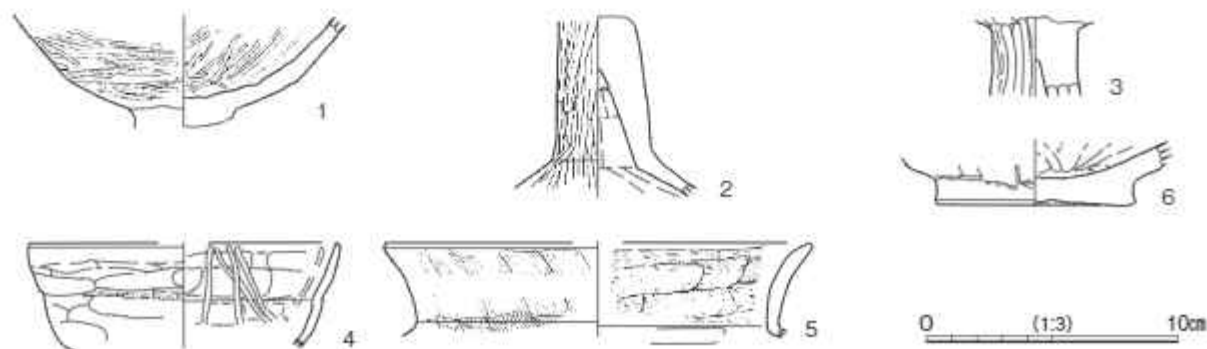


ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 IDYR3/7 粘粉 ローム小片・粒A、焼土粒C、炭化粒C/粘土 雜A
- 2 IDYR4/4 腐 ローム小片・粒A、焼土粒C、炭化粒C/粘土、雜A

伊土層解説

- 1 SYR4/3 土塊粘粉 中・大粒C、焼土小片・粒A、炭化粒D/粘土 雜A



第134図 第45A号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第135図 第45 A号竪穴建物跡出土遺物実測図

第74表 第45 A号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第134・135図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏		(4.3)		長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐	普通	内部内外面ヘツミガキ	床面	5%
2	土師器	高坏		(7.1)		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	脚部外面ヘツミガキ 内面ヘツナブ	床面	20%
3	土師器	高坏		(3.2)		長石・石英・白色粒子	橙	普通	脚部外面ヘツナブ 内面ヘツナブ	覆土中層	5%
4	土師器	埴	[124]	(4.2)		長石・石英・白色粒子	明褐	普通	口縁部外面ハケ目後ヘツナブ 内面ヘツナブ後 先いミガキ 体部外面ヘツナブ 内面ヘツナブ	覆土	5%
5	土師器	壺	[179]	(2.6)		長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐	普通	口縁部外面ハケ目後ナブ 内面ハケ目 体部外面ハケ目後ナブ 内面ヘツナブ	覆土	5%
6	土師器	壺		(4.3)	[7.6]	長石・石英・白色粒子	にぶい褐	普通	体部外面ヘツ削り 内面ヘツナブ 底部ヘツ削り	床面	5%
7	土師器	瓶	[240]	(4.6)		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	折り返し口縁 口縁部外面ナブ 断面板 内面ナブ 体部外面ヘツ削り	覆土上層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
8	土玉	(27)	28	0.5	(13.82)	長石・石英・雲母	にぶい橙	一方から穿孔、ナブ指痕あり	覆土下層	PL38
9	土玉	3.0	(26)	0.7	(19.42)	長石・石英・雲母	にぶい橙	一方から穿孔、ナブ指痕あり	覆土	PL38
10	土玉	2.5	3.0	0.7	14.27	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	一方から穿孔、ナブ指痕あり	床面	PL38

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
11	磨石	11.6	7.9	4.6	655	硬砂岩	両面・側縁部打痕、下端部研磨面、敲石兼用	床面	PL38
12	磨石	18.2	7.5	6.3	1130	安山岩	下端部研磨面	床面	PL38
13	砥石	(9.8)	4.8	4.7	(43.74)	輝石	全面研磨面、筋状の研磨痕多数、穿孔1か所	床面	PL38

第45B号竪穴建物跡 (第136図)

位置 調査区南部の1J 6h3区、標高33mの緩傾斜面に位置している。

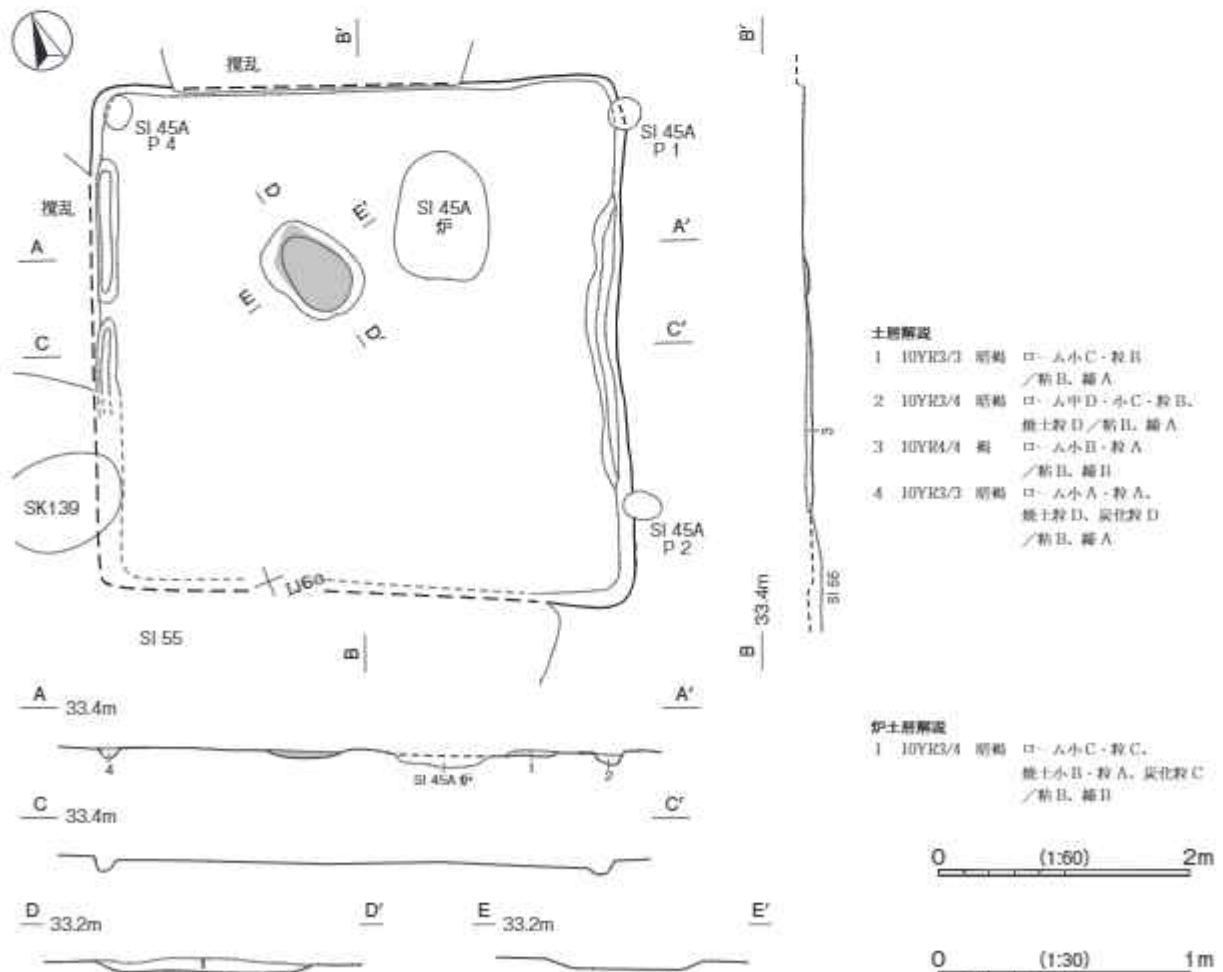
重複関係 第55号竪穴建物跡を掘り込み、第45A号竪穴建物、第138・139・143号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため、確認できた規模は長軸4.20m、短軸4.16mの方形で、主軸方向はN-22°-Eである。壁は高さ2~4cmである。

炉 中央部北寄りに位置している。長径84cm、短径57cmの楕円形で、深さ6cmの地床材である。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。

床 平坦だが、炉周辺が僅かに低くなっている。硬化はしていない。壁溝が東壁と西壁の壁直下に巡っている。

覆土 4層に分層できる。第45A号竪穴建物に掘り込まれ、移動が強いため、堆積状況は不明である。



第136図 第45B号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片8点(甕)、土製品1点(土玉)、焼成粘土塊5点が出土している。ほかに混入した石器1点が出土している。土師器片は、ハケ目を施した甕が出土しているが、細片のため図示できない。

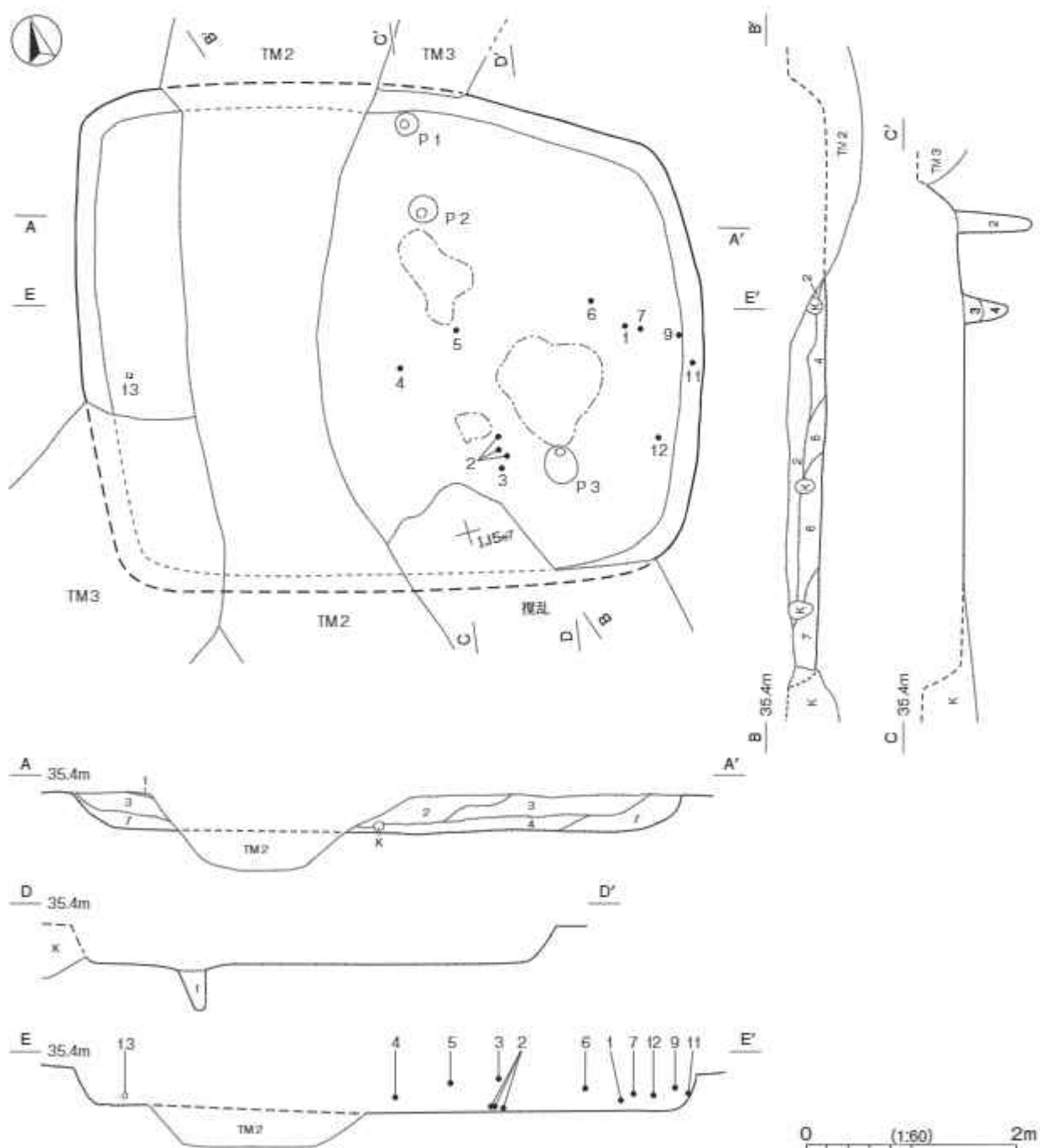
所見 本跡は、第45A号竪穴建物跡の床下から確認されたため、第45A号竪穴建物の建て替え、拡張前の竪穴建物跡と判断した。時期は、出土土器から第45A号竪穴建物跡と同じ4世紀後葉と考えられる。

第46号竪穴建物跡 (第137・138図 第75表 PL39)

位置 調査区南部の1J5d7区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第2・3号墳に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は長軸5.92m、短軸4.27mである。平面形は隅丸長方形と推定でき、主軸方向はN-68°-Wである。壁は高さ32~36cmで、外傾している。



第137図 第46号竪穴建物跡実測図

土器解説

- | | | | | | | | |
|---|---------|----|------------------------|---|--------|-----|---------------------|
| 1 | HYR2/3 | 黒陶 | ローム粒D/粘A、締B | 5 | HYR3/4 | 黒陶 | ローム小C-粒C、焼土粒D/粘B、締A |
| 2 | HYR2/2 | 黒陶 | ローム粒C、焼土粒D/粘B、締B | 6 | HYR4/3 | 灰黒陶 | ローム小C-粒B/粘B、締B |
| 3 | HYR3/4 | 黒陶 | ローム小C/粘B、締B | 7 | HYR3/4 | 黒陶 | ローム大A-中A/粘B、締B |
| 4 | ZSYR3/4 | 黒陶 | ローム小C-粒B、焼土小D-粒C/粘B、締B | | | | |

ピット土器解説 (各ピット共通)

- | | | | | | | | |
|---|--------|----|----------------|---|--------|-----|----------------|
| 1 | HYR3/3 | 黒陶 | ローム小C/粘B、締C | 3 | HYR2/4 | 黒陶 | ローム粒D/粘B、締A |
| 2 | HYR3/3 | 黒陶 | ローム小C-粒C/粘A、締B | 4 | HYR4/3 | 灰黒陶 | ローム小C-粒C/粘B、締C |

床 ほほ平坦で、中央部が緩やかに低くなっている。中央部東側が島状に硬化している。

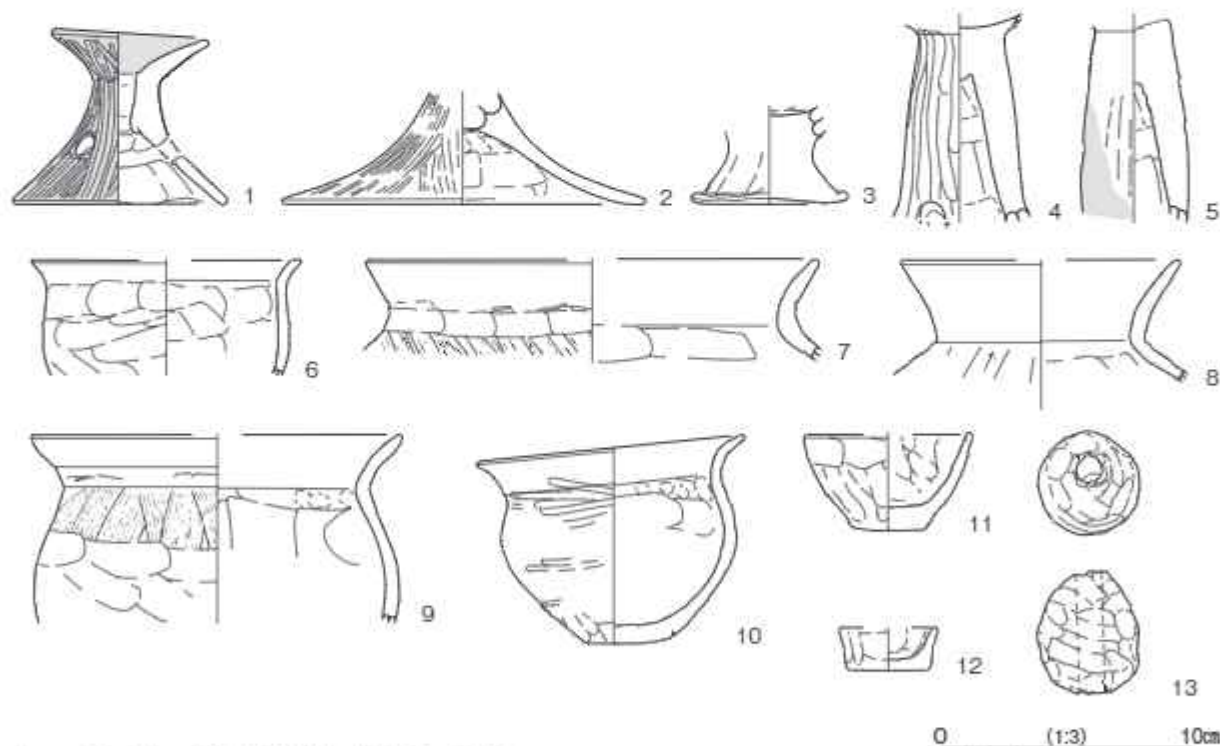
ピット 3か所。P1～P3は深さ42～70cmで、性格は不明である。

覆土 7層に分層できる。第1・2層は、ローム粒子などの含有物を均質に含むことから、自然堆積である。

第3～7層は、ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 380点 (椀3、埴11、器台8、高杯13、壺29、甕314、ミニチュア土器2)、土製品1点 (土玉)、焼成粘土塊3点が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片284点、石器3点が出土している。遺物は東部の覆土下層から中層にかけて、散在した状態で出土している。焼成粘土塊3点は、覆土下層から出土している。1・7・12は東壁際、4は中央部、13は西壁際中央の覆土下層から、6・9・11は東壁際、3・5は中央部の覆土中層から、それぞれ出土している。2は中央部の床面から覆土下層にかけて出土した破片が接合している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第138図 第46号竪穴建物跡出土遺物実測図

第75表 第46号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	器台	6.0	7.0	8.0	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	受部内面ナブ 外面ナブ後ヘラミガキ 受部内外面赤彩	覆土下層	100% PL39
2	土師器	高杯	-	(4.4)	[14.2]	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	外面ヘラミガキ 内面ヘラナブ 接合部内面筋面復	床面 覆土下層	30%
3	土師器	高杯	-	(3.9)	[6.2]	長石・石英・雲母・黒色粒子	褐色	普通	脚部外面ヘラナブ 断面・底面外面ナブ ミニチュア土器カ	覆土中層	40%
4	土師器	高杯	-	(8.3)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	褐色	普通	脚部外面ヘラミガキ 内面ヘラナブ・筋面復 脚部下段穿孔3か所	覆土下層	30%
5	土師器	高杯	-	(8.0)	-	石英・赤色粒子・白色粒子	褐色	普通	脚部外面被熱により摩耗著しい 内面ナブ	覆土中層	30%

り込まれている。

規模と形状 北東壁と北西壁の一部を除いて壁が削平されているため、確認できた規模は、長軸 4.80 m、短軸 4.77 m で、本来は長軸約 5.1 m、短軸約 5.0 m の方形と推定できる。主軸方向は N - 52° - W である。壁は高さ 7 ~ 8 cm で、外傾している。

床 ほほ平坦で、壁際を除いて硬化している。

炉 中央部北西寄りに位置している。長径 106 cm、短径 75 cm の楕円形で、深さ 6 cm の地床かである。断面は中央部が盛り上がった皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。

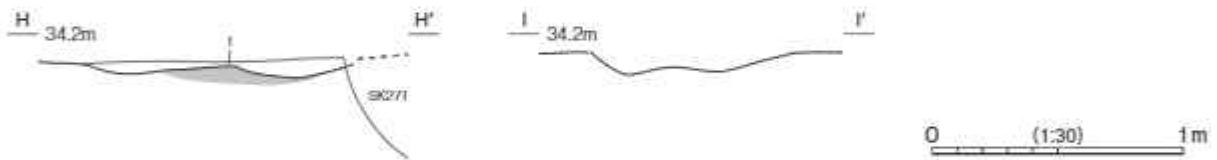
ピット 3 か所。P 1 ~ P 3 の深さは 48 ~ 56 cm で、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

貯蔵穴 南コーナー寄りに位置している。長径 78 cm、短径 63 cm の楕円形で、深さ 18 cm である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾している。覆土にロームブロックを含むことから、人為堆積である。

覆土 2 層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片 88 点（椀 1、埴 7、高坏 11、壺 2、甕 65、ミニチュア土器 2）、土製品 6 点（土玉）、焼成粘土塊 2 点が出土している。ほかに混入した縄文土器片 1 点、弥生土器片 27 点が出土している。遺物は北西壁際周辺の覆土下層や貯蔵穴底面及び覆土中から出土している。貯蔵穴からは、1・7・10 が底面から、5・8 は覆土下層から、9 は覆土上層から、それぞれ出土している。2・4・6 は北西壁寄りの覆土下層から、焼成粘土塊は覆土下層から、それぞれ出土している。床面から焼土が確認されているが、床に被熱痕がなく、覆土中にも炭化材がほとんど確認できないことから、建物廃絶後の廃棄と考えられる。

所見 時期は、出土土器から 4 世紀後葉と考えられる。

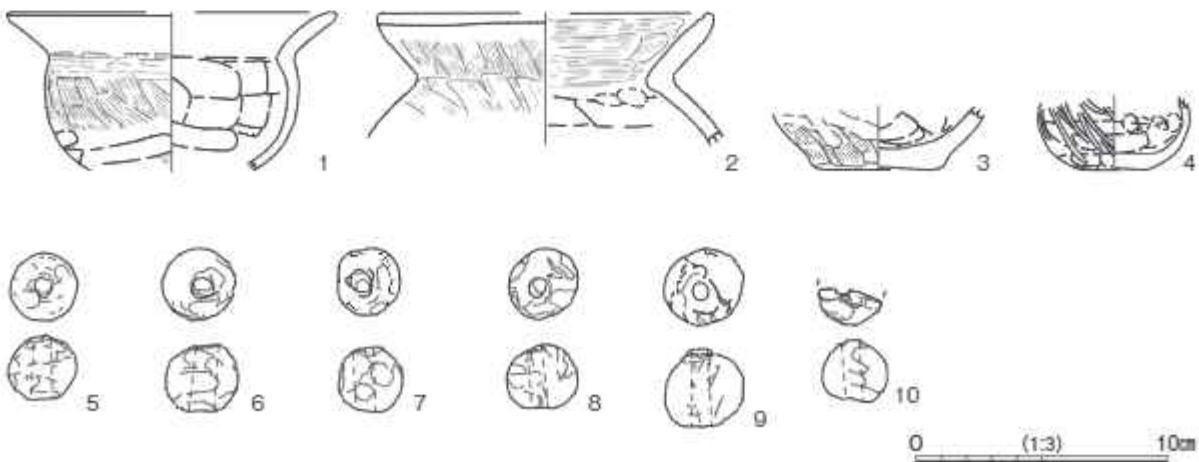


炉土器解説

1 ZSYK3/4 前期 ① A小C・紋C、焼土小C・紋B/粘C、埴C

貯蔵穴土器解説

1 IOYK4/6 前期 ① A小C・紋B、焼土粒D・紋C/粘B、埴B
2 IOYK3/4 前期 ① A小B・紋A、焼土粒C、炭化粒C/粘B、埴B



第 140 図 第 50 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第76表 第50号竪穴建物跡出土遺物一覧(第140図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	[127]	(5.3)		長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部内外横ナブ 胴部ハケ目後頸部ヘツミガキ 体部下平ヘツナブ 内面ヘツナブ	覆土下層	30%
2	土師器	甕	[128]	(5.3)	[4.7]	長石・石英・白色粒子	灰黄褐色	普通	口縁部外面ハケ目後上半横ナブ 内面ヘツナブ 底部ヘツケズリ	覆土	5%
3	土師器	甕		(2.5)	[4.7]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目後ヘツナブ 内面ヘツナブ 底部ヘツケズリ	覆土下層	5%
4	土師器	ミニチュア土器		(2.9)	[2.6]	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘツナブ後ヘツミガキ 体部下端ヘツケズリ 内面ナブ・折頸部 底部削り	貯蔵穴 底面	40%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
5	土玉	26	25	0.8	14.72	長石・石英	にぶい黄橙	片側からの穿孔 ヘツナブ	貯蔵穴 上層	PL39
6	土玉	28	27	0.9	18.45	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄褐色	片側からの穿孔 ヘツナブ	覆土下層	PL39
7	土玉	25	28	0.8	15.22	長石・石英・白色粒子	にぶい橙	片側からの穿孔 ヘツナブ 外面剥離	貯蔵穴 底面	PL39
8	土玉	27	25	0.7	16.65	石英・白色粒子 黒色粒子	にぶい褐色	片側からの穿孔 ヘツナブ 外面剥離	貯蔵穴 下層	PL39
9	土玉	31	31	0.8	25.47	長石・石英	にぶい黄橙	片側からの穿孔 ヘツナブ 外面剥離	貯蔵穴 上層	PL39
10	土玉	26	25	0.7	(5.97)	長石・石英	にぶい褐色	片側からの穿孔 ヘツナブ	貯蔵穴 底面	PL39

第52 A号竪穴建物跡(第141・142図 第77表 PL39)

位置 調査区東部のI J 6 d2区、高さ34 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第52B、53号竪穴建物跡を掘り込み、第1・2・3B・4 A号掘立柱建物、第107・108・111・127・132・281～283号土坑、第5号土坑墓、第2号不明遺構に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.75 m、短軸6.72 mの方形で、主軸方向はN-23°-Eである。壁は高さ5～16cmで、外傾している。

床 ほは平坦で、壁際を除いて硬化している。

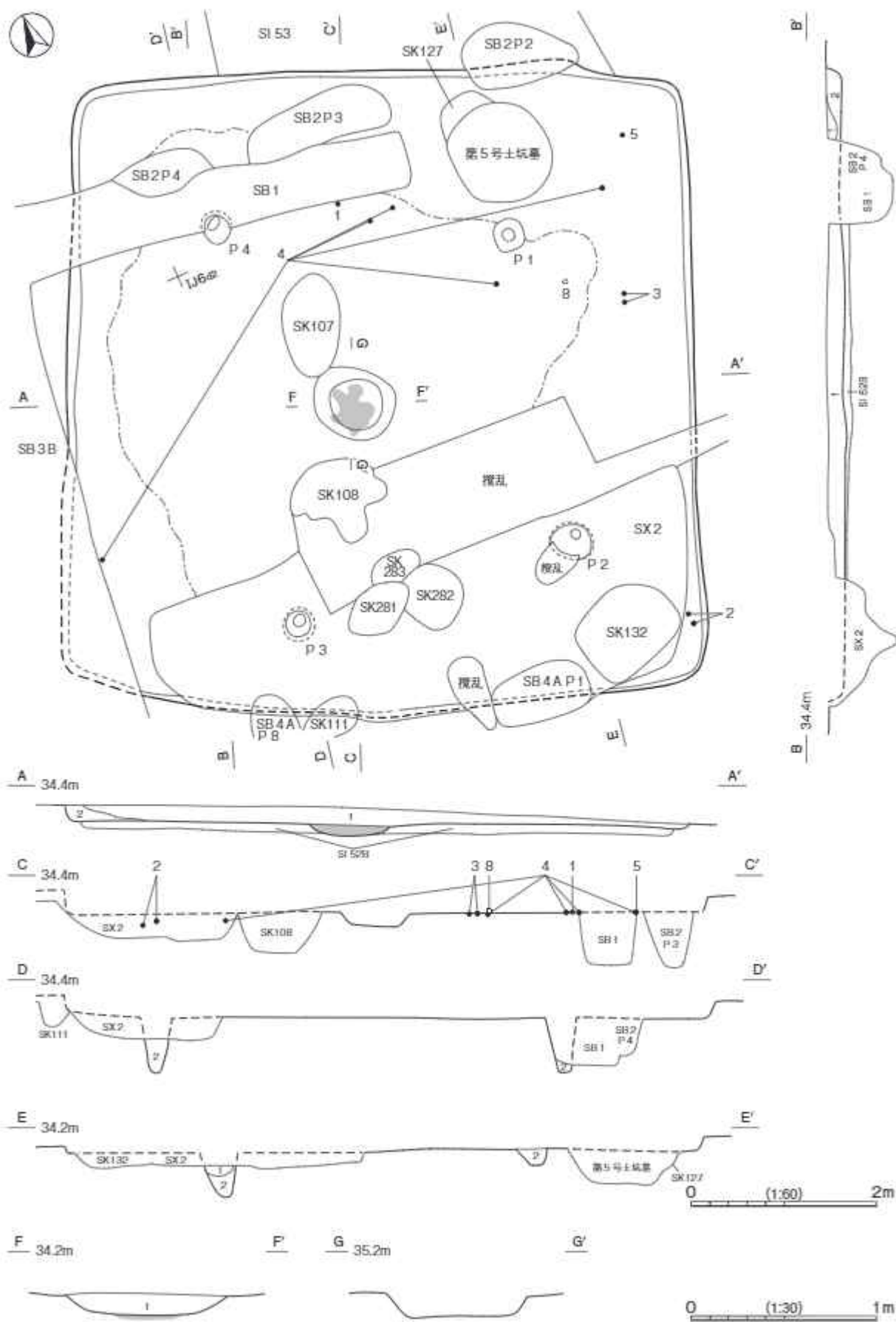
炉 中央部に位置している。長径90cm、短径75cmの楕円形で、深さ10cmの地床炉である。断面は皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。

ピット 4か所。P1～P4は深さ16～60cmで、不規則ではあるが、支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含み、締まりが弱いことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片181点(埴1、埴7、高坏8、甕4、甕158、甕1、ミニチュア土器2)、焼成粘土塊11点が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、弥生土器片218点、土製品1点、石器3点、金属製品1点が出土している。土師器片は、主に炉の周辺や北東部の覆土下層から中層にかけて出土している。1は北部、5は北東部の覆土下層から、2は南東部、3・8は東部の床面から、それぞれ出土している。4は南西部と北東部の床面から出土した破片が接合している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第141图 第52A号竖穴建物跡实测图

土器解説

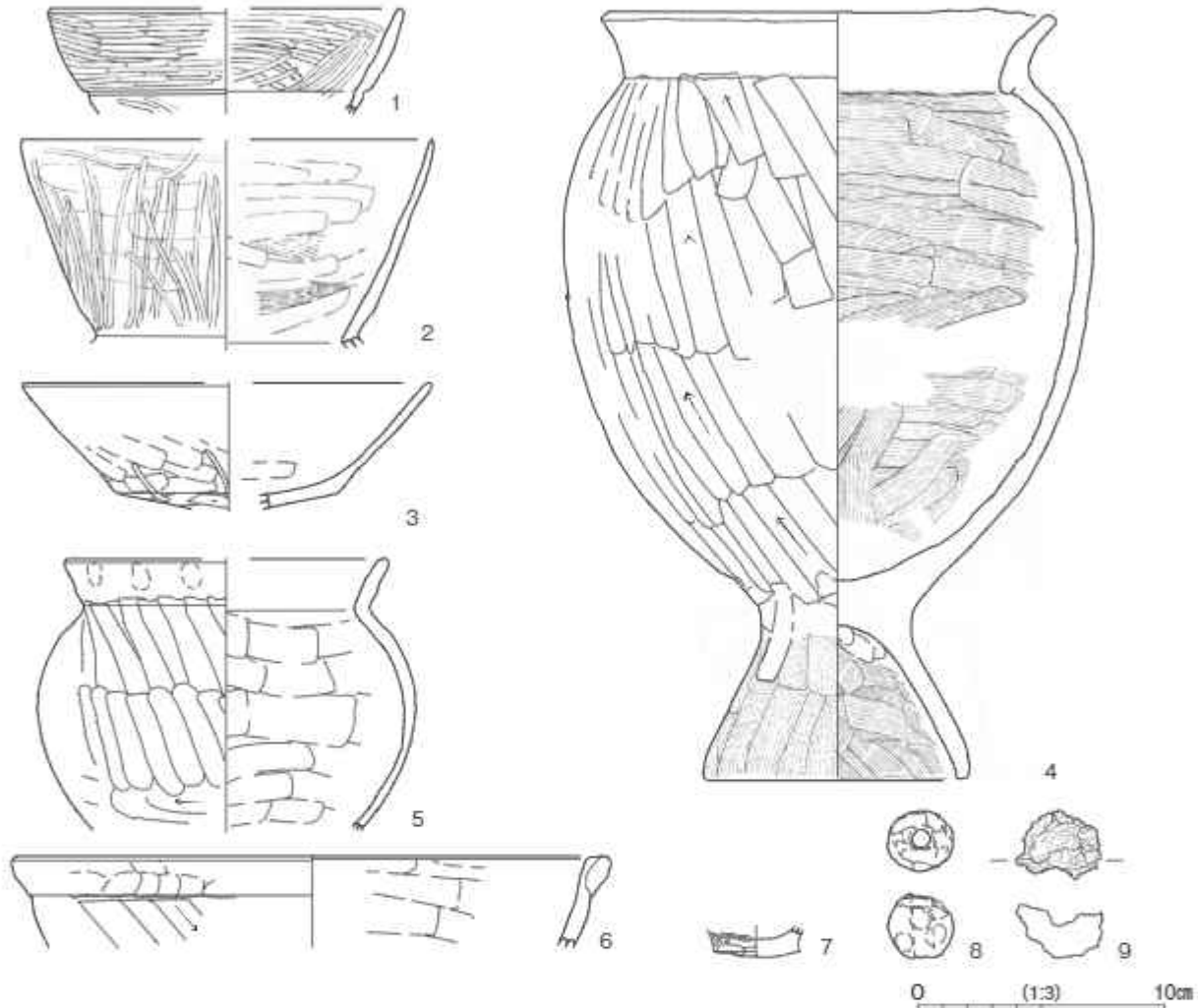
- 1 10YR23/4 暗褐色 口-A小口-紋A、横土紋D、炭化粒D/粘B、粘C
 2 10YR23/3 暗褐色 口-A小口-紋A、横土紋D、炭化粒D/粘B、粘C

灰土器解説

- 1 10YR23/4 暗褐色 口-A小口-紋A、横土小C-紋B、炭化物D-紋D/粘B、粘C

ビット土器解説 (各ビット共通)

- 1 10YR23/3 暗褐色 口-A中口-小C-紋C、横土紋D/粘B、粘C
 2 10YR23/4 暗褐色 口-A小口-紋B、横土紋D、炭化粒D/粘B、粘C



第142図 第52A号竖穴建物跡出土遺物実測図

第77表 第52A号竖穴建物跡出土遺物一覧 (第142図)

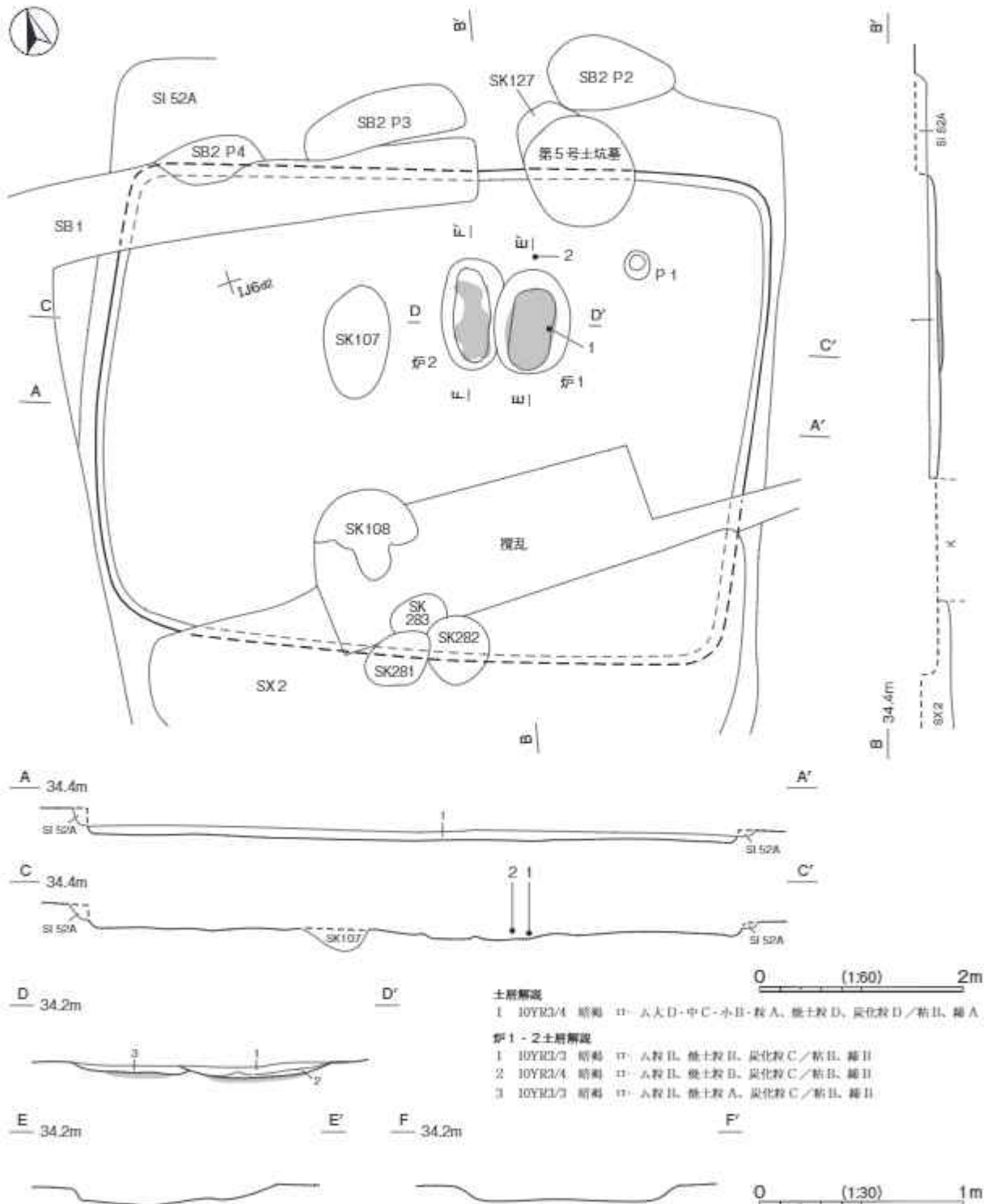
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	[14.0]	(4.3)		長石・石英・白色粒子	褐色	普通	口縁部内外面ヘラ磨き 体部ヘラナゲ後ヘラ磨き	覆上下層	5%
2	土師器	埴	[16.6]	(8.4)		長石・石英・雲母・白色粒子	褐色	普通	口縁部外面ヘラナゲ後ヘラ磨き 内面ハケ目後ヘラナゲ	体面	5%
3	土師器	高杯	[16.2]	(5.0)		長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部内外面ヘラナゲ 外面粗いヘラ磨き 底部外面ヘラ削り	体面	5%
4	土師器	台付甕	17.7	(31.3)	10.4	長石・石英・白色粒子	明褐色	普通	口縁部内外面ナゲ 体部外面ヘラ削り 内面ハケ目 台部外面ハケ目後一部ナゲ 内面ハケ目後一部ナゲ	体面	70% PL29
5	土師器	甕	[12.8]	(11.0)		長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	口縁部内外面ナゲ 裾頭痕 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナゲ	覆上下層	30% PL29
6	土師器	甕	23.8	(3.7)		長石・石英・白色粒子	褐色	普通	口縁部内外面ヘラ磨き 体部ヘラナゲ後ヘラ磨き	覆上	5%
7	土師器	ミニナゲ土器		(1.3)	3.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐色	普通	体部下部ナゲ ヘラ上具痕 底部内外面ナゲ	覆上	5%
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
8	土玉	2.65	2.45	0.7	14.99	長石・石英・雲母・白色粒子	灰褐色	一方からの穿孔 孔端未調整 ヘラナゲ 裾頭痕	体面	PL29	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考		
9	輪形鉄	(3.5)	(2.8)	(2.2)	(9.44)	鉄	一部発錆 全面錆化 着磁なし	覆上			

第 52B 号竖穴建物跡 (第 143・144 図 第 78 表)

位置 調査区東部の I J 6 d2 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 52A 号竖穴建物、第 1・2 号掘立柱建物、第 107・108・281～283 号土坑、第 5 号土坑墓、第 2 号不明遺構に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は長軸 6.40 m、短軸 4.65 m の隅丸長方形で、主軸方向は N-65°-W である。壁は高さ 8～10 cm で、外傾している。



第 143 図 第 52 B 号竖穴建物跡実測図

床 ほは平坦で、硬化はしていない。

炉 2か所。炉1は中央部やや北東寄りに位置している。長径105cm、短径76cmの楕円形で、深さ7cmの地床がである。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。炉2は炉1の西側で重複している。長径104cm、短径60cmの楕円形で、深さ6cmの地床がである。断面は皿状を呈しており、炉床面は赤変硬化している。重複関係から炉2が古く、炉1が新しい。

ピット P1は深さ53cmで、性格は不明である。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片40点(壺2、甕37、ミニチュア土器1)、焼成粘土塊1点が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片23点、石器1点が出土している。土師器片は炉の覆土中や周辺の床面から出土している。1は炉1の覆土中層から、2は炉1北側の床面から、それぞれ出土している。また、焼成粘土塊は覆土下層から出土している。

所見 本跡は、第52A号竪穴建物跡の床下から確認したため、第52A号竪穴建物の建替え(拡張)する前の竪穴建物と判断した。時期は、第52A号竪穴建物跡と同じ4世紀後葉と考えられる。



第144図 第52B号竪穴建物跡出土遺物実測図

第78表 第52B号竪穴建物跡出土遺物一覧(第144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺	[105]	(30)		長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい赤褐色	普通	坏部外面ヘラナア 内面ハケ目後ヘラナア	炉1覆土中層	5%
2	土師器	付付索		(50)	[124]	長石・石英・白色粒子	赤褐色	普通	脚部外面ハケ目 内面ヘラナア	床面	5%

第54号竪穴建物跡(第145・146図 第79表 PL10・39・40)

位置 調査区東部のI J 6e4区、標高33mの台地緩傾斜面に位置している。

重複関係 第119・122・144～146・152号土坑、第15号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.20m、短軸4.15mの方形で、主軸方向はN-37°-Wである。壁は高さ8～29cmで、ほは直立している。

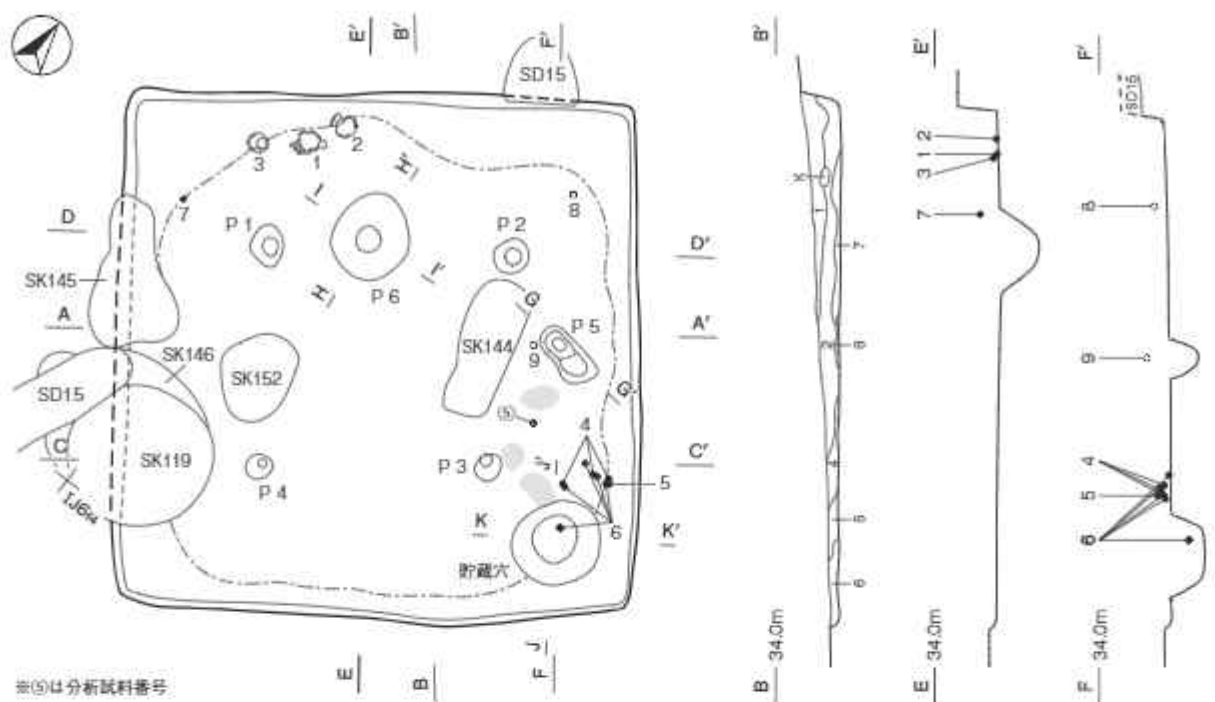
床 平坦で、壁際を除いて硬化している。

ピット 6か所。P1～P4は深さ12～46cmで、配置と規模から主柱穴と考えられる。P5は深さ18cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。柱はいずれも抜き取られている。P6は中央部北西寄りに位置し、長径70cm、短径60cmの楕円形で、深さ37cmほどである。断面は楕円状を呈しており、覆土中に焼土と炭化物を含むが、火床面は確認できなかったことから、炉とは断定できなかった。

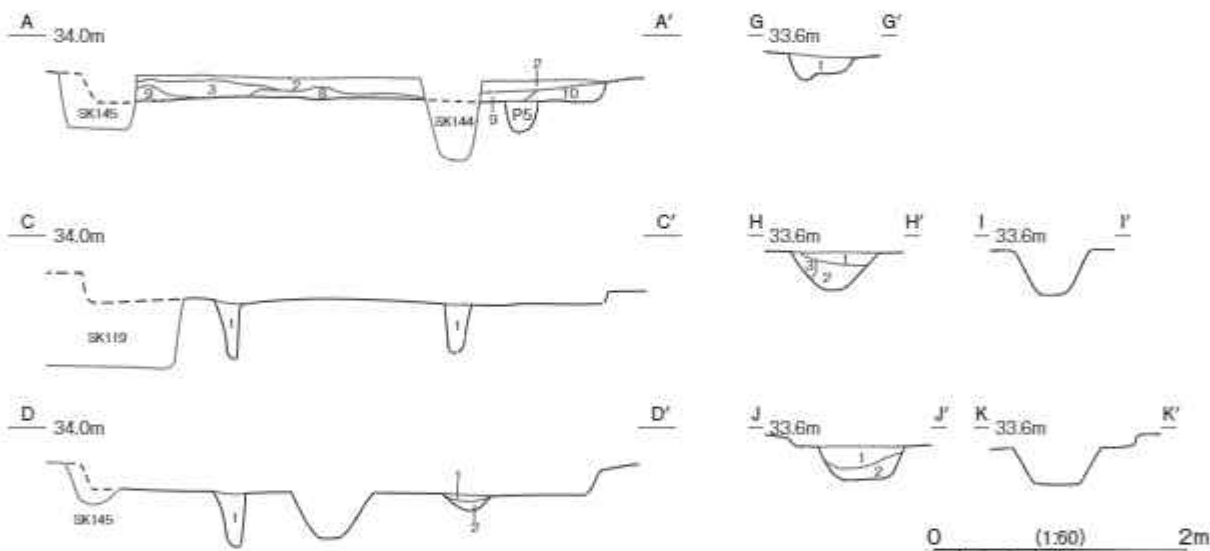
貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径68cm、短径66cmの円形で、深さ30cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

覆土 10層に分層できる。ロームブロックを含むことや不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片254点(埴1、埴2、器台7、高坏12、壺11、甕220、ミニチュア土器1)、土製品3点(土玉)、石器2点(凝灰岩製砥石、軽石製不明製品)が出土している。ほかに混入した弥生土器片96点、陶器片1点、瓦質土器片2点、焼成粘土塊4点、瓦2点が出土している。土師器片は、主に北部と貯蔵穴周辺の床面から覆土下層にかけて出土している。1・2は北西壁付近、4は南東部の床面から、3は北西壁付近、5は南



※⑨は分析試料番号



土層解説

- | | | |
|---|-------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR2/3 暗褐色 | ロ・ム小C・粒C/粘B, 雑B |
| 2 | 10YR2/2 黒褐色 | ロ・ム小C・粒C, 焼土粒C, 炭化粒D/粘B, 雑B |
| 3 | 10YR4/3 灰褐色 | ロ・ム小C・粒B/粘B, 雑B |
| 4 | 10YR1/4 暗褐色 | ロ・ム小B・粒A, 焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 雑B |
| 5 | 10YR4/3 灰褐色 | ロ・ム小B・粒A/粘B, 雑B |

ピット土層解説 (各ピット共通)

- | | | |
|---|-------------|--------------------------|
| 1 | 10YR2/4 暗褐色 | ロ・ム小C・粒B/粘B, 雑B |
| 2 | 10YR4/4 褐色 | ロ・ム小B・粒A/粘B, 雑B |
| 3 | 10YR4/3 灰褐色 | ロ・ム粒C, 焼土粒D, 炭化粒D/粘B, 雑B |

- | | | |
|----|-------------|-----------------------------|
| 6 | 10YR4/4 褐色 | ロ・ム粒A/粘B, 雑B |
| 7 | 10YR4/6 褐色 | ロ・ム小D・粒A/粘B, 雑B |
| 8 | 10YR1/3 暗褐色 | ロ・ム小C・粒B, 炭化粒D/粘B, 雑B |
| 9 | 10YR2/3 黒褐色 | ロ・ム小B・粒A, 焼土粒C, 炭化粒C/粘B, 雑B |
| 10 | 10YR4/6 褐色 | ロ・ム小B・粒A, 炭化粒D/粘B, 雑B |

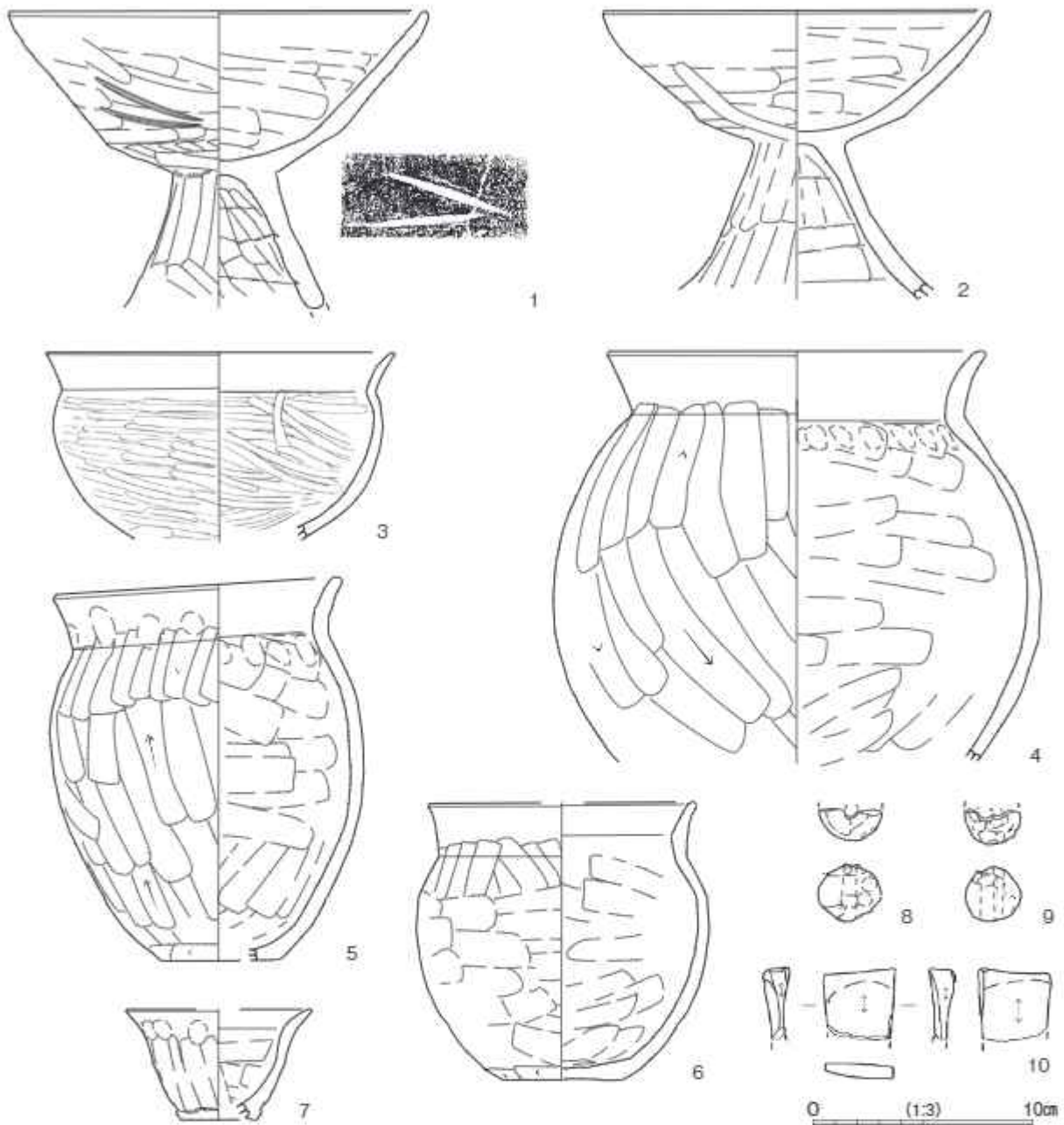
貯蔵穴土層解説

- | | | |
|---|-------------|--------------------------------|
| 1 | 10YR4/3 灰褐色 | ロ・ム小B・粒A, 焼土小D・粒C, 炭化粒C/粘B, 雑B |
| 2 | 10YR4/4 褐色 | ロ・ム中D・小D・粒A/粘B, 雑B |

第145図 第54号竪穴建物跡実測図

東部の覆土下層から、7は西部、8は北部、9は東部の覆土中層から、それぞれ出土している。6は貯蔵穴の覆土下層とその周辺の床面から出土した土器片が接合している。南東部の床面では、3か所の焼土範囲を確認した。床面は焼けていないことから、埋め戻しに伴って廃棄した可能性がある。北東部の床面からは、少量の炭化物が出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。出土した炭化物は、樹種同定の結果、カエア属であった(付章参照)。



第146図 第54号竪穴建物跡出土遺物実測図

第79表 第54号竪穴建物跡出土遺物一覽(第146図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高杯	18.8	(132)		長石・石英・ 炭母・黒色粒子	にぶい褐色	普通	坏部内外面ヘラナダ 脚部内外面ヘラナダ 坏部外面に刃研痕2か所	床面	90% PL40
2	土師器	高杯	17.4	(132)		長石・石英・ 炭母・赤色粒子	褐色	普通	坏部内外面ヘラナダ 脚部内外面ヘラナダ	床面	90% PL40
3	土師器	鉢	15.2	(85)		長石・石英・ 炭母・白色粒子	黒褐色	普通	口縁部内外面ナダ 体部内外面ヘラ磨き	礎土下層	10%
4	土師器	甕	16.8	(188)		長石・石英・ 炭母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部内外面ナダ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナダ 指痕痕	床面	30% PL40
5	土師器	甕	12.6	17.4	15.3	長石・石英・ 白色粒子	褐色	普通	口縁部内外面ナダ 指痕痕 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナダ 底部ヘラ削り	礎土下層	50% PL40
6	土師器	甕	112.0	12.6	15.4	長石・石英・ 白色粒子	灰褐色	普通	口縁部内外面ナダ 体部外面ヘラ削り後横方向 のヘラナダ 内面ヘラナダ	竪穴 床面 礎土下層	30% PL40
7	土師器	ミニチュア 土器	18.4	5.0	13.6	長石・石英・ 白色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部内外ナダ 指痕痕 体部内外面ヘラナダ	礎土中層	5%
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考	
8	土玉	(29)	27	0.7	(7.86)	長石・石英	にぶい黄褐色	一方向からの穿孔 ヘラナダ 指痕痕	礎土中層		
9	土玉	(25)	25	0.5	(7.51)	長石・石英・ 黒色粒子	にぶい黄褐色	一方向からの穿孔 ヘラナダ 指痕痕	礎土中層		

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
10	砥石	(8.7)	(6.6)	(4.4)	(233.3)	凝灰岩	研磨面4面 一部欠損	墓土	PL29

第57号竪穴建物跡 (第147～149図 第80表 PL10・11・40)

位置 調査区南部の1J5h0区、標高34mほどの緩傾斜面に位置している。

重複関係 第171号土坑、第1号道路に掘り込まれている。

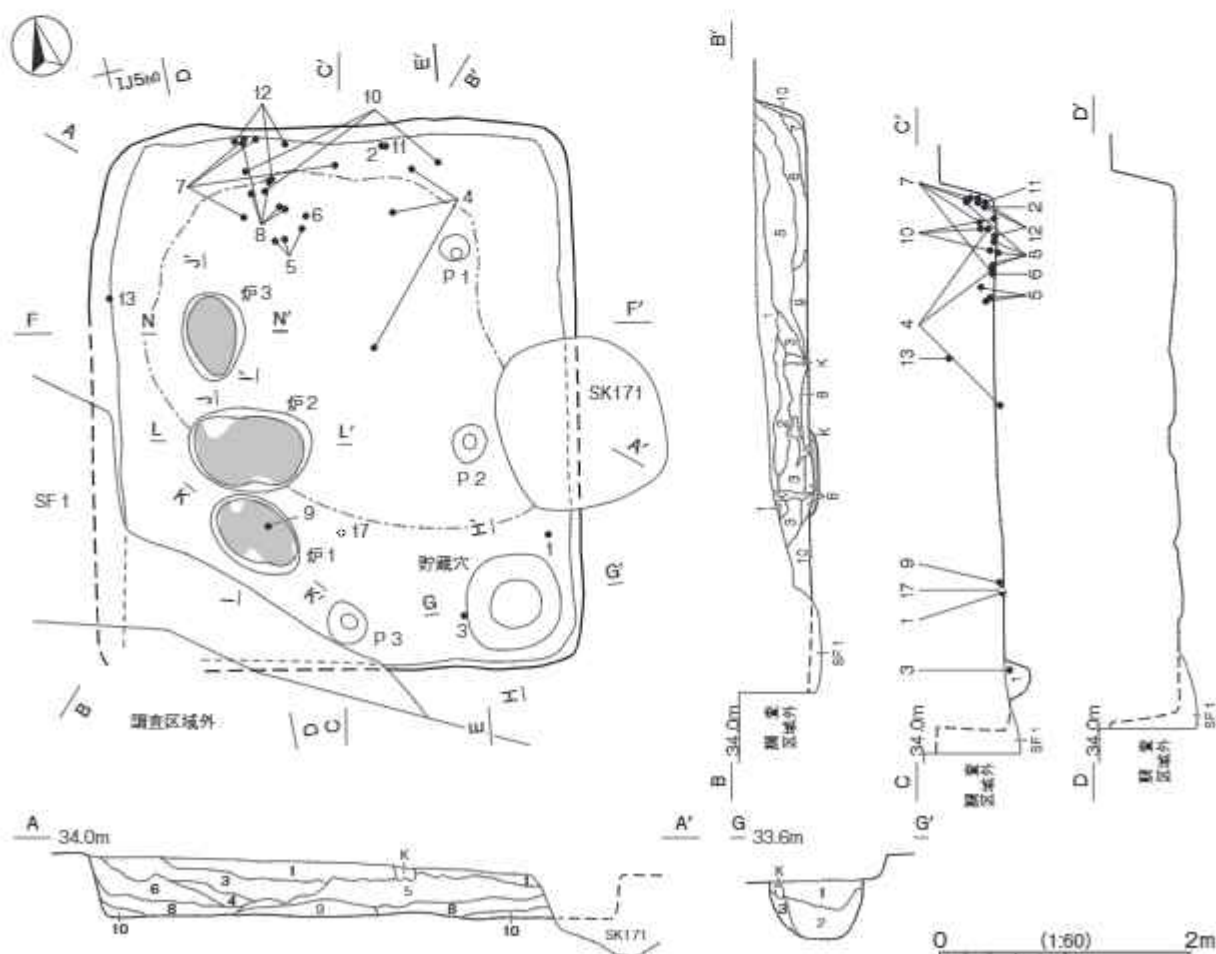
規模と形状 長軸4.35m、短軸3.86mの隅丸方形で、主軸方向はN-13°-Eである。壁は高さ40～46cmで、外傾している。

床 平坦で、壁際を除いて硬化している。

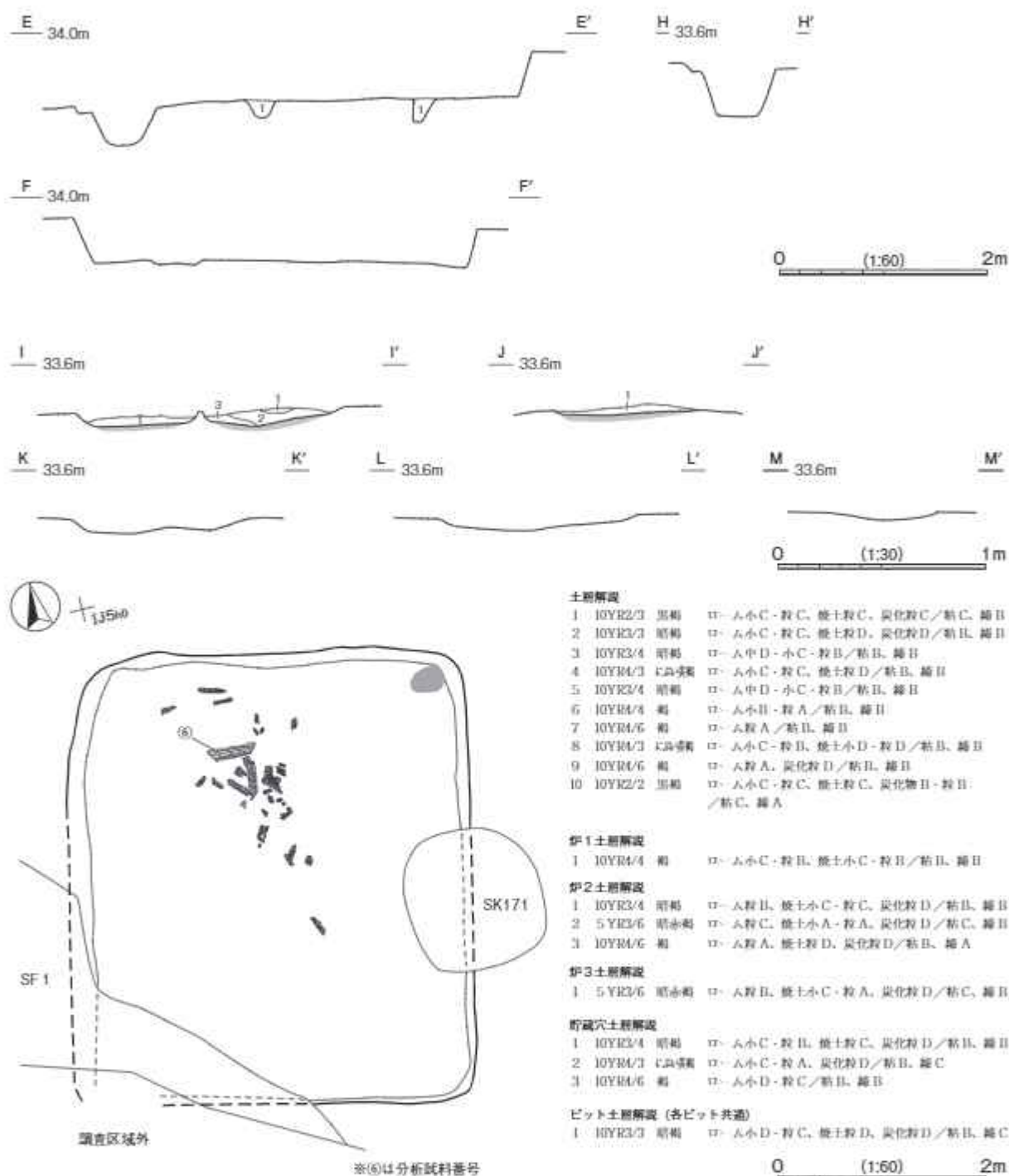
炉 3か所。か1は、中央部南西寄りに位置している。長径80cm、短径53cmの楕円形で、深さ7cmほどの地床かである。か2は、中央部西寄りに位置している。長径94cm、短径66cmの楕円形で、深さ7cmほどの地床かである。か3は、中央部北西寄りに位置している。長径68cm、短径47cmの楕円形で、深さ4cmほどの地床かである。いずれの断面も皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。新旧関係は不明である。

ピット 3か所。P1・P2は深さ22cm・16cmで、配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ20cmで、南壁際中央に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長軸75cm、短軸73cmの隅丸方形で、深さは47cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土はロームブロックをやや多く含み、不自然な堆積状況から、人為堆積である。



第147図 第57号竪穴建物跡実測図(1)



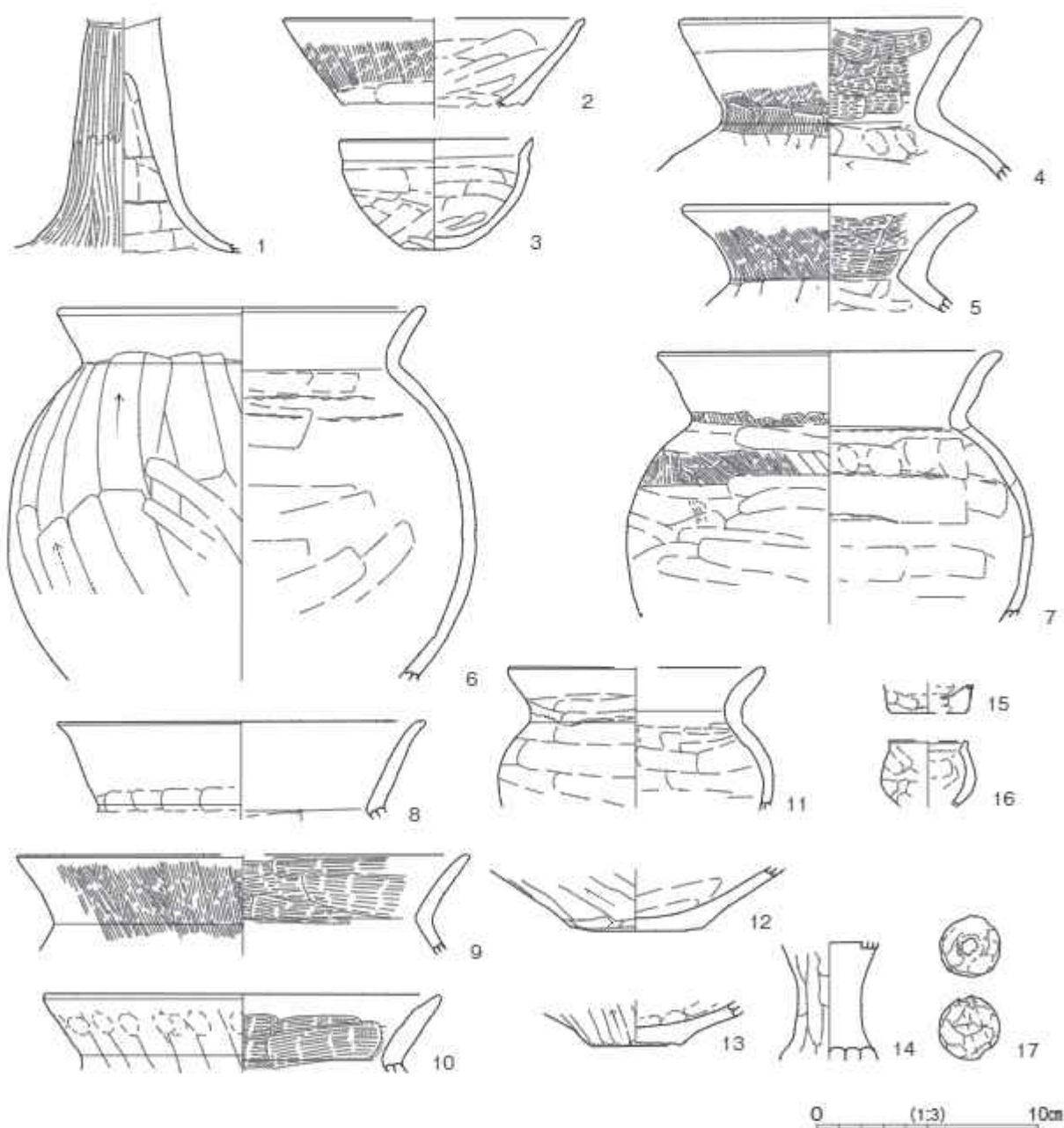
第148図 第57号竪穴建物跡実測図(2)

覆土 10層に分層できる。第1層は黒色土でローム粒子を均質に含むことから、自然堆積である。第2～10層はロームブロックを多く含み、不自然な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片967点(椀2、埴11、器台1、高坏12、壺32、甕904、ミニチュア土器5)、土製品17点(土玉1、支脚3、不明土製品13)、焼成粘土塊5点が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、弥生土器片235点が出土している。土師器片は、北壁際寄りの床面から覆土下層にかけてまとまって出土している。口縁部の破片から推定10個体分以上の甕が出土している。1・3は南東部の貯蔵穴周辺、6は北壁際寄り、17は中央部南寄りの床面から、2・11は北部の覆土下層から、9は伊1の覆土下層から、13は西壁際の覆土

上層から、それぞれ出土している。4は北壁寄りと中央部の床面から、5・7・8・10・12は、北部の床面と覆土下層から出土した土器片が接合している。14～16は覆土中から出土している。焼成粘土塊は床面に近い覆土下層から散在した状態で出土している。中央部から北部の床面から覆土下層にかけて炭化材が出土している。北東コーナー部の床面から焼土塊を確認したが、床面に被熱痕跡は確認できなかった。

所見 本跡は、埋め戻しの際に炭化材や焼土とともに、甕や土製支脚も一括廃棄されたものと考えられる。時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。出土した炭化材は、樹種同定の結果、クワ属であった(付章参照)。



第149図 第57号竪穴建物跡出土遺物実測図

第80表 第57号竪穴建物跡出土遺物一覧(第149図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏		(10.6)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	脚部外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ	覆土下層	5%
2	土師器	壺	[13.4]	(4.0)		長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	坏部外面ハケ目後ナデ 内面ヘラナデ	床面	10%
3	土師器	鉢	8.7	5.0	2.8	長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部内外面ナデ 体部内外面ヘラナデ 底部ヘラ削り	床面	5%
4	土師器	壺	13.1	(7.4)		長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目 頸部ハケ目後ナデ 脚部外面ヘラ削り 内面エツ削り後ナデ 指頭痕	床面	5%
5	土師器	壺	13.4	(4.9)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外面ハケ目後ナデ 内面ハケ目 体部ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面～覆土下層	15%
6	土師器	甕	16.0	(16.9)		長石・石英・雲母・白色粒子	浅黄橙	普通	口縁部内外面ナデ 体部外面ヘラ削り後一部ヘラナデ 内面ヘラナデ	床面	40% PL40
7	土師器	甕	15.2	12.3		長石・石英・雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部内外面ナデ 体部外面ハケ目後横方向のヘラナデ 内面ヘラナデ 指頭痕	床面～覆土下層	30% PL40
8	土師器	甕	16.6	(4.4)		長石・石英・白色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面ナデ 頸部外面ナデ 体部内面ヘラナデ	床面～覆土下層	10%
9	土師器	甕	[20.2]	(4.6)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい黄褐	普通	口縁部外面ハケ目後ナデ 内面ハケ目	覆土下層	5%
10	土師器	甕	17.8	(3.5)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外面ハケ目 指頭痕 内面ハケ目	床面～覆土下層	5%
11	土師器	甕	[11.5]	(6.7)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面ナデ 体部内外面ヘラナデ	覆土下層	5%
12	土師器	甕		(2.85)	16.0	長石・石英・雲母・白色粒子	褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ 底部ヘラ削り	床面～覆土下層	10%
13	土師器	甕		(2.0)	14.2	長石・石英・雲母・白色粒子	赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ナデ 底部ヘラ削り	覆土下層	10%
14	土師器	ミニチュア土器		(5.3)		長石・石英・雲母・白色粒子	暗褐	普通	白堊。脚部外面ナデ	覆土	20%
15	土師器	ミニチュア土器		(1.3)	13.4	長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐	普通	瓶頸。体部外面ナデ 内面ナデ 底部ナデ	覆土	20%
16	土師器	ミニチュア土器	[3.6]	(3.0)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい黄褐	普通	口縁部内外面指つまみ成形 体部内外面ナデ	覆土	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
17	土玉	27	29	0.7	(18.20)	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	片側からの穿孔。ヘラナデ 指頭痕	床面	50%

第59号竪穴建物跡(第150・151図 第81表 PL41)

位置 調査区南西部のI J 5 g5区、標高34 mほどの台地緩傾斜面に位置している。

重複関係 第62号竪穴建物跡を掘り込み、第7号墳に掘り込まれている。

規模と形状 北部から西部にかけて、ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、東西軸5.02 m、南北軸4.70 mである。平面形は方形もしくは長方形と推測できる。主軸方向はN-12°-Eである。壁は高さ16～36 cmで、外傾している。

床 はほぼ平坦であるが、南部に向かって低くなり、東壁に向かって緩やかに高くなっている。壁際を除き硬化している。

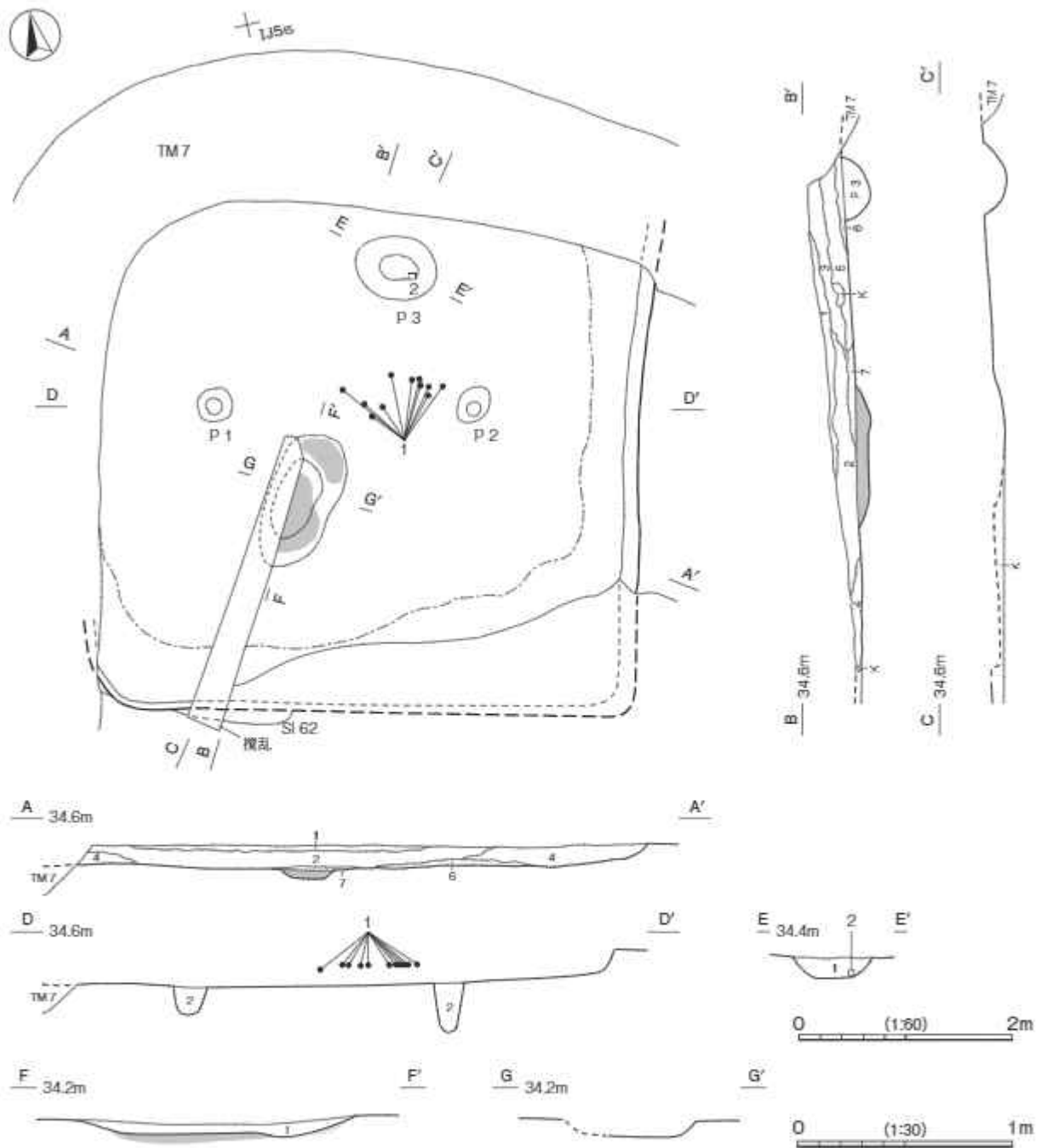
炉 中央部南西寄りに位置している。長径128 cm、短径83 cmの楕円形で、深さ10 cmの地床かである。断面は皿状を呈している。か床面は赤変硬化している。

ピット 3か所。P1・P2は深さ24 cm・46 cmで、配置と規模から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。P3は長径73 cm、短径58 cm、深さ22 cmの楕円形で、性格は不明である。ピット内からは大形の砥石が出土しており、足場穴の可能性がある。

覆土 7層に分層できる。第1～6層は周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第7層はかの上部に堆積している焼土ブロックや焼土粒子を多く含む暗褐色土で、かの関連が強く認められる。不自然な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片183点(埴3、高坏1、壺4、甕175)、石器2点(砂岩製砥石)が出土している。ほかに混入した弥生土器片486点、石器2点が出土している。1は中央部の覆土中層から出土した破片が接合している。2はP3の底面から出土している。出土した弥生土器片は細片や磨滅したものが多く、遺構が傾斜面の上位に位置することから、流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



土器解説

- 1 10YR23/4 暗褐色 コーラム小C-紋C、焼土紋D/粘B、縹A
- 2 10YR23/3 暗褐色 コーラム小C-紋B、焼土小D-紋C、炭化紋D/粘B、縹B
- 3 10YR23/2 暗褐色 コーラム小C-紋B、焼土紋D/粘B、縹B

- 4 10YR4/6 褐色 コーラム紋A/粘B、縹B
- 5 10YR23/3 暗褐色 コーラム小C-紋B/粘B、縹B
- 6 10YR23/4 暗褐色 コーラム小B-紋B/粘B、縹B
- 7 5YR23/6 暗褐色 コーラム小D-紋C、焼土小C-紋B/粘C、縹B

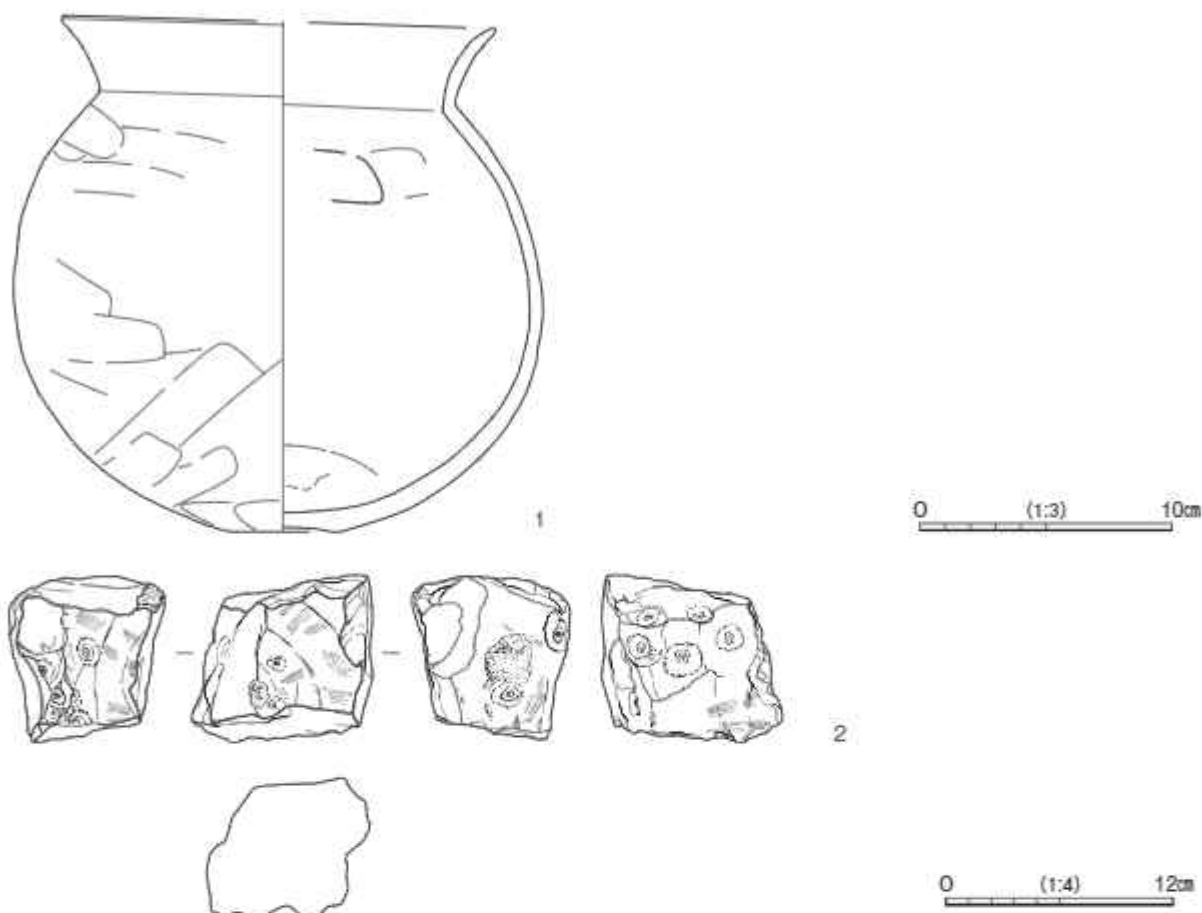
炉土器解説

- 1 5YR23/3 暗赤褐色 コーラム小C-紋B、焼土紋B/粘B、縹B

ピット土器解説 (表ピット共通)

- 1 10YR23/3 暗褐色 コーラム小C-紋B、焼土紋C/粘B、縹A
- 2 10YR23/4 暗褐色 コーラム小D-紋C、焼土紋C/粘B、縹B

第150図 第59号竪穴建物跡実測図



第151図 第59号竪穴建物跡出土遺物実測図

第81表 第59号竪穴建物跡出土遺物一覧(第151図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	[17.1]	205	40	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外面摩耗 口縁部内外ナデ 胴部内外ヘラナデ 底部ヘラケズリ	覆土中層	90% PL11
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
2	礫石	14.4	13.1	12.3	255.7	砂岩	三面に磨面	三面に凹み 輪打痕	P3底面	PL11	

第61号竪穴建物跡(第152・153図 第82表 PL11・PL11)

位置 調査区南西部のI J 5c4区、標高34mほどの台地緩傾斜面に位置している。

重複関係 第3号墳に掘り込まれている。

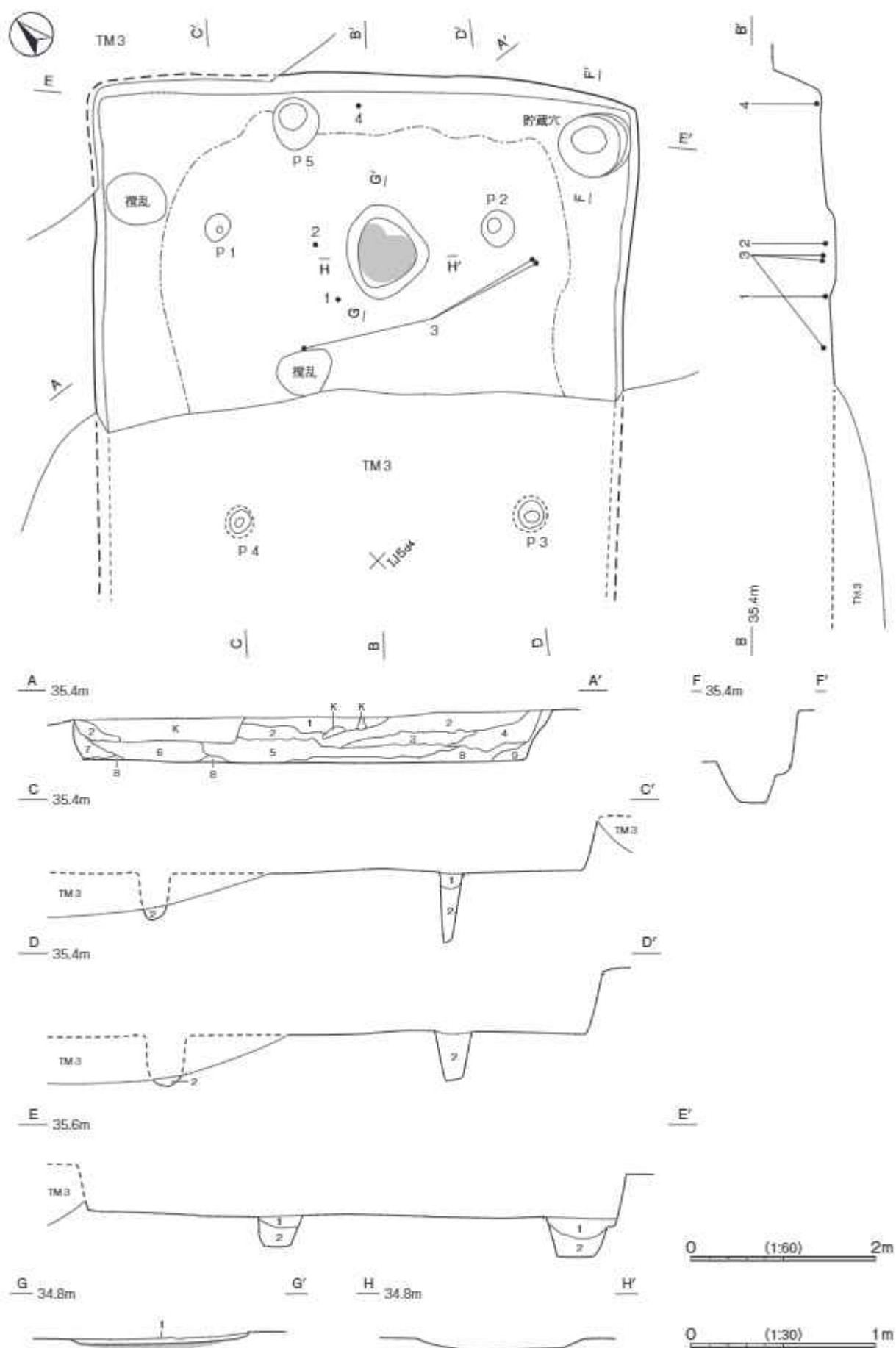
規模と形状 南部から西部にかけて、ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、北東・南西軸3.57m、北西・南東軸で5.80mである。平面形は長方形と推定でき、主軸方向はN-53°-Wである。壁は高さ26~75cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦であるが、かの北東側が高くなっている。壁際を除いて硬化している。

炉 中央部北寄りに位置している。長径102cm、短径79cmの不整楕円形で、深さ6cmの地床かである。断面は皿状を呈している。か床面は僅かに赤変硬化している。

ピット 5か所。P1・P2は深さ76cm・55cm、P3・P4は推定の深さ55cm・52cmで、配置から支柱穴と考えられる。柱はいずれも抜き取られている。P5は深さ34cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径78cm、短径66cmの楕円形で、深さ42cmである。底面は平坦で、



第152图 第61号竖穴建物跡实测图

土層解説

- 1 10YR2/2 黒褐色 ローム小C・粒C、焼土粒D/粘B、細B
- 2 10YR4/6 黒 ローム小D・粒D、焼土粒D/粘C、細B
- 3 10YR3/3 暗褐色 ローム小B・粒A/粘B、細B
- 4 10YR2/4 暗褐色 ローム小A・粒A/粘B、細B
- 5 10YR4/3 黒褐色 ローム小C・粒A、炭化粒D、粘B、細B
- 6 10YR2/4 暗褐色 ローム小B・粒C/粘B、細B

貯蔵穴土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小C・粒B/粘B、細B
- 2 10YR2/3 暗褐色 ローム小B・粒A/粘B、細B

- 7 10YR2/3 暗褐色 ローム小B・粒A/粘B、細B
- 8 10YR4/3 黒褐色 ローム小B・粒A、炭化粒D/粘B、細B
- 9 10YR4/4 黒 ローム小B・粒A/粘B、細B

炉土層解説

- 1 10YR1/4 暗褐色 ローム小C・粒A、焼土小C・粒C、炭化粒C/粘B、細B

ピット土層解説 (各ピット共通)

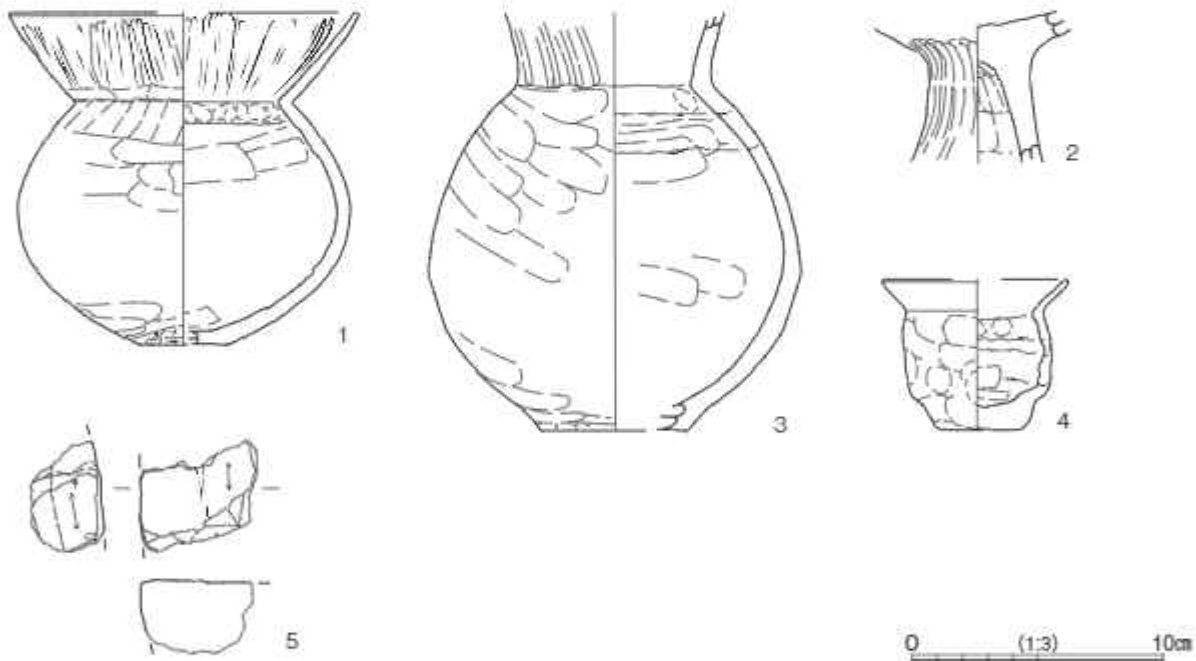
- 1 10YR2/4 暗褐色 ローム小B・粒B、焼土粒D、炭化粒D/粘B、細B
- 2 10YR4/6 黒 ローム中B・小B・粒A/粘B、細B

壁は外傾している。覆土はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

覆土 9層に分層できる。第1・2層は周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第3～6層はロームブロックやローム粒子を多く含むこと、また、第7～9層はロームブロックやローム粒子を主体とした壁際の三角堆積土であるが、特に第8層が不自然に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器片 329点 (埴 11、器台 2、高坏 24、壺 35、甕 256、手捏土器 1)、土製品 1点 (紡錘車)、石器 1点 (砂岩製砥石) が出土している。ほかに混入した縄文土器片 2点、弥生土器片 184点、須恵器片 1点がそれぞれ出土している。遺物は北部の床面から覆土上層にかけて散在した状態で出土している。1・2はが西側の床面から、4は北壁際中央の覆土下層から、それぞれ出土している。3は東部の覆土下層と中央部の覆土下層から出土した破片が接合している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。



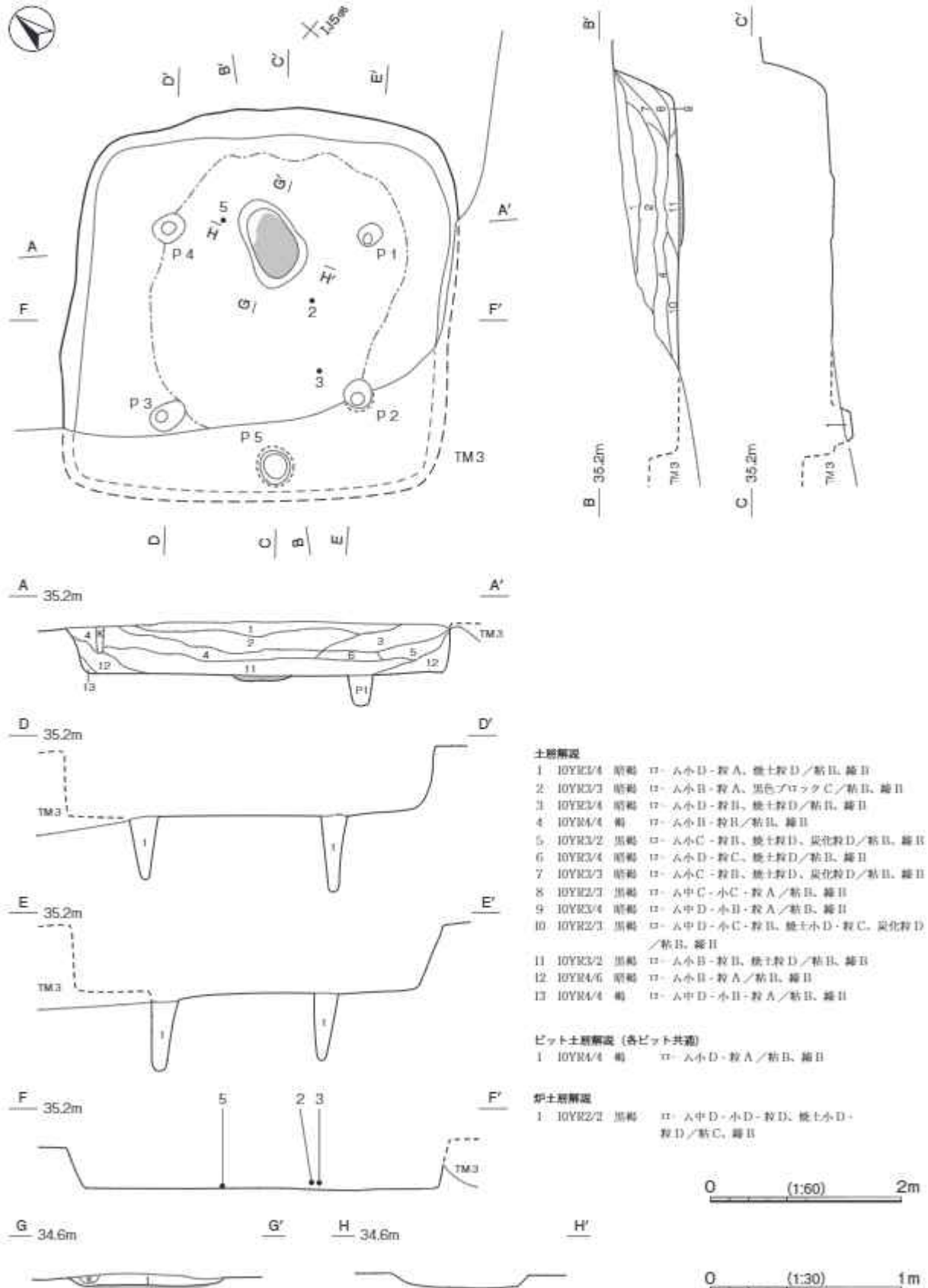
第153図 第61号竪穴建物跡出土遺物実測図

第82表 第61号竪穴建物跡出土遺物一覧 (第153図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	検定	特徴	出土位置	備考
1	土師器	埴	(138)	132	34	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部内外面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ後ヘラツナブ内面ヘラツナブ 粘面痕 底部ヘラケズリ	床面	40%
2	土師器	高坏		(59)		長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐色	普通	外面ヘラツナブ 内面ヘラツナブ 粘ナブ	床面	10%
3	土師器	小型甕		(165)	(155)	長石・石英・雲母・黒色粒子	褐色	普通	口縁部外面ミガキ内面ナブ 体部外面ヘラツナブ・内面ヘラツナブ 粘面痕 底部ヘラツナブ	覆土下層	30%
4	土師器	手捏土器	(7.1)	60	34	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部内外面ナブ 体部外面ヘラツナブ 内面ヘラツナブ 底部ヘラケズリ 粘面痕	覆土下層	30% PL41
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
5	砥石	(45)	(4.4)	(2.9)	(58.23)	砂岩	研磨面2面 破損後被熱痕			覆土	

第 63 号竪穴建物跡 (第 154・155 図 第 83 表 PL11・41)

位置 調査区南部の I J 5 d5 区、標高 35 m ほどの台地緩斜面に位置している。



第 154 図 第 63 号竪穴建物跡実測図

重複関係 第3号墳に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は、北東・南西軸 3.30 m、北西・南東軸 3.88 mで、本来は北東・南西軸約 4.10 mの隅丸方形と推定できる。主軸方向はN-43°-Wである。壁は高さ 50～68cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、壁際を除き硬化している。

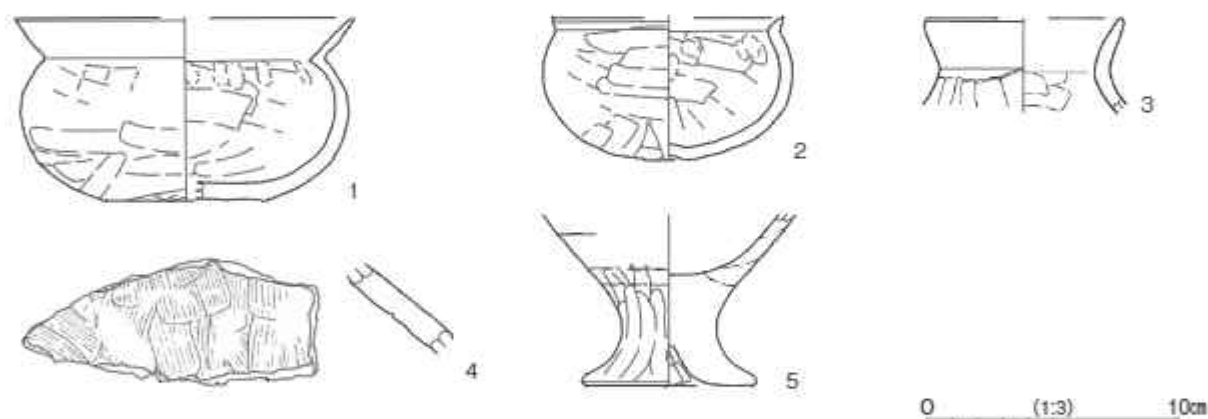
炉 中央部北寄りに位置している。長径 90cm、短径 58cmの楕円形で、深さ 10cmの地床かである。断面は皿状を呈しており、か床面は赤変硬化している。

ピット 5か所。P1～P4は深さ 64～78cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は上半が第3号墳により削平されているため、残存の深さは 10cm程度であるが、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。柱はいずれも抜き取られている。

覆土 13層に分層できる。第1～10層はロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。第11～13層は竪穴建物廃絶後の壁の崩落土で、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 183点（碗2、高坏2、壺4、甕175）、土製品2点（土玉、支脚）、焼成粘土塊2点が出土している。ほかに混入した弥生土器片 89点が出土している。土師器片は主に中央部から東部の床面から覆土下層にかけて散在して出土している。5は炉北側の床面から、2は中央部、3は中央部南寄りの覆土下層から、1・4は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前葉と考えられる。



第155図 第63号竪穴建物跡出土遺物実測図

第83表 第63号竪穴建物跡出土遺物一覧（第155図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	碗	134	(72)	(58)	長石・石英・白色粒子	橙	普通	口縁部ナデ 体部外面へつ削り後へツナデ 内面へツナデ 指環痕	覆土	50% PL41
2	土師器	碗	92	(56)	—	長石・石英・白色粒子	橙	普通	口縁部内外面ナデ 体部内外面へツナデ 指環痕 体部下半へつ削り後へツナデ	覆土下層	5% PL41
3	土師器	壺	[80]	(36)	—	長石・石英・白色粒子	橙	普通	口縁部内外面ナデ 体部外面へつ削り 内面へツナデ	覆土下層	5%
4	土師器	壺	—	(44)	—	長石・石英・白色粒子	明褐色	普通	体部外ハケ目 内面へツナデ	覆土	5%
5	土製品	白形土製品	—	(68)	66	長石・石英・雲母・白色粒子	明褐色	普通	外面へツナデ 内面ナデ	床面	50% PL41

第84表 古墳時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	壁礎	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
								土前火	土前口	土前ト	土前壁	土前礎				
6	115c7	N 60° E	長方形	6.74 × 5.66	22～50	平坦	一部	3			炉2		人為	土師器 焼成粘土層 埴片	4世紀後葉	本跡→SK58-62、 SD6、TM5
7	115a9	N 22° E	[隅丸長方形]	(4.76) × (4.40)	20～28	平坦			1	6	炉1		自然 人為	土師器 土製品 焼成粘土層	5世紀前半	本跡→重石号竪穴 遺構、SK92-94、 SD10-12、 第1号後部遺構
8	115j2	N 20° W	[長方形]	5.45 × (3.87)	18～43	平坦				5			人為	土師器 焼成粘土層	5世紀前半	本跡→SK64
9	116b2	N 0°	[方形-長方形]	(5.42) × (2.70)	8～12	平坦							人為	土師器 焼成粘土層	4世紀中葉	SD10→本跡→ SK30、TM5、SK3
15	116e3	N 3° W	[隅丸長方形]	(5.00) × (3.38)	7～13	平坦		2			炉1		人為	土師器 焼成粘土層	前期	本跡→SK70、 TM5
17	116g2	N 14° E	[方形-長方形]	4.38 × (4.15)	15～30	凹凸					炉1		自然 人為	土師器 石器 焼成粘土層	5世紀前半	SI 21-29-41、 重4号竪穴遺構→本 跡→SK8、SD4-5
18	116b4	N 13° E	台形	5.90 × 5.20	40～56	平坦		4	2		炉1		人為	土師器 土製品 焼成粘土層 金属製品	5世紀中葉	SI 28、第11号竪穴遺 構→本跡→SK1、74、 SD4-5、第2-3号 土坑
19	116d1	N 19° W	[隅丸方形- 隅丸長方形]	4.78 × (3.78)	26～44	平坦			1	2	炉1	1	人為	土師器	4世紀後葉	SD20→本跡→ TM5、SK3
26	115b9	N 9° E	方形	6.02 × 5.66	28～38	平坦	一部	4		2	炉1	2	自然 人為	土師器 石器 石製品 金属製品	5世紀中葉	SI 22-34-25→ 本跡→SK78-80、 SD7、SD1
27	116i2	N 35° E	方形	4.80 × 4.55	2～10	平坦					炉1	1	人為	土師器 土製品 焼成粘土層	4世紀中葉	SI 40→本跡→ SI 39、SK84、SD4
29	116b4	N 13° E	[方形-長方形]	6.55 × (4.92)	25～62	平坦			2	4	炉1	1	自然 人為	土師器	4世紀後葉	SI 30→本跡→ SI 38、SK1、SD4-5、 重2-3号土坑
30	116g4	N 13° E	[方形-長方形]	6.92 × (4.85)	32～48	平坦		3					人為	土師器 土製品 石器 石製品 焼成粘土層	4世紀後葉	重7号竪穴遺構→ 本跡→SI 18-29、 SK73、SD4-5
41	116g2	N 32° W	[隅丸方形] [隅丸長方形]	4.06 × (3.47)	5～28	平坦		4	1		炉1		自然	土師器 石器	5世紀前半	SD21-36、重4号竪穴 遺構→本跡→SI 17- 29、SI 4-5
43	116a3	N 6° E	方形	7.82 × 7.38	22～52	平坦	一部	4	1	3	炉1	1	自然 人為	土師器 土製品 石器 石製品	5世紀中葉	SI 47-49、SK26→ 本跡→SK20-26、SD6、 SD11-12-17
45A	116b3	N 22° E	方形	7.08 × 6.68	10～42	平坦	一部	4	1	1	炉1		自然	土師器 土製品 石器 焼成粘土層	4世紀後葉	SI 431-55→本跡→ SK138-139-143、 TM4
45B	116b3	N 22° E	方形	4.20 × 4.16	2～4	平坦	一部				炉1		不明	土師器 土製品 焼成粘土層	4世紀後葉	SD5→本跡→ SI 6A、SK138- 139-143
46	115d7	N 68° W	[隅丸長方形]	5.92 × (4.27)	32～36	平坦				3			自然 人為	土師器 土製品 焼成粘土層	4世紀後葉	本跡→TM2-3
50	116c4	N 52° W	[方形]	(4.80) × (4.77)	7～8	平坦		3			炉1	1	人為	土師器 土製品 焼成粘土層	4世紀後葉	本跡→SD2、SK100- 103-116-117- 121-124-125-167- 171、SD15
52A	116d2	N 23° E	方形	6.75 × 6.72	5～16	平坦		4			炉1		人為	土師器 焼成粘土層	4世紀後葉	SI 225-25→本跡→ SD1-2-30- 4A、SK107-108-111- 117-122-201-203、 重5号土坑、SK2
52B	116d2	N 65° W	[隅丸長方形]	6.40 × 4.65	8～10	平坦				1	炉2		人為	土師器 焼成粘土層	4世紀後葉	本跡→SK129A、SD1- 3、SK107-108-201- 203、重5号土坑、 SK2
54	116e4	N 37° W	方形	4.20 × 4.15	8～29	平坦		4	1	1	炉1	1	人為	土師器 土製品 石器 焼成粘土層	5世紀前半	本跡→SK119- 122-144-146- 152、SD15
57	115b0	N 13° E	[隅丸方形]	4.35 × 3.86	40～46	平坦		2	1		炉3	1	自然 人為	土師器 土製品 焼成粘土層	5世紀前半	本跡→SK171、 SD1
59	115g5	N 12° E	[方形-長方形]	(5.02) × (4.70)	16～36	平坦		2		1	炉1		自然 人為	土師器 石器	5世紀中葉	SK62→本跡→TM7
61	115c4	N 53° W	[長方形]	5.80 × (3.57)	26～35	平坦		4		1	炉1	1	自然 人為	土師器 土製品 石器 焼成粘土層	5世紀前半	本跡→TM3
63	115d5	N 43° W	[隅丸方形]	3.30 × 3.88	50～68	平坦		4	1		炉1		自然 人為	土師器 土製品 焼成粘土層	5世紀前半	本跡→TM3

(2) 竪穴遺構

第5号竪穴遺構 (第156図 第85表)

位置 調査区南部の115e7区、標高35mほどの台地緩斜面に位置している。

重複関係 第1号道路、第2号墳に掘り込まれている。

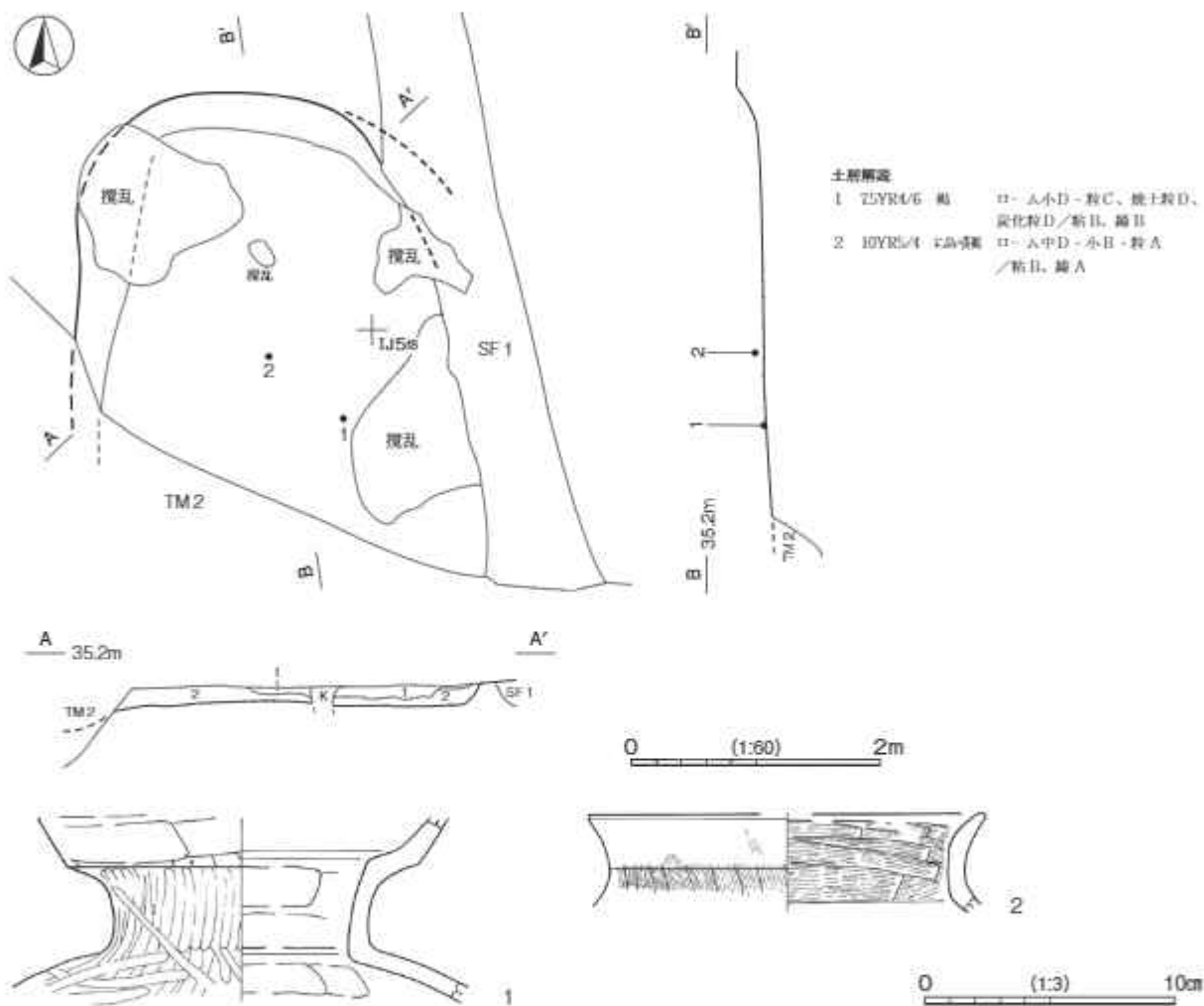
規模と形状 重複と攪乱のため、確認できた規模は、長径3.38m、短径3.00mで、楕円形と推測できる。主軸方向はN-4°-Eと推定できる。壁は高さ8～20cmで、外傾している。

床 南西部に向かって傾斜している。硬化はしていない。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを比較的多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片119点（椀1、埴14、壺29、甕75）が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片19点、石器1点が出土している。土師器片は、覆土中から散在した状態で出土している。特に第1層からハケ目をナデ消した土師器甕と壺の細片が多く出土している。1は南東部の床面から、2は中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。か・柱穴が確認されず、性格は不明である。



第156図 第5号竪穴遺構・出土遺物実測図

第85表 第5号竪穴遺構出土遺物一覧（第156図）

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺		(7.4)		長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	右縁口縁部 口縁部内外ナデ 体部外面ヘラ磨き内面ヘラナデ	床面	20%
2	土師器	壺	[16.0]	(4.0)		長石・石英	褐色	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目	覆土下層	10%

(3) 土坑

第92号土坑（第157図）

位置 調査区中央部のI J 5 b9区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第7号竪穴建物跡・第94号土坑を掘り込み、第1号段切状遺構に掘り込まれている。

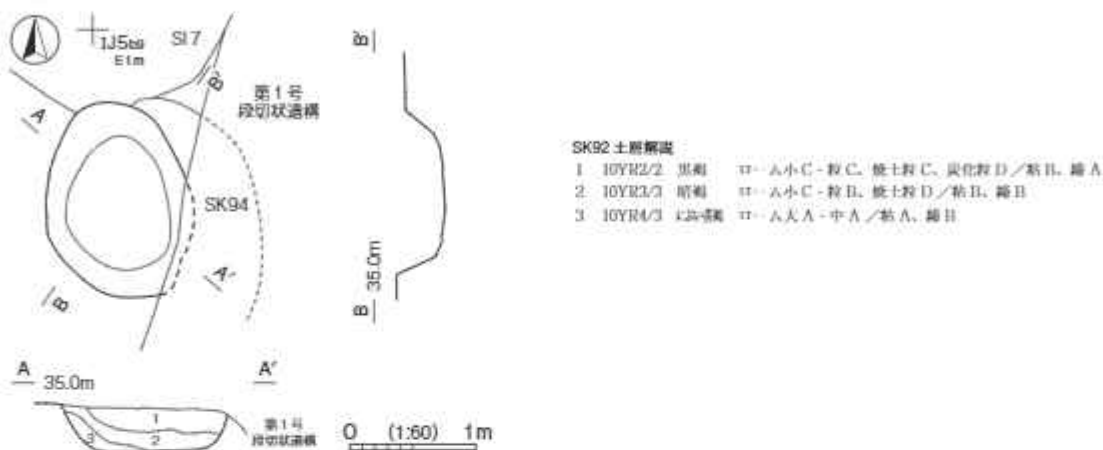
規模と形状 長径154 m、短径118 mの楕円形である。長径方向はN-5°-Wである。深さは34cmで、底

面は平坦である。壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックを含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片24点(高坏1、壺4、甕19)が出土している。ほかに混入した弥生土器片31点が出土している。土師器片は、細片のため図示できないが、輪は内斜口縁で、甕は外面をナデ消されているものが多い。

所見 時期は、出土土器から中期前半と考えられる。



第157図 第92号土坑実測図

第94号土坑(第158図)

位置 調査区中央部のI J 5 b9区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

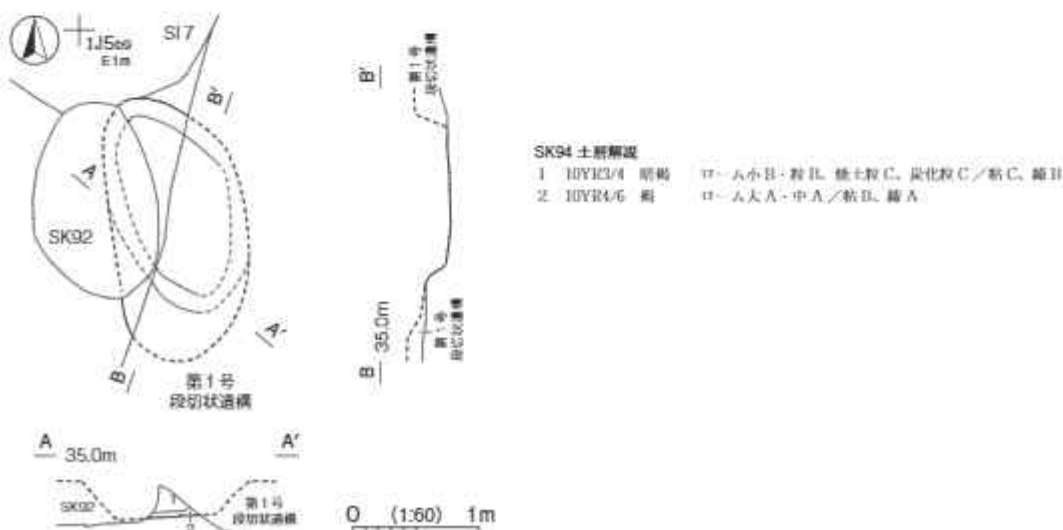
重複関係 第7号竪穴建物跡を掘り込み、第92号土坑、第1号段切状遺構に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため、確認できた規模は、長径1.70m、短径0.59mで、平面形は楕円形と推定できる。長径方向はN-5°-Wである。深さは23cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片11点(甕)が出土している。ほかに混入した弥生土器片17点(広口壺)が出土している。土師器片は、細片のため図示できない。

所見 時期は、中期前半の第7号竪穴建物跡を掘り込み、同時期の第92号土坑に掘り込まれていることから、中期前半と考えられる。



第158図 第94号土坑実測図

第217号土坑 (第159図 第86表 PL47)

位置 調査区南部の1J5c7区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

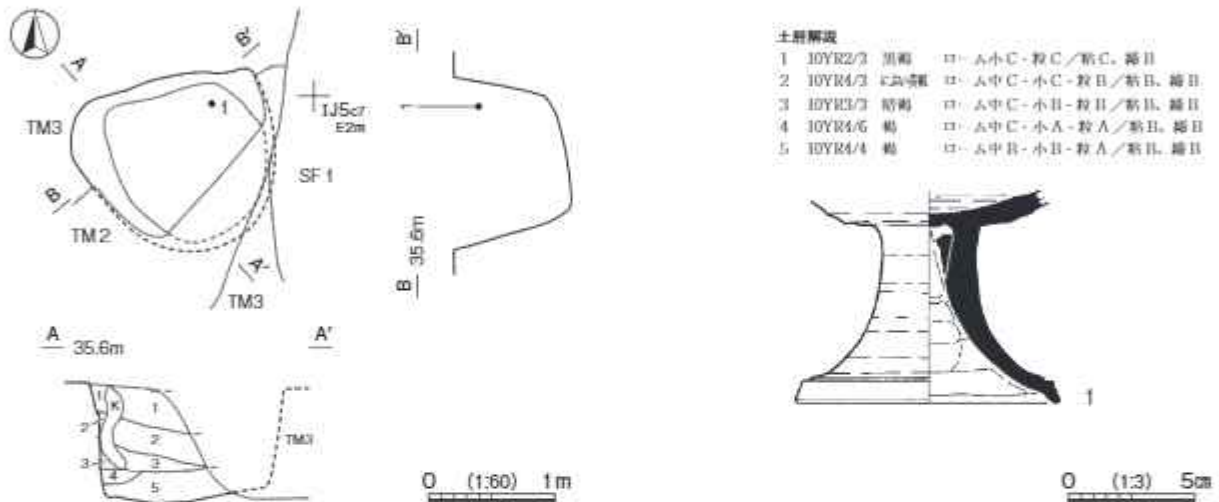
重複関係 第2号墳を掘り込み、第3号墳、第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため、確認できた規模は、長径1.54m、短径1.18mで、平面形は不整形と推定できる。深さは92cmで、底面は南西に向かって傾斜している。壁は外傾している。

覆土 5層に分層できる。各層にローンプロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片30点(高坏3、甕27)須恵器片1点(高坏)が出土している。そのほか混入した弥生土器片45点がそれぞれ出土している。1は北東部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀後半と考える。



第159図 第217号土坑・出土遺物実測図

第86表 第217号土坑出土遺物一覧 (第159図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	検定	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	高坏		(84)	10.3	長石・石英	黄灰	普通	外面ワタリナブ 内面ヘツナブ	覆土上層	50% PL47

第87表 古墳時代土坑一覧

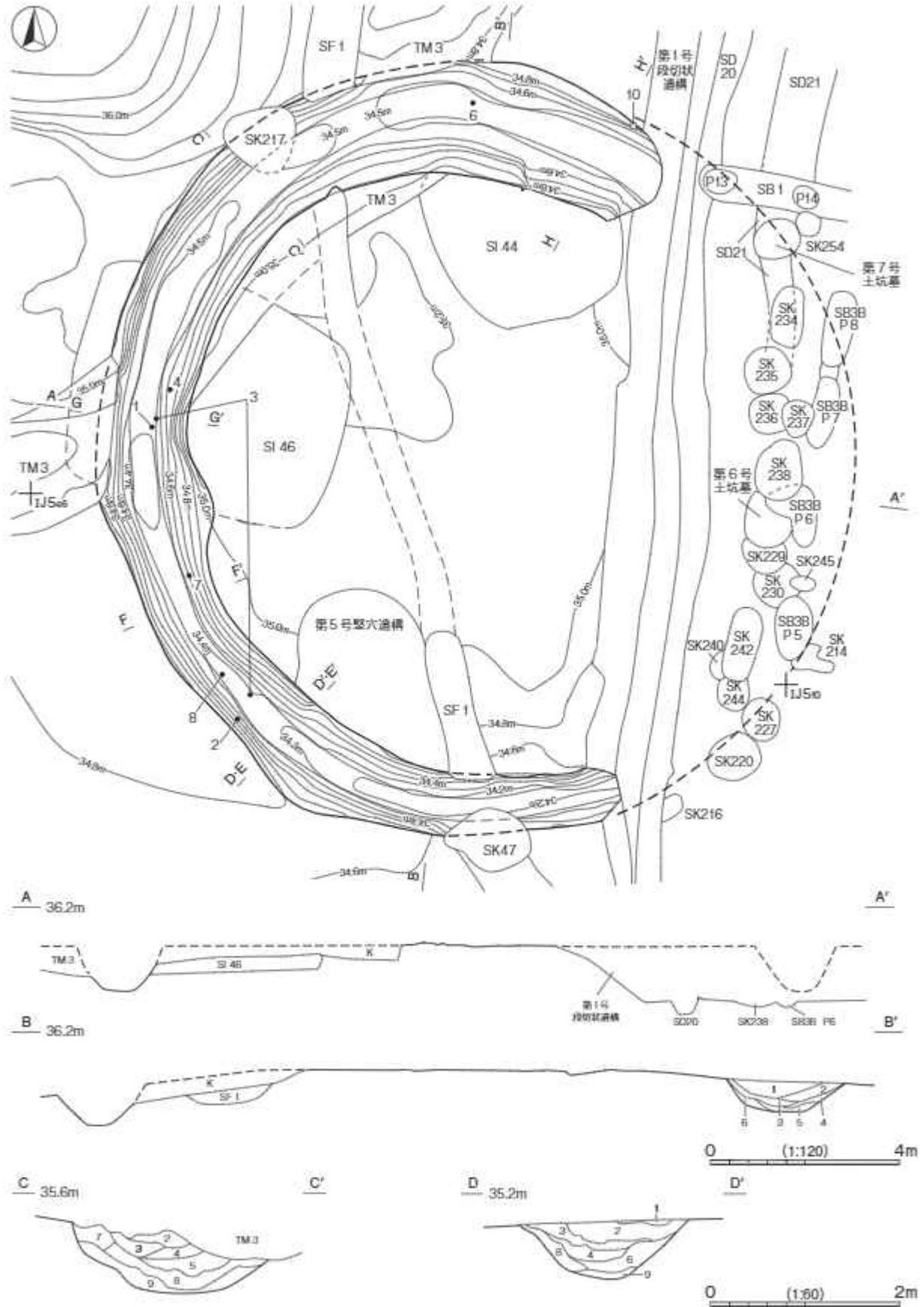
番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
92	1J5d9	N 5° W	楕円形	1.54 × 1.18	34	外傾	平坦	人為	土師器	SI 7、SK94 → 本跡 → 第1号段切状遺構
94	1J5d9	N 5° W	[楕円形]	(1.70) × (0.59)	23	外傾	平坦	人為	土師器	SI 7 → 本跡 → SK92、第1号段切状遺構
217	1J5c7	N 40° E	[不整形]	1.54 × (1.18)	92	外傾	皿状	人為	土師器 須恵器	TM 2 → 本跡 → TM 3、SF 1

(4) 古墳

ここで挙げる古墳時代中期の古墳群は、埴輪や埋葬施設、マウンドが無く、円形周溝状遺構や不明遺構として取り扱うべき遺構であろうが、これらが一直線に並んでいることや、形状が類似していること、出土土器が古墳時代中期であり、規模が10m内外で畿内にも同時期・同規模の小古墳群が存在していることから、あえて古墳として扱うことにする。

第2号墳 (第160・161図 第88表 PL11・41)

位置 調査区南東部のI J 5 c6 ~ I J 5 g0区、標高35 mほどの台地縁辺部に位置している。



第160図 第2号墳実測図

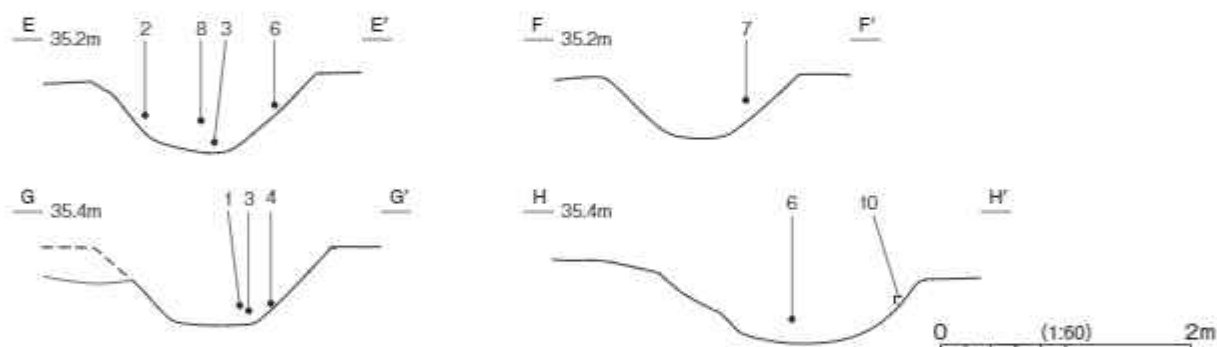
重複関係 第44・46号竪穴建物跡、第5号竪穴遺構、第263号土坑を掘り込み、第1・3B号掘立柱建物、第47・217号土坑、第1号道路、第1号段切状遺構、第20・21号溝、第3号墳に掘り込まれている。

規模と形状 東部が重複により削平されているため、確認できた規模は、墳丘径13.90m、周溝外径16.31mで、円墳と考えられる。墳丘構造と埋葬施設は不明である。周溝の東部が削平されているが、確認できた周溝幅は、上幅1.14～2.52m、下幅0.30～0.94m、最大幅は北部中央付近、最小幅は南西部である。周溝幅は、北部がやや幅広である。深さは59～65cmで、北西部が浅く、東部に向かって徐々に深くなっている。断面は皿状や逆台形状で、立ち上がりは、40°～50°である。

周溝覆土 9層に分層できる。墳丘側や周溝外側からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

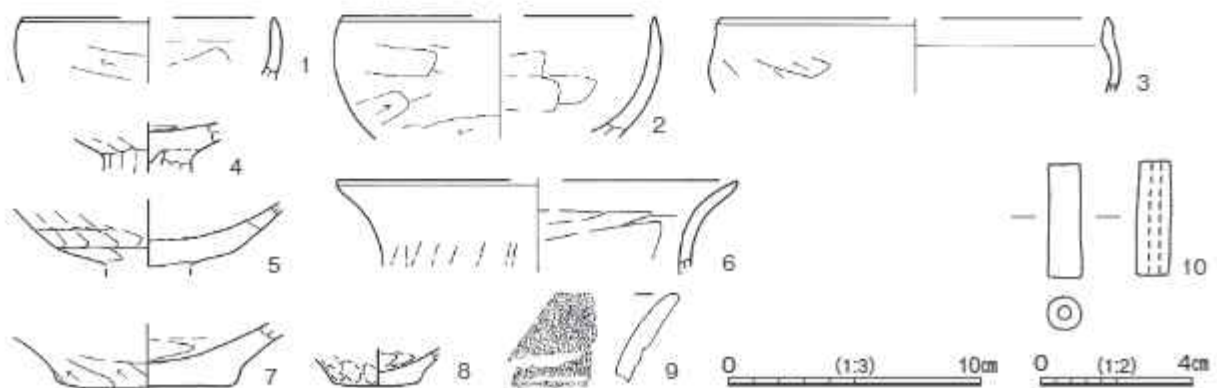
遺物出土状況 土師器片69点（椀7、高坏3、鉢1、壺1、甕55、ミニチュア土器2）、石製品1点（緑色凝灰岩製管玉）が出土している。ほかに混入した縄文土器片5点、弥生土器片819点、古墳前期の土師器片1657点、時期不明の須恵器3点、焼成粘土塊2点、石器6点（チャート製石核、石英製剥片2、砂岩製砥石3）が出土している。土師器片は、周溝西部と北部の覆土下層と中層から多量に出土し、ハケ目を伴う甕片が多い。これらは本来、本跡が掘り込んでいる古墳前期の第46号竪穴建物跡と第5号竪穴遺構に伴うものと考えられる。1・4は西部、10は北部の覆土下層から、2・7・8は南西部、6は北部の覆土中層から、それぞれ出土している。3は西部と南西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



土器解説

- | | | | |
|--------------|--------------------------|---------------|------------------------|
| 1 10YR4/6 鉢 | ロ-ム小D-紋B、炭化紋C/粘C、粘C | 6 10YR3/3 高坏 | ロ-ム小D-紋C、焼土紋D/粘B、粘B |
| 2 10YR3/4 高坏 | ロ-ム中B-小B-紋A/粘B、粘C | 7 10YR3/4 高坏 | ロ-ム中C-小B-紋C、焼土紋D/粘B、粘B |
| 3 10YR3/1 高坏 | ロ-ム小D-紋D、焼土紋D、炭化紋D/粘B、粘B | 8 10YR5/6 甕 | ロ-ム中B-小C-紋C/粘B、粘B |
| 4 10YR3/4 高坏 | ロ-ム小C-紋B、焼土紋D/粘A、粘C | 9 10YR5/4 土師器 | ロ-ム中B-小C-紋B/粘B、粘B |
| 5 10YR3/2 高坏 | ロ-ム小D-紋D、黒色土主体/粘B、粘B | | |



第161図 第2号墳・出土遺物実測図

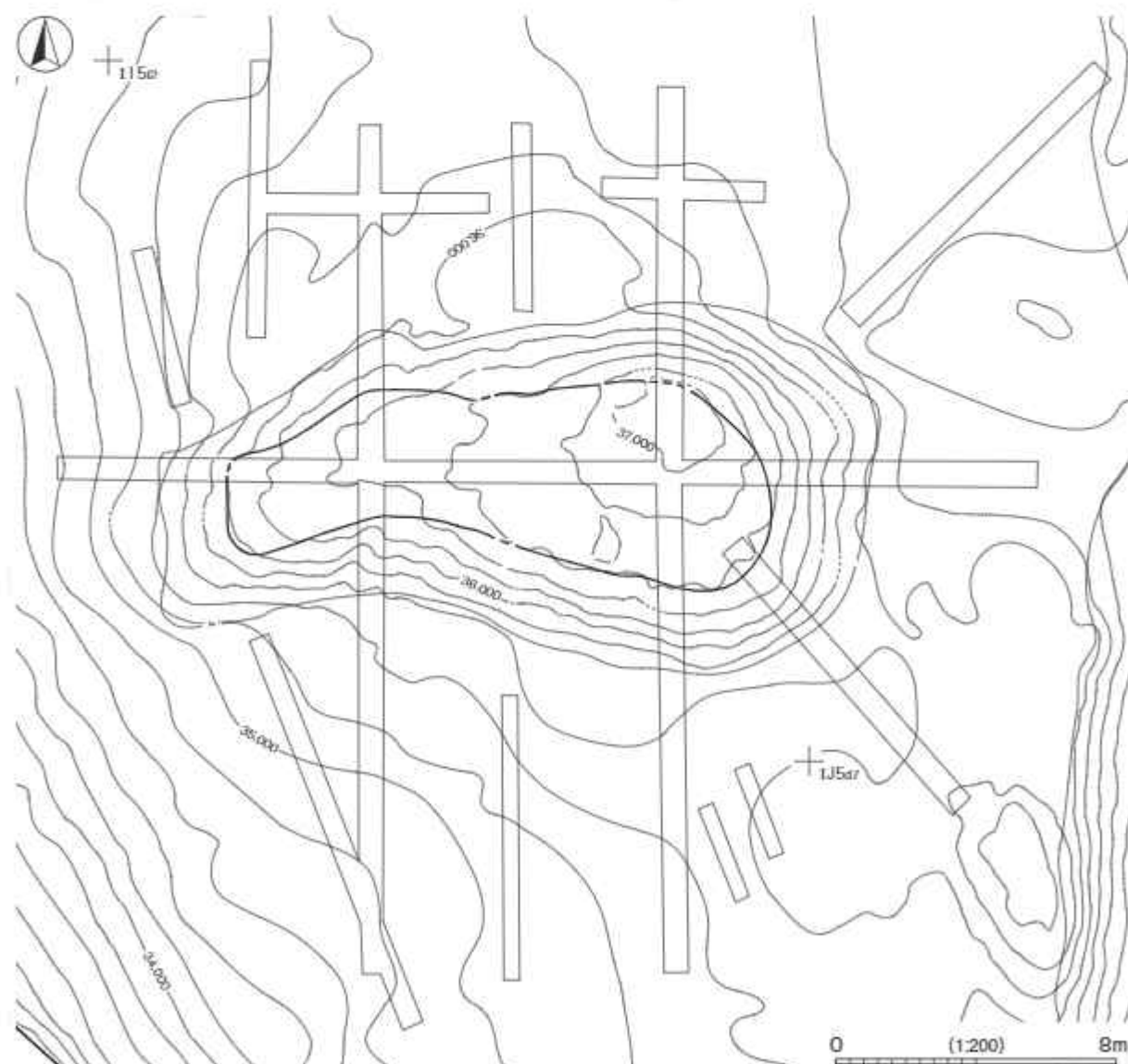
第88表 第2号墳出土遺物一覧(第161図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	輪	[10A]	(26)		長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面ナブ 体部外面へつ削り 内面へつナブ	覆土下層	10%
2	土師器	輪	[12A]	(49)		長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面ナブ 体部外面へつ削り 内面へつナブ	覆土中層	20%
3	土師器	輪	[152]	(30)		長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面ナブ 体部外面へつ削り 内面へつナブ	覆土下層	20%
4	土師器	高坏		(20)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	耳底部・脚部外面へつナブ 耳底部内面ナブ ホブによる長合	覆土下層	10%
5	土師器	高坏		(27)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	耳底部外面へつナブ 輪積痕 耳底部内面ナブ	覆土	10%
6	土師器	壺	[160]	(37)		長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐	普通	口縁部外反 口縁部内外面ナブ 体部内外面ナブ	覆土中層	10%
7	土師器	壺		(25)	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下縁へつナブ 底部内面へつナブ 底部外面へつ削り	覆土中層	10%
8	土師器	ミニチュア土器		(15)	35	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ナブ 頸部痕 内面ナブ 底部ナブ	覆土中層	30%
9	土師器	壺		(35)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面断面 V 字状の縦痕	覆土	5%

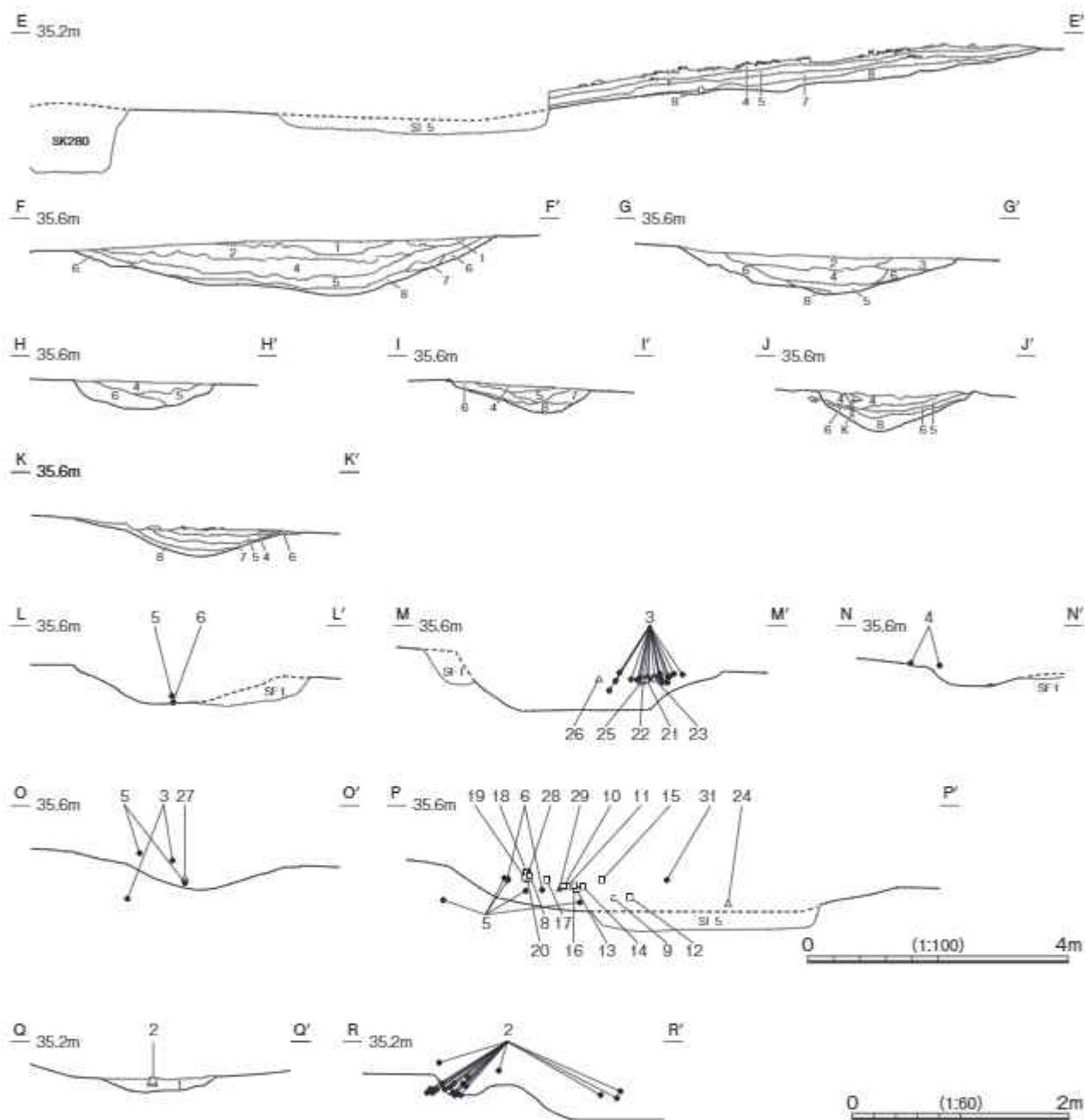
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
10	菅玉	3.0	0.9	0.9	470	緑色凝灰岩	全面研磨 両端穿孔	覆土下層	PLA1

第3号墳(第162～171図 第89・90表 PL12～15・41～43)

位置 調査区南東部の I J 5i2～I J 5e8 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。



第162図 第3号墳現況測量図・トレンチ設定図



周溝土層解説

- | | | | |
|--------------|--------------------------|----------------|-----------------------|
| 1 IDYR4/4 粘 | ロ・A粒C/粘B、締C | 6 IDYR4/3 粘砂質 | ロ・A粒A/粘B、締C |
| 2 IDYR2/1 黒 | ロ・A粒D/粘B、締C | 7 IDYR4/4 粘 | ロ・A小C-粒B/粘B、締B |
| 3 IDYR3/4 粘粉 | ロ・A小B-粒B/粘B、締C | 8 IDYR4/4 粘 | ロ・A中D-小C-粒A
/粘B、締C |
| 4 IDYR2/2 黒粘 | ロ・A粒B、細虫母片岩片小A
/粘B、締C | 9 IDYR4/4 粘 | ロ・A小C-粒B/粘B、締B |
| 5 IDYR3/4 粘粉 | ロ・A小C-粒A/粘B、締C | 10 IDYR5/2 灰黄粘 | ロ・A中C-小C/粘B、締B |

P1土層解説

- | | |
|--------------|-------------------------|
| 1 IDYR3/4 粘粉 | ロ・A小D-粒C、
粘土粒D/粘B、締B |
|--------------|-------------------------|

第164図 第3号墳周溝土層断面実測図

墳丘土層 後円部南・北側は削平を受け、前方部端は流失しているが、墳丘主軸であるA-A'ラインから盛土の構築過程が想定できる。盛土の観察結果から、墳丘構築にあたり、後円部東側と後円部西側、前方部3か所を区画して構築している。後円部東側はA-A'ラインの148～224m付近まで、川表土である黒色土層を整地して基底面としている。また、後円部西側はA-A'ラインの10.5～14.8m付近までの、川表土（黒色土層）から10～15cmほど、前方部では40～50cmほど、それぞれ掘り込み整地している。整地後の盛土は、土質・土色からA・B・Cに大別でき、さらにロームブロックの含有量から2～4層に細分できる。盛土の構

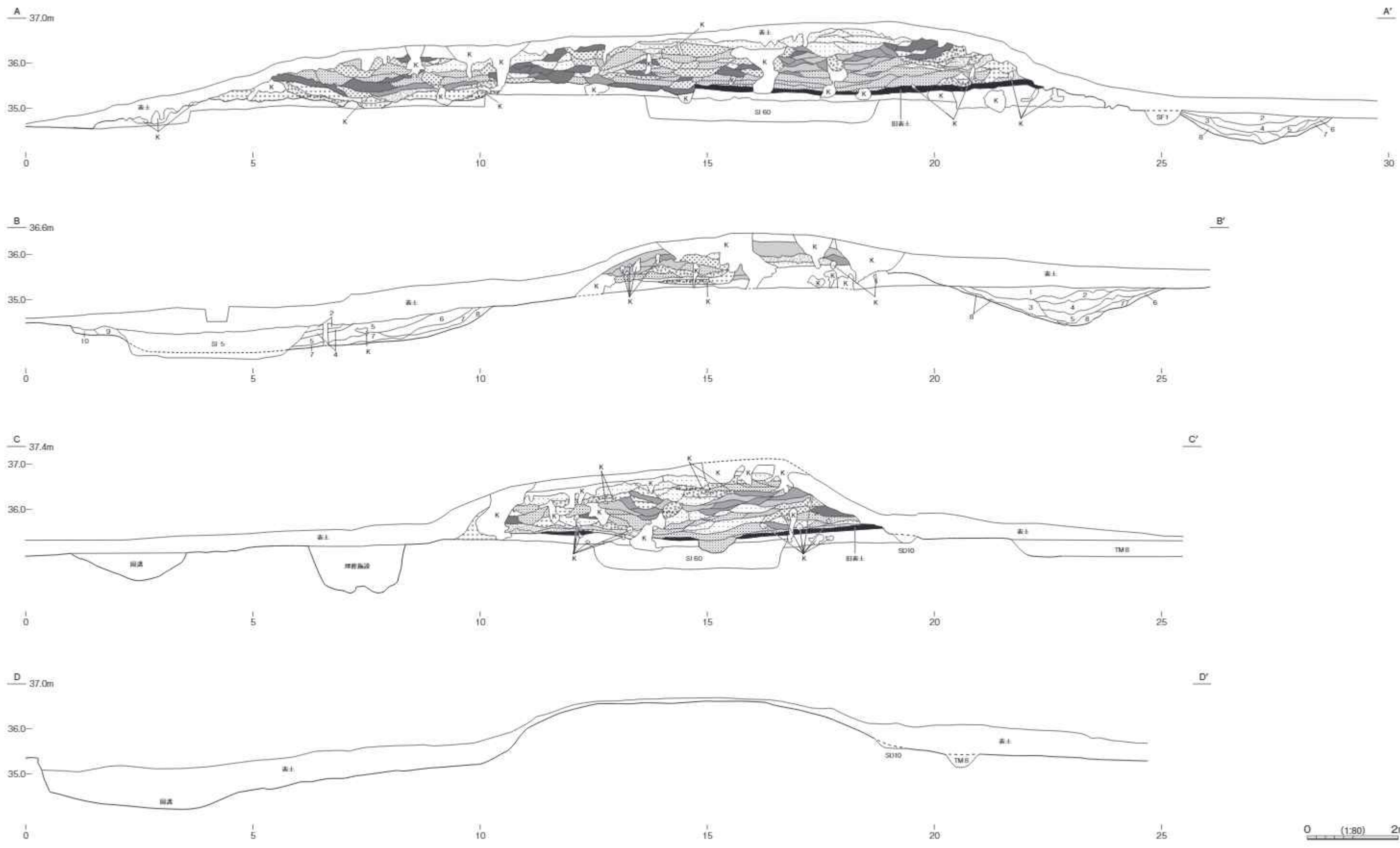
築過程は、後門部東側は整地後、周溝内側が高くなるように、A-A'ラインの15.5mと20.5m、21.5m付近に幅0.70～0.80m、高さ30～40cmの土手状の盛土を構築し、その内側を土手状の高さまでローム主体土で盛土している。その盛土上の端部にさらに50cm前後土手状に盛土し、その内側を黒褐色土と暗褐色土で盛土して、後門部を構築している。後門部西側はA-A'ラインの12.3m付近まで、後門部側に寄せるように、褐色土と暗褐色土を水平に盛土し、その斜面をローム主体土で構築している。前方部は、端部のA-A'ラインの4.0～6.0m付近に、暗褐色土を高さ30～40cm土手状に盛土し、その内側を水平に盛土している。さらに盛土上のA-A'ライン6.5m付近に高さ30～40cmほど土手状に盛土している。さらにA-A'ライン7.0m付近まで同様な行為を行い、標高36.2m、地山から高さ92cm付近まで褐色土で盛土している。後門部側からの盛土と前方部からの盛土は、12.5m付近で接続し、V字状に積み残した部分を、褐色土主体土で盛土している。後門部を2段階に分けて構築した背景には、埋葬施設が後門部南寄りにあることに関連するものと考えられる。

墳丘土層解説

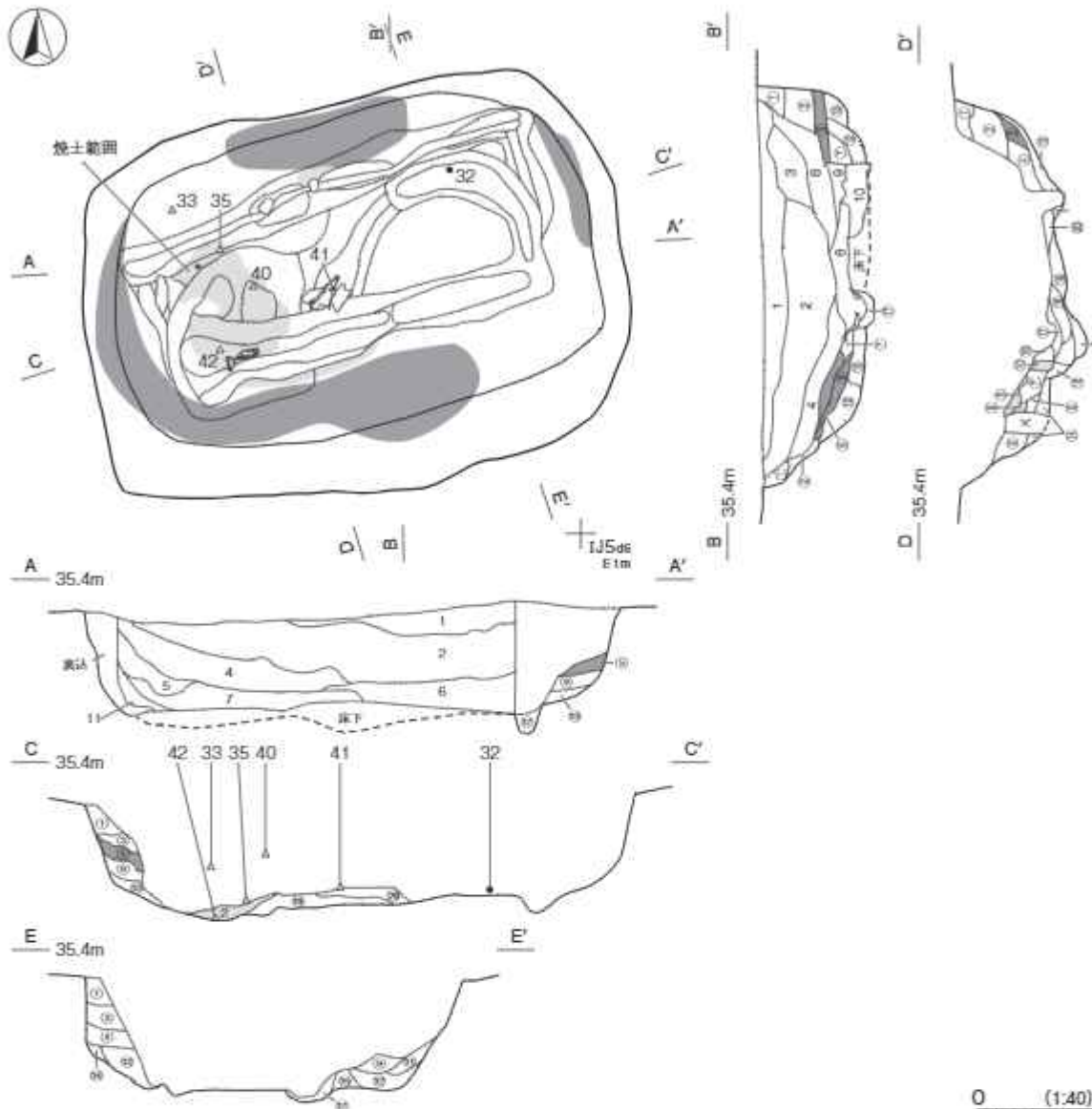
A	ローム主体盛土層			
A 1		褐色	ロームブロックC、ローム粒子A/粘B、締B	
A 2		褐色	ロームブロックB、ローム粒子A、黒色土ブロックC/粘A、締A	
A 3		褐色	ロームブロックA、ローム粒子A、黒色土ブロックC/粘B、締A	
A 4		ほぼ均質	ローム粒子A、黒色土ブロックC/粘B、締B	
B	黒色土主体盛土層			
B 1		黒褐色	ロームブロックC、ローム粒子A、黒色土ブロックC/粘B、締B	
B 2		黒褐色	ロームブロックC、ローム粒子A/粘B、締A	
C	ローム+黒色土の積土層			
C 1		暗褐色	ローム粒子C、黒色土ブロックC/粘B、締C	
C 2		暗褐色	ロームブロックC、ローム粒子A、黒色土ブロックC/粘B、締A	
C 3		暗褐色	ロームブロックC、ローム粒子A/粘B、締B	

埋葬施設 後門部南部に位置している。掘方の規模は、長軸3.05m、短軸2.18m、深さ60cm、床面まで深さ50～55cmの長方形で、断面は逆台形である。主軸方向はN-73°-Eである。側石と天井石は全て抜き取られているが、床石に用いられたと考えられる雲母片岩片の割石が少量確認できた。埋葬施設の覆土は、ローム粒子を均一に含む褐色土であることから、自然堆積と考えられる。第6・7層は非常に締まりが強く、石棺材を抜き取る際に踏み固められたものと考えられる。掘方面からは、棺材設置のため、幅7～10cm、深さ10～20cmの溝が確認できた。その状況から、石棺の規模は、長軸2.35m、短軸1.0m、深さ50cmで、棺内法は長軸2.0m、短軸で0.75mと推測できる。また、石棺は東側小口の内法が0.80m、西側の小口の内法が0.70mと西側が狭くなる側石で小口石を挟む箱式石棺と推定できる。底面は棺中央部が高く、小口と側石側に向かって徐々に低くなり、比高差は4cmである。両小口は一枚の石材を使用しているが、側石の枚数は不明である。石棺の底面は、ローム主体土に石材細片を入れて根固めして平坦にした後、小口石と側石を立てるために、側石の掘方内に白色粘土を貼り付けた後に、石材の細片が混じるローム土と粘土が混じるローム土を石棺天井部の高さまで突き固めている。石棺内部の西部からは多量の焼土を確認したが、焼土が床面を掘り込んでいることから、石棺を抜き取る時に、火を焚いたものと考えられる。

遺物出土状況 本跡に伴う遺物は、周溝からは須恵器22点（壺1、瓶7、甕14）土製品2点（土玉）、石製品11点（馬環製勾玉5、水晶製切子玉6）、鉄製品9点（鉄鏃6、鞍金具1、不明鉄製品2）ガラス製品2点（小玉）が出土している。墳丘からは、土師器1点（坏）、須恵器7点（長頸瓶1、甕6）が出土している。埋葬施設からは、須恵器片17点（長頸壺1、甕16）、金属製品12点（鉄鏃6、刀子1、馬具引手1、鳩目金具1、耳環1、不明鉄製品2）、ガラス製品3点（小玉）が出土している。ほかに混入した弥生時代から古墳中期中葉の土器片が周溝覆土内や墳丘盛土中から多量に出土している。また、周溝南西部から10世紀前半の土師器坏・輪が出土している。1は墳丘北部の表土中から、2は周溝北部P1と周溝の南西側くびれ部の覆土中層



第165图 第3号墳填丘・周溝土層断面实测图

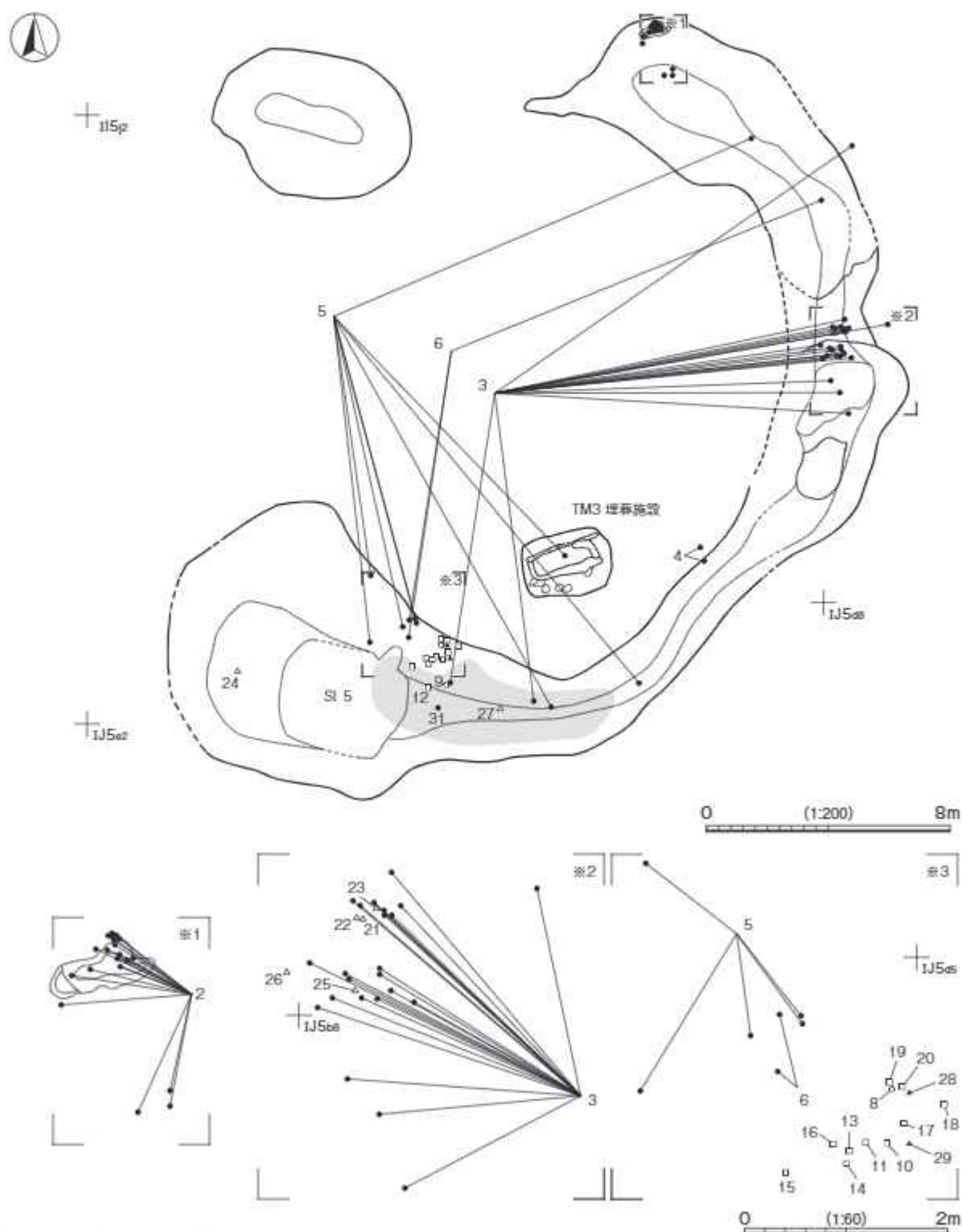


第3号墳埋葬施設実況の土層解説

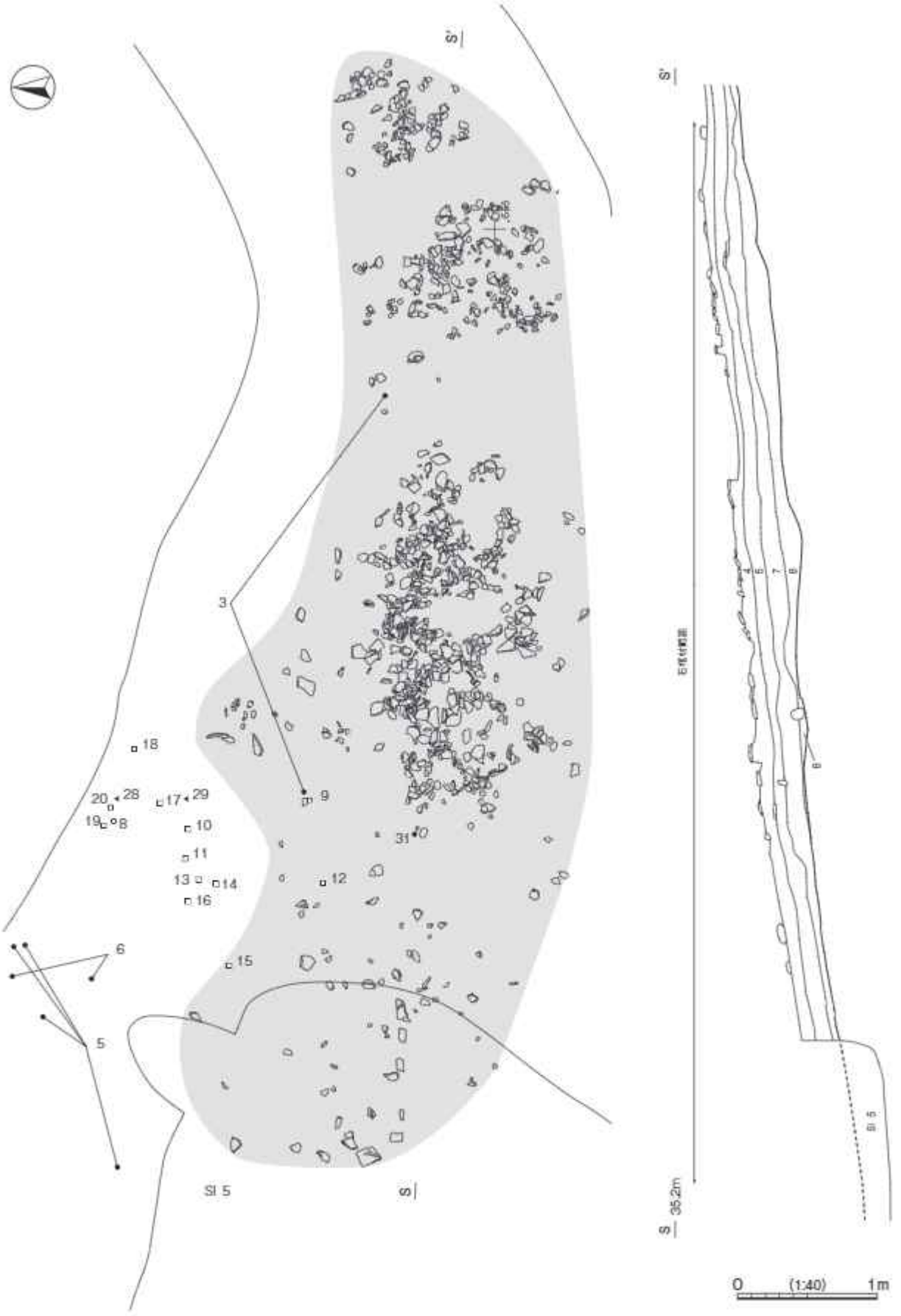
- | | | | |
|----------------|----------------------------|---------------|-----------------------------------|
| ① 10Y12/3 暗褐色 | ロ-ム小C-粒B、砂粒C、砂質ロ-ム/粘B、雑土 | ⑩ 10YR4/6 黄 | ロ-ム中C-小B-粒A/粘B、雑A |
| ② 10YR4/3 灰赤 | ロ-ム粒B、ロ-ム主体/粘B、雑土 | ⑪ 10YR2/3 暗褐色 | ロ-ム小C-粒C、炭母片岩小C/粘B、雑土 |
| ③ 10YR2/3 暗褐色 | ロ-ム小D-粒C、堆土粒D、炭化粒D/粘B、雑土 | ⑫ 10YR2/2 黄褐色 | ロ-ム粒C、炭母片岩小C/粘B、雑C |
| ④ 10YR4/4 黄 | ロ-ム小C-粒B/粘B、雑土 | ⑬ 10YR2/3 暗褐色 | ロ-ム小D-粒C、炭母片岩小C/粘B、雑C |
| ⑤ 10Y15/4 灰赤 | ロ-ム粒B、白色粘土小D-粒C、砂粒D、/粘B、雑土 | ⑭ 10YR7/4 灰赤 | ロ-ム中B-小B-粒B、白色粘土粒D、炭母片岩小C/粘B、雑A |
| ⑥ 10Y12/3 暗褐色 | ロ-ム粒C、白色粘土小C-粒C、/粘B、雑土 | ⑮ 10YR4/4 黄 | ロ-ム中C-小C-粒B、堆土粒D、砂粒D、炭母片岩小C/粘B、雑A |
| ⑦ 10Y12/2 暗褐色 | ロ-ム小C-粒B/粘B、雑A | ⑯ 10YR2/3 暗褐色 | ロ-ム小B-粒B、炭母片岩小C/粘B、雑土 |
| ⑧ 10YR7/6 明黄褐色 | ロ-ム小C-粒B、白色粘土小D-粒C、/粘B、雑土 | | |
| ⑨ 10YR2/3 暗褐色 | ロ-ム粒B、黒色土層じりロ-ム/粘B、雑土 | | |
| ⑩ 10Y15/2 灰赤 | 白色粘土中B-小B-粒B/粘B、雑土 | | |
| ⑪ 10Y12/4 暗褐色 | 白色粘土中B-小B-粒B、粘土塊層/粘B、雑土 | | |
| ⑫ 10YR4/4 黄 | ロ-ム中C-小A-粒A、/粘B、雑A | | |
| ⑬ 10Y12/4 暗褐色 | ロ-ム中C-小B-粒B/粘B、雑土 | | |

から、3は周溝東部の覆土中層と北東部の覆土下層、周溝南部の覆土下層と周溝南西側くびれ部の覆土中から、4は周溝南東部の底面と覆土下層から、6は周溝北東部の覆土下層と南西部の覆土中層から、5は周溝北東部と南部の覆土下層、南西部のくびれ部覆土中層から、それぞれ出土した破片が接合している。埋葬施設からは、32が北東部、35は北西部、41は中央部の床面から、33は北西部、40は中央部西寄りの覆土中層から、42は掘方底面から、それぞれ出土している。また、周溝の南西部からは、石棺材が砕かれた状態で、その直上から30・31が出土している。また多くの副葬品が周溝内から出土しており、同時に廃棄されたものと考えられる。

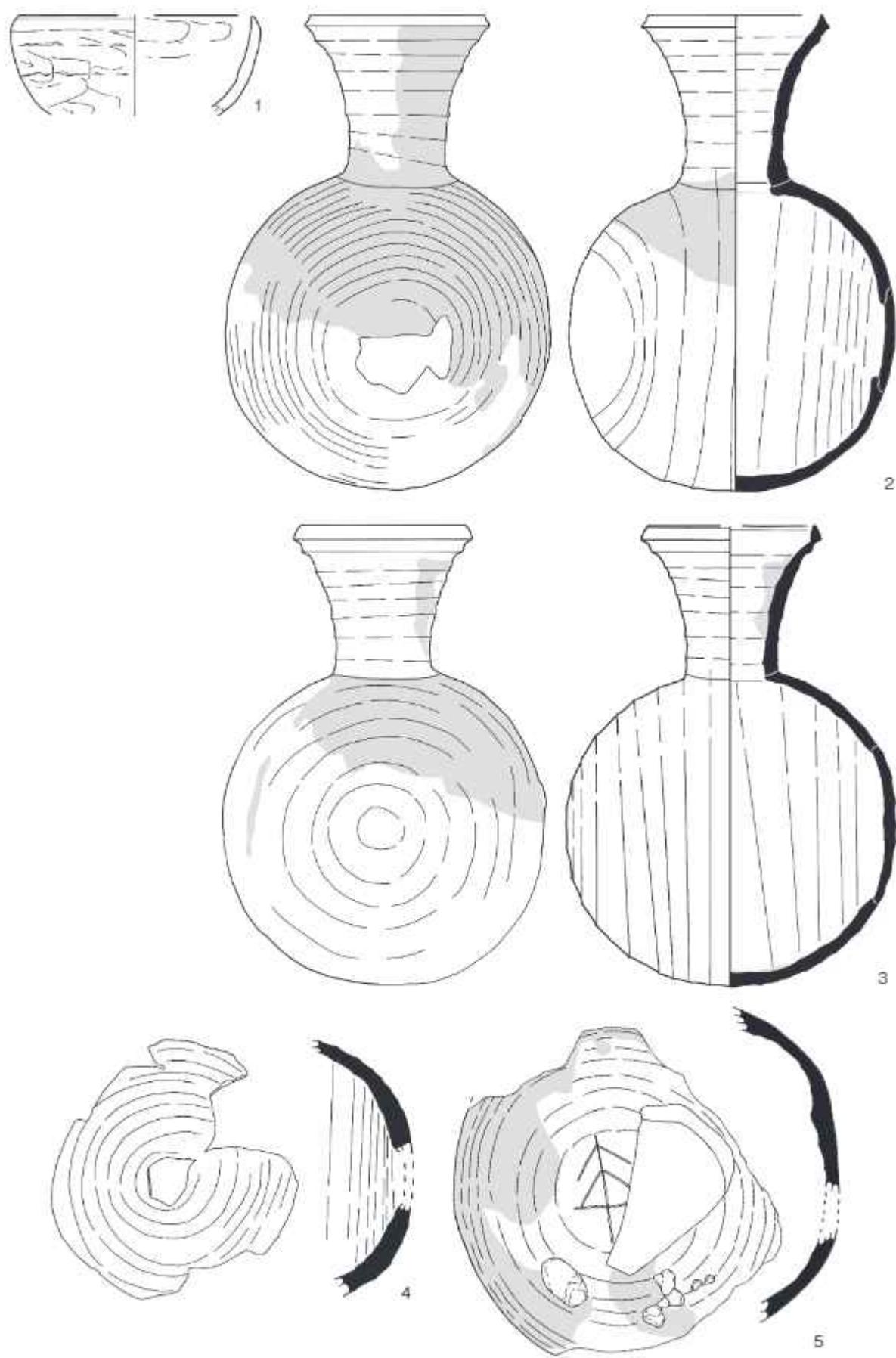
周溝の東部からは、3の破片とともに鉄鏃が、また周溝南西部のくびれ部からは、3・5・6の須恵器片とともに玉類が、周溝南部からは3・5の須恵器とともに27が一括廃棄されており、意図的に遺物を選別して周溝各所に廃棄していることがわかる。埋葬施設の破壊時期は、周溝の南西くびれ部から砕かれた状態で出土した石棺材の直上から31が出土しており、10世紀前葉ごろに埋葬施設が破壊された可能性がある。本跡出土のガラス玉は材質分析から、ソーダ石灰ガラスであることが判明した。切子玉は、産地不明であった（付章参照）。
所見 時期は、出土土器と古墳の形状や埴輪を伴わないことから、7世紀前葉と考えられる。



第167図 第3号墳周溝遺物出土状況図

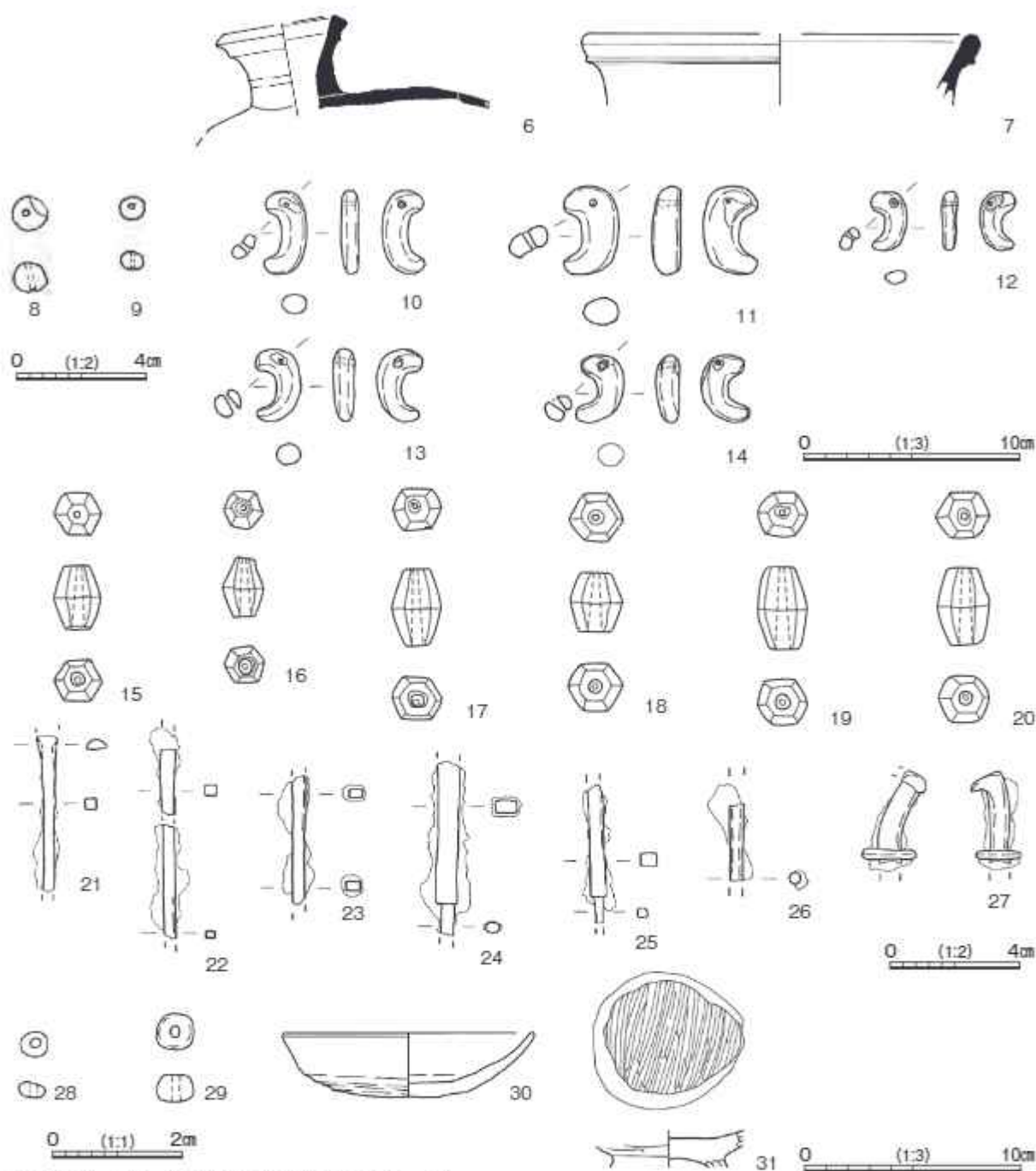


第168图 第3号墳石棺材出土状況图



第169图 第3号墳墳丘・周溝内P1・周溝出土遺物実測図

0 (1:3) 10cm



第170図 第3号墳周溝南西部出土遺物実測図

第89表 第3号墳墳丘・周溝出土遺物一覧(第169・170図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	杯	[124]	(5.3)		石英・雲母	にぶい黒	普通	粗製杯、口縁部内外面横ナブ 体部外面へツ削り 輪硝痕	墳丘表土	40%
2	須恵器	瓶	90	25.0		長石・石英・ 黒色砂子	灰黄	良好	ソラスコ形長頸瓶 外面回転へツ削り 自然軸 内面口タロナブ	四溝北下部・内 山南(クハ)部中部 四溝北東部・東 部南面・南西部 墓土下層 墓土上層	80% PL41
3	須恵器	瓶	[88]	24.2		長石・石英	灰黄 黄緑	普通	ソラスコ形長頸瓶 外面回転へツ削り 自然軸 内面口タロナブ	四溝南東部 墓土下層	70% PL41
4	須恵器	横瓶		(13.6)		長石・石英	灰黄	普通	内面輪染れ 外面回転へツ削り 内面口タロナブ	四溝南東部 墓土下層	30% PL42
5	須恵器	横瓶		(17.2)		長石・石英・小礫	灰黄 黄緑	普通	体部外面へツ削り 自然軸	四溝北東部・ 東部・南西部 墓土下層 クハ部中部	30% PL42
6	須恵器	平瓶	[58]	(4.7)		長石・石英	灰黄	普通	内面口タロナブ 自然軸	四溝北東部・ 西部墓土下層	30%
7	須恵器	葉	[182]	(3.3)		長石	灰白	普通	口縁部下端断面三角形の突起	四溝南西部 墓土	5%

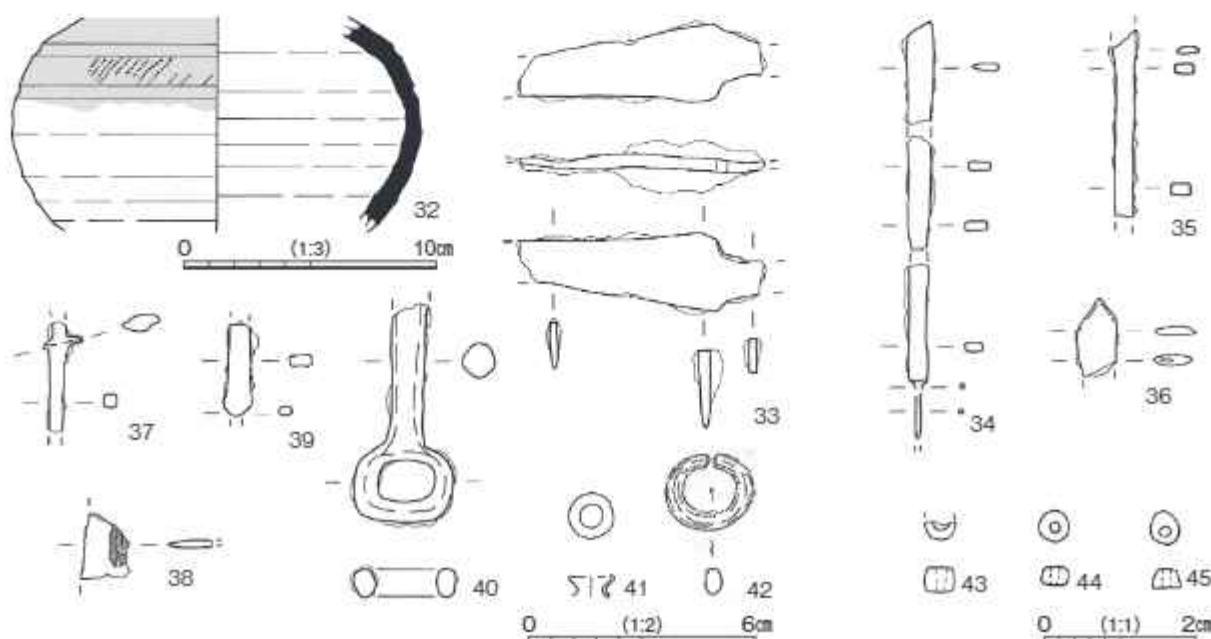
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
8	土玉	1.1	0.9	0.2	0.85	石英 白色粒子	靑灰	陸隆布 ナツ	南西部 墓土上層	PLA2
9	土玉	0.8	0.6	0.1	0.26	石英 赤色粒子	靑灰	片側からの穿孔 ナツ	南西部 墓土上層	PLA2

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
10	勾玉	3.9	2.0	0.9	8.04	瑪瑙	C字型 一方向から穿孔 孔径0.15 全面研磨 稜面・彩渾痕跡	南西くびれ部 墓土上層	PLA2
11	勾玉	4.2	2.6	1.3	17.80	瑪瑙	C字型 一方向から穿孔 孔径0.15 全面研磨 貫通破損痕跡	南西くびれ部 墓土上層	PLA2
12	勾玉	2.8	1.6	0.8	3.79	瑪瑙	C字型 一方向から穿孔 孔径0.15 貫通破損部深い研磨	南西くびれ部 墓土上層	PLA2
13	勾玉	3.4	2.1	1.0	8.49	瑪瑙	C字型 一方向から穿孔 孔径0.15 全面研磨 貫通破損痕跡	南西くびれ部 墓土上層	PLA2
14	勾玉	3.2	2.2	1.1	9.09	瑪瑙	C字型 一方向から穿孔 孔径0.2-0.3 全面研磨 貫通破損痕跡	南西くびれ部 墓土上層	PLA2
15	切子玉	2.0	1.5	1.3	5.00	水晶	全面研磨 一方向からの穿孔	南西くびれ部 墓土上層	PLA2
16	切子玉	1.8	1.2	1.2	2.73	水晶	全面研磨 一方向からの穿孔	南西くびれ部 墓土上層	PLA2
17	切子玉	2.4	1.5	1.4	6.56	水晶	全面研磨 一方向からの穿孔	南西くびれ部 墓土上層	PLA2
18	切子玉	1.8	1.7	1.5	6.02	水晶	全面研磨 一方向からの穿孔	南西くびれ部 墓土上層	PLA2
19	切子玉	2.6	1.5	1.5	7.86	水晶	全面研磨 一方向からの穿孔	南西くびれ部 墓土上層	PLA2
20	切子玉	2.5	1.6	1.4	8.38	水晶	全面研磨 一方向からの穿孔	南西くびれ部 墓土上層	PLA2

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
21	鏃	(5.1)	0.4-0.6	0.35-0.40	(2.92)	鉄	穂先、長型鏃 鏃身部長 (0.35) 厚0.35 頸部 (4.8) 厚0.4	周清東部 墓土上層	PLA3
22	鏃	(6.0)	(0.5)	(0.3)	(2.34)	鉄	長型鏃 頸部片	周清東部 墓土上層	
23	鏃	(4.0)	0.4	0.2-0.3	(4.14)	鉄	長型鏃 頸部片	周清東部 墓土上層	
24	鏃	(5.4)	0.4-0.7	0.3-0.4	(10.43)	鉄	長型鏃 頸部長 (4.4) 頸間 幅0.6 厚0.4 多部断面円形 長 (1.0) 厚0.3	周清南西部 墓土上層	PLA3
25	鏃	(4.4)	0.5	0.4	(4.71)	鉄	長型鏃 頸部長3.3 幅0.5 厚0.4	周清東部 墓土上層	
26	鏃	(2.4)	0.4	0.4	(4.26)	鉄	長型鏃 多部断面円形	周清東部 墓土上層	
27	鍔金具	(3.2)	(0.7)	(0.9)	(8.29)	鉄	断面方形 頸部折り曲げ	周清南西部 墓土上層	PLA3

番号	器種	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
28	小玉	4.0	2.5	1.0	0.07	ソーダ石灰ガラス	鍔部または引き伸ばし法 細かな気泡の充満 孔内凹凸	周清南西くびれ部 墓土上層	PLA2
29	小玉	6.0	4.0	1.0	0.17	ソーダ石灰ガラス	鍔部または引き伸ばし法 細かな気泡の充満 孔内凹凸	周清南西くびれ部 墓土上層	PLA2

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
30	土師器	杯	11.5	3.0	2.8	長石・石英・雲母	靑	普通	口縁部内外面ナツ 体部外面下半ロクロ目顯著	周清南西部 墓土	70%
31	土師器	高台付 盃	(1.7)	(7.0)	(7.0)	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部下端ナツ 体部内面黒色処理 ヘツミガキ	周清南西部 墓土上層	20%



第171図 第3号埋葬施設出土遺物実測図

第90表 第3号埋葬施設出土遺物一覧(第171図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
32	須恵器	長頸甕		(85)		長石・石英 黒色粒子	灰黄	良好	上下首縁内に刷毛状工具を用いた波線刻突文 内・外面口クロノア 自然釉	埋葬施設 床面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
33	刀子	(6.6)	2.1	0.2~ 0.35	(14.07)	鉄	切先部欠 刀身部 長(5.4) 両側開 茎端部欠 長(1.1) 幅1.1 厚0.2	埋葬施設 中層	PL43
34	鏃	(11.1)	0.15~ 0.90	0.1~ 0.2	(6.34)	鉄	片刃 鏃身部無開 鏃身部 長2.1 厚0.2 頸部 長7.5 厚 0.2 頸開部 幅0.5 厚0.2 各部断面円形 長1.5 厚0.1	埋葬施設 遺土	PL43
35	鏃	(5.1)	0.5~ 0.6	0.2~ 0.3	(3.29)	鉄	長頸鏃 鏃身部片丸造り 鏃身先端欠 無開 鏃身部 長 (0.75) 幅(0.65) 厚0.2 頸部 長4.15 幅0.6 厚0.3	埋葬施設 床面	PL43
36	鏃	(2.1)	1.1	0.2~ 0.3	(4.39)	鉄	長頸鏃 鏃身部片丸造り 鏃身部 長2.1 幅1.0 厚0.3	埋葬施設 遺土	PL43
37	鏃	(3.0)	0.3~ 0.4	0.4	(4.55)	鉄	輪開 幅0.4 厚0.4 各部断面円形 長(2.15) 幅・厚0.35	埋葬施設 遺土	PL43
38	鏃	(1.7)	(1.2)	0.2	(1.05)	鉄	長頸鏃 鏃身部片丸造り 鏃身部に木質付着	埋葬施設 遺土	PL43
39	鏃	(2.4)	0.5~ 0.8	0.3	4.41	鉄	長頸鏃 頸部 長(2.4) 幅(0.8) 厚0.3 頸開 幅0.3 厚0.2 各部 長0.1 幅0.25	埋葬施設 遺土	PL43
40	引手	(6.0)	2.8	0.8~ 1.0	(20.12)	鉄	楕円形の円環部	埋葬施設 遺土中層	PL43
41	鍔目 金具	(1.2)	0.6	0.1	(1.71)	金銅	鍔の鍔金に内面金銅 外面鍍付着	埋葬施設 床面	
42	金環	2.0	2.3	0.7	9.83	金銅	鍔鍔金環 環断面は表面に長い楕円形 環内径 横1.35 縦1.15	埋葬施設 掘方底面	PL43

番号	器種	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
43	小王	(4.0)	(3.0)	(1.0)	(0.05)	ソーダ石灰ガラス	鈍造または引き伸ばし法 細かな気泡の充満 孔内凹凸	埋葬施設 遺土	PL42
44	小王	4.0	3.0	1.0	0.06	ソーダ石灰ガラス	鈍造または引き伸ばし法 細かな気泡の充満 孔内凹凸	埋葬施設 遺土	PL42
45	小王	5.0	3.0	1.0	0.06	ソーダ石灰ガラス	鈍造または引き伸ばし法 細かな気泡の充満 孔内凹凸	埋葬施設 遺土	PL42

第4号墳(第172図 PL16)

位置 調査区南東部のI J 6g1~I J 6j2区、標高33mほどの台地縁辺部に位置している。

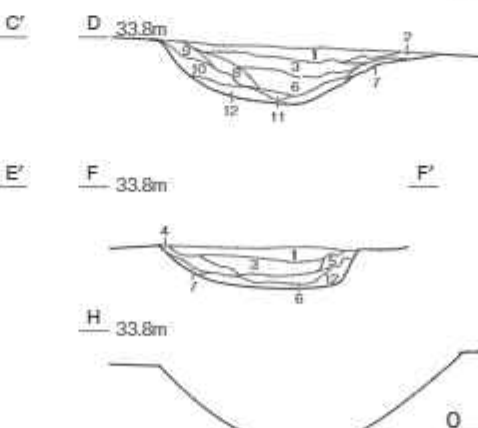
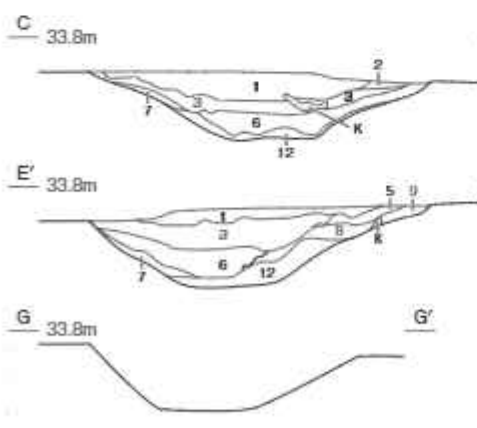
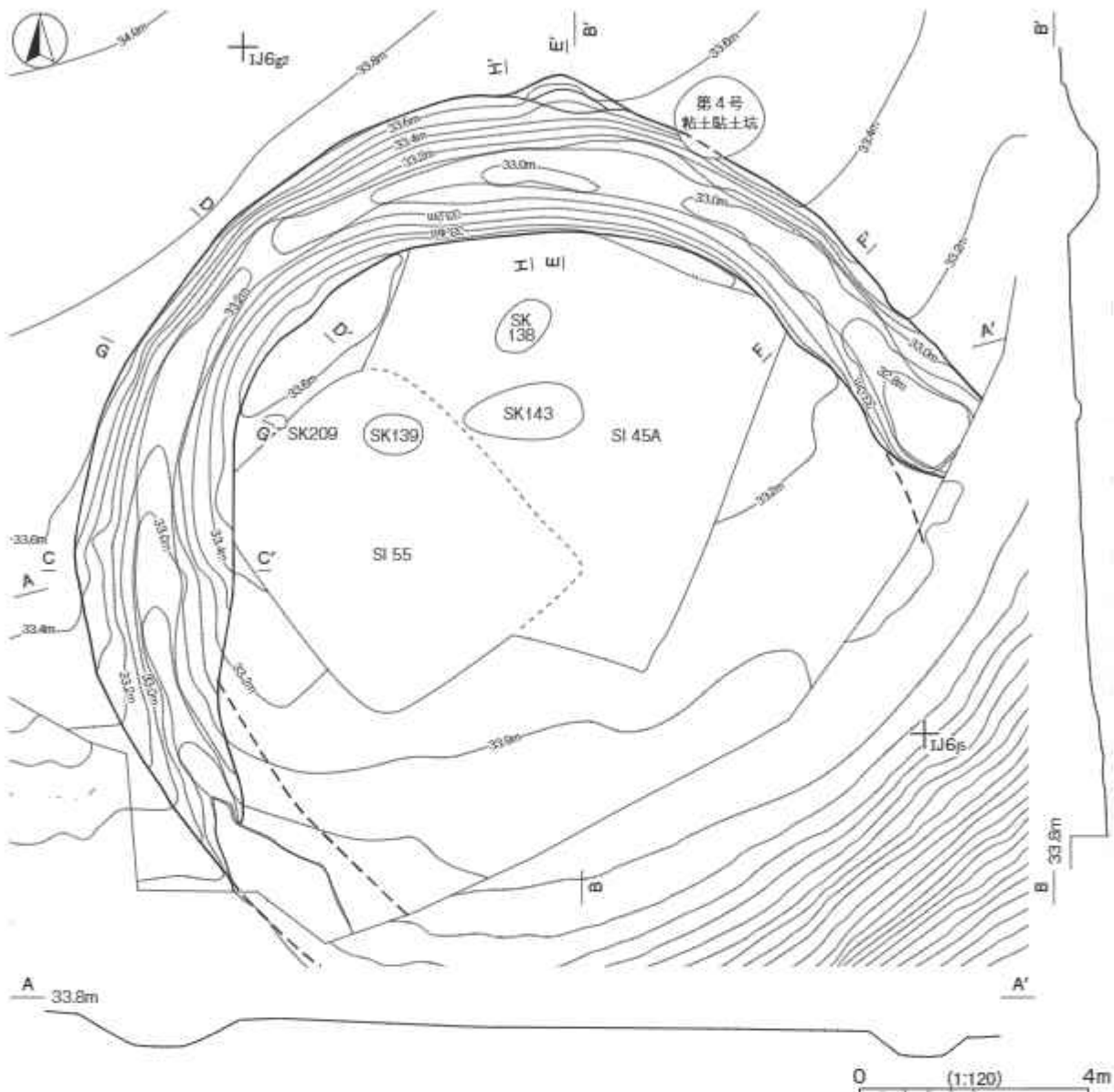
重複関係 第45A・55号竪穴建物跡を掘り込み、第138・139・143・209号土坑、第4号粘土貼土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部から東部が調査区域外のため、確認できた規模は、墳丘径122m、周溝外径161mの円墳と推定される。墳丘と埋葬施設は不明である。周溝の西側はやや直線状に掘り込まれている。南部から南東部にかけて調査区域外で、急峻な崖になっているため、周溝が全周していたかは不明である。確認できた周溝幅は、上幅152~274m、下幅0.24~1.20mで、最大幅は西側中央付近、最小幅は東部中央やや北寄りである。深さは20~60cmで、北西部が浅く、東部と南部に向かって徐々に深くなっている。断面は皿状や逆台形状で、立ち上がりは、墳丘側が30°~40°で、外周側が30°~60°である。

周溝覆土 12層に分層できる。墳丘側や周溝外側からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 混入した縄文土器片10点、弥生土器片374点、古墳時代前期の土師器片853点、時期不明の須恵器片1点、古墳時代前期の土製品6点が出土している。土師器片は、周溝西部と北部の覆土下層と中層から出土しており、本跡が掘り込んでいる古墳時代前期の第45A・55号竪穴建物跡に伴うものと考えられる。

所見 時期は、本跡に伴う遺物が出土していないため、不明である。

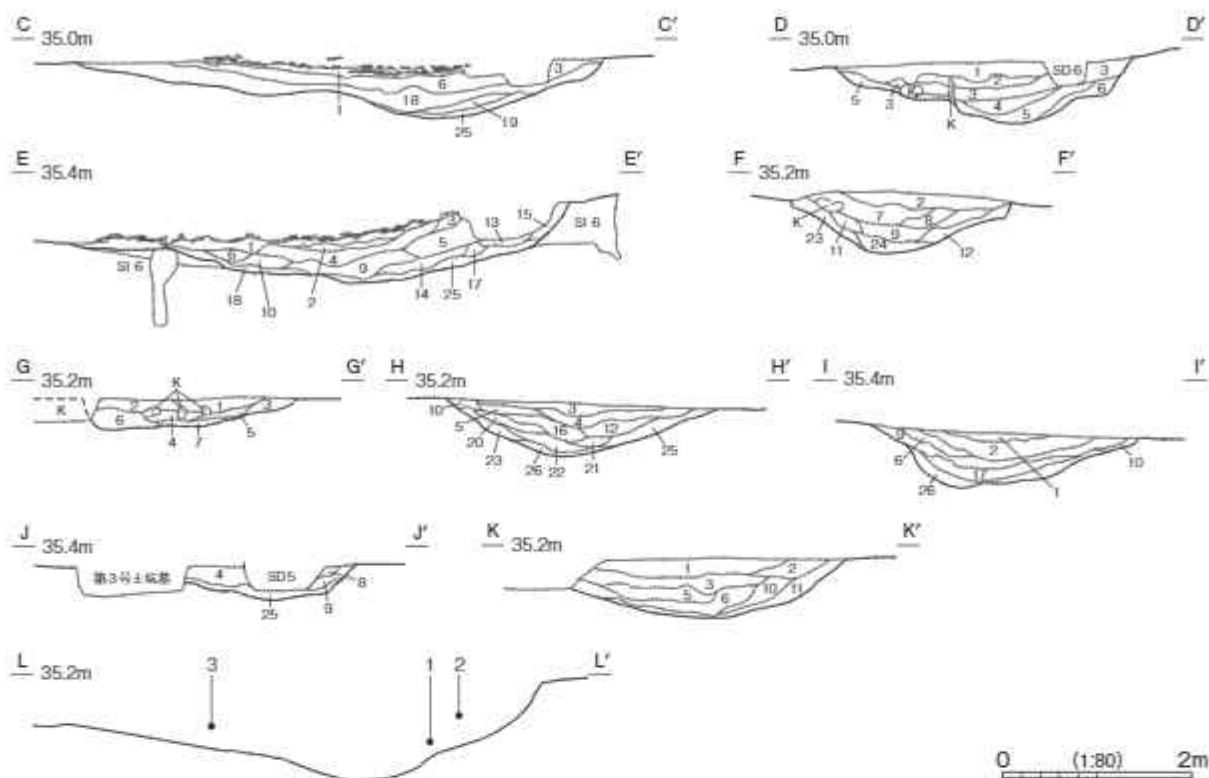


同层土质解说

1 10YR2/2 黑褐 砂-小砂-粉砂D、黑色土主体/粘C、细D
 2 10YR3/2 暗褐 砂-小砂-粉砂C/粘C、细D
 3 10YR2/3 黑褐 砂-小砂-粉砂B、黑色土主体/粘C、细C
 4 10YR3/4 暗褐 砂-小砂-粉砂/粘C、细D
 5 10YR4/4 褐色 砂-小砂-粉砂/粘D、细D
 6 10YR2/3 黑褐 砂-小砂-粉砂D、黑色土主体/粘B、细D

7 10YR3/4 暗褐 砂-小砂-粉砂/粘D、细D
 8 10YR4/6 褐 砂-小砂-粉砂/粘D、细D
 9 10YR4/4 褐 砂-小砂-粉砂/粘D、细D
 10 10YR2/3 黑褐 砂-小砂-粉砂、粘土粉砂/粘D、细D
 11 10YR4/3 棕黄 砂-小砂-粉砂/粘D、细D
 12 10YR4/4 褐 砂-小砂-粉砂A/粘D、细D

第172图 第4号填实测图



第5号墳周溝土層断面実測図

1 10YR2/1 黒	□・A・粒C、黄土粒C/粘B、細B	14 10YR2/3 黒粘	□・A小C・粒C/粘B、細B
2 10YR2/1 黒	□・A小D・粒C/粘B、細B	15 10YR3/2 黒粘	□・A小D・粒C/粘B、細B
3 10YR2/2 黒粘	□・A・粒C/粘B、細B	16 10YR3/3 暗粘	□・A小C・粒B/粘B、細B
4 10YR3/2 黒粘	□・A小D・粒C/粘B、細B	17 10YR4/3 黄土粘	□・A・粒C/粘B、細B
5 10YR2/2 黒粘	□・A小C・粒B/粘B、細B	18 10YR4/3 黄土粘	□・A小C・粒C、黄土粒C/粘B、細B
6 10YR2/3 黒粘	□・A小D・粒C/粘B、細B	19 10YR5/6 黄粘	□・A小C・粒B/粘B、細B
7 10YR4/3 黄土粘	□・A・粒C/粘B、細B	20 10YR3/3 暗粘	□・A小C・粒C/粘B、細B
8 10YR3/4 暗粘	□・A小C・粒B/粘B、細B	21 10YR3/3 暗粘	□・A小C・粒A/粘B、細B
9 10YR3/3 暗粘	□・A小C・粒A/粘B、細B	22 10YR3/4 暗粘	□・A小C・粒B/粘B、細B
10 10YR3/4 暗粘	□・A小C・粒B/粘B、細B	23 10YR4/4 粘	□・A小B・粒A、□・A主体/粘B、細B
11 10YR5/4 黄土粘	□・A小B・粒B/粘B、細B	24 10YR4/3 黄土粘	□・A小D・粒C/粘B、細B
12 10YR5/6 黄粘	□・A小B・粒A/粘B、細B	25 10YR4/6 粘	□・A小B・粒A/粘B、細B
13 10YR3/2 黒粘	□・A・粒C/粘B、細B	26 10YR4/4 粘	□・A小A・粒A、黒色土小D/粘B、細B

第174図 第5号墳周溝土層断面実測図

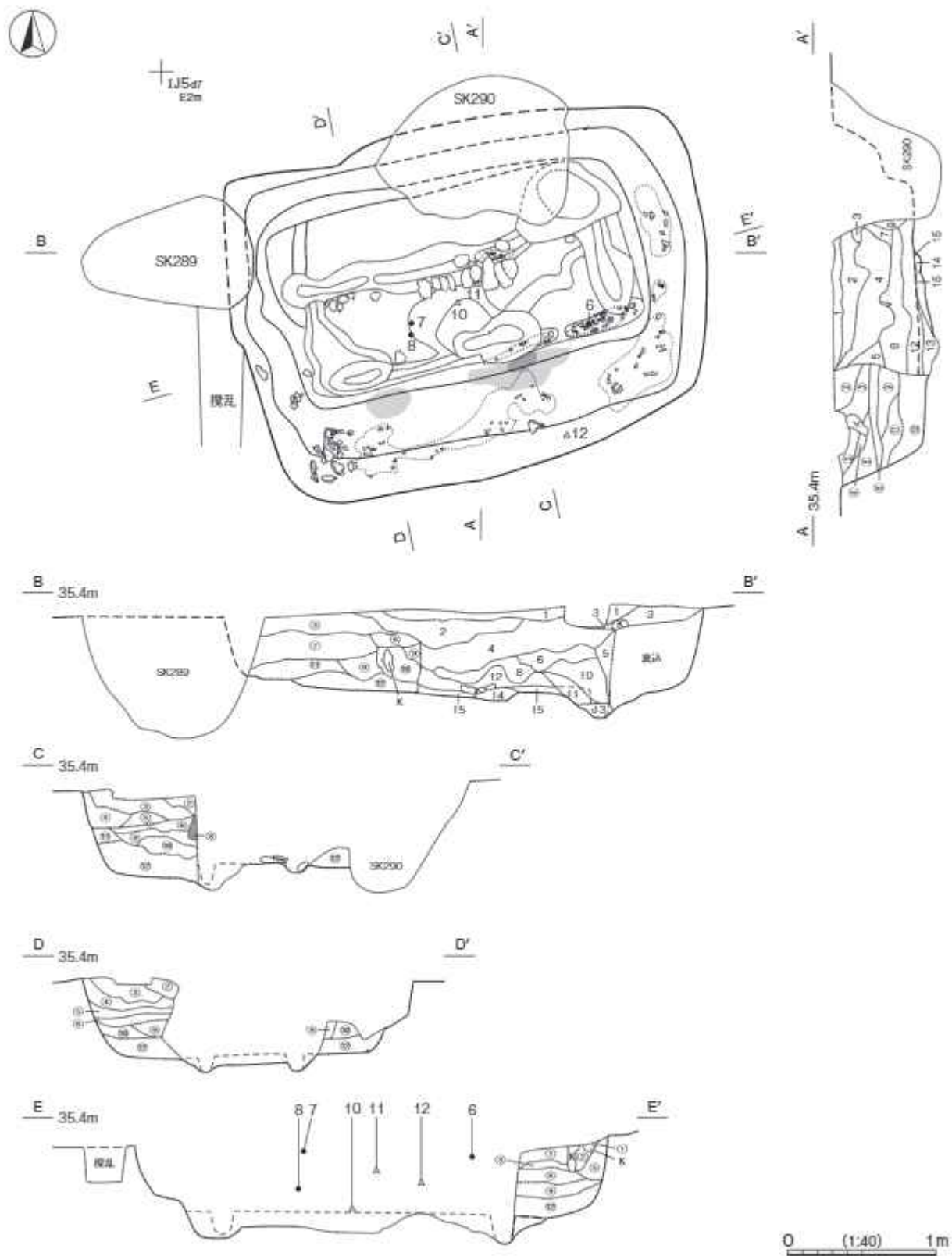
掘り込み、第5A・5B号掘立柱建物、第3・7・11・19・21・23・28・29・53・56～58・62・75・76・85・88・289・290号土坑、第1号道路、第5～7号溝、第1号土坑墓、第1号粘土土坑、第3号不明遺構に掘り込まれている。

規模と墳形 墳形は前方後円墳（帆立貝式）と想定されるが、墳丘は削平され、周溝はくびれ部で途絶えている。主軸方向はN-81°-Eである。確認できた規模は、総長22.3m、後円部径17.6m、後円部周溝外径21.2m、くびれ部幅7.3mである。周溝は、上幅5.1m～1.9m、下幅0.25m～1.18m、深さは38～94cmである。くびれ部は、北側が幅、深さとも最大で、東部に向かって徐々に浅くなる。南側と北側では、くびれ部の比高差が45cmである。周溝断面は皿状で、壁は墳丘側が25°～35°、外周側が10°～25°で外傾している。

周溝土層 26層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

埋葬施設 くびれ部の中央に位置している。掘方の規模は長軸3.25m、短軸2.37mの長方形で、深さ55cm、主軸方向はN-79°-Eである。石棺材は抜き取られており、底面から石棺材設置のための溝状の掘方を確認した。側壁部は深さ5～15cm、小口部は深さ15～20cmで、小口部が若干深く掘り込まれていることから、石棺は、小口板石を側壁の板石で挟みこむ箱式石棺と推定できる。石棺の規模は、掘方底面の形状から、長軸

2.25 m、短軸 0.80 m、深さ 40cmほど、棺内法は長軸 1.90 m、短軸 0.55 mで、底面の高低差は東側が西側に比べて 8 cm高い。底面からは床石や側壁の間を埋めた割石が確認できた。石棺の裏込め状況は、側壁を立てるために粘土と雲母片岩片混じりのローム土を3段階に分けてつき固めており、第



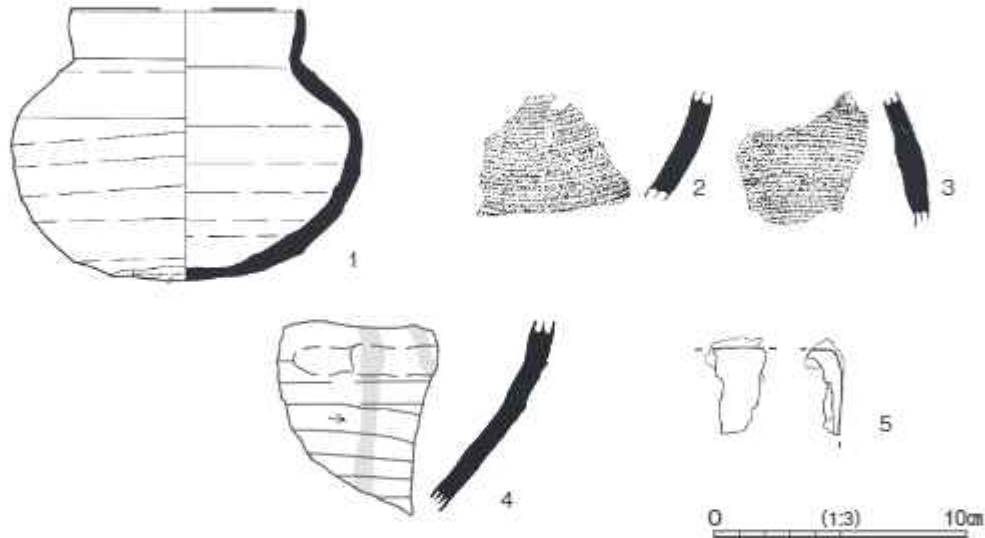
第176图 第5号填埋葬施設実測図

第5号墳周溝出土土器解説

- 1 10YR4/4 褐 口-ム小D-粒C/粘B、締B
- 2 10YR5/4 灰黄褐 口-ム小C-粒C、炭化粒D/粘B、締B
- 3 10YR4/4 褐 口-ム小C-粒B、雲母片岩小D/粘B、締B
- 4 10YR4/6 褐 口-ム小A-粒A、白色粘土粒C/粘B、締B
- 5 10YR4/4 褐 口-ム小C-粒B、白色粘土中C-小C-粒C/粘B、締B
- 6 10YR2/4 暗褐 口-ム粒C、白色粘土小C/粘B、締C
- 7 10YR4/3 灰黄褐 口-ム小C、白色粘土小C-粒C/粘B、締C
- 8 10YR4/3 灰黄褐 口-ム粒C、黒色土粒C/粘B、締C
- 9 10YR5/8 黄褐 口-ム小A-粒A、白色粘土小C-粒C、雲母片岩小D/粘B、締C
- 10 10YR4/6 褐 口-ム小A-粒A、機土粒C、白色粘土中C-小C-粒C、雲母片岩小D/粘B、締C
- 11 10YR5/4 灰黄褐 口-ム中C-小B-粒C、白色粘土小C-粒C、雲母片岩小D/粘B、締C
- 12 10YR4/4 褐 口-ム小A-粒A、白色粘土中C-小C-粒C、雲母片岩小C/粘B、締C
- 13 10YR2/3 暗褐 口-ム小B-粒B、雲母片岩小D/粘B、締C
- 14 10YR2/4 暗褐 口-ム小B-粒B、白色粘土小D、黒色土小C、雲母片岩小D/粘B、締C
- 15 10YR5/4 灰黄褐 口-ム小A-粒A、雲母片岩小C/粘B、締A

第5号墳周溝出土土器解説

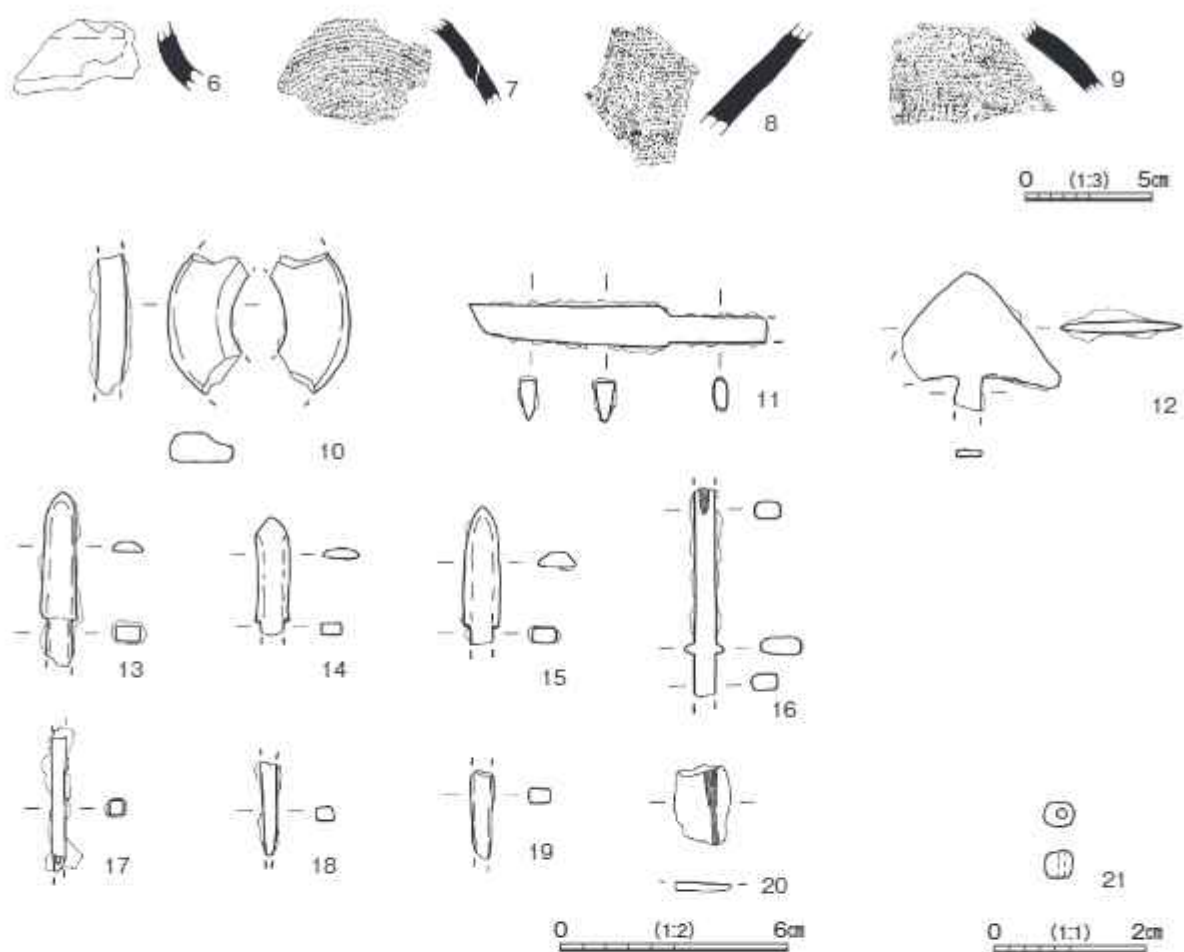
- ① 10YR4/4 褐 口-ム小D-粒C/粘B、締B
- ② 10YR4/3 灰黄褐 口-ム粒A、白色粘土小B-粒B/粘B、締B
- ③ 10YR2/3 暗褐 口-ム小C-粒A、白色粘土粒B/粘B、締B
- ④ 10YR2/4 暗褐 口-ム小B-粒A、白色粘土粒B/粘B、締B
- ⑤ 10YR2/4 暗褐 口-ム小B-粒A、砂粒C/粘B、締B
- ⑥ 10YR2/4 暗褐 口-ム小A-粒A、雲母片岩小B/粘B、締B
- ⑦ 10YR4/4 褐 口-ム小A-粒A/粘B、締B
- ⑧ 10YR8/1 灰白 白色粘土中B、白色粘土泥/粘B、締B
- ⑨ 10YR2/3 暗褐 口-ム粒A、白色粘土小C-粒C、雲母片岩小C、/粘B、締B
- ⑩ 10YR2/4 暗褐 口-ム小B-粒A、白色粘土小C-粒C、雲母片岩小C/粘B、締B
- ⑪ 10YR2/4 暗褐 口-ム粒A、白色粘土小C-粒C、雲母片岩小C、/粘B、締C
- ⑫ 10YR2/3 暗褐 口-ム中C-小A-粒A、白色粘土小C、雲母片岩小B/粘B、締B



第177図 第5号墳周溝出土遺物実測図

第91表 第5号墳周溝出土遺物一覧 (第177図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須臾器	短頸甕	[9.0]	10.8		緻密・石英	灰	良好	口縁部から体部上半ロクロナデ 体部下半ヘツ削り	北側くびれ 底部土中層	95% PL44
2	須臾器	瓶		(4.3)		緻密・石英	黄灰	良好	体部外面カキ目	北側くびれ 底部土中層	5%
3	須臾器	瓶		(4.5)		緻密・石英	灰	良好	体部外面カキ目	北側くびれ 底部土中層	5%
4	須臾器	瓶		(7.5)		緻密・石英	黄灰	良好	胎面ナリーブ・ロクロナデ 体部下半回転ヘツ削り	周溝	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
5	不明 敷製品	(4.0)	(2.1)	(0.3)	(8.29)	鉄	柄取。		周溝	PL43	



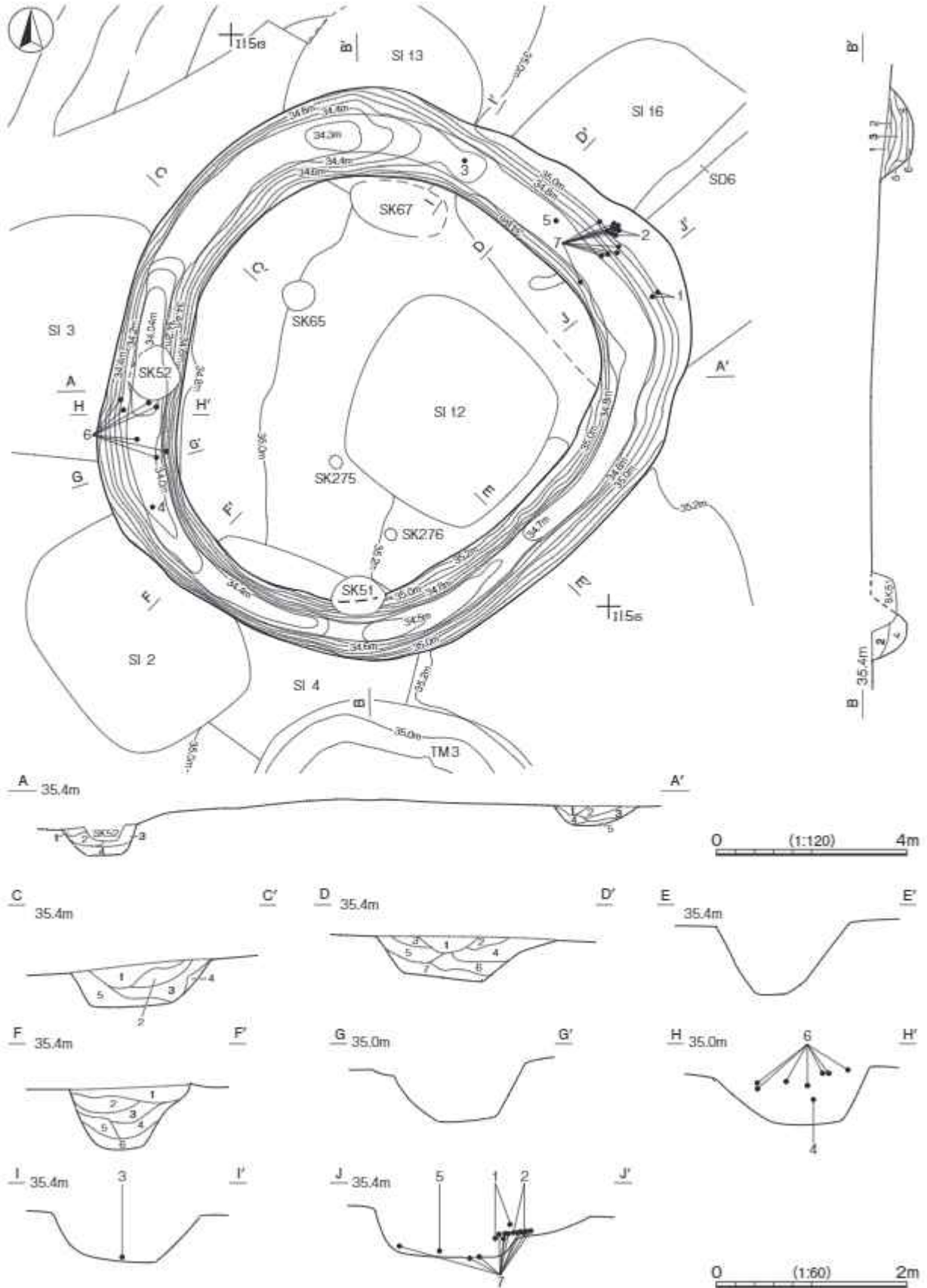
第178図 第5号墳埋葬施設出土遺物実測図

第92表 第5号墳埋葬施設出土遺物一覽(第178図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
6	須恵器	瓶		(30)		磁密・石英	黄灰	良好	頸部片 ロクロナデ	埋葬施設 覆土上層	5%
7	須恵器	瓶		(35)		磁密・石英	灰	良好	ホキ目 接合痕	埋葬施設 覆土上層	5%
8	須恵器	瓶		(46)		磁密・石英	黄灰	良好	外面叩き 内面ナデ	埋葬施設 覆土上層	5%
9	須恵器	甕		(29)		磁密・石英	黄灰	良好	外面叩き	埋葬施設 覆土	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
10	鏝	(38)	(21)	(09)	(12.2)	鉄	無意			埋葬施設 成面	PLA3
11	刀子	(78)	(1.1)	0.4	(10.85)	鉄	先端短欠。身部長5.3cm 身長2.5cm 刃部幅0.75cm 身元幅1.1cm 身幅0.7cm カマズ切先 斜角圓			埋葬施設 覆土上層	PLA3
12	鏝	(37)	(4.2)	0.2~0.3	(10.42)	鉄	鏝身部3.1cm 厚さ0.8 逆刺部(0.4)cm 頸部(0.9)cm 幅0.7cm 厚さ0.2cm			埋葬施設 覆土上層	PLA3
13	鏝	(47)	1.0	0.3~0.6	(6.84)	鉄	鏝身部3.4cm 鏝身断面半円形 鏝身間1.0cm 頸部(1.2)cm			埋葬施設 覆土	PLA3
14	鏝	(33)	0.9	0.3	(5.88)	鉄	鏝身部2.8cm 鏝身断面半円形 鏝身間 幅0.9cm 頸部(0.6)cm			埋葬施設 覆土	PLA3
15	鏝	(37)	(1.1)	0.2~0.3	(3.67)	鉄	鏝身部3.1cm 厚さ0.8 逆刺部(0.4)cm 頸部(0.9)cm 幅0.7cm 厚さ0.2cm			埋葬施設 覆土	PLA3
16	鏝	(5.6)	(1.1)	0.5~0.6	(5.38)	鉄	長頸鏝 頸部(4.2)cm 頸間 幅0.6 厚さ0.5cm 茎部(1.2)cm			埋葬施設 覆土	PLA4
17	鏝	(3.9)	0.5	0.4	(1.28)	鉄	長頸鏝 茎部片			埋葬施設 覆土	PLA4
18	鏝	(2.4)	0.5	0.4	(3.05)	鉄	長頸鏝 茎部先端片			埋葬施設 覆土	PLA4
19	鏝	(2.3)	0.6	0.4	(3.11)	鉄	長頸鏝 茎部片			埋葬施設 覆土	PLA4
20	鏝	(2.2)	(1.5)	(0.3)	(3.76)	鉄	板状の鉄片 本質残存 直刀片。			埋葬施設 覆土	PLA4
番号	器種	径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	特徴			出土位置	備考
21	小玉	4.0	4.0	1.0	0.06	アルミナ・フッ素石灰ガラス	鈔造または引き伸ばし法 細かな気泡の充満 孔内凹凸			主体部	PLA4

第6号墳 (第179・180図 第43表 PL18・44)

位置 調査区西部のI I 5 12 ~ I I 5 14区、標高34 mほどの台地縁辺部に位置している。



第179図 第6号墳実測図

周溝土層解説

- | | |
|---|--|
| 1 10YR22/2 黒褐 コ・A粒D、砂粒D、黒色土主体/粘B、締C | 5 10YR23/4 暗褐 コ・A小D・粒B、黒色土混じり/粘B、締C |
| 2 10YR22/2 黒褐 コ・A小D・粒C、砂小D・粒D、黒色土主体/粘B、締C | 6 10YR23/4 暗褐 コ・A小C・粒B、黒色土混じり/粘B、締C |
| 3 10YR23/3 暗褐 コ・A粒B、砂粒D、黒色土混じり/粘B、締C | 7 10YR23/4 暗褐 コ・A中C・小B・粒B、黒色土混じり/粘B、締C |
| 4 10YR23/3 暗褐 コ・A小D・粒B、黒色土混じり/粘B、締C | |

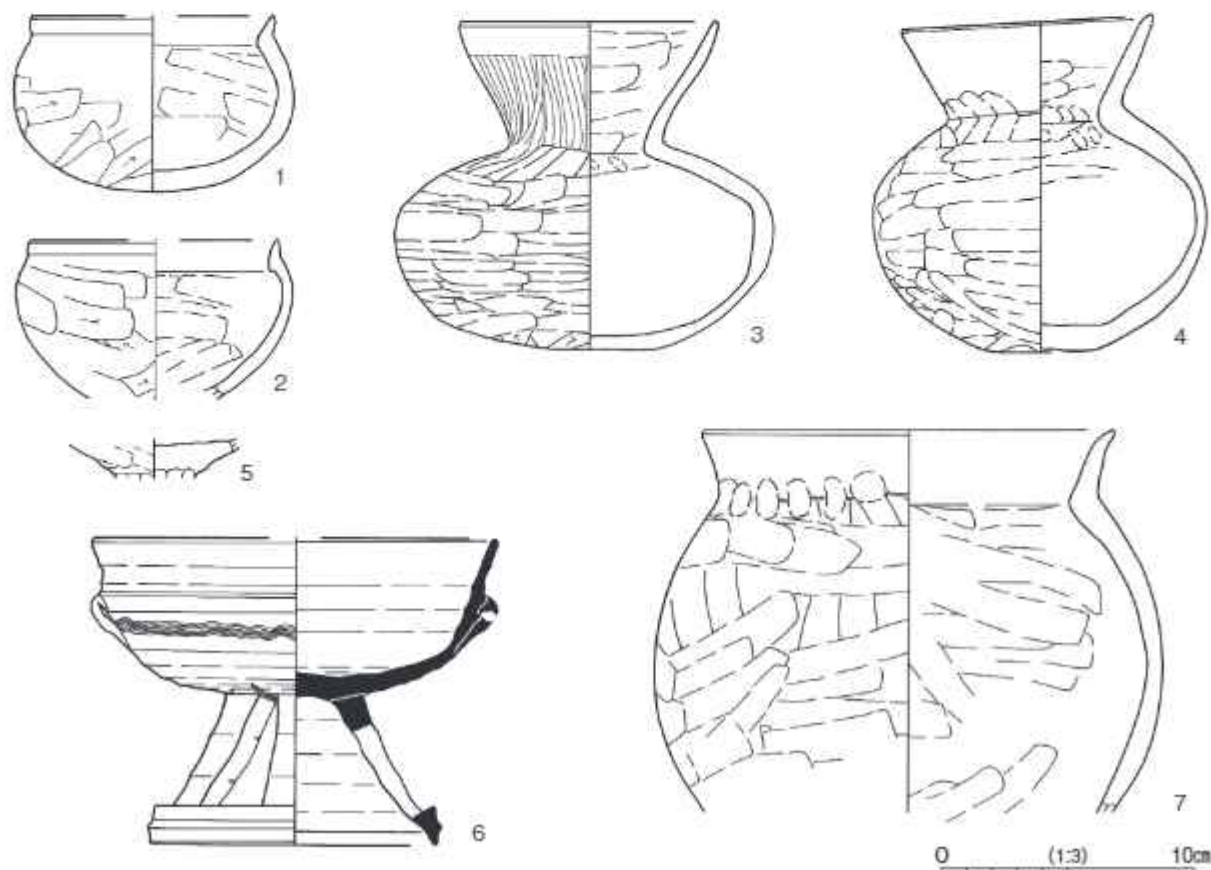
重複関係 第2・3・4・12・13・16号竪穴建物跡、第275・276号土坑を掘り込み、第51・52・65・67号土坑、第6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 墳丘径は長径9.6m、短径9.1m、周溝外径は長径11.7m、短径11.2mの円墳である。墳丘と埋葬施設は不明である。周溝は全周している。周溝幅は、上幅0.95～2.18m、下幅0.40～0.97m、北東部付近の周溝幅が最大で、南東部から南西部の周溝幅が最小である。深さは48～58cmで、西側中央付近が深く、北東部が浅い。断面は皿状や逆台形状である。立ち上がりは、墳丘側で50°～60°、外周側も北東部の約30°以外では50°～60°である。特に北東部外側は、緩やかな傾斜を呈している。

周溝覆土 7層に分層できる。墳丘側や周溝外側からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片445点（碗15、埴4、高坏20、壺28、甕378）、須恵器片3点（高坏1、甕2）が出土している。ほかに混入した縄文土器片3点、弥生土器片816点、石器10点、焼成粘土塊9点、土製品4点が出土している。1は北東部の覆土上層と覆土中層、7は北東部の底面と覆土中層の破片が、それぞれ接合したものである。3は北部の周溝底面、4は南西部の覆土中層から、5は北東部の覆土下層から、6は南西部の覆土上層から、それぞれ出土している。また、北東部から出土した土器1・2・5・7は、北東部外側から、6の高坏は、墳丘側から、それぞれ周溝内に流れ込んでいる。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。6は、墳丘側から周溝覆土上層に流入していることから、副葬品か、墳丘上での祭祀に用いられた可能性がある。



第180図 第6号墳出土遺物実測図

第43表 第6号墳出土遺物一覧(第180図)

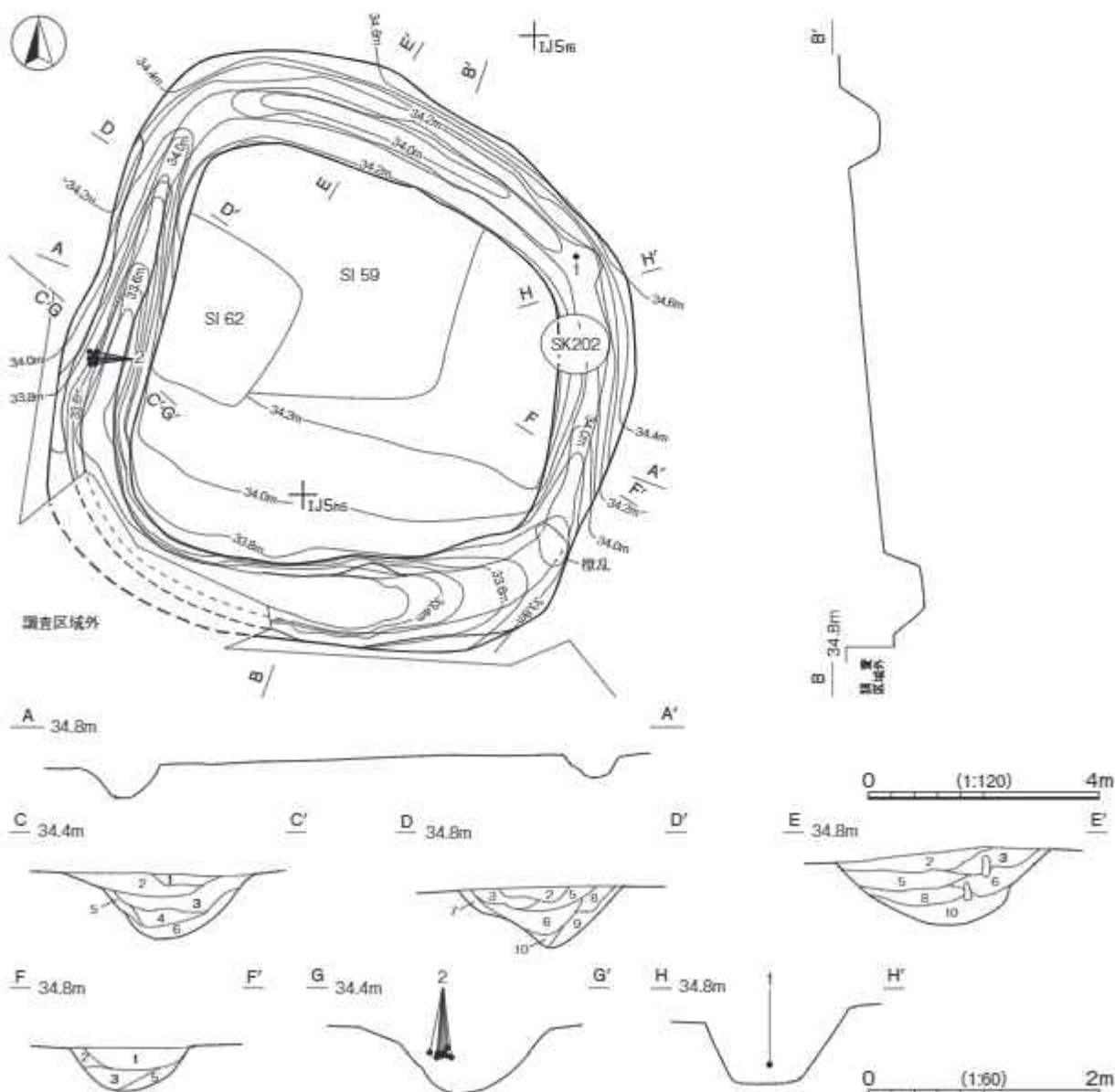
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	輪	19.6	7.0		長石・石英・ 雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部断面三角形状を呈する 体部外面へつ削り 内面へつ削り	覆土上層 覆土中層	70% PL44
2	土師器	輪	19.8	(6.3)		長石・石英・ 雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部断面三角形状を呈する 体部外面へつ削り 内面へつ削り	覆土中層	30%
3	土師器	埴	10.0	13.0		長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面へつ削り 内面へつ削り 体部外面 へつ削り 内面筋面直 体部下端へつ削り	底面	95% PL44
4	土師器	埴	9.8	13.4	4.6	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面へつ削り 体部内外面へつ削り 底面へつ削り	覆土中層	90% PL44
5	土師器	高坏		1.6		長石・石英・ 雲母・赤色粒子	橙	普通	耳部外面へつ削り 耳部外面下縁へつ削り 脚部へつ削り	覆土下層	10%
6	須恵器	無蓋高坏	116.0	12.2	11.2	長石	灰	良好	粘土紐張り付け擬似把手 耳部外面波状文 脚部はハの字彩 裾部華卉 4ヶ所の長方形彩透かし	覆土上層	TK208 形式 陶器片 70% PL44
7	土師器	壺	16.2	(15.2)		長石・石英・ 雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横リガ後筋面直 内面横リガ 体部 外面縦方向へつ削り後へつ削り 内面へつ削り	底面 覆土中層	60% PL44

第7号墳(第181・182図 第94表 PL19)

位置 調査区南部の1J5f4～1J5h8区、標高34mほどの台地縁辺部の緩傾斜面に位置している。

重複関係 第59・62号堅穴建物跡を掘り込み、第202号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 周溝の南西部が調査区域外のため、確認できた規模は、墳丘内法長軸7.8m、短軸7.6m、主軸



第181図 第7号墳実測図

周溝土層解説

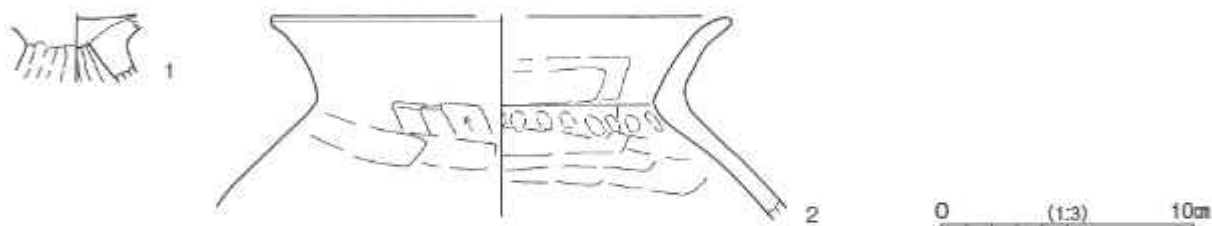
1 IOYK2/2 黒層	ロ-ム小D・粒D、炭化粒D、黒色土主体/粘C、粘C	6 IOYR4/6 粘	ロ-ム小C・粒H/粘H、粘H
2 IOYK2/3 黒層	ロ-ム小C・粒C、黄土粒D、黒色土主体/粘C、粘H	7 IOYR4/4 粘	ロ-ム小C・粒H、黄土粒D/粘H、粘H
3 IOYK2/2 黒層	ロ-ム粒H、黄土粒D、炭化粒D、黒色土主体/粘C、粘C	8 IOYK3/4 粘層	ロ-ム小C・粒H/粘H、粘H
4 IOYK2/3 粘層	ロ-ム小H・粒C/粘C、粘H	9 IOYR4/3 F砂層	ロ-ム小H・粒A/粘H、粘H
5 IOYK3/4 粘層	ロ-ム中D・小H・粒B/粘H、粘H	10 IOYR4/4 粘	ロ-ム小H・粒A/粘H、粘H

方向はN-114°-Eである。周溝外法が長軸9.8m、短軸9.6mで、西部が東部より長い不整形な方墳である。墳丘と埋葬施設は不明である。墳丘の西側基底は直線状に掘り込まれ、構築されている。周溝は、全周している。周溝幅は、上幅0.88~1.75m、下幅0.24~0.84m、周溝最大幅は北部西寄り付近、最小幅は東部中央付近である。北部と南部が幅広で、東部と西部が幅狭である。深さは36~64cmで、北側が浅く、南側に向かって徐々に深くなり、北部と南部では1mの比高差がある。断面は皿状や逆台形状で、立ち上がりは墳丘側で35°~40°、外周側で約35°である。

周溝覆土 10層に分層できる。墳丘側や周溝外側からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片32点(高坏1、甕31)が出土している。ほかに混入した弥生土器片273点、古墳前期の土師器片662点、石器2点が出土している。土師器片は、周溝西部と北部の覆土下層と中層から多量に出土している。本来は本跡が掘り込んでいる弥生時代の第62号竪穴建物跡、古墳前期の第59号竪穴建物跡に伴うものと考えられる。1は北東部の覆土下層から、2南西部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土遺物及び5世紀中葉の第8号墳と墳丘の形態が類似しており、同時期もしくは近接した時期に構築されたと推測できる。



第182図 第7号墳出土遺物実測図

第94表 第7号墳出土遺物一覧(第182図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏		(27)		長石・石英・雲母	橙	普通	胴部外面ヘラツナア 内面ナア	覆土下層	10%
2	土師器	甕	17B	(80)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面ナア 体部外面ヘラツナア 胴部外面ヘラツナア	覆土中層	20%

第8号墳(第183・184図 第95表 PL19)

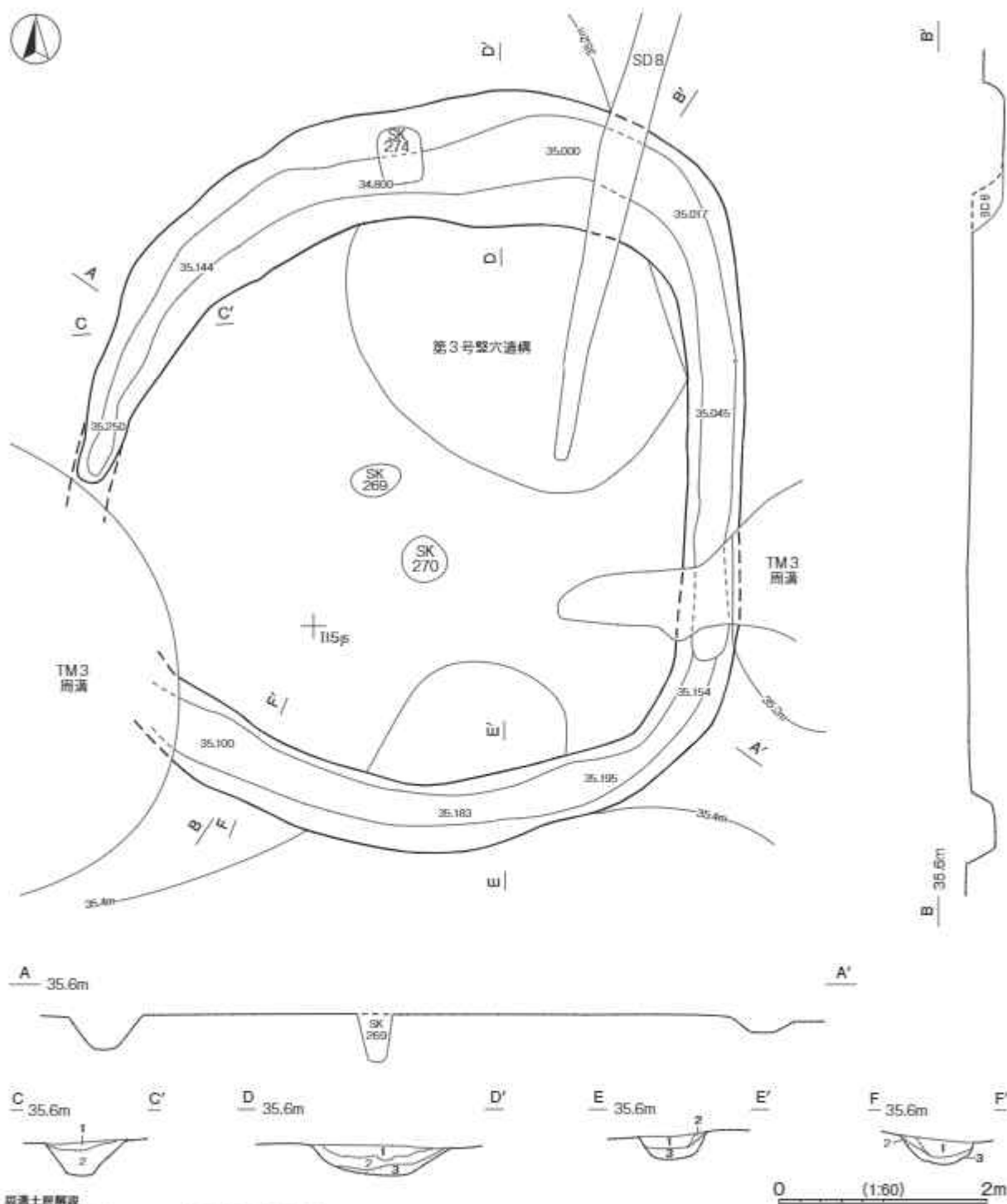
位置 調査区南部のI15h4~I15j5区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

確認状況 現況では墳丘の高まりはなく、表土除去後にC字状に巡る溝を確認した。

重複関係 第3号竪穴遺構を掘り込み、第269・270・274号土坑、第8号溝、第3号墳に掘り込まれている。

規模と形状 ほかの遺構と重複しているため、確認できた規模は墳丘径が長径5.75m、短径5.65m、周溝外径が長径7.26m、短径6.38mで、東部が西部より長い不整形の円墳である。墳丘と埋葬施設は不明である。周溝東側は直線状に掘り込まれている。周溝は全周していた可能性が高い。周溝幅は、上幅0.48~1.48m、下幅0.18~0.64mで、周溝の最大幅は北部東寄り付近、最小幅は西部中央付近である。深さは14~32cmで、東側が浅く、西側中央部に向かって徐々に深くなっている。断面は皿状や逆台形状で、立ち上がりは、墳丘側では30°~50°、外周側は約30°ほどである。

覆土 3層に分層できる。墳丘側や周溝外側からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

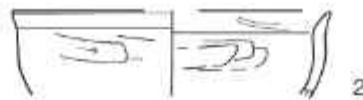
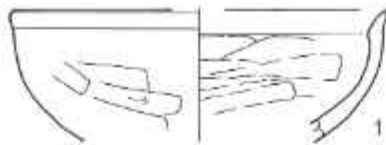


- 周溝土層解説
- | | | | |
|---|---------|-----|----------------------|
| 1 | 10YR2/4 | 暗褐色 | □-A小C・粒B/粘B、粘B |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色 | □-A小C・粒B/粘B、粘A |
| 3 | 10YR4/4 | 褐色 | □-A大A・中A、黒色土粒C/粘B、粘A |

第183図 第8号墳実測図

遺物出土状況 土師器片 34点（碗3、壺2、甕29）が出土している。ほかに混入した縄文土器片3点、弥生土器片69点、石器1点が出土している。1・2は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。また、7世紀前葉の第3号墳の周溝が、本跡の周溝外縁部端で途切れていることから、少なくとも7世紀前葉までは、本跡の墳丘が存在しており、第3号墳の周溝が、本跡の墳丘を掘り込んでいたと考えられる。



0 (1:3) 10cm

第184図 第8号墳出土遺物実測図

第95表 第8号墳出土遺物一覧(第184図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	輪	114.8	(52)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部断面三角形形状 体部外面へつ割り 内面へつ割り	覆土	40%
2	土師器	輪	112.6	(35)		長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面ナア 断面体部外面へつ割り 内面へつ割り	覆土	20%

第96表 古墳一覧

番号	形状	位置	墳丘 主軸方向	規模(m)		周溝					埋葬施設	主な出土遺物	時期	備考
				全長(径)	高さ(m)	上端(m)	下端(m)	深さ(cm)	壁面	底面				
2	円墳	1J5c5~ 1J5g0		13.90		1.14~ 2.52	0.30~ 0.94	50~ 65	外傾	皿状		土師器 石製品	5世紀 中葉	SI 44・46、第5号竪穴遺構、SK263→本跡→SB 1・3B、SK47・217、SF 1、第1号段切状遺構、SI200・21、TM 3
4	円墳	1J6g1~ 1J6j2		12.20		1.52~ 2.74	0.24~ 1.20	20~ 60	外傾	皿状			5世紀代	SI45A・55→本跡SK138~139・143・209、第4号竪土坑土坑
6	円墳	115D2~ 115d4		9.10~ 9.60		0.95~ 2.18	0.40~ 0.97	48~ 58	外傾	皿状		土師器 銅土器	5世紀 中葉	SI 2・3・4・12・13・16、SK275・276→本跡→SK51・52・65・67、SD 6
7	方墳	115f4~ 115h8	N 114° E	7.60~ 7.80		0.88~ 1.75	0.24~ 0.84	36~ 64	外傾	皿状		土師器	5世紀 中葉	SI 59・62→本跡→SK202
8	円墳	115h4~ 115j5		5.75~ 5.65		0.48~ 1.48	0.18~ 0.64	14~ 32	外傾	皿状		土師器	5世紀 中葉	第3号竪穴遺構→本跡→SK269・270・274、SD8、TM 3

番号	形状	位置	方向	規模(m)				周溝			埋葬施設	主な出土遺物	時代	備考		
				総長	墳長	後門径	くびれ幅	前方長	前方幅	上端(m)					下端(m)	深さ(cm)
3	前方後円墳	115d2~ 115e8	N 89° E	(2530)	(2140)	20.00	9.85	(662)		9.22~ 1.84	4.40~ 0.70	10~ 82	竪式石箱	土師器 銅土器 土製品 石製品 鉄製品 ガラス製品	7世紀 前半	SI 28・46・60・61・63・64、SK217、TM2・8→本跡→SI5・SK59・217・241・266・273・277・279・280、SF1、SD10・12、SX1
5	前方後円墳	115h8~ 116g1	N 81° E	(2230)	(1988)	17.60	7.30			1.90~ 5.10	0.25~ 0.90	38~ 94	竪式石箱	土師器 銅土器 鉄製品 ガラス製品 石箱材	7世紀 前半	SI 6・9・11・15・19・20・22・23・25・32、第2号竪穴遺構、SK62・91→本跡→SI5A・5B、SK3・7・11・19・21・23・28・29・53・56・58・75・76・85・88、289・290、SD5・7、SF 1、第1号土坑、第1号竪土坑土坑、SX3

5 平安時代の遺構と遺物

竪穴建物跡2棟を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

竪穴建物跡

第5号竪穴建物跡(第185・186図 第97表 PL20・45)

位置 調査区南部の1J5d4区、標高34mほどの台地緩傾斜面に位置している。

重複関係 第3号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.15m、短軸3.26mの長方形で、主軸方向はN-30°-Eである。壁は高さ14~38cmで、外傾している。

床 ほほ平坦である。壁際が緩やかに高くなっている。硬化はしていない。

竈 北東コーナー寄りに位置している。焚口部から煙道部の長さは110cmで、燃焼部幅は48cmである。燃焼部は床面を3~5cm掘りくぼめ、第11層を埋土して整地している。袖部は第7~10層を積み上げて構築してい

る。袖の内壁は赤変硬化している。火床面は第11層上面で、わずかに被熱している。煙道部は壁外に53cm張り出し、火床面から外傾して立ち上がっている。第2～6層には竈の構築材が含まれている。

ピット P1は、中央部南東壁寄りに位置している。長径62cm、短径55cm、深さ35cmの楕円形で、覆土には山砂や粘土ブロック・焼土などを含んでおり、竈の構築材などで埋め戻している。

覆土 15層に分層できる。全体的に周囲からの流入を示す堆積状況から自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片 38点（坏4、高台付碗2、碗

土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐 砂小B・粒B、黒色小B・粒B/粘C、細C
- 2 10YR3/2 黒褐 砂小C・粒B、黒色小C・粒B/粘C、細C
- 3 10YR3/4 暗褐 砂小C・粒C、黒色小C・粒C/粘B、細C
- 4 10YR3/1 黒褐 コ・A粒C、砂粒C、黒色中D・粒C/粘B、細C
- 5 2.5YR3/2 黒褐 コ・A粒C、焼土粒C、赤粒C/粘B、細C
- 6 10YR1/1 黒 コ・A粒D/粘B、細C
- 7 10YR2/2 黒褐 コ・A粒D、炭化粒D/粘HC
- 8 10YR3/1 黒褐 コ・A粒B/粘B、細C
- 9 10YR3/2 黒褐 コ・A小B・粒C/粘B、細C

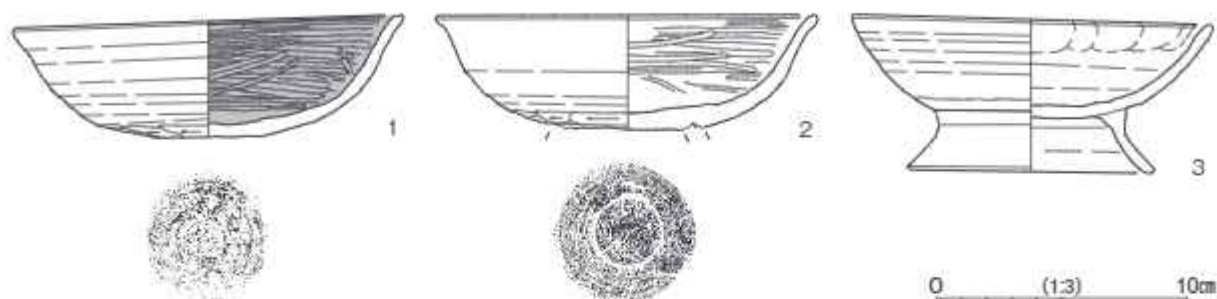
- 10 10YR3/2 黒褐 コ・A小B・粒C/粘B、細C
- 11 10YR3/3 暗褐 コ・A小B・粒B/粘B、細C
- 12 10YR2/4 暗褐 コ・A小C・粒A/粘B、細B
- 13 10YR3/2 暗褐 コ・A粒C/粘B、細C
- 14 10YR3/1 暗褐 コ・A粒A/粘B、細B
- 15 10YR3/4 暗褐 コ・A粒A/粘B、細C

P1土層解説

- 1 2.5YR3/4 暗褐 コ・A小D・粒C、焼土小D・粒C、炭化粒D、山砂B、粘土小C/粘B、細B

甌土層解説

- | | | | |
|----------------|-----------------------------------|-----------------|--------------------------------------|
| 1 10YR2/2 黒褐色 | ロ・ム小D・粘C、焼土粒D、炭化粒D、粘土粒D
/粘土、粘C | 7 10YR5/6 明黄褐色 | 焼土粒C/粘土、粘A |
| 2 10YR3/4 暗褐色 | 焼土粒D、炭化粒D、粘土粒C/粘土、粘B | 8 10YR5/6 明黄褐色 | ロ・ム小D・粘D、焼土粒D、炭化粒D、山砂D、
粘土A/粘A、粘A |
| 3 10YR3/4 暗褐色 | 焼土粒D、炭化粒D、粘土粒C/粘A、粘B | 9 10YR5/6 明黄褐色 | ロ・ム小D・粘D、山砂C、粘土A/粘A、粘B |
| 4 10YR4/4 粘 | 焼土粒D、粘土粒C/粘土、粘C | 10 10YR5/6 明黄褐色 | ロ・ム小C・粘D、山砂B、粘土A/粘A、粘A |
| 5 2.5YR2/4 暗褐色 | 焼土中C・小C・粘B、粘土粒C/粘C、粘C | 11 10YR4/3 紅褐色 | ロ・ム中C・小D・粘A/粘土、粘B |
| 6 5YR4/6 赤褐色 | 焼土小C・粘A/粘C、粘C | | |



第186図 第5号竪穴建物跡出土遺物実測図

第97表 第5号竪穴建物跡出土遺物一覧(第186図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	15.2	4.8	4.2	長石・石英・雲母・黒色・赤色粒子	にぶい帯	普通	内外面口クロナア 体部下端手持ちへつ削り 内面へつ磨き 底面「キ」へつ記号 内面黒色 肌厚	床面	70% PL45
2	土師器	高台付碗	14.9	(4.60)	—	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい帯	普通	内外面口クロナア 体部下端手持ちへつ削り 内面へつ磨き 高台欠損 底面回転糸切り	床面	60% PL45
3	土師器	高台付碗	14.1	6.20	9.4	長石・石英・雲母・黒色・赤色粒子	帯	普通	内外面口クロナア 口縁部内面指痕痕 高台貼付け	床面	90% PL45

第14号竪穴建物跡(第187・188図 第98表 PL20・45)

位置 調査区北西部のI15B区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第16号竪穴建物跡を掘り込み、第6号溝、第284号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸260m、短軸260mの不整形で、主軸方向はN-45°-Eである。壁は高さ4~14cmで、外傾している。

床 はほぼ平坦で、硬化はしていない。

竈 北東壁のやや北寄りに位置している。規模は焚口部から煙道部まで83cmで、燃焼部幅は13cmである。燃焼部は床面を5cmほど掘り込み、第10層を埋土して整地している。袖部はロームブロックや粘土、山砂、焼土を含む第7~9層を積み上げて構築している。左袖の内側は、被熱により赤変硬化している。火床部は楕円形で、床面から5cmほど高くなっている。火床面は第10層上面で、被熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に55cmほど張り出し、火床面から緩やかに立ち上がっている。

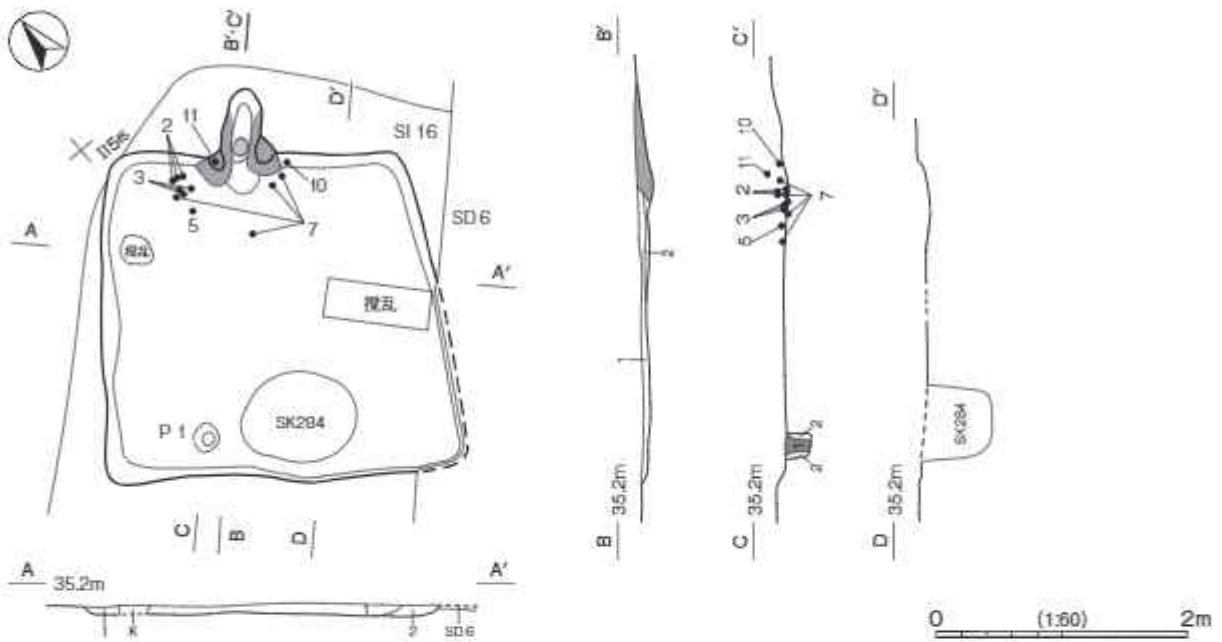
ピット P1は深さ18cmで、南西壁の西寄りに位置している。配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。第1層は柱痕跡、第2層は掘方埋土である。

覆土 2層に分層できる。ローム粒子と焼土粒子を均質に含むことから、自然堆積である。

遺物出土状況 土師器片75点(坏9、高台付坏2、碗16、高台付碗4、甕44)が出土している。ほかに混入した弥生土器片89点(広口壺)が出土している。土師器片は竈内や竈周辺の床面から覆土下層にかけて、まとまって出土している。1・4・9は火床面上からの出土で、9の上に伏せた状態で被熱を受けた1・4が出土していることから、支脚に転用したものと考えられる。また、8は竈右袖内側の覆土中層から出土している。2・5・7・10は竈袖前の覆土下層から、3は伏せた状態で床面から、6は覆土中から、11は左袖上から、

それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前後と考えられる。

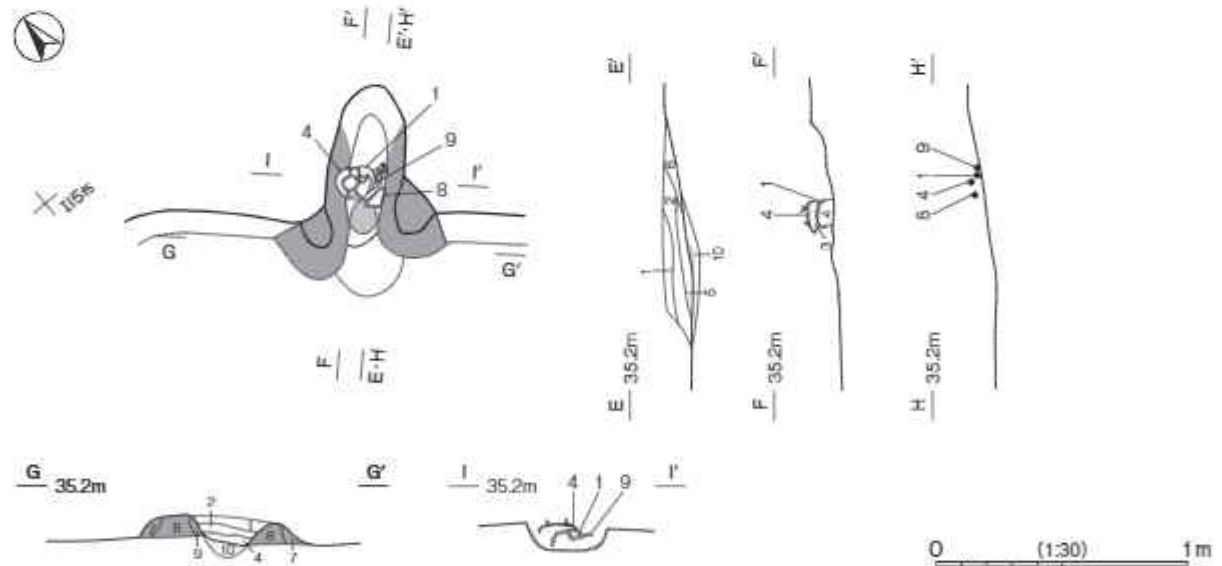


土器解説

- 1 10YR2/2 黒褐色 土器 コ・ム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D、山砂D/粘B、雑B
- 2 10YR4/4 黒 土器 コ・ム小C・粒B、焼土粒C、炭化粒C、粘土小D、山砂D/粘B、雑B

ピット土器解説

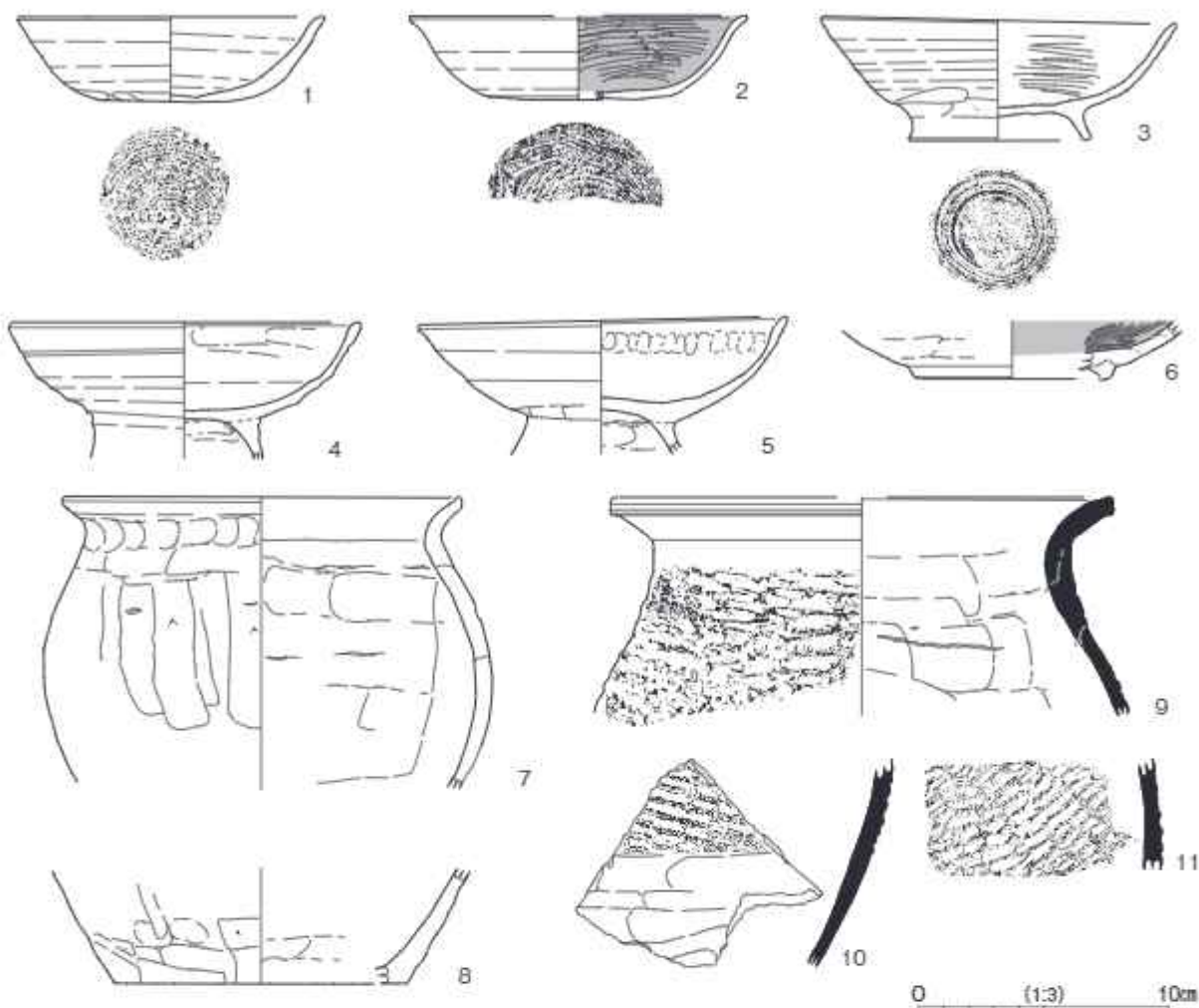
- 1 10YR2/3 暗褐色 土器 コ・ム小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雑C
- 2 10YR2/4 暗褐色 土器 コ・ム中D・小C・粒B、炭化粒D/粘B、雑A



第187図 第14号竪穴建物跡実測図

土器解説

- 1 Z5YR2/3 暗褐色 土器 コ・ム小C・粒C、焼土小D・粒B、炭化粒D、粘土粒D、山砂D/粘B、雑B
- 2 Z5YR2/2 暗褐色 土器 コ・ム小D・粒D、焼土粒D、炭化粒D、粘土粒D、山砂D/粘B、雑B
- 3 5YR6/6 赤褐色 土器 コ・ム小D・粒C、焼土小C・粒B、山砂D/粘C、雑B
- 4 5YR4/6 赤褐色 土器 コ・ム小D・粒C、焼土小C・粒B、山砂D/粘C、雑A
- 5 Z5YR4/4 暗褐色 土器 コ・ム小D・粒C、焼土中D・小B・粒B、炭化粒D、山砂D/粘B、雑B
- 6 Z5YR5/6 暗褐色 土器 コ・ム小C・粒B、焼土小D・粒C、炭化粒D、山砂D/粘B、雑B
- 7 10YR4/4 暗褐色 土器 コ・ム中D・小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D、粘土小D・粒D、山砂D/粘B、雑B
- 8 10YR4/6 暗褐色 土器 コ・ム小C・粒B、焼土小D・粒C、炭化粒D、粘土小D・粒D、山砂C/粘B、雑B
- 9 5YR5/6 明赤褐色 土器 コ・ム粒D、焼土小C・粒B、山砂D/粘B、雑B
- 10 Z5YR5/4 暗褐色 土器 コ・ム中C・小B・粒A、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雑B



第188図 第14号竪穴建物跡出土遺物実測図

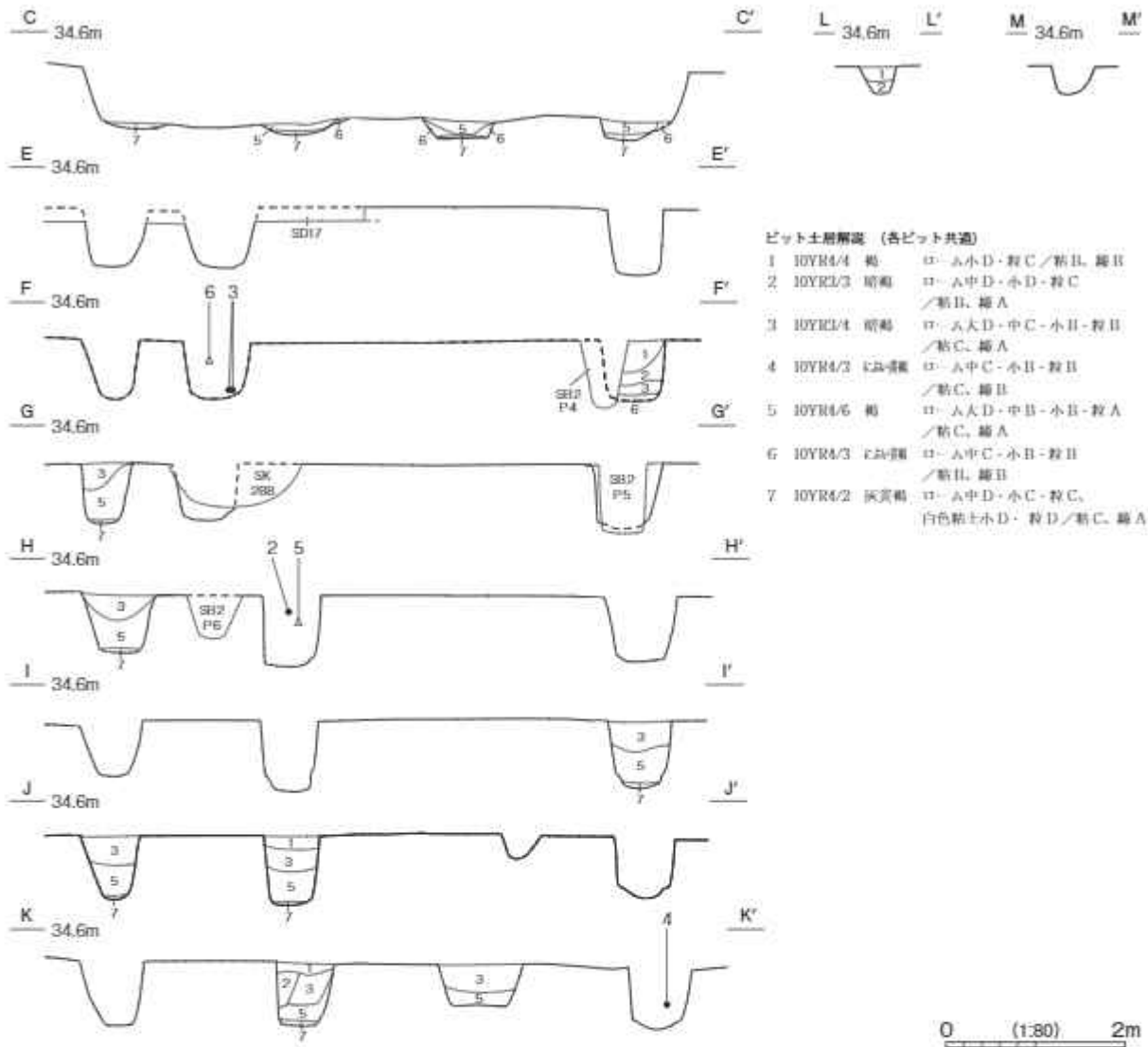
第98表 第14号竪穴建物跡出土遺物一覧(第188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.1	3.4	5.3	長石・石英 赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部・体部内外面ロクロナデ 底部回転系切り 後外周へつ削り 内外被熱・一部剥落	竈内 覆土上層	90% PL45
2	土師器	坏	[13.3]	[3.4]	[7.4]	長石・石英・雲母 白色粒子	にぶい橙	普通	口縁部・体部外面ロクロナデ 内面へつ磨き 底部回転系切り後外周へつ削り	床面 覆土上層	30% PL45
3	土師器	高台付碗	14.0	5.0	[6.9]	長石・石英・雲母 白色粒子	橙	普通	口縁部・体部外面ロクロナデ 体部内面へつ磨き 底部回転へつ削り	床面	90% PL45
4	土師器	高台付碗	13.8	(5.4)	-	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部・体部外面ロクロナデ 底部回転系切り 後高台周付け 一部剥落	竈内 覆土中層	80% PL45
5	土師器	高台付碗	14.5	(5.5)	-	長石・石英 白色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部・体部内外面ロクロナデ 底部高台周付け	覆土下層	90% PL45
6	土師器	高台付碗	(2.3)	7.8	-	長石・石英・雲母 白色粒子	橙	普通	体部外面ロクロナデ 内面へつ磨き 体部下端 へつ削り 底部高台周付け	覆土	5%
7	土師器	甕	15.7	(11.6)	-	長石・石英・雲母 白色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部内外面ナデ 胴部外面へつ削り 内面へ つ削り	床面～覆土 下層	30% PL45
8	土師器	甕	(4.7)	[11.6]	-	長石・石英 白色粒子	明赤褐色	普通	体部外面へつ削り 内面へつ削り 底部へつ削り	竈内 覆土中層	5%
9	須恵器	甕	18.8	(8.7)	-	長石・石英・網礫	明赤褐色	普通	口縁部内外面ナデ 体部外面に叩き目 内面へつ削り 胴部被熱による剥落	竈内 覆土上層	10% PL45
10	須恵器	甕	(8.3)	-	-	長石・石英 赤色粒子	橙	普通	№9と同一個体。体部外面へつ削り 叩き目 内面へつ削り	覆土下層	5%
11	須恵器	甕	(4.4)	-	-	長石・石英 赤色粒子	明赤褐色	普通	№9と同一個体。体部外面叩き目	竈内 覆土上層	5%

第99表 平安時代竪穴建物跡一覧

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	取清	内部施設				土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	壁高 (cm)			竈	出入口	ピット	土				
5	115at	N 30° E	長方形	4.15 × 3.26	14 ~ 38	平間				1	土	自然	土師器 須恵器	10世紀前半	TM 3 → 本跡
14	115b	N 45° E	不整形	2.60 × 2.60	4 ~ 14	平間				1	土	自然	土師器 須恵器	10世紀前半	SH6 → 本跡 → SK284

第1号掘立柱建物跡（第189～191図 第100表 PL20～22）



第190図 第1号掘立柱建物跡実測図(2)

重複関係 第51・52A・52B・53号竪穴建物跡、第2・3A・3B号掘立柱建物跡、第219・260・267号土坑、第20・21号溝跡、第4A・4B・5号柱穴列を掘り込み、第2号掘立柱建物、第17号溝、第99・254・287・288号土坑に掘り込まれている。第60・118・130号土坑との関係は不明である。

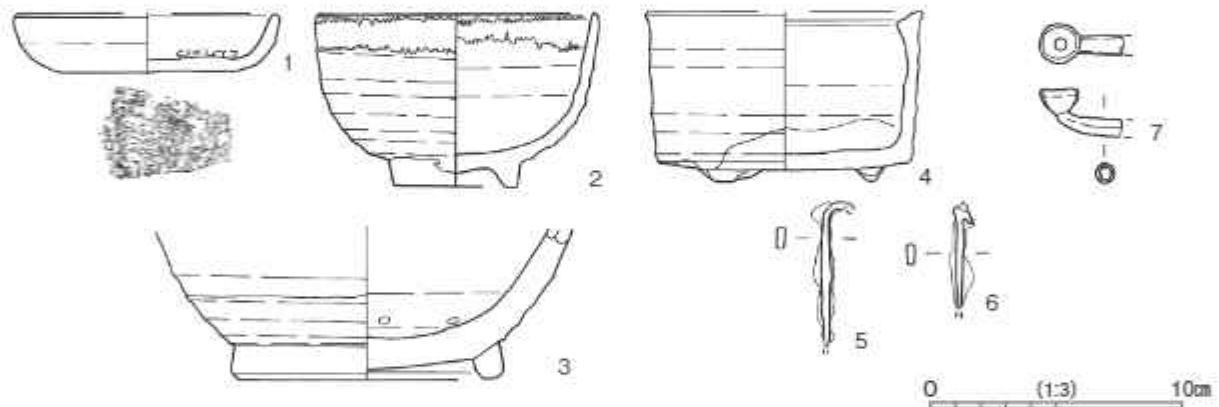
規模と構造 桁行6間、梁行3間の側柱建物で、桁行方向がN-90°-Wの東西棟である。規模は、桁行が12.00m、梁行6.10mで、面積は73.20㎡である。柱間寸法は、北・南桁行が西から1.86m、1.85m、1.85m、2.72m、1.86m、1.86mである。東柱と考えられるP9～P12の3間の柱穴列とP13～P15の2間の柱穴列は南北方向に約0.75mずれている。また、東梁行ではP8とP9に対応する柱穴は確認できなかった。

柱穴 23か所。南桁行のP1～P7、東柱の可能性が考えられるP9～P12とP13～P15は布掘り地業を伴い、その他は独立して掘削している。布掘り地業を伴ったP1～P7とP9～P15はいずれも布掘りの底面で確認した。3か所の布掘り地業では、版築による突き固めなどは認められなかった。3か所の布掘り地業の規模と形状は、南桁行のP1～P7までが、長軸1.29m、短軸0.64～0.86mで、深さ60cmである。東柱の可能性が考えられるP9～P12までが、長軸6.80m、短軸0.60～0.70m、深さ52～60cmで、P13～P15までが長軸4.60m、短軸0.74m、深さ58～60cmである。個々の柱穴の平面形は、円形、楕円形、隅丸長方形で、布掘り地業の底面に残る規模は、長径62～102cm、短径46～56cm、深さ4～18cmである。P8、P16～P

22の平面形は楕円形、隅丸長方形で、長径96～110cm、短径62～92cm、深さ64～74cmである。P 23の平面形は円形で、長径46cm、短径42cm、深さ28cmである。P 23を除いて、底面付近の覆土である第7層上面で、径16～32cmの円形や楕円形の硬化部分を確認した。覆土は、第1～5層が柱抜き取り後の埋戻し土、第6・7層が掘方埋土である。なお、布掘り地業と説明してきた第188図のB-B'ラインにおける土層堆積状況から判断すると、溝状の柱抜き取り痕の可能性が高い。第188図A-A'・C-C'ラインでは、縦断面の土層堆積状況を記録できなかったため、建物構築時の布掘り地業なのか、B-B'ラインと同様に溝状の柱抜き取り痕の可能性があるのか判断できない。

遺物出土状況 土師質土器片4点(皿3、鍋1)、陶器片9点(碗5、香炉1、壺2、甕1)、磁器片1点(碗) 金属製品3点(釘2、煙管1)が出土している。ほかに混入した縄文土器片2点、弥生土器片71点、土師器片50点、焼成粘土塊2点、石器1点が出土している。1はP 18の覆土中から、2・5はP 12の覆土上層から、3はP 14の覆土下層から、6はP 14の覆土中層から、4はP 7の覆土中層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物から17世紀後半から18世紀前半と考えられる。本跡と第3A・3B号掘立柱建物跡は、桁行方向がほぼ直行し、規模と構造も異なるが、ほぼ同一地点に構築していることから、第3A・3B号掘立柱建物から本跡への建て替えが推測できる。



第191図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第100表 第1号掘立柱建物跡出土遺物一覧(第191図)

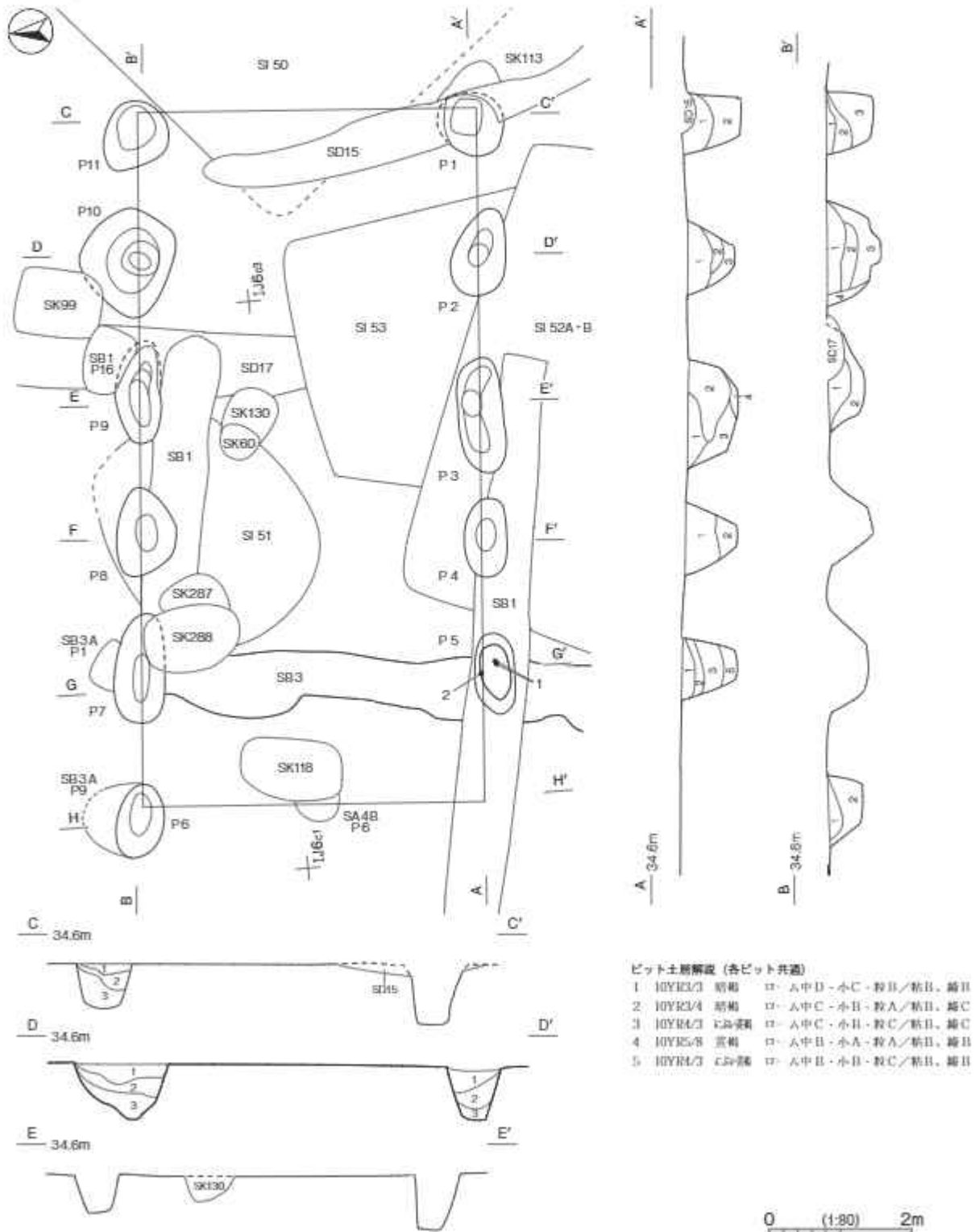
番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土・色調	色調	検成	特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	110.4	23	17.0	長石・石英赤色粒子	にぶい橙	普通	内面見込み指痕 底部回転糸切り	P18 覆土	30%
2	陶器	碗	11.0	6.9	5.0	緻密 灰白 浅黄	尾呂赤陶	高台部以外内外軸差	胎軸 ぶのう軸	掘り・美濃	P12 覆土上層 60% PL46
3	陶器	甕	(6.1)	10.9		緻密 浅黄橙		内面見込み部トナリ痕 内外軸差	鉄軸	掘り・美濃	P14 覆土下層 20% PL46
4	陶器	香炉	110.8	6.8	10.2	緻密 赤褐 長石		平筒形 二足 内面体部筋軸 或部内面無軸 体部外面乳濁軸	鉄軸 乳濁軸	掘り・美濃	P7 覆土中層 60% PL46
5	不明金属製品		(5.8)	(1.3)	0.9	(6.35)	鉄		断面長方形 頭部L字状 両端部欠損 6と同一個体。	P12 覆土上層	PL46
6	不明金属製品		(4.1)	0.8	0.8	(4.14)	鉄		断面長方形 頭部L字状 両端部欠損 5と同一個体。	P14 覆土上層	PL46
7	煙管		(3.3)	(1.9)	(1.6)	(4.83)	銅・竹		首部 銅板貼付	P12 覆土	17C 後葉 PL46

第2号掘立柱建物跡 (第192・193図 第101表 PL20・21・46)

位置 調査区東部

重複関係 第50・51・52A・52B・53号竪穴建物跡、第1・3A号掘立柱建物跡、第113号土坑を掘り込み、第99・288号土坑、第15・17号溝に掘り込まれている。第60・118・130・287、第4A・4B・5号柱穴列との関係は不明である。

規模と構造 桁行5間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向はN-90°-Eの東西棟である。規模は桁行



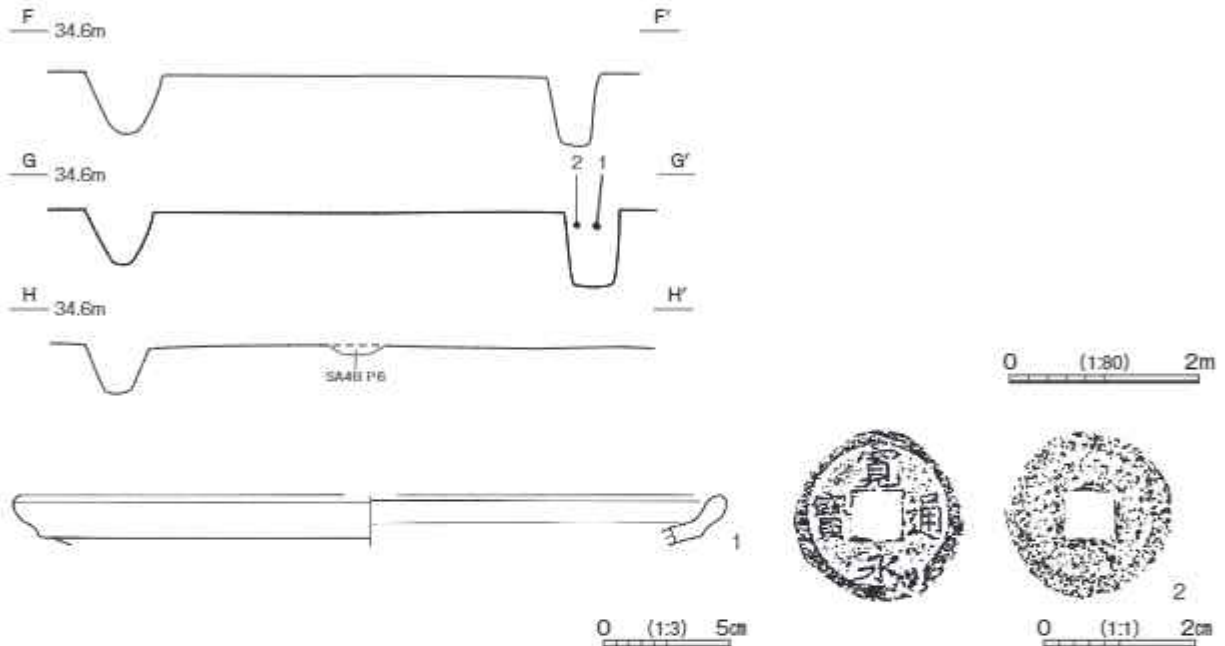
第192図 第2号掘立柱建物跡実測図

9.75m、梁行4.80mで、面積は46.80㎡である。柱間寸法は、南桁行は西から1.83m、1.83m、1.83m、2.13m、2.13m、北桁行は西から1.82m、2.10m、1.83m、1.90m、2.10mである。東梁行4.76mで、西桁行は重複で不明である。柱筋は概ね揃っている。

柱穴 11か所。平面形は楕円形や不整楕円形で、規模は長径65～165cm、短径65～130cmで、深さは44～80cmである。壁は外傾している。覆土の第1～5層は、柱抜き取り後の埋戻し土である。

遺物出土状況 陶器片1点(Ⅲ)、銭貨1点(寛永通宝)がP5の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土遺物と重複関係から18世紀後半と考えられる。



第193図 第2号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第101表 第2号掘立柱建物跡出土遺物一覧(第193図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴	輪変	産地	出土位置	備考
1	陶器	折縁皿	(27.4)	(2.0)		緻密 淡黄	折縁皿 内外面施釉	灰釉	瀬戸・伊豆	P5 覆土上層	5%
番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋳年	特徴		出土位置	備考
2	寛永通宝	2.30	0.60	0.10	2.99	銅	1626	無背銭		P5 覆土上層	PLA6

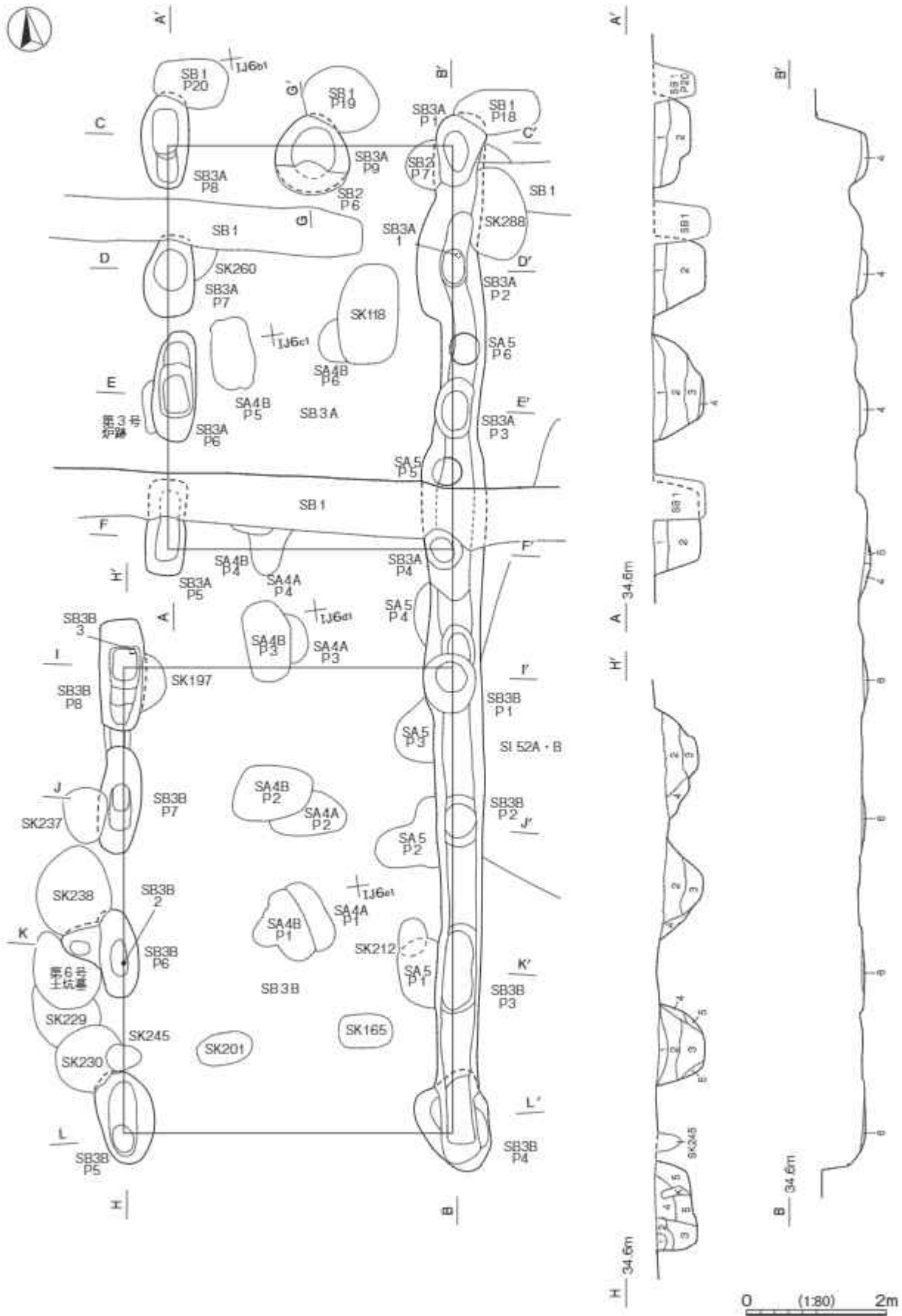
第3A号掘立柱建物跡(第194～196図 第102表 PL20・21)

位置 調査区東部I J 5 b0～I J 6 c1区、標高34mほどの台地平坦面に位置している

重複関係 第260号土坑、第3号加跡、第5号柱穴列を掘り込み、第1・2号掘立柱建物、第288号土坑に掘り込まれている。第118号土坑、第4A・4B号柱穴列との関係は不明である。

規模と構造 本跡は第3B号掘立柱建物と布掘り地業で東壁を揃えている。桁行3間、梁行北妻2間、南妻1間の側柱建物で、桁行方向がN-8°-Eの南北棟である。規模は桁行5.80m、梁行4.10mで、面積は23.78㎡である。柱間寸法は、東西桁行が北から1.85m、1.85m、2.10m、北梁行が西から2.05m、2.05m、南梁行が4.10mである。柱筋はほぼ揃っている。壁は外傾または直立している。

柱穴 9か所。P1～P4は布掘り地業を伴い、いずれもその底面で確認した。布掘り地業では、版築による突き固めなどは認められなかった。布掘り地業の規模と形状は、長軸5.76m、短軸0.98m、深さ42～48cmで、北側に向かって底面が高くなる。断面は逆台形や方形で、壁は外傾または直立している。個々の柱穴の平面形



第194图 第3A・3B号独立柱建物跡実測图(1)

は円形や楕円形で、布掘り地業底面に残る規模は、長径122～155cm、短径55～78cmである。深さは42～68cmである。P5～P9の平面形は楕円形で、長径116～158cm、短径58～72cmで、深さ52～72cmである。なお、布掘り地業と説明してきたが、第1号掘立柱建物跡と同様に、溝状の柱抜き取り痕跡の可能性もある。第193図のB-B'ラインでは、縦断面の土層堆積状況を記録できなかったため、建物構築時の布掘り地業なのか廃絶時の柱抜き取り痕跡の可能性があるか判断できない。

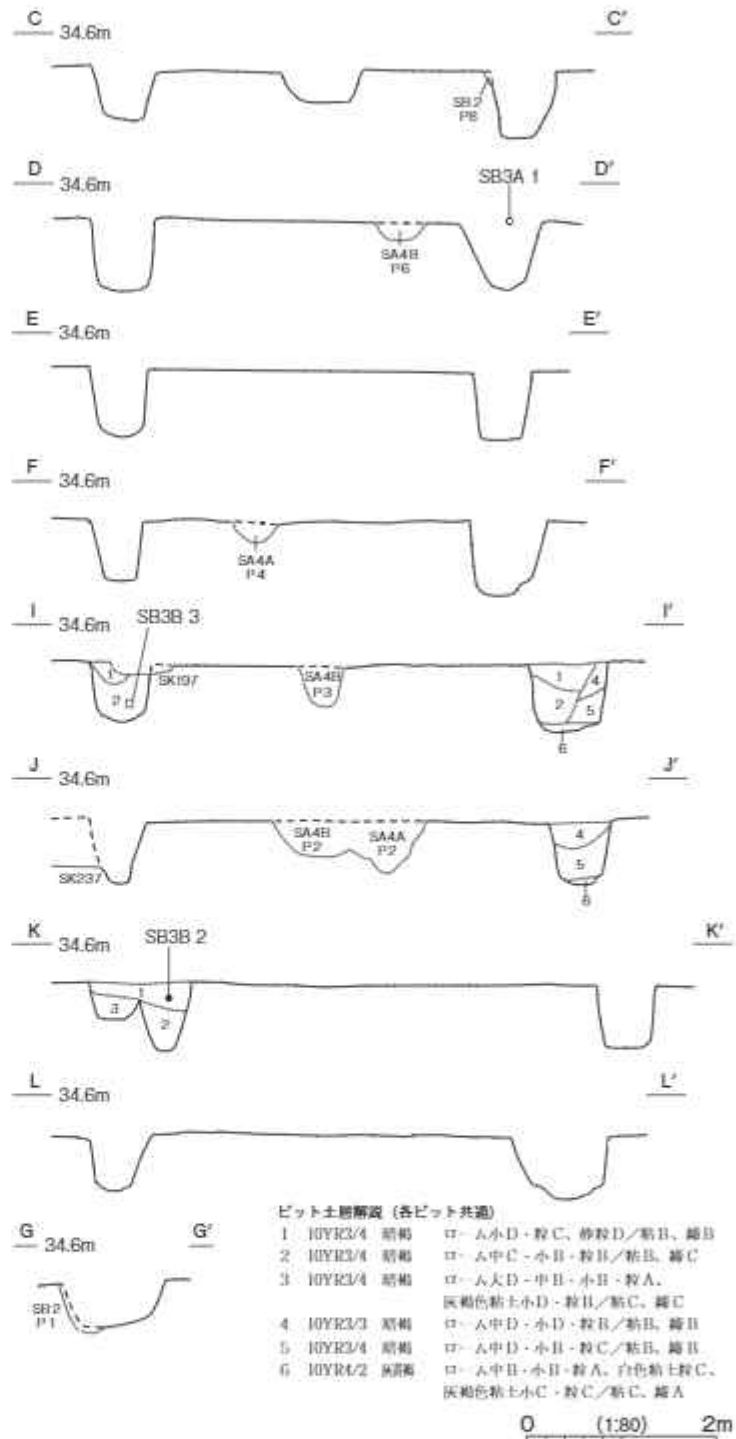
覆土 4層に分層できる。第1～3層が柱抜き取り後の埋戻し土で、第4層は掘方の埋土である。

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)、土製品1点(土玉)、石器1点(凝灰岩製砥石)、金属製品1点(不明鉄製品)が出土している。土師質土器や鉄製品は布掘り地業の覆土中、1は布掘り地業の覆土上層から、それぞれ出土している。

所見 時期を特定できる遺物は出土していない。本跡は第3B号掘立柱建物跡と同様に布掘り地業、あるいは溝状の柱抜き取り痕を伴い、桁行方向も一致していることから関連性が強く、ほぼ同時期に存在していたと推測できる。時期は、第3B号掘立柱建物跡を参考にすると、17世紀後半から18世紀前半と推定される。また本跡と第1号掘立柱建物跡は、桁行方向がほぼ直行し、規模と構造も異なるが、ほぼ同一地点に構築していることから、第1号掘立柱建物跡への建て替えが推測できる。

第102表 第3A号掘立柱建物跡出土遺物一覧(第196図)

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
1	土玉	1.6	1.4	無孔	274	長石・石英	にぶい濁	ヘツナツ 指頭痕	P2 覆土上層	



第195図 第3A・3B号掘立柱建物跡実測図(2)



第196図 第3A号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第3B号掘立柱建物跡 (第194・195・197図 第103表 PL20・21・46)

位置 調査区東部 I J 5 d0 ~ I J 6 e1 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第52A・52B号竪穴建物跡、第5号柱穴列を掘り込み、第197・230・237・238号土坑、第6号土坑墓に掘り込まれている。第165・201・212・245号土坑、第4A・4B号柱穴列との関係は不明である。

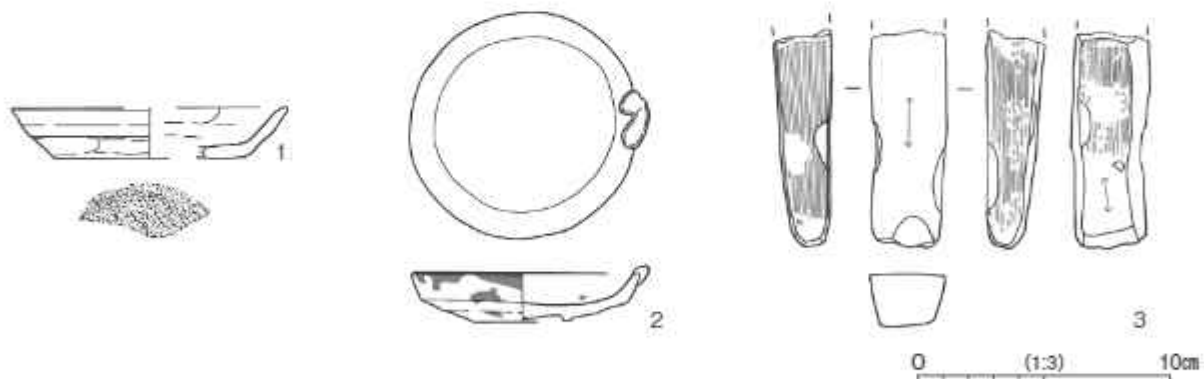
規模と構造 桁行3間、梁行1間の竪柱建物で、桁行方向がN-8°-Eの南北棟である。規模は桁行6.70m、梁行4.80mで、面積は32.16m²である。柱間寸法は、西桁行が北から2.10m、2.30m、2.30m、東桁行が北から2.14m、2.14m、2.42mで、北・南梁行が4.83mである。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。P1~P4は布掘り地業を伴い、いずれもその底面で確認した。布掘り地業では版築による突き固めなどは認められなかった。布掘地業の規模と形状は、長軸6.70m、短軸0.82m、深さ50~62cmで、底面はほぼ平坦である。断面は逆台形や方形で、壁は外傾または直立している。個々の柱穴の平面形は円形や楕円形で、布掘地業の底面に残る規模は、長径74~144cm、短径42~106cmである。深さは62~68cmである。P5~P9の平面形は楕円形で長径124~160cm、短径60~106cmで、深さ52~68cmである。なお、布掘り地業については第3A号掘立柱建物跡で述べたとおり、溝状の柱抜き取り痕の可能性もある。

覆土 6層に分層できる。第1~3層が柱抜き取り後の埋め戻し土で、第4~6層は掘方の埋土である。第6層は非常に締まりが強い。

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)、陶器片1点(皿)、石器1点(砥石)、金属製品1点(不明鉄製品)が出土している。ほかに混入した弥生土器片15点、土師器片30点が出土している。土師質土器や鉄製品は、布掘り地業の覆土中から、2はP6、3はP8の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物から17世紀後半から18世紀前半と考えられる。第3A号掘立柱建物跡と桁行方向も一致していることから関連性が強く、ほぼ同時期に存在していたと推測できる。また、本跡と第1号掘立柱建物跡は、桁行方向がほぼ直行し、規模や構造も異なるが、第1号掘立柱建物への建て替えが推測できる。



第197図 第3B号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第103表 第3B号掘立柱建物跡出土遺物一覧(第197図)

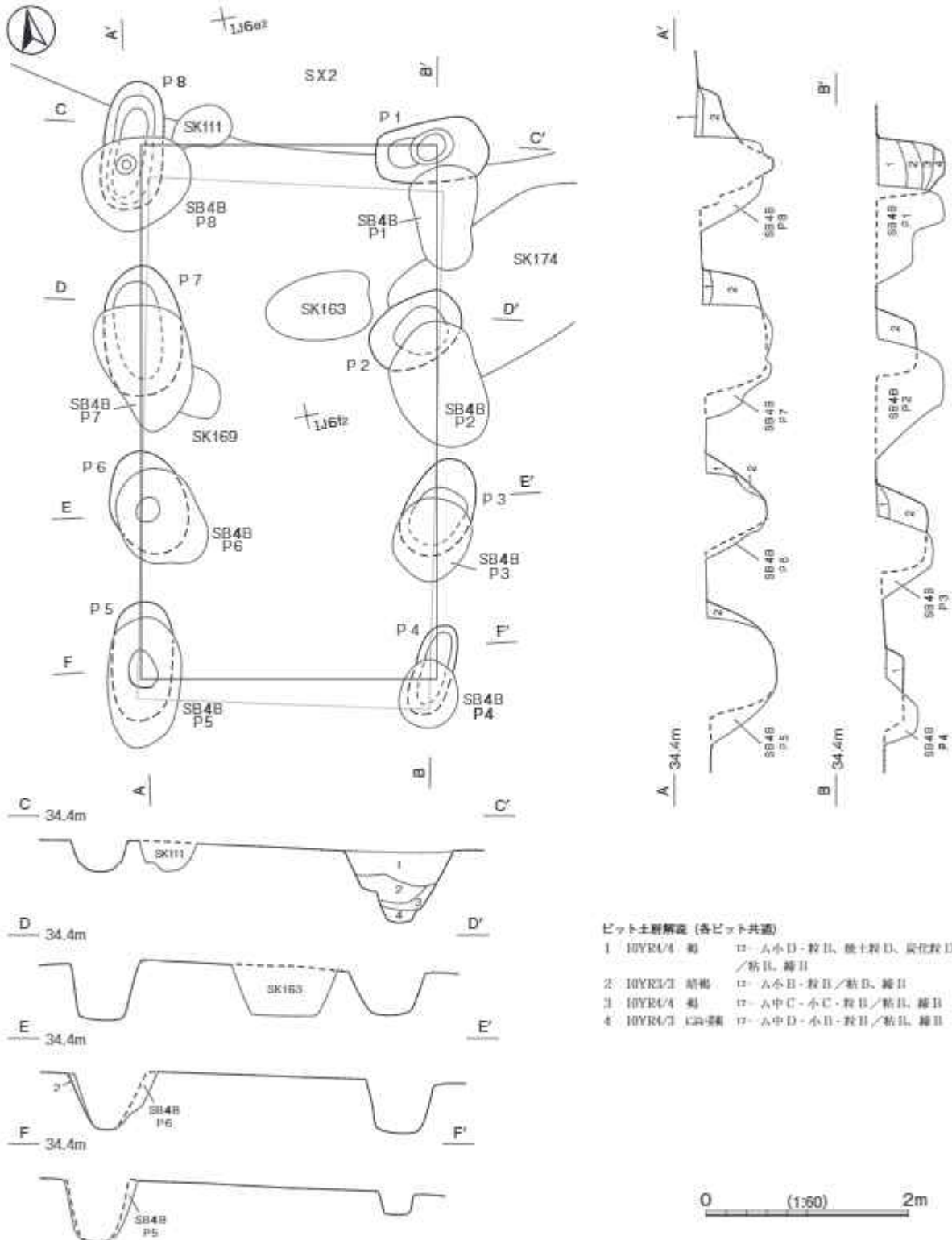
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	[10.6]	2.0	[7.5]	長石・石英赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁成形 口縁部内外面施釉面 体部下平部ナツ 底面回転糸切り 打明瓦転用	P6覆土	30%
2	陶器	灯明皿	9.1	2.0	3.8	細密 淡黄			口縁部袖み付、割り底 厚狭 打明瓦転用 内面見込み部トナシ裏	P6覆土上層	100% PL46
3	石器		長さ(8.7)	幅(3.1)	厚さ(2.4)	重量(88.04)	材質(凝灰岩)		特徴(砥面2面 側面・下面磨面状の削痕)	P8覆土下層	PL46

第4A号掘立柱建物跡 (第198図 PL22)

位置 調査区東部I J 6e1 ~ I J 6f2区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第169・174号土坑、第2号不明遺構を掘り込み、第4B号掘立柱建物に掘り込まれている。第163号土坑との関係は不明である。

規模と構造 桁行3間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-17°-Eの南北棟である。規模は桁行5.25 m、梁行3.00 m、面積は15.75㎡である。柱間寸法は西桁行が北から1.80 m、1.70 m、1.60 m、東桁行が北から1.80 m、



第198図 第4A号掘立柱建物跡実測図

1.80 m、1.50 mで、北・南梁行が3.00 mである。柱筋は概ね揃っている。

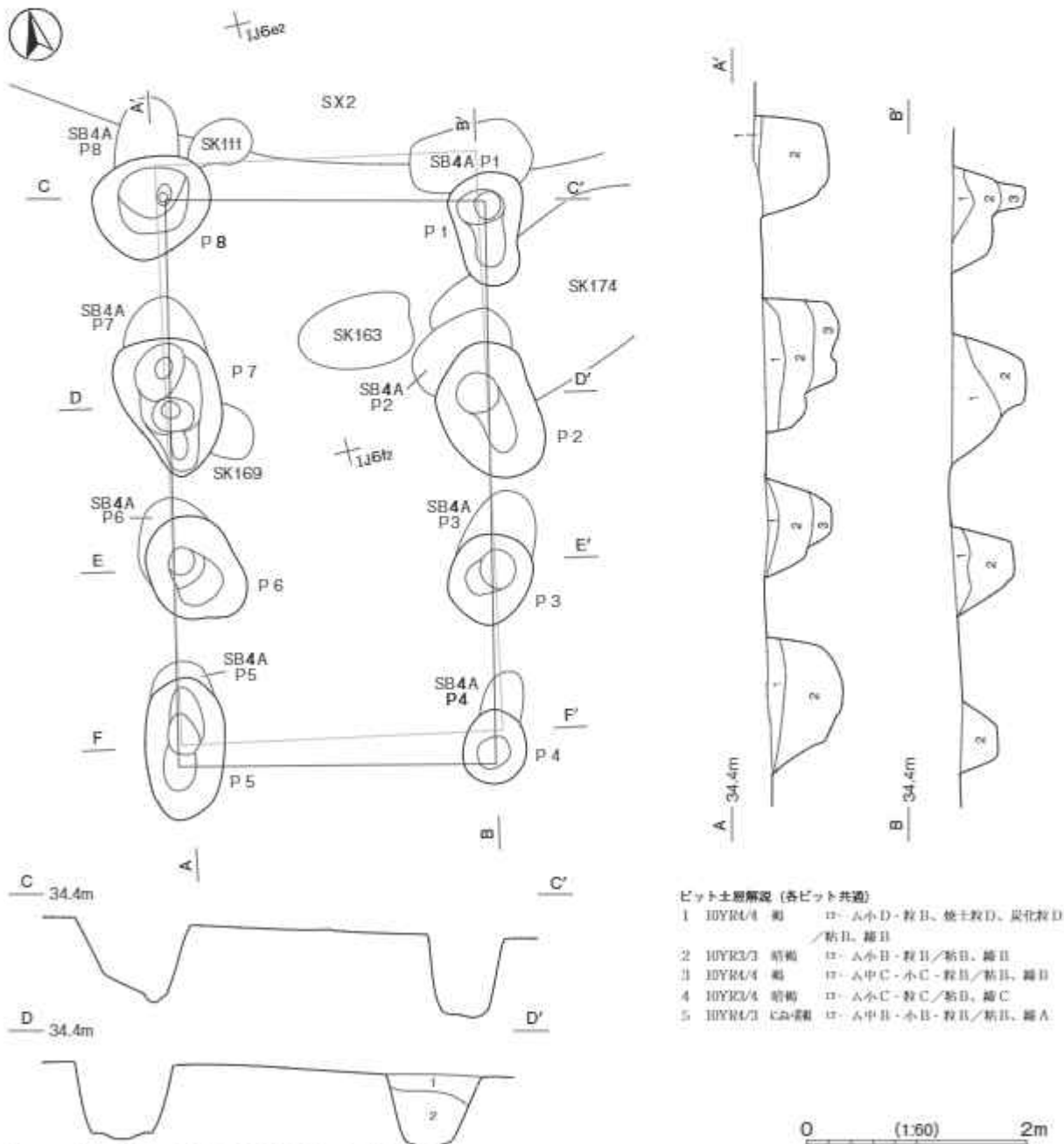
柱穴 8か所。平面形は楕円形・不整形で、規模は長径98～130cm、短径は36～75cmと推定でき、深さは20～70cmである。P1は西壁で段を有している。壁は外傾または直立している。覆土の第1～4層は、柱抜き取り後の埋戻し土である。

遺物出土状況 混入した弥生土器片2点、土師器片4点が出土している。

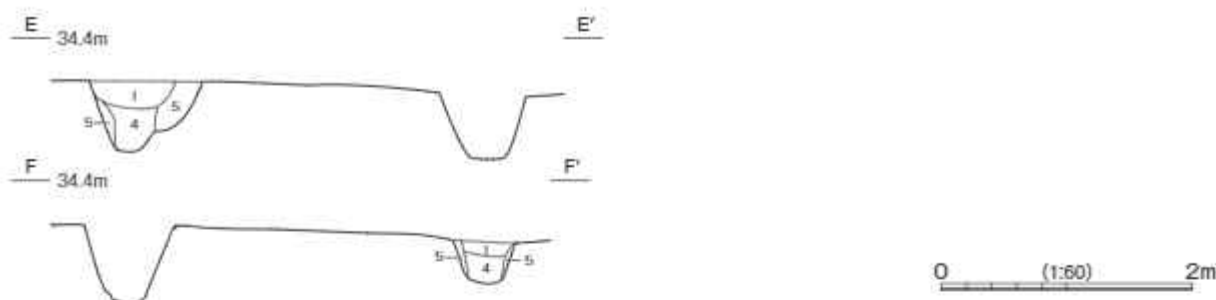
所見 柱穴の重複関係や桁行方向から、第4B号掘立柱建物への建て替えが推定できる。北側の位置する第1号掘立柱建物跡や東側の第3号掘立柱建物と桁行方向がほぼ同じで、関連がうかがわれることから、時期は第1・3号掘立柱建物跡と同時期の17世紀後半から18世紀後半と考えられる。

第4B号掘立柱建物跡 (第199・200図 PL22)

位置 調査区東部I J 6e1～I J 6f2区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。



第199図 第4B号掘立柱建物跡実測図 (1)



第200図 第4B号掘立柱建物跡実測図(2)

重複関係 第4A号掘立柱建物跡、第111・169・174号土坑を掘り込んでいる。第163号土坑との関係は不明である。

規模と構造 桁行3間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-22°-Eの南北棟である。規模は桁行5.15m、梁行2.90m、面積は14.94㎡である。柱間寸法は西桁行が北から1.85m、1.50m、1.80m、東桁行が北から1.80m、1.55m、1.80m、南・北の梁行が2.90mである。柱筋は概ね揃っている。

柱穴 8か所。平面形は楕円形や不整形で、規模は長径65～125cm、短径56～95cmである。深さは33～72cmで、壁は外傾または直立している。P2・7は、南側の柱から、それぞれ1.50m幅から1.80m幅に柱を建て替えている。P4・P6を除き、柱はいずれも抜き取られている。第1～4層は柱抜き取り後の流入土、第5層は掘方埋土である。

遺物出土状況 陶器片1点(碗)の細片がP5の覆土中から出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片5点、土師器片7点、瓦片1点が出土している。

所見 時期は17世紀後半から18世紀後半と考えられる。重複関係から、第4A号掘立柱建物を建て替えたものと推定できる。

第5A号掘立柱建物跡(第201図 第104表 PL22・46)

位置 調査区北部I I 5 b0～I I 6 c1区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第20号竪穴建物跡、第3・19号土坑、第1号粘土貼土坑、第5号墳を掘り込み、第5B号掘立柱建物、第3号不明遺構に掘り込まれている。第21号土坑との関係は不明である。

規模と構造 重複のため、柱穴の上半は削平を受けている。桁行1間、梁行1間で身舎に南の底が付く側柱建物で、桁行方向がN-16°-Eの南北棟である。規模は、桁行3.60m、梁行2.43m、面積は8.75㎡である。身舎の柱間寸法は、桁行、梁行共に2.40mである。庇は、南側に桁行幅の半分の1.20mほどである。柱筋は、P2を除いてほぼ揃っている。

柱穴 6か所。平面形は円形や楕円形で、規模は長径68～130cm、短径38～78cmと推定できる。深さは25～55cmで、壁は外傾または直立している。P2を除いて、底面から径15～33cmの円形や楕円形の硬化部分を確認した。覆土の第1・2層は、ロームブロックを多く含むことから、柱抜き取り後の埋戻し土である。

遺物出土状況 土師質土器片1点(灯明皿)、石器1点(凝灰岩製砥石)、金属製品2点(鉄滓)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片2点、土師器片6点、焼成粘土塊1点が出土している。1・4はP1、2・3はP4、5はP5の覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係から18世紀前半と考えられる。また、柱穴の重複関係から、第5B号掘立柱建物への建て替えが推定できる。

第 203 图 第 5 B 号掘立柱建物跡出土遺物実測图

第 105 表 第 5 B 号掘立柱建物跡出土遺物一覽 (第 203 图)

番号	位置	桁行方向	柱間数	規 模 桁 × 梁 (m)	面積 (㎡)	柱間寸法		柱 穴			主な出土遺物	時 期	備 考	
						桁間 (m)	梁間 (m)	構造	柱 数	平 面 形				深 さ (cm)
1	115a 116a	N 90° W	6 × 3	12.00 × 6.10	73.20	1.85 ~ 2.72	3.05 ~ 4.45	榺柱	23	円形 枡門形 隅丸長方形	44 ~ 78	土師質土器 陶器類 埴輪	17世紀後半 中-18世紀 前半	SE1-S2A-B-53, S23A-3B, SK219- 260-267, SK200-21, SAAA-B-5-4本 →SK2, SK17, SK29- 254-267, 288, SK20- 118-SK30蓋部不明
2	116a 116a	N 90° E	5 × 1	9.75 × 4.80	46.80	1.82 ~ 2.13	2.40 ~ 4.76	榺柱	11	枡門形 不整枡門形	44 ~ 80	陶器 銭貨	18世紀後半 中-後半	SE0-S1-S2A-B-53, S11-3A, SK113, 4本 →SK29-288, S215- 17, SK20-118-120- 267-SAAA-B蓋部不明
3A	115a 116a	N 8° E	3 × 2	5.88 × 4.22	25									

番号	位置	進行方向	柱間数		面積 (㎡)	柱間寸法		柱穴			主な出土遺物	時期	備考	
			新×梁(間)	桁×梁(m)		桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形				深さ(cm)
5A	11530 11560	N 16° E	2 × 1	360 × 243	8.75	238-240	240	榺柱	6	円形 楕円形	25-55	土師質土器 陶器 磁石 鉄片	18世紀前半	5120, 5K3-19, 第1号粘土版土坑, TMS→本跡→5191, 5K3, 5K21 調査不明
5B	11530 11560	N 15° E	1 × 1	295 × 185	7.31	280-300	240	榺柱	6	円形 楕円形	35-45	陶器 磁石	18世紀前半	5120, 516A, 5K3-18-19-26, 第1号粘土版土坑, TMS→本跡→5K3, SK3-25 調査不明

(2) 竪穴遺構

第6号竪穴遺構 (第204図)

位置 調査区南部のI15j9区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

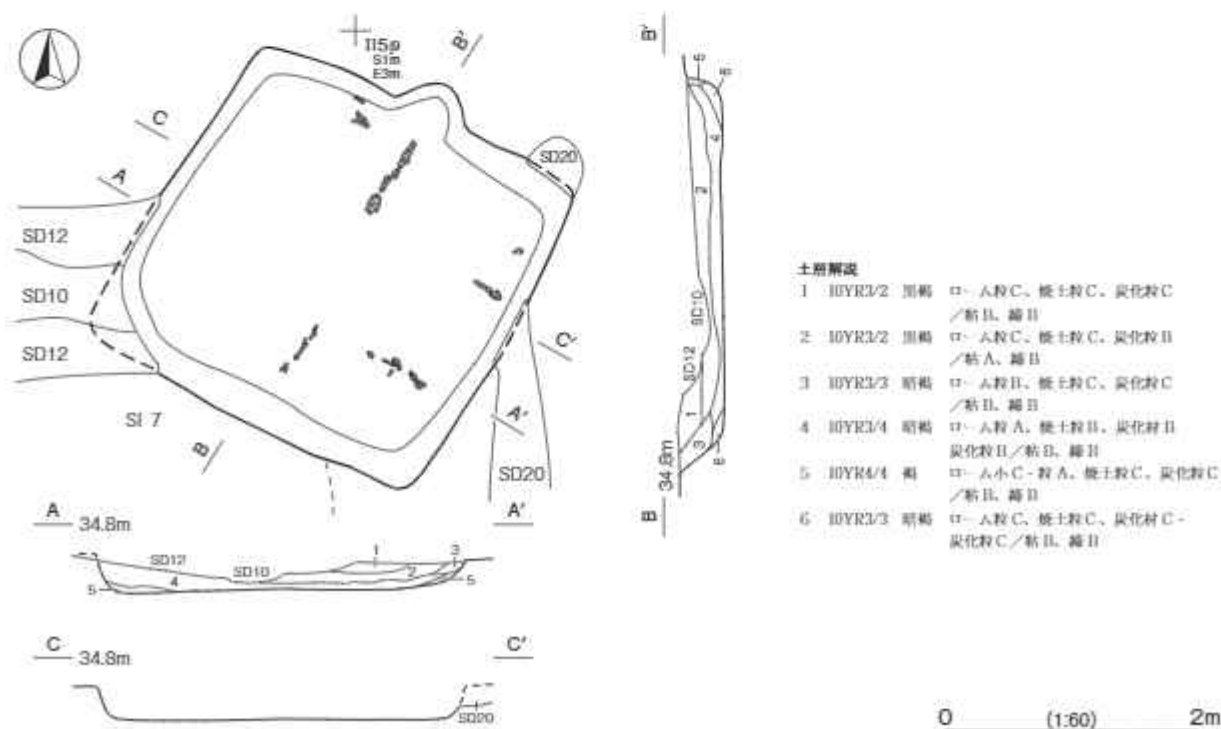
重複関係 第7号竪穴建物を掘り込み、第10・12・20号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.10m、短軸2.95mの方形で、主軸方向はN-36°-Eである。北東壁中央部には、奥行20cm、幅63cmの、三角形に張り出した出入口がある。底面は平坦で、硬化していない。壁は高さ24～35cmで、外傾または直立している。

覆土 6層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片5点(不明)、陶器片4点(不明)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片29点、土師器片36点が出土している。土師質土器片と陶器片は、底面に近い覆土中から出土しているが、細片のため図示できない。底面からは、直交する炭化材を確認した。いずれも径が5cm以下で、被熱の痕跡は確認できなかった。

所見 時期は、遺構の重複関係から、18世紀以前と考えられる。中央部から出土した炭化材は榺木材、それに直行して出土した炭化材は垂木材の可能性もある。火処が認められないことから、簡易な小屋と考えられる。

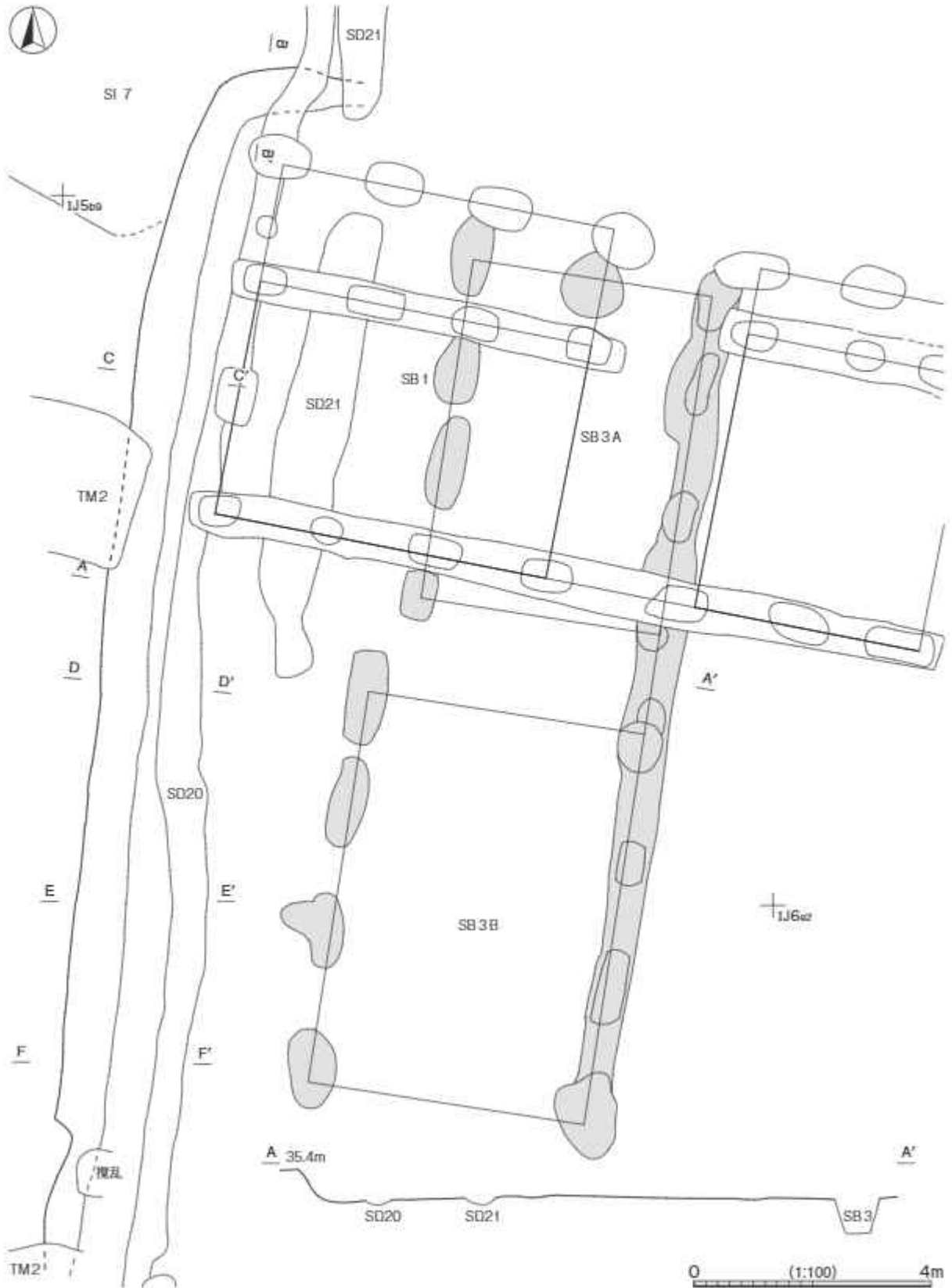


第204図 第6号竪穴遺構実測図

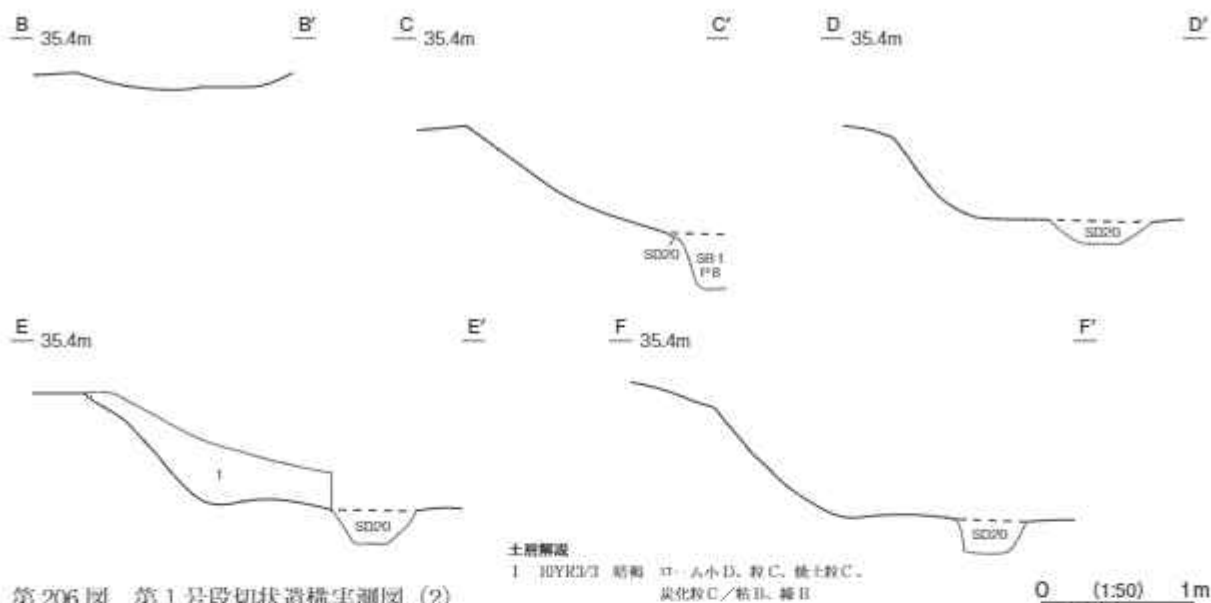
(3) 段切状遺構

第1号段切状遺構 (第205・206図 PL.22)

位置 調査区南部のI J 5 a9～I J 5 f8区、標高35mほどの台地平坦面から緩斜面に位置している。



第205図 第1号段切状遺構実測図(1)



第206図 第1号段切状遺構実測図(2)

重複関係 第7号竪穴建物跡、第92・94号土坑、第2号墳を掘り込み、第20・21号溝に掘り込まれている。
規模と形状 調査区の南東部に向かって、緩やかに傾斜している斜面地を掘削して平坦面を造成している。平面形は南東に開く逆L字形を呈している。南部、東部は削平のため、確認できた段の長さは、I J 5 f8区から北方向(N-8°-E)にはほぼ直線状に22.15 m伸び、I J 5 a9区から東方向(N-90°-E)に屈曲して22 m伸びている。法上から法下までの幅は0.6～0.9 mで、壁は削平されている北側を除き、40～45°で外傾している。造成された平坦地の範囲は明確ではないが、東側で確認した掘立柱建物群が存在していることから、東西15 m×南北25 m、面積375 m²以上を造成していると考えられる。

覆土 単一層である。ローム粒子を均質に含むことから、自然堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿)、陶器片6点(碗1、不明5)の細片が出土している。ほかに混入した弥生土器片138点、土師器片112点、瓦1点が出土している。

所見 時期は、17世紀後葉から18世紀前葉と考えられる。東側の第1・3A・3B号掘立柱建物は段の主軸とはほぼ並行するか直行することから、先行して造成したと考えられる。

(4) 土坑

第3号土坑(第207図 第107表 PL22・46・47)

位置 調査区北部のI I 6 b1区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。

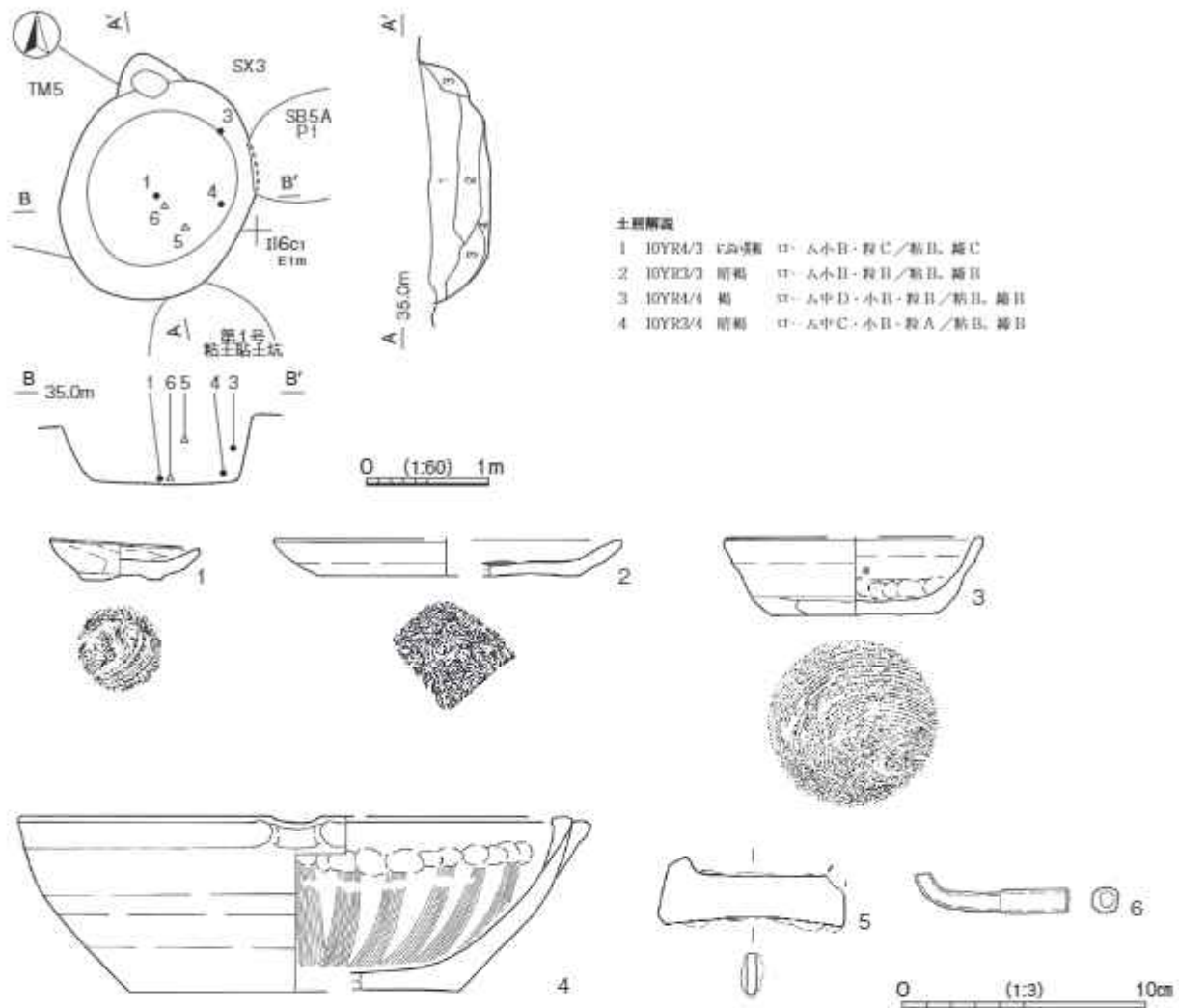
重複関係 第5号墳、第1号粘土貼土坑を掘り込み、第5A・5B号掘立柱建物、3号不明遺構に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.88 m、短径1.52 mの楕円形で、長径方向はN-29°-Eである。深さは48 cmで、底面は平坦である。北壁は段を有し、外傾している。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片4点(皿)、瓦質土器片1点(拵鉢)、陶器片1点(碗)、金属製品2点(筥引金、煙管)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片8点、土師器片4点、須恵器片1点、焼成粘土塊2点、土製品1点が出土している。1・4・6は覆土下層、3は覆土中層、5は覆土上層から、それぞれ出土している。出土遺物の多くは、埋め戻し時に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から17世紀後半と考えられる。



第207図 第3号土坑・出土遺物実測図

第107表 第3号土坑出土遺物一覧(第207図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	小皿	6.1	1.4	3.4	長石・石英・雲母	浅黄褐色	普通	ロクロ成形 内外面ナデ 底部糸切り	覆土下層	90% PL46
2	土師質土器	皿	[14.3]	1.5	[10.6]	長石・石英・雲母 黒色粒子	にぶい褐色	普通	ロクロ成形	覆土	30% 不明面転用
3	土師質土器	皿	[10.4]	3.2	7.0	長石・石英・雲母	褐色	普通	ロクロ成形 外面体部下端へつ割り 内面見込部指痕面 底部回転糸切り	覆土中層	20% PL46 不明面転用
4	灰質土器	椀鉢	22.4	7.2	[13.6]	長石・石英	暗灰黄	普通	片口指ナデ成形 内面口縁部下指痕面・13条1単位の横目	覆土下層	50% PL46
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
5	平引金	(7.8)	(2.8)	0.4	(27.38)	鉄	首両端台形状突起 刃部曲線		覆土上層	85% PL47	
6	煙管	6.3	1.8	1.1	6.40	銅	胴首部 胴部幅28cm 小口径0.65cm		覆土下層	PL47	

第11号土坑(第208図 第108表)

位置 調査区北部のI I 5 g8区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

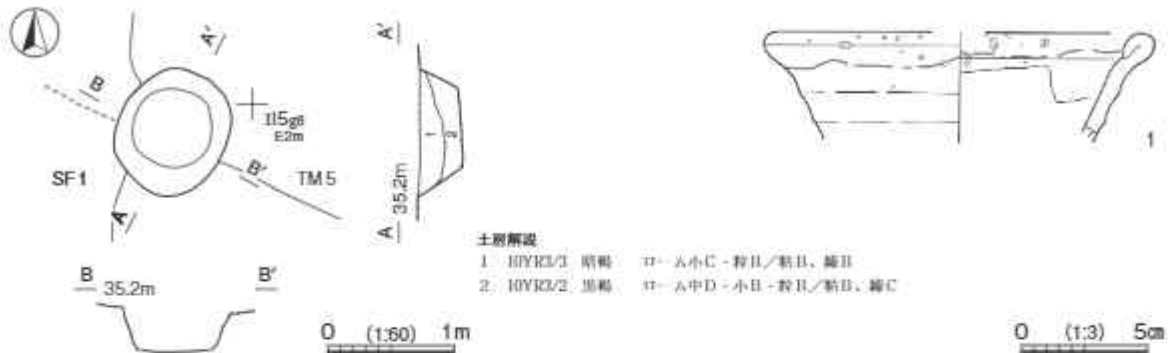
重複関係 第5号墳、第1号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.01m、短径0.88mの円形である。深さは31cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 陶器片1点(鉢)が覆土中から出土している。ほかに混入した弥生土器片2点、土師器片2点
 が出土している。

所見 時期は、出土遺物から18世紀後半と考えられる。



第208図 第11号土坑・出土遺物実測図

第108表 第11号土坑出土遺物一覧(第208図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴	胎変	産地	出土位置	備考
1	陶器	鉢	[14.3]	(4.4)		緻密 暗褐	口縁部内外面砂礫付着 輪葉流し掛け	鉄軸	瀬戸・美濃	覆土	5%

第19号土坑(第209図 第109表)

位置 調査区北部のI15b0区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第5A・5B号掘立柱建物跡、第3号不明遺構を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.77m、短径0.50mの楕円形で、長軸方向はN-16°-Eである。深さ31cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾している。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)が出土している。1は、覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土遺物から18世紀前葉から中葉と考えられる。



第209図 第19号土坑・出土遺物実測図

第109表 第19号土坑出土遺物一覧(第209図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	小皿	[10.8]	21	[7.2]	粘土・石英 黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部内外面煤付着 底面余切り	覆土下層	20% 灯明鑑転用

第46号土坑 (第210図 第110表 PL47)

位置 調査区北部のI I 5g7区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

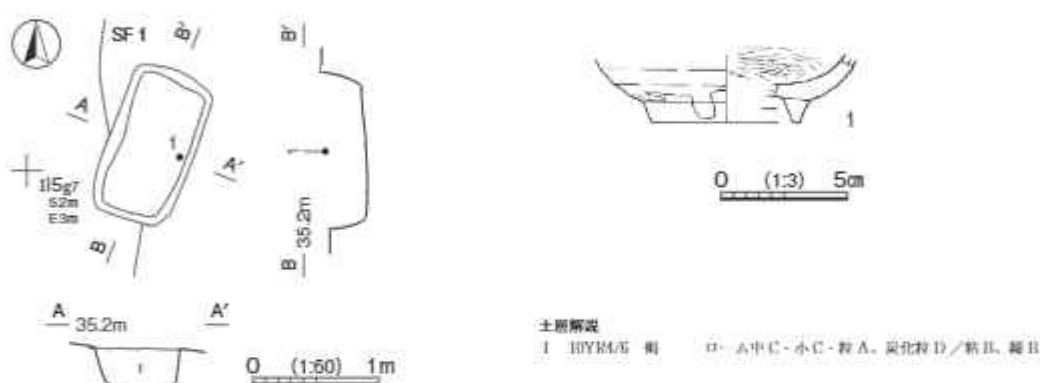
重複関係 第1号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.22m、短軸0.68mの隅丸長方形で、N-22°-Eである。深さ30cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 陶器片1点(碗)が東壁際の覆土上層から出土している。ほかに混入した弥生土器片1点が出土している。

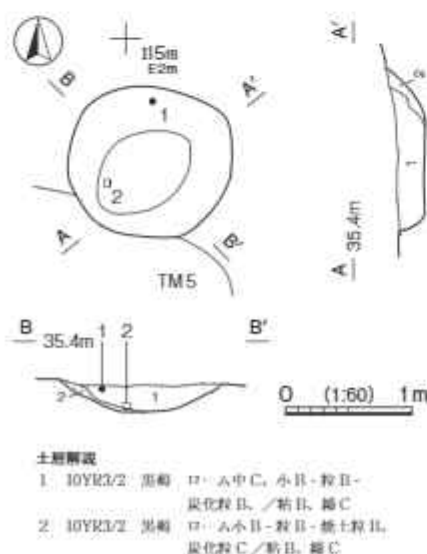
所見 時期は、出土遺物から18世紀後半から19世紀代と考えられる。



第210図 第46号土坑・出土遺物実測図

第110表 第46号土坑出土遺物一覧 (第210図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴	軸差	産地	出土位置	備考
1	陶器	碗		(27)	(58)	緻密 黄灰	口縁部内縁縁部長い線痕 釜型部。底部中央不規則な	白濁軸差軸	肥前・唐津	覆土上層	5% PL47



第211図 第76号土坑実測図

第76号土坑 (第211・212図 第111表)

位置 調査区北部のI I 5f8区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

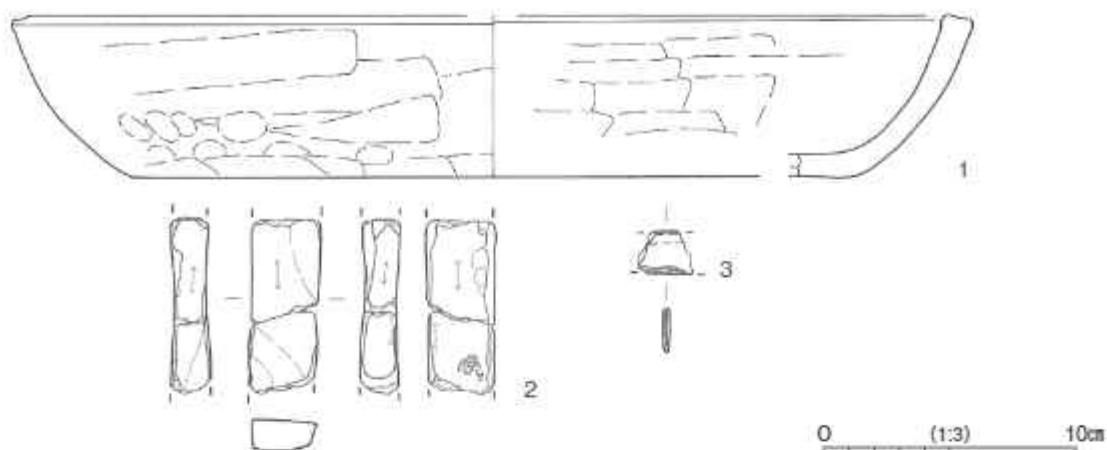
重複関係 第5号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.30m、短径1.28mの円形である。深さは22cmで、底面は皿状である。壁は南東部を除いて緩やかに外傾している。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片1点(焙烙)、石器1点(凝灰岩製砥石)、金属製品1点(不明鉄製品)が出土している。1は北部の覆土上層から、2は南部の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物から18～19世紀と考えられる。



第212図 第76号土坑出土遺物実測図

第111表 第76号土坑出土遺物一覧(第212図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師質 土器	焙烙	136.41	64	128.61	長石・石英・雲母 赤色粒子	橙	普通	口縁部・体部内外面横ナブ 底部下方のへし削り 体部外面下半指頭 底部無目	覆土上層	30%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
2	紙石	(7.0)	2.8	1.6	(41.40)	凝灰岩	紙面4面 裏面下端に除打痕		覆土下層		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
3	不明 鉄製品	(2.2)	(1.8)	(0.2)	(1.62)	鉄	小刀。断面三角形 両端雄欠損 刃部に木質片付着		覆土下層		

第145号土坑(第213図 第112表)

位置 調査区東部のI J 6e4区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

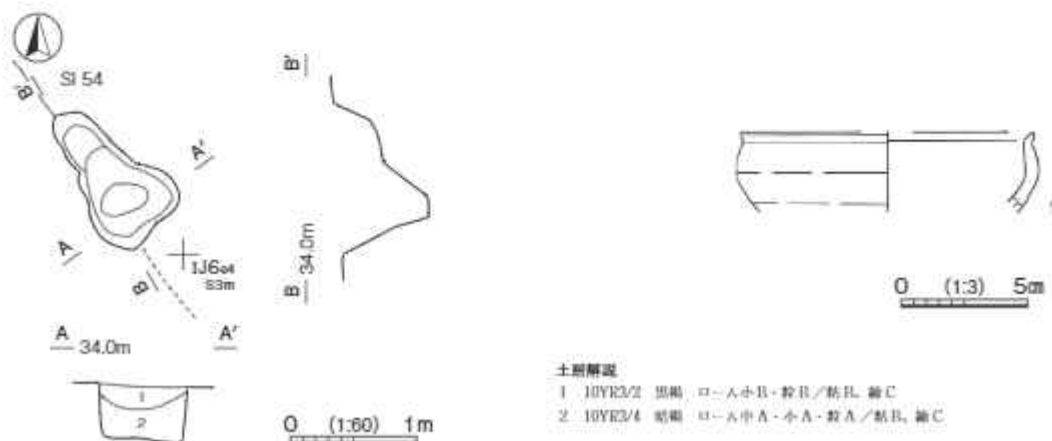
重複関係 第54号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.16m、短径0.82mの不整楕円形で、長径方向はN-44°-Wである。深さ70cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ直立しているが、北西部は段を有している。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 陶器片2点(天目茶碗)が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から17世紀後半と考えられる。



土層解説

1 10YE2/2 黒褐色 土層 ローム中B・粉B/粘B、粘C

2 10YE2/4 黒褐色 土層 ローム中A・小A・粘A/粘B、粘C

第213図 第145号土坑・出土遺物実測図

第112表 第145号土坑出土遺物一覧(第213図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴	軸差	産地	出土位置	備考
1	陶器	甕	[11.6]	[3.2]		緻密 灰黄	大耳基碗 内外面施釉	数輪	瀬戸・美濃	覆土	5%

第152号土坑(第214図 第113表)

位置 調査区北部のI J 6e4区、標高34 mほどの台地平坦面に位置している。

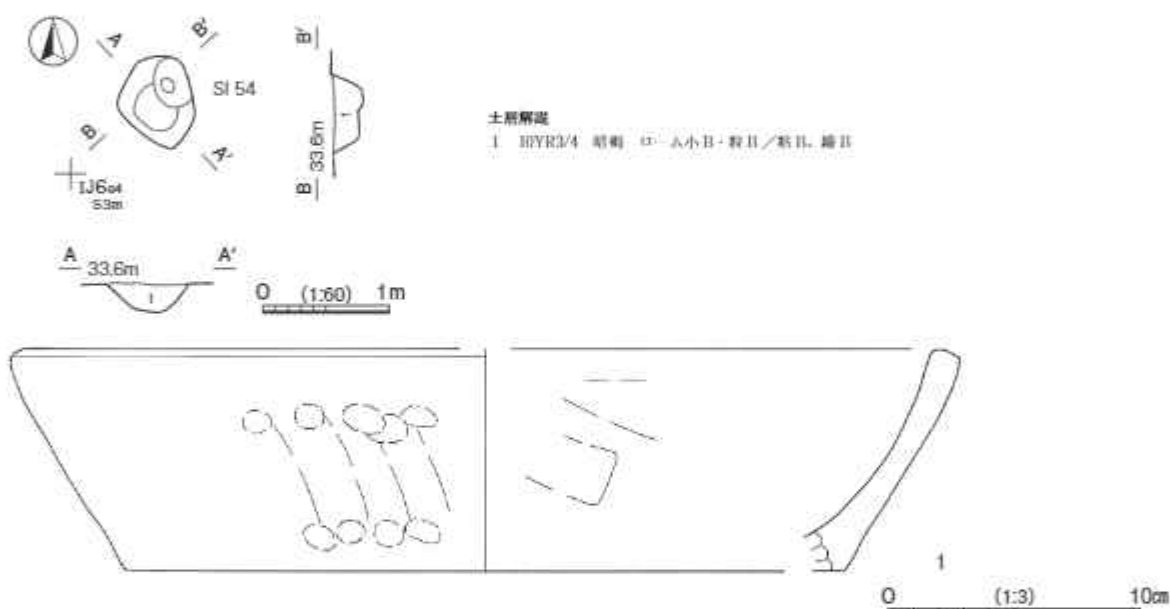
重複関係 第54号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.70 m、短径0.60 mの楕円形で、長径方向はN-9°-Wである。深さ22cmで、底面は北東部がピット状に窪んでいる。壁は外傾している。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片4点(皿3、焙烙1)が覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から18世紀後半と考えられる。



第214図 第152号土坑・出土遺物実測図

第113表 第152号土坑出土遺物一覧(第214図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	紋成	特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	焙烙	[36.0]	8.8	[28.8]	長石・石英	橙	普通	口縁部・体部外面に斜め方向ツブ 体部外面中から下手指痕 下縁横方向のヘツ開り 底面ヘツ開り	覆土	20%

第114表 江戸時代土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径(m) × 短径(m)	深さ(cm)					
3	115b4	N-29°-E	楕円形	1.88 × 1.52	48	右段外傾	平坦	人為	瓦質土器 金属製品	遺1号竪土坑・TMS → 本跡 → S65A・B, S33
11	115g		円形	1.01 × 0.88	31	外傾	平坦	人為	陶器	TMS, SP1 → 本跡
19	115b0	N-16°-E	楕円形	0.77 × 0.50	31	外傾	平坦	人為	土師質土器	S65A・B, SX 3 → 本跡
46	115g'	N-22°-E	縦丸長方形	1.22 × 0.68	30	外傾	平坦	人為	陶器	SP1 → 本跡
76	115g		円形	1.30 × 1.28	22	外傾	窪状	人為	土師質土器 金属製品 石製品	TMS → 本跡
145	I J 6e4	N-44°-W	不整楕円形	1.16 × 0.82	70	直立	平坦 右段状	人為	陶器	SI54 → 本跡
152	I J 6e4	N-9°-W	楕円形	0.70 × 0.60	22	外傾	凹凸	人為	土師質土器	SI54 → 本跡

(5) 井戸跡

第1号井戸跡 (第215・216図 第115表 PL47)

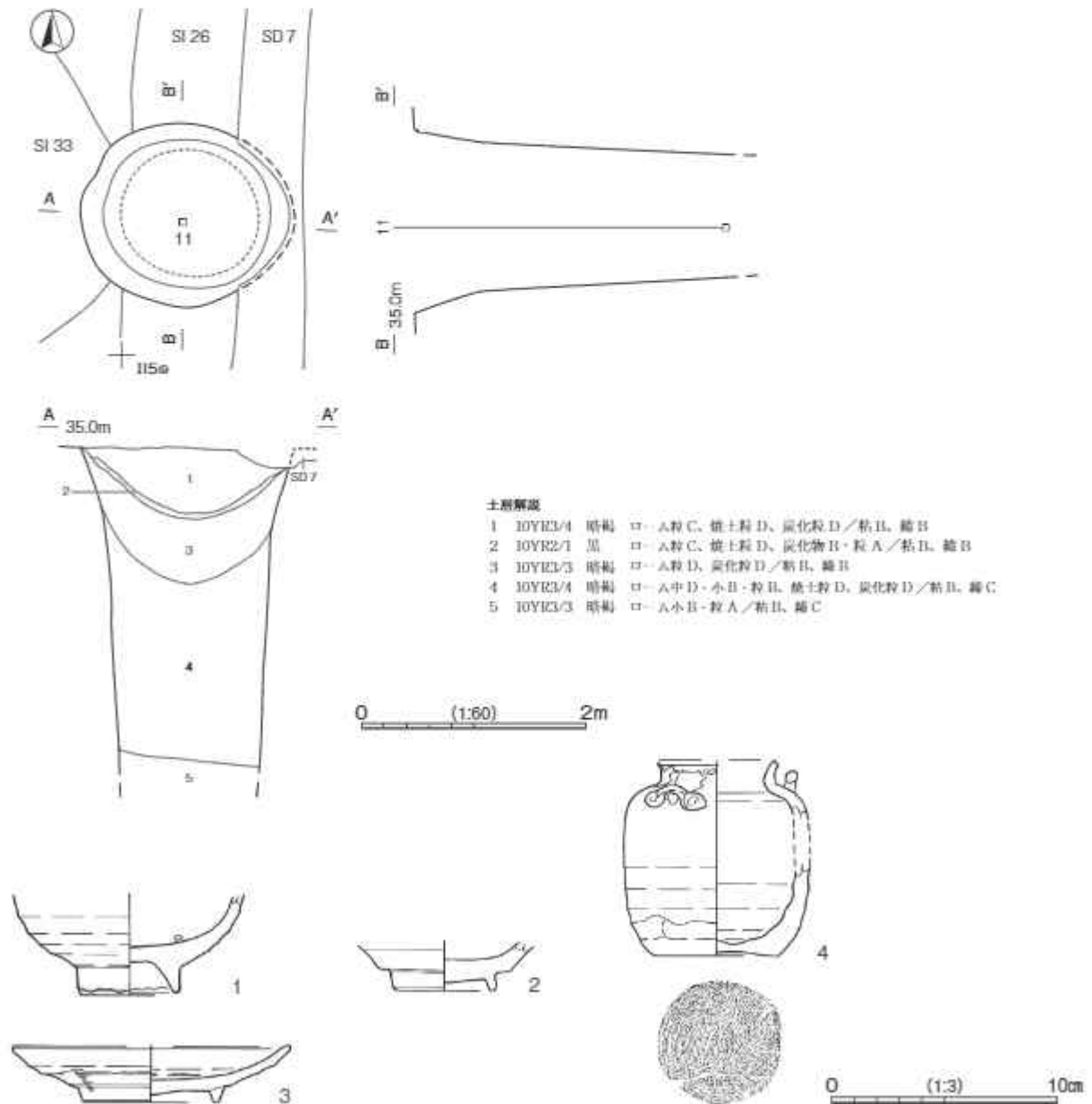
位置 調査区中央部 I I 5 h 9 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第26・33号堅穴建物跡を掘り込み、第7号溝に掘り込まれている。

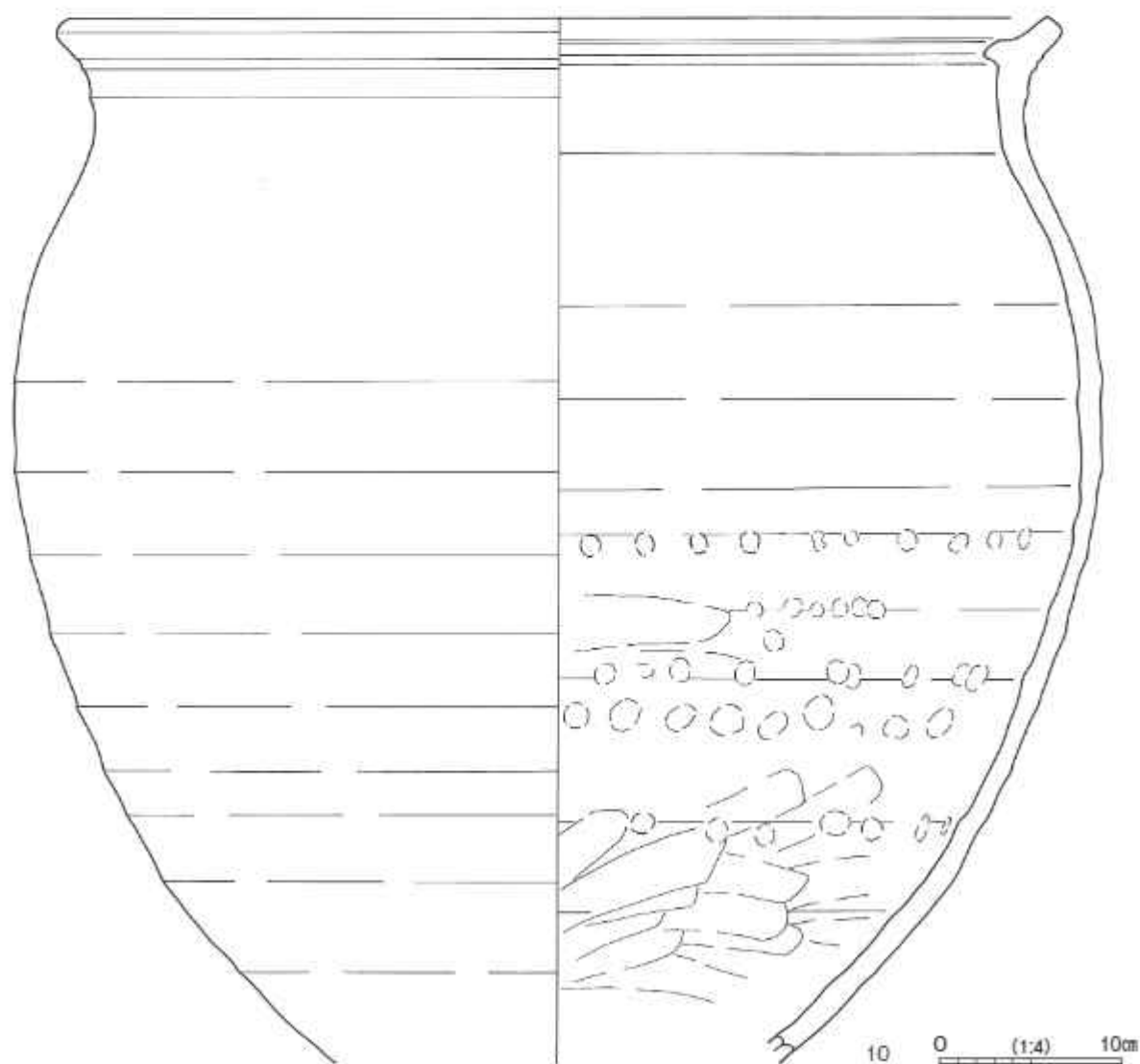
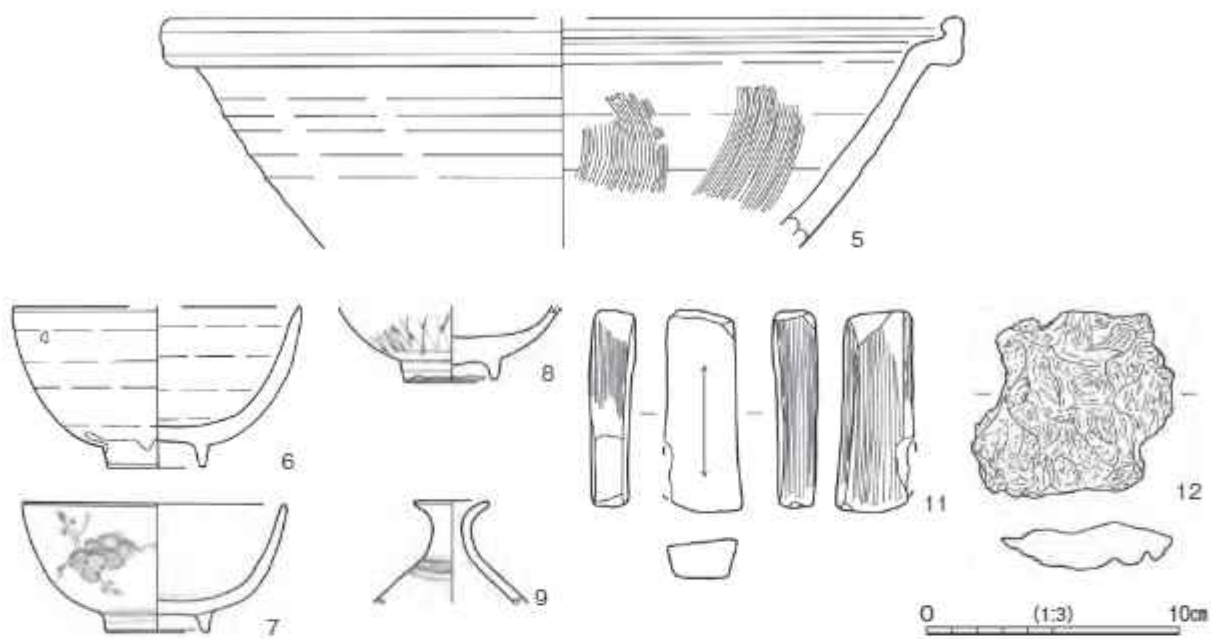
規模と形状 長径 1.85m、短径 1.63m の楕円形で、長径方向は N-72°-W である。断面は円筒状を呈している。湧水や崩落の恐れがあったため、確認面から 1.5m まで人力で掘削した後に、重機で掘削して深さ 3m まで記録した。

覆土 5層を確認した。第1～3層は周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第4・5層はロームブロックを多く含み、締まりが弱いことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片 10 点 (皿 2、内耳鍋 1、甕 7)、陶器片 40 点 (天目茶碗 1、碗 22、皿 3、插鉢 3、香炉 4、壺 1、有耳壺 1、甕 1、不明 3)、石器 2 点 (凝灰岩製砥石)、鉄滓 1 点 が出土している。図示した遺物は、覆土下層の第5層から出土している。



第215図 第1号井戸跡・出土遺物実測図



第216图 第1号井戸跡出土遺物実測図

所見 出土した遺物は、17世紀前半から19世紀前半のものを一括廃棄したものと考えられる。廃絶した時期は、19世紀前半と推測される。

第115表 第1号井戸跡出土遺物一覧(第215・216図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴	軸差	産地	出土位置	備考
1	陶器	碗		(45)	4.2	緻密 灰白 浅黄	灰釉器手觸 内外面施釉 見込み目研	灰軸	唐津	第5層中	30% PL47
2	陶器	碗		(22)	4.5	緻密 灰白	大目茶碗 底部高台割り出し、底部内面施釉	鉄軸	瀬戸・美濃	第5層中	20%
3	陶器	皿	(124)	25	(60)	緻密 灰白	流け掛け トチン痕 灯明皿転用	灰軸	瀬戸・美濃	第5層中	40% PL47 灯明皿転用
4	陶器	右耳壺	(50)	8.6	5.6	緻密 赤褐色	茶入れ 両肩部耳付 底部回転糸切り	鉄軸	瀬戸・美濃	第5層中	20% 17世紀前半
5	陶器	飯鉢	(30.1)	(9.1)		緻密 赤褐色 長石	口縁1単位の摺目	鉄軸	瀬戸・美濃	第5層中	20%
6	磁器	碗	(11.4)	6.4	4.0	緻密 明オリーブ灰	トチン痕	青磁軸	肥前	第5層中	20%
7	磁器	碗	10.5	5.0	4.2	緻密 灰白	トチン痕 体部外面染付梅枝文 飛鳥文	透明軸	肥前	第5層中	90% PL47
8	磁器	碗		(3.0)	3.7	緻密 灰白	体部外面染付割目文	透明軸	肥前	第5層中	30%
9	磁器	鉢	3.0	(4.1)		緻密 灰白	外面頸部染付帯線文	透明軸	肥前	第5層中	10% 18世紀後半～19世紀前半
10	陶器	壺	53.8	(57.8)		緻密 赤	内面口クロ成形後ナブ 指痕痕	鉄軸 自然軸	常滑	第5層中	70% PL47

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
11	砥石	(80)	(29)	1.8	(6296)	凝灰岩	砥石1面 3面磨面状の削り痕	第5層中	PL47

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	鉄洋	(74)	(8.1)	(1.9)	(17858)	鉄	一部発泡 全面錆化 着磁性なし 輪状洋	第5層中	PL47

(6) 道路跡

道路跡のここで図示する平面図は、硬化面を確認した部分のみとし、全容は遺構全体図に示した。

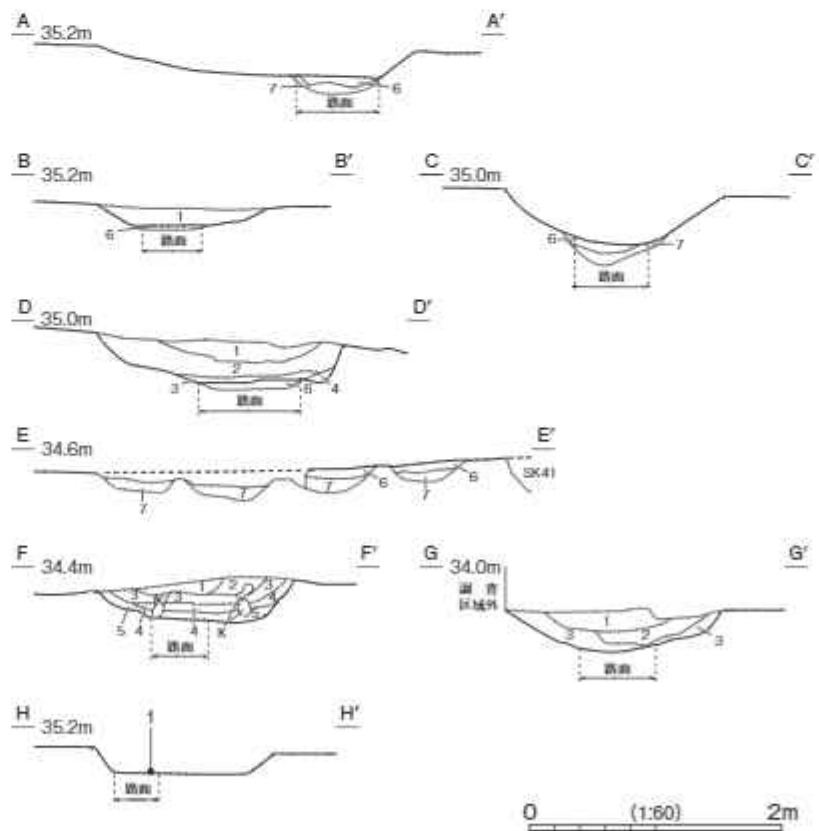
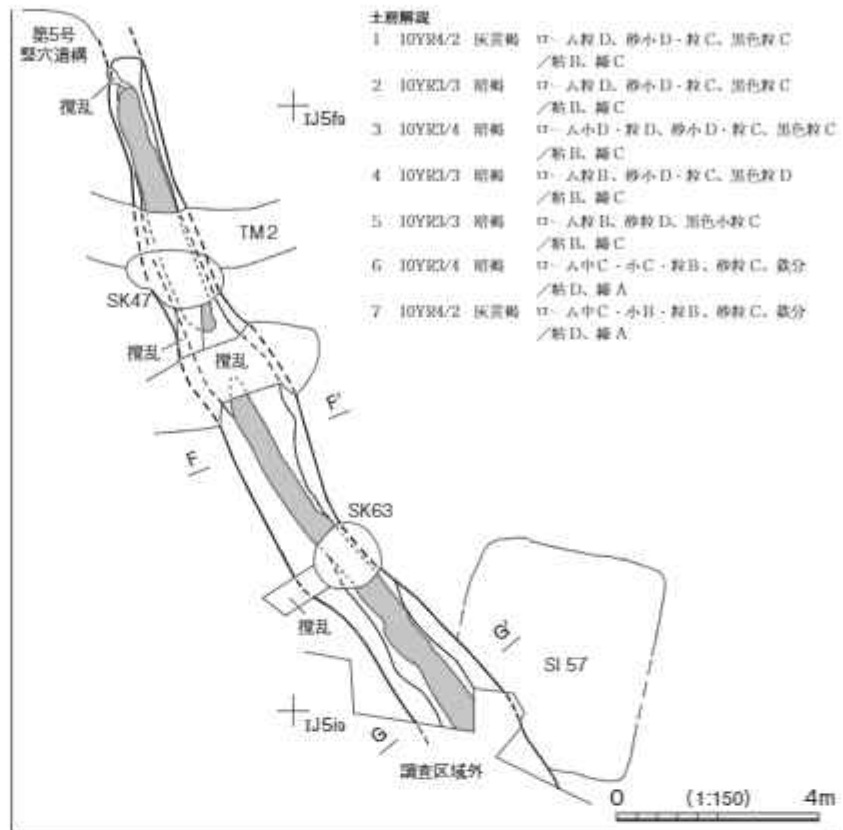
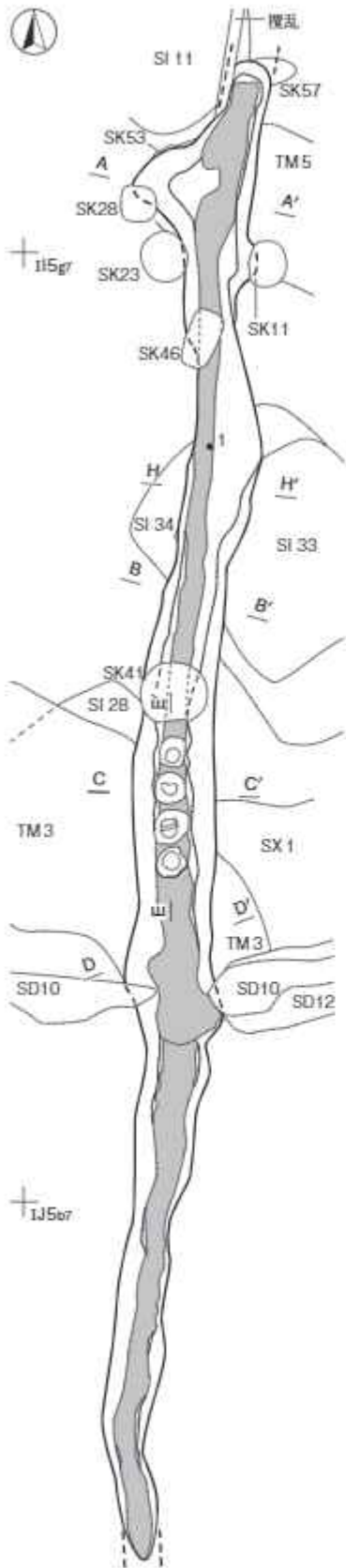
第1号道路跡(第3・217・218図 第116表 PL23)

位置 調査区北部から南部のI I 5 a9～I J 5 i9区、標高34～35mほどの台地平坦面から緩斜面にかけて位置している。

重複関係 第11・28・33・34・57号竪穴建物跡、第5号竪穴遺構、第7・53・56・57・217号土坑、第2・3・5号墳、第1号不明遺構を掘り込み、第11・23・28・41・46・63号土坑、第6・10・12号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南北が調査区域外のため、確認できた規模は、長さ74.8m、上幅0.56～1.76mで、路面幅が0.36～1.24m、底面の下幅が0.55～2.12mである。深さは調査区中央部(I I 5 j7区)の最深部で路面までが38cm、掘方底面までが75cmである。調査区北端と南端では路面の比高差は0.72mである。断面の形状は、逆台形や皿状である。調査区南端のI J 5 h8区から緩斜面を上り、北西方向(N-35°-W)に弓なりに延びて、I J 5 e8区で途切れ、7.86m間は確認できなかった。I J 5 c7区から北方向(N-5°-E)に直線的に延びてI I 5 e8区で途切れ、6.54m間は確認できなかった。I I 5 e9区から北東方向(N-21°-E)に調査区北端のI I 5 a9区まで直線的に延びている。

路面 地山のハードローム層まで掘り下げ、路面としている。I I 5 i8区からI J 5 c7区の区間は、第6・7層を充填・敷設し、第6層上面を路面としている。尾根の最高所にあたる北部の調査区域際からI I 5 d9区までは、路面構築土や硬化面が確認できなかったことから、地山のハードローム層上面を路面としていたと推測できる。また、I J 5 a1区第3号墳の周溝跡の窪みから墳丘裾部に向かう位置の路面には、走行方向に連続する4か所の円形補修痕を確認した。規模は長径95～110cm、短径52～90cm、深さ10～20cmで、断面は皿状を呈している。



第217図 第1号道路跡遺構実測図

覆土 7層に分層できる。第1～5層は、ローム粒子と砂粒を含み、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第6・7層は、鉄分を含んだ極めて締まりの強い充填・敷設土で、雨水による泥濘化対策の痕

跡と考えられる。

遺物出土状況 瓦質土器片1点(火鉢)、陶器片5点(碗4・壺1)、磁器片1点(碗)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、弥生土器片698点、土師器片213点、須恵器片13点、土製品5点、焼成粘土塊5点が出土している。Iは、路面構築土から出土している。

所見 時期は、出土遺物から17世紀前半以降と考えられる。

第218図 第1号道路跡出土遺物実測図

第116表 第1号道路跡出土遺物一覧(第218図)

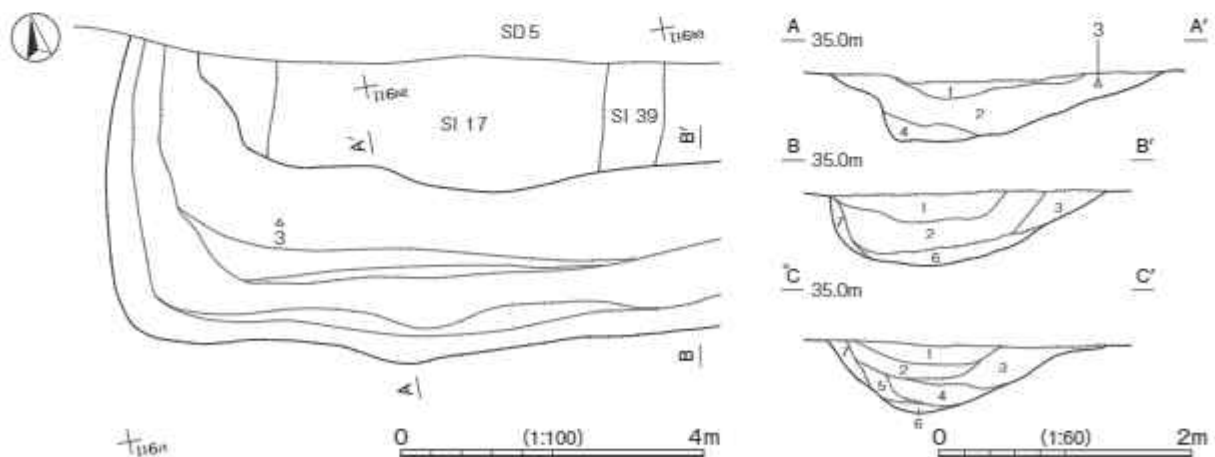
番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土・色調	特徴	胎土	産地	出土位置	備考	
1	陶器	碗	(13.0)	(6.1)		緻密 灰白	大目基碗 茶黒色	内外面つけかけ施釉 内面	鉄釉	瀬戸・美濃	源土下層	5%

(7) 溝跡

ここでは、7条のうち、4条については遺物を確認した部分の実測図を掲載して説明し、全体は遺構全体図(付図)に示した。また、その他の溝は、遺構全体図と断面図で掲載する。

第4号溝跡(第3・219・220図 第117表 PL22・47)

位置 調査区東部



第4号溝跡土層解説

- | | | | |
|---------------|---------------------|---------------|------------------------|
| 1 10YR3/4 暗褐色 | □ A小B・粒B/粘B、粘C | 5 10YR3/3 暗褐色 | □ A中D・小C・粒C、粘土粒D/粘B、粘E |
| 2 10YR3/4 暗褐色 | □ A小B・粒A/粘B、粘C | 6 10YR3/4 暗褐色 | □ A小B・粒B、粘土粒D/粘B、粘E |
| 3 10YR4/3 灰褐色 | □ A小B・粒B/粘C、粘E | 7 10YR4/4 暗褐色 | □ A小B・粒B/粘B、粘E |
| 4 10YR3/4 暗褐色 | □ A小C・粒A、炭化粒D/粘C、粘E | | |

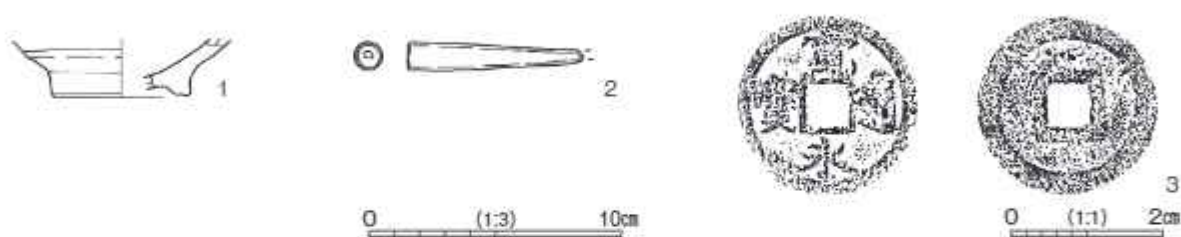
第219図 第4号溝跡実測図

た規模は、長さ 21.38 m、上幅 1.44 ~ 2.66 m、下幅 0.43 ~ 0.83 m、深さ 25 ~ 63cm である。断面形は皿状や逆台形状である。壁は外傾している。

覆土 9層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片 1 点 (皿)、陶器片 5 点 (天目茶碗 1、碗 4)、石器 7 点 (凝灰岩製砥石)、金属製品 2 点 (煙管、不明鉄製品)、銭貨 1 点 (寛永通宝) が出土している。ほかに混入した縄文土器片 3 点、弥生土器片 489 点、土師器片 556 点、焼成粘土塊 2 点、土製品 1 点、石器 8 点、鉄製品 1 が出土している。3 は、屈曲部付近の覆土土層から出土している。

所見 本跡は、L 字状に北方向に屈曲した後、溝幅が狭まり、第 5 号溝跡に接している。攪乱のために重複関係は不明である。時期は、出土遺物から 17 ~ 18 世紀と考えられる。



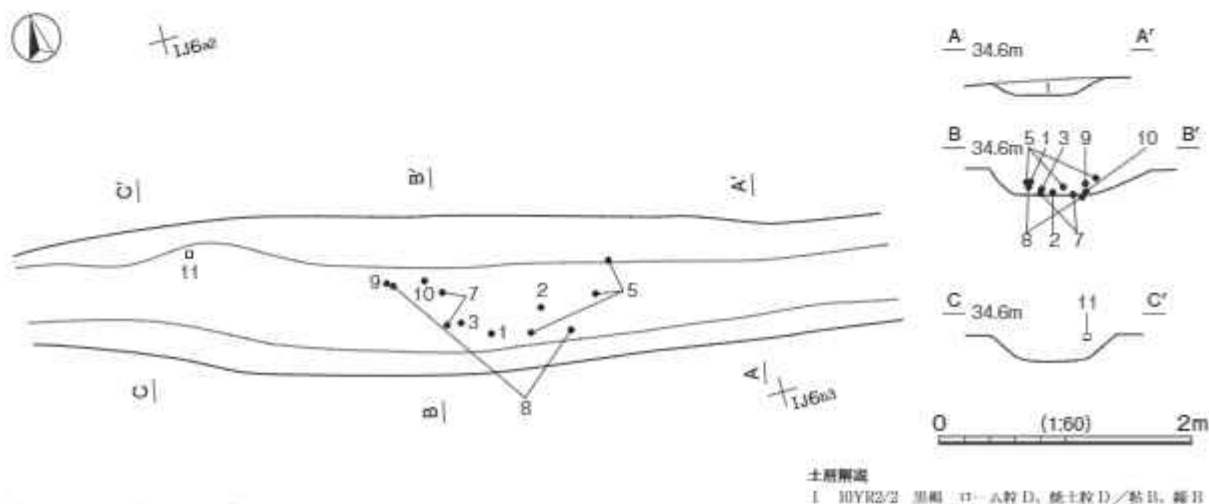
第 220 図 第 4 号溝跡出土遺物実測図

第 117 表 第 4 号溝跡出土遺物一覧 (第 220 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴	軸差	産地	出土位置	備考
1	陶器	碗	(23)	15.4		凝灰 灰白	口クリ成形 高台倒り出し	鉄軸	瀬戸・美濃	覆土	10%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
2	煙管	7.0	1.1	1.1	5.36	銅・竹	吸い口 羅字煙管 銅板敷付			覆土	PL47
番号	銭種	径	孔径	厚さ	重量	材質	鋳年	特徴		出土位置	備考
3	寛永通宝	2.48	0.58	0.12	2.99	銅	1626	無背銭 古寛永		覆土上層	PL47

第 11 号溝跡 (第 3・221・222 図 第 118 表 PL48)

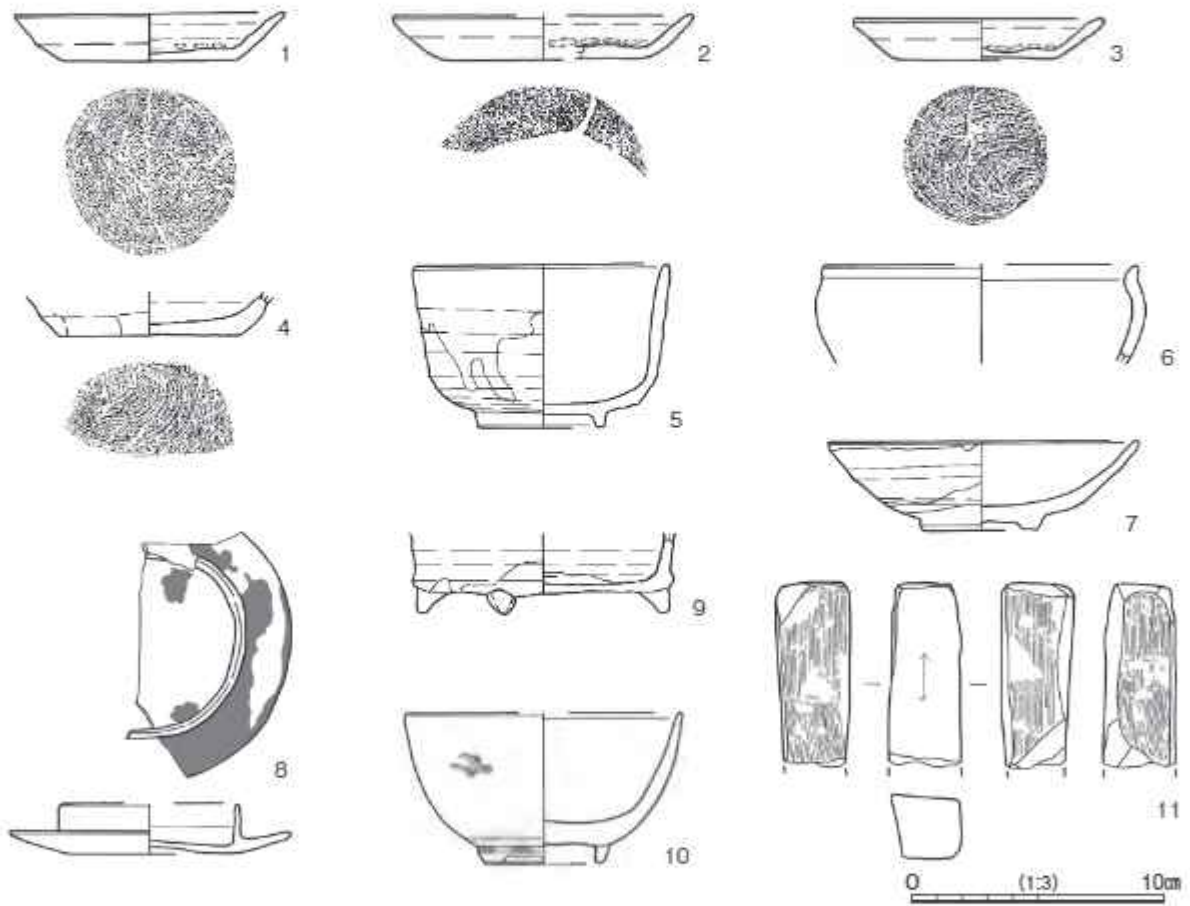
位置 調査区東部の I I 5 j 0 区 ~ I J 6 b 4 区、標高 35 m ほどの台地平坦面に位置している。



第 221 図 第 11 号溝跡実測図

重複関係 第43・48・56・67号竖穴建物跡、第20・21号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状



第222図 第11号溝跡出土遺物実測図

第118表 第11号溝跡出土遺物一覧(第222図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴	軸差	産地	出土位置	備考
5	陶器	碗	10.1	6.6	5.0	緻密 灰白	腰結茶碗 上部灰釉 腰縁鉄釉	灰釉鉄釉	瀬戸・美濃	覆土上層 覆土下層	80% PL48
6	陶器	碗	[12.4]	(3.8)	—	緻密 浅黄粉	大目茶碗 内外面つけかけ	鉄釉	瀬戸・美濃	覆土	5%
7	陶器	皿	12.4	3.6	4.5	緻密 灰白	内野山堂 灰釉つけかけ 内面刷縁釉 流しかけ 見込み蛇ノ目軸差	刷縁釉 灰釉	肥前	底面	70%
8	陶器	灯明皿	[11.2]	2.0	[7.0]	緻密 灰靑	口縁部・体部内外面油煙漬	鉛釉	瀬戸・美濃	底面 覆土上層	40% PL48
9	陶器	香炉	—	(3.2)	[10.4]	緻密 灰白	灰釉つけかけ 外面緑釉流しかけ	緑釉	瀬戸・美濃	覆土下層	30%
10	磁器	碗	[10.8]	6.0	[4.8]	緻密 灰白	口縁部草花文 高台削り出し	呉須	肥前	底面	30% PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
11	瓦石	(7.3)	(3.0)	2.6	(98.61)	凝灰岩	縦面1面 3面に楕円状の削り痕	覆土上層	PL48

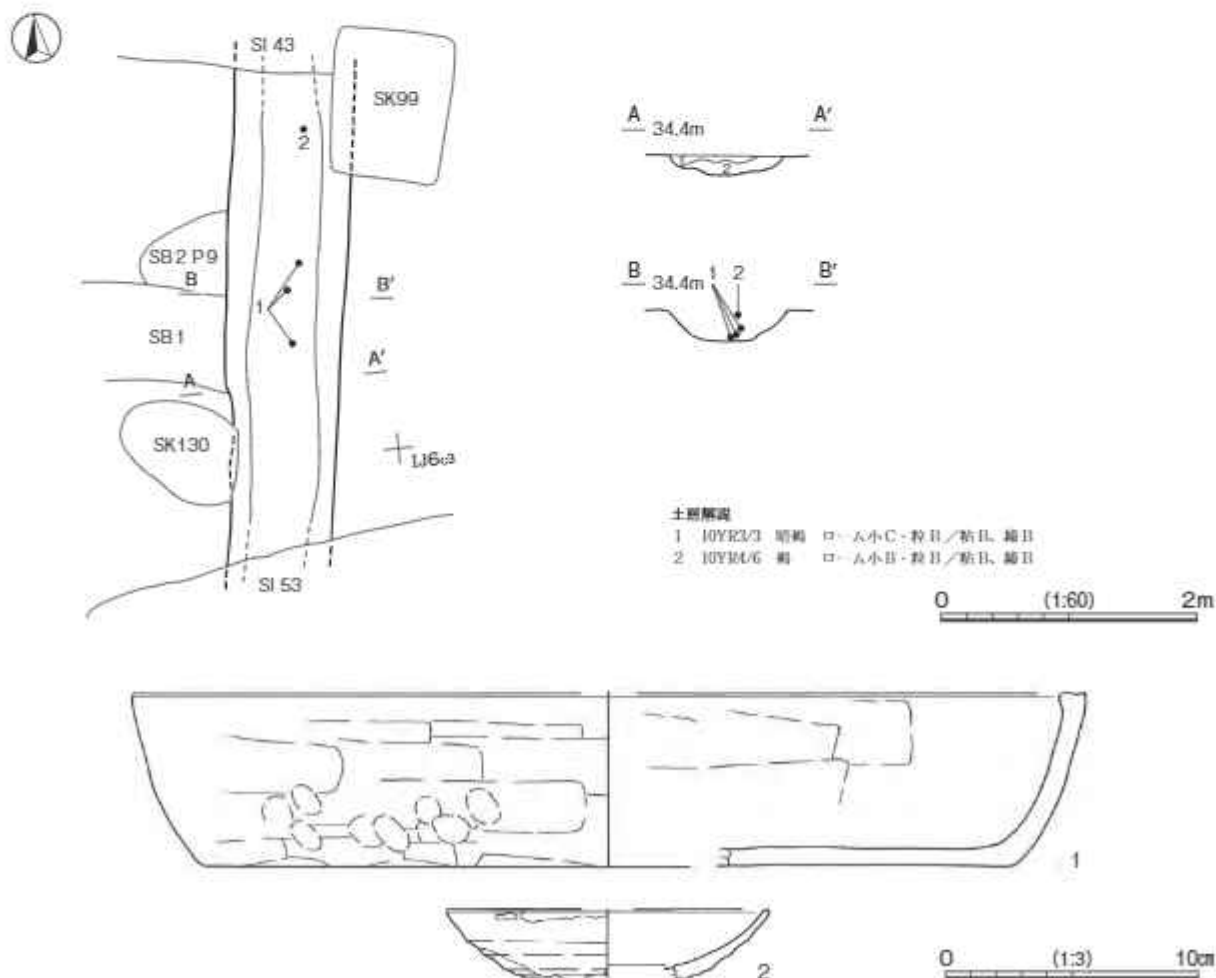
第17号溝跡 (第3・223図 第119表 PL48)

位置 調査区東部 I J 6 b2 ~ I J 6 c2 区、標高33 ~ 34 mほどの台地平坦面から緩斜面にかけて位置している。

重複関係 第43-53号竪穴建物跡、第1・2号掘立柱建物跡を掘り込み、第99・130・151号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 I J 6 b2 区から南方向 (N-9°-E) に I J 6 c2 区まで直線状に延びている。重複・削平のため、確認できた規模は、長さが3.87 m以上で、上幅0.80 ~ 0.93 m、下幅0.50 ~ 0.54 m、深さ16 ~ 22 cmである。断面形は皿状や逆台形状で、壁は外傾している。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含むことから、人為堆積である。



第223図 第17号溝跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片3点(焙烙)、陶器片1点(皿)が出土している。1は中央部の覆土下層と覆土中層から出土した破片が接合している。2は覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器と重複関係から、18世紀前半以降と考えられる。

第119表 第17号溝跡出土遺物一覧(第223図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	焙烙	[378]	69	[322]	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぶい黄	普通	内外面ラツ 体部外面下端削り垢痕	覆土下層 覆土中層	10% PL18
2	陶器	皿	[126]	(28)	-	緑色 にぶい黄	-	灰釉つけかけ 外面緑釉流しかけ 見込み釉ノ目輪跡	青緑釉 灰釉	覆土上層	10%

第20号溝跡(第3、224図 第120表 PL22)

位置 調査区東部 I J 5j0 ~ I J 5i9 区、標高 34 m ほどの台地平坦面から緩斜面にかけて位置している。

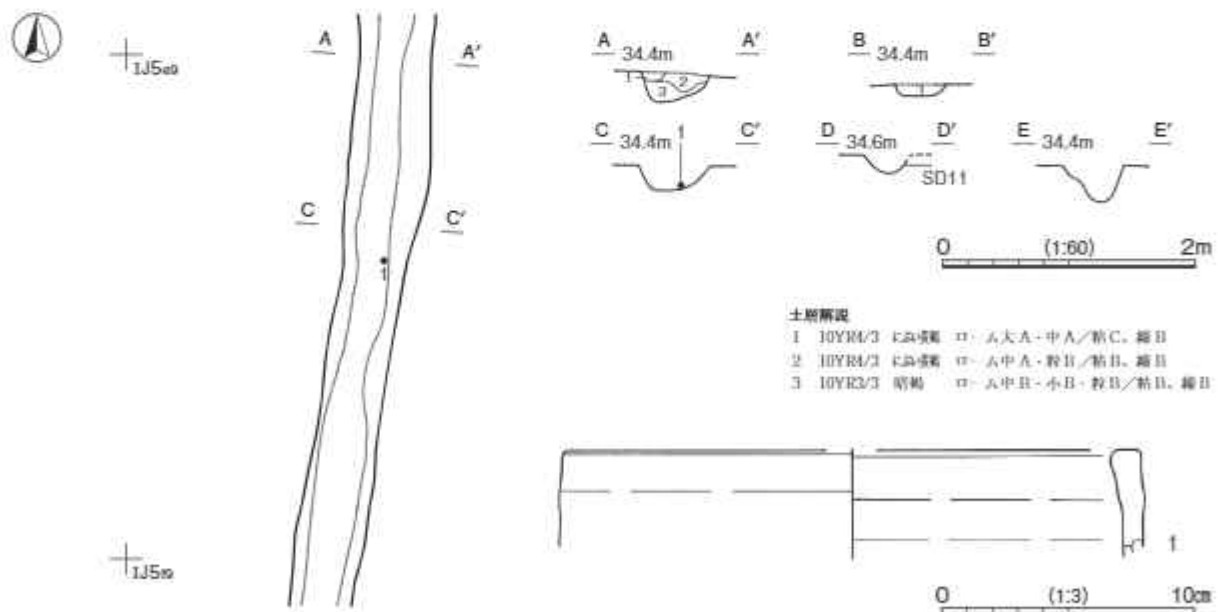
重複関係 第1号段切状遺構を掘り込み、第1号掘立柱建物跡、第25・63・216号土坑、第6号竪穴遺構、第10・11・12号溝に掘り込まれている。

規模と形状 I J 5j0 区から南西方向(N-175°-W)に I J 5c9 区まで延び、そこから南方向(N-5°-W)に I J 5i9 区まで直線状に延びている。北は重複のため、確認できた規模は、長さ 29.23 m で、上幅 0.30 ~ 0.77 m、下幅 0.14 ~ 0.38 m、深さ 2 ~ 24 cm である。断面形は皿状や逆台形状で、壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 瓦質土器片2点(火鉢)、磁器片3点(碗)が出土している。ほかに混入した弥生土器片7点、土師器片7点が出土している。1は溝底面からの出土である。

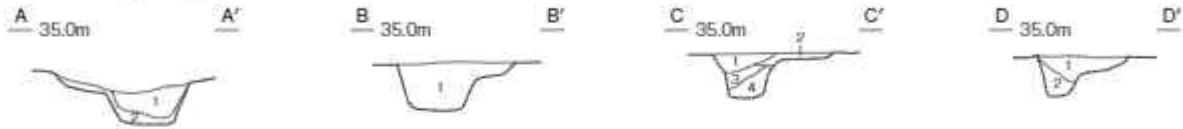
所見 本跡東側の第3号掘立柱建物跡、第21号溝跡、第1号段切状遺構の軸線とはほぼ同一のため、同時期に機能していた可能性がある。時期は、出土土器と重複関係から17世紀後半と考えられる。



第224図 第20号溝跡・出土遺物実測図

第5・12・21号溝跡 (第3・225図 PL22)

SD5 (第3図)



土質解説

- 1 10YR2/3 黒褐 砂・入小石・砂目/粘土、礫目
 2 10YR2/3 暗褐 砂・入小石・砂目/粘土、礫目
 3 10YR2/3 黒褐 砂・大中石・小石・砂目/粘土、礫目
 4 10YR3/4 暗褐 砂・入小石・砂目/粘土、礫目

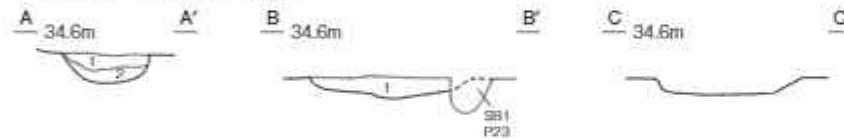
SD12 (第3図)



土質解説

- 1 10YR4/4 黄 砂・大中石・小石・砂目、炭化材D/粘土、礫目

SD21 (第3図 PL22)



土質解説

- 1 10YR4/4 黄 砂・入中石・小石・砂目、硬土層D/粘土
 2 10YR4/3 黄褐 砂・入中石・小石・砂目/粘土、礫目

第225図 第5・12・21号溝跡実測図

第121表 江戸時代溝跡一覧 (第3・219～225図)

番号	位置	方向	平面形	掘			断面	壁面	積土	主な出土遺物	備考	
				長さ(m)	土層(m)	幅(m)						深さ(cm)
4	116g1 116b5	N 95° E N 163° W	L字状	(22.38)	1.44~ 2.66	0.43~ 0.81	25~63	屈状 逆台形	外傾	人工	土師質土器 陶器 石製品 金属製品 銭貨	SI17・18・27・29・ 30・39、第1号竈穴遺構→本跡→SD2、 第2・3号土坑等 竈跡不明 SD5
5	115g9 116b5	N 102° E	直線状	(36.76)	0.42~ 0.98	0.16~ 0.42	31~41	逆台形	外傾	人工	土師質土器 陶器 磁器 瓦	SI17・18・29・30・ 38・39・41、第4号 竈穴遺構、TM5、→ 本跡→SD1・2・3・7 号 竈跡不明 SD4
11	115j0 116b4	N 105° E	直線状	17.42	0.42~ 1.25	0.23~ 0.68	12~21	屈状 逆台形	外傾	不明	土師質土器 陶器 磁器 石製品	SI43・48・56・67、 SD20・21→本跡
12	115g8 116a4	N 95° W	直線状	(27.70)	1.14~ 1.60	0.29~ 1.16	21~33	逆台形	外傾	人工	土師質土器 陶器 磁器	SI7・43・48・56・ 67、第6号竈穴遺 構、SD11・20・21、 TM3、SX1→本跡 →SD10、SK95
17	116b2 116c2	N 9° E	直線状	(3.87)	0.81~ 0.93	0.50~ 0.54	16~22	屈状 逆台形	外傾	人工	土師質土器 陶器	SI43・53・SB1・ 2→本跡→SK99・ 130・151
20	115j0 115g9	N 5° W N 175° W	直線状	(29.23)	0.30~ 0.77	0.14~ 0.38	2~24	屈状 逆台形	外傾	人工	瓦質土器 磁器	第1号段切状遺構→ 本跡→SB1、第6号 竈穴遺構、SK

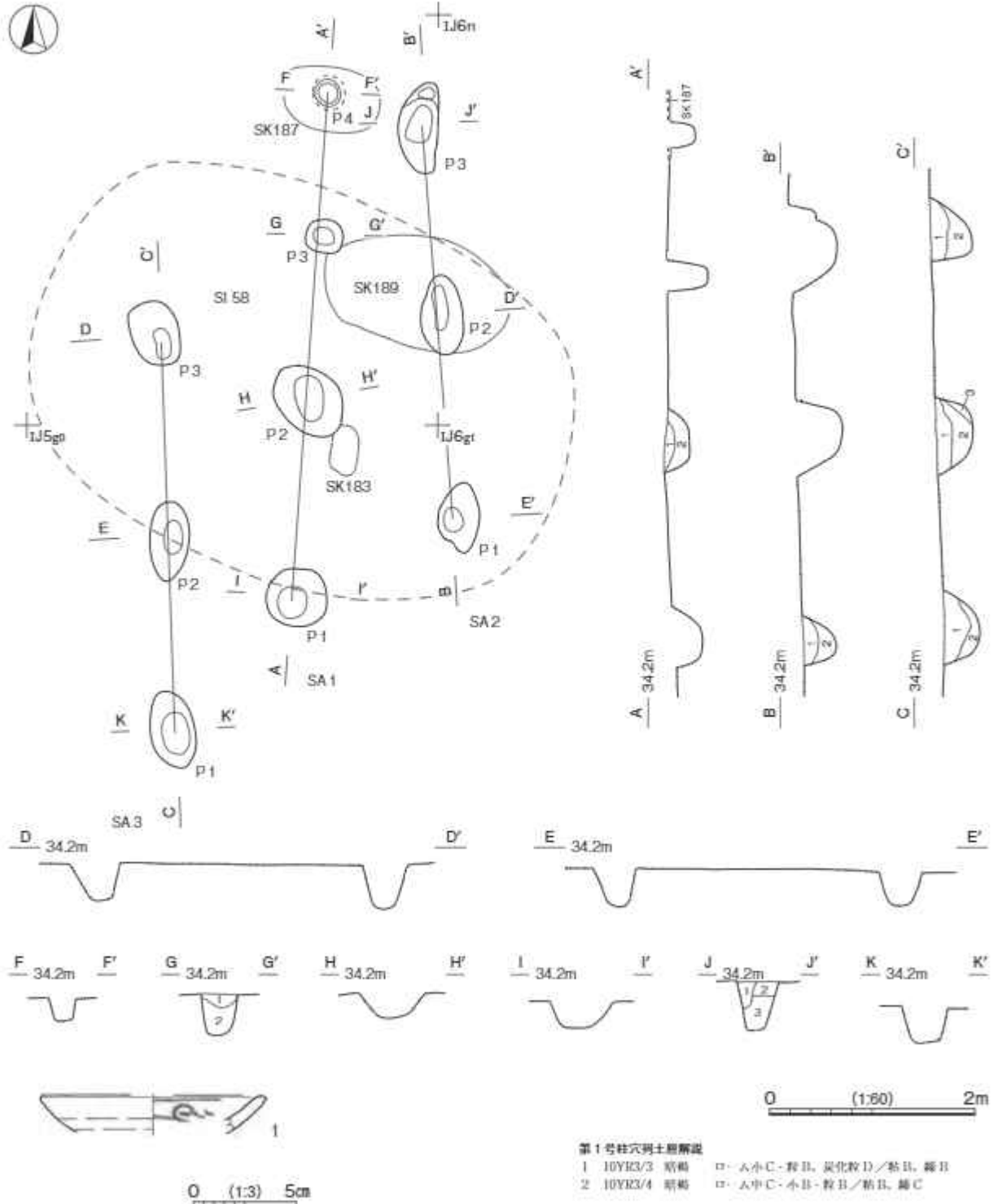
(8) 柱穴列

第1・2・3号柱穴列 (第226図 第122表 PL48)

第1号柱穴列

位置 調査区の南部I J 5f0 ~ I J 5g0区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第58号竪穴建物跡、第183・189号土坑を掘り込み、第187号土坑に掘り込まれている。第1号段



第2号柱穴列土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 Ⅱ-Ⅲ中C・小B・粒B、炭化粒D/粘B、雜B
- 2 10YR3/4 暗褐色 Ⅱ-Ⅲ中B・小B・粒B/粘B、雜C
- 3 10YR3/4 暗褐色 Ⅱ-Ⅲ中D・小C・粒B、炭化粒D、硬土粒D/粘B、雜B

第1号柱穴列土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 Ⅱ-Ⅲ中C・粒B、炭化粒D/粘B、雜B
- 2 10YR3/4 暗褐色 Ⅱ-Ⅲ中C・小B・粒B/粘B、雜C

第3号柱穴列土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 Ⅱ-Ⅲ中D・小B・粒B、炭化粒D/粘B、雜B
- 2 10YR3/4 暗褐色 Ⅱ-Ⅲ中D・小B・粒B/粘B、雜C
- 3 10YR3/3 暗褐色 Ⅱ-Ⅲ中B・小B・粒B/粘B、雜B

第226図 第1・2・3号柱穴列出土遺物実測図

切状遺構の推定範囲内に存在している。

規模と形状 南北方向 5.05 m の間に 4 か所の柱穴が配され、配列方向は N-4°-E である。柱間寸法は南から 2.05 m、1.55 m、1.45 m で、柱筋は揃っている。

柱穴 4 か所。平面形は円形または楕円形で、長径 26～79cm、短径 24～56cm、深さ 24～40cm である。掘方の壁面は外傾または直立している。

覆土 P2・P3 の第 1・2 層はロームブロックを多く含むことから、柱を抜き取った後の埋戻し土である。

遺物出土状況 陶器 1 点 (皿) が出土している。ほかに混入した弥生土器片 8 点、土師器 5 点が各柱穴の覆土中から出土している。1 は P2 の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 17～18 世紀代と考えられる。また、北側に位置する掘立柱建物と軸方向がほぼ同じであることから、同時期か、近い時期に構築されたものと考えられる。

第 122 表 第 1 号柱穴列出土遺物一覧 (第 226 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴	軸差	産地	出土位置	備考
1	陶器	皿	110.6	11.9		緻密 浅黄緑	鉄絵 鉄軸山草文	鉄軸 長石軸	瀬戸・美濃	P2 覆土	5% PL48

第 2 号柱穴列

位置 調査区の南部 I J 5 f0～I J 6 g1 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 58 号竪穴建物跡、第 189 号土坑を掘り込んでいる。第 1 号段切状遺構の推定範囲内に存在している。

規模と形状 南北方向 3.95 m の間に 3 か所の柱穴が直線的に並んでいる。配列方向は N-3°-W である。柱穴間の長さは南から 2.10 m、1.85 m である。

柱穴 3 か所。平面形は楕円形で、長径 66～88cm、短径 35～40cm、深さ 24～40cm である。P3 の底面から径 18cm の円形の硬化部分を確認した。P3 の北壁は段を有している。他の壁面は、外傾または直立している。

覆土 P1・P3 の第 1・2 層は、ロームブロックを多く含むことから、柱抜き取り後の埋戻し土である。

遺物出土状況 混入した弥生土器片 2 点、土師器片 1 点が覆土中から出土している。

所見 時期は、不明である。第 1 号柱穴列や北側の第 1・3A・3B 号掘立柱建物跡との関連性がうかがえることから、17・18 世紀代と推定できる。

第 3 号柱穴列

位置 調査区の南部 I J 5 f0～I J 5 g0 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第 58 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。第 1 号段切状遺構の推定範囲内に存在している。

規模と形状 南北方向 4.00 m の間に 3 か所の柱穴が直線的に並んでいる。配列方向は N-2°-W である。柱穴間の長さは南から 2.00 m、2.00 m である。

柱穴 3 か所。柱穴の平面形は楕円形で、長径 64～76cm、短径 38～44cm、深さ 34～40cm である。壁面は外傾または直立している。P1 の底面から、径 20cm の円形の硬化部分を確認した。

覆土 第 1～3 層は、ロームブロックを多く含むことから、柱抜き取り後の埋戻し土である。

遺物出土状況 混入した弥生土器片 1 点、土師器片 2 点が覆土中から出土している。

所見 時期は、第 1・2 号柱穴列や北側の第 1・3A・3B 号掘立柱建物跡との関連性がうかがえることから、17～18 世紀代と推定できる。

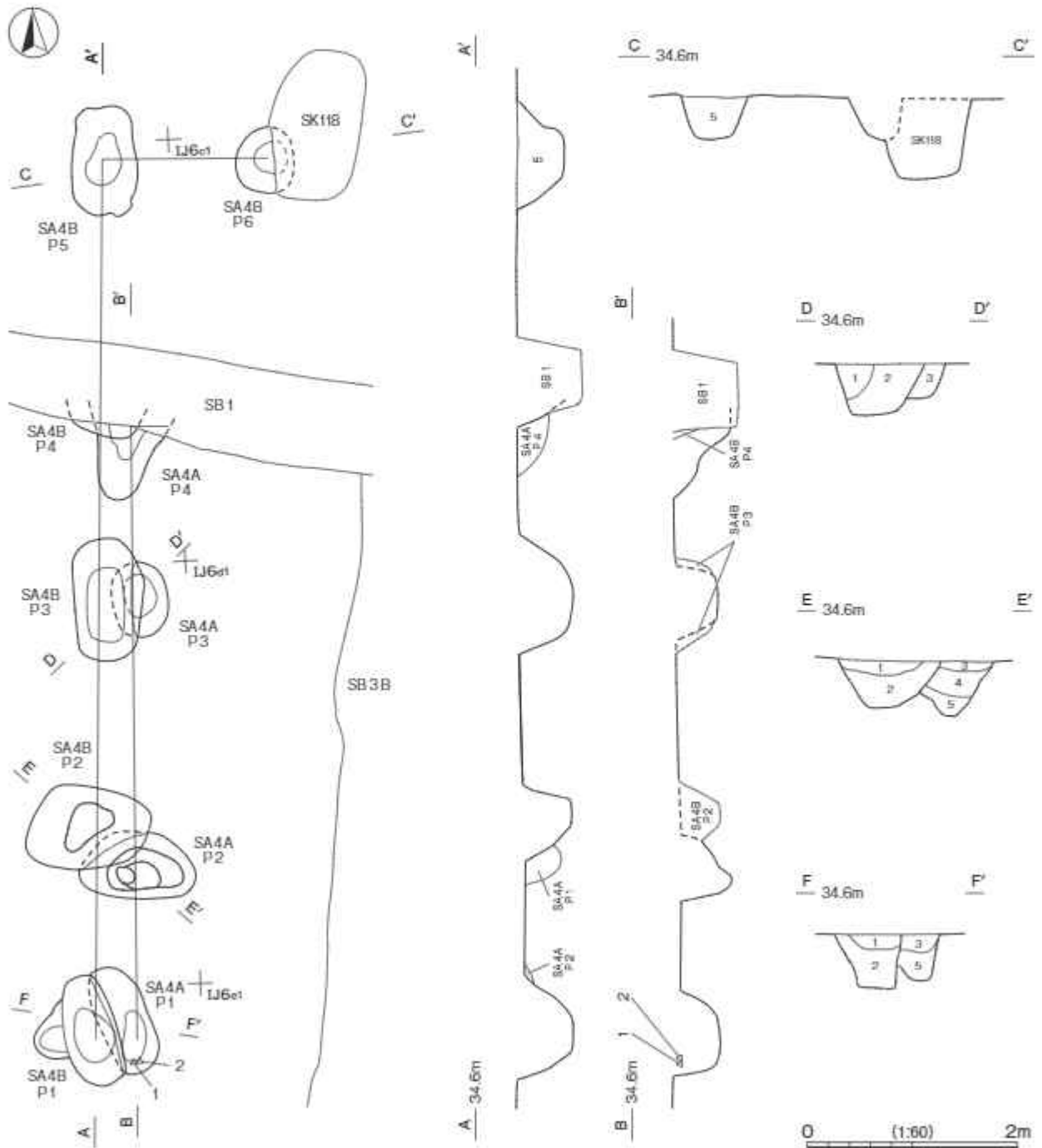
第4A・4B号柱穴列 (第227・228図 第123表 PL48)

第4A号柱穴列

位置 調査区の南部I J 5c0～I J 5e0区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物、第4B号柱穴列に掘り込まれている。第3A・3B号掘立柱建物跡との関係は不明である。第1号段切状遺構の推定範囲内に存在している。

規模と形状 南北方向6.10m、東西2.10mの間に4か所の柱穴が直線的に並んでいる。配列方向はN-1°-



第4A・4B号柱穴列土層解説

- | | |
|---------------|------------------------|
| 1 10YR2/4 暗褐色 | □ △小C・教C/粘B、雑B |
| 2 10YR/6 褐色 | □ △中D・小C・教B/粘B、雑B |
| 3 10YR/4 褐色 | □ △中C・小C・教B、粘土教D/粘B、雑B |

- | | |
|--------------|-------------------|
| 4 10YR/4 褐色 | □ △中C・小B・教A/粘B、雑B |
| 5 10YR/2 深褐色 | □ △中C・小B・教A、粘A、雑A |

第227図 第4A・4B号柱穴列実測図

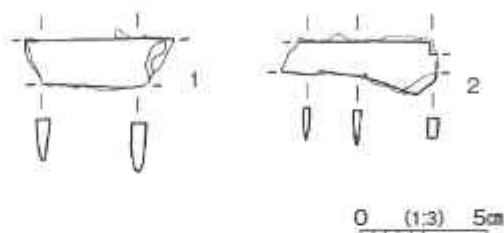
Eである。柱穴間の長さは、南から 1.75m、2.80m、1.55m である。

柱穴 4か所。重複のため、確認できた柱穴の平面形は、不整楕円形や隅丸長方形で、長径 59～112cm、短径 50～60cm、深さ 29～52cm である。壁は直立または外傾している。

覆土 第3～5層は、ロームブロックを多く含むことから、柱抜き取り後の埋戻し土である。

遺物出土状況 金属製品2点（小刀）が出土している。ほかに混入した弥生土器片23点、土師器片5点が出土している。1・2は、P19の覆土上層から出土している。

所見 時期は、17世紀後半から18世紀前半の第1号掘立柱建物に掘り込まれていることや、第1号段切状遺構の推定範囲内に構築していることから、17世紀前半頃と推定できる。第4B号柱穴列とは、軸方向がほぼ同じであるため、同一地点での造り替えと推定できる。



第228図 第4A号柱穴列柱出土遺物実測図

第123表 第4A号柱穴列出土遺物一覧（第228図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	小刀	(6.9)	(2.0)	0.5 - 0.6	(36.47)	鉄	刃部断面三角形 刃部内反り 柄部欠損	P19 覆土上層	PLA8
2	小刀	(6.3)	(2.0)	0.3 - 0.4	(10.85)	鉄	刃部断面三角形 切先・基部欠損 刃部摩耗	P19 覆土上層	PLA8

第4B号柱穴列

位置 調査区の南部 I J 5 e0～I J 5 e0 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第118号土坑、第4A号柱穴列を掘り込み、第1号掘立柱建物に掘り込まれている。第3A・3B号掘立柱建物との関係は不明である。

規模と形状 南北方向 8.52 m、東西方向 2.12 m の間に 6 か所の柱穴が L 字状に並んでいる。主軸方向は N-1°-E である。柱穴間の長さは、南から 2.12 m、2.10 m、2.15 m、2.15 m で、P5 から東に 2.12 m である。

柱穴 6か所。柱穴の平面形は、不整楕円形や隅丸長方形で、長径 110～140cm、短径 60～85cm で、深さ 44～76cm である。壁面は直立または外傾している。

覆土 第1～2層は、ロームブロックを多く含むことから、柱抜き取り後の埋め戻し土である。

遺物出土状況 混入した弥生土器片11点、土師器片8点が出土している。

所見 時期は、17世紀後半から18世紀前半の第1号掘立柱建物跡に掘り込まれていることや、第1号段切状遺構の推定範囲内に構築していることから、17世紀前半頃と推定できる。第4A号柱穴列とは、軸方向がほぼ同じであるため、同一地点での造り替えと推定できる。

第5号柱穴列（第229図）

位置 調査区の南部 I J 6 c1～I J 6 e1 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第1・2・3A・3B号掘立柱建物、第212号土坑に掘り込まれている。第2号掘立柱建物との関係は不明である。

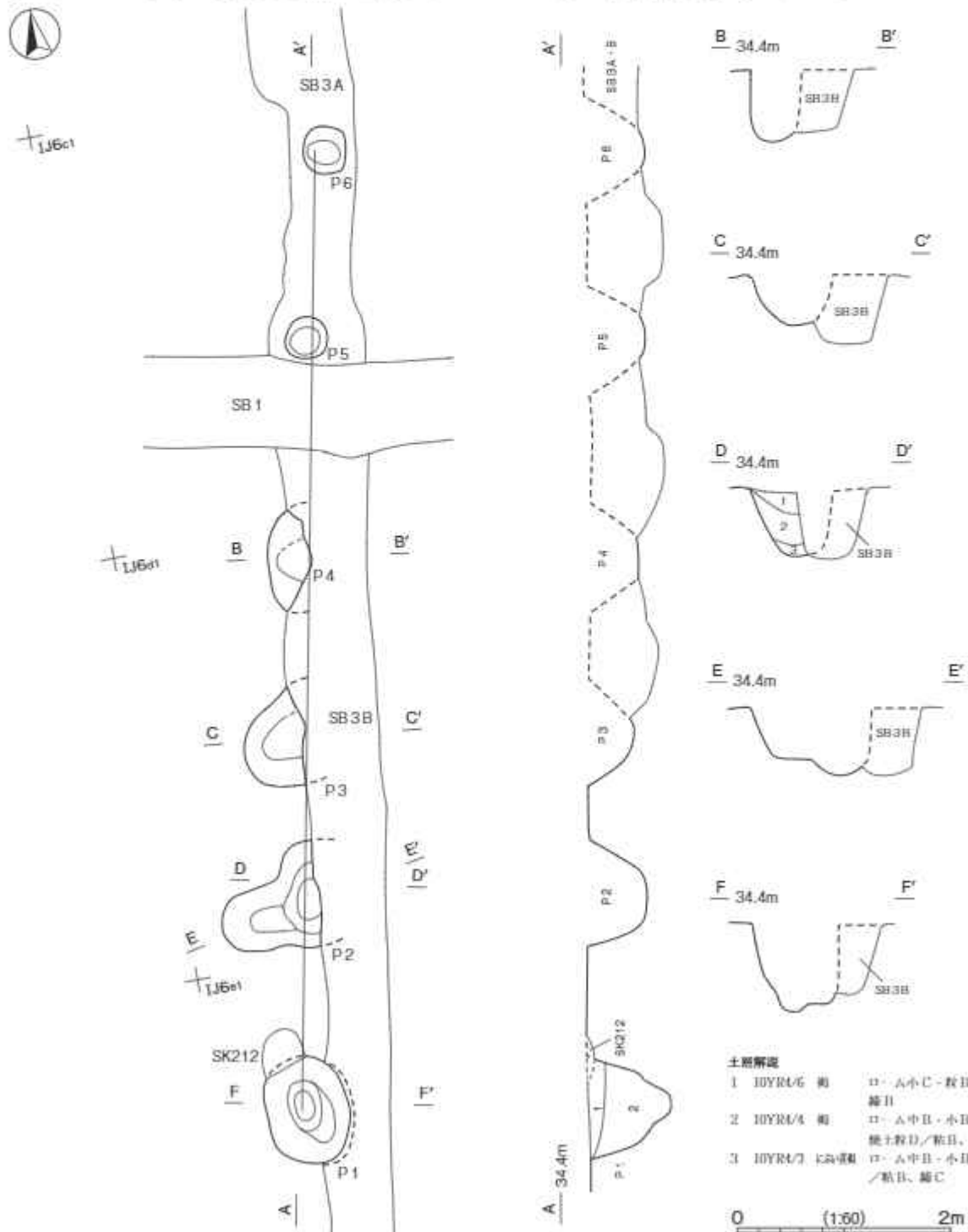
規模と形状 南北方向 9.30 m の間に 6 か所の柱穴が配列され、主軸方向は $N-12^{\circ}-E$ である。柱間寸法は、南から 2.10 m、1.50 m、1.50 m、2.10 m、1.80 m で、柱筋は揃っている。

柱穴 6 か所。柱穴の平面形は、不整楕円形もしくは円形で、長径 44 ~ 94 cm、短径 40 ~ 98 cm、深さ 44 ~ 84 cm である。壁は、右段または外傾している。

覆土 第 1 ~ 3 層は、ロームブロックを多く含むことから、柱抜き取り後の埋戻し土である。

遺物出土状況 混入した弥生土器片 12 点、土師器片 24 点が P 1 ~ P 6 の覆土中から出土している。

所見 時期は、伴う遺物は出土していないが、17 世紀後半から 18 世紀前半の第 1・3 号掘立柱建物に掘り込まれていること、第 1 号段切状遺構と並行していることから、17 世紀前半頃と考えられる。



第 229 図 第 5 号柱穴列実測図

第124表 江戸時代柱穴列一覧

番号	位置	配列方向	長さ(m)	柱間	柱穴数	柱穴			主な出土遺物	備考	
						平面形	長径(cm)	短径(cm)			深さ(cm)
1	I J 5g0 ~ I J 5g0	N-4°-E	5.05	1.45 ~ 2.05	4	円形 楕円形	26 ~ 79	24 ~ 56	24 ~ 40	陶器	SE8-SK183-189 →本跡→SK187
2	I J 5g0 ~ I J 6g1	N-3°-W	3.95	1.85 ~ 2.10	3	楕円形	66 ~ 88	35 ~ 40	24 ~ 40		SE8-SK189 → 本跡
3	I J 5g0 ~ I J 5g0	N-2°-W	4.00	2.00	3	楕円形	64 ~ 76	38 ~ 44	34 ~ 40		SE8 → 本跡
4A	I J 5e0 ~ I J 5e0	N-1°-E	南北6.10	1.55 ~ 2.80	4	不規則円形 楕円長方形	59 ~ 112	50 ~ 60	29 ~ 52	金属製品	本跡→SB1-SA4B SB3 新旧不明
4B	I J 5e0 ~ I J 5e0	N-1°-E N-90°-E	南北8.52 東西2.12	2.10 ~ 2.15	6	不規則円形 楕円長方形	110 ~ 140	60 ~ 85	44 ~ 76		SK18-SAAA → 本跡→SB1, SB3 新旧不明
5	I J 6e1 ~ I J 6e1	N-12°-E	9.30	1.50 ~ 2.10	6	円形 不規則円形	44 ~ 94	40 ~ 98	44 ~ 84		本跡→SB1-3A-B, SK212 SB2 新旧不明

(9) 土坑墓

第1号土坑墓 (SK 9) (第230図 第125表)

位置 調査区北部の I J 5g9 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第32号竪穴建物跡、第2号竪穴遺構、第5号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 1.16 m、短軸 1.03 m の隅丸方形で、長軸方向は N-14°-E である。深さ 30 cm で、底面は平坦である。壁は直立している。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを多く含む暗褐色土で埋め戻している。

埋葬及び遺物出土状況 金属製品1点(煙管)が出土している。ほかに混入した弥生土器片13点、土師器片6点が出土している。底面中央部のやや東寄りに骨粉が遺存していた。1は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土遺物から18世紀後半と考えられる。



土器解説
 1 IOYK2/4 陶製 コ-ム小C-粒B、黒色ブロック小C、骨粉B/新B、新B
 2 IOYK2/3 陶製 コ-ム小B-粒B、黒色ブロック小C、裏込め/新B、新B
 3 IOYK2/3 陶製 コ-ム小B-粒B、裏込め/新B、新B

第230図 第1号土坑墓・出土遺物実測図

第125表 第1号土坑出土遺物一覧 (第230図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	煙管	(7.8)	1.2	1.2	(8.71)	銅・竹	喉い口 扉字煙管 銅板軸付 扉字竹	覆土中層	

第6号土坑墓 (SK228) (第231図 第126表)

位置 調査区南部の I J 5e9 区、標高 34 m ほどの台地平坦面に位置している。

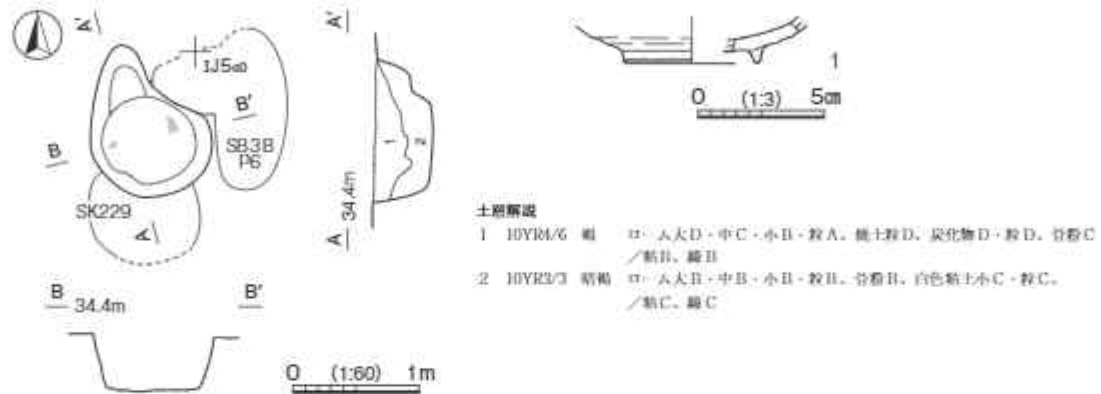
重複関係 第3B号掘立柱建物跡、第229号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 1.24 m、短径 0.94 m の不整な楕円形で、長径方向は N-18°-W である。深さ 43 cm で、底面は平坦である。壁は有段である北壁を除いてほぼ直立している。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含む褐色土、暗褐色土で埋め戻している。

埋葬及び遺物出土状況 瓦質土器片1点（火鉢）、陶器片4点（天目茶碗1、碗2、蓋1）が出土している。第2層の下部を中心に、底面からも骨片が出土しているが、部位や埋葬状況は不明である。覆土中から天目茶碗が出土している。

所見 時期は、出土遺物から18世紀後半以降と考える。



第231図 第6号土坑墓・出土遺物実測図

第126表 第6号土坑墓出土遺物一覧（第231図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴			釉薬	産地	出土位置	備考
1	陶器	碗	(1.8)	(5.4)		緻密 灰白	外面灰釉 天目茶碗	内面灰釉	高台貼付け	灰釉 灰釉	瀬戸・美濃系	覆土	5%

第127表 江戸時代土坑墓一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	I J 5 g9	N 14° E	隅丸方形	1.16 × 1.03	30	直立	平坦	人為	焼骨	SI32、第2号墓穴遺構、TM5→本誌
6	I J 5 e9	N 18° W	不整形	1.24 × 0.94	43	直立・有段	平坦	人為	瓦質土器 陶器	SB3B、SK229→本誌

(10) 粘土貼土坑

第1号粘土貼土坑（SK 4）（第232図 第128表 PL48）

位置 調査区北部I I 6 c1区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。

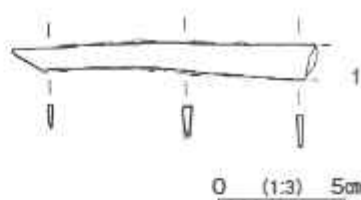
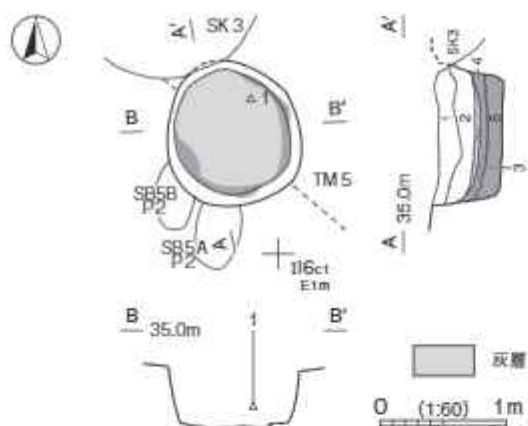
重複 第5A・5B号掘立柱建物跡、第3号土坑、第3号不明遺構に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.12m、短径1.08mの円形である。深さ36cmで、底面は皿状である。底面には、厚さ22～25cmほどの粘土ブロックを貼り付けている。壁は直立している。

覆土 5層に分層できる。第1～2層はロームブロックを含むことから、人為堆積である。第3層は灰や粘土粒子を含む層、第4～5層は灰黄褐色粘土主体の層で、構築土である。

遺物出土状況 土師質土器片9点（皿）、金属製品1点（小刀）が出土している。1は覆土下層から出土している。ほかに混入した縄文土器1点、弥生土器12点、土師器片2点、焼成粘土塊1点が出土している。

所見 時期は、出土遺物や遺構の重複から17世紀前半と考えられる。底面に貼り付けられた粘土は厚く、水槽などの貯水施設と考えられる。また、貼り付けた粘土には焼土が混入することから、作り直しや補修が推測できる。



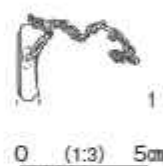
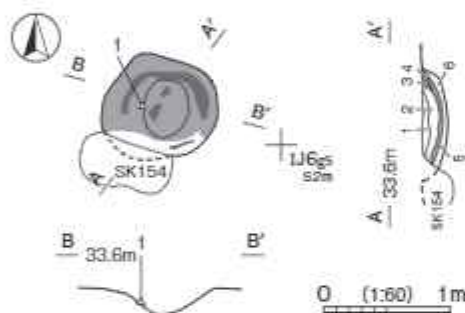
- 土層解説
- 1 I0YR2/3 暗褐色 中・人中D・小C・粒B/粘B、粘C
 - 2 I0YR2/4 暗褐色 中・人中C・粒B/粘B、粘B
 - 3 I0YR5/3 灰黄褐色 灰A、白色粘土粒A/粘C、粘B
 - 4 I0YR5/2 灰黄褐色 粘土粒D、炭化粒D、白色粘土中C・小B・粒B/粘B、粘B
 - 5 I0YR4/2 灰黄褐色 粘土粒D、白色粘土小A・粒B/粘B、粘A

第232図 第1号粘土貼土坑・出土遺物実測図

第128表 第1号粘土貼土坑出土遺物一覧(第232図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	小刀	(121)	(1.6)	02-04	(13.96)	鉄	刃部断面三角形 刃部内反り 柄部欠損	覆土下層	PL48

第2号粘土貼土坑 (SK153) (第233図 第129表 PL48)



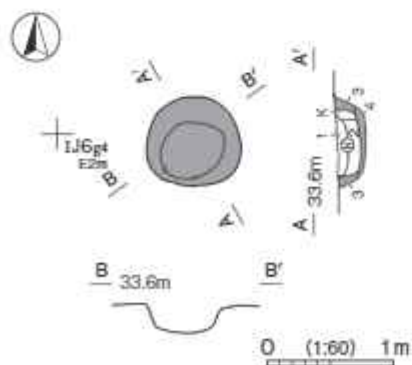
- 土層解説
- 1 I0YR4/4 褐色 中・小D・粒D、粘土粒D、炭化粒D/粘B、粘B
 - 2 I0YR4/6 褐色 中・小D・粒C、粘土粒D、炭化粒D、砂粒C/粘B、粘B
 - 3 I0YR2/3 暗褐色 中・小D・粒D、粘土小D・粒D、炭化粒D、砂粒D/粘B、粘B
 - 4 I0YR4/3 灰黄褐色 中・小粒D、粘土粒D、炭化粒D、白色粘土中C・小B/粘C、粘A
 - 5 I0YR3/4 暗褐色 中・小D・粘土粒D、炭化粒D、白色粘土大A・中A/粘B、粘A
 - 6 I0YR4/6 褐色 中・小D・小B・粒B、炭化粒D/粘B、粘B

第233図 第2号粘土貼土坑・出土遺物実測図

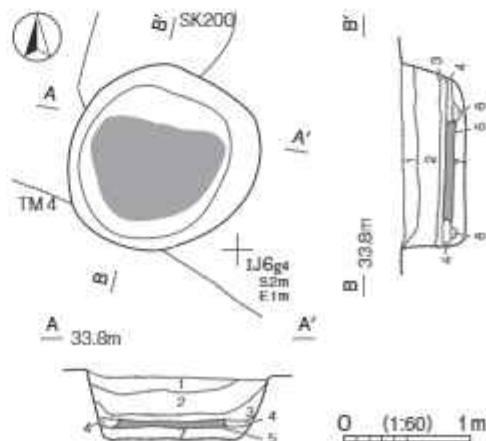
第129表 第2号粘土貼土坑出土遺物一覧(第233図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	不明鉄製品	(31)	(1.0)	(0.7)	(4.89)	鉄・銅	杯状鉄製品の頭部に鎖状に加工した銅線を連結 火箸の一部。	覆土中層	PL48

第3号粘土貼土坑 (SK155) (第234図)



第4号粘土貼土坑 (SK158) (第234図)



第234図 第3・4号粘土貼土坑実測図

第3号粘土貼土坑土層解説

- 1 10YR4/4 褐 口- A小D- 粒D、焼土粒D、炭化物C/粘B、雜B
- 2 10YR3/3 暗褐 口- A小D- 粒C、炭化物D/粘B、雜B
- 3 10YR5/3 灰褐色 口- A粒D、炭化物D、白色粘土A- 中A/粘B、雜B
- 4 10YR3/4 暗褐 口- A小C- 粒B、炭化物D、白色粘土小C- 粒B /粘B、雜A

第4号粘土貼土坑土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐 口- A中D- 小C- 粒C、炭化物粒D/粘B、雜B
- 2 10YR3/4 暗褐 口- A中D- 小C- 粒B、炭化物D- 粒C/粘B、雜B
- 3 10YR3/3 暗褐 口- A中D- 小C- 粒C、炭化物D/粘B、雜B
- 4 10YR3/4 暗褐 口- A中D- 小C- 粒B、白色粘土粒C/粘C、雜C
- 5 10YR5/3 灰褐色 口- A粒D、白色粘土A- 中A/粘A、雜A
- 6 10YR2/2 黒褐 口- A粒D/粘C、雜C
- 7 10YR4/4 褐 口- A中C- 小B- 粒A、炭化物D/粘B、雜B

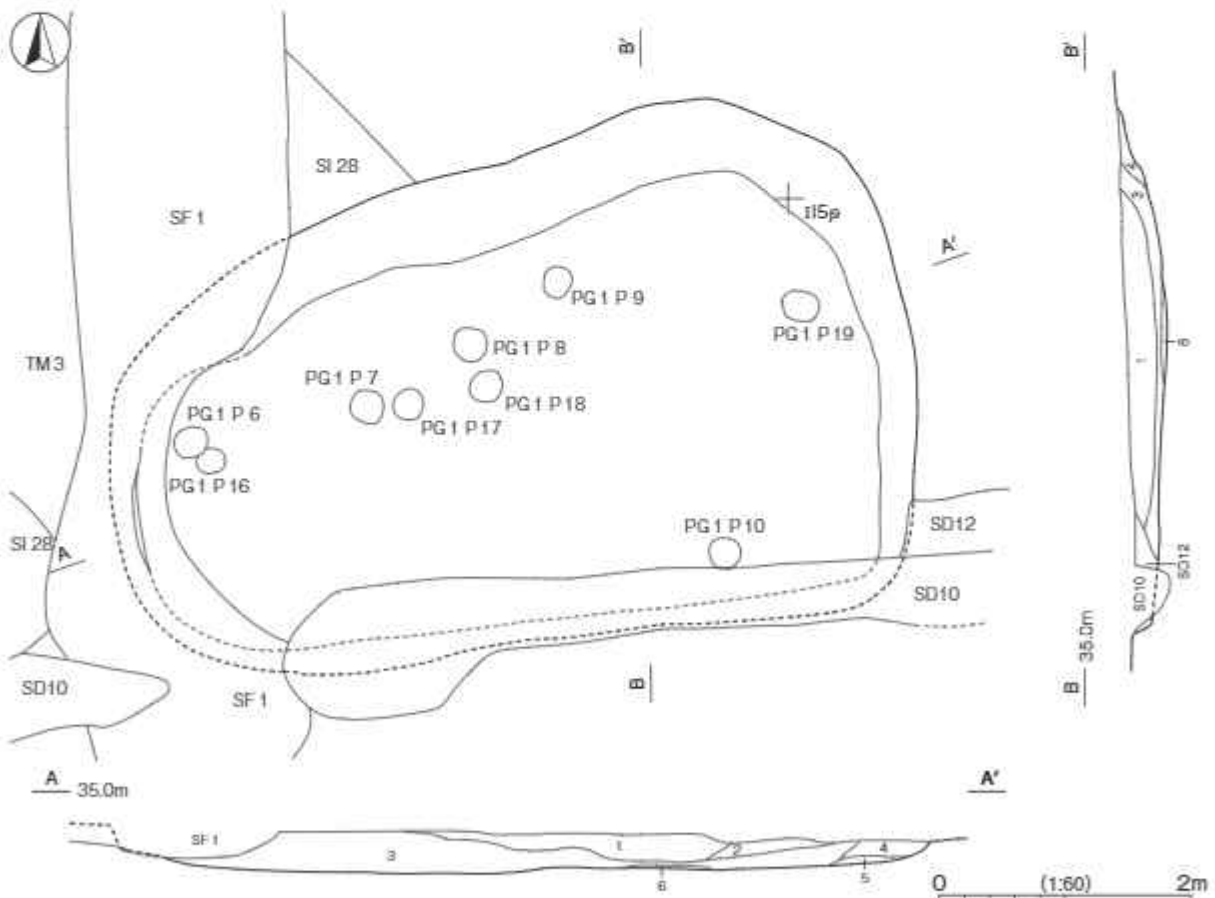
第130表 江戸時代粘土貼土坑一覽

番号	泉源	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主要出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	116cf	-	円形	1.12×1.08	36	直立	皿状	人為	土師質土器 金属製品	SK3A-II → 本誌→SK3 SK3
2	116gf	N 51° W	不整形円形	0.94×0.84	24	外傾	皿状	自然	金属製品	本誌→SK154
3	116gf	-	円形	0.72×0.70	20	外傾	平坦	自然	陶器 銭貨	
4	116gf	N 67° E	楕円形	1.59×1.42	50	外傾	平坦	人為	土師質土器	TM1, SK200 →本誌

(11) 不明遺構

第1号不明遺構 (第235図)

位置 調査区東部の115j8区、標高35mほどの台地平坦面に位置している。



土層解説

- 1 10YR3/2 暗褐 口- A小C- 粒C、炭化物C/粘B、雜B
- 2 10YR3/2 暗褐 口- A粒C、焼土粒D、炭化物C/粘B、雜B
- 3 10YR3/2 暗褐 口- A小D- 粒C/粘B、雜B
- 4 10YR4/3 灰褐色 口- A小D- 粒C/粘B、雜B
- 5 10YR4/6 褐 口- A中A- 小A/粘B、雜A
- 6 10YR3/4 暗褐 口- A小C- 粒C/粘A、雜B

第235図 第1号不明遺構実測図

重複関係 第28号竪穴建物跡、第3号墳を掘り込み、第1号道路、第10・12号溝、第1号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため、確認できた規模は長径6.30m、短径3.68mの不整楕円形で、主軸方向はN-70°-Eである。深さ20～32cmで、底面は平坦で硬化はしていない。壁は外傾している。

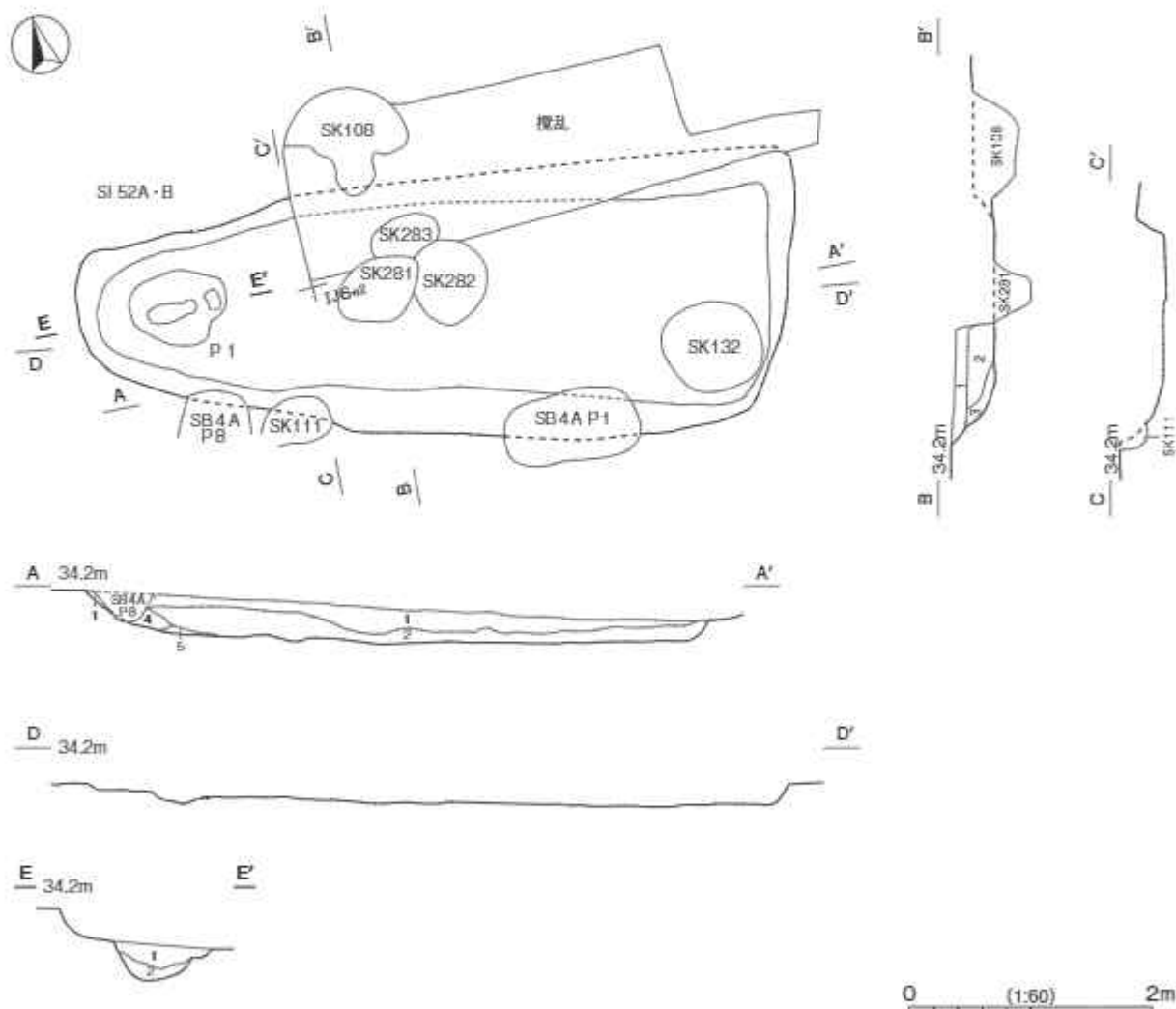
覆土 6層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)、陶器片2点(不明)、磁器片1点(碗)が出土している。細片の為、図示できない。
所見 時期は、18世紀代の第12号溝に掘り込まれていることから、それ以前と考えられる。性格は不明である。

第2号不明遺構 (第236図)

位置 調査区東部のI J 6e2区、標高34mほどの台地平坦面に位置している。

重複関係 第52A・52B号竪穴建物跡を掘り込み、第4A号掘立柱建物、第108・111・132・281～283号土



土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐色 Ⅰ-Ⅱ中Ⅱ-小Ⅱ-粒A、焼土粒D/粘B、綿目
- 2 10YR2/7 暗褐色 Ⅰ-Ⅱ小Ⅱ-粒A/粘B、綿目
- 3 10YR4/3 紅褐色 Ⅰ-Ⅱ中Ⅱ-小Ⅱ-粒B、焼土粒D/粘B、綿目
- 4 10YR4/6 紅 Ⅰ-Ⅱ小Ⅱ-粒A/粘B、綿目
- 5 10YR4/4 紅 Ⅰ-Ⅱ中Ⅱ-小Ⅱ-粒A/粘B、綿目

ピット土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐色 Ⅰ-Ⅱ小Ⅱ-粒A、炭化粒D/粘B、綿目
- 2 10YR4/4 紅 Ⅰ-Ⅱ中Ⅱ-小Ⅱ-粒A/粘B、綿目

第236図 第2号不明遺構実測図

坑に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため、確認できた規模は長軸 5.82 m、短軸 2.00 m の不整長方形で、主軸方向は N-78°-E である。深さ 12~32 cm で、底面はほぼ平坦で、硬化はしていない。壁は外傾している。

ピット P1 は深さ 32 cm で、西壁際に位置している。出入口施設に伴うピットの可能性もある。

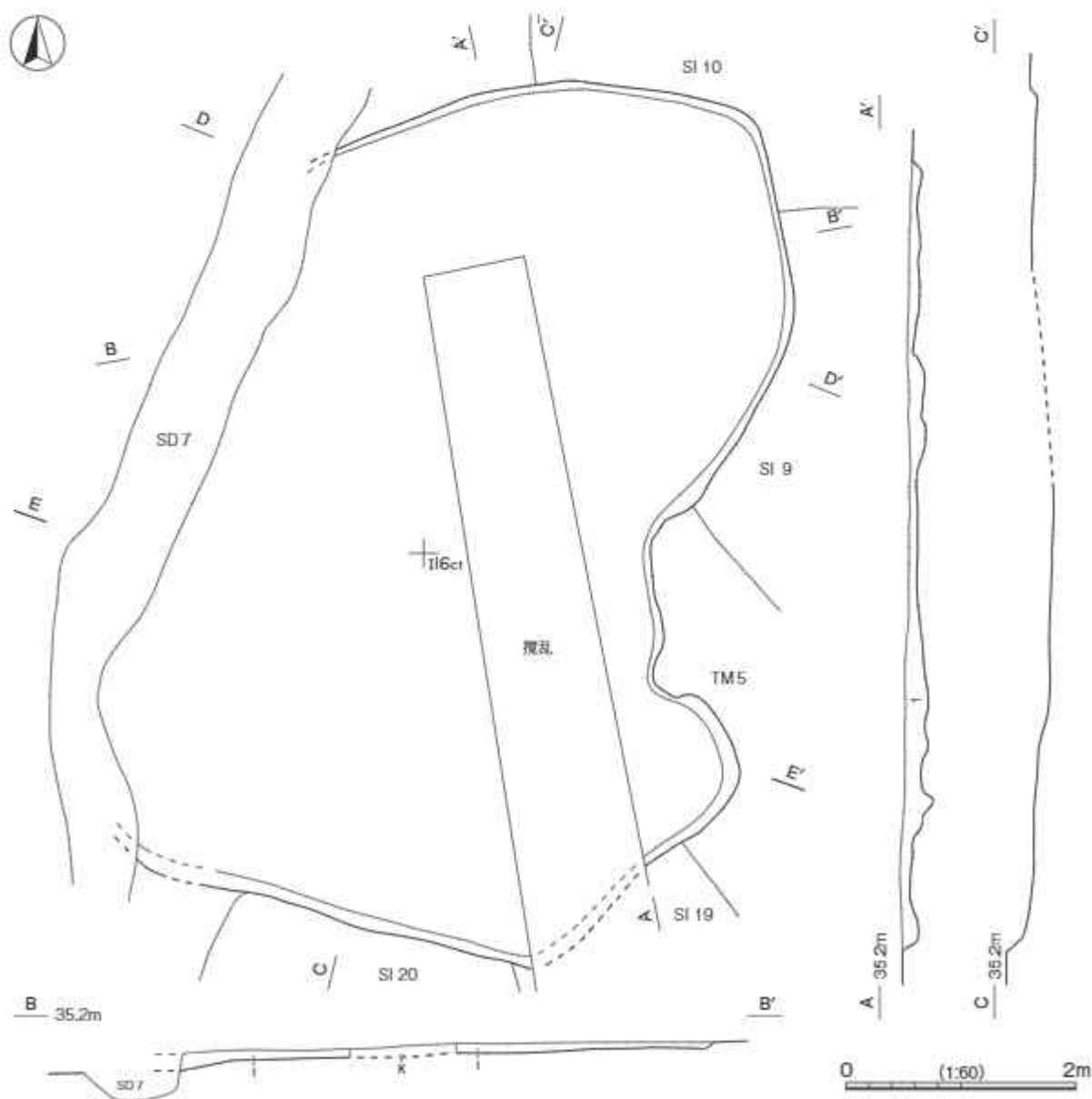
覆土 5 層に分層できる。各層にロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片 2 点 (皿) が出土している。細片のため、図示できない。ほかに混入した弥生土器片 8 点、土師器片 12 点 が出土している。

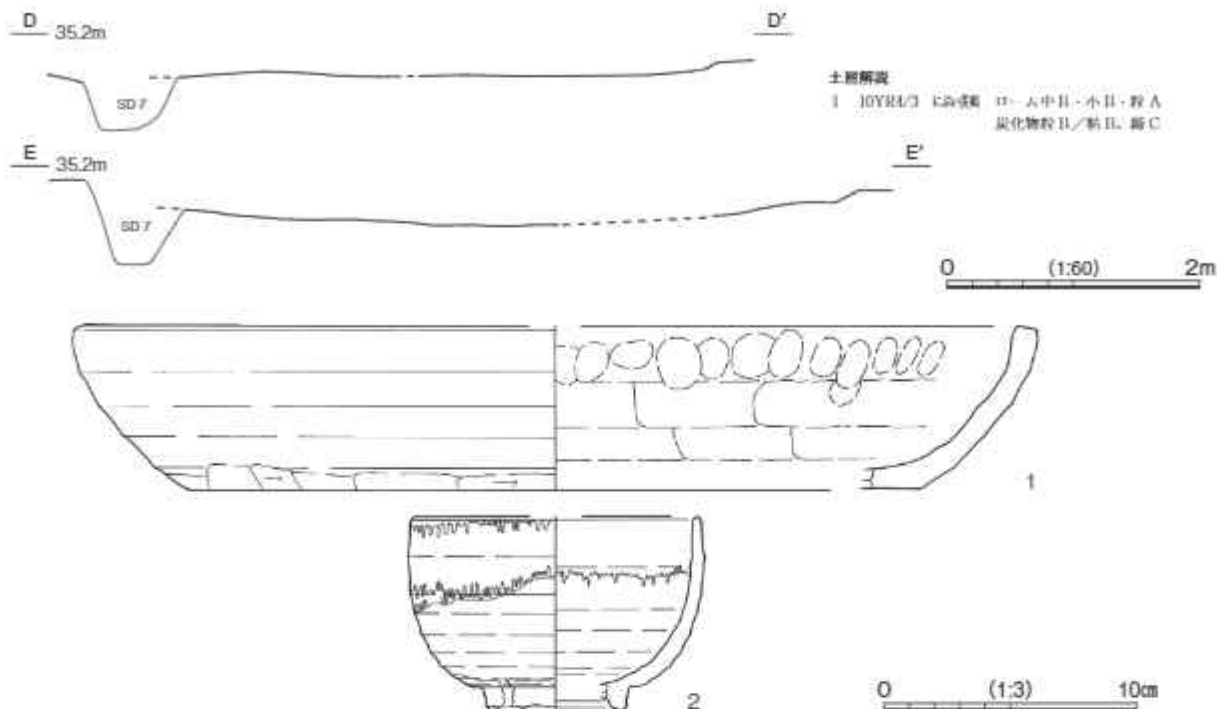
所見 時期は、17 世紀から 18 世紀後半の第 4 A 号掘立柱建物に掘り込まれていることから、それ以前と考えられる。性格は不明である。

第 3 号不明遺構 (第 237・238 図 第 131 表 PL48)

位置 調査区北部の I I 5 b 0 区~I I 6 c 1 区、標高 35 m ほどの台地平坦面に位置している。



第 237 図 第 3 号不明遺構実測図



第238図 第3号不明遺構・出土遺物実測図

重複関係 第9・10・19・20号竪穴建物、第5A・5B号掘立柱建物跡、第3・13・18・19・21・25・26号土坑、第1号粘土貼土坑、第5号墳を掘り込み、第7号溝に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため、確認できた規模は長軸7.75m、短軸5.33mで、不整長方形と推定できる。主軸方向はN-14°-Eである。深さ12~30cmで、壁は外傾している。底面は南東部のみ凹凸がある。硬化はしていない。壁は外傾している。

覆土 単一層である。ロームブロックを多く含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師質土器片14点(皿13、焙烙1)、陶器片3点(碗2、皿1)が出土している。ほかに混入した弥生土器片49点、土師器片102点が出土している。

所見 時期は、出土遺物から18世紀後半から19世紀と考えられる。性格は不明である。

第131表 第3号不明遺構出土遺物一覧(第238図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	焙烙	[137.0]	6.5	[29.0]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	内面磨面痕 体部下平へつ削り	覆土中	30%
2	陶器	碗	[11.2]	7.7	[5.2]	緻密 灰白 浅黄	灰白茶褐色	高台部以外内外輪車	胎土のふれ	瀬戸・美濃	覆土中 40% PL48

第132表 不明遺構一覧

番号	K数	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径 × 短径(m)	深さ(cm)					
1	115B	N-70°-E	不整楕円形	(6.30) × (3.68)	20~32	外傾	平坦	自然	土師質土器 陶器 磁器	S128, TM3 → 本跡 → S110・12, SP1, PG1
2	116e2	N-70°-E	不整長方形	5.82 × (2.00)	12~32	外傾	平坦	人為	土師質土器	S152A・H → 本跡 → S144, SK108・111・132・281・282
3	115b0 ~ 116d	N-14°-E	不整長方形	7.75 × (5.33)	12~30	外傾	平坦 凹凸	人為	土師質土器 陶器	S19・10・19・20, S15A・H, SK3・13・18・19・21・25・26, 第1号粘土貼土坑, TM5 → 本跡 → SD7

7 時期不明の遺構と遺物

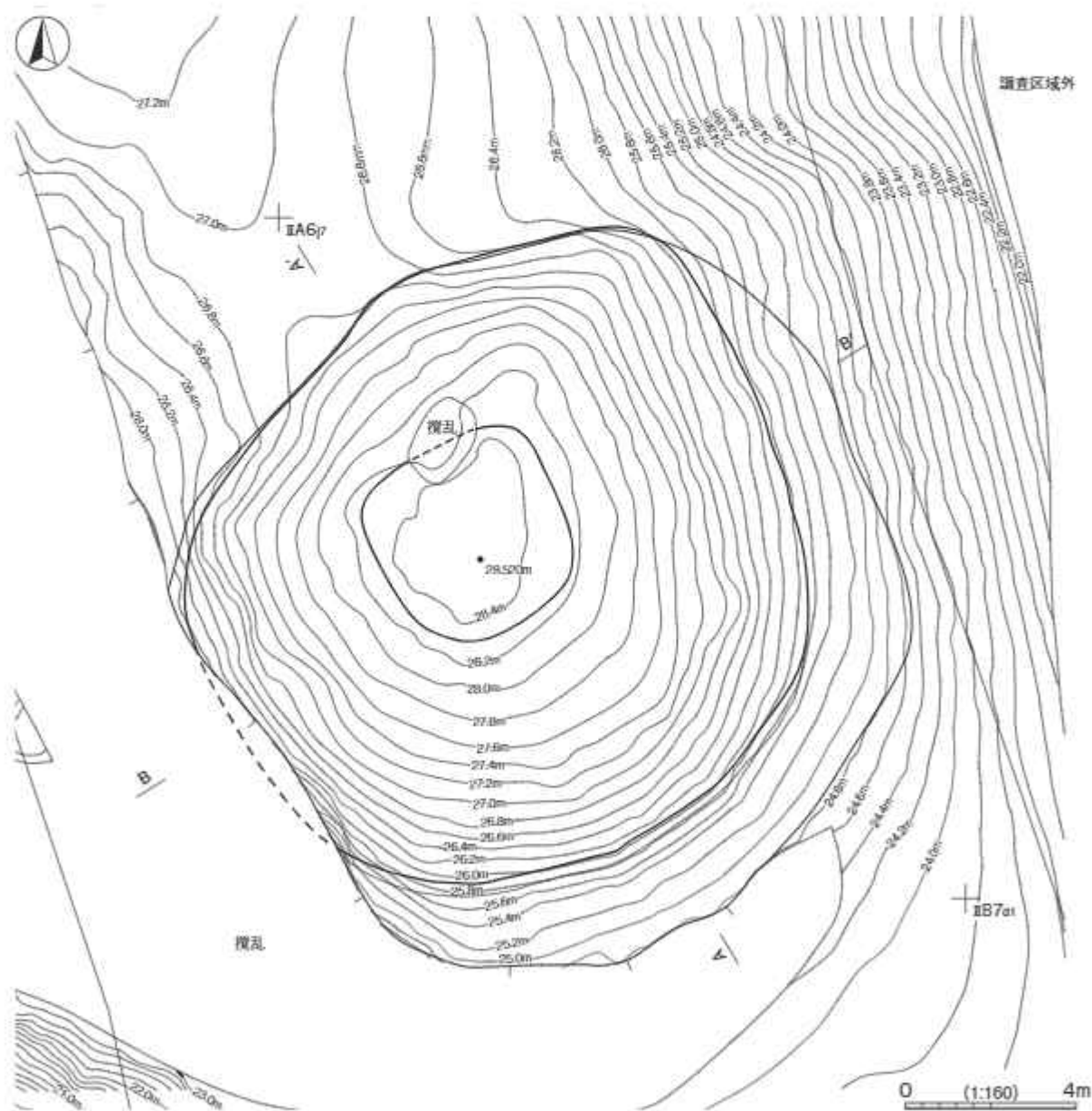
塚1基、溝9条、土坑墓5基、土坑188基、ピット群1か所を確認した。以下、実測図と一覧表、計測表を記載する。

(1) 塚

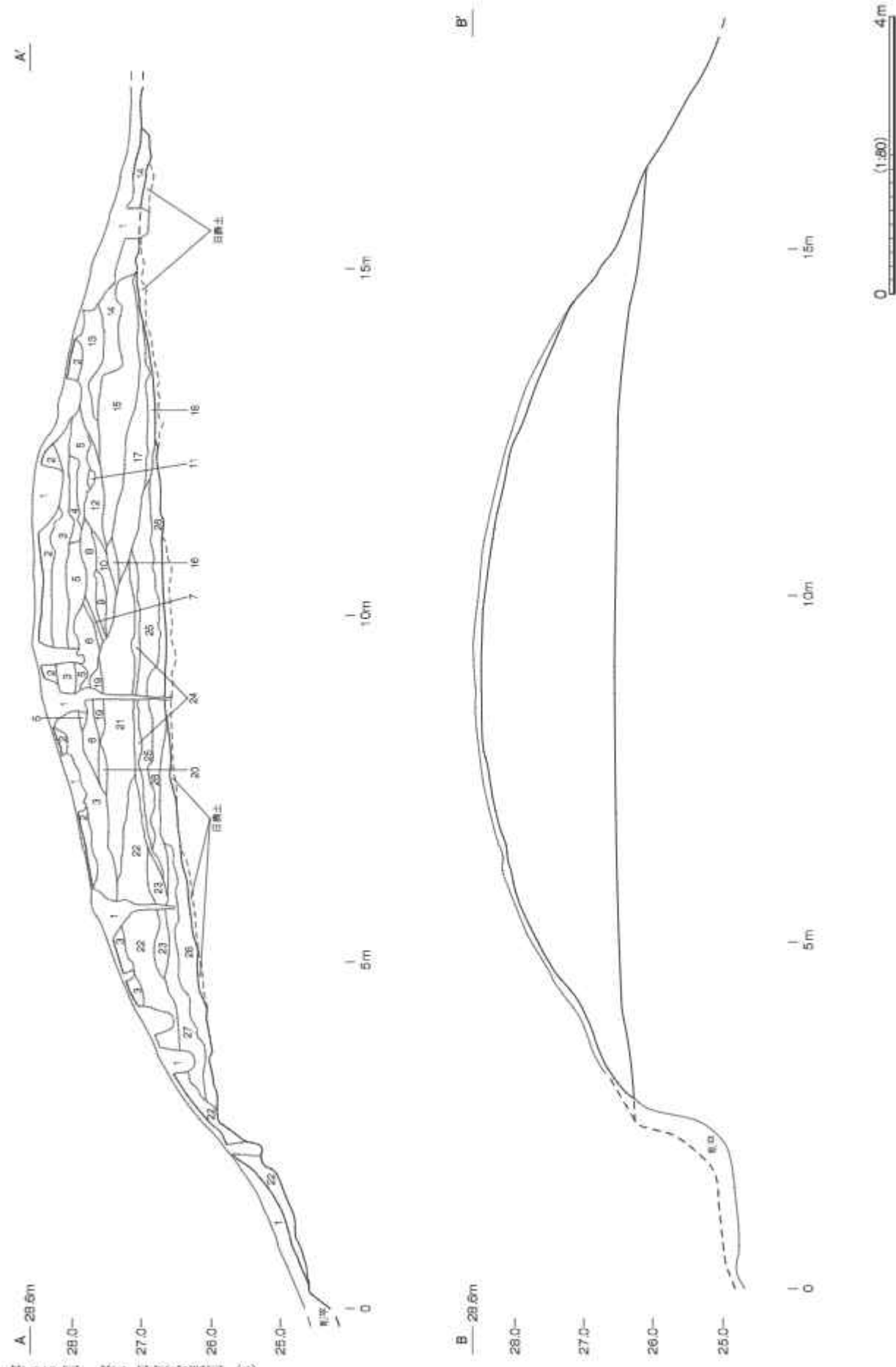
第1号塚 (第239～241図 第133表 PL23・48)

位置 調査区南東部のⅡA 6j7～ⅡB 6c0区、標高24～26mの尾根の先端付近に位置している。

規模と形状 南東側に向かって傾斜する、東西両側が急峻な痩せ尾根の先端部に構築している。南・西部が削平を受けているため、確認できた規模は長軸144m、短軸136mの隅丸方形と推定できる。主軸方向はN-36°-Wである。基底部である旧表土面から塚頂部表土までの高さは、192cmである。



第239図 第1号塚実測図(1)



第240图 第1号塚实测图(2)

土層解説

- 1 表土及び植込層
 2 10YR3/2 暗褐色 コ・ム粒C、炭化粒D、スコリア粒D/粘B、粘B
 3 10YR4/5 褐 コ・ム粒A、炭化物D、砂粒D/粘A、粘A
 4 10YR5/6 黄褐色 コ・ム中C・小D・粒B、炭化粒D、砂粒D/粘A、粘A
 5 10YR6/4 灰褐色 コ・ム小D、炭化物D、金雲母B、粘土粒A/粘A、粘A
 6 10YR3/2 黒褐色 炭化物D、金雲母B、粘土粒A/粘A、粘A
 7 10YR3/2 黒褐色 コ・ム粒C、砂粒C、金雲母B/粘A、粘A
 8 10YR5/4 灰褐色 コ・ム粒C、炭化物D、金雲母B、粘土粒B/粘A、粘A
 9 10YR3/4 暗褐色 炭化粒D、砂粒C、金雲母D、黒色小ブロックD/粘A、粘A
 10 10YR3/2 暗褐色 コ・ム粒C、炭化粒D、砂粒C、金雲母B/粘A、粘A
 11 10YR5/2 灰黄褐色 コ・ム小D・粒D、炭化粒D、砂粒C、金雲母B、粘土粒A/粘A、粘A
 12 10YR5/4 灰褐色 炭化粒D、砂粒C、金雲母B、粘土粒A/粘A、粘A
 13 10YR4/4 褐 コ・ム小D・粒D、炭化物D・粒D、砂粒C、スコリア粒D/粘A、粘C
 14 10YR5/4 灰褐色 コ・ム粒D、炭化粒D、砂粒C、金雲母C、黒色小ブロックD/粘A、粘A
 15 10YR4/3 灰褐色 コ・ム粒D、炭化粒D、砂粒D、金雲母B、粘土粒B/粘A、粘A
 16 10YR5/2 灰黄褐色 コ・ム小D・粒D、炭化粒D、砂粒C、金雲母B、粘土粒A/粘A、粘A
 17 10YR6/4 灰褐色 コ・ム粒D、金雲母B、粘土粒A/粘A、粘A
 18 10YR3/2 黒褐色 コ・ム小D・粒D、砂粒C、金雲母B/粘A、粘A
 19 5YR4/3 灰褐色 コ・ム小D・粒D、砂粒C、金雲母C、スコリア中D・小B、粘A、粘B
 20 10YR3/2 暗褐色 コ・ム中D・小C・粒B、炭化物D・粒D、金雲母C/粘A、粘A
 21 10YR4/3 灰褐色 コ・ム小D・粒D、炭化粒D、砂粒C/粘A、粘C
 22 10YR3/2 暗褐色 コ・ム中D・小D・粒D、炭化物D・粒D、金雲母C/粘A、粘A
 23 10YR4/4 褐 コ・ム中D・小D・粒C、炭化物D・粒D、金雲母C/粘A、粘A
 24 5YR2/4 暗赤褐色 コ・ム粒D、砂粒C、金雲母C、スコリア中D・小B・粒B/粘A、粘B
 25 10YR3/2 暗褐色 コ・ム粒D、炭化粒D、砂粒C、金雲母B/粘A、粘A
 26 10YR4/2 灰黄褐色 コ・ム小D・粒D、砂粒A/粘A、粘B
 27 10YR4/4 褐 コ・ム中D・小B・粒B、金雲母C、スコリア粒D/粘A、粘A
 28 10YR4/3 灰褐色 コ・ム小B・粒B、炭化粒D、砂粒C、金雲母D/粘A、粘A
 旧表土 10YR3/2 暗褐色 コ・ム小D・粒C、砂粒B/粘B、粘C

盛土 28層に分層できる。緩斜面部を地形に沿ってほぼ平坦に整地した後、塚南部を第19～28層で高さ約1m盛土した後、北部も同程度の高さまで第11～18層で盛土している。その後、南部と北部の境の中央部に第7～10層を盛土し、さらに第4～6層を水平に基底部から1.8mの高さまで盛土して、第2～3層で全体を覆っている。塚南半部の盛土は、斜面側が高くなるように内側から外側に、塚北半部は内側から外側に、締まりが弱い土を間層として挟みながら踏み固め、構築している。

遺物出土状況 銭貨1点が出土している。ほかに混入した弥生土器片8点、土師器片30点が出土している。1は塚北部の表土から出土している。

所見 時期は、出土した銭貨から17世紀後半には築造されていた可能性もあるが、ほかに時期を判断できる遺物がないため、不明である。



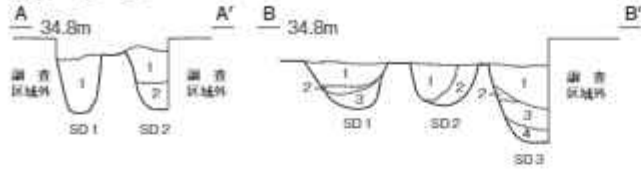
第241図 第1号塚出土遺物実測図

第133表 第1号塚出土遺物一覧(第241図)

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋳年	特徴	出土位置	備考
1	寛永通宝	24	0.6	0.1	2.91	銅	1636	占京水	表土	PL48

(2) 溝跡 (第3・242・243図 第134・135表 PL47)

SD1・2・3



第1・2・3号溝土層解説

- | | |
|--------------|---------------------------|
| 1 10YR2/3 暗褐 | □-A小II-粒B、炭化粒D/粘B、雜C |
| 2 10YR2/4 暗褐 | □-A小II-粒B/粘B、雜C |
| 3 10YR3/3 暗褐 | □-A小II-粒B、粘土粒D、炭化粒D/粘B、雜C |
| 4 10YR2/2 黒褐 | □-A小II-粒B、粘土粒C、炭化粒C/粘B、雜C |

SD6



第6号溝土層解説

- | | |
|--------------|--------------------------|
| 1 10YR2/2 黒褐 | □-A小D-粒D、粘土粒D、炭化粒D/粘B、雜D |
|--------------|--------------------------|

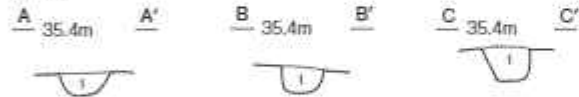
SD7



第7号溝土層解説

- | | |
|--------------|--------------------|
| 1 10YR4/3 灰褐 | □-A中D-小II-粒B/粘B、雜B |
|--------------|--------------------|

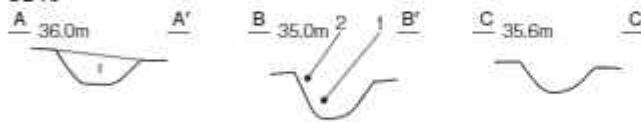
SD8



第8号溝土層解説

- | | |
|--------------|--------------------------|
| 1 10YR2/2 黒褐 | □-A小C-粒C、粘土粒D、炭化粒D/粘B、雜B |
|--------------|--------------------------|

SD10



第10号溝土層解説

- | | |
|--------------|------------------|
| 1 10YR2/2 黒褐 | □-A粒D、粘土粒D/粘B、雜B |
|--------------|------------------|

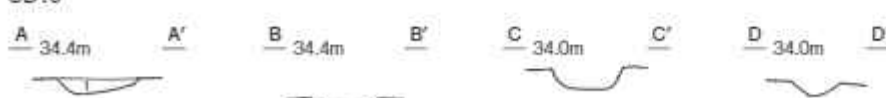
SD13



第13号溝土層解説

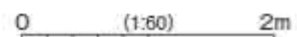
- | | |
|--------------|--------------------------|
| 1 10YR2/3 暗褐 | □-A小D-粒C、粘土粒C、炭化粒C/粘B、雜B |
|--------------|--------------------------|

SD15



第15号溝土層解説

- | | |
|--------------|------------------------|
| 1 10YR2/4 暗褐 | □-A中C-小II-粒B、砂粒C/粘B、雜B |
|--------------|------------------------|





第243図 7・10号溝跡出土遺物実測図

第134表 第7号溝出土遺物一覧(第243図)

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初製年	特徴	出土位置	備考
1	寛永通寶	2.3	0.7	0.1	1.97	銅	1626	無背銭	覆土中	PL47

第135表 第10号溝出土遺物一覧(第243図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴	軸差	産地	出土位置	備考
1	陶器	碗	[13.0]	(4.8)		緻密 にぶい黄緑	天目基碗 ロクロ成形 内外面施釉	鉄軸	瀬戸・美濃	覆土中層	10%
2	陶器	折縁皿	[11.4]	2.4	[5.6]	緻密 にぶい黄緑	摺縁皿 底面・高台内無釉	灰軸	瀬戸・美濃	覆土下層	40%

第136表 その他の溝跡一覧

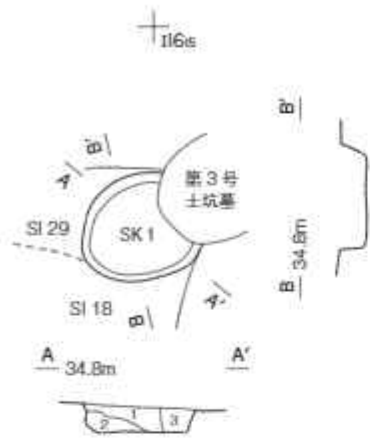
番号	位置	方向	平面形	長 幅			断面	埋面	覆土	主な出土遺物	備考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)						深さ(cm)
1	I16r6~ I16b5	N 22° E	直線状	(14.48)	0.27~ 0.60	0.15~ 0.32	34~43	U字状	外相	人為	養生土器 土師器 土師貫土器 陶器	S11A-B → 本跡 → S15
2	I16r6~ I16b5	N 22° E	直線状	(16.02)	0.42~ 0.70	0.18~ 0.49	32~46	U字状	外相	人為	養生土器 土師器 陶器 磁器	S11A-B → 本跡 → S14・5
3	I16r6~ I16b5	N 22° E	直線状	(5.40)	(0.30~ 0.47)	(0.24~ 0.37)	(60)	U字状	外相	人為	養生土器 土師器 土師貫土器 陶器	S11A-B → 本跡 → S14・5
6	I15b9~ I15g4	N 46° W	直線状	(26.50)	0.34~ 0.70	0.16~ 0.30	5~49	逆台形	外相	自然	養生土器 磁器 土師器 須恵器 陶器	S16-14・16・SK62・TM5・5 → 本跡
7	I16i1~ I15b9	N 25° E N 19° W N 28° W	弧状	(41.60)	0.40~ 0.73	0.11~ 0.40	10~38	皿状 逆台形	外相	人為	養生土器 土師器 須恵器 陶器	S110・25・26・32-SR1・SK88・SD5・TM5・SX1 → 本跡
8	I15p6~ I15b5	N 11° E	直線状	(8.50)	0.19~ 0.45	0.10~ 0.25	9~26	U字状 逆台形	外相	人為	養生土器 土師器 陶器 銭貨	S166-SR1-TM8 → 本跡
10	I15j3~ I15b9	N 87° E N 98° E	直線状	(26.84)	0.44~ 0.78	0.18~ 0.40	18~42	逆台形	外相	人為	養生土器 土師器 陶器 石器	TM3-S128-SF1・SD12 → 本跡
13	I16a1~ I16a2	N 58° W	直線状	(2.67)	1.05~ 1.50	0.56~ 1.30	9~19	皿状	外相	人為	養生土器 土師器 陶器	S10-SK48 → 本跡 → SK49 SD7新田不明
15	I16i3~ I16b	N 167° W N 164° E N 155° E	Y字状	(11.62~ 14.5)	0.37~ 0.71	0.08~ 0.44	12~33	逆台形	外相	人為	養生土器 土師器 土師貫土器 陶器	S150・54 → 本跡 → S12・SK119

(3) 土坑(第244~265図 第137表)

実測図と一覧表を記載する。



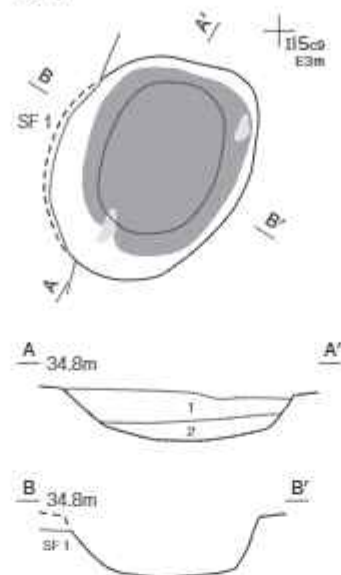
SK 1



第1号土坑土葬解説

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1 10YR2/4 暗褐色 | □-△中C-小B-粒B
/粘B、粘B |
| 2 10YR3/3 暗褐色 | □-△中C-小B-粒B
/粘B、粘C |
| 3 10YR2/4 暗褐色 | □-△小C-粒B
/粘B、粘B |

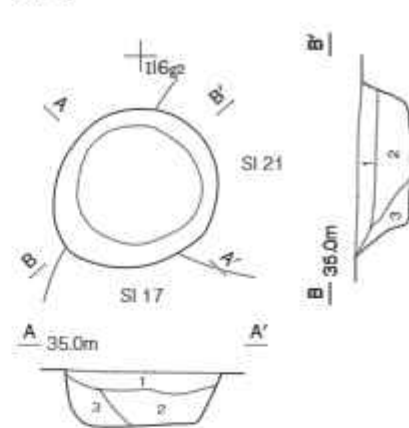
SK 7



第7号土坑土葬解説

- | | |
|-------------|-------------------------|
| 1 10YR4/6 黄 | □-△粒A、炭化物D-粒D
/粘B、粘B |
| 2 10YR2/1 黑 | (炭灰)炭化物A-粒A
/粘C、粘C |

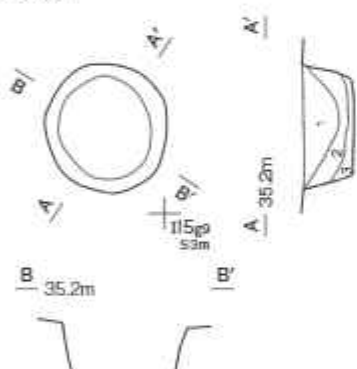
SK 8



第8号土坑土葬解説

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1 10YR2/4 暗褐色 | □-△中C-小C-粒B/粘B、
粘B |
| 2 10YR2/3 暗褐色 | □-△小C-粒C/粘B、粘C |
| 3 10YR2/3 暗褐色 | □-△中C-小B-粒B/粘B、
粘C |

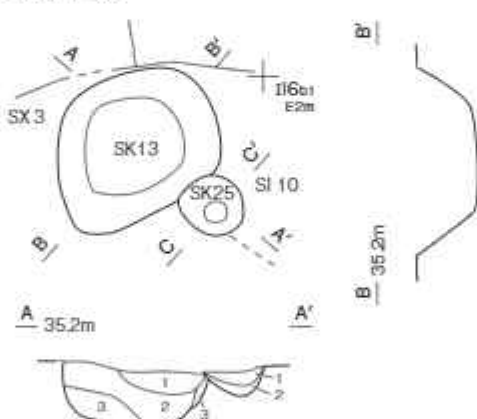
SK10



第10号土坑土葬解説

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 10YR2/3 暗褐色 | □-△小C-粒D/粘B、粘B |
| 2 10YR2/3 暗褐色 | □-△小C-粒C/粘B、粘B |
| 3 10YR3/4 暗褐色 | □-△小C-粒B/粘B、粘B |

SK13・25



第13号土坑土葬解説

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1 10YR2/3 暗褐色 | □-△小D-粒C
/粘C、粘C |
| 2 10YR2/3 暗褐色 | □-△小C-粒C
/粘B、粘C |
| 3 10YR2/4 暗褐色 | □-△中D-粒B
/粘B、粘B |

第25号土坑土葬解説

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1 10YR2/3 暗褐色 | □-△粒D
/粘B、粘C |
| 2 10YR2/3 暗褐色 | □-△小C-粒C
/粘B、粘C |

SK18・26



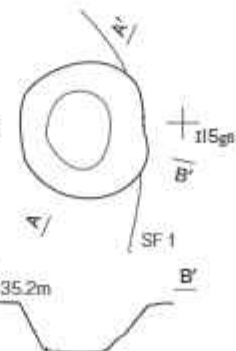
第18号土坑土葬解説

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 10YR2/3 暗褐色 | □-△小D-粒C/粘B、粘B |
|---------------|----------------|

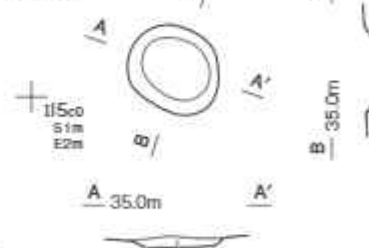
第26号土坑土葬解説

- | | |
|---------------|----------------|
| 1 10YR3/3 暗褐色 | □-△小C-粒B/粘B、粘C |
|---------------|----------------|

SK23



SK21



第21号土坑土葬解説

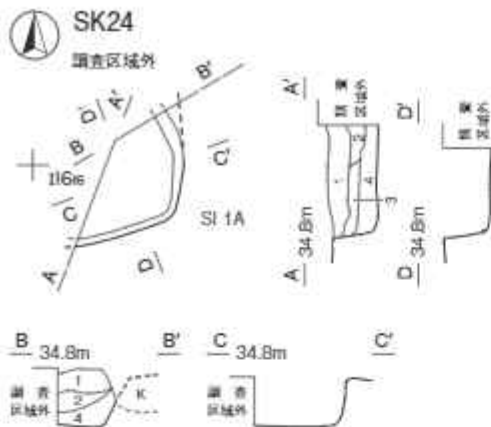
- | | |
|---------------|-------------------------|
| 1 10YR2/4 暗褐色 | □-△小C-粒B、
炭化物D/粘C、粘B |
|---------------|-------------------------|

第23号土坑土葬解説

- | | |
|---------------|-------------------------|
| 1 10YR2/4 暗褐色 | □-△小C-粒B、
炭化物D/粘C、粘B |
| 2 10YR4/4 黄 | □-△中D-小C-
粒B/粘B、粘A |
| 3 10YR4/6 黄 | □-△中C-小B-
粒A/粘B、粘B |

0 (1:60) 2m

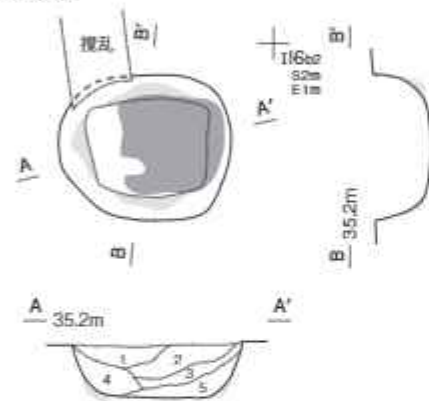
第244図 時期不明の土坑実測図(1)



第24号土坑土層解説

- 1. 10YR2/2 黑粉 ①-△小D-粒C/粘土、雜土
- 2. 10YR2/3 暗粉 ①-△小C-粒C/粘土、雜土
- 3. 10YR4/6 褐 ①-△小C-粒B/粘土、雜土
- 4. 10YR6/4 褐 ①-△小B-粒B/粘土、雜土

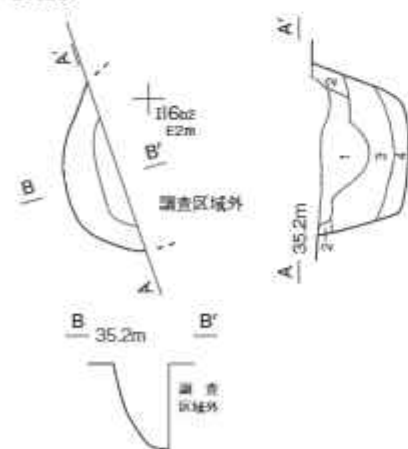
SK30



第30号土坑土層解説

- 1. 10YR4/6 褐 ①-△粒A、炭化物D/粒D/粘土、雜土
- 2. 10YR2/4 暗粉 ①-△粒A、炭化物D/粒B/粘土、雜土
- 3. 10YR2/3 暗粉 ①-△粒A、炭化物A-粒D/粘土、雜土
- 4. 10YR2/3 暗粉 ①-△粒A、炭化物D/粒C/粘土、雜土
- 5. 10YR2/1 黑 炭化物A-粒A/粘土、雜土

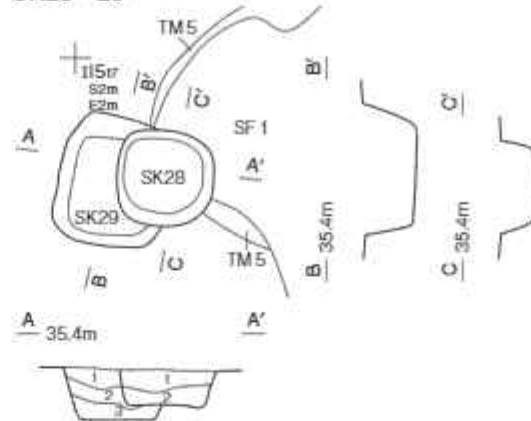
SK33



第33号土坑土層解説

- 1. 10YR2/1 黑粉 ①-△小D-粒D、燒土粒D、炭化物D/粘土、雜土
- 2. 10YR2/2 黑粉 ①-△小C-粒B/粘土、雜土
- 3. 10YR2/4 暗粉 ①-△中B-小B-粒A/粘土、雜土
- 4. 10YR2/4 暗粉 ①-△中B-小A-粒A/粘土、雜土

SK28・29



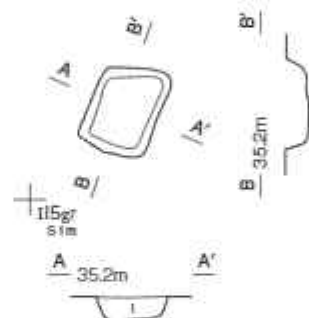
第28号土坑土層解説

- 1. 10YR4/3 灰黄粉 ①-△中D-小C-粒B、炭化物D/粘土、雜土
- 2. 10YR2/3 暗粉 ①-△中C-小B-粒B/粘土、雜土

第29号土坑土層解説

- 1. 10YR4/4 褐 ①-△中D-小C-粒B/粘土、雜土
- 2. 10YR2/4 暗粉 ①-△中C-小C-粒B/粘土、雜土
- 3. 10YR2/3 暗粉 ①-△中C-小B-粒B/粘土、雜土

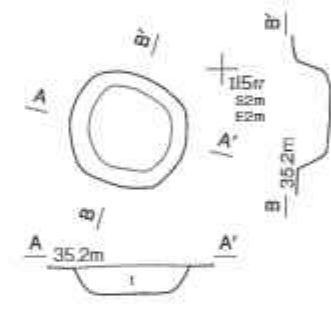
SK31



第31号土坑土層解説

- 1. 10YR4/3 灰黄粉 ①-△中C-小B-粒A、炭化物D/粘土、雜土

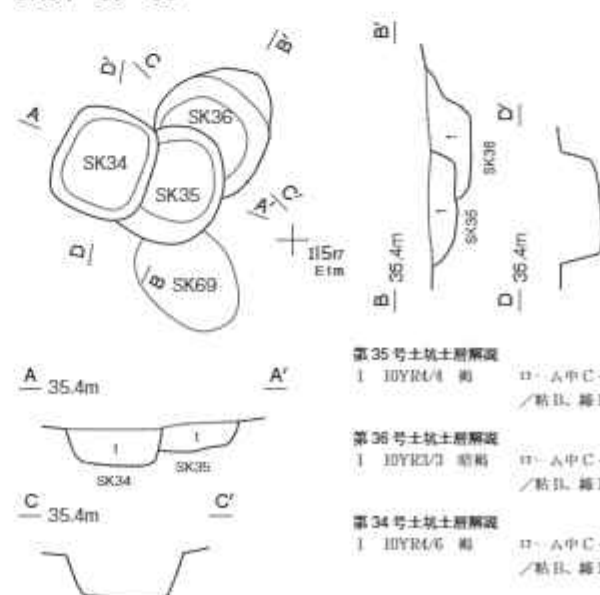
SK32



第32号土坑土層解説

- 1. 10YR4/6 褐 ①-△小A-粒A/粘土、雜土

SK34・35・36



第35号土坑土層解説

- 1. 10YR4/4 褐 ①-△中C-小B-粒B/粘土、雜土

第36号土坑土層解説

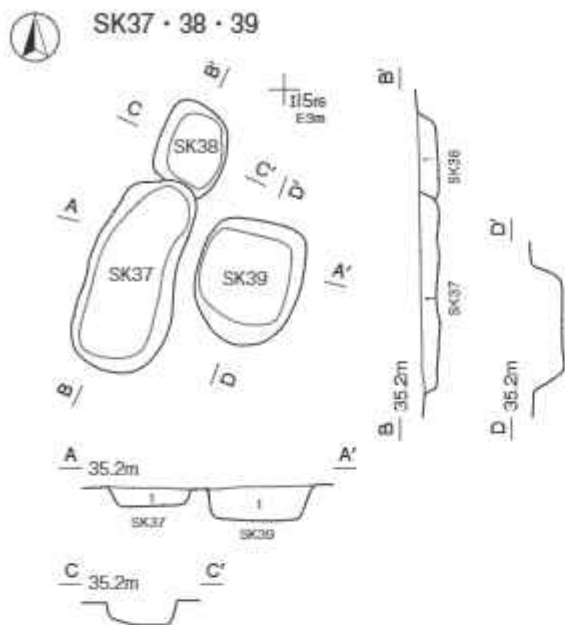
- 1. 10YR2/3 暗粉 ①-△中C-小B-粒B/粘土、雜土

第34号土坑土層解説

- 1. 10YR4/6 褐 ①-△中C-小C-粒C/粘土、雜土



第245图 时期不明の土坑実測図(2)



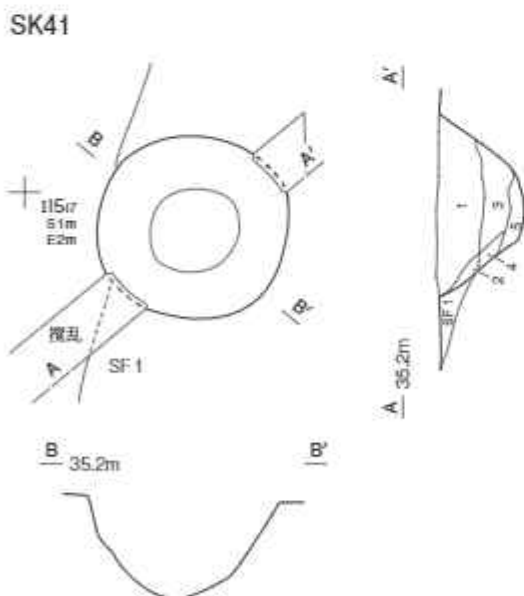
- 第37号土坑土層解説
1 10YR4/6 褐 口-△中C-小B-紋A/粘B、締C
- 第38号土坑土層解説
1 10YR4/4 褐 口-△中C-小C-紋B/粘B、締B
- 第39号土坑土層解説
1 10YR4/6 褐 口-△中B-小B-紋A/粘B、締C



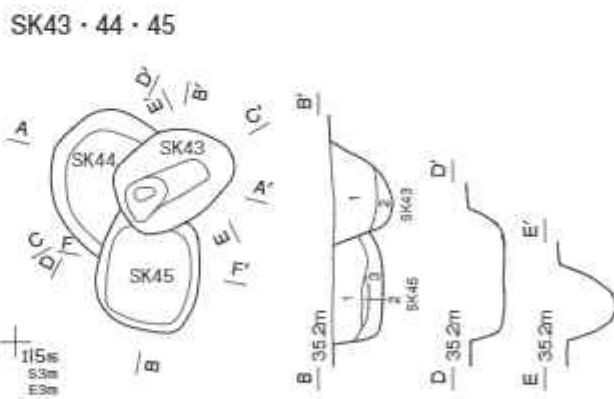
- 第40号土坑土層解説
1 10YR4/6 褐 口-△中C-小B-紋B/粘B、締B
2 10YR4/4 褐 口-△中C-小B-紋B/粘B、締C
3 10YR2/3 暗褐 口-△中C-小C-紋C/粘B、締C



- 第42号土坑土層解説
1 10YR2/4 暗褐 口-△中C-小B-紋B/粘B、締C



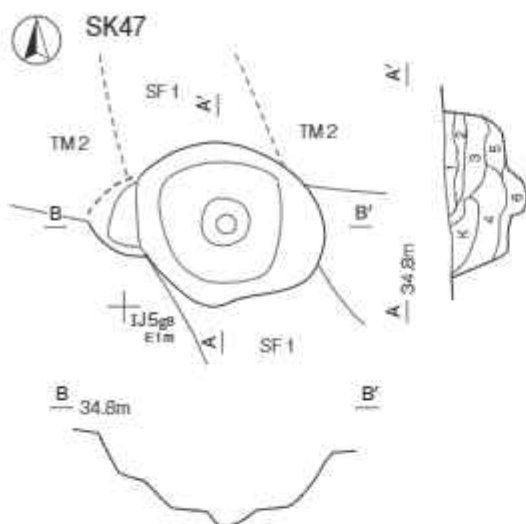
- 第41号土坑土層解説
1 10YR2/4 暗褐 口-△紋C、炭化物C/粘B、締B
2 10YR2/3 暗褐 口-△小C-紋B、炭化物D/粘B、締B
3 10YR2/3 暗褐 口-△小C-紋B、炭化物D/粘B、締B
4 10YR2/4 暗褐 口-△紋B/粘B、締B
5 10YR2/3 暗褐 口-△紋C、炭化物B-紋B/粘B、締C



- 第43号土坑土層解説
1 10YR2/4 暗褐 口-△小C-紋B/粘B、締C
2 10YR4/4 褐 口-△中C-小B-紋B/粘B、締C
- 第44号土坑土層解説
1 10YR4/4 褐 口-△中C-小B-紋A/粘B、締C
- 第45号土坑土層解説
1 10YR2/4 暗褐 口-△中C-小B-紋A/粘B、締C
2 10YR2/2 暗褐 口-△小B-紋C/粘C、締C
3 10YR2/3 暗褐 口-△小B-紋B/粘B、締C

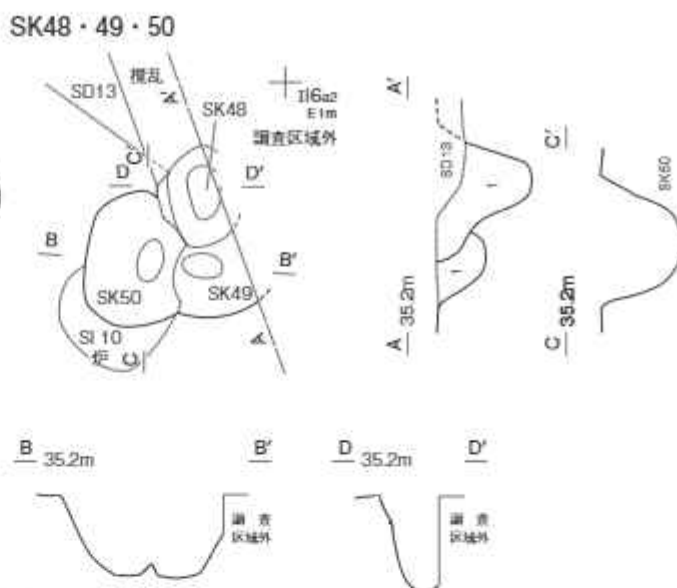
0 (1:60) 2m

第246図 時期不明の土坑実測図(3)



第47号土坑土層解説

- 1 10YR4/4 褐 Ⅱ-△小C-粒C/粘B、粘C
- 2 10YR3/4 暗褐 Ⅱ-△小C-粒C/粘B、粘C
- 3 10YR3/3 暗褐 Ⅱ-△小C-粒B/粘B、粘B
- 4 10YR2/4 暗褐 Ⅱ-△小B-粒B/粘B、粘C
- 5 10YR3/4 暗褐 Ⅱ-△小C-粒B/粘B、粘C
- 6 10YR2/3 暗褐 焼土粒D、炭化物B-粒A/粘C、粘C



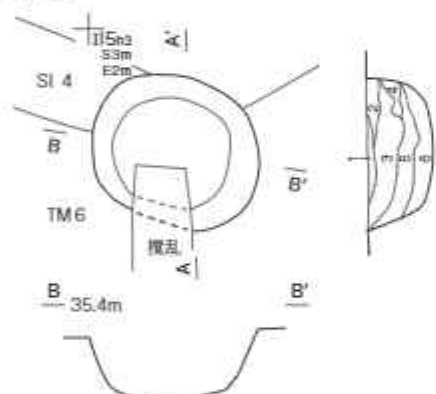
第48号土坑土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐 Ⅱ-△大D-中B-小C-粒A、焼土粒D、炭化物D/粘B、粘C

第49号土坑土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐 Ⅱ-△小B-粒C/粘B、粘C

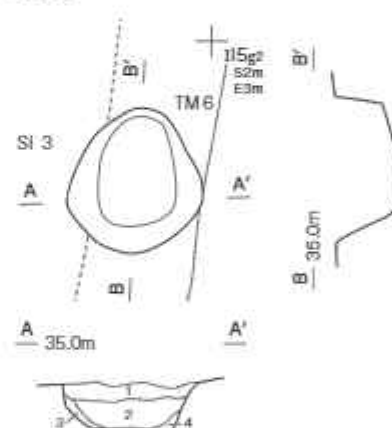
SK51



第51号土坑土層解説

- 1 10YR4/4 褐 Ⅱ-△小C-粒A、炭化物C/粘B、粘B
- 2 10YR4/4 褐 Ⅱ-△小B-粒A、炭化物D-粒C/粘B、粘B
- 3 10YR2/4 暗褐 Ⅱ-△小B-粒A、炭化物D-粒C/粘B、粘B
- 4 10YR2/4 暗褐 Ⅱ-△中D-小C-粒A、焼土粒D、炭化物C/粘B、粘B
- 5 10YR2/3 暗褐 Ⅱ-△中C-小B-粒A/粘B、粘B
- 6 10YR3/4 暗褐 Ⅱ-△中B-小B-粒B/粘B、粘C

SK52



第52号土坑土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐 Ⅱ-△小C-粒A、焼土粒D、炭化物D/粘B、粘B
- 2 10YR12/1 黒 Ⅱ-△小B-粒C、焼土小D-粒D、炭化物B-粒A/粘C、粘C
- 3 10YR3/3 暗褐 Ⅱ-△小C-粒B、焼土粒D、炭化物A/粘B、粘C
- 4 10YR2/4 暗褐 Ⅱ-△中B-小C-粒B、焼土粒D、炭化物D/粘B、粘C

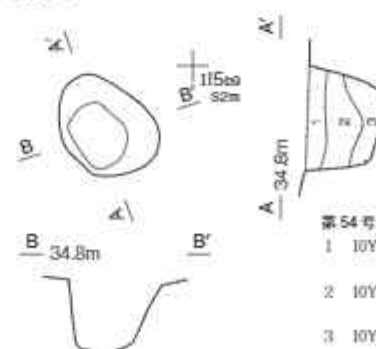
SK53



第53号土坑土層解説

- 1 10YR2/3 暗褐 Ⅱ-△中C/粘B、粘B
- 2 10YR3/4 暗褐 Ⅱ-△小C-粒C/粘B、粘B

SK54

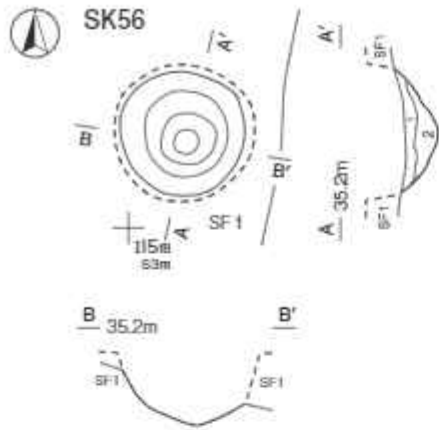


第54号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐 Ⅱ-△小D-粒C/粘B、粘C
- 2 10YR3/3 暗褐 Ⅱ-△中C-小C-粒C/粘B、粘C
- 3 10YR4/4 褐 Ⅱ-△中C-小C-粒B/粘B、粘B

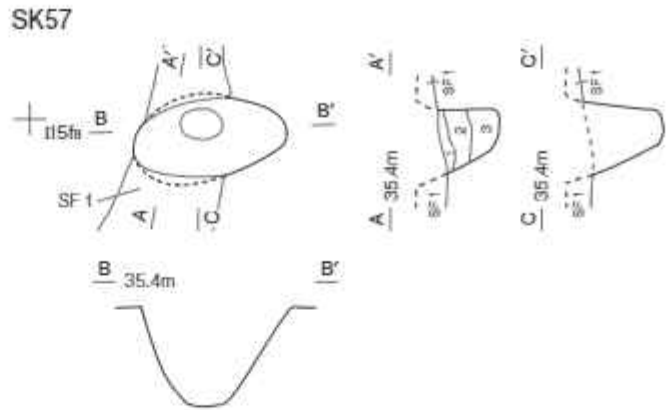
0 (1:60) 2m

第247図 時期不明の土坑実測図(4)



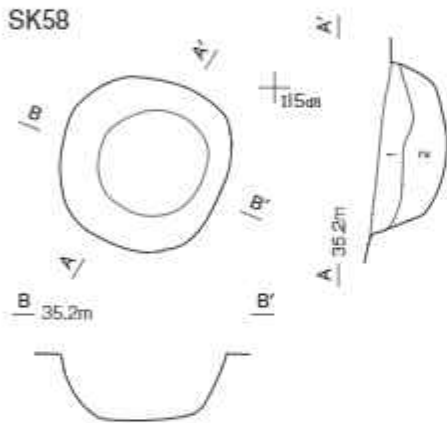
第56号土坑土層解説

- 1 10YR2/1 黒 □-A粒C、炭化粒B/粘B、雜C
 2 10YR2/3 暗褐 □-A小C・粒C、炭化物A・粒A/粘B、雜C



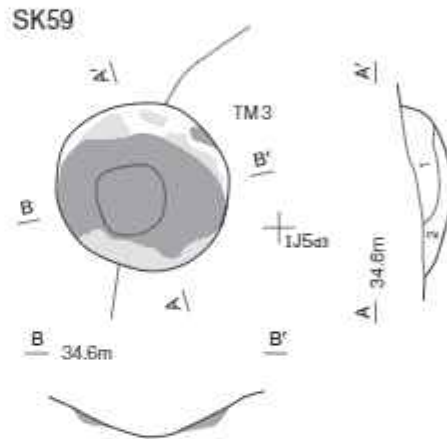
第57号土坑土層解説

- 1 10YR4/6 粘 □-A小D・粒C/粘B、雜A
 2 10YR2/3 暗褐 □-A小D・粒D/粘B、雜A
 3 10YR2/4 暗粘 □-A小C・粒B/粘B、雜A



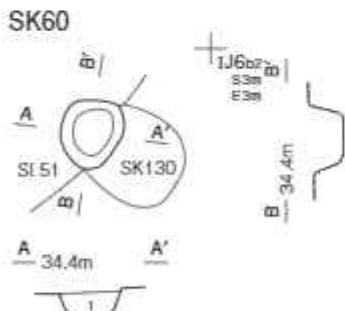
第58号土坑土層解説

- 1 10YR2/4 暗粘 □-A小C・粒B、炭化粒C/粘B、雜B
 2 10YR2/2 黒粘 □-A小C・粒C、炭化物C・粒A/粘B、雜C



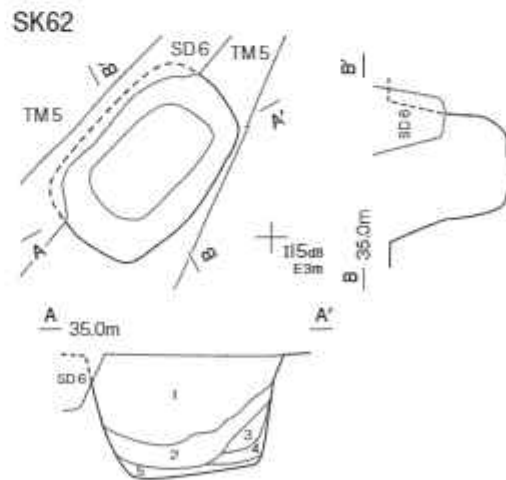
第59号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗粘 □-A粒A、炭化物A・粒D/粘B、雜C
 2 10YR2/1 黒 炭化物A・粒A/粘C、雜C(炭粉)



第60号土坑土層解説

- 1 10YR2/2 黒粘 □-A小C・粒C、雜土粒D、炭化粒D/粘B、雜C



第62号土坑土層解説

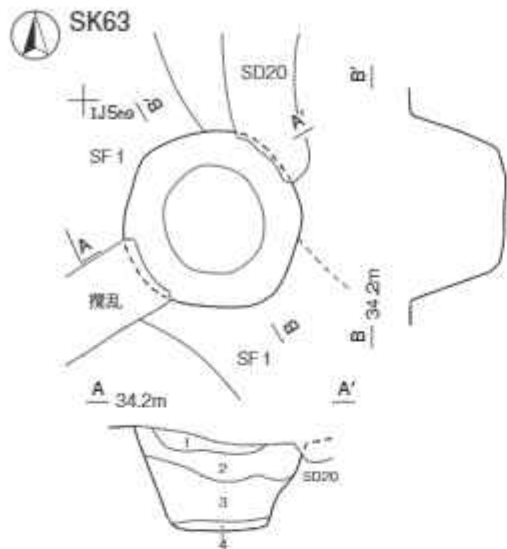
- 1 10YR2/4 暗粘 □-A小C・粒C、雜土粒D/粘B、雜A
 2 10YR2/3 暗粘 □-A小C・粒C/粘B、雜A
 3 10YR2/4 暗粘 □-A中B・小A・粒A/粘B、雜A
 4 10YR2/3 暗粘 □-A中C・小C・粒A/粘B、雜B
 5 10YR5/6 黄粘 □-A中D・小D・粒C/粘B、雜B



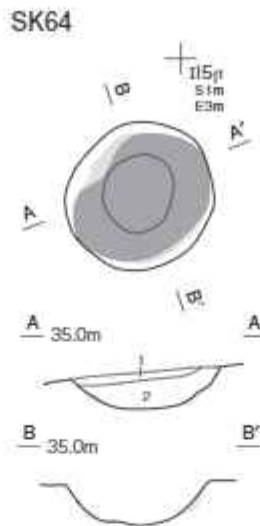
第61号土坑土層解説

- 1 10YR2/3 暗粘 □-A小D・粒B、炭化粒D/粘B、雜C

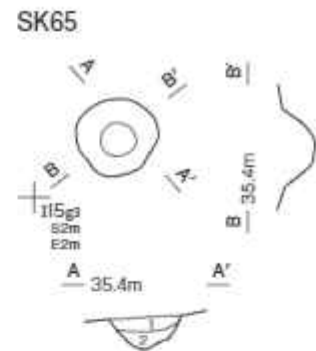
0 (1:60) 2m



第63号土坑土層解説
 1 10YR2/2 黒粉 □-A小D-粒B/粘D、粘C
 2 10YR2/3 暗粉 炭化物C-粒D/粘C、粘C
 3 10YR2/3 暗粉 □-A大C-中D-小C-粒A/粘C、粘C
 4 10YR2/2 黒粉 □-A粘B、炭化物A/粘C、粘C



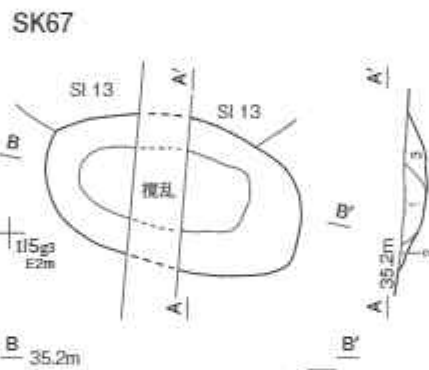
第64号土坑土層解説
 1 10YR4/4 粘 □-A粒A、炭化物D/粘B、粘B
 2 10YR2/1 黑 炭化物B-粒A/粘C、粘C



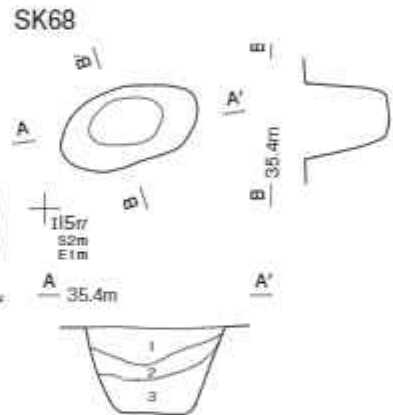
第65号土坑土層解説
 1 10YR4/4 粘 □-A小D-粒C、粘土粒D/粘B、粘B
 2 10YR4/6 粘 □-A中D-小C-粒C/粘B、粘B



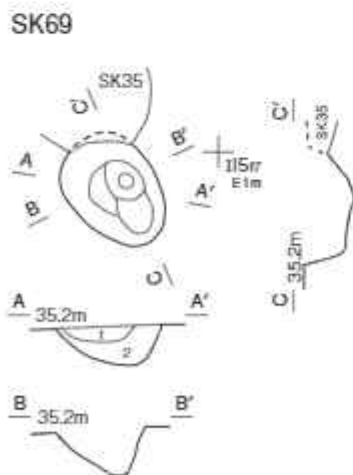
第66号土坑土層解説
 1 10YR2/3 暗粉 □-A小D-粒D、炭化物D/粘B、粘C
 2 10YR4/3 粘粉 □-A中C-小C-粒B/粘B、粘B



第67号土坑土層解説
 1 10YR2/3 暗粉 □-A小D-粒C、粘土粒D、炭化物B/粘B、粘C
 2 10YR4/4 粘 □-A小D-粒D、炭化物D/粘B、粘B
 3 10YR4/6 粘 □-A小D-粒C、炭化物D/粘B、粘B



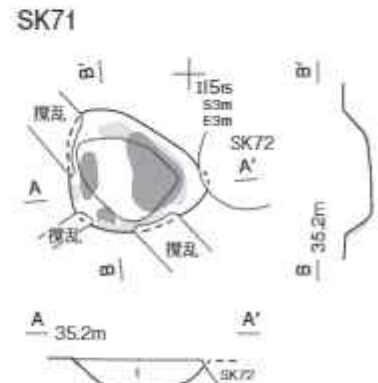
第68号土坑土層解説
 1 10YR2/4 暗粉 □-A中D-小D-粒A/粘B、粘C
 2 10YR2/3 暗粉 □-A小B-粒A/粘B、粘C
 3 10YR2/2 黒粉 □-A小C-粒C/粘B、粘C



第69号土坑土層解説
 1 10YR4/4 粘 粘土粒A/粘B、粘C
 2 10YR4/6 粘 □-A小D-粒B、粘土粒D/粘B、粘C

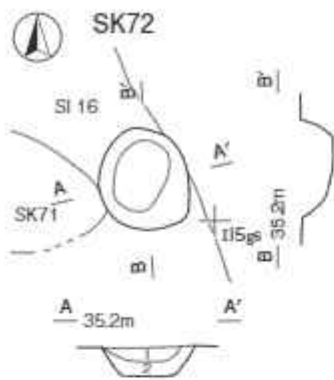


第70号土坑土層解説
 1 10YR2/4 暗粉 □-A粒B、粘土粒D/粘B、粘B
 2 10YR2/4 暗粉 □-A粒C、粘土粒D、山砂C/粘C、粘B
 3 10YR2/2 黒粉 □-A粒C、炭化物D-粒C/粘B、粘A



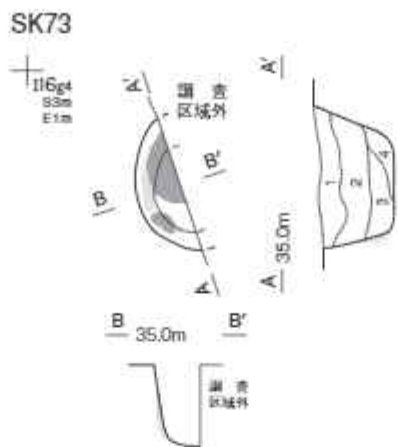
第71号土坑土層解説
 1 10YR2/3 黒粉 □-A中D-小D-粒C、粘土粒D、炭化物D-粒C/粘B、粘B

0 (1:60) 2m



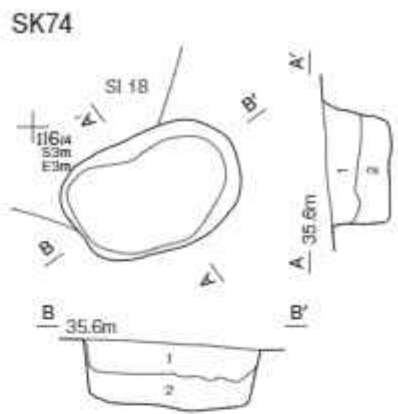
第72号土坑土層解説

- 1 10YR4/4 粘 土 小D-粒C、
硬土粒D、炭化粒D
粘土、粘土
- 2 10YR4/6 粘 土 小D-粒B、
炭化粒D、粘土、粘土



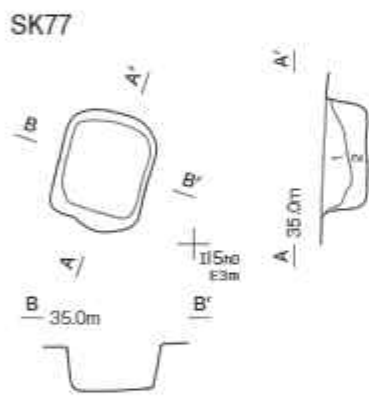
第73号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 粘 土 小C-粒B、
硬土小C、
炭化粒C、粘土、粘土
- 2 10YR2/2 黑 土 小D-粒C、
硬土小C-粒D、
炭化物B-粒B、粘土、粘土
- 3 10YR2/1 黑 土 小D-粒C、
炭化物B-粒A、
粘土、粘土
- 4 10YR1/1 黑 土 小D-粒D、
炭化物A-粒A、
粘土、粘土



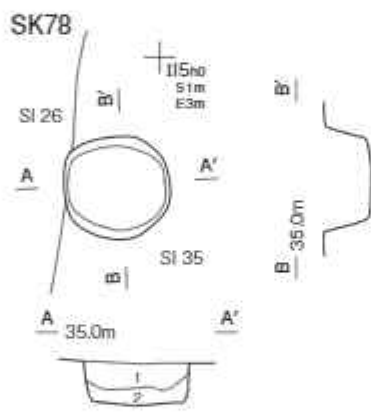
第74号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 粘 土 中B-小C-粒B、
粘土、粘土
- 2 10YR3/3 粘 土 小D-粒D、
粘土、粘土



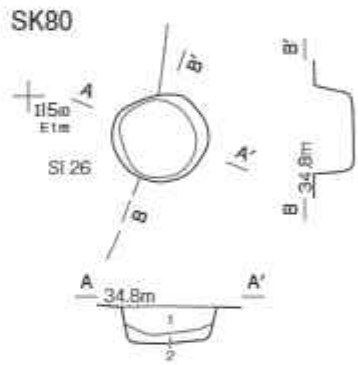
第77号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 粘 土 中B-小C-粒B、
粘土、粘土
- 2 10YR3/3 粘 土 小D-粒D、
粘土、粘土



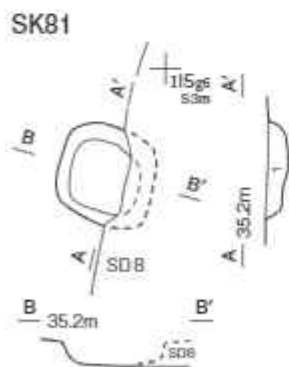
第78号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 粘 土 中B-小C-粒B、
粘土、粘土
- 2 10YR3/3 粘 土 小D-粒D、
粘土、粘土



第80号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 粘 土 中B-小D-粒B、
粘土、粘土
- 2 10YR3/3 粘 土 小D-粒D、
粘土、粘土



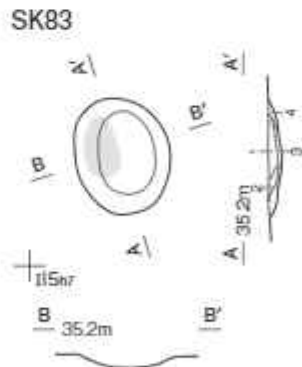
第81号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 粘 土 中D-小D-粒C、
硬土粒D、炭化粒D、
粘土



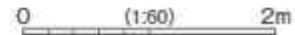
第82号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 粘 土 小D-粒C、
炭化粒D、
粘土、粘土



第83号土坑土層解説

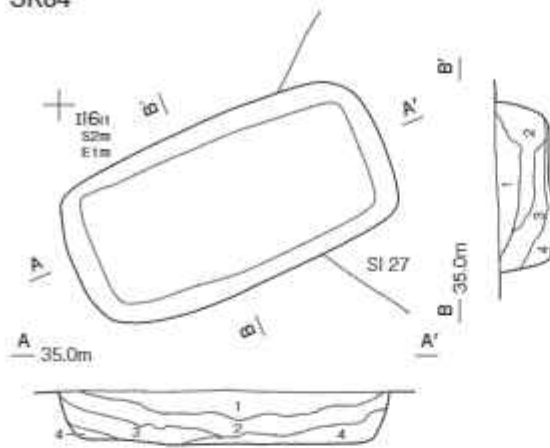
- 1 10YR4/6 粘 土 小D-粒C、
炭化粒D、
粘土、粘土
- 2 10YR4/2 灰 黄 土 小D-粒C、
粘土、粘土
- 3 10YR5/8 灰 黄 土 中C-小B-粒B、
粘土
- 4 10YR5/3 灰 黄 土 中C-小B-粒A、
粘土



第250図 時期不明の土坑実測図 (7)



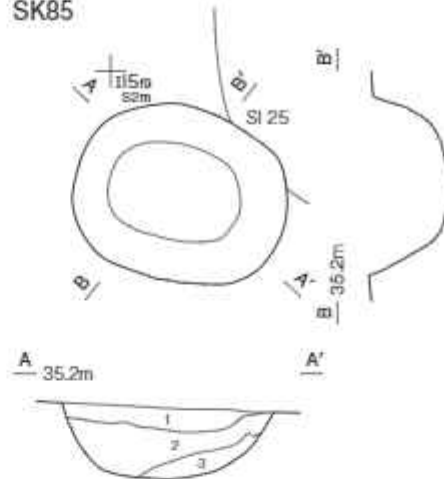
SK84



第84号土坑土層解説

- | | | |
|---|------------|-------------------|
| 1 | 10YR2/7 黑粘 | □-A小C-粒C/粘B、雜B |
| 2 | 10YR3/4 暗粘 | □-A中C-小C-粒B/粘B、雜B |
| 3 | 10YR3/3 暗粘 | □-A中C-小C-粒A/粘B、雜B |
| 4 | 10YR3/4 暗粘 | □-A中B-小B-粒B/粘B、雜B |

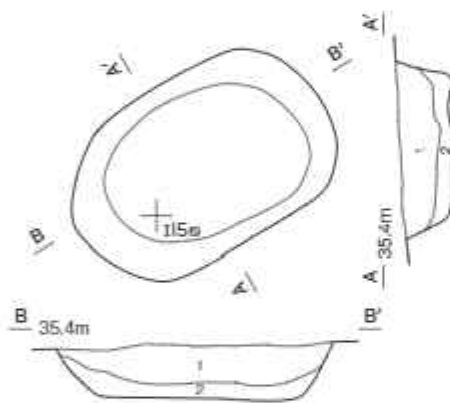
SK85



第85号土坑土層解説

- | | | |
|---|------------|----------------------------|
| 1 | 10YR3/4 暗粘 | □-A粒D/粘B、雜C |
| 2 | 10YR2/2 黑粘 | □-A中C-小C-粒C/粘B、雜C |
| 3 | 10YR2/1 黑 | □-A粒C、粒土D-粒D、炭化物B-粒B/粘B、雜C |

SK86



第86号土坑土層解説

- | | | |
|---|------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR3/4 暗粘 | □-A小C-粒A、粒土粒D、炭化粒D/粘B、雜C |
| 2 | 10YR4/4 粘 | □-A中C-小B-粒A、粒土粒D、炭化粒D/粘B、雜C |

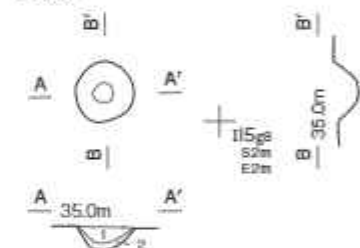
SK88



第88号土坑土層解説

- | | | |
|---|------------|-------------------|
| 1 | 10YR3/3 暗粘 | □-A中C-小C-粒B/粘B、雜C |
| 2 | 10YR3/2 黑粘 | □-A中C-小C-粒A/粘B、雜C |

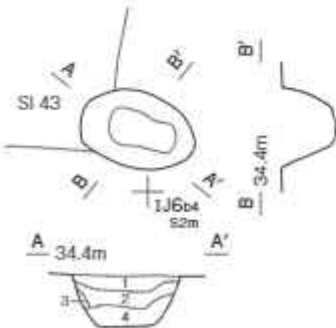
SK89



第89号土坑土層解説

- | | | |
|---|-------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR5/6 黄粘 | □-A中B-小D-粒C、粒土粒D、炭化粒D/粘B、雜B |
| 2 | 10YR5/6 明黄粘 | □-A中B-小B-粒B/粘B、雜B |

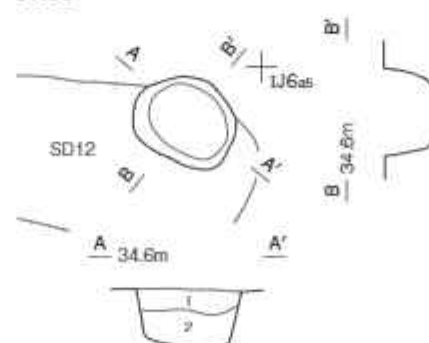
SK93



第93号土坑土層解説

- | | | |
|---|------------|---------------------|
| 1 | 10YR3/3 暗粘 | □-A中D-小C-粒B/粘B、雜B |
| 2 | 10YR3/4 暗粘 | □-A小C-粒B/粘B、雜B |
| 3 | 10YR4/4 粘 | □-A小B-粒A、炭化粒D/粘B、雜B |
| 4 | 10YR4/6 粘 | □-A小B-粒A/粘B、雜B |

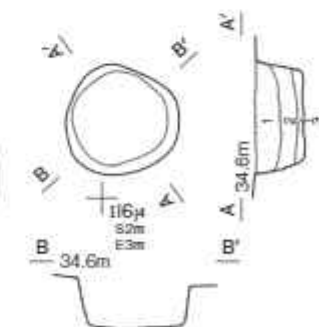
SK95



第95号土坑土層解説

- | | | |
|---|------------|-------------------|
| 1 | 10YR3/4 暗粘 | □-A中D-小D-粒C/粘B、雜B |
| 2 | 10YR4/6 粘 | □-A中C-小C-粒B/粘B、雜C |

SK96



第96号土坑土層解説

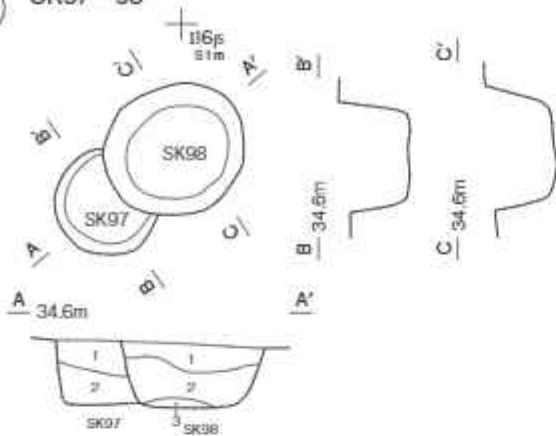
- | | | |
|---|------------|-------------------|
| 1 | 10YR3/4 暗粘 | □-A中B-小B-粒A/粘B、雜C |
| 2 | 10YR3/4 暗粘 | □-A中A-小B-粒B/粘B、雜C |
| 3 | 10YR2/3 黑粘 | □-A小D-粒C/粘B、雜B |

第251图 时期不明の土坑実測図(8)

0 (1:50) 2m



SK97・98



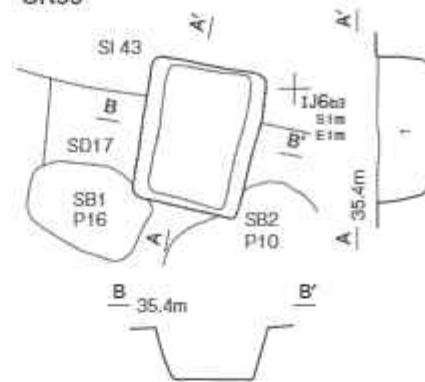
第97号土坑土層解説

- 1 10YR4/2 灰赤土 Ⅰ-△中C-小B-粒B、粘土粒D、炭化粒D/粘B、粘C
- 2 10YR2/3 暗褐 Ⅰ-△中D-小C-粒B/粘B、粘C

第98号土坑土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐 Ⅰ-△中B-小B-粒A、炭化粒D/粘B、粘C
- 2 10YR2/3 暗褐 Ⅰ-△中C-粒B、粘土粒D、炭化粒D/粘B、粘C
- 3 10YR4/2 灰赤土 Ⅰ-△中B-粒A/粘B、粘C

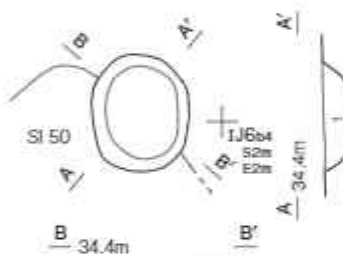
SK99



第99号土坑土層解説

- 1 10YR2/2 暗褐 Ⅰ-△中C-小B-粒B/粘B、粘B

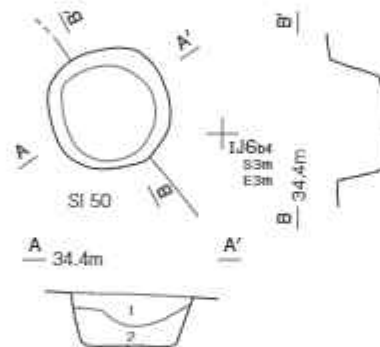
SK100



第100号土坑土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐 Ⅰ-△中C-粒B/粘B、粘B

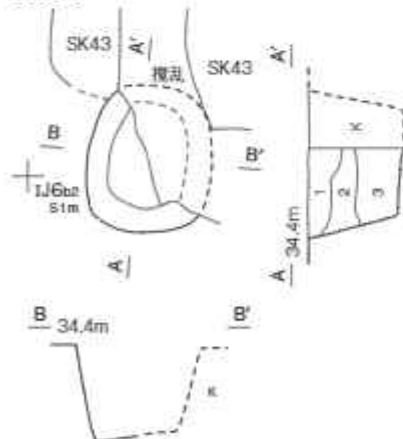
SK101



第101号土坑土層解説

- 1 10YR4/2 灰赤土 Ⅰ-△中D-小C-粒B、炭化粒D/粘B、粘B
- 2 10YR2/3 暗褐 Ⅰ-△中C-粒C/粘B、粘C

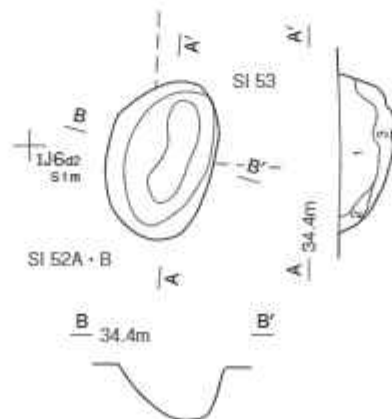
SK106



第106号土坑土層解説

- 1 10YR4/2 灰赤土 Ⅰ-△中C-粒B、粘土粒D、炭化粒D/粘B、粘A
- 2 10YR2/4 暗褐 Ⅰ-△中D-小C-粒C、炭化粒D/粘B、粘B
- 3 10YR2/3 暗褐 Ⅰ-△中D-粒C/粘B、粘B

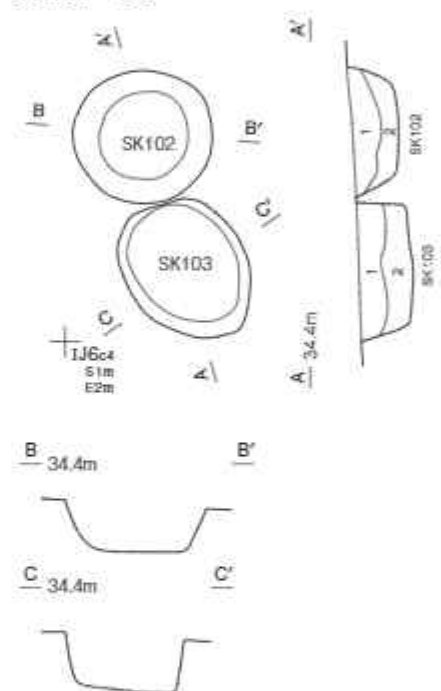
SK107



第107号土坑土層解説

- 1 10YR2/3 暗褐 Ⅰ-△中C-小C-粒B、粘土粒C、炭化粒C/粘B、粘B
- 2 10YR2/3 暗褐 Ⅰ-△中D-小D-粒C/粘B、粘B
- 3 10YR2/4 暗褐 Ⅰ-△中B-小B-粒C/粘B、粘B

SK102・103



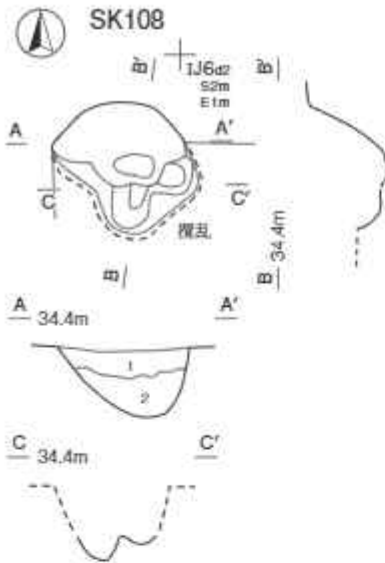
第102号土坑土層解説

- 1 10YR4/2 灰赤土 Ⅰ-△中C-小B-粒B/粘B、粘B
- 2 10YR2/3 暗褐 Ⅰ-△中B-粒B/粘B、粘C

第103号土坑土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐 Ⅰ-△中C-小B-粒B/粘B、粘B
- 2 10YR2/3 暗褐 Ⅰ-△中C-粒B/粘B、粘B

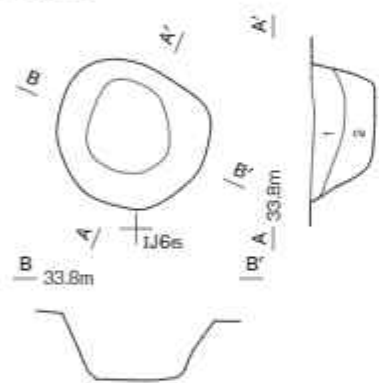




第108号土坑土層解説

- 1 10YR2/3 黑粉 ㊦-A中C-小C-粉C、炭化粉D/粘B、雜B
- 2 10YR2/3 黑粉 ㊦-A中B-小B-粉A、粘土粉D/粘B、雜C

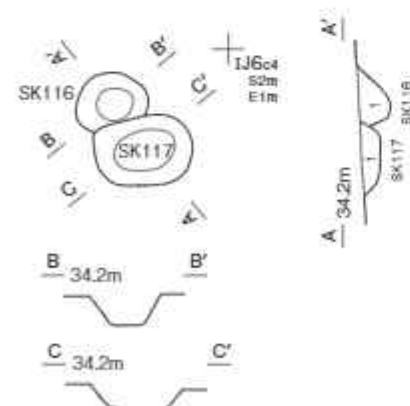
SK115



第115号土坑土層解説

- 1 10YR2/2 黑粉 ㊦-A小B-粉B/粘B、雜B
- 2 10YR2/4 暗粉 ㊦-A小B-粉B/粘B、雜C

SK116・117

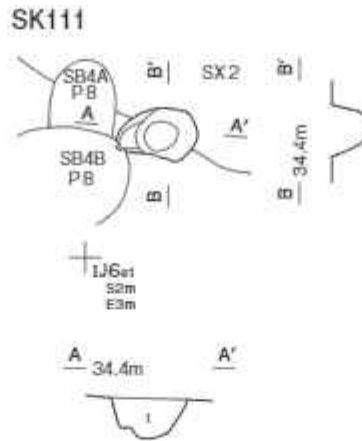


第116号土坑土層解説

- 1 10YR2/2 黑粉 ㊦-A中B-小D-粉B/粘B、雜B

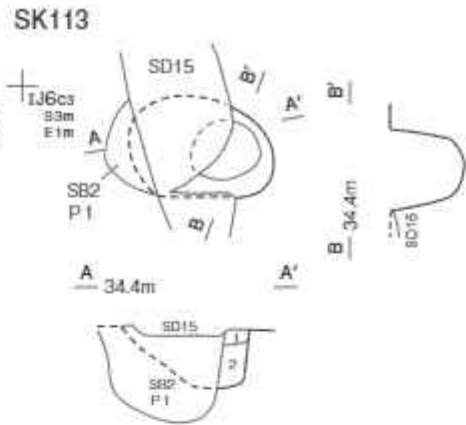
第117号土坑土層解説

- 1 10YR2/3 暗粉 ㊦-A小D-粉B、炭化粉D/粘B、雜B



第111号土坑土層解説

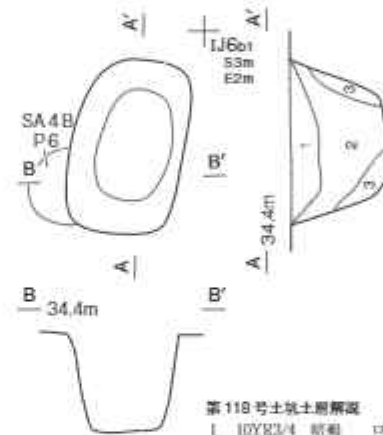
- 1 10YR2/3 暗粉 ㊦-A小D-粉D/粘B、雜B



第113号土坑土層解説

- 1 10YR4/4 粉 ㊦-A小B-粉A/粘B、雜C
- 2 10YR2/4 暗粉 炭化粉D、㊦-A小C-粉C/粘B、雜C

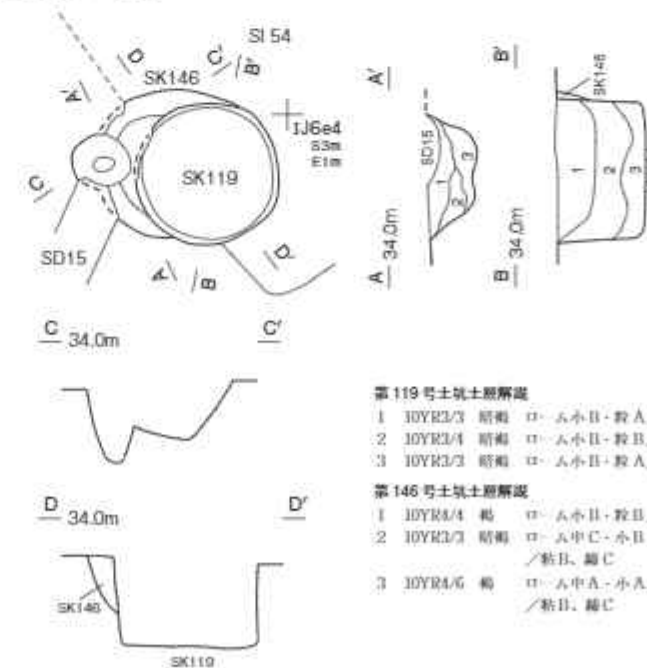
SK118



第118号土坑土層解説

- 1 10YR2/4 暗粉 ㊦-A中B-小B-粉A/粘B、雜C
- 2 10YR2/3 暗粉 ㊦-A小C-粉B、粘土粉D、/粘B、雜C
- 3 10YR4/3 灰-黄 ㊦-A小B-粉A/粘B、雜C

SK119・146

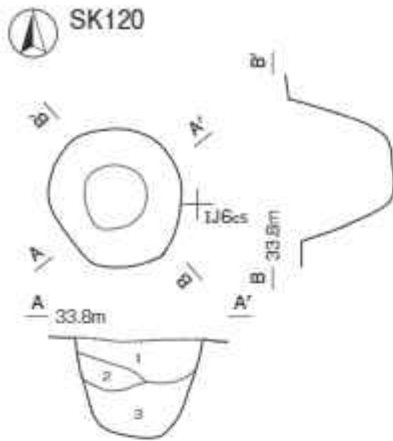


第119号土坑土層解説

- 1 10YR2/3 暗粉 ㊦-A小B-粉A/粘B、雜B
- 2 10YR2/4 暗粉 ㊦-A小B-粉B/粘B、雜C
- 3 10YR2/3 暗粉 ㊦-A小B-粉A/粘B、雜C

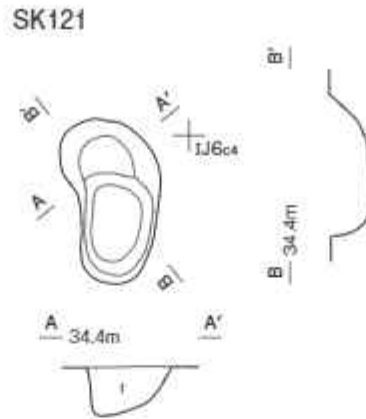
第146号土坑土層解説

- 1 10YR4/4 粉 ㊦-A小B-粉B/粘B、雜B
- 2 10YR2/3 暗粉 ㊦-A中C-小B-粉B/粘B、雜C
- 3 10YR4/6 粉 ㊦-A中A-小A-粉A/粘B、雜C



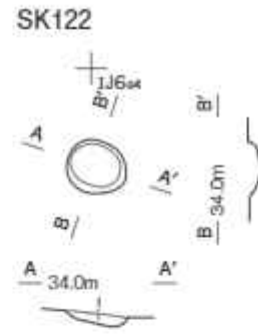
第120号土坑土層解説

- 1 10YR2/4 暗褐 ㊦ △小B・投A/粘B、粘C
 2 10YR3/3 暗褐 ㊦ △中C・小B・投A/粘B、粘C
 3 10YR4/3 灰黄褐 ㊦ △小B・投A/粘B、粘C



第121号土坑土層解説

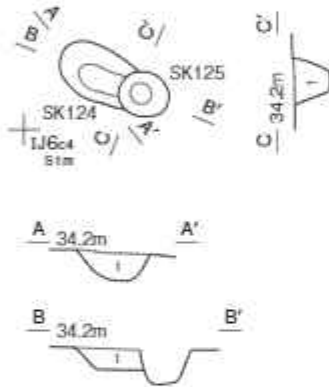
- 1 10YR3/3 暗褐 ㊦ △中D・小B・投B、使土投D
 /粘B、粘B



第122号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐 ㊦ △小D・投D
 /粘C、粘B

SK124・125



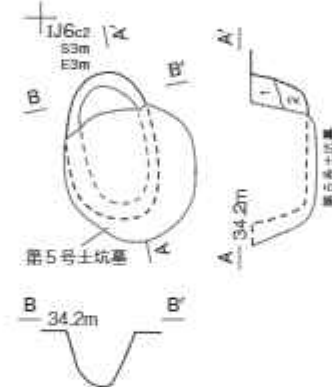
第124号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐 ㊦ △中D・小粒B、使土投D、
 炭化粒D/粘B、粘B

第125号土坑土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐 ㊦ △中D・小D・投B
 /粘B、粘B

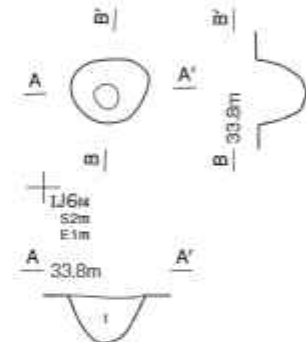
SK127



第127号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐 ㊦ △小B・投A/粘B、粘B
 2 10YR4/6 褐 ㊦ △小C・投A/粘B、粘B

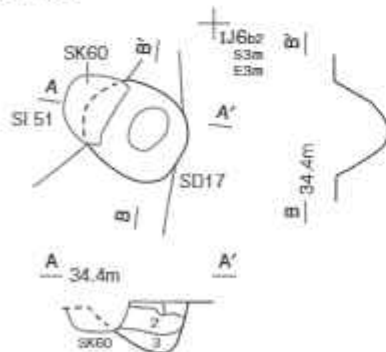
SK128



第128号土坑土層解説

- 1 10YR3/2 黑褐 ㊦ △小D・投C
 /粘B、粘B

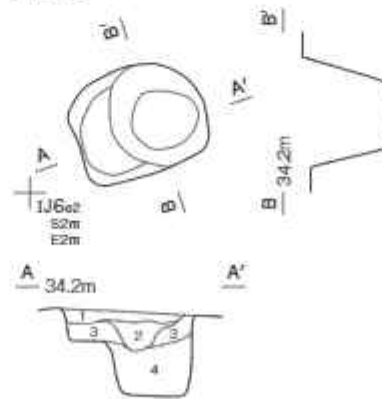
SK130



第130号土坑土層解説

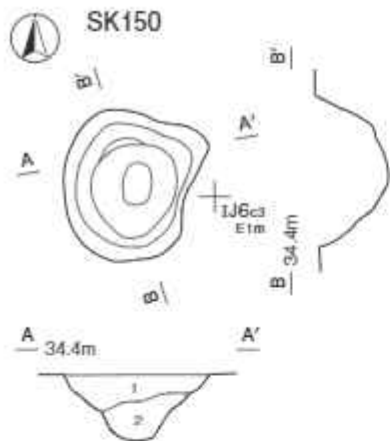
- 1 10YR3/2 暗褐 ㊦ △大粒A、使土投D、炭化粒D/粘B、粘C
 2 10YR3/3 暗褐 ㊦ △小C・投A/粘B、粘C
 3 10YR3/2 黑褐 ㊦ △小C・投C/粘B、粘B

SK132



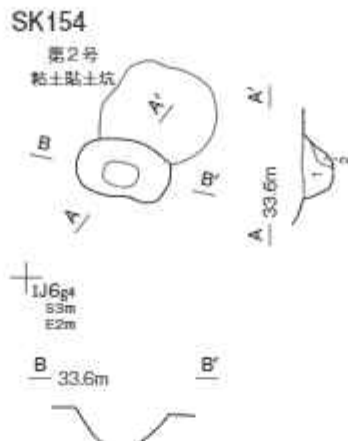
第132号土坑土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐 ㊦ △小D・投A/粘B、粘C
 2 10YR3/3 暗褐 ㊦ △小A・投B/粘B、粘C
 3 10YR3/4 暗褐 ㊦ △小C・投B/粘B、粘C
 4 10YR3/2 黑褐 ㊦ △小C・投C/粘B、粘C



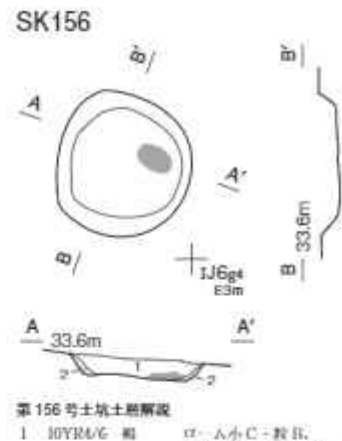
第150号土坑土層解説

- 1 10YR4/6 褐 土 中C・小C・粒B、
炭化粒D/粘B、粘B
2 10YR4/3 灰黄褐 土 中D・小C・粒B
粘B、粘B



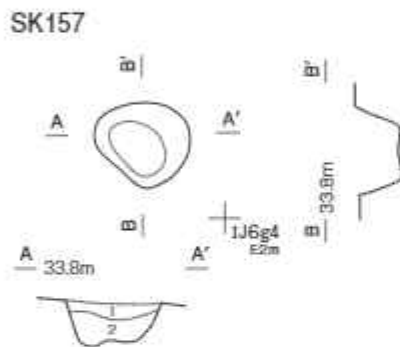
第154号土坑土層解説

- 1 10YR2/3 暗褐 土 小D・粒D/粘B、粘B
2 10YR4/4 褐 土 小D・粒C/粘C、粘C



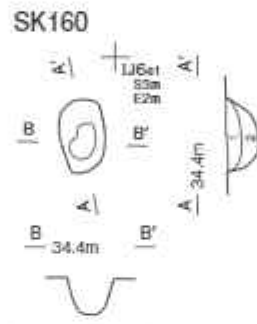
第156号土坑土層解説

- 1 10YR4/6 褐 土 小C・粒B、
炭化粒D/粘B、粘B
2 10YR4/3 灰黄褐 土 中D・小C・粒B、
炭化粒C/粘B、粘B



第157号土坑土層解説

- 1 10YR4/4 褐 土 中D・小C・粒B、
炭化粒D/粘B、粘B
2 10YR4/6 褐 土 中D・小B・粒A、
炭化粒D/粘B、粘B



第160号土坑土層解説

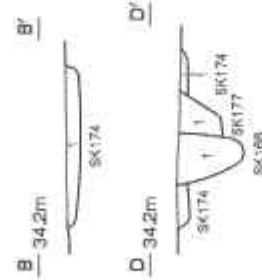
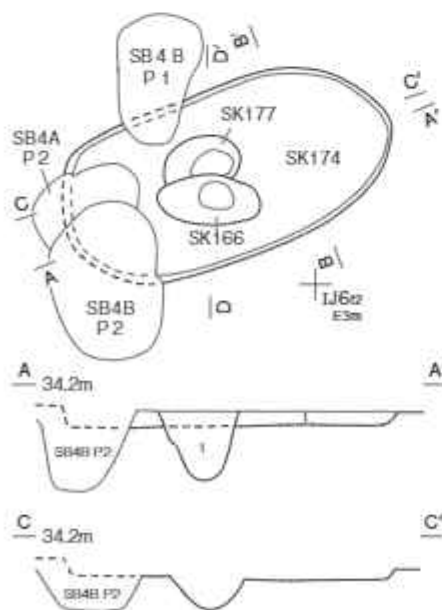
- 1 10YR2/3 暗褐 土 中D・小C・粒D、
炭化粒D/粘B、粘B
2 10YR3/4 暗褐 土 中D・小B・粒B、
炭化粒D/粘B、粘B



第162号土坑土層解説

- 1 10YR4/4 褐 土 中D・小C・粒D、
粘土粒D、炭化粒D/
粘B、粘B

SK166・174・177



第166号土坑土層解説

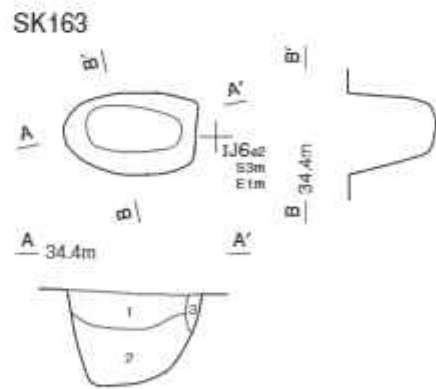
- 1 10YR3/2 黑褐 土 中C・小B・粒B、
炭化粒D/
粘B、粘B

第174号土坑土層解説

- 1 10YR4/1 粘灰 土 小D・粒D、
粘土粒D、
炭化粒D/粘B、粘B

第177号土坑土層解説

- 1 10YR4/4 褐 土 中D・小B・粒B、
炭化粒D/
粘B、粘B



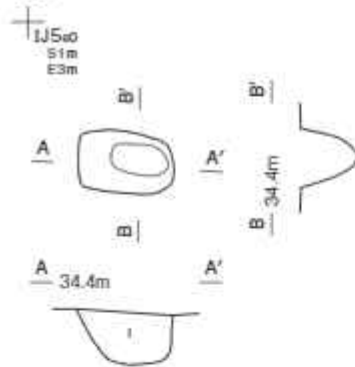
第163号土坑土層解説

- 1 10YR4/4 褐 土 中D・小C・粒B、
粘土粒D、
炭化粒D/粘B、粘B
2 10YR2/4 暗褐 土 中C・小B・粒B/粘C、
粘C
3 10YR5/6 黄褐 土 中C・小B・粒B/粘B、
粘B

第256図 時期不明の土坑実測図(13)

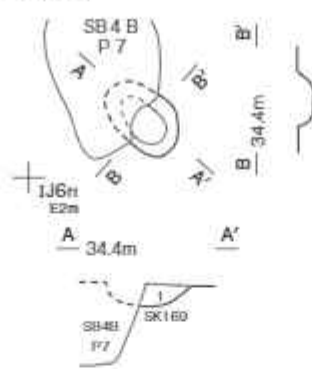
0 (1:60) 2m

SK165



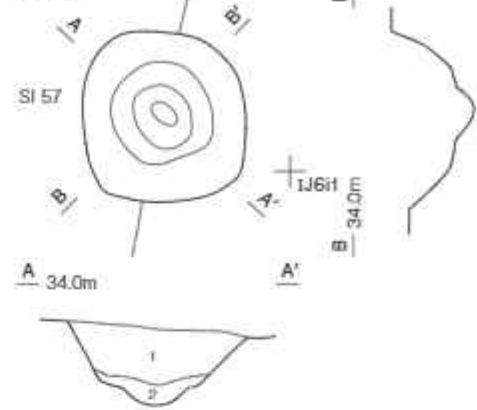
第165号土坑土層解説
 3. 10YR2/4 暗褐 土- A小D-粒D, 炭化物A /粘B, 雜B

SK169



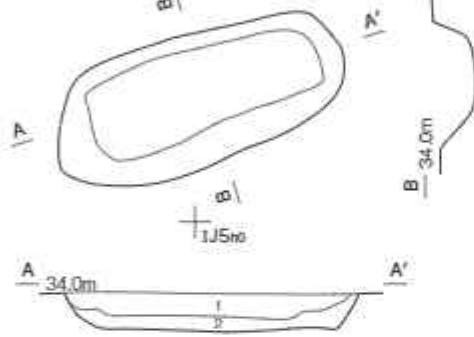
第169号土坑土層解説
 1. 7.5YR7/4 赤黄褐 土- A小D-粒D, 燒土小D-粒C, 炭化物D /粘B, 雜B

SK171



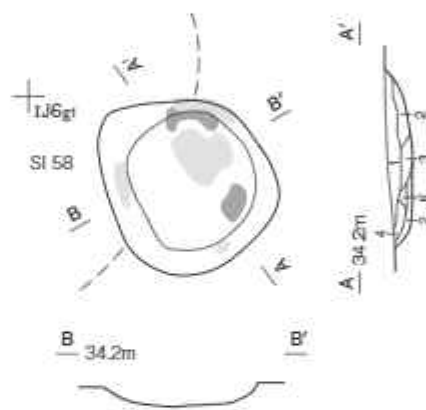
第171号土坑土層解説
 1. 10YR4/4 褐 土- A小D-粒D, 燒土粒C, 炭化物B /粘B, 雜B
 2. 10YR2/4 暗褐 土- 燒土小D-粒D, 炭化物A-粒A /粘B, 雜C

SK175



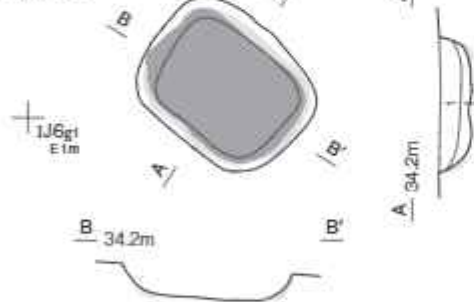
第175号土坑土層解説
 1. 10YR2/1 黑褐 土- A小D-粒C, 燒土粒D, 炭化物D /粘B, 雜B
 2. 10YR2/4 暗褐 土- A中D-小C-粒B, 炭化物D /粘C, 雜C

SK180



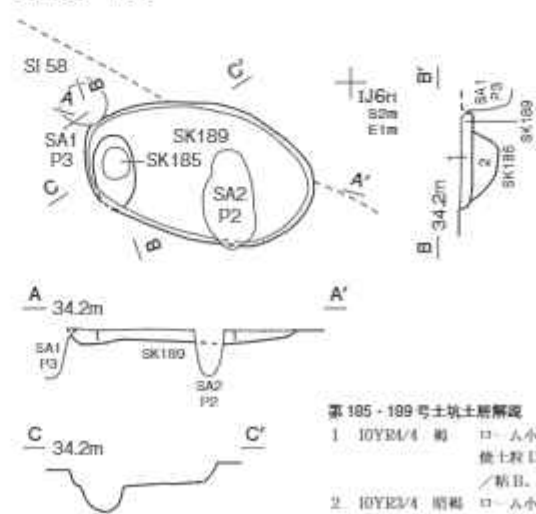
第180号土坑土層解説
 1. 10YR4/4 褐 土- A中D-小D-粒C, 燒土粒D, 炭化物D /粘B, 雜B
 2. 10YR4/6 褐 土- A小C-粒B /粘B, 雜B
 3. 10YR2/4 暗褐 土- A小D-粒D, 炭化物A /粘B, 雜B
 4. 10YR3/2 黑褐 土- A中D-小C-粒C, 炭化物C /粘B, 雜B

SK179



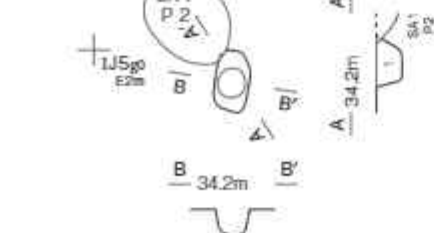
第179号土坑土層解説
 1. 10YR4/4 褐 土- A小D-粒D, 燒土粒C, 炭化物B /粘B, 雜B
 2. 10YR2/1 黑 土- 燒土小D-粒D, 炭化物A-粒A /粘B, 雜C

SK185・189



第185・189号土坑土層解説
 1. 10YR4/4 褐 土- A小D-粒B, 燒土粒D, 炭化物D /粘B, 雜B
 2. 10YR2/4 暗褐 土- A小C-粒B /粘B, 雜B

SK183



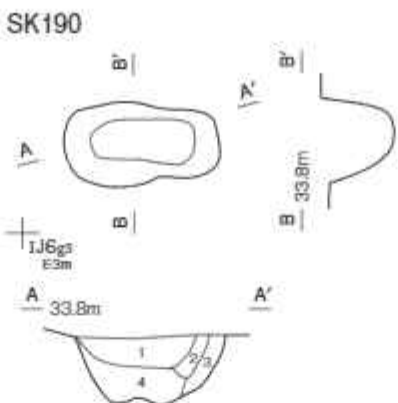
第183号土坑土層解説
 1. 10YR4/4 褐 土- A小D-粒C, 炭化物D /粘B, 雜B

第257图 时期不明の土坑実測図 (14)

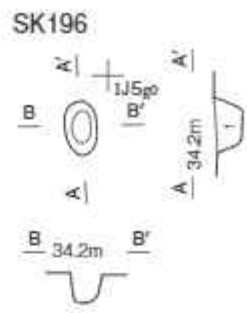




第187号土坑土層解説
1 10YR3/2 黒褐 ①- A小D-粒B、炭化物D /粘B、粘B

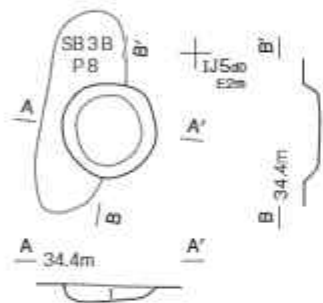


第190号土坑土層解説
1 10YR4/4 褐 ①- A中D-小C-粒B、焼土粒D、炭化物D /粘B、粘B
2 10YR3/4 暗褐 ②- A中C-小B-粒B /粘B、粘B
3 10YR5/6 黄褐 ③- A中B-小A-粒A /粘B、粘A
4 10YR5/6 黄褐 ④- A中C-小B-粒B /粘C、粘C



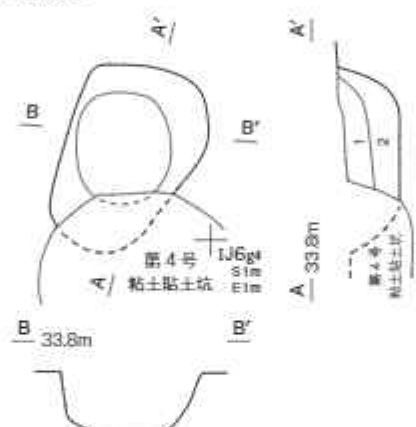
第196号土坑土層解説
1 10YR3/2 暗褐 ①- A中D-小C-粒C、炭化物D /粘B、粘B

SK197



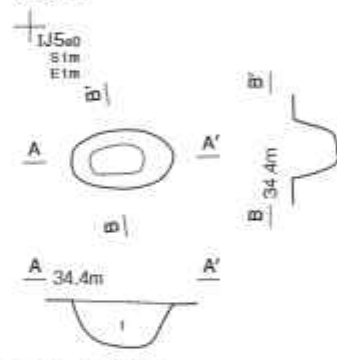
第197号土坑土層解説
1 10YR4/4 褐 ①- A小C-粒C、焼土粒D、炭化物D-粒C /粘B、粘B

SK200



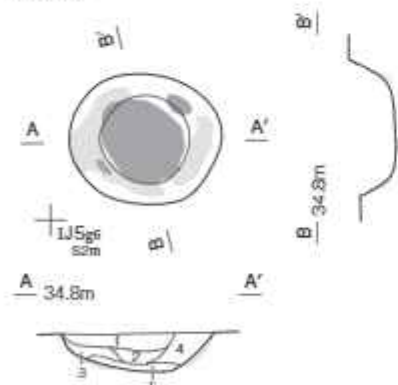
第200号土坑土層解説
1 10YR4/4 褐 ①- A中D-小C-粒B、炭化物D、白色粘土粒C /粘B、粘B
2 10YR3/4 暗褐 ②- A中D-小B-粒B、炭化物D、白色粘土小C-粒C /粘B、粘C

SK201



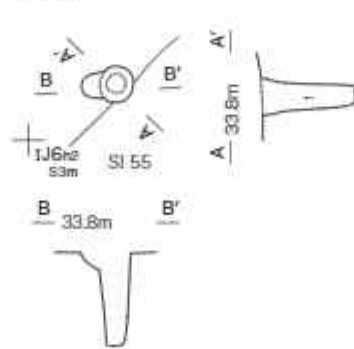
第201号土坑土層解説
1 10YR4/4 褐 ①- A中D-小C-粒D、焼土粒D、炭化物D /粘B、粘B

SK202



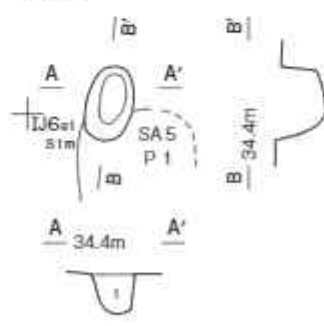
第202号土坑土層解説
1 10YR3/4 暗褐 ①- A小D-粒C、焼土粒D、炭化物C-粒C /粘C、粘C
2 10YR4/3 灰褐色 ②- A粒B /粘B、粘C
3 10YR3/3 暗褐 ③- A小D-粒C、炭化物C-粒B /粘C、粘C
4 10YR3/2 暗褐 ④- A中D-小C-粒C、炭化物D-粒C、粘B、粘B
5 10YR2/1 黒 ⑤- A粒C、炭化物A-粒A /粘C、粘C

SK209



第209号土坑土層解説
1 10YR2/2 暗褐 ①- A小C-粒A /粘B、粘A

SK212

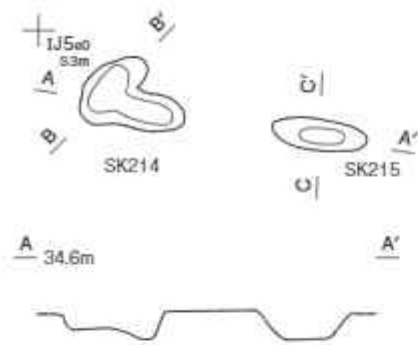


第212号土坑土層解説
1 10YR4/6 褐 ①- A小D-粒C /粘B、粘B

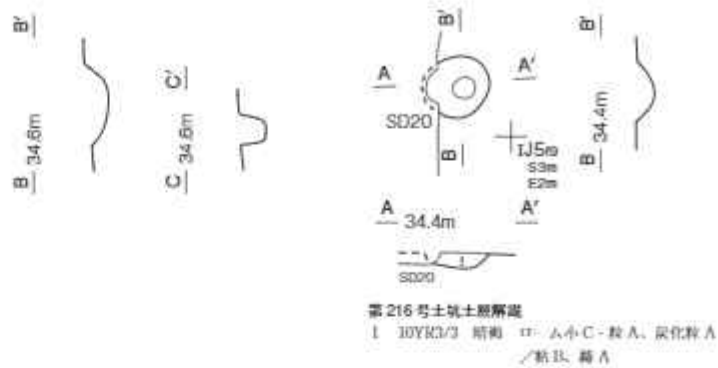




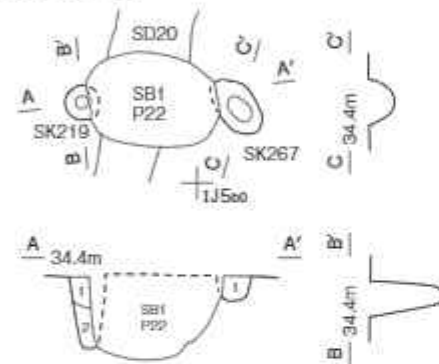
SK214・215



SK216



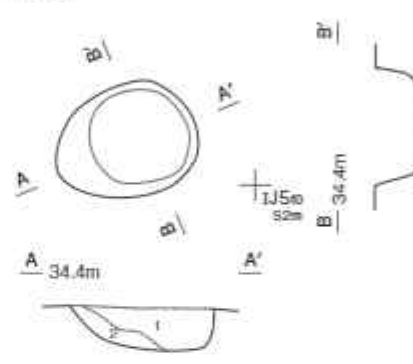
SK219・267



第219号土坑土層解説
1 10YR2/4 暗褐色 ①-△小D-粒C / 粘B、粘B
2 10YR2/3 暗褐色 ①-△小C-粒B / 粘B、粘B

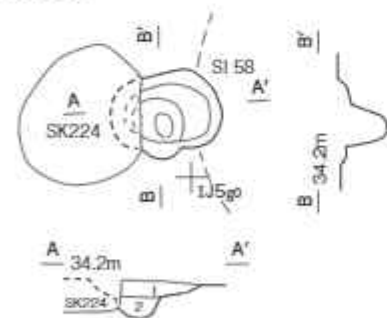
第267号土坑土層解説
1 10YR4/6 褐色 ①-△小D-粒C / 粘B、粘B

SK220



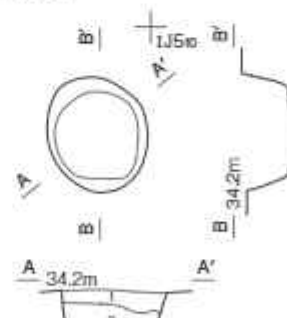
第220号土坑土層解説
1 10YR2/7 黒褐色 ①-△小A-粒A / 粘A、粘A
2 10YR2/3 黒褐色 ①-△小C-粒C / 粘B、粘A

SK221



第221号土坑土層解説
1 10YR4/4 褐色 ①-△中D-小C-粒C、粘土粒D / 粘B、粘B
2 10YR4/3 紅褐色 ①-△中C-小B-粒B / 粘B、粘B

SK227

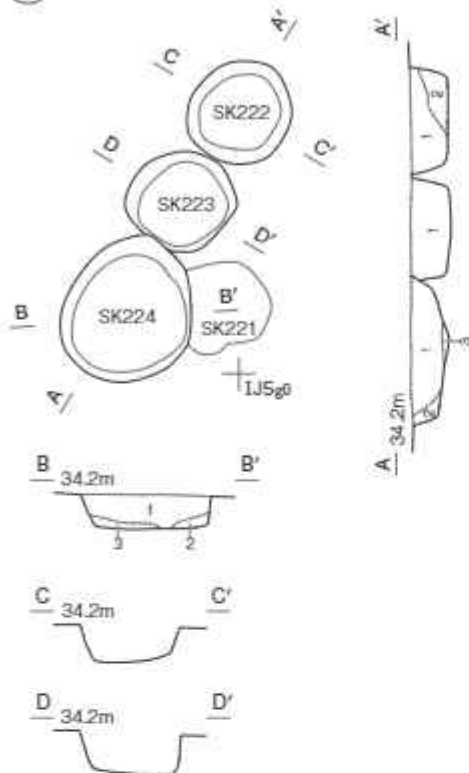


第227号土坑土層解説
1 10YR4/3 紅褐色 ①-△中C-小B-粒A / 粘B、粘B
2 10YR4/4 褐色 ①-△中D-小B-粒A / 粘C、粘C





SK222・223・224



第222号土坑土層解説

- 1 IOYR4/A 堀 □ 大中D・小C・殺B、焼土殺D/粘B、粘B
- 2 IOYR4/G 堀 □ 大中B・小A・殺A/粘B、粘C

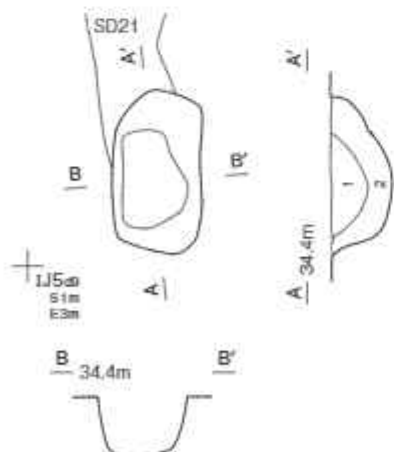
第223号土坑土層解説

- 1 IOYR4/G 堀 □ 大中C・小B・殺B、炭化殺D/粘B、粘B

第224号土坑土層解説

- 1 IOYR4/A 堀 □ 大中B・小B・殺A/粘B、粘B
- 2 IOYR4/G 堀 □ 大中B・小A・殺A/粘B、粘C
- 3 IOYR4/3 土砂層 □ 大D・殺C、炭化殺D/粘B、粘C

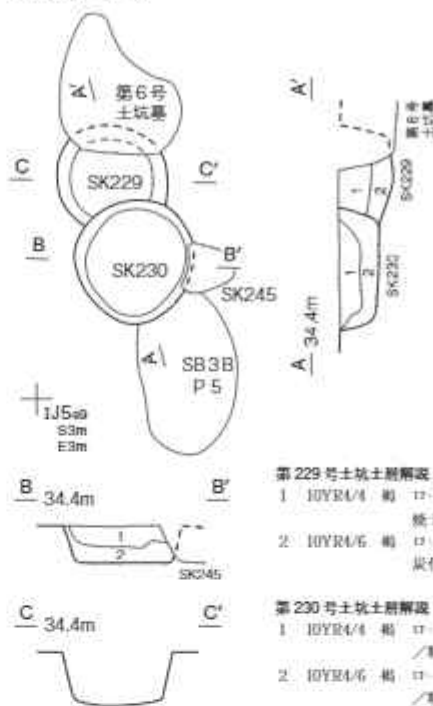
SK234



第234号土層解説

- 1 IOYR5/2 土砂層 □ 大D・中C・小B・殺A、焼土殺D、炭化殺D/粘B、粘B
- 2 IOYR3/1 土砂層 □ 大D・中B・小A・殺A、焼土殺D/粘C、粘C

SK229・230



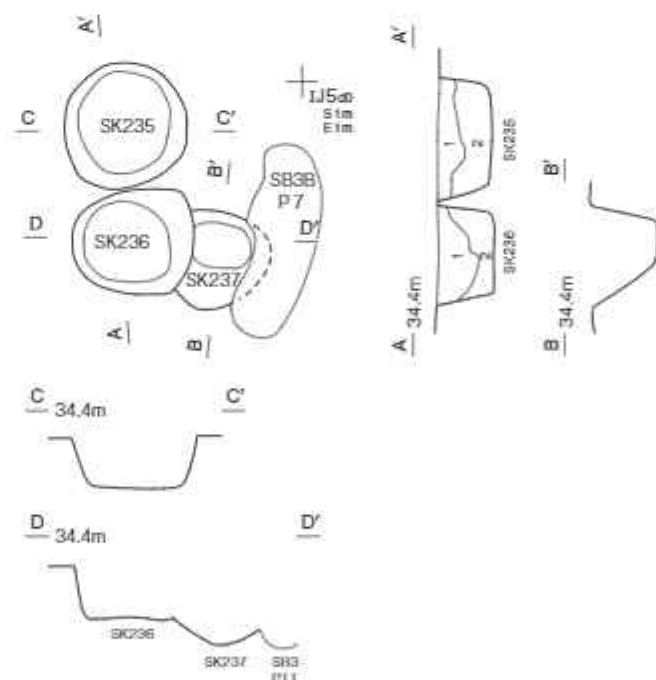
第229号土坑土層解説

- 1 IOYR4/A 堀 □ 大C・小B・殺A、焼土殺D/粘B、粘B
- 2 IOYR4/G 堀 □ 大中B・小B・殺A、炭化殺D/粘C、粘C

第230号土坑土層解説

- 1 IOYR4/A 堀 □ 大D・小C・殺A/粘B、粘B
- 2 IOYR4/G 堀 □ 大中B・小B・殺A/粘C、粘C

SK235・236・237



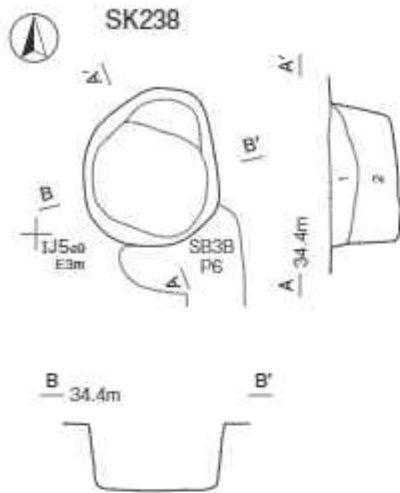
第235号土坑土層解説

- 1 IOYR4/A 堀 □ 大B・中B・小A・殺A、焼土殺D、炭化殺D/粘B、粘B
- 2 IOYR2/3 粘粉 □ 大B・中A・小A・殺A、焼土殺D、炭化殺D/粘B、粘C

第236号土坑土層解説

- 1 IOYR4/G 堀 □ 大B・中B・小A・殺A、焼土殺D、炭化殺D/粘B、粘B
- 2 IOYR3/1 土砂層 □ 大B・中B・小A・殺A、炭化殺D/粘C、粘C

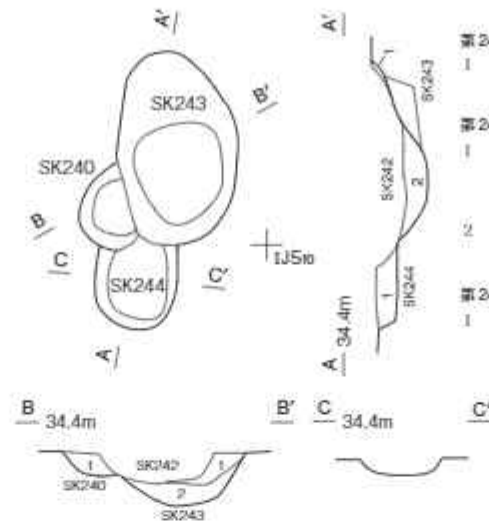
0 (1:50) 2m



第238号土坑土層解説

1. 10YR3/4 暗褐 ①-△小C・段A、黄土粒D / 粘土、雜B
2. 10YR3/3 暗褐 ①-△中C・小A・段A / 粘土、雜C

SK240・243・244



第240号土坑土層解説

1. 10YR4/4 粉 ①-△中C・小B・段A、炭化粒D / 粘土、雜C

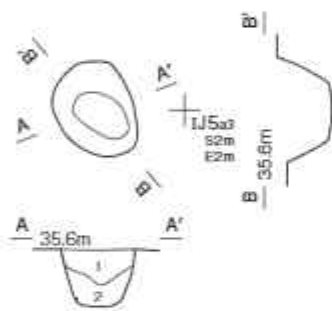
第243号土坑土層解説

1. 10YR4/6 粉 ①-△小B・段A、黄土粒D、炭化粒D / 粘土、雜B
2. 10YR4/6 粉 ①-△中B・小B・段A / 粘土、雜C

第244号土坑土層解説

1. 10YR2/3 暗褐 ①-△小B・段A / 粘土、雜D

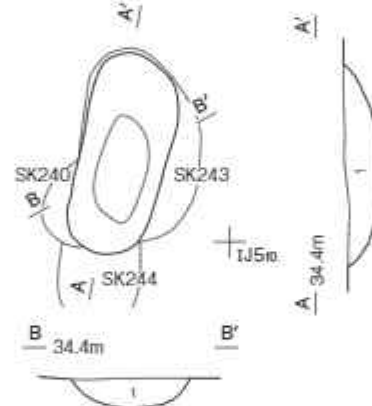
SK241



第241号土坑土層解説

1. 10YR2/3 黑粉 ①-△小C・段B、黑色土粒C / 粘土、雜B
2. 10YR4/3 暗褐 ①-△粉C、黑色土粒C / 粘土、雜B

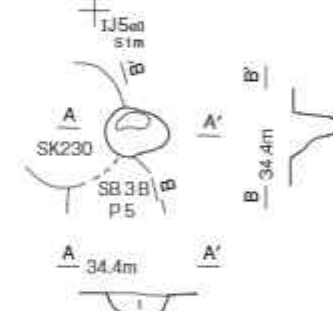
SK242



第242号土坑土層解説

1. 10YR4/6 粉 ①-△中C・小A・段A / 粘土、雜C

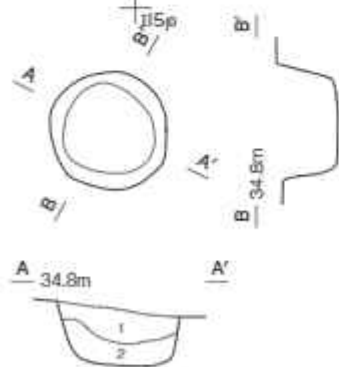
SK245



第245号土坑土層解説

1. 10YR4/6 粉 ①-△小B・段A、黄土粒D、炭化粒D / 粘土、雜B

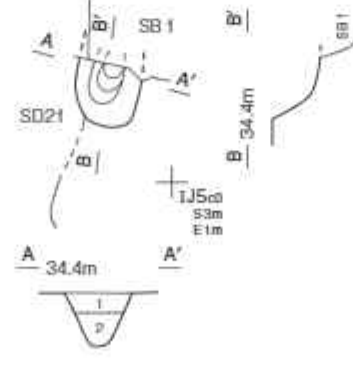
SK248



第248号土坑土層解説

1. 10YR2/4 暗褐 ①-△粉A / 粘土、雜B
2. 10YR2/3 暗褐 ①-△小C・段A / 粘土、雜B

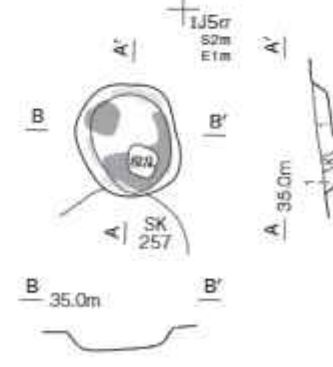
SK254



第254号土坑土層解説

1. 10YR2/4 暗褐 ①-△小C・段A、白色粘土小D・粒D / 粘土、雜A
2. 10YR2/3 暗褐 ①-△中C・小C・段A、白色粘土粒C / 粘土、雜A

SK255

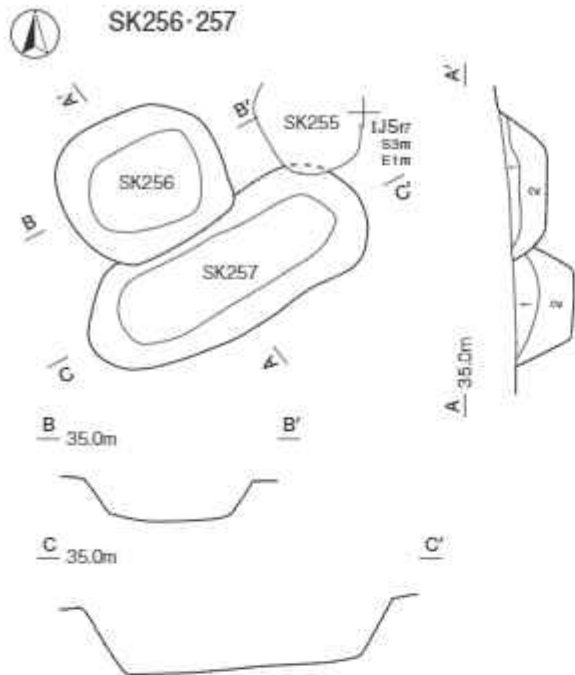


第255号土坑土層解説

1. 10YR2/2 黑粉 ①-△小B・段B、黄土粒C、炭化粒B / 粘土、雜B



第261图 时期不明の土坑実測図(18)

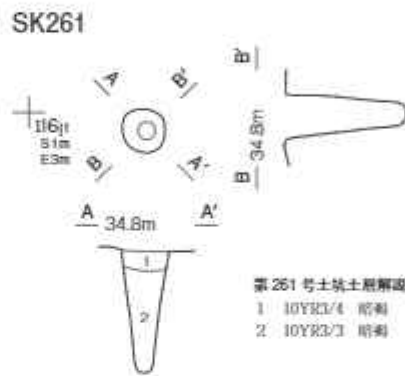


第256号土坑土層解説
 1 10YR2/4 暗褐色 土-人小C-粒B、炭化粒D/粘B、雜B
 2 10YR2/2 黒褐色 土-人小C-粒B、炭化粒C-粒A/粘B、雜B

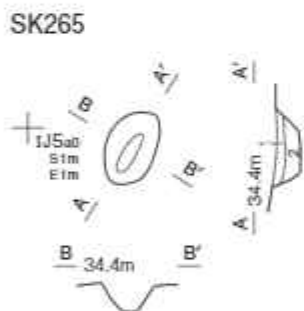
第257号土坑土層解説
 1 10YR2/2 黒褐色 土-人小D-粒C、炭化粒C/粘B、雜B
 2 10YR2/3 暗褐色 土-人小D-粒C、炭化粒D/粘B、雜B



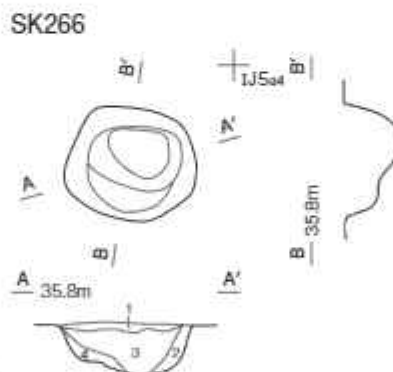
第260号土坑土層解説
 1 10YR3/3 暗褐色 土-人粒A/粘A、雜B



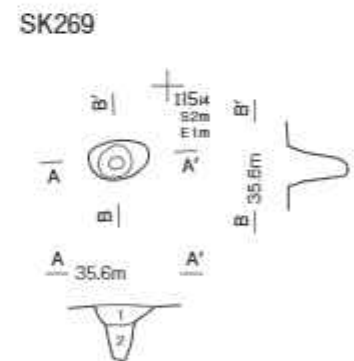
第261号土坑土層解説
 1 10YR3/4 暗褐色 土-人粒A/粘A、雜B
 2 10YR3/3 暗褐色 土-人粒A/粘A、雜B



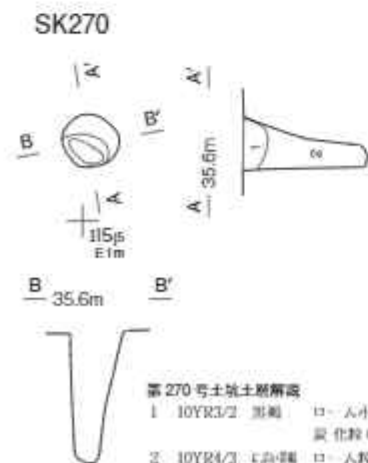
第265号土坑土層解説
 1 10YR3/4 暗褐色 土-人粒A、炭化粒B/粘A、雜B
 2 10YR4/3 灰褐色 土-人粒C、炭化粒C/粘A、雜B



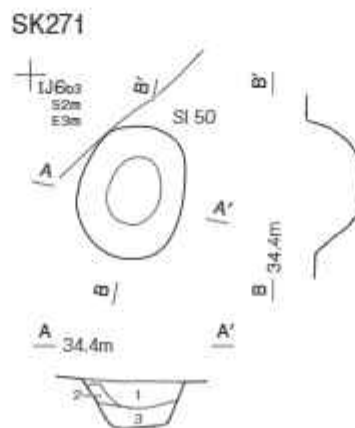
第266号土坑土層解説
 1 10YR3/4 暗褐色 土-人粒C/粘B、雜A
 2 10YR3/3 暗褐色 土-人小D-粒C/粘B、雜C
 3 10YR3/4 暗褐色 土-人小C-粒C/粘A、雜B
 4 10YR4/4 褐色 土-人粒A-中A/粘B、雜B



第269号土坑土層解説
 1 10YR2/2 黒褐色 土-人小C-粒C、炭化粒D/粘B、雜B
 2 10YR4/3 灰褐色 土-人粒C/粘B、雜C



第270号土坑土層解説
 1 10YR3/2 暗褐色 土-人小D-粒C、炭化粒C/粘B、雜B
 2 10YR4/3 灰褐色 土-人粒C/粘B、雜C



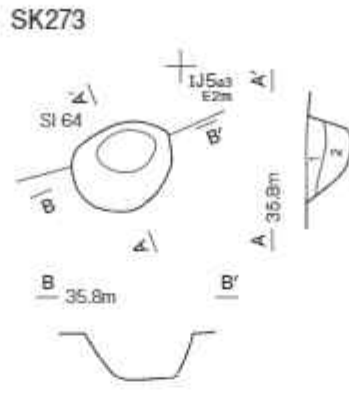
第271号土坑土層解説
 1 10YR4/3 灰褐色 土-人小D-粒C/粘B、雜C
 2 10YR3/4 暗褐色 土-人小C-粒C/粘B、雜B
 3 10YR2/3 暗褐色 土-人小B-粒B、粘B、雜C

第262図 時期不明の土坑実測図(19)

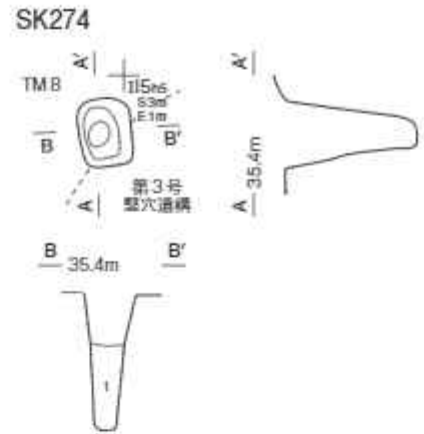




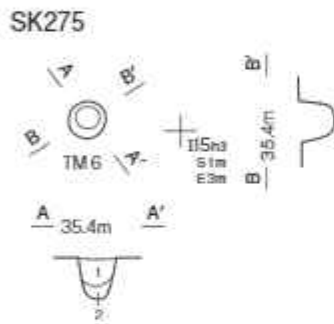
第272号土坑土層解説
1 10YR2/2 黒粘 ㊦-△小D-粒D/粘B、粘B



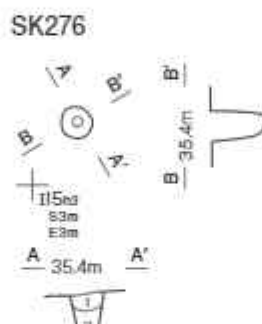
第273号土坑土層解説
1 10YR2/3 黒粘 ㊦-△粒D/粘B、粘B
2 10YR3/4 暗粘 ㊦-△粒D/粘B、粘B



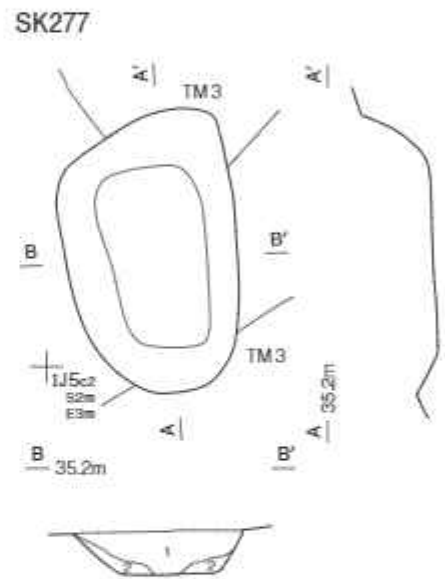
第274号土坑土層解説
1 10YR3/4 暗粘 ㊦-△粒A、炭化物B/粘B、粘B



第275号土坑土層解説
1 10YR4/4 粘 ㊦-△小D-粒C、炭化物D/粘B、粘B
2 10YR4/3 粘 ㊦-△中D-小B-粒B/粘B、粘B



第276号土坑土層解説
1 10YR4/4 粘 ㊦-△中D-小D-粒C/粘B、粘B
2 10YR4/3 粘 ㊦-△中D-小B-粒B/粘B、粘C



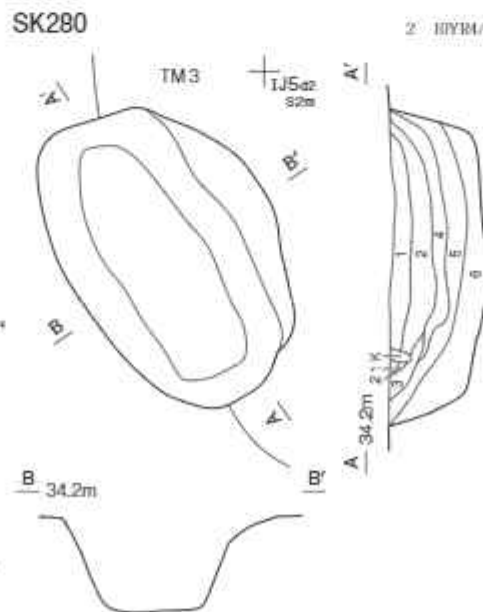
第277号土坑土層解説
1 10YR2/2 黒粘 ㊦-△小B-粒B、炭化物D/粘B、粘B
2 10YR4/3 粘 ㊦-△小A-粒A/粘B、粘C



第278号土坑土層解説
1 10YR4/4 粘 ㊦-△小D-粒C、炭化物D/粘B、粘B
2 10YR4/3 粘 ㊦-△小C-粒B/粘B、粘B



第279号土坑土層解説
1 10YR4/3 粘 ㊦-△粒C、炭化物D-粒C/粘B、粘C
2 10YR3/4 暗粘 ㊦-△粒B/粘B、粘B
3 10YR2/3 黒粘 ㊦-△粒A、炭化物B/粘B、粘C



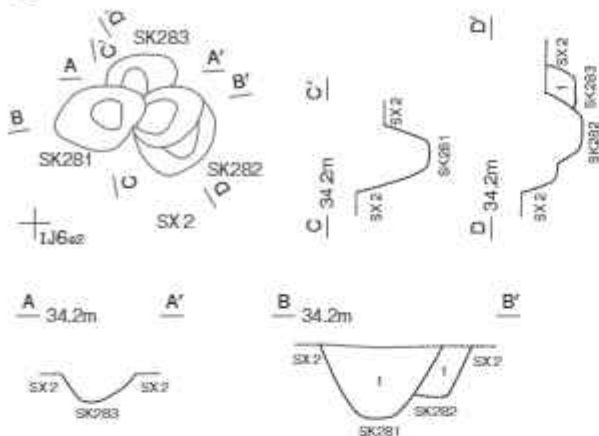
第280号土坑土層解説
1 10YR2/1 黒粘 ㊦-△小D-粒D、炭化物D/粘B、粘B
2 10YR2/2 黒粘 ㊦-△小C-粒B/粘B、粘B
3 10YR4/6 粘 ㊦-△小C-粒C/粘B、粘B
4 10YR4/3 暗粘 ㊦-△中C-小B-粒B/粘B、粘B
5 10YR3/4 暗粘 ㊦-△中C-小B-粒B/粘B、粘B
6 10YR4/3 粘 ㊦-△中B-小B-粒A/粘B、粘C



第263図 時期不明の土坑実測図(20)



SK281・282・283



第281号土坑土層解説

1 10YR3/4 暗褐色 ①-△小D-粒C、炭化粒D/粘B、雑A

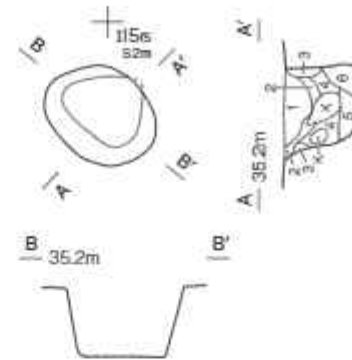
第282号土坑土層解説

1 10YR3/4 暗褐色 ①-△小C-粒C、炭化粒D/粘B、雑B

第283号土坑土層解説

1 10YR3/4 暗褐色 ①-△粒A、炭化粒B/粘B、雑B

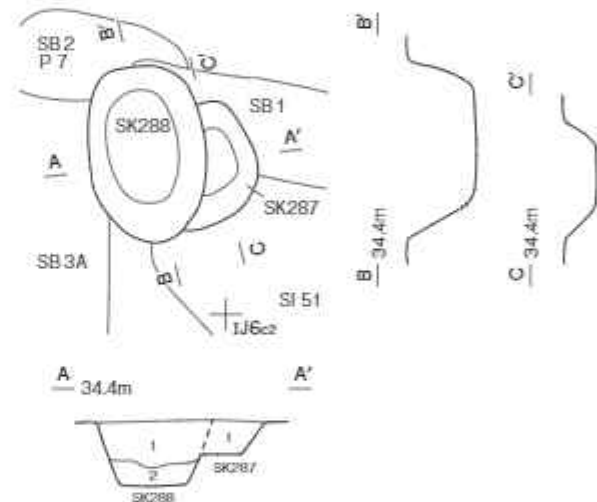
SK284



第284号土坑土層解説

- | | |
|----------------|--------------------------|
| 1 10YR3/1 黒褐色 | ①-△小D-粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雑B |
| 2 10YR4/1 暗灰 | ②-△小D-粒B、炭化粒D/粘B、雑B |
| 3 10YR4/4 褐色 | ③-△小C-粒B、炭化粒D/粘B、雑C |
| 4 10YR4/3 灰褐色 | ④-△中D-小B-粒A/粘A、雑C |
| 5 10YR5/6 黄褐色 | ⑤-△中C-小A-粒A/粘A、雑C |
| 6 10YR4/2 灰黄褐色 | ⑥-△中D-小B-粒A/粘A、雑C |

SK287・288



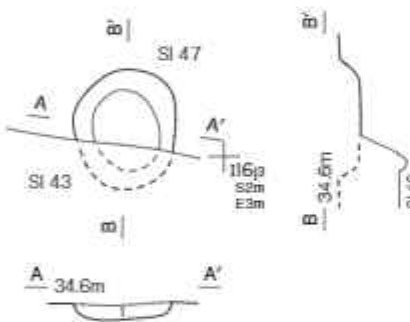
第287号土坑土層解説

1 10YR4/4 褐色 ①-△中D-小B-粒B/粘B、雑B

第288号土坑土層解説

- | | |
|---------------|-------------------|
| 1 10YR4/3 灰褐色 | ①-△中D-小B-粒B/粘B、雑C |
| 2 10YR3/3 暗褐色 | ②-△小B-粒B/粘B、雑C |

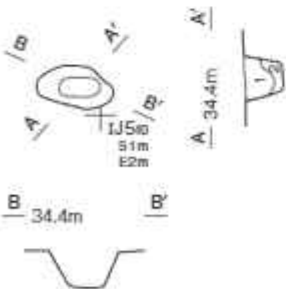
SK285



第285号土坑土層解説

1 10YR3/4 暗褐色 ①-△小D-粒C、焼土粒D、炭化粒D/粘B、雑B

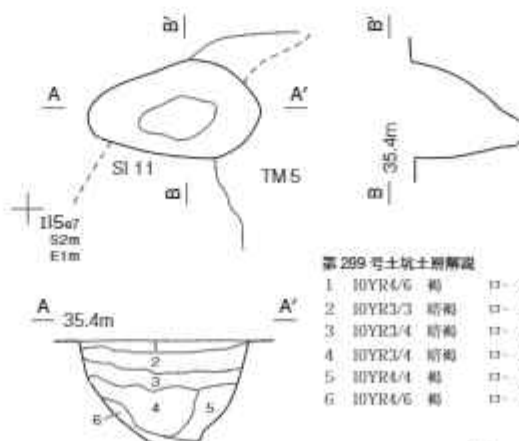
SK286



第286号土坑土層解説

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1 10YR3/3 暗褐色 | ①-△小D-粒C、炭化粒/粘B、雑B |
| 2 10YR3/4 暗褐色 | ②-△小C-小B-粒B/粘B、雑C |

SK289

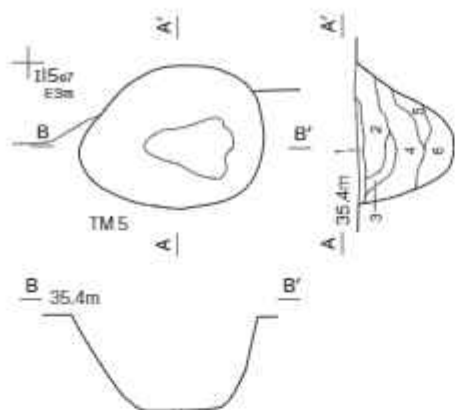


第289号土坑土層解説

- | | |
|---------------|-------------------|
| 1 10YR4/6 褐色 | ①-△小C-粒C/粘B、雑B |
| 2 10YR3/3 暗褐色 | ②-△小C-粒C/粘B、雑A |
| 3 10YR3/4 暗褐色 | ③-△小D-粒B/粘B、雑A |
| 4 10YR3/4 暗褐色 | ④-△小C-粒A/粘B、雑A |
| 5 10YR4/4 褐色 | ⑤-△小C-粒A/粘B、雑A |
| 6 10YR4/6 褐色 | ⑥-△中C-小A-粒B/粘B、雑A |



SK290



第290号土坑土層解説

- 1 10YR4/6 粗 砂 砂 礫 礫 D / 粘 B、粘 B
- 2 10YR3/3 暗粘 砂 礫 礫 B / 粘 B、粘 B
- 3 10YR4/3 暗粘 砂 礫 礫 D / 粘 B、粘 C
- 4 10YR3/4 暗粘 砂 礫 礫 D / 粘 B、粘 C
- 5 10YR4/4 粘 砂 礫 礫 A / 粘 B、粘 C
- 6 10YR4/6 粘 砂 礫 礫 C / 粘 B、粘 C

第265図 時期不明の土坑実測図(22)

第137表 時期不明の土坑一覧

番号	位置	方位方向	平面形	規模		断面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径 × 短径(m)	深さ(m)					
1	116d	N 21° W	[楕円形]	0.86 × (0.70)	23	垂直	平坦	人為	弥生土器 土師器	S118-29 → 本跡 → 第3号土坑底 空坑。
7	115e9	N 37° E	[楕円形]	1.97 × 1.46	38	外傾	皿状	自然	弥生土器 土師器 陶器	本跡 → SP1
8	116g	N 55° E	楕円形	1.38 × 1.22	44	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器	S17-21 → 本跡 空坑。
10	115g8		円形	1.09 × 0.99	42	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器	空坑。
13	116b1	N 37° E	楕円形	1.48 × 1.18	48	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 磁器	本跡 → SK25 SK3 掘削不明
18	116b1	N 20° E	隅丸方形	0.52 × 0.46	20	外傾	平坦	自然	弥生土器 土師器 磁器	本 → S18d1, SK26 SK3 掘削不明
21	115e9	N 54° W	楕円形	0.76 × 0.65	9	外傾	平坦	自然	弥生土器 土師器 陶器	本跡 → S15A, S16d, SK3 掘削不明
23	115g7		円形	1.03 × 1.00	38	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器	SP1 → 本跡 空坑。
24	116h	N 7° W	[隅丸方形]	(0.76) × (0.68)	40	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器	S11A → 本跡 空坑。
25	116b1		円形	0.50 × 0.46	18	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器	SK13 → 本跡 SK3 掘削不明
26	116b1	N 24° E	楕円形	0.44 × 0.28	30	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器 磁器	SK18 → 本跡 → S11b, SK3 掘削不明
28	115d7		円形	0.77 × 0.77	28	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 陶器	TM5, SP1, SK29 → 本跡 空坑。
29	115d7	N 15° E	[隅丸長方形]	1.04 × (0.48)	42	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器	TM5, SP1 → 本跡 → SK28 空坑。
30	116b1	N 85° W	楕円形	1.37 × 1.14	42	外傾	皿状	自然	弥生土器 土師器	S19 → 本跡
31	115g7	N 21° E	長方形	0.71 × 0.54	20	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器	
32	115d7		円形	0.93 × 0.87	26	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器	空坑。
33	116b2	N 19° W	楕円形	(1.04) × (0.43)	67	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 磁器	S110 → 本跡 空坑。
34	115e6	N 22° E	隅丸長方形	0.87 × 0.77	31	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 磁器	SK25-36 → 本跡 空坑。
35	115e7	N 21° E	[楕円形]	0.96 × (0.61)	23	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 陶器	SK36 → 本 → SK34-69 空坑。
36	115e7	N 46° W	[楕円形]	0.90 × (0.63)	34	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 陶器	本跡 → SK34-35 空坑。
37	115h	N 25° E	楕円形	1.57 × 0.75	14	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 陶器	SK28 → 本跡 空坑。
38	115h	N 25° E	隅丸長方形	0.64 × 0.54	18	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器	本跡 → SK37 空坑。
39	115h	N 20° E	隅丸長方形	0.99 × 0.84	25	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 瀬片	空坑。
40	115g7	N 19° E	楕円形	1.06 × 0.94	46	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器	空坑。
41	115d7		円形	1.52 × 1.45	80	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器 磁器	SP1 → 本跡
42	115g6	N 65° W	楕円形	0.83 × 0.72	12	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 磁器	空坑。
43	115d7	N 65° E	楕円形	0.97 × 0.72	42	外傾	平坦	自然	弥生土器 土師器 陶器	SK44-45 → 本跡
44	115h	N 26° E	[楕円形]	1.07 × (0.72)	26	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 陶器	本跡 → SK43-45 空坑。
45	115d7	N 10° E	[隅丸長方形]	(0.89) × 0.80	39	外傾	平坦	人為	弥生土器 土師器 陶器	SK44 → 本跡 → SK43 空坑。
47	115h	N 83° W	不整形円形	1.87 × 1.29	60	外傾	有段	人為	弥生土器 土師器	TM2, SP1 → 本跡 → 空坑。
48	116a2	N 19° W	[楕円形]	(0.84) × (0.38)	72	外傾	U字状	人為	弥生土器 土師器 瀬片	S110, SK49 → 本跡 S113, SK50 掘削不明

番号	位置	長径方向	平面形	異 稜		壁 面	底 面	葺 土	土 交 出 土 遺 物	備 考
				長径 × 短径 (m)	高さ (m)					
49	116a	N 85° W	[楕円形]	(0.60) × (0.60)	66	外傾	U字状	人為	弥生土器 土師器	SI10、SK48 - SD13 → 本跡 SK50 新旧不明
50	116a1	N 10° E	[不整楕円形]	1.04 × (0.70)	62	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器 磁器	SI10 → 本跡 SK48 - 49 新旧不明
51	1153b	N 67° W	楕円形	1.40 × 1.09	52	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器 磁器 瓦石	SI4・TM6 → 本跡 瓦坑
52	115g	-	円形	1.14 × 1.06	48	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器 陶器	SI3・TM6 → 本跡 瓦坑
53	1150	N 7° E	[楕円形]	(0.90) × (0.60)	32	外傾	平頂	自然	弥生土器 土師器 陶器 磁器	本跡 → SF1
54	1151a	N 47° W	楕円形	0.88 × 0.66	56	外傾	凹凸	人為	弥生土器 土師器 陶器	瓦坑
56	1151b	-	[円形]	(1.00) × (0.98)	(26)	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器	本跡 → SF1
57	1151b	N 84° E	[楕円形]	1.22 × (0.60)	78	外傾	U字状	人為	弥生土器 土師器	本跡 → SF1
58	115d	-	円形	1.36 × 1.34	52	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	瓦坑
59	115c	-	円形	1.40 × 1.33	30	外傾	平頂	自然	瓦石 器調片 磁器 弥生土器 土	TM3 → 本跡
60	1161a	N 14° E	楕円形	0.54 × 0.48	24	外傾	平頂	自然	弥生土器 土師器	SI51、SK130 → 本跡
61	115a	N 62° W	楕円形	0.88 × 0.60	16	外傾	平頂	自然	弥生土器 土師器 磁器	SI11、SK66 → 本跡
62	115c	N 41° E	[隅丸長方形]	(1.40) × (0.88)	(48)	外傾	平頂	人為	縄文土器	SI6、TM5 → 本跡 → SI6
63	1151b	-	円形	1.42 × 1.40	74	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器 磁器 瓦石	SF1 → 本跡 → SD30 瓦坑
64	115j	-	円形	1.18 × 1.10	34	外傾	皿状	自然	弥生土器 土師器	SI8 → 本跡 瓦坑
65	115g	-	円形	0.60 × 0.61	25	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器	弥生・古墳時代の 遺構
66	115c	N 36° E	[楕円形]	0.70 × (0.60)	60	外傾	平頂	自然	弥生土器 土師器	本跡 → SK61
67	1150	N 77° W	楕円形	2.08 × 1.07	15	外傾	平頂	自然	弥生土器 土師器	SI13 → 本跡 弥生時代の土坑
68	1150	N 65° E	楕円形	1.14 × 0.60	66	外傾	U字状	人為	弥生土器 土師器	
69	1150	N 45° W	[楕円形]	(0.94) × (0.69)	37	外傾	凹凸	自然	弥生土器 土師器	本跡 → SK35
70	116a	N 68° E	楕円形	0.89 × 0.79	21	外傾	皿状	自然	弥生土器 土師器	SI15 → 本跡
71	1155	N 23° W	不整楕円形	1.11 × 0.98	22	外傾	皿状	自然	弥生土器 土師器 磁器	本跡 → SI16、SK72
72	1155	N 42° W	楕円形	0.86 × 0.70	26	外傾	平頂	自然	弥生土器 土師器	SI16、SK71 → 本跡
73	116a	N 19° W	[楕円形]	(1.08) × (0.37)	64	外傾	平頂	自然	弥生土器 土師器 磁器 瓦石	SI30 → 本跡
74	1164	N 80° E	楕円形	1.44 × 0.97	51	外傾	凹凸	人為	弥生土器 土師器	SI18 → 本跡 瓦坑
77	115g	N 20° E	隅丸長方形	0.99 × 0.73	37	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	瓦坑
78	1151b	-	円形	0.88 × 0.84	33	垂直	平頂	人為	弥生土器 土師器	SI26 - 35 → 本跡 瓦坑
80	115b	-	円形	0.76 × 0.72	36	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	SI26 → 本跡 瓦坑
81	115g	N 13° E	[隅丸方形]	0.76 × (0.54)	20	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	本跡 → SI28 瓦坑
82	1151b	N 57° W	楕円形	0.55 × 0.36	24	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器	
83	115g	N 30° W	楕円形	0.94 × 0.77	10	外傾	皿状	人為	弥生土器 土師器	瓦坑
84	1161	N 67° E	隅丸長方形	2.64 × 1.35	41	垂直	凹凸	人為	弥生土器 土師器	SI27 → 本跡 瓦坑
85	1159	N 72° W	楕円形	1.64 × 1.40	60	外傾	平頂	自然	弥生土器 土師器	SI25 → 本跡 瓦坑
86	115a	N 64° E	楕円形	2.19 × 1.43	42	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	TM5 新旧関係不明 古墳前期の土坑
88	115g	N 73° W	[隅丸方形]	0.77 × 0.74	27	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	遺し等穴 → 本跡 → SI17 瓦坑
89	115g	-	円形	0.45 × 0.45	18	外傾	平頂	人為	縄文土器 弥生土器	
93	1161b	N 75° W	楕円形	0.94 × 0.58	40	外傾	U字状	人為	弥生土器 土師器	SI47 → 本跡
95	116a	N 69° W	楕円形	0.90 × 0.65	40	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	SI12 → 本跡 瓦坑
96	1161	-	円形	0.91 × 0.87	38	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	瓦坑
97	1161	-	[円形]	0.82 × (0.80)	50	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	本跡 → SK98 瓦坑
98	1161	-	円形	1.03 × 1.02	52	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	SK99 → 本跡 瓦坑
99	1161b	N 9° E	長方形	1.14 × 0.90	40	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	SI43 → SI41 - SI42 - SD17 → 本跡
100	1161a	N 2° W	楕円形	0.92 × 0.77	22	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	SI50 → 本跡 瓦坑
101	1161	-	円形	0.96 × 0.95	40	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	SI51 → 本跡 瓦坑
102	1161	-	円形	1.16 × 1.08	38	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	SI52 → 本跡 瓦坑
103	1161	N 29° W	楕円形	1.19 × 0.97	43	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	SI53 → 本跡 瓦坑
106	1161b	N 6° E	[楕円形]	(1.16) × (0.99)	73	外傾	平頂	人為	弥生土器 土師器	本跡 → SI41 瓦坑

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径 × 短径(m)	深さ(cm)					
189	1j5d	N-73° W	楕円形	1.85 × 1.09	11	外傾	平川	自然	弥生土器 土師器	SE8・SK181→本跡 →SA1-2
190	1j6c	N-83° E	楕円形	1.20 × 0.67	54	外傾	凹凸	人為	弥生土器 土師器	
196	1j5g	N-6° W	楕円形	0.43 × 0.25	22	外傾 垂直	日字状	人為	弥生土器 土師器	
197	1j5d		円形	0.75 × 0.73	14	外傾	平川	自然	弥生土器 土師器	SD3B→本跡
300	1j6g	N-21° E	楕円形	1.06 × (1.50)	49	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	本跡→第4号新土器 土坑
201	1j5d	N-89° E	楕円形	0.82 × 0.48	36	外傾	平川	人為	弥生土器	SD10 新旧不明
202	1j5g	N-82° E	楕円形	1.21 × 1.04	32	外傾	平川	自然	弥生土器 土師器 陶器	TM7→本跡
203	1j6c	N-10° E	楕円形	0.50 × (0.55)	35	外傾	日字状	不明		SK174→本跡
209	1j6d	N-87° E	楕円形	0.40 × 0.28	74	外傾	右段	自然	弥生土器 土師器	SE2→本跡 古墳時代の遺構
212	1j6c	N-7° E	楕円形	0.57 × 0.36	30	外傾	日字状	自然	弥生土器 土師器	SA5→本跡 SD10 新旧不明
214	1j5d	N-75° W	楕円形	0.81 × 0.57	20	外傾	凹凸	不明	弥生土器 土師器	
215	1j5d	N-80° W	楕円形	0.70 × 0.21	20	外傾	平川	不明		
216	1j5d		[円形]	(0.52) × 0.48	12	外傾	平川	自然	弥生土器 土師器	本跡→SD20
219	1j5d		[円形]	0.37 × [0.27]	76	垂直	日字状	自然	弥生土器 土師器	本跡→SD11・SD20
220	1j5d	N-69° E	楕円形	1.55 × 1.20	45	垂直	平川	人為	弥生土器 土師器	
221	1j5d	N-5° W	楕円形	0.68 × (0.65)	40	右段	右段	人為	弥生土器 土師器	SE8→本跡→SK224
222	1j5d		円形	0.80 × 0.78	28	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	草坑
223	1j5d		楕円形	0.85 × 0.75	30	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	本跡→SK224
224	1j5d	N-9° E	楕円形	1.14 × 0.97	30	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	SK221・223→本跡 草坑
227	1j5d	N-18° W	楕円形	0.92 × 0.68	39	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	草坑
229	1j5d		[円形]	0.87 × (0.70)	44	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	本跡→SK220、第 5号土坑
230	1j5d		円形	0.98 × 0.91	32	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	SD3B、SK229 →本跡→SK245
234	1j5d	N-8° E	楕円形	1.28 × 0.70	48	外傾	平川	人為	土師器 骨片 硯石	SD21→本跡 草坑
235	1j5d		円形	1.00 × 0.96	42	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	草坑
236	1j5d	N-83° E	楕円形	0.94 × 0.82	44	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	SK227→本跡
237	1j5d		[円形]	0.80 × [0.48]	66	外傾	U字状	人為	弥生土器 土師器	本跡→SD3B、 SK236
238	1j5d	N-21° E	楕円形	1.30 × 1.14	54	垂直	平川	人為	弥生土器 土師器	本跡→SD3B 草坑
240	1j5d	N-11° E	楕円形	0.65 × (0.12)	17	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	SK244→本跡 →SK242 草坑
241	1j5d	N-31° W	楕円形	0.84 × 0.52	38	外傾	平川	自然	弥生土器 土師器	
242	1j5d	N-9° E	楕円形	1.60 × 0.70	25	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	SK240・241・244 →本跡
243	1j5d	N-14° W	楕円形	1.50 × 0.97	47	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	SK244→本跡→ SK242 草坑
244	1j5d		楕円形	0.65 × (0.60)	18	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	本→SK240・242・ 243 草坑
245	1j5d	N-86° W	[円形]	0.49 × 0.40	39	外傾 垂直	U字状	人為	弥生土器 土師器	SD3・SK230→本跡 SD3B 新旧不明
248	1j5g		円形	0.92 × 0.92	43	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	
254	1j5d	N-74° W	[楕円形]	0.52 × (0.50)	42	外傾	U字状	人為	弥生土器 土師器	SD1、SD21→本跡
255	1j5f	N-31° W	楕円形	0.92 × 0.75	17	外傾	平川	自然	弥生土器 土師器	SK257→本跡
256	1j5d	N-65° E	楕円形	1.30 × 1.08	32	外傾	平川	人為	弥生土器 土師器	SK257→本跡
257	1j5g	N-60° E	楕円形	2.40 × 0.94	52	外傾	平川	自然	弥生土器 土師器	本跡→SK255・256
260	1j6d	N-28° E	[楕円形]	(0.50) × (0.40)	32	外傾	U字状	人為	弥生土器 土師器	本跡→SD1、SD1A
261	1j6j		円形	0.37 × 0.34	95	外傾	U字状	人為	弥生土器 土師器	
265	1j5d	N-30° E	楕円形	0.67 × 0.39	22	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器	SD7→本跡
266	1j5d	N-74° E	楕円形	1.05 × 0.93	43	外傾	右段	人為	弥生土器 土師器	
267	1j5d	N-37° E	楕円形	0.70 × 0.40	25	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器	本跡→SD1
269	1j5d	N-86° E	楕円形	0.47 × 0.30	40	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器	TM3→本跡
270	1j5j		円形	0.48 × 0.44	104	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器	TM8→本跡 弥生時代の遺構
271	1j6d	N-12° E	楕円形	1.05 × 0.82	40	外傾	平川	人為	弥生土器	SD9→本跡
272	1j6c	N-21° E	楕円形	0.80 × 0.65	38	外傾	U字状	自然	弥生土器 土師器	SD3→本跡

第2号土坑墓土層解説

1. 10YR2/3 暗褐色 ㊦-A小B-粒B、管砂C/粘B、細B
2. 10YR2/2 黒褐色 ㊦-A中B-小B-粒B、管砂B/粘B、細C

第3号土坑墓土層解説

1. 10YR2/4 暗褐色 ㊦-A中C-小B-粒B/粘B、細B
2. 10YR2/3 暗褐色 ㊦-A中C-粒B/粘B、細C
3. 10YR4/3 灰赤土 ㊦-A小A-粒A、管砂B/粘B、細C

第4号土坑墓土層解説

1. 10YR2/3 暗褐色 ㊦-A中D-小C-粒B、粘土粒D、炭化粒C/粘B、細A
2. 10YR5/3 灰赤土 ㊦-A中C-小B-粒B、管砂A/粘C、細C
3. 10YR4/3 灰赤土 ㊦-A小B-粒B、管砂(付)A-(赤)B/粘C、細C

第5号土坑墓土層解説

1. 10YR2/4 暗褐色 ㊦-A中C-小B-粒B/粘B、細B
2. 10YR2/3 暗褐色 ㊦-A小C-粒B、管砂C/粘B、細B
3. 10YR4/3 灰赤土 ㊦-A小A-粒A、管砂B/粘B、細C

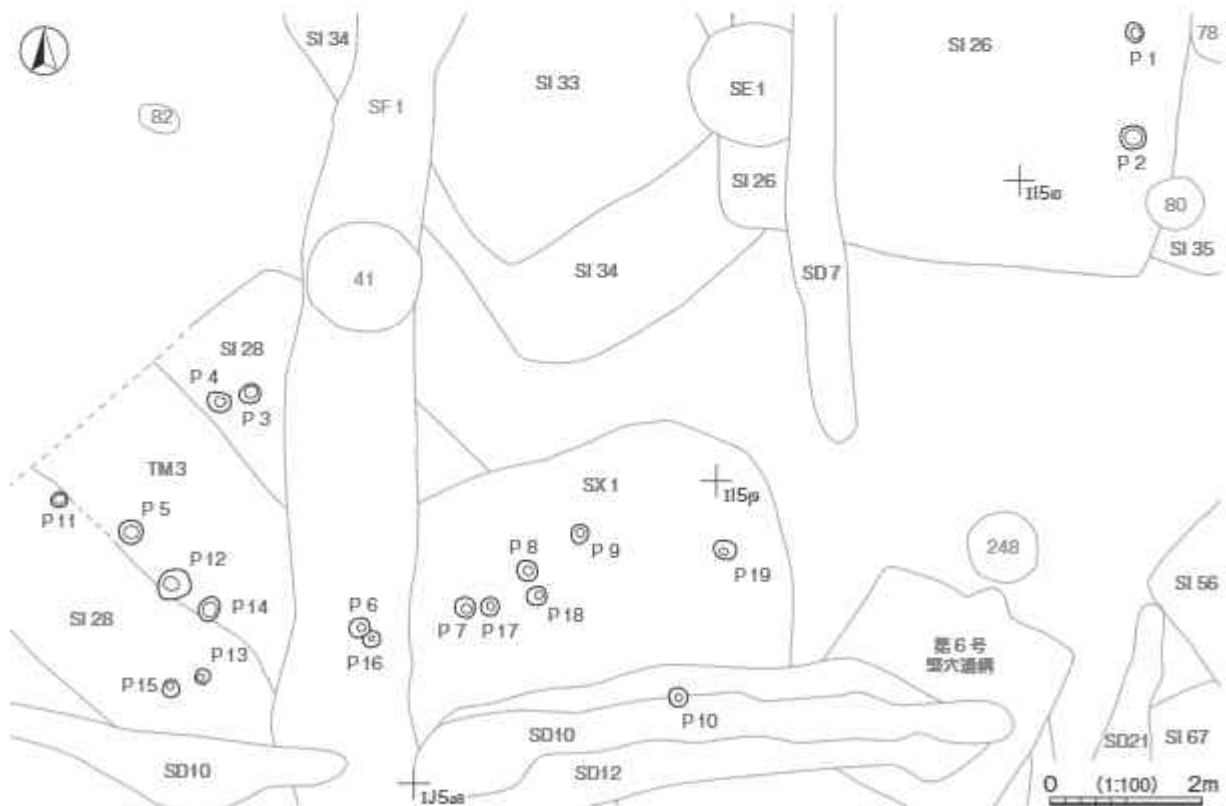
第7号土坑墓土層解説

1. 10YR2/4 暗褐色 ㊦-A小C-粒B、黒色ブロック小C、管砂B/粘B、細B
2. 10YR2/3 暗褐色 ㊦-A小B-粒B、黒色ブロック小C、炭込め/粘B、細B
3. 10YR2/3 暗褐色 ㊦-A小B-粒B、炭込め/粘B、細B
4. 10YR5/3 灰赤土 ㊦-A中C-小B-粒B、/粘C、細C
5. 10YR4/3 灰赤土 ㊦-A小B-粒B、/粘C、細C

第138表 その他の土坑墓一覧

番号	位置	方位方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径 × 短径(m)	深さ(cm)					
2	116d		円形	0.92 × 0.84	37	直立	平坦	人為		SI18-28, SD4 → 4墓
3	116e	N-14° E	隅丸方形	1.16 × 1.03	30	直立	平坦	人為	椀竹	SI18-28, SK1, SI4 → 4墓
4	116c	N-49° E	楕円形	1.24 × 1.01	60	直立	右段	人為		
5	116d2		円形	1.14 × 1.05	52	外傾	凹凸	人為		SI28A-121-13, SK127 → 4墓
7	115c9	N-90° W	楕円形	0.98 × 0.87	44	直立	平坦	人為	陶器 磁器 椀竹	SI21 → 4墓

(5) ビット群 (第267図 第139表)



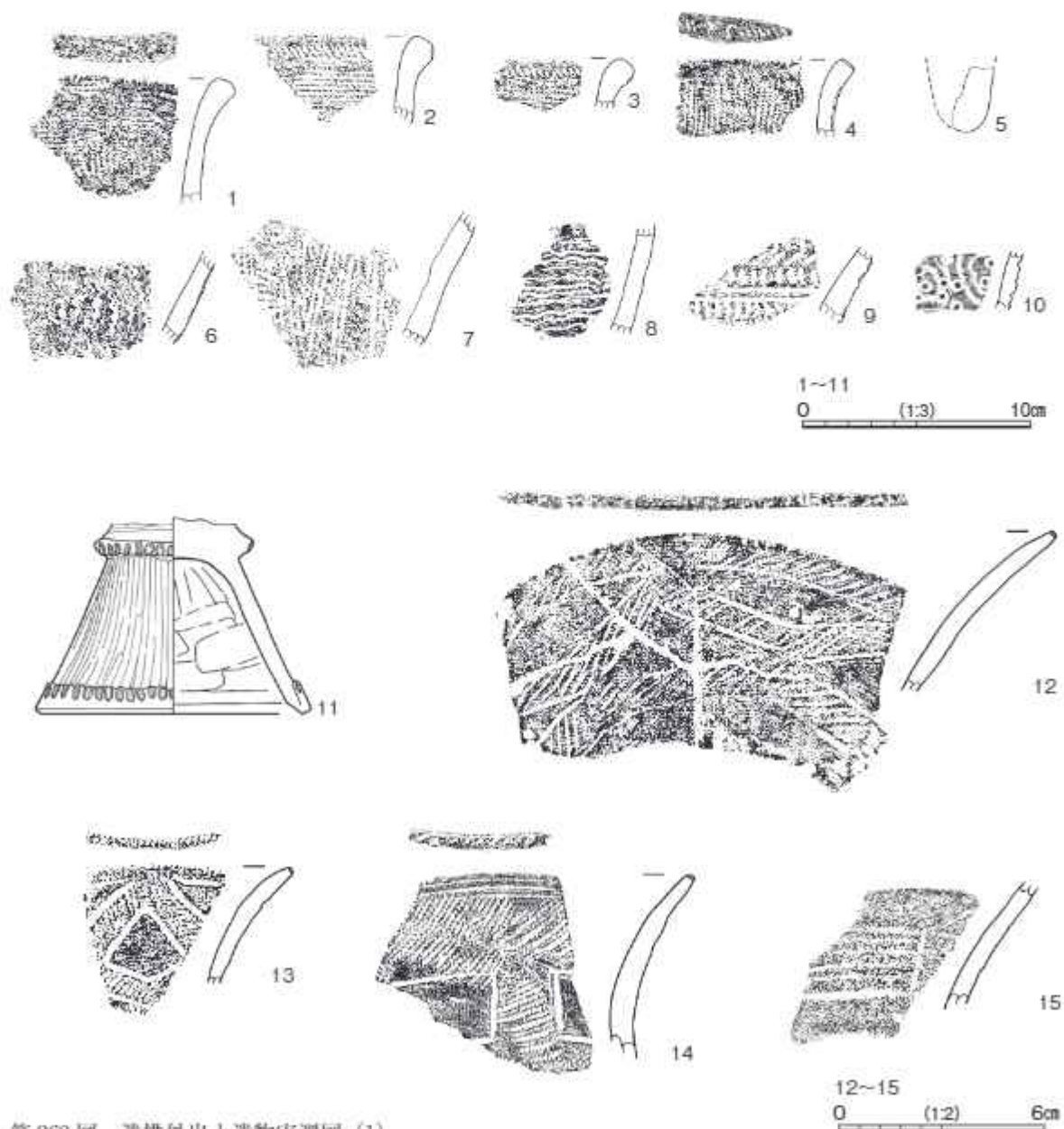
第267図 第1号ビット群実測図

第139表 第1号ピット群ピット計測表

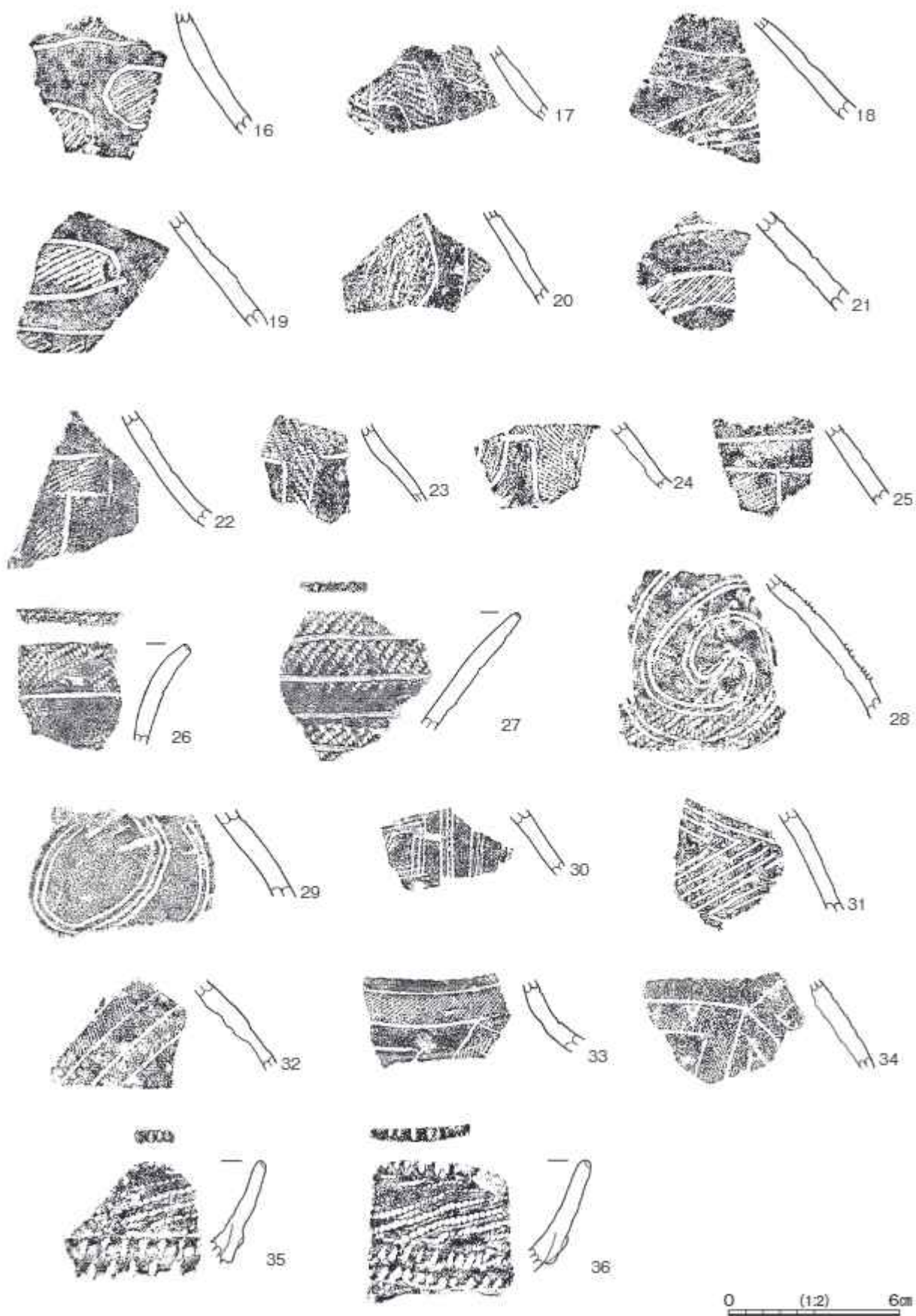
番号	位置	平面形	規模 (cm)			番号	位置	平面形	規模 (cm)			番号	位置	平面形	規模 (cm)		
			長 (mm)	短 (mm)	深さ				長 (mm)	短 (mm)	深さ				長 (mm)	短 (mm)	深さ
1	115h0	楕円形	24	20	64	8	115i8	楕円形	28	24	18	14	115j2	円形	23	18	37
2	115h0	円形	30	28	12	9	115i8	楕円形	26	22	16	15	115j7	円形	18	17	18
3	115i7	円形	26	25	26	10	115i8	円形	26	24	20	16	115j8	円形	23	18	37
4	115i7	楕円形	32	24	16	11	115i11	円形	10	10	40	17	115j8	円形	23	22	56
5	115i7	円形	28	28	24	12	115j2	円形	16	14	25	18	115j8	円形	25	23	82
6	115j7	円形	26	24	24	13	115j7	円形	18	17	18	19	115j9	楕円形	28	25	32
7	115i8	楕円形	28	24	32												

(6) 遺構外出土遺物 (第268～270図 第140表 PL49・50)

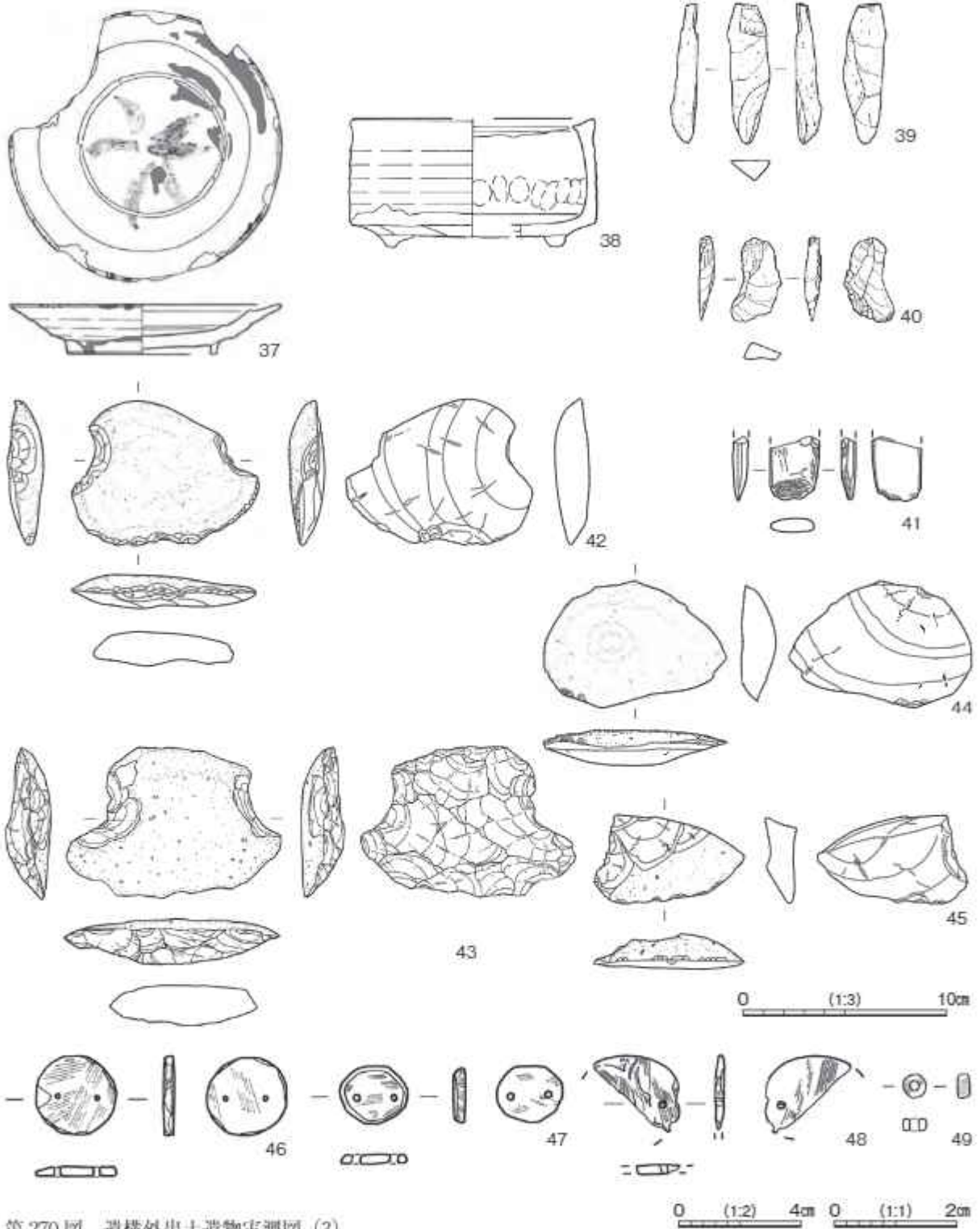
遺構外から出土したNo.42の右肩扇状石斧は、従来イネ科植物の切断具と考えられてきた。使用痕分析の結果、イネ科植物の切断具とは別の用途に使用された可能性が指摘されている (付章参照)。



第268図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第 269 图 遺構外出土遺物実測図 (2)



第270図 遺構外出土遺物実測図(3)

第140表 遺構外出土遺物一覧(第268～270図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	織文土器	深鉢		(5.5)		長石・石英 白色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部から口縁部縦位帯系文施文後、口縁部横位帯系文	TM3周溝 覆土	5% PL49 井草1式
2	織文土器	深鉢		(3.9)		長石・石英・砂礫 白色粒子	にぶい褐色	普通	帯系文施文	TM3周溝 覆土	5% PL49 井草1式
3	織文土器	深鉢		(2.2)		長石・石英 白色粒子	褐色	普通	帯系文施文	TM3周溝	5% PL49 井草1式
4	織文土器	深鉢		(3.4)		長石・石英 白色粒子	にぶい褐色	普通	帯系文施文	SH1志保 3X	5% PL49 井草1式
5	織文土器	深鉢		(2.9)		長石・石英 赤色粒子	褐色	普通	尖底 内外面ナブ	TM3周溝 覆土	5% PL49 井草1式

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
6	縄文土器	深鉢		(41)		長石・石英・黒色粒子	明褐色	普通	波状目線文	SI53 覆上	5% PL49 浮彫式
7	縄文土器	深鉢		(59)		長石・石英・白色粒子	褐色	普通	具波条須文	TM2 周溝	5% PL49 浮彫式
8	縄文土器	深鉢		(49)		長石・石英・白色粒子	褐色	普通	半截竹管による波状沈線文	SI10 覆上	5% PL49 浮彫式
9	縄文土器	深鉢		(33)		長石・石英・雲母・白色粒子	明赤褐色	普通	平行沈線・半截竹管による爪形文	SK208 覆上	5% PL49
10	縄文土器	深鉢		(26)		長石・石英・黒色粒子	明赤褐色	普通	脚部外面密なヘツミガキ 内面ヘツミガキ	TM3 覆上	20% PL49
11	弥生土器	高杯		(8.6)	[122]	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	取外面 接合部斜交列 脚部外面ミガキ内面ヘツミガキ	SI51 覆上	5%
12	弥生土器	広口壺		(47)		長石・石英・白色粒子	褐色	普通	附加条一種附加2条縄文施文後、菱形・三角形の沈線区画	TM6 周溝	5% PL49
13	弥生土器	広口壺		(35)		長石・石英・黒色粒子	褐色	普通	口唇から口縁部単節 RL 縄文施文後、菱形・三角形の沈線区画内を焼酒	TM2 周溝	5% PL49
14	弥生土器	広口壺		(54)		長石・石英・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口唇から口縁部単節 RL 縄文施文後、菱形・三角形の沈線区画内を焼酒	SI22 覆上	5% PL49
15	弥生土器	広口壺		(37)		長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面附加条一種施文後方形沈線区画に竹管状工具により平行沈線	TM3 墳丘	5% PL49
16	弥生土器	広口壺		(41)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい黄褐色	普通	附加条一種附加2条縄文施文後 円形の沈線区画 区画外側焼酒	SI45 覆上	5% PL49
17	弥生土器	広口壺		(26)		長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐色	普通	単節 LR 縄文施文 菱形・三角形の沈線区画 区画外側焼酒	SI24 覆上	5% PL49
18	弥生土器	広口壺		(35)		長石・石英・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	附加条一種附加2条縄文施文後、菱形の沈線区画	表上	5% PL49
19	弥生土器	広口壺		(40)		長石・石英	にぶい黄褐色	普通	楕円形の沈線区画	TM1 墳丘	5% PL49
20	弥生土器	広口壺		(33)		白色粒子	褐色	普通	楕円形または円形の沈線区画	TM3 墳丘	5% PL49
21	弥生土器	広口壺		(34)		長石・石英・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	附加条一種附加2条縄文施文後 半截竹管状工具による平行沈線文 焼酒	表上	5% PL49
22	弥生土器	広口壺		(40)		長石・石英・白色粒子	灰黄褐色	普通	単節 RL 縄文施文 T字状の沈線区画 焼酒	SI62 覆上	5% PL49
23	弥生土器	広口壺		(28)		長石・石英・雲母・白色粒子	灰黄褐色	普通	単節 LR 縄文施文 T字状の沈線区画 焼酒	TM2 周溝	5% PL49
24	弥生土器	広口壺		(23)		長石・石英・黒色粒子	褐色	普通	無節縄文施文 楕円形沈線区画及び直交する短い沈線	SI48 覆上	5% PL49
25	弥生土器	広口壺		(29)		長石・石英・白色粒子	黒褐色	普通	附加条一種附加2条施文 平行沈線 方形区画 沈線 焼酒	SI43 覆上	5% PL49
26	弥生土器	広口壺		(35)		長石・石英・白色粒子	黄褐色	普通	口唇から口縁部単節 RL 縄文施文 沈線	SI45 覆上	5% PL49
27	弥生土器	広口壺		(42)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐色	普通	口唇から口縁部単節 RL 縄文施文 平行沈線	TM5 周溝	5% PL49
28	弥生土器	広口壺		(45)		長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐色	普通	単節 LR 縄文施文 管状工具による渦巻文	TM3 周溝	5% PL49
29	弥生土器	広口壺		(31)		長石・石英・黒色粒子	褐色	普通	3本沈線による渦巻文	TM3 土体部	5% PL50
30	弥生土器	広口壺		(23)		長石・石英・白色粒子	暗褐色	普通	3本曲線状工具による重菱形文	TM4 周溝	5% PL50
31	弥生土器	広口壺		(36)		長石・石英・雲母・白色粒子	にぶい褐色	普通	管状工具による菱形文	TM5 周溝	5% PL50 宮ノ台式
32	弥生土器	広口壺		(26)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐色	普通	単節 RL 縄文施文 帯状又は菱形の沈線区画	表上	5% PL50 宮ノ台式
33	弥生土器	広口壺		(26)		長石・石英・白色粒子	にぶい褐色	普通	単節 RL 縄文施文 帯状又は菱形の沈線区画	TM6 周溝	5% PL50 宮ノ台式
34	弥生土器	広口壺		(31)		長石・石英・白色粒子	褐色	普通	単節 RL 縄文施文 菱形の沈線区画	SI28 覆上	5% PL50 宮ノ台式
35	弥生土器	広口壺		(36)		長石・石英・雲母・黒色粒子	明褐色	普通	口唇部・口縁部交差の斜交列 口縁部単節 RL 縄文施文	SI24 覆上	5% PL50
36	弥生土器	広口壺		(39)		長石・石英・白・黒色粒子	褐色	普通	口唇部・口縁部交差の斜交列 口縁部単節 RL 縄文施文	SI41 覆上	5% PL50

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	特徴	軸差	弁 差	出土位置	備考
37	陶器	甕	130	24	72	緻密 黒灰	折縁皿 鉄絵	長石軸	新戸・美濃	表上	85%
38	陶器	香炉	[11.4]	6.2	[8.5]	緻密 黄灰	筒形 三足 内面口縁部・体部輪軸 底部内外面無輪	鉛軸	新戸・美濃	表上	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特徴	出土位置	備考
39	調片	68	21	1.25	13.15	ガラス質 黒色安山岩	縦長調片 断面三角形 一側縁に自然面残す	SK75 覆上	PL50
40	調片	41	25	0.8	5.89	ガラス質 黒色安山岩	縦長調片 断面三角形	SK5 覆上	
41	磨製石斧	(3.2)	24	0.7	(8.50)	砂岩	鋸状 刃部横方向の研磨	表上	PL50
42	右肩扇状石器	71	92	1.7	117.63	フォルツ・ンス	刃部両側からの調整 両側縁刃部からの調整により抉れ部作出	TM5 周溝	PL50
43	右肩扇状石器	73	106	2.2	1424	安山岩	刃部片側から沈線する調整 両側縁両側からの調整により抉り部作出 上部片側から沈線する細かい調整	表上	PL50
44	2次加工のある調片	90	59	1.7	99.74	ガラス質安山岩	刃部片側から沈線する調整	表上	PL50
45	2次加工のある調片	74	43	2.0	56.73	フォルツ・ンス	刃部両側からの沈線する細かい調整 両側縁部加工痕	SI46 覆上	PL50
46	右孔門板	26	27	0.35	4.81	滑石	孔2か所 一方から穿孔 上下・側面縦方向からの研磨	TM5 周溝	PL50
47	右孔門板	19	23	0.4	2.81	滑石	孔2か所 一方から穿孔 上下・側面一方からの研磨	TM3 墳丘	PL50
48	右孔門板	(25)	(29)	(0.3)	(2.88)	滑石	孔1か所 一方から穿孔 上下面二方向からの研磨 側縁部に穿孔痕型2か所	TM5 周溝	
49	白玉	0.4	0.2	0.1	0.07	滑石	孔1か所 一方から穿孔 上下・側面一方から研磨	TM5 周溝	PL50

第4節 総括

1 はじめに

今回の調査では、旧石器時代から江戸時代までの多くの遺構を確認した。以下、旧石器時代については分析結果をもとに、縄文時代は出土遺物から特徴を述べ、弥生時代から近世については、集落の変遷などについて述べる。なお、弥生時代から平安時代の集落の変遷などについては、本県における編年観を参考に時期区分している¹⁾。

2 旧石器時代

炭化物・焼土集中地点1か所を確認した。そのほか遺構外からは、剥片2点が出土している。炭化物・焼土集中地点の時期は、始良 Tn テフラ (AT) を含む層下の暗色帯で確認できたこと、また、放射性炭素年代測定の結果から、分析試料の暦年校正は 35,204 ~ 34,204 年であることが判明した。本地点から石器は確認できなかったが、武蔵野台地の立川ローム層第Ⅹ～Ⅶ層段階併行の人々の活動痕跡の可能性はある。

3 縄文時代

I I 5 e5 区の台地緩傾斜面で陥し穴1基を確認した。調査区内からは、縄文時代早期から中期の土器片が出土しており、当時代の遺構は、後世の遺構などによって削平された可能性がある。早期の井草式Ⅰ式、田戸下層式、茅山式土器は、調査区西部の台地先端部 (I I 5 f3 ~ I J 5 e7) から、ややまとまって出土している。その他、調査区南東部の尾根以外からは、前期中葉の黒浜式、後葉の浮島式、中期前半の阿玉台式の土器片が少量出土している。縄文時代の行方市域では、前期中葉の田戸下層式以降になると、覆ヶ浦・北浦沿岸、そこに流れ込む各河川域の各所で少数の遺構・遺物が確認されており、短期間の移住生活を繰り返していたものと考えられる。前期中葉以降になると小規模な集落の形成が始まり、阿玉台式後半以降は、拠点的な集落と小規模な集落、キャンプサイトなどが関連しながら、遺跡群を構成するようになる。今回の調査によって、当遺跡でも同様な傾向が確認できた。注目する遺物は、早期前半の井草Ⅰ式の捻糸文系土器が出土したことである。行方市域での出土例は稀で、上高岡古墳(旧麻生町)から夏島式土器片が出土している程度である。

4 弥生時代 (第271～273図)

竪穴建物跡37棟、竪穴遺構5基、土坑2基、炉跡4基、遺物包含層2か所を確認した。ここでは、弥生時代中期中葉・後葉、後期前葉・中葉・後葉の5期に細分し、それぞれの時期の特徴を述べる²⁾。なお、第58・第4号竪穴遺構は詳細な時期を決定できなかったことから、分析対象から除外している。

(1) 中期中葉

第44号竪穴建物跡の1棟と第1・2号竪穴遺構の2基が該当する。それらの遺構は、調査区中央部を囲むように分布している。竪穴建物の平面形は隅丸方形である。同時期の周辺地域での調査例では、平面形は不明確で、掘り込みも浅いものが多い³⁾。当遺跡の第44号竪穴建物跡は、壁の深さが確認面から最大64cmである。調査区西側からも、同時期の土器片が出土していることから、後世の土地利用などにより、当該期の遺構が湮滅した可能性がある。土器の様相は、変形工字文を施文する覆ヶ浦南部や千葉県北部に



第 271 図 弥生時代中期の集落変遷図

分布する天神原式の影響を受けた土器（第273図①・②）、鉢の外面に三角形の沈線で区画し、磨消縄文を用いた福島県南部の龍門寺式土器の影響を受けた土器（③・⑥）、沈線で楕円形を描き、区画内に附加条一種附加2条を施文した宮ノ台式直前段階の土器（④）、附加条1種附加2条を施文後、沈線で渦巻き文を描き、磨消縄文を用いる南御山2式並行の土器（⑤）が確認されている。いずれも磨消手法を用いており、北関東や南東北の影響を受けた土器が主流を占める。その他、北茨城市唐塚山遺跡から出土した、頸部に横走文を施文する足洗1式土器に類似する土器片も出土している。

(2) 中期後葉

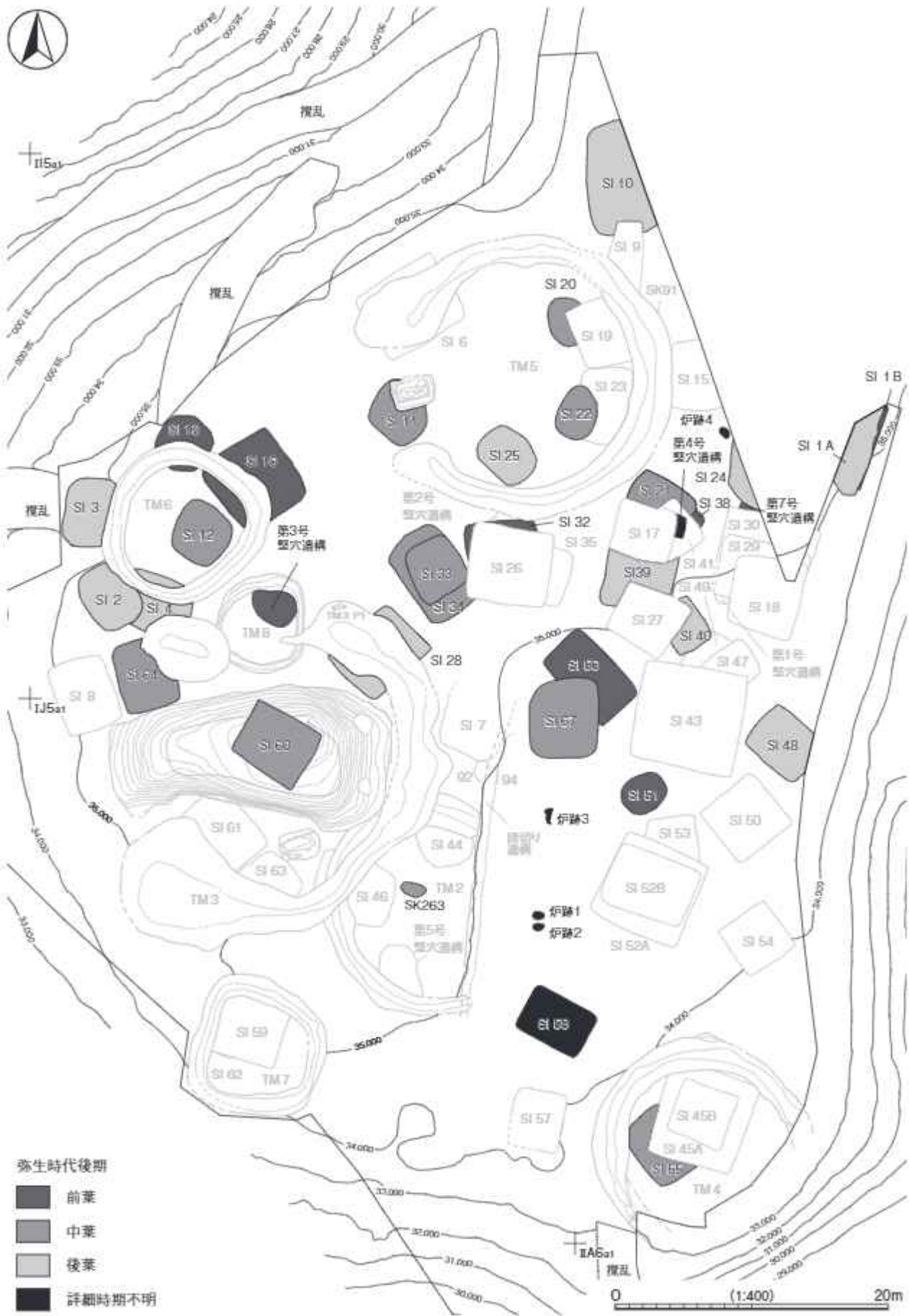
第23・35・47・49・53・62号竪穴建物跡の6棟、第91号土坑の1基が該当し、調査区南部と東部に分布している。竪穴建物の平面形は長方形で、規模などは重複のため明確ではないが、長軸2.67～5.46m、短軸2.15～4.10mで、かを持つ竪穴建物と持たない竪穴建物を確認している。掘り込みは確認面から10～30cmで、掘り込みの浅いものが大半である。周辺遺跡の調査例では、平面形が方形や長方形で、かを持つ建物と不定形でかや柱穴が明確でないものが確認されているが、どちらも掘り込みの浅いものである⁹⁾。調査区西部の遺物包含層や遺構外からは、足洗2～3式の土器片が多く出土しており、後世の土地利用により、当該期の遺構が湮滅した可能性がある。土器の様相は、単沈線で渦巻文を描く足洗1式土器は少なく、2本や3本の沈線で渦巻文を描く足洗2～3式が多く出土している（⑦・⑨）。当該期は、足洗式土器が急速に霞ヶ浦一帯や千葉県北部まで急拡大する時期と言われており、当該期でもその傾向を示している。また、中期末葉の遺構は確認できなかったが、口縁部に連弧文を施文する阿玉台北式や、頸部に横走文を施文する霞ヶ浦南岸を中心に分布する笹山式、口縁部に縦スリットを入れ、波状文を施文する板谷式、南関東系の口縁部から頸部にかけて縦スリットを入れ、その間を振幅の小さい波状文を施文する大崎台1式や宮ノ台式（⑩・⑪）の土器片が少量出土している。中期後半では、茨城県北部のほか、南関東や利根川下流域で出土する土器が確認できた。

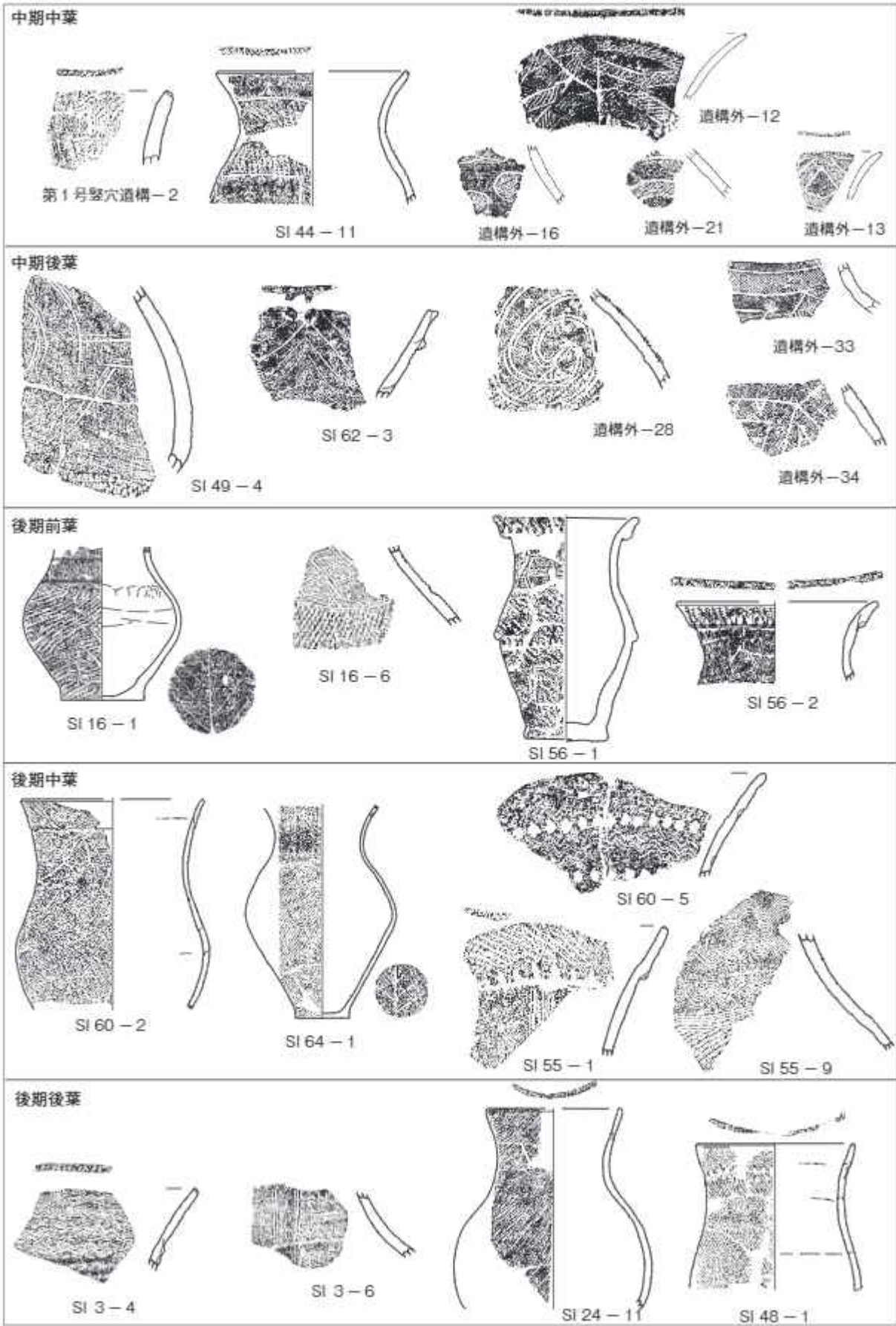
(3) 後期前葉

第1B・13・16・32・38・51・56号竪穴建物跡の7棟、第3・7号竪穴遺構の2基が該当し、調査区西部を囲むように弧状に分布している。同時期の竪穴建物に近接する遺構が存在することから、同時期に営まれたのは3棟前後と推測できる。竪穴建物の平面形は方形や長方形で、規模は方形の建物が一辺5.88～6.36m、長方形の建物が長軸3.28～6.36m、短軸が約2.76～4.45mである。土器の様相は、口縁部下端に縄文原体を押し出し、頸部に多条櫛歯による縦区画を入れ、波状文や横線文を施文する利根川下流域に見られる居代式の影響を受けた土器（⑭・⑮）、頸部に1本や3～4本の施文具による斜格子目の特徴とする霞ヶ浦南岸を中心に分布する根本1・2式の影響を受けた土器が出土している（⑯・⑰）。それに対し、那珂川流域を中心に分布し、霞ヶ浦沿岸や北浦周辺、行方市域でも多く確認されている東中根式土器は、細片が極少量出土したのみである。また、特筆すべき遺物は、第32号竪穴建物跡から出土した閃緑岩製の大型蛤刃石斧が挙げられる。

(4) 後期中葉

第11・12・20・21・22・33・34・55・60・64・67号竪穴建物跡の11棟、第263号土坑1基が該当し、調査区全体に分布している。南東部も後世の土地利用などにより、竪穴建物が湮滅した可能性もあるが、概ね調査区西部から北部を囲むように集落が形成されている。同時期の竪穴建物に重複関係が認められることから、2時期に細分できる可能性がある。竪穴建物の平面形は大半が長方形で、方形と楕円形が各1棟確認されている。規模は長方形の建物が長軸6.92～4.02m、短軸2.85～4.68m、方形の建物が一辺約4.00m、楕



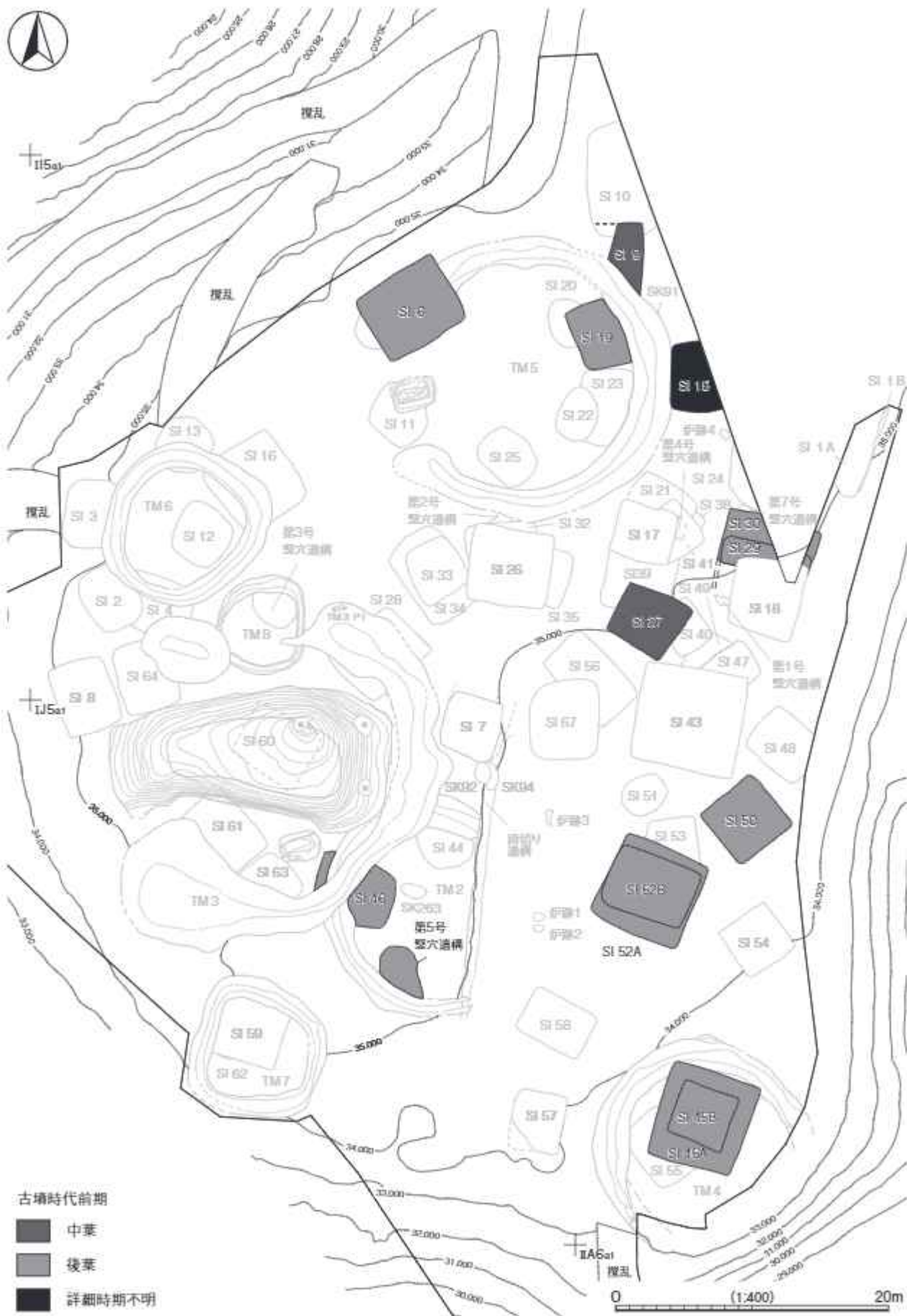


第 273 図 中城遺跡の弥生土器変遷図

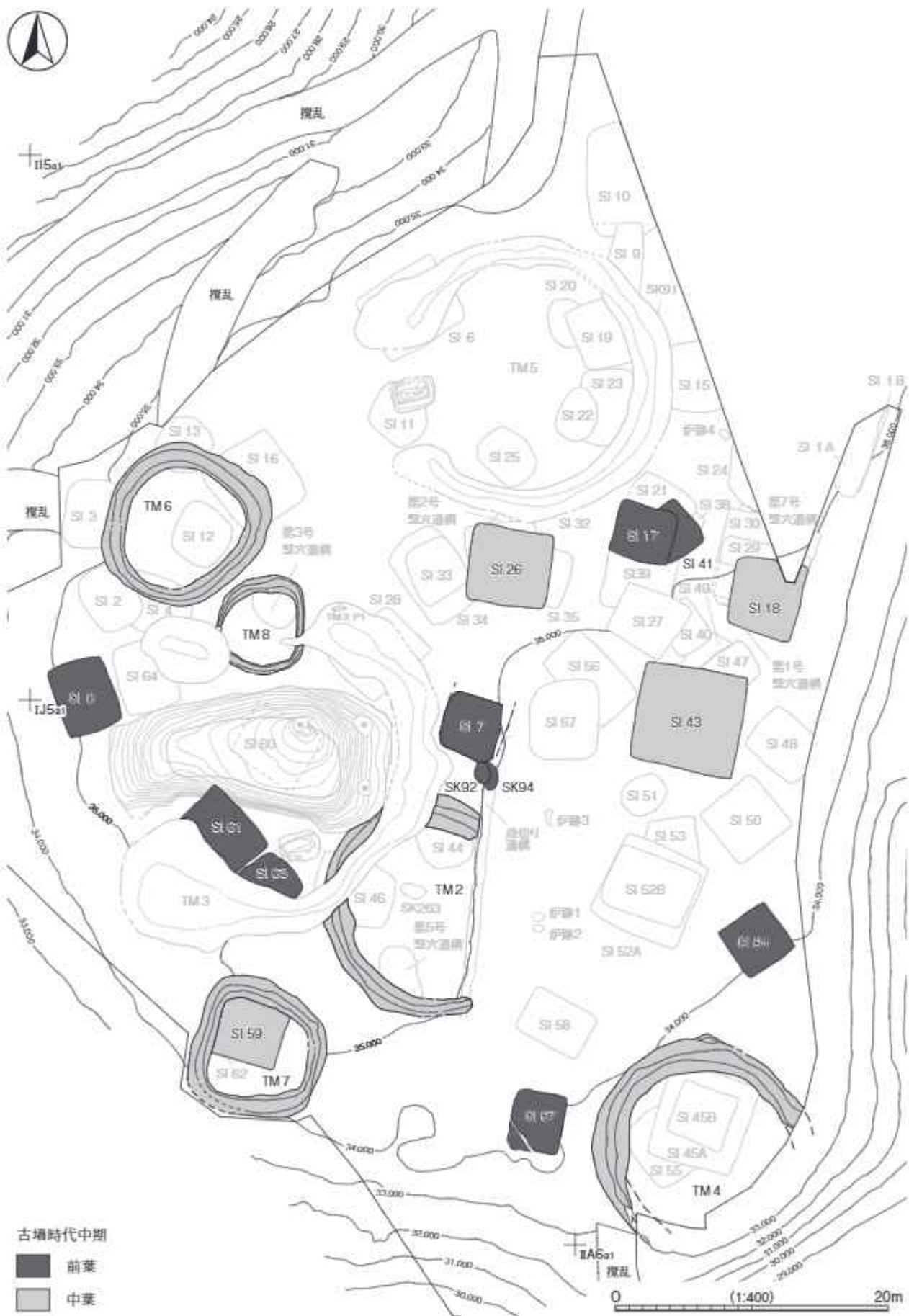
円形の建物が長径4.02 m、短径2.85 mで、長方形の建物に比べ、方形・楕円形の建物は一回り小さい。土器様相は頸部に多条橢円による波状文や横走文、山形文を器面に多段に施文するもの(⑱・⑲・㉑)から、器面に浅く、頸部の上端と下端のみに橢円状工具により施文するもの(⑳・㉒)へと変化しており、霞ヶ浦沿岸地域と同様な傾向が見て取れる。特徴的な遺構として、第33号竪穴建物跡が挙げられる。舟の周囲を土手状に盛土し、その上に手捏土器が埋め込まれたような状態で出土している。土器以外の遺物は、前段階に比べ、砥石、敲石、磨石、軽石、剥片、土製紡錘車などが多く出土している。また、祭祀具と考えられるミニチュア土器も多く出土している。

(5) 後期後葉

第1A・2・3・4・10・24・25・28・39・40・48号竪穴建物跡の11棟が該当し、調査区南部を囲むように調査区東部から西部にかけて分布している。同時期の竪穴建物に重複関係が認められ、また、近接するものが存在することから、2時期に細分できる可能性がある。竪穴建物の平面形は隅丸方形や隅丸長方形で、規模の差は認められない。土器の様相は、当該期の前半に主流を占めるのが根鹿北式(



第274図 古墳時代前期の集落変遷図



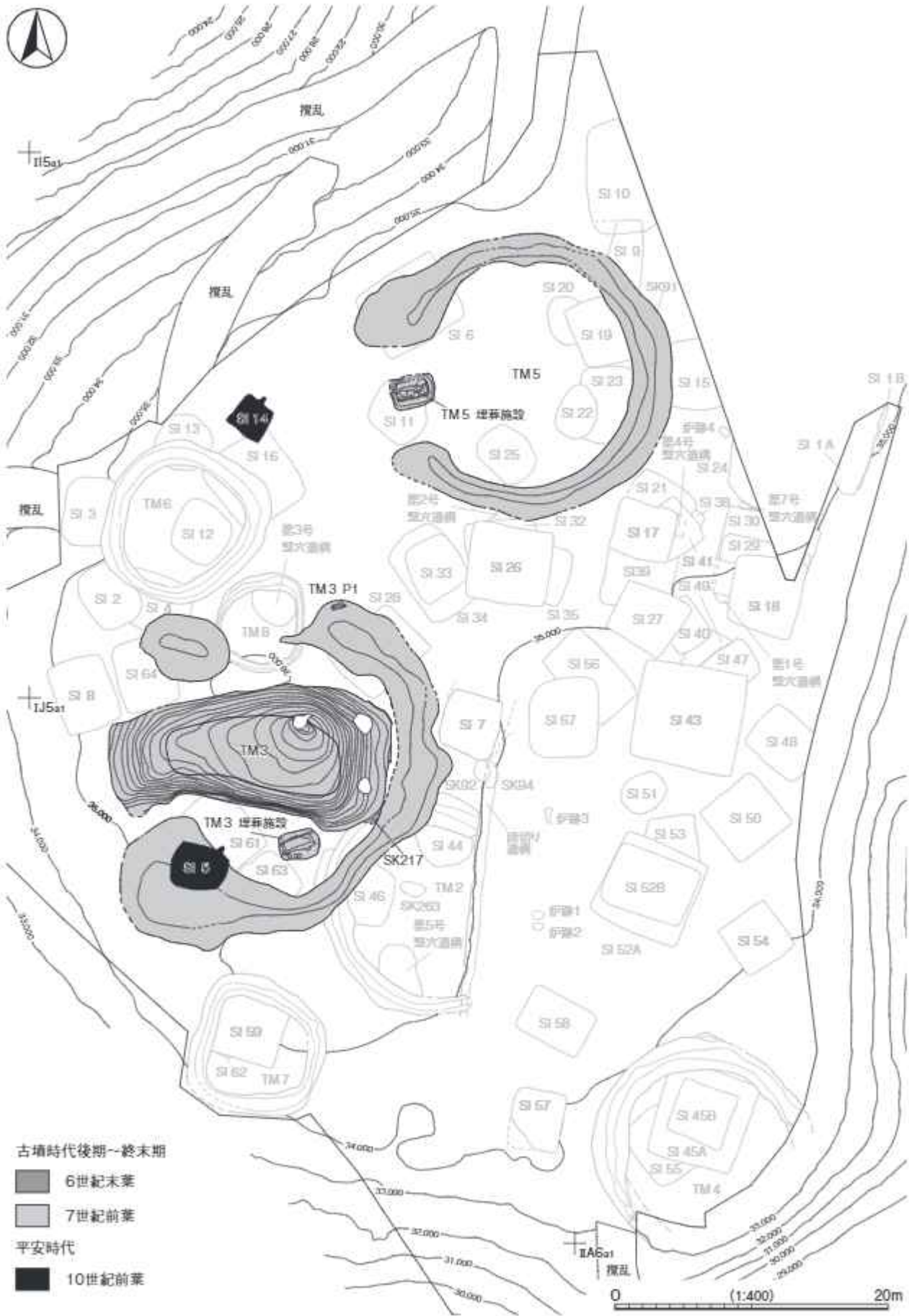
部を除いた部分に分布している。前段階に比べ、一回り内側に集落を形成している。同時期の竪穴建物に重複関係が認められることから、2時期に細分できる可能性がある。特徴的な遺構としては、第57号竪穴建物跡が挙げられる。本跡からは、10個体以上の甕と、同時に機能していたと考えられる3基の甕を確認している。台地端部の緩傾斜面に立地しており、甕が建物床面の半分を占めることから、居住以外に用いられた可能性がある。また、第61号竪穴建物跡と第63号竪穴建物跡の距離は15cmと近接しているが、出土土器からは時期差を見い出せなかった。遺物としては、第17号竪穴建物跡から鉄鍔が出土しているほか、ミニチュア土器が出土している。

(4) 中期中葉

第18・26・43・59号竪穴建物跡の4棟と第2・4・6・7・8号墳の古墳5基が該当する。竪穴建物跡は調査区南部と北部に分布している。台地端部の緩傾斜面に位置する第59号竪穴建物跡のピット内から大形砥石が出土しており、工房の可能性も考えられる。尾根上には同時期の古墳4基が存在しており、墓域と居住域を別けて選地した可能性がある。特徴的な遺物としては、第43号竪穴建物跡から須恵器の大甕を模倣した土師器の甕が出土している。胴部径は48cm以上で、多くの土師器片とともに、覆土中から破片の状態出土している。また、同時期の第2・6・8号墳や第18・26号竪穴建物跡の覆土中からも、同一個体の大型破片が出土していることから、意図的に壊して、各所に廃棄した可能性が考えられる。前段階では手捏土器やミニチュア土器の出土が目立ったが、当該期になるとミニチュア土器は姿を消して、石製模造品が出土するようになる。第26号竪穴建物跡からは、剣形模造品が床面に埋め込まれた状態で、また、第43号竪穴建物跡の床面からは、滑石製勾玉や有孔円板が出土している。石製模造品を用いた祭祀の導入とともに、墓域と居住域が近接して営まれている。中期の古墳群は、台地の尾根の先端上に位置し、南側の山田川を望んでいる。規模は周溝外径で12m以上と、それ以下に分けられる。規模の大きい第2・4・6号墳は、10～20m間隔で、台地尾根上に構築している。規模の小さい7号墳は方墳で、台地緩斜面部に、8号墳は第2号墳と第6号墳の間に構築している。古墳の構築時期は、第2号墳が周溝出土の椀から5世紀中葉、第6号墳は周溝出土のTK208型式の須恵器の高杯と土師器の埴から5世紀中葉（樺村編年Ⅱ～Ⅲ期の間、須恵器模倣蓋杯が出現する直前）と考えられる。8号墳も出土した椀からほぼ同時期と考えられる。7号墳は5世紀中葉の第59号竪穴建物跡を掘り込み、周溝出土の土師器の甕が5世紀代の特徴を残していることから、他の古墳と時期差はあまりないものと考えられる。第4号墳は時期を特定できないが、第2・6・8号墳と直線的に並んでいることや、第2号墳とはほぼ同じ規模であることから、5世紀中葉前後の時期と推測される。以上のことから、第2・4・6・7号墳は5世紀中葉の短期間に構築されたと考えられる。当古墳群が位置する山田川流域では、下流2kmの沖積地にうなぎ塚古墳が確認されている。同古墳は大正時代初期に湮滅したとされるが、現地踏査の結果、直径約23mの円形の区画がレンコン畑の中で確認できたことから、同古墳は円墳や帆立貝式古墳の可能性もある。同古墳からは利根川下流域の千葉県北部から茨城県南部に分布する滑石製の常総型石枕が出土しており、石枕の平面形態から5世紀後葉と推定されている⁵⁾。

(5) 後期～終末期

第3・5号墳の2基と第217号土坑の1基が該当し、調査区西部と北部に分布している。今回の調査では5世紀中葉以降、人々の活動の痕跡は確認できなかったが、6世紀後葉から末葉の第217号土坑の存在から、後期末から再び台地上の土地利用が始まる。第3・5号墳ともに総長22～25mの前方後円墳（帆立貝式）で、前方部西側の周溝は確認できなかった。第3号墳の前方部端は傾斜面に接続していることから、当初から周溝が存在しなかった可能性が高く、第5号墳も当初から馬蹄形の周溝であったと考えられる。埋葬施設は第



第276図 古墳時代後期～終末期と平安時代の遺構変遷図

3号墳が後田部南寄り、第5号墳は前方部東側に位置している。墳丘中心から外れた位置に埋葬施設を構築する常総型古墳（変則的古墳）の特徴を示している。また、埋葬施設は筑波山系雲母片岩の板石を用いた箱式石棺で、両古墳とも石棺材を全て抜き取った上で、周溝内に破碎して廃棄している。第3号墳では、周溝の各所から、破碎された須恵器とともに、玉類や鉄鏃、馬具などが散在して出土している。これらの行為から、盗掘や石材の再利用のために石棺を壊している可能性は低い。構築時期は、両古墳ともに出土遺物から7世紀前葉と考えられる。また、埋葬施設が破壊された時期は、第3号墳の周溝から出土した石棺材の直上から10世紀前葉の土師器の高台付碗が出土していることから、10世紀前葉と推測される。当遺跡の北側に位置する武田川流域では、近年の調査により中流域までは古墳時代後期以降の集落が展開していることが確認できたが⁶⁾、山田川流域では確認されていない。古墳時代後期以降の集落は、山田川下流域の両岸、北浦に面する台地上に拠点的な集落が営まれ、山田川上・中流域の両岸には、古墳時代中期から終末期までの古墳群が築造されているものと考えられる。

5 平安時代（第276図）

竪穴建物跡2棟を確認した。時期はどちらも出土遺物から10世紀前葉と考えられる。第5号竪穴建物跡は、調査区西部の第3号墳の周溝を掘り込んでいる。第14号竪穴建物跡は調査区北西部に位置している。古墳の羨道部は確認出来なかったが、両竪穴建物跡は、両古墳の埋葬施設の主軸ライン上に位置していることから、意図的に羨道部の入口付近に構築した可能性が考えられる。出土遺物から石棺の破壊時期と竪穴建物跡の営まれた時期が同時期であり、竪穴建物の構築と石棺の破壊は密接に関連する可能性が推測できる。両跡ともに竈焼部の被熱が少ないことから、短期間の居住の可能性もある。

6 江戸時代 17世紀前半から19世紀前半（第277・278図）

掘立柱建物跡8棟、竪穴遺構1基、段切状遺構1か所、土坑7基、道路跡1条、溝跡7条、柱穴列6条、井戸跡1基、土坑墓2基、粘土貼土坑4基、不明遺構3基を確認した。中心となる時期は、出土遺物などから17～19世紀前半であるが、重複関係から5期に細分した。

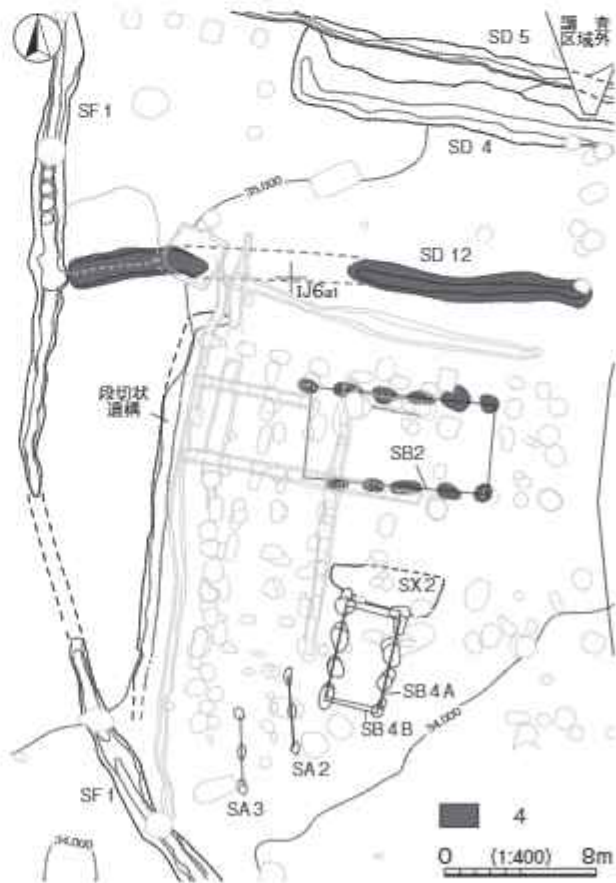
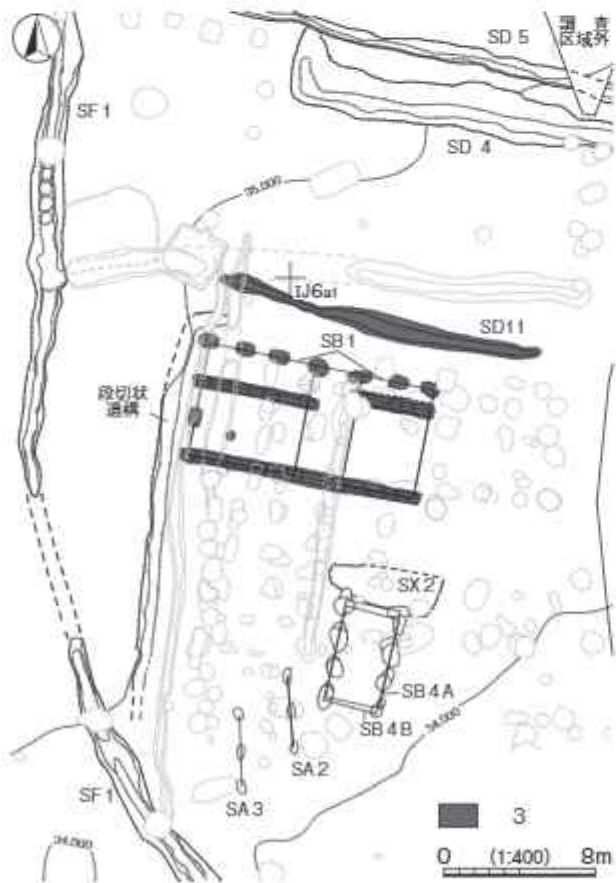
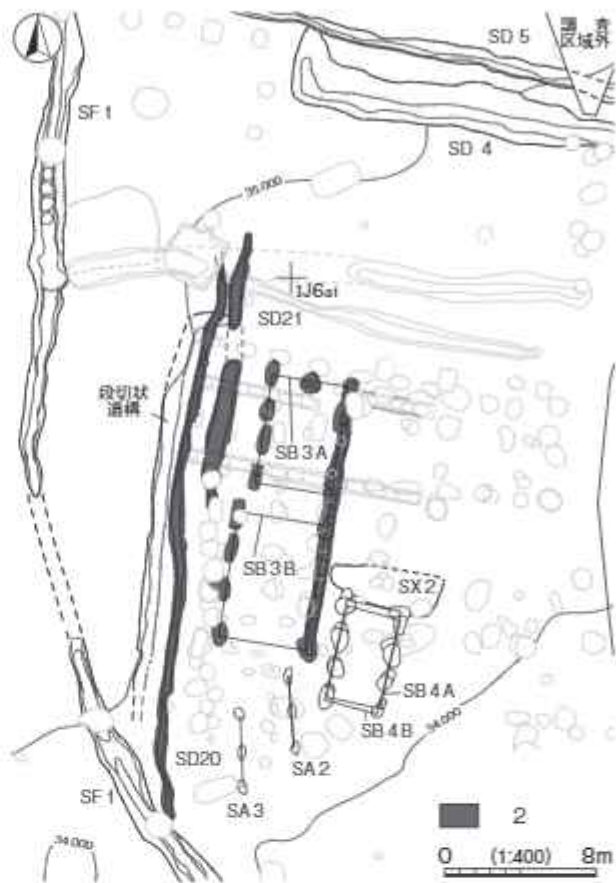
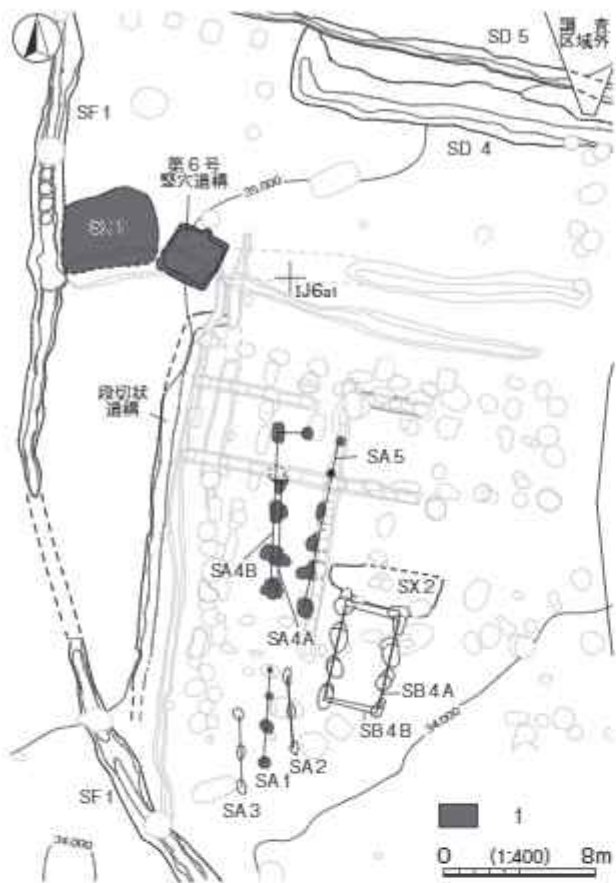
ここでは、主な遺構を取り上げ、それぞれの時期の特徴を述べる。なお、1～4期は17世紀前半から18世紀後半で、5期は18世紀後半から19世紀前半である。

(1) 1期

第1号段切状遺構、第1・4A・4B・5号柱穴列、第6号竪穴遺構、第1号不明遺構が該当する。まず17世紀前半に台地南東部の台地整形により、第1号段切状遺構や第1・4・5号柱穴列を構築している。第4A・4B・5号柱穴列は、本来、掘立柱建物であった可能性が考えられる。両跡の構築順は不明であるが、第1号段切状遺構と軸が揃う第5号柱穴列が古く、第1号柱穴列と軸が揃う第4A・4B号柱穴列が新しい可能性が考えられる。第1号不明遺構、第6号竪穴遺構は遺構の重複から当該期に構築されたと考えられる。

(2) 2期

第3A・3B・5A・5B号掘立柱建物跡、第20・21号溝が該当する。第3A・3B号掘立柱建物跡は、第1号段切状遺構とは軸を揃える掘立柱建物で、両跡の桁行を布掘り地業の可能性のある溝で揃えたような構造の建物である。一般的に布掘り地業は、重たい壁や天井を持つ建物にみられるが、両跡では東桁行のみが布掘り状であることから、建物の性格に言及することはできない。また、第3A・3B号掘立柱



第 277 図 江戸時代 (1~4 期) 遺構変遷図

建物跡と第1号段切状遺構の間に細い溝を確認したが、幅の狭い道路や雨落ち溝の可能性はある。また、調査区北部で確認した第5A・5B号掘立柱建物跡は、出土遺物から同時期と考えられ、第1号道路跡と並行していることから、第1号道路跡を意識して構築された可能性がある。

(3) 3期

第1号掘立柱建物跡と第11号溝跡が該当する。第1号掘立柱建物跡は、第1号段切状遺構とはほぼ直交している。南桁行と北桁行の南側の3か所で布掘り地菜の可能性のある溝が確認されている。当初は、第3A・3B号掘立柱建物跡と同様に、南壁を描いた2棟の建物の梁を北側に一間拡張して1棟の建物に改築した可能性もあるが、詳細については不明である。また、第11号溝跡は、出土遺物から第1号掘立柱建物跡とはほぼ同時期であり、建物の北側を区画する溝の可能性はある。

(4) 4期

第2号掘立柱建物跡と第12号溝跡が該当する。第2号掘立柱建物跡は、第1号掘立柱建物の東側に位置し、軸はややずれているが第1号掘立柱建物跡と同じ東西棟である。第12号溝跡は、第11号溝跡の北側に位置し、西側では第11号溝跡とはほぼ接している。また、第2号掘立柱建物跡と並行していることから、第11号溝跡と同様に建物の北側を区画する溝の可能性はある。

(5) 5期 (第278図)

第1号井戸跡と多数の土坑が該当する。規模が長径・長軸0.9～1.2m前後、短径・短軸0.7～1.0m、平面形が円形と方形で、人為的に埋め戻していることが多い。このような土坑のうち、骨粉や煙管が出土したものは土坑墓として扱ったが、遺物が出土しなかったものも墓の可能性はある。周辺遺跡の調査例では、直線的に土坑墓が配列されている例や、多数の土坑がある中で少数の土坑からのみ人骨が出土する例、埋もれた溝跡に掘り込む例などが報告されており⁷⁾、当遺跡の状況に共通している。時期については、ほかの遺構との重複関係などから、18世紀後半以降の江戸時代と推測でき、台地の北部と東部は墓地として利用されたものと考えられる。17世紀前半に掘立柱建物群が構築された背景として、行方地方の領主が大きく変動した影響が考えられる。当遺跡が所在する北高岡地区は17世紀前半の寛永八年(1631年)に、旗本新庄氏から麻生藩の小規模な飛び地として統治されることになった。寛永八年以降、藩による北高岡地区で実施された検地では、水田の増加部分はほとんどなく、当遺跡から江戸時代の遺構・遺物が確認できる17世紀前半には、すでに平地は水田として開発されつくした後であることがわかる⁸⁾。北高岡地区は、南側の山田川沿いや谷部を除き、大半が山林であることから、山林開発などの拠点や、藩の有力者による統治の拠点として掘立柱建物群が経営された可能性がある。それらからは日常雑器に加えて、天目茶碗や香炉、有耳壺、灯明皿、多くの砥石や鍛冶関連遺物などが出土していることから推測できよう。18世紀後半以降、建物はなくなるが、第1号井戸跡からは19世紀前半の遺物とともに、常滑産大甕や天目茶碗なども出土している。19世紀前半の幕藩体制の動揺期までは、山林開発や統治の拠点としての機能は維持されていたものと考えられる。

7 その他

時期不明の道路跡1条や塚1基を確認した。参謀本部陸軍部測量局が明治13～19年に作成した『第1軍管区地方2万分の1迅速測図』には、台地中央部を北から南東方向に向かって、途中つづらに折れながら現県道山田玉造線に出る里道が記載されている。第1号道路跡がこの里道に該当すると考えられる。本跡は、18世紀以前に構築され、一時の廃絶を経ながらも現代まで使用されていたことが確認できた。また、



第278図 江戸時代(5期)の遺構分布状況図

本跡が江戸時代からの位置を保っていると考えれば、第1号塚の南裾部と尾根急斜面の間の狭い場所を
通っていることから、第1号塚がすでに存在していた可能性も考えられる。以上のことから、第1号塚の構
築時期が江戸時代まで遡る可能性もあるが、時期と性格を推測できるような遺物や地元では第1号塚に関す
る伝承はなく、詳細は不明である。

8 おわりに

これまで、中城遺跡・中城古墳群の各時代の様子を概観してきた。旧石器時代から江戸時代まで、断続
的に土地が利用されてきたことが確認できた。特に弥生時代～古墳時代中期の集落跡、中期と終末期の古
墳群、江戸時代の掘立柱建物群の存在など、当地域では貴重な調査例となった。今後の検討課題も多々あ
るが、今回の報告が当地域における研究の一助となれば幸いである。

註

- 1) a 小玉秀成「霞ヶ浦沿岸の弥生文化―土器からみた弥生社会―」1998年10月 霞ヶ浦町郷土資料館
 b 南老淳松「藤原式土器概説―霞ヶ浦沿岸の弥生後期後半の土器群―」『霞ヶ浦沿岸の弥生文化―土器からみた弥生社会―』1998年10月
 霞ヶ浦町郷土資料館
 c 南老淳松「茨城県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』第9回東日本埋蔵文化財研究会 福島大会 2000年1月
 d 茨城県考古学協会 土王町教育委員会「茨城県における弥生時代研究の到達点―弥生後期の集落構成から―」
 土王台式土器制定60周年記念シンポジウム
 e 浅井哲也「茨城県における古墳前期の土器」『領域の研究』阿久津久先生還暦記念論文発行委員会 2003年3月
 『柏瀬祐己「茨城県南部における古墳出現期の集落出土土器編年」』『駿台史学』第174号 2022年2月 駿台史学会
 g 櫻村宣行・土生部治・白石良理「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 1999年5月
 h 櫻村宣行「和泉式土器編年考」『研究ノート』第5号 財団法人茨城県教育財団 1996年6月
 i 佐々木美樹「茨城県北平分における土師器輪の型式変遷」『豊良崎考古』第21号 豊良崎考古同人会 1995年5月
- 2) 弥生後期中葉と後葉の時期区分は、土王台式と共存する根成北式以降を後期後葉としている。
- 3) 石橋美和子 新垣浩貴『小林遺跡』2009年3月 財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団ほか
- 4) a 関口謙 福田礼子『根成北遺跡・栗山遺跡』1997年3月 土浦市教育委員会
 b 小玉秀成「山口遺跡出土弥生時代中期後半資料」『玉里村史料館報』VOL.11 玉里村史料館 2006年2月
- 5) 永山はるか「常盤地域における石杖の変遷に関する一討論」『駒沢史学』第82号 2014年3月 駒沢大学史学会
- 6) 根本佑「東関東自動車道水戸線(湖東-新田)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 那ノ平古墳群 一本塚遺跡」
 茨城県教育財団文化財調査報告書第488集 2021年3月
- 7) 山田地区遺跡発掘調査会「茨城県行方郡北浦村 山田地区遺跡発掘調査報告書 今山遺跡・平遺跡・六台遺跡・古塚遺跡・古塚遺跡・風遺跡」
 1990年8月 山田地区遺跡発掘調査会
- 8) 北浦町史編さん委員会『北浦町史』2004年12月

付 章 自 然 科 学 分 析

I 中城遺跡・中城古墳群の金属製品保存処理・自然科学分析・AMS年代測定・炭化材樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

中城遺跡・中城古墳群は茨城県行方市北高岡に所在し、遺跡は南に山田川を臨み、小支谷によって侵食された行方台地上に立地する。行方台地は、貝塚ほか編（2000）により常陸台地の上位台地Cという地形面に区分されている。常陸台地の主体を占める上位台地Aは、下末吉海進により形成された海成面（酸素同位体ステージ5e：約125万年前）であり、上位台地Bは南関東の小原台面相当の海成面（酸素同位体ステージ5c：約10万年前）とされ、上位台地Cは下末吉海進後の海退によって形成された厚い河成堆積物からなる地形面とされている。上位台地Cの具体的な離水年代は示されていないが、地形発達史的には、9万年前に離水した武蔵野台地のM1面（遠藤ほか,2019）に対比されるものであろう。

本報告では、採取された試料に対してそれぞれテフラ検出同定、重鉱物・火山ガラス比分析、樹種同定、放射性炭素年代測定、使用痕分析を実施する。

2 自然科学分析

(1) 試料

試料は、土壌11点、炭化物8点、右肩扇状石器1点である。各試料に対して実施する自然科学分析試料一覧（ア）～（エ）を表1に示す。

性状	分析	試料名		
土壌	テフラ検出同定	424-099-21	テストビット1	サンプル00
土壌	テフラ検出同定	424-099-21	テストビット1	サンプル01
土壌	テフラ検出同定	424-099-21	テストビット1	サンプル08
土壌	重鉱物組成・火山ガラス比	424-099-21	テストビット1	サンプル03
土壌	重鉱物組成・火山ガラス比	424-099-21	テストビット1	サンプル04
土壌	重鉱物組成・火山ガラス比	424-099-21	テストビット1	サンプル09
土壌	重鉱物組成・火山ガラス比	424-099-21	テストビット1	サンプル21
土壌	重鉱物組成・火山ガラス比	424-099-21	テストビット1	サンプル23
土壌	重鉱物組成・火山ガラス比	424-099-21	テストビット1	サンプル25
土壌	重鉱物組成・火山ガラス比	424-099-21	テストビット1	サンプル27
土壌	重鉱物組成・火山ガラス比	424-099-21	テストビット1	サンプル29

性状	分析	試料名				
炭化物	AMS年代測定	No. 1 (H1 No. 7)	SI 1 B	遺物番号1	弥生後期前葉	01
炭化物	AMS年代測定	No. 2 (H1 No.25)	SI 12	遺物番号1	弥生後期中葉	01
炭化物	樹種同定	No. 3 (H1 No.				

表1 自然科学分析試料一覧(ウ)

性状	分析	試料名		
炭化物	AMS年代測定	No.7 (旧424-099-21)	炭化物集中地点	No.1110
炭化物	AMS年代測定	No.8 (旧424-099-21)	炭化物集中地点	No.54

表1 自然科学分析試料一覧(エ)

性状	分析	試料名		
右肩扇状石器	使用痕分析	424-100-21	TM5周溝6区	No.224

(2) 分析方法

① テフラ同定分析

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分である Y 字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

② 重鉱物・火山ガラス比分析

試料約 40g に水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250 メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が 1/16mm より小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径 1/4mm-1/8mm の砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約 2.96 に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述したテフラ分析に従う。また、火山ガラス比における「その他」とは、軽鉱物分における火山ガラス以外の粒子（石英や長石類などの鉱物粒子および風化変質粒など）である。

③ 樹種同定

炭化材試料から剃刀等を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の各断面を作成する。実体顕微鏡や走査型電子顕微鏡で観察し、木材組織の種類や配列を観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述したテフラ分析に従う。また、火山ガラス比における「その他」とは、軽鉱物分における火山ガラス以外の粒子（石英や長石類などの鉱物粒子および風化変質粒など）である。

④ 放射性炭素年代測定

試料は、周囲に付着した土壌等の付着物等を取り除き、調整する。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1 mol/L である。しかし、試料が脆弱な場合、炭素の損耗が激しく、分析に必要な炭素量が得られない場合がある。このため、試料によってはアルカリの濃度を薄めて処理を行う (AaA と記載)。真空ラインを用いて、試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) を行う。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1 mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) を測定する。AMS 測定時に、米国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX- II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。δ 13C は試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。また、暦年校正用に 1 桁目まで表した値も記す。暦年校正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (14C の半減期 5730 ± 40 年) を校正することによって、暦年代に近づける手法である。校正用データベースは、IntCal20 (Reimer et al. 2020) を用いる。暦年校正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk 2009) である。

⑤ 使用痕分析

肉眼や野外用ルーペを用いた観察と、キーエンス社製マイクロスコープ (VHX-8000) を用いて石器の観察をそれぞれ行う。使用痕の観察に際しては、原田 (2013) や原田 (2020) を参考とする。図版 4 に、マイクロスコープ撮影位置、光沢の度合い、線状痕の方向を示す。光沢の度合いは、落斜光を照射して、●：光沢強、◎：光沢中、○：光沢少、×：光沢なしに分類する。

(3) 結果

① テフラ検出同定

結果を表 2 に示す。処理後の砂分は、3 点ともに白色を呈する石英や長石類の鉱物片からなり、3 点の試料からは、スコリア・火山ガラス・軽石のいずれも全く認められなかった。

表 2 基本層序・炭化物集中地点のテフラ分析結果

層名	試料番号	スコリア	火山ガラス	軽石
		量	量	量
IV	4			
V	7			
VI	10			

凡例 : 含まれない。

② 重鉱物・火山ガラス比分析

結果を表 3、図 1 に示す。重鉱物組成は、試料番号 13～17 と試料番号 25 以下とで大きく異なり、試料番号 19～23 は両者の組成の漸移的な組成を示す。試料番号 25 以下では、カンラン石と斜方輝石が同量程度に多く、他に少量の不透明鉱物と微量の単斜輝石および角閃石が含まれる。試料番号 19～23 では、斜方輝石が多く、中量～微量のカンラン石が含まれるが、上位ほどカンラン石が減少し、斜方輝石が増加する傾向が顕著に認められる。他に微量の単斜輝石と少量の不透明鉱物が含まれるが、これらの鉱物の量比の層位的な変化は小さい。試料番号 13～17 では、斜方輝石が非常に多く、60～70% を占め、次いで

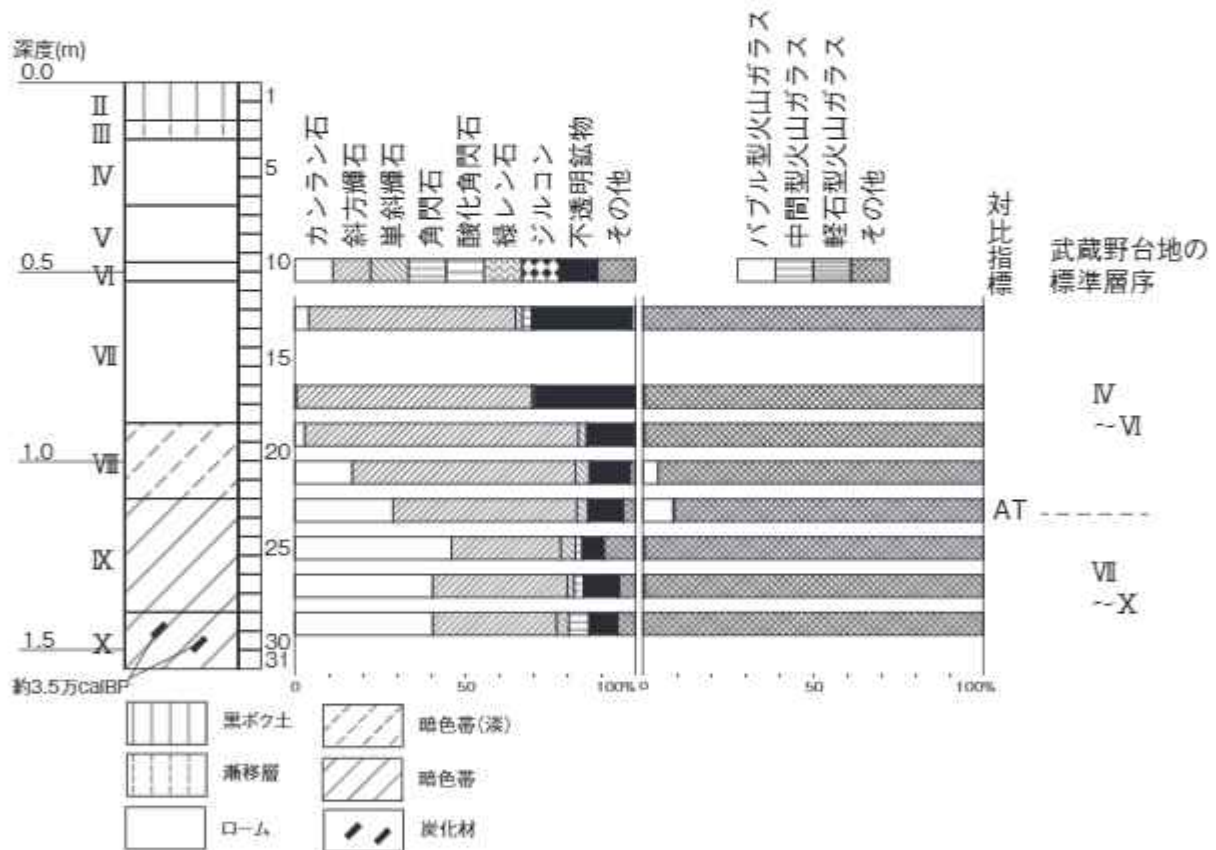
不透明鉱物が30%程度を占める。他には微量のカンラン石と単斜輝石および角閃石が含まれる。

火山ガラス比では、試料番号21と23に少量の無色透明のバブル型火山ガラスが認められる。下位から見て試料番号23における火山ガラスの出現はやや急であり、上位に向かって減少する傾向が認められる。他の層位には、火山ガラスはほとんど含まれない。

表3 基本層序・炭化物集中地点の重鉱物・火山ガラス比分析結果

層名	試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑閃石	ジルコニ	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
II	13	10	152	5	7	0	0	0	73	3	250	0	0	0	250	250
	17	1	173	1	2	0	0	0	73	0	250	1	0	0	249	250
III	19	7	201	6	1	0	0	0	34	1	250	1	0	0	249	250
	21	42	164	10	1	0	0	0	29	4	250	11	0	0	239	250
IV	23	72	135	8	1	0	0	0	25	9	250	22	0	1	227	250
	25	115	80	11	5	0	0	0	16	23	250	1	0	0	249	250
V	27	101	99	5	7	0	0	0	26	12	250	1	0	0	249	250
	29	101	91	9	15	0	0	0	21	13	250	0	0	0	250	250

図1 基本層序・炭化物集中地点の重鉱物組成および火山ガラス比



③ 樹種同定

結果を表4に示す。検出された試料は、針葉樹1種類（スギ）、広葉樹3種類（クリ、クワ属、カエデ属）であった。以下に検出された種類の、木材解剖学的特徴を述べる。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1～10細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔間部は3～4列、孔間で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・クワ属 (Morus) クワ科

環孔材で、孔間部は3～5列、晩材部では単独または2～4個が複合して配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。

・カエデ属 (Acer) カエデ科

散孔材で管壁は薄い。単独および2～3個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状。放射組織は同性、1～5細胞幅、10～30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

表4 炭化材樹種同定結果

No.	遺構番号	旧番号	遺物番号	遺構時期	樹種	備考
1	SI 1B	7	1	弥生後期中葉	不明(微細)	6F 14C
2	SI 12	25	1	弥生後期中葉	クワ	6F 1 14C
3	SI 32	21	1	弥生後期中葉	スギ	覆上下層
4	SI 21	41	1	弥生後期中葉	クワ	6F
5	SI 54	51	1	5世紀前半	カエデ属	床面
6	SI 57	101	1	5世紀前半	クワ属	床面 材材
7	424-099-21	炭化物集中地点	No1110	旧石器	スギ	14C
8	424-099-21	炭化物集中地点	No54	旧石器	スギ	14C

④ 放射性炭素年代測定

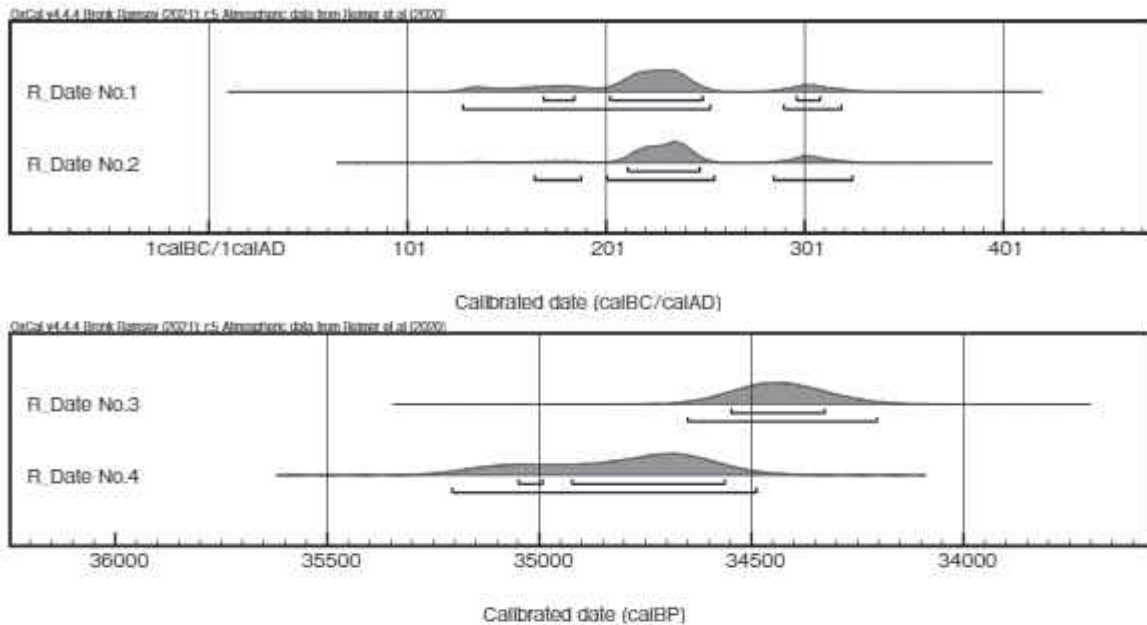
結果を表5、暦年校正結果を図2に示す。測定を行った試料は、No. 1 (試料名No. 7) SI 1B、No. 2 (試料名No.25) SI 12、No. 3 (試料名No.7) 炭化材集中地点、No. 4 (試料名No.8) 炭化材集中地点の炭化物4点である(以下各分析試料はNo. 1、No. 2、No. 3、No. 4とする)。同位体補正を行った値は、No. 1が 1825 ± 20 BP、No. 2が 1820 ± 20 BP、No. 3が 30000 ± 130 BP、No. 4が 30400 ± 130 BPを示す。校正暦年代の 2σ の値は、No. 1が2世紀前半～4世紀前半、No. 2が2世紀後半～4世紀前半、No. 3が34650～34204 calBP、No. 4が35204～34489 calBPを示す。

表5 放射性炭素年代測定結果

分析No.	試料名	方法	補正年代 BP (暦年校正用)	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年校正年代										Code No.	
					年代値											確率%
1	No.1 (旧No.7)	無処理	1825 ± 20 (1827 ± 21)	-25.17 ± 0.37	σ	cal AC	169	-	cal AC	185	1781	-	1766	calBP	6.8	YU-17292
						cal AC	203	-	cal AC	249	1748	-	1701	calBP	55.7	
						cal AC	297	-	cal AC	308	1654	-	1642	calBP	5.7	
					2σ	cal AC	129	-	cal AC	253	1822	-	1697	calBP	84.1	
					cal AC	290	-	cal AC	319	1660	-	1631	calBP	11.3		
2	No.2 (旧No.25)	AAA	1820 ± 20 (1818 ± 20)	-30.61 ± 0.50	σ	cal AC	212	-	cal AC	248	1739	-	1703	calBP	68.3	YU-17293
					2σ	cal AC	165	-	cal AC	188	1786	-	1762	calBP	3.3	
						cal AC	201	-	cal AC	255	1749	-	1695	calBP	74.3	
						cal AC	285	-	cal AC	325	1665	-	1626	calBP	17.8	
3	No. 7 424-099-21	AAA	30000 ± 130 (29975 ± 125)	-28.31 ± 0.41	σ	cal BC	32599	-	cal BC	32378	34548	-	34327	calBP	68.3	YU-17294
					2σ	cal BC	32701	-	cal BC	32355	34650	-	34204	calBP	95.4	
						cal BC	33100	-	cal BC	33044	35049	-	34993	calBP	6.5	
						cal BC	32974	-	cal BC	32614	34923	-	34563	calBP	61.8	
					cal BC	33255	-	cal BC	32540	35204	-	34489	calBP	95.4		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基準として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸-アルカリ-酸処理を示す。AAはアルカリ濃度を薄めて処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用。
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 校正データベースはIntcal20を使用。
- 8) 校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

図2 暦年校正結果



⑤ 使用痕分析

マイクロスコープによる撮影写真を図版5に示す。背面には刃部に段差が認められ、段差に沿って、帯状の光沢が認められる（図版5-1・-2）。背面は刃部に分布する光沢の範囲が広いが、その範囲は不明瞭である（図版5-3～-6）。帯～パッチ状の光沢が認められる。

(4) 考察

① 基本層序の層序対比

基本層序の分析結果では、少量ながらも火山ガラス比分析で認められた試料番号21と23のバブル型火山ガラスが有効な対比指標となり得る。この火山ガラスは、産出層位と形態により、鹿児島湾奥部の始良カルデラを給源とする始良Tnテフラ（AT:町田・新井,1976）に由来する。本地点におけるATの産状は、IX層上部でATが降灰し、後にVIII層下部形成時に攪乱と再堆積を繰り返したことを示唆している。このように土壤中に特定テフラが混交して産出する場合はテフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にはほぼ一致するとされている（早津,1988）。それに従えば、本地点のATの降灰層準は試料番号23の直下のIX層上部付近に推定される。これまでの分析事例では、ATの降灰層準は、武蔵野台地の立川ローム層標準層序のVI層とVII層の層界付近（VI層最下部またはVII層最上部）に推定されることが多い。したがって、本地点のIX層以下は、武蔵野台地の立川ローム層の標準層序のVII層以下の層位に概ね対比され、本地点のVIII層以上は、武蔵野台地の立川ローム層のVI層以上の層位に対比されるといえる。なお、ATの噴出年代については、水月湖の年縞堆積物の研究により、暦年で3.0万年前であることが確定している（Smith et al.,2013）。

ローム層の重鉱物組成の層位的な変化については、武蔵野台地の立川ローム層における多数の分析事例により、層序対比の指標になることが、矢作・橋本（2012）により示されている。茨城県内の常陸台地についても、これまでの分析事例との比較から類似する重鉱物組成の層位的変化が認められている。特にATの降灰層準を基準とすれば、ATより下位ではカンラン石と斜方輝石が同量程度、ATより上位では斜方輝石が圧倒的に多く、AT降灰層準付近では下位の組成から上位の組成への移行的な組成という本地

点のパターンは茨城県内各地の常陸台地上のローム層で認められている。今後、常陸台地の各地で同様の重鉱物組成が認められるようになれば、重鉱物組成も重要な対比指標となり得る可能性が高いと考えられる。

② 炭化材について

スギは水に強く、割裂性が良くて曲げに強い。また大径木が得られる良材であることから、建築材や器具材などさまざまな用途に使われる。クリは、重硬で強度があり、水湿に強く加工が容易であることから、建築材や器具材に用いられる。また、火持ちが良く、火力もあることから薪炭材としても良材である。クワ属の木材は緻密で硬く、木目が美しいことから、指物などの器具材として使われる。カエデ属の木材は、重硬で粘りがあるため、器具材などの用途に向く。

スギは多湿を好み、河口近くの低地や谷沿いなどに分布する。クリやクワ属、カエデ属は明るい林地を好み、人家近くにいわゆる「里山林」を構成する。遺跡の立地から考えてこれらの樹木は遺跡付近に自生していたとみられる。

跡から出土した炭化材は No. 1 が弥生後期前葉、No. 2 が弥生時代後期中葉という所見が示されている。年代測定の結果は、所見を支持する結果であると言える。なお、No. 2 の樹種であるクリは、遺跡付近で入手しやすい木材であり、住居構築材や燃料材などとして使用された可能性があると考えられる。出土木製品用材データベース（伊東・山田編 2012）をみると、県内の弥生時代の遺跡では、クリやコナラ亜属の炭化材が多く認められる傾向にある。

炭化物集中地点から出土したスギと同定した炭化材（No. 7、No. 8）2 点の年代値は暦年で約 35 万年前を示すが、この時期は最終氷期の中でも比較的温暖な時期にあたる酸素同位体ステージの MIS3 に相当する。当時の多湿な場所に生育していたスギであると思われる。

③ 石器の使用痕について

観察対象とした右肩扇状石器の機能について、これまで土掘具や浅耕除草具など諸説あったが、イネ科植物の切断具であることが明らかにされている（原田 2015）。

右肩扇状石器を包括する分類概念としての大型直縁刈石器の使用痕の特徴は、①刃縁に沿って光沢が発達し光沢範囲の中央部で最も発達する。②刃縁の表裏対称に光沢面が形成される。③点状の光沢面が連続しながら発達し、高低所を覆うようになめらかな光沢面が形成される。④線状痕は比較的明瞭で、刃縁と並行するものが主である。の 4 点である（原田 2015）。推定される使用方法は、刃部を平行方向に操作し、引き切るように切断する操作である。刃縁から比較的奥まで光沢が形成されていることから、厚みのある植物の束などの切断に用いられたと推定される。

本分析調査で観察対象とした右肩扇状石器には、線状痕および光沢が観察された。上記の使用痕の特徴②に該当する光沢が観察された。背面は刃部に平行する小規模な帯状の、腹面には刃部に平行する小規模な帯～パッチ状の光沢が見られる。なお、今回の分析では上記の特徴①、③、④は該当するものは観察されなかった。特に①、③の光沢面の範囲については、石器が廃棄された後の風化の影響の可能性もあるが、現時点では不明である。今後も同種の石器の使用痕の観察記載の蓄積により、使用方法や作業対象物の推定に関する情報が蓄積されると期待される。

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*,51,337-360.
- 遠藤邦彦・千葉達朗・杉中佑輔・須貝俊彦・鈴木毅彦・上杉 隆・石綿しげ子・中山俊雄・舟津太郎・大里重人・鈴木正章・野口真利江・佐藤明夫・近藤玲介・堀 伸三郎,2019, 武蔵野台地の新たな地形区分. *第四紀研究*, 58,353-375.
- 原田 幹,2015, 石器使用痕からみた東アジアの初期農耕. 金沢大学博士論文,315p.
- 原田 幹,2020, 使用痕からみた石製取穂具の身体技法. *石器痕跡研究の理論と実践*. 御堂島正編, 同成社, 223-245p.
- 林 昭三,1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 早津賢治,1988, テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフラクロノロジー-ATにまつわる議論に関して. *考古学研究*, 34,18-32.
- 伊東隆夫,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. *木材研究・資料*,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. *木材研究・資料*,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. *木材研究・資料*,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. *木材研究・資料*,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. *木材研究・資料*,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田品久(編),2012, 木の考古学. 出土木製品用材データベース. 海青社, pp147-156
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編,2000, 日本の地形4 関東・伊豆小笠原. 東京大学出版会,349p.
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男,1971, 野川先土器時代遺跡の研究. *第四紀研究*,10,231-252.
- 町田 洋・新井房夫,1976, 広域に分布する火山灰 - 始良 Tn 火山灰の発見とその意義 -. *科学*,46,339-347.
- 中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森由紀子・木下尚・竹内貞子・石田琢二,1963, 北上川中流沿岸の第四系および地形 - 北上川流域の第四紀地史(2). *地質学雑誌*,69,219-227
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62,1-33.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社,70p. [Richter H.G., Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982, 図説木材組織. 地球社,176p.
- Smith, V.C., Staff, R.A., Blockley, S.P.E., Ramsey, C.B., Nakagawa, T., Mark, D.F., Takemura, K., Danhara, T., Suigetsu 2006 Project Members,2013,Identification and correlation of visible tephra in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive. Japan: chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. *Quaternary Science Reviews*, 67, 121-137.
- Stuiver M., & Polach AH, 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 矢作健二・橋本貞紀夫,2012, 重鉱物組成と火山ガラス比による武蔵野台地の立川ローム層相序対比. *新西郊文化*, 27-18.

図版1 砂分の状況・重鉱物・火山ガラス



1.砂分の状況(基本層序 IV層;4)



2.重鉱物(基本層序 VII層;17)



3.火山ガラス(基本層序 IX層;23)

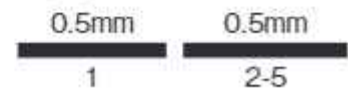


4.重鉱物(基本層序 IX層;25)

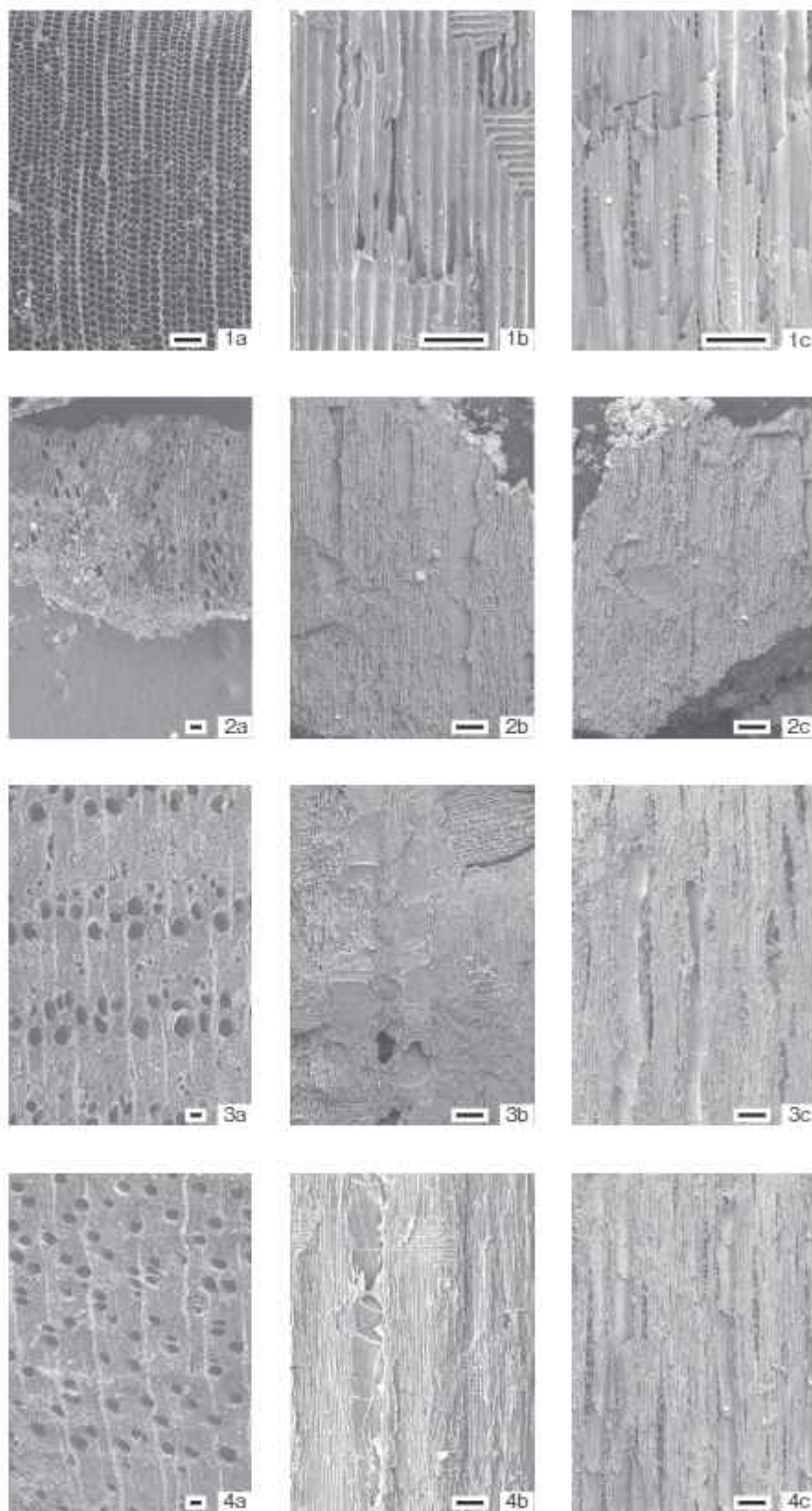


5.重鉱物(基本層序 IX層;27)

Ol:カンラン石.Opx:斜方輝石.Cpx:単斜輝石.Op:不透明鉱物.
Vg:火山ガラス.Qz:石英.Pl:斜長石.



図版2 炭化材



- 1. スギ (No. 3)
- 2. クリ (No. 4)
- 3. クワ属 (No. 6)
- 4. カエデ属 (No. 5)

a:木口 b:柁目 c:板目
スケールは100 μ m

図版3 TM5周溝6区 No.224 有肩扇状石器



1. 背面



2. 腹面

マイクロスコブ撮影位置を赤枠に示す

●：光沢強 ○：光沢中 ○：光沢少 ×：光沢なし

図版4 TM-5周満6区 No.224 有肩扇状石器 石器の使用痕



図版5-2

1.背面 刃部の光沢



2.背面 刃部の光沢



図版5-5

3.腹面 刃部の帯状～パッチ状光沢



4.腹面 刃部の帯状～パッチ状光沢



図版5-7

5.腹面 右側 刃部の光沢



6.腹面 右側 刃部の光沢

1 はじめに

ガラスの化学組成は原料に由来し、生産地域によって入手できた原料が異なれば、ガラスの化学組成にも違いが生じる。ガラスの生産や流通を知るうえで、その化学組成は重要な情報であるといえる。ガラスの生産は原料から素材としてのガラスを作り出す一次生産と、ガラスを再熔融して製品を作る二次生産の工程があり、ガラスの化学組成は一次生産の情報を反映する。

日本列島でガラスが出現し始めるのは弥生時代前期末の北部九州であり、鉛バリウムガラスや鉛ガラスなど中国で作られていたガラスや、カリガラスと呼ばれる中国南部や南・東南アジアで作られていたガラスが流通し始める。それ以降、古墳時代にかけて地中海沿岸地域、西・中央アジアを中心に生産されていたソーダ石灰ガラスや南・東南アジアを中心に生産されていたアルミナソーダ石灰ガラスなどが出現する¹⁾。流通時期に違いはあるが、古代の日本列島には様々な種類のガラスが広く流通していた（肥塚ら 2010 等）。また、この時期に流通していたガラスは海外からの搬入品であるが、鋳型などの出土事例から列島内でも弥生時代から二次生産が行われていたと考えられている（大賀 2010）。7 世紀後半頃になると、奈良県・飛鳥池工房遺跡に代表されるように国内でガラスの一次生産が行われるようになった。茨城県内では、弥生時代後期の遺跡からガラスが出土しており、科学的な調査も実施されている例がある（松崎ら 2012、澤村ら 2015、村串 2020 等）。

2 調査方法

分析対象としたのは、茨城県行方市に所在する中城古墳群で出土したガラス小玉 5 点と小玉片 1 点で、色調は青色や青緑色である。

ガラス小玉の化学組成分析には、多くの先行研究でも利用されている蛍光 X 線分析法を採用した。今回用いた分析装置は、アローズテック（株）製の OURSTEXI00FA-IV である。装置構成や測定条件は表 1 に示した通りである。ガラスの化学組成情報は、検量線法によって酸化物換算濃度として算出した。定量元素はナトリウム Na、マグネシウム Mg、アルミニウム Al、ケイ素 Si、カリウム K、カルシウム Ca、チタン Ti、マンガン Mn、鉄 Fe、コバルト Co、ニッケル Ni、銅 Cu、亜鉛 Zn、ヒ素 As、ルビジウム Rb、ストロンチウム Sr、イットリウム Y、ジルコニウム Zr、スズ Sn、アンチモン Sb、バリウム Ba、鉛 Pb である。また顕微鏡観察も実施し、ライカ マイクロシステムズ（株）製デジタルマイクロスコープ Leica DMS300 を用いた。

表 1 装置構成と測定条件

X線源	: Pd管球
検出器	: SDD
冷却	: 水冷+ベルチエ素子
モノクロメータ	: 湾曲結晶グラファイト
測定雰囲気	: 減圧
管電圧	: 40 kV
管電流	: 白色X線: 0.25 mA
	: 黄色X線: 1.00 mA
測定時間	: 200 sec. (Live time)

*Dead time 30%以下になるよう自動調整

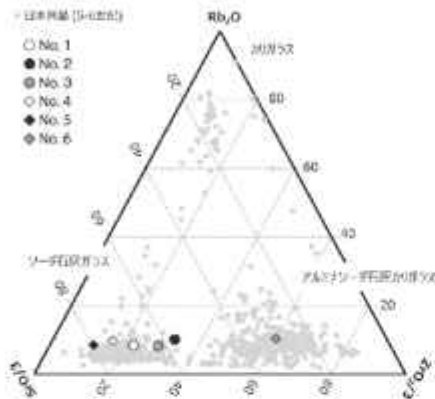
3 分析結果

Leica DMS300 で撮影した顕微鏡画像を末尾の写真図版に掲載した。完形の 5 点の小玉については、熟覧したところ、引き伸ばし法もしくは鋳造法で作られたものと考えられる²⁾。

蛍光 X 線分析の結果を表 2 に示す。また、図は微量重元素 (Rb₂O、SrO、ZrO₂) を指標として、同装置

でこれまでに分析した5世紀から6世紀のガラス小玉のデータ（白瀬ら 2012、松崎ら 2012、松崎ら 2013、柳瀬ら 2014、澤村ら 2015）と比較したものである。No. 1、No. 2、No. 3、No. 4、No. 5はソーダ石灰ガラスのデータが集中する領域に重なったことから、同タイプの組成と考えられる³⁾。同様に、No. 6はアルミナソーダ石灰ガラスに分類することができる。また、5点のソーダ石灰ガラスはいずれもCoを含んでおり、これが青色の着色要因である。アルミナソーダ石灰ガラス1点については、Coを含まず、他のガラスより多く含まれているCaが主な着色の要因と考えられる。

図 微量重元素 (Rb2O, SrO, ZrO2) による比較と分類



分析対象一覧

分析 No.	遺構番号	遺物番 号	時期	法量 (mm.g)			
				径	厚さ	孔径	重量
1	TM3 埋葬施設	No. 1	7 世紀 代 前 葉	(4.0)	(3.0)	1.0	(0.05)
2	TM3 埋葬施設	No. 17		4.0	3.0	1.0	0.06
3	TM3 埋葬施設	No. 42		5.0	3.0	1.0	0.06
4	TM3 周溝	No. 435		4.0	2.5	1.0	0.07
5	TM3 周溝	No. 436		6.0	4.0	1.0	0.17
6	TM5 埋葬施設	No. 108		4.0	4.0	1.0	0.06

4 おわりに

本稿では、中城古墳群より出土したガラス玉類の調査結果を報告した。蛍光X線分析の結果として、No. 1、No. 2、No. 3、No. 4、No. 5はソーダ石灰ガラス、No. 6はアルミナソーダ石灰ガラスであった。両タイプともに古墳時代の日本列島に流通していたもので（肥塚ら 2010等）、茨城県内でも甲山古墳や桜塚古墳など複数の報告例がある（澤村ら 2015）。また、ソーダ石灰ガラスに分類されたNo. 1、No. 2、No. 3はTM-3の埋葬施設から、No. 4、No. 5はTM-3の周溝から、アルミナソーダ石灰ガラスに分類されたNo. 6はTM5埋葬施設から出土しており、ガラスの組成タイプの違いと出土地点の違いに対応がみられた。出土点数が6点と少ないが、他の遺物の出土状況と併せていくことで、副葬状況の違いなど中城古墳群を特徴づける情報になると考えられる。

註

- 1) ガラスの呼称や分類は研究者によって異なるが、本稿では肥塚ら(2010)を参考に表記。
- 2) 熱膨張率は加藤千里氏による。
- 3) ソーダ石灰ガラスとしてはNa₂Oなどが低い結果となっているが、これは風化の影響によりアルカリ分が溶脱してしまったものと考えられる。

参考文献

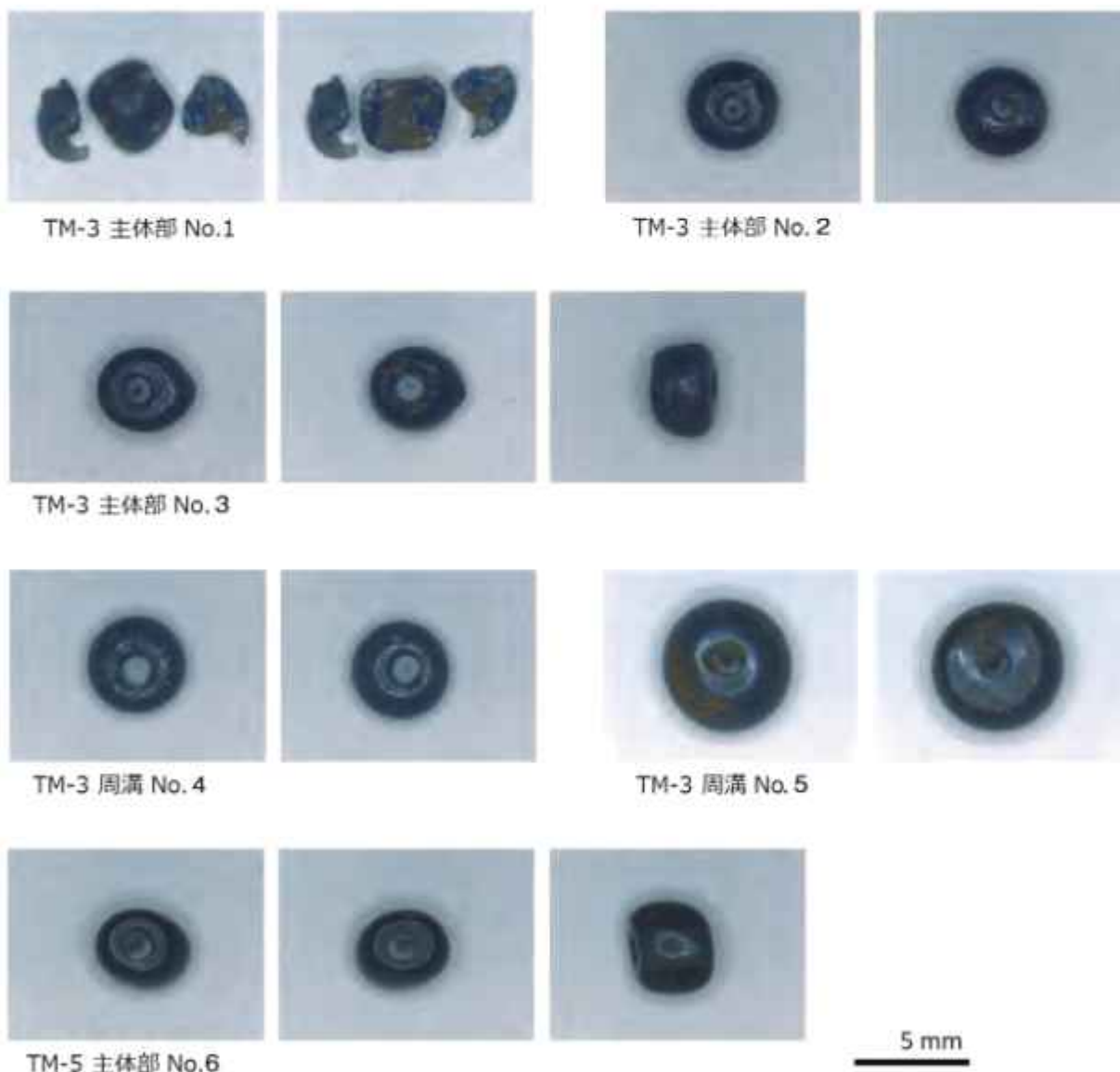
- 大賀 克彦 2010 日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開 | 『月刊文化財』 566: 27-35頁。
- 肥塚 隆保・田村 朋美・大賀 克彦 2010 材質とその歴史の由来 | 『月刊文化財』 566: 13-25頁。
- 澤村 大祐・加藤 千里・松崎 良弓・柳瀬 和也・若口 陽子・中井 泉 2015 蛍光X線分析による関東地方の遺跡から出土した古代ガラスに関する考古化学的研究 | 『分析化学』 64: 637-642頁。
- 白瀬 純子・阿部 善也・K. テンテラカーン・中井 泉・池田 朋生・坂口 圭太郎・後藤 克博・荒木 隆宏 2012 熊本県出土の古代ガラスの考古化学的研究 | 『考古学と自然科学』 63: 29-52頁。
- 松崎 良弓・白瀬 純子・池田 朋生・中井 泉 2012 ボータブル蛍光X線分析装置を用いた熊本県・茨城県出土古代ガラスの考古化学的研究 | 『X線分析の進歩』 43: 437-452頁。
- 松崎 良弓・白瀬 純子・池田 朋生・中井 泉 2013 佐賀県鳥栖市出土の古代ガラスに関する考古化学的研究 | 『X線分析の進歩』 44: 217-229頁。
- 村中 まどか 2020 附編 久能向原古墳群出土の玉類の分析結果について | 『古河市埋蔵文化財調査報告書 第22集 久能向原古墳群』 93-99頁。
- 柳瀬 和也・松崎 良弓・澤村 大祐・橋本 英俊・東 遼幸・永瀧 功治・中井 泉 2014 宮崎県・鹿児島県から出土した古代ガラスの考古化学的研究 | 『X線分析の進歩』 45: 279-303頁。

表2. 定量値一覧

No.	組成タイプ	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	SnO ₂	Sb ₂ O ₃	BaO
1	ソーダ石灰ガラス	n.d.	1.67	3.95	88.0	0.64	3.59	0.17	0.21	1.04	(0.01)	(0.01)	(0.08)
2	ソーダ石灰ガラス	1.7	1.75	3.48	86.6	1.32	3.26	0.18	0.28	1.06	(0.01)	(0.02)	(0.10)
3	ソーダ石灰ガラス	(1.4)	2.06	4.48	85.1	1.14	3.91	0.19	0.19	1.19	(0.01)	0.03	(0.10)
4	ソーダ石灰ガラス	5.5	2.76	2.77	82.1	1.40	3.99	0.10	0.08	0.84	0.02	(0.02)	(0.06)
5	ソーダ石灰ガラス	(0.6)	2.05	5.74	84.8	0.99	4.02	0.17	0.06	1.11	0.02	(0.02)	(0.07)
6	アルミナソーダ石灰ガラス	3.9	0.77	6.08	83.1	1.24	2.53	0.42	0.11	1.31	0.02	(0.01)	(0.06)

No.	製作技法	CoO	NiO	CuO	ZnO	As ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	PbO	色調	マンセル値
1	不明	0.036	n.d.	0.037	(0.006)	n.d.	(0.002)	0.039	(0.001)	0.013	0.063	青透明	5PB3/8
2	誘電か	0.039	n.d.	0.046	(0.004)	n.d.	0.002	0.034	(0.001)	0.019	0.062	青透明	5PB3/8
3	引き伸ばしか	0.038	(0.004)	0.040	(0.004)	n.d.	(0.002)	0.036	(0.001)	0.017	0.067	青透明	5PB3/8
4	誘電か	0.025	(0.004)	0.045	(0.003)	n.d.	(0.001)	0.034	(0.002)	0.007	0.243	青透明	10B4/10
5	引き伸ばし	0.029	(0.004)	0.024	(0.004)	n.d.	(0.001)	0.040	(0.001)	0.006	0.196	青透明	10B4/10
6	引き伸ばし	(0.007)	n.d.	0.213	(0.006)	n.d.	0.004	0.037	0.002	0.074	0.067	青緑透明	10B4/8

n.d.はnot detected (検出限界値未満)、()は定率下限値未満を示す。SiO₂は100wt%から他の元素を引いて算出



写真図版

1 はじめに

本稿では中城遺跡・中城古墳群の TM 3 周溝 より出土した水晶製切子玉について、赤外分光分析 (FT-IR) を用いた原産地推定分析等の結果を報告する。出土した 6 点の水晶製切子玉は、いずれも片面で穿孔されており、その法量は (第 2 表) の通りとなる。これらの特徴や法量から、大賀克彦氏の分類によれば (大賀 2009)、いずれも領域 S とされる山陰系の範疇に収まることを指摘できる (第 1 図)。

これまで筆者らが行ってきた水晶製切子玉の原産地推定分析では、古墳時代後期以降に流通する切子玉については一部で山梨県産の水晶が用いられる事例が見られるものの、その多くはある程度類似したスペクトルを示す傾向がある。現状それらの水晶の原産地を特定できているわけではないが、それらの多くが山陰系の範囲に収まることや、これまでの研究史を踏まえると多くは山陰地方にルーツを持つものと推定される (一之瀬・金井 2022)。以下では、原産地推定分析結果と共に上記の法量や製作技法を加えて、中城古墳群出土の切子玉について論じたい。

2 原産地推定分析の方法

(1) 既知の原産地領域

現状、既知のデータを基に、未知の資料にあてはめる形で原産地推定分析を行っている。既知の原産地は、甲府盆地の北部から山梨県・長野県・埼玉県の県境である甲武信ヶ岳の北側にかけて分布する新第三紀の深成岩類「甲府花崗閃緑岩体」の分布内に位置する。先行研究をもとに、金井・保坂 (2021) は乙女鉱床、水晶峠鉱床、向山鉱床、黒平鉱床、松木尾根鉱床、八幡鉱床、竹森鉱床、梓鉱床の位置を特定し、水晶製遺物と比較するための原産地産水晶として利用した (図 1)。現在では三宮鉱床のデータも追加されており、山梨県ないしその周囲の 9 カ所の鉱床を既知の原産地として扱う。

また、一之瀬・金井 (2021) では、先述の通り古墳時代後期～終末期にかけて流通する水晶製切子玉・丸玉等で類出する、山梨県域に起因すると思われるもの以外のスペクトルを「未定」の領域として扱った。これらは切子玉や丸玉等で類出するスペクトルを一つの領域として扱ったもので、本稿ではこちらも現状産地は未定であるが、既知の原産地の一つとして取り扱いたい。他の水晶製切子玉との差異について把握する。

(2) 原産地推定分析の方法

水晶の化学組成は「 SiO_2 」で表されるが、自然の環境で形成された結晶には不純物元素が僅かに含まれる。この微量の不純物元素を赤外分光分析にて把握する。赤外線を水晶に照射して透過させ、入射光と透過光の差から水晶による赤外線の吸収量を算出する。そのため、白濁した石英のような資料は赤外線を透過しないため分析対象にならない。さらに厚すぎるために照射したすべての赤外線を吸収してしまう場合、三角錐のような形状で赤外線が屈折してしまい検出器に赤外線が適切に届かない場合はスペクトルを得ることができない。水晶製の切子玉は上記のいずれかに該当する場合がみられ、これまでも分析不可とせざるを得なかった資料も少なくない。このような理由でスペクトルが得られない資料について、本研究では分析不可とした。そのため、分析対象となる 6 点のうち正常なスペクトルが得られた

のは5点(遺物番号No. 2、No. 3、No. 4、No. 5、No. 6)となり、1点(遺物番号No. 1)は有意なスペクトルを得ることができなかった。

分析には帝京大学文化財研究所所有のフーリエ変換赤外分光分析装置(FT-IR; Alpha, Bruker Optics社製)を利用して水晶製遺物の赤外分光分析を行った。分析条件は対象波数4000～3000 cm^{-1} 、分解能4 cm^{-1} 、スキャン回数8回、大気補正ありとした。1資料あたりの分析回数は3回である。

得られた赤外スペクトルは金井・保坂(2021)、金井・保坂・一之瀬(2023)の方法を踏襲し、総当たりの対話的主成分分析を用いて解析した。なお、主成分分析の詳細については金井・保坂・一之瀬(2023)を参照されたい。

(3) 原産地推定結果

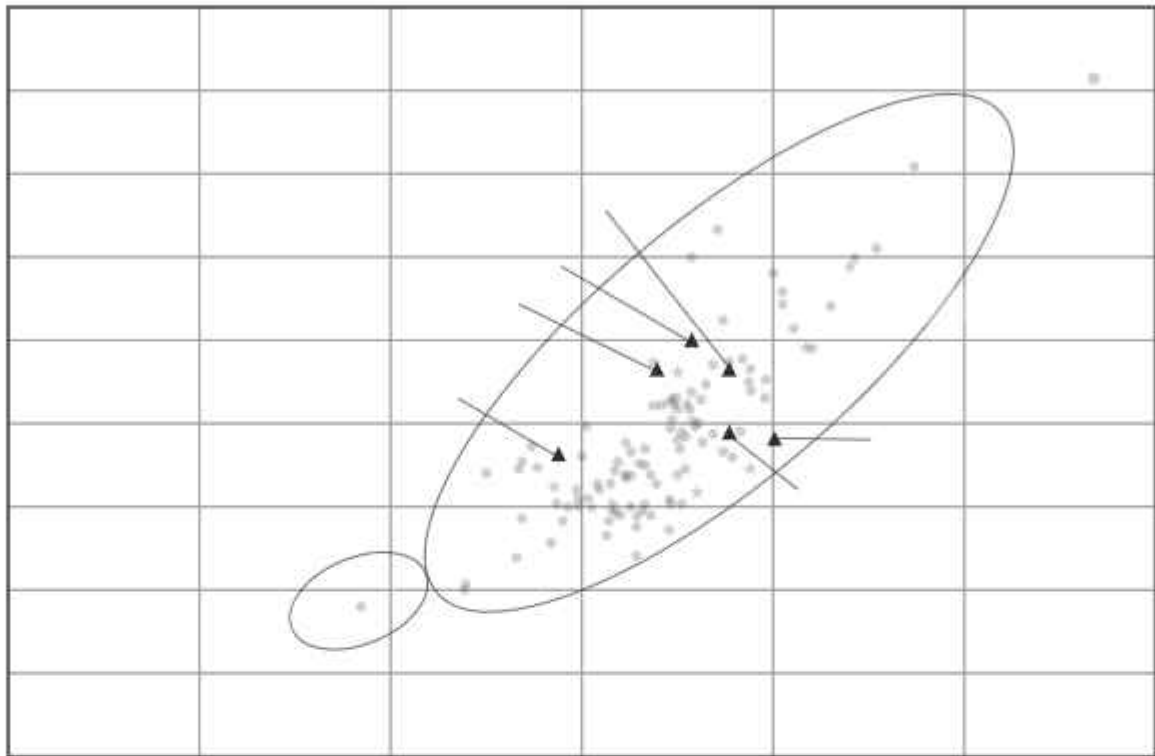
結果を第1表に示す。No. 4の1点については、いずれも後期～終末期の切子玉などで特徴的に見られる、「未定」の領域が単一候補の原産地候補として提案されている。残るNo. 2、No. 3、No. 5、No. 6の4点については既知のスペクトルと一致するものがなく、現状「判別不可」とせざるを得ない。判別不可となった資料が多いが、これは既知の原産地が少ないための結果であり、他の古墳等出土の切子玉分析でも同様の傾向を指摘できる。そのため、全国的な産地の整理をすることで今後、原産地候補が分類されていく可能性がある。また、「未定」としている範囲は、あくまで東日本で流通し、消費された切子玉を基に便宜的に設定したものであることも付言しておきたい。そのため、今後山陰の原産地を調査することにより、更に広がる可能性もあるし、複数に分かれていく可能性がある。そのため、1点だけではあるが、単一候補として「未定」が提案された意義は大きい。

玉類がセットとして流通していることを想定すると、今回出土した6点の切子玉については、同時に製作された可能性も考えられる。そのため、水晶製切子玉の組成中に1点、「未定」領域のものが存在していることの意味は非常に大きい。他の有力産地と見られる山梨県産のものが認められないこと、また全ての資料が片面穿孔で法量的に領域Sの範疇に収まることなどを勘案すると、石材の入手や玉の製作にあたっては山陰の関与があった可能性が高いものと見られる。

引用文献

- 一之瀬敬一・金井拓人 2022 「水晶製玉類の原産地推定分析における現状と課題」『研究紀要』第38号、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 大賀克彦 2009 「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究―古代出雲における玉作の研究Ⅱ―』鳥取県古代文化センター
- 金井拓人・保坂康夫 2021 「旧石器時代水晶製遺物の赤外分光分析による原産地推定：甲府花岡閃緑岩体周辺の旧石器遺跡を中心に」『旧石器研究』第17号
- 金井拓人・保坂康夫・一之瀬敬一 2023 「先史時代の資源としての山梨県産水晶」『山梨県考古学協会誌』第30号

第1図 分析対象となった切子玉の法量

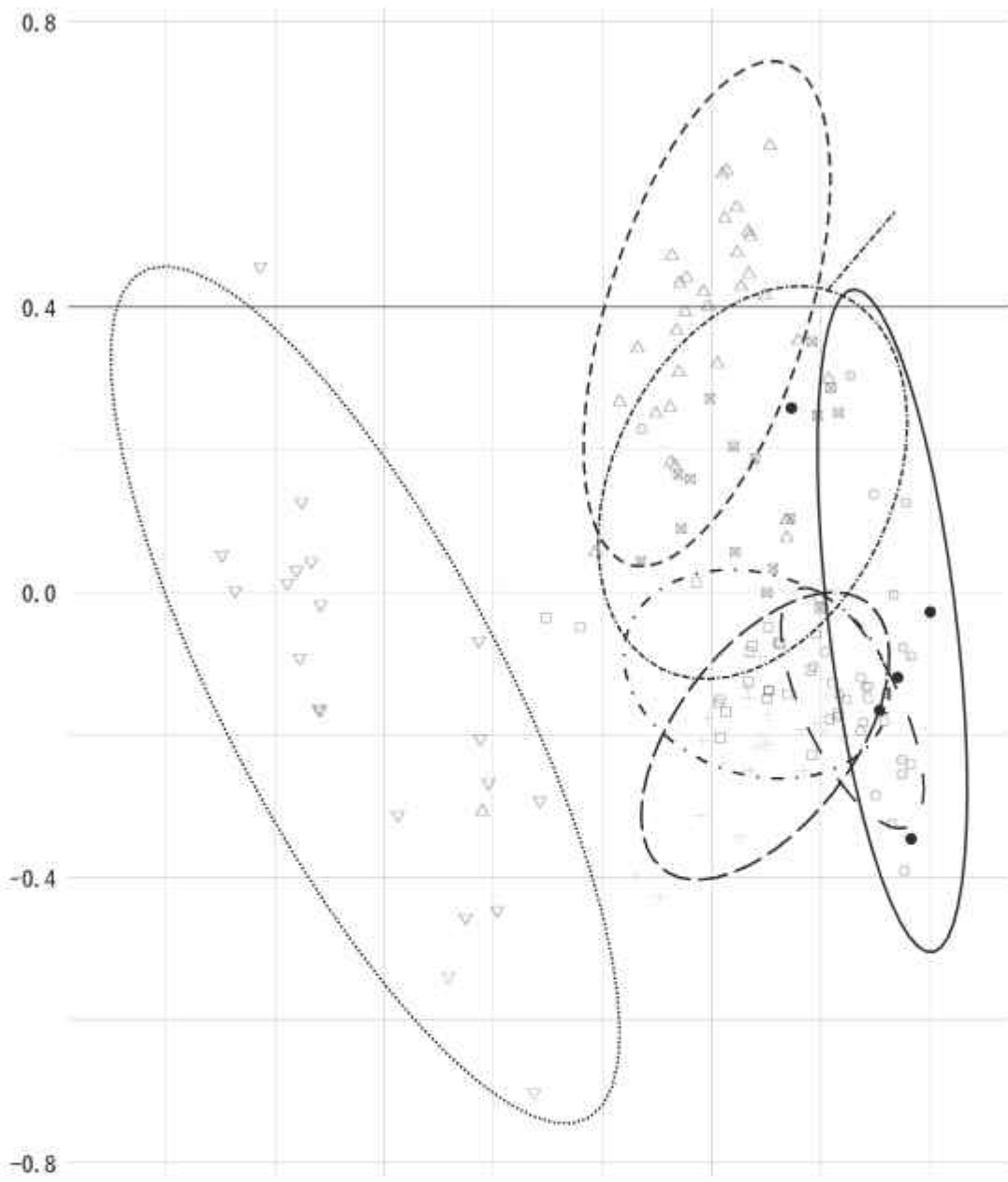


第1表 原産地推定結果

	バッテリー	乙女	竹森	八幡	前橋	松本尾根	黒平	袴	三富	田代	未定	判別不可
No. 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○
No. 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○
No. 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-
No. 5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○
No. 6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○

第2表 分析対象一覧

分析 No.	遺構番号	遺物番号	時期	法量 (mm.g)			
				長さ	幅	厚さ	重量
1	TM3 周溝	No. 15	7 世紀 前葉	2.0	1.5	1.3	500
2	TM3 周溝	No. 16		1.8	1.2	1.2	273
3	TM3 周溝	No. 17		2.4	1.5	1.4	6.56
4	TM3 周溝	No. 18		1.8	1.7	1.5	6.02
5	TM3 周溝	No. 19		2.6	1.5	1.5	7.86
6	TM3 周溝	No. 20		2.5	1.6	1.4	8.38



写 真 图 版



遺跡全景（西から）



調査区（鉛直東から）

PL2



調査区北側（鉛直南から）



調査区南側（鉛直南から）



調査区東側（西から）



テストピット1



テストピット2



第1号炭化物・焼土集中地点(1)



第1号炭化物・焼土集中地点(2)

PL4



第1A·1B号竖穴建物跡



第2号竖穴建物跡



第3号竖穴建物跡



第10号竖穴建物跡



第11号竖穴建物跡



第11号竖穴建物跡 遺物出土状況(1)



第11号竖穴建物跡 遺物出土状況(2)



第12号竖穴建物跡



第16号竖穴建物跡 遺物出土状況



第20号竖穴建物跡



第21号竖穴建物跡 遺物出土状況



第22号竖穴建物跡 遺物出土状況



第22号竖穴建物跡 遺物出土状況



第23号竖穴建物跡



第24号竖穴建物跡 遺物出土状況



第25号竖穴建物跡

PL6



第28号竖穴建物跡



第32号竖穴建物跡



第32号竖穴建物跡 遺物出土状況(1)



第32号竖穴建物跡 遺物出土状況(2)



第33号竖穴建物跡 遺物出土状況



第33号竖穴建物跡 炉遺物出土状況



第40号竖穴建物跡 遺物出土状況(1)



第40号竖穴建物跡 遺物出土状況(2)



第44号竖穴建物跡



第44号竖穴建物跡 遺物出土状況



第47号竖穴建物跡



第48号竖穴建物跡



第51号竖穴建物跡 遺物出土状況



第53号竖穴建物跡



第55号竖穴建物跡



第56号竖穴建物跡



第56号竖穴建物跡 遺物・炭化材出土状況



第60号竖穴建物跡



第60号竖穴建物跡 遺物出土状況



第64号竖穴建物跡



第64号竖穴建物跡 遺物出土状況



第91号土坑 遺物出土状況



第6号竖穴建物跡



第6号竖穴建物跡 遺物出土状況



第7号竖穴建物跡 遺物出土状況



第8号竖穴建物跡 遺物出土状況



第9号竖穴建物跡 遺物出土状況



第26号竖穴建物跡 遺物出土状況



第26号竖穴建物跡 貯蔵穴1 遺物出土状況



第26号竖穴建物跡 遺物出土状況



第43号竖穴建物跡



第43号竖穴建物跡 遺物出土状況(1)

PL10



第43号竖穴建物跡 遺物出土状況(2)



第43号竖穴建物跡 遺物出土状況(3)



第43号竖穴建物跡 貯藏穴遺物出土状況



第45A号竖穴建物跡 遺物出土状況



第54号竖穴建物跡



第54号竖穴建物跡 遺物出土状況



第57号竖穴建物跡 遺物出土状況(1)



第57号竖穴建物跡 遺物出土状況(2)



第57号竖穴建物跡遺物出土状況(3)



第57号竖穴建物跡



第61号竖穴建物跡



第63号竖穴建物跡 遺物出土状況



第2号墳 (鉛直南東から)

PL12



第3号墳（鉛直西から）



第3号墳（南から）



第3号墳 墳丘 Aライン土層断面（南東から）



第3号墳 墳丘 Aライン土層断面西側（南から）



第3号墳 墳丘 Aライン土層断面中央部（南から）



第3号墳 墳丘 Bライン土層断面南側（東から）



第3号墳 墳丘 Bライン土層断面北側（東から）

PL14



第3号墳 墳丘 Cライン土層断面北側（西から）



第3号墳 墳丘 Cライン土層断面南側（西から）



第3号墳 埋葬施設 Aライン土層断面（南から）



第3号墳 埋葬施設 Bライン土層断面（西から）



第3号墳 埋葬施設 遺物出土状況(1)



第3号墳 埋葬施設 遺物出土状況(2)



第3号墳 埋葬施設 鳩目金具出土状況



第3号墳 埋葬施設（東から）



第3号墳 石棺南側 側壁裏込土土層断面(東から)



第3号墳 石棺北側 側壁裏込土土層断面(東から)



第3号墳 埋葬施設 掘方(北西から)



第3号墳 周溝南西部 遺物(石棺材)出土状況(南から)



第3号墳 周溝南西部 遺物(石棺材)出土状況(東から)



第3号墳 周溝南側くびれ部 遺物出土状況(1)



第3号墳 周溝南側くびれ部 遺物出土状況(2)



第3号墳 P1 遺物出土状況

PL16



第4号墳（鉛直北から）



第5号墳（鉛直南から）



第5号墳 埋葬施設 小口部設置痕跡



第5号墳 埋葬施設 側壁設置痕跡



第5号墳 埋葬施設 小口・側壁設置痕跡



第5号墳 埋葬施設



第5号墳 埋葬施設 掘方



第5号墳 埋葬施設南側 側壁裏込土土層断面(東から)



第5号墳 埋葬施設 東側小口裏込土土層断面(南から)

PL18



第5号墳 周溝 遺物(石棺材)出土状況



第5号墳 周溝 遺物出土状況



第6号墳 (鉛直南から)



第6号墳 周溝 遺物出土状況(1)



第6号墳 周溝 遺物出土状況(2)



第7号墳（鉛直北から）



第8号墳（鉛直西から）

PL20



第5号竖穴建物跡



第14号竖穴建物跡



第14号竖穴建物跡 遺物出土状況



第14号竖穴建物跡 竈遺物出土状況



第1～3号掘立柱建物跡（北から）



第1～3号掘立柱建物跡（鉛直東から）



第1号掘立柱建物跡 布掘りまたは柱抜き取り痕



第3号掘立柱建物跡 布掘りまたは柱抜き取り痕

PL22



第1号掘立柱建物跡 遺物出土状況



第4A・4B号掘立柱建物跡



第5A・5B号掘立柱建物跡



第3号土坑 遺物出土状況



第4号溝跡



第20・21号溝跡、第1号段切状遺構



第1号塚 (南西から)



第1号塚 盛土南側土層断面



第1号塚 盛土北側土層断面



第1号道路跡

PL24



第1A・1B・2・3・4・10・11号竪穴建物跡出土遺物



第12·13·16·20号竖穴建物跡出土遺物

PL26



第21・22・24・25・28・32号竖穴建物跡出土遺物



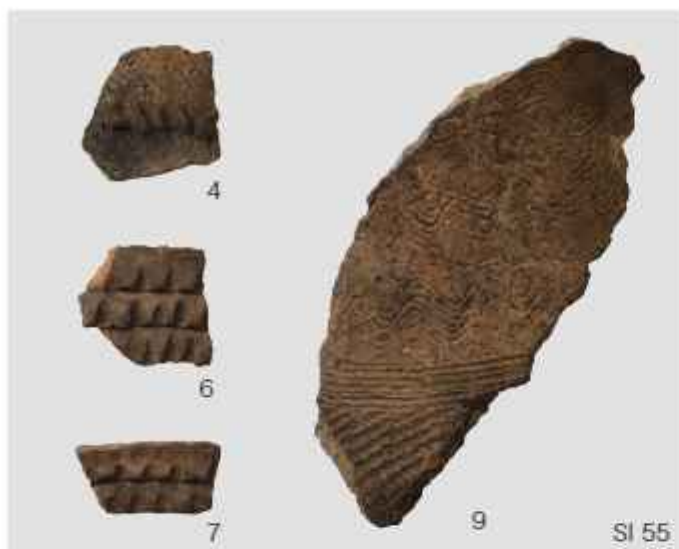
第32・33・34・38・39号竖穴建物跡出土遺物



第40・44・47・48号竖穴建物跡出土遺物



第48・49・55号竖穴建物跡出土遺物



第55・56・58・60号竖穴建物跡出土遺物



第60・62・64号竖穴建物跡、第91号土坑出土遺物

PL32



第1・2・4・7号竖穴遺構、第1・2号遺物包含層出土遺物



第6・17・18・19・26号竖穴建物跡出土遺物

PL34



第26号竖穴建物跡出土遺物



第26・27・30・41号竖穴建物跡出土遺物

PL36



第43号竖穴建物跡出土遺物(1)



第43号竖穴建物跡出土遺物(2)





第46・50・52A・54号竖穴建物跡出土遺物

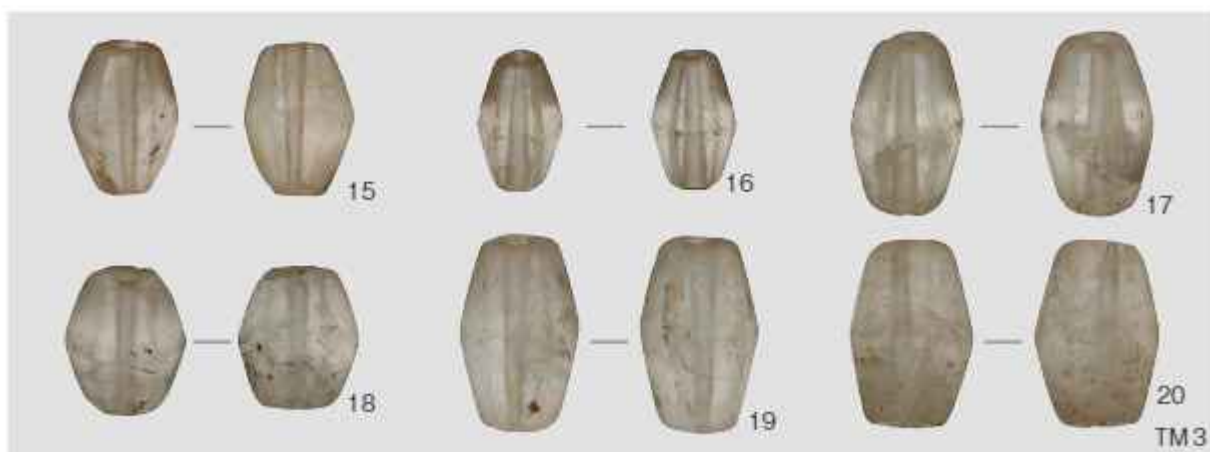
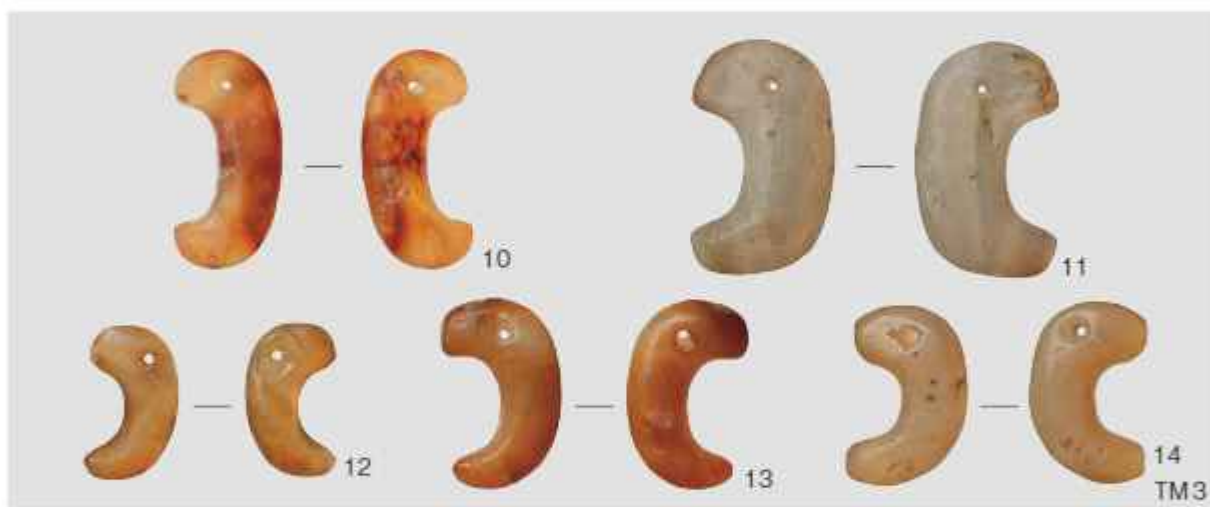
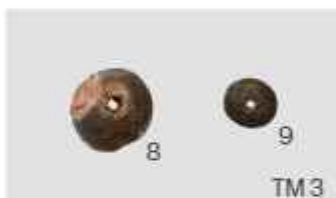
PL40



第54・57号竖穴建物跡出土遺物



第59·61·63号竖穴建物跡、第2·3号墳出土遺物



第3号坑出土遗物



第3・5号墳出土遺物

PL44



第5·6号墳出土遺物



第5・14号竖穴建物跡出土遺物



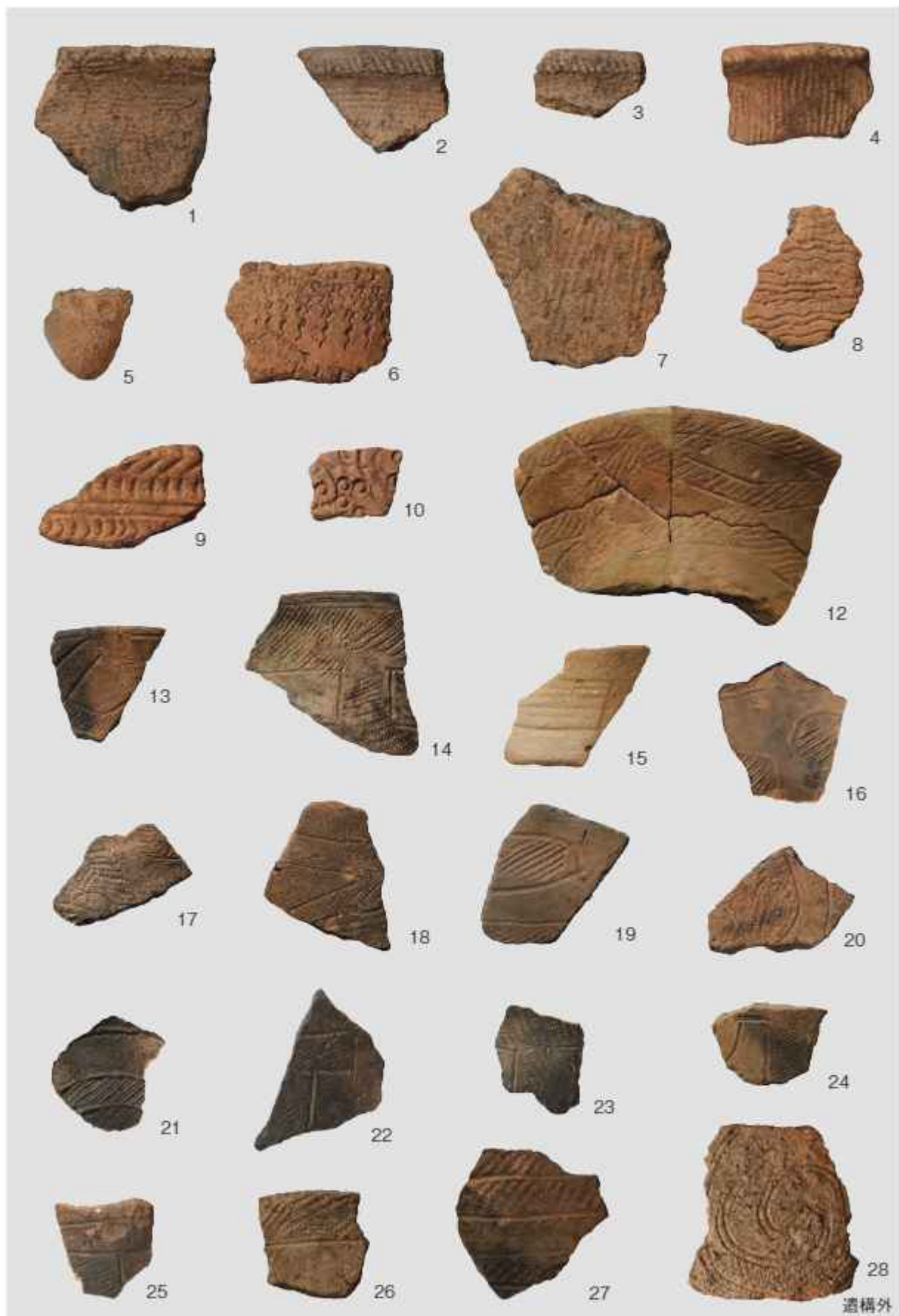
第1·2·3B·5A·5B号掘立柱建物跡、第3号土坑出土遺物



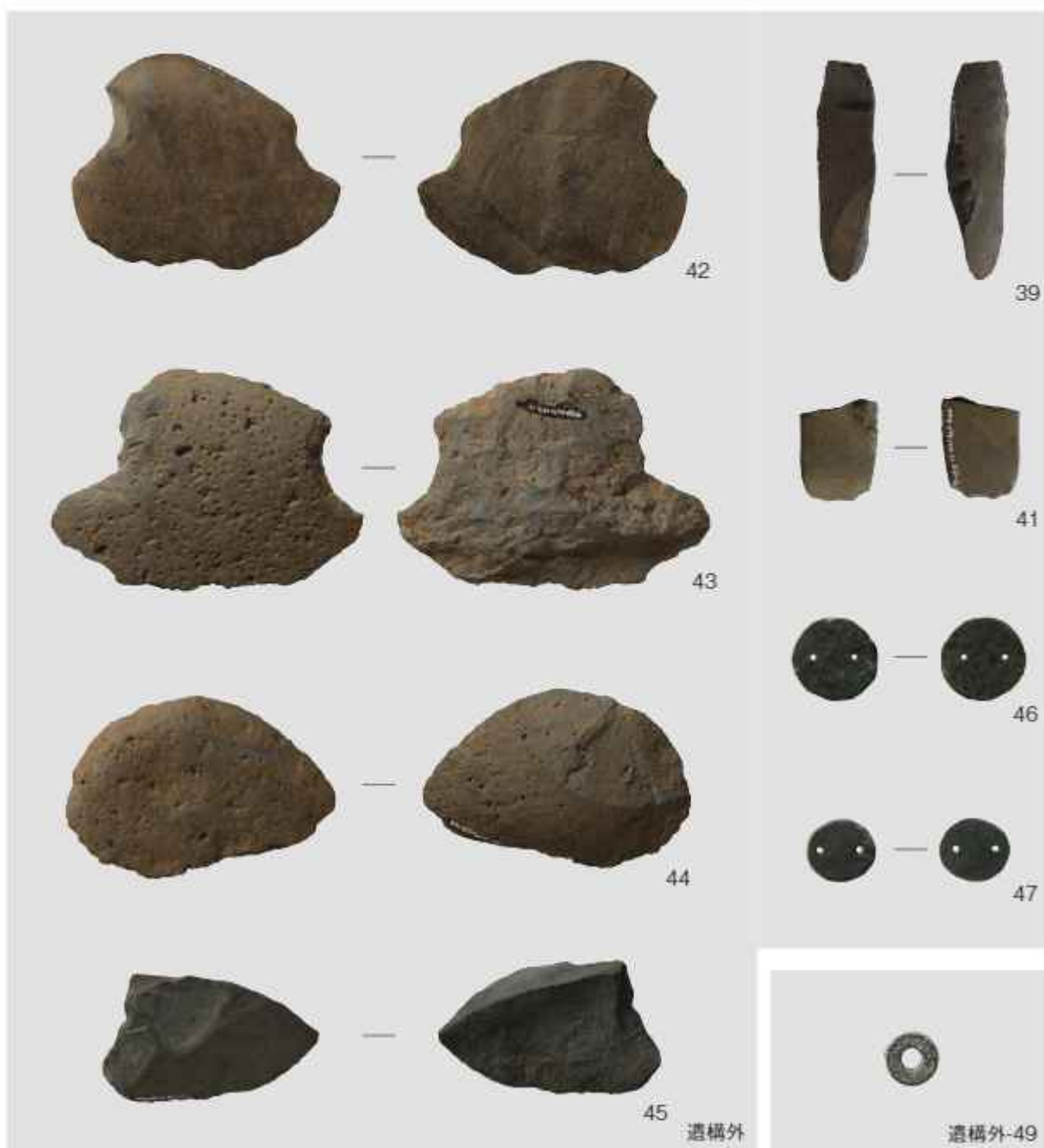
第3・46・217号土坑、第1号井戸跡、第4・7号溝跡出土遺物



第11・17号溝跡、第1・4A号柱穴列跡、第1・2号粘土貼土坑、第3号不明遺構、第1号塚出土遺物



遺構外出土遺物(1)



遺構外出土遺物(2)

抄 録

ふりがな	なかしろいせき・なかしろこふんぐん								
書 名	中城遺跡・中城古墳群								
副 書 名	東関東自動車道水戸線（潮来～鉢田）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第470集								
著 者 名	植木貴志								
編 集 機 関	公益財団法人茨城県教育財団								
所 在 地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発 行 日	2024（令和6）年3月19日								
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
中城遺跡	茨城県行方市北高岡 198-2番地ほか	08424 - 099	36度 4分 26秒	140度 29分 50秒	28～ 35m	20210401 ～ 20220331	5,844㎡	東関東自動車道水戸線（潮来～鉢田）建設事業に伴う事前調査	
中城古墳群		08424 - 100							
所取遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
中城遺跡	狩猟場	旧石器	炭化物・焼土中庭 1か所		炭化物・焼土		7世紀前葉の第3号墳は、埋葬施設の石材が抜き取られ、周溝内から平安時代の土師器とともに出土している。		
中城古墳群	縄文		陥し穴 1基						
	集落跡	弥生	竪穴建物跡	37棟	弥生土器（高坏・蓋・広口壺・ミニチュア土器）、土製品（紡錘車）、石器（大型蛤刃石斧・砥石・右肩扇状石器）、石製品（管玉）				
		弥生～古墳	竪穴遺構	5基					
			土坑	2基					
			加跡	4基					
			遺物含包層	2か所	弥生土器（広口壺）、土師器（輪・埴・高坏・壺・甕）、土製品（紡錘車）、石器（磨製石斧・右肩扇状石器・磨石・砥石・剥片・石核）				
		古墳	竪穴建物跡	25棟	土師器（坏・輪・埴・器台・高坏・鉢・壺・台付甕・甕・ミニチュア土器・手捏土器）、須恵器（高坏）、土製品（土玉・紡錘車・支脚）、石器（磨石・砥石）、石製品（勾玉・小玉・有孔門板・剣形模造品）、金属製品（鉄鏝）				
			竪穴遺構	1基					
			土坑	3基					
		平安	竪穴建物跡	2棟	土師器（坏・高台付輪）				
		江戸	掘立柱建物跡	8棟	土師質土器（皿・焙烙）、瓦質土器（搦鉢）、陶器（碗・天目茶碗・皿・有耳壺・甕・香炉）、磁器（碗・徳利）、土製品（土玉）、石器（砥石）、金属製品（小刀・釘・草引金・煙管）、銭貨（寛永通寶）、鍛冶関連遺物（鉄滓）				
			竪穴遺構	1基					
			段切状遺構	1か所					
			土坑	7基					
			井戸	1基					
			道路跡	1条					
			溝跡	7条					
			柱穴列	6条					
			粘土貼土坑	4基					
			不明遺構	3基					
		墓域跡	古墳	前方後円墳	2基	土師器（坏・輪）、須恵器（長頸瓶・短頸壺・甕）、石製品（勾玉・切子玉）、金属製品（刀子・耳環・鳩目金具・鐙・馬具引手・鉄鏝）、ガラス製品（小玉）			
				円墳	4基				
				方墳	1基				
			江戸	土坑墓	2基	金属製品（煙管）、陶器（碗）			
			時期不明	土坑墓	5基				
		時期不明	時期不明	塚	1基	縄文土器（深鉢）、陶器（碗・折縁皿）、銭貨（寛永通寶）			
				溝跡	9条				
				土坑	189基				
				ピット群	1か所				
要 約	弥生時代から平安時代の集落、古墳時代中期・終末期の古墳を確認した。江戸時代には整地後、大型の掘立柱建物が構築されている。								

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 10 Pro
	編集	Adobe InDesign 2023
	図版作成	Adobe Illustrator 2022
	写真調整	Adobe Photoshop 2022
	Scanning	EPSON DS-G20000 RICOH MP W4001・4002
使用Font	OpenType	リュウミンPro L-KL、太ゴB101 Pro Bold 中ゴシックBBB Pro Medium
写真	線数	カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign 2023 でデータ入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第470集

行 方 市

中城遺跡・中城古墳群

東関東自動車道水戸線（潮来～鉾田）
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和6（2024）年3月19日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <https://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 鶴あけほの印刷社
〒310-0804 水戸市白梅1-2-11
TEL 029-227-8284